

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第400集

にしょうじ
仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書

国道4号小鳥谷バイパス建設関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

にしょうじ
仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書

国道4号小鳥谷バイパス建設関連遺跡発掘調査



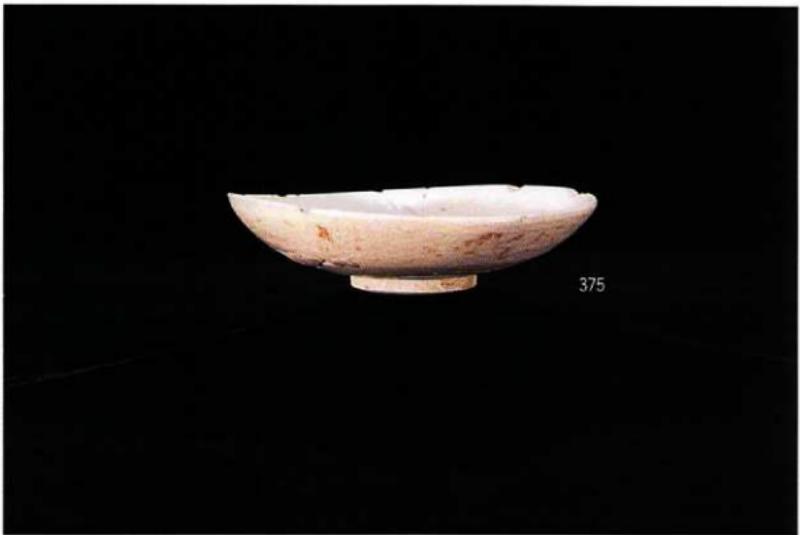
遺跡遠景（南から）



仁昌寺Ⅱ遺跡 27号住居跡



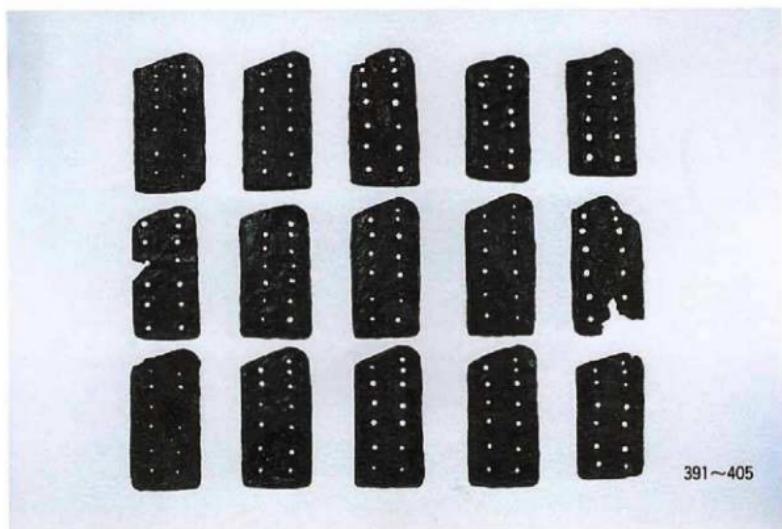
仁昌寺 II 遺跡 住居内出土遺物



仁昌寺 II 遺跡 1号竪穴建物跡内出土白磁皿



仁昌寺 II 遺跡 1号工房跡内床面状況



仁昌寺 II 遺跡 1号工房関連施設内出土鉄札



408



408

仁昌寺 II 遺跡 1号工房間連施設内出土鉄鍋

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成13年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました国道4号小島谷バイパス建設を例にあげるまでもなく、現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるために地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業との調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本件は一戸町の国道4号小島谷バイパス建設に関連して平成12年度に発掘調査を実施した仁昌寺Ⅱ遺跡の発掘成果をまとめたものであります。遺跡は縄文時代～中世を主体とすることが明らかになり、該期の貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手工事務所、一戸町教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に心より感謝申し上げます。

平成14年10月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　　言

1. 本報告書は、岩手県二戸郡一戸町に所在する仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。各遺跡の所在地は次の通りである。

仁昌寺Ⅱ遺跡 … 一戸町大字小島谷字仁昌寺4ほか
仁昌寺遺跡 … 一戸町大字小島谷字仁昌寺33-2ほか
2. 本遺跡の調査は国道4号小島谷バイパス建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所の委託を受けた財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号、遺跡略号は次の通りである。

仁昌寺Ⅱ遺跡 … (遺跡番号) JF30-2094、(遺跡略号) NSJ II-00
仁昌寺遺跡 … (遺跡番号) JF-302804、(遺跡略号) NSJ-01
4. 野外調査の期間と面積、調査担当者は次の通りである。

仁昌寺Ⅱ遺跡 … 平成12年 調査期間：4月17日から11月17日　調査面積：5,801m²
調査担当者：中村直美・北田 熊・古館貞身・前田 稔・原美津子
平成13年 調査期間：6月11から7月5日　調査面積：541m²
調査担当者：中村直美・北田 熊

仁昌寺遺跡 … 調査期間：平成13年4月17から7月5日　調査面積：4,916m²
調査担当者：中村直美・北田 熊
5. 室内整理期間と整理担当者は次の通りである。

仁昌寺Ⅱ遺跡 … 平成12年 11月1日から3月31日　平成13年 9月1日から9月30日
整理担当者：中村直美・北田 熊・原美津子

仁昌寺遺跡 … 平成13年 12月1日から平成14年3月29日　整理担当者：中村直美
6. 報告書の執筆は、Iを国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所、そのほかを中村直美・北田 熊 原美津子が担当し、それぞれ文末に名前を記した。
7. 各種遺物の鑑定・分析は次の方々にお願いした。

石質鑑定：炉石の石質鑑定－川守田浩（一戸町文化財調査専門委員）　石器石質鑑定－花崗岩研究会
炭化材樹種同定：日本木炭協会
鉄鍋・鉄札・鉄粒の成分分析：赤沼英男（岩手県立博物館）　鉄製品保存処理：岩手県立博物館
木製品保存処理：（株）ニッセツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センター
8. 座標原点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量：平成12年 東日本測量設計株式会社　平成13年 株式会社ハイマー・テック
空中写真撮影：東邦航空株式会社
9. 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を頂いた（五十音順、敬称略）。

赤沼英男　植野祐介　井上雅孝　宇都御保　小島敦子　越田賢一郎　間 俊明　高田和徳　津野 仁
中村明雄　能登 錠　秦 光次郎
10. 発掘調査資料は、全て岩手県埋蔵文化財センターが保管している。
11. 調査成果は現地説明会資料ほかに発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

目 次

序
例言
目次

仁昌寺II遺跡

【本文】

I. 調査に至る経緯	1	(1) 墓穴建物跡	137
II. 遺跡の位置と立地	1	(2) 据立柱建物跡	146
1. 位置と立地	1	(3) 柱穴群	161
2. 周辺の道路	2	(4) 工房関連施設・工房跡	167
III. 調査と整理の方法	15	(5) 墓坑	175
1. 野外調査	15	(6) 住居状遺構	188
2. 室内整理	16	(7) 井戸跡	188
3. 基本層序	18	(8) 柱穴列	191
IV. 検出した遺構と遺構内出土遺物	19	(9) 集石遺構	191
1. 繩文時代		V. 遺構外出土遺物	196
(1) 墓穴住居跡	19	1. 土器・土製品・陶磁器	196
(2) 土坑	116	2. 石器・石製品・その他	200
(3) 炉跡	129	VI. 若干の考察	237
(4) 陥し穴状遺構	129	VII. 仁昌寺II遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的 調査結果	249
2. 中世以降			

【表 目 次】

第1表 周辺の遺跡一覧	7	第7表 遺物観察表（土器・ミニチュア形土器）	217
第2表 柱穴群計測値一覧	161	第8表 遺物観察表（土製品）	225
第3表 墓坑内出土銭貨内訳表	188	第9表 遺物観察表（陶磁器）	226
第4表 繩文時代遺構一覧	192	第10表 遺物観察表（石器・石製品）	227
第5表 中世以降遺構一覧	193	第11表 遺物観察表（鉄製品他）	231
第6表 石器石材分類表	201	第12表 遺物観察表（銭貨）	233

【図版目次】

第1図 遺跡位置図	5	第4図 周辺の遺跡と地形	12
第2図 周辺の遺跡分布図	6	第5図 グリッド配置図	13
第3図 地形分類図	11	第6図 調査区内土層断面・調査区地形横断模式図	14

第7回 図版凡例	17	第47回 17号住居跡出土遺物	67
第8回 基本土層柱状図	18	第48回 18号住居跡	68
第9回 1号住居跡(1)	20	第49回 18号住居跡出土遺物	69
第10回 1号住居跡(2)・出土遺物(1)	21	第50回 19号住居跡(1)	70
第11回 1号住居跡出土遺物(2)	22	第51回 19号住居跡(2)・出土遺物(1)	71
第12回 2号住居跡(1)	24	第52回 19号住居跡出土遺物(2)	72
第13回 2号住居跡(2)	25	第53回 19号住居跡出土遺物(3)	73
第14回 2号住居跡出土遺物	27	第54回 20号住居跡出土遺物	74
第15回 3号住居跡	28	第55回 20号住居跡	75
第16回 3号住居跡出土遺物(1)	29	第56回 21号住居跡・出土遺物	77
第17回 3号住居跡出土遺物(2)	30	第57回 22号住居跡・出土遺物(1)	78
第18回 4号住居跡	31	第58回 22号住居跡出土遺物(2)	79
第19回 5号住居跡	32	第59回 23号住居跡	80
第20回 5号住居跡出土遺物	33	第60回 24号住居跡・出土遺物	81
第21回 6号住居跡・出土遺物	35	第61回 25号住居跡・出土遺物(1)	83
第22回 7号住居跡	36	第62回 25号住居跡出土遺物(2)	84
第23回 7号住居跡出土遺物	37	第63回 26号住居跡	85
第24回 8号住居跡	39	第64回 27号住居跡(1)	87-88
第25回 8号住居跡出土遺物	40	第65回 27号住居跡出土遺物(1)	89
第26回 9号住居跡(1)	42	第66回 27号住居跡出土遺物(2)	90
第27回 9号住居跡(2)・出土遺物	43	第67回 28号住居跡	92
第28回 10号住居跡	44	第68回 28号住居跡出土遺物(1)	93
第29回 10号住居跡出土遺物	45	第69回 28号住居跡出土遺物(2)	94
第30回 11号住居跡・出土遺物	47	第70回 29号住居跡	95
第31回 12号住居跡	48	第71回 30号住居跡	96
第32回 12号住居跡出土遺物	49	第72回 30号住居跡出土遺物(1)	97
第33回 13号住居跡	51	第73回 30号住居跡出土遺物(2)	98
第34回 13号住居跡出土遺物	52	第74回 31号住居跡	99
第35回 14号住居跡	53	第75回 31号住居跡出土遺物	100
第36回 14号住居跡出土遺物	54	第76回 32号住居跡	101
第37回 15号住居跡(1)	56	第77回 32号住居跡出土遺物	102
第38回 15号住居跡(2)・出土遺物	57	第78回 33号住居跡	103
第39回 16号住居跡(1)	58	第79回 33号住居跡出土遺物	104
第40回 16号住居跡(2)	59	第80回 34号住居跡	106
第41回 16号住居跡(3)	60	第81回 34号住居跡出土遺物	107
第42回 16号住居跡出土遺物(1)	61	第82回 35号住居跡	108
第43回 16号住居跡出土遺物(2)	62	第83回 36号住居跡・出土遺物	109
第44回 16号住居跡出土遺物(3)	63	第84回 37号住居跡・出土遺物	111
第45回 16号住居跡出土遺物(4)	64	第85回 38号住居跡・出土遺物	113
第46回 17号住居跡	66	第86回 38号住居跡出土遺物	114

第87図	39号住居跡・出土遺物	115
第88図	1～3号土坑	117
第89図	1・4・19号土坑出土遺物	118
第90図	4～7号土坑	120
第91図	8～11号土坑	122
第92図	12～16号土坑	124
第93図	17～20号土坑	126
第94図	1～3号陥し穴状遺構	128
第95図	4・5号陥し穴状遺構	130
第96図	6・7号陥し穴状遺構	132
第97図	8～10号陥し穴状遺構	134
第98図	1号堅穴建物跡	136
第99図	1号堅穴建物跡出土遺物	137
第100図	2号堅穴建物跡	139
第101図	3号堅穴建物跡	141
第102図	4号堅穴建物跡	142
第103図	5号堅穴建物跡	143
第104図	6号堅穴建物跡	144
第105図	6号堅穴建物跡出土遺物	145
第106図	2号掘立柱建物跡出土遺物	146
第107図	1・2号掘立柱建物跡	147
第108図	4号掘立柱建物跡出土遺物	148
第109図	3・4号掘立柱建物跡	149
第110図	5・6号掘立柱建物跡	151
第111図	7号掘立柱建物跡	152
第112図	8号掘立柱建物跡	154
第113図	9号掘立柱建物跡	155
第114図	10・11号掘立柱建物跡	156
第115図	12・13号掘立柱建物跡	157
第116図	14・16号掘立柱建物跡	159
第117図	柱穴群出土遺物	161
第118図	南東側柱穴群	164
第119図	北側掘立柱建物跡群	165・166
第120図	1号工房間連施設(1)	168
第121図	1号工房間連施設(2)	169
第122図	1号工房間連施設出土遺物(1)	170
第123図	1号工房間連施設出土遺物(2)	171
第124図	1号工房間連施設出土遺物(3)	172
第125図	1号工房跡(1)	173
第126図	1号工房跡(2)・出土遺物	174
第127図	墓坑群(1)	175
第128図	墓坑群(2)	176
第129図	墓坑群(3)	177
第130図	墓坑群(南側)	178
第131図	墓坑群(北西側)	179
第132図	墓坑内出土遺物(1)	180
第133図	墓坑内出土遺物(2)	181
第134図	墓坑内出土遺物(3)	182
第135図	墓坑内出土遺物(4)	183
第136図	墓坑内出土遺物(5)	184
第137図	墓坑内出土遺物(6)	185
第138図	墓坑内出土遺物(7)	186
第139図	墓坑内出土遺物(8)	187
第140図	1号住居状遺構	189
第141図	1～2号井戸跡・出土遺物	190
第142図	遺構外出土遺物(土器1)	207
第143図	遺構外出土遺物(土器2)	208
第144図	遺構外出土遺物(土器3)	209
第145図	遺構外出土遺物(土器4)	210
第146図	遺構外出土遺物 (ミニチュア形土器・土製品)	211
第147図	遺構外出土遺物(陶磁器)	212
第148図	遺構外出土遺物(石器1)	213
第149図	遺構外出土遺物(石器2)	214
第150図	遺構外出土遺物(石器3)	215
第151図	遺構外出土遺物(石器4他)	216
第152図	柱穴配置模式図	237
第153図	炉形態別住居分布図	239
第154図	かげ石に用いられた標の石質 炉形態分類図	241
第155図	住居跡床面出土遺物集成(1)	242
第156図	住居跡床面出土遺物集成(2)	243
第157図	住居跡床面出土遺物集成(3)	244
第158図	住居跡床面出土遺物集成(4)	245

【写真図版】

写真図版 1	調査区遠景・全景(H12)	271	写真図版39	38号住居跡	309
写真図版 2	調査区全景(H13)・土層断面	272	写真図版40	39号住居跡	310
写真図版 3	1号住居跡	273	写真図版41	1~4号土坑	311
写真図版 4	2号住居跡	274	写真図版42	5~8号土坑	312
写真図版 5	3号住居跡	275	写真図版43	9~14号土坑	313
写真図版 6	4号住居跡	276	写真図版44	15~18号土坑	314
写真図版 7	5号住居跡	277	写真図版45	19~20号土坑	315
写真図版 8	6号住居跡	278	写真図版46	1~2号陥し穴状遺構	316
写真図版 9	7号住居跡	279	写真図版47	3~6号陥し穴状遺構	317
写真図版10	8号住居跡	280	写真図版48	7~10号陥し穴状遺構	318
写真図版11	9号住居跡	281	写真図版49	1号堅穴建物跡	319
写真図版12	10号住居跡	282	写真図版50	2号堅穴建物跡	320
写真図版13	11号住居跡	283	写真図版51	3号堅穴建物跡	321
写真図版14	12号住居跡	284	写真図版52	4号堅穴建物跡	322
写真図版15	13号住居跡	285	写真図版53	5号堅穴建物跡	323
写真図版16	14号住居跡	286	写真図版54	6号堅穴建物跡	324
写真図版17	15号住居跡	287	写真図版55	1~3号掘立柱建物跡	325
写真図版18	16号住居跡	288	写真図版56	4~6号掘立柱建物跡	326
写真図版19	17号住居跡	289	写真図版57	7号掘立柱建物跡・平場全景	327
写真図版20	18号住居跡	290	写真図版58	9~10号掘立柱建物跡	328
写真図版21	19号住居跡	291	写真図版59	11~12号掘立柱建物跡	329
写真図版22	20号住居跡	292	写真図版60	13~14号掘立柱建物跡	330
写真図版23	21号住居跡	293	写真図版61	15~16号掘立柱建物跡	331
写真図版24	22号住居跡	294	写真図版62	掘立柱建物跡群焼土・柱穴列(1)	332
写真図版25	23号住居跡	295	写真図版63	柱穴列(2)	333
写真図版26	24号住居跡	296	写真図版64	1号工房関連施設(1)	334
写真図版27	25号住居跡	297	写真図版65	1号工房関連施設(2)	335
写真図版28	26号住居跡	298	写真図版66	1号工房跡	336
写真図版29	27号住居跡	299	写真図版67	墓坑群(1)	337
写真図版30	28~29号住居跡	300	写真図版68	墓坑群(2)	338
写真図版31	30号住居跡	301	写真図版69	墓坑群(3)・1~4号集石	339
写真図版32	31号住居跡	302	写真図版70	1号住居状遺構 1~2号井戸跡	340
写真図版33	32号住居跡	303	写真図版71	1号住居跡出土遺物	341
写真図版34	33号住居跡	304	写真図版72	2~3号住居跡出土遺物	342
写真図版35	34号住居跡	305	写真図版73	3~5号住居跡出土遺物	343
写真図版36	35号住居跡	306	写真図版74	6~8号住居跡出土遺物	344
写真図版37	36号住居跡	307	写真図版75	8~10号住居跡出土遺物	345
写真図版38	37号住居跡	308			

写真図版76	10・12号住居跡出土遺物	346
写真図版77	12・14号住居跡出土遺物	347
写真図版78	15・16号住居跡出土遺物(1)	348
写真図版79	16号住居跡出土遺物(2)	349
写真図版80	16号住居跡出土遺物(3)	350
写真図版81	16号住居跡出土遺物(4)	351
写真図版82	17・18号住居跡出土遺物	352
写真図版83	19号住居跡出土遺物(1)	353
写真図版84	19号住居跡出土遺物(2)	354
写真図版85	19・21号住居跡出土遺物	355
写真図版86	22・24号住居跡出土遺物	356
写真図版87	25・27号住居跡出土遺物	357
写真図版88	27号住居跡出土遺物	358
写真図版89	28号住居跡出土遺物	359
写真図版90	28・30号住居跡出土遺物	360
写真図版91	30・31号住居跡出土遺物	361
写真図版92	32号住居跡出土遺物	362
写真図版93	33・34号住居跡出土遺物	363
写真図版94	34・36号住居跡出土遺物	364
写真図版95	37・38号住居跡出土遺物	365
写真図版96	38・39号住居跡出土遺物	366
写真図版97	土坑内出土遺物	367
写真図版98	1・6号堅穴建物跡	
	2号掘立柱建物跡出土遺物	368
写真図版99	3・4号掘立柱建物跡・柱穴群	
	1号工房間連施設出土遺物	369
写真図版100	1号工房間連施設出土遺物	370
写真図版101	1号工房間連施設	
	1号工房跡出土遺物	371
写真図版102	墓坑内出土遺物(1)	372
写真図版103	墓坑内出土遺物(2)	373
写真図版104	墓坑内出土遺物(3)	374
写真図版105	墓坑内出土遺物(4)	375
写真図版106	墓坑内出土遺物(5)	376
写真図版107	遺構外出土遺物(土器1)	377
写真図版108	遺構外出土遺物(土器2)	378
写真図版109	遺構外出土遺物(土器3)	379
写真図版110	遺構外出土遺物 (土製品・陶磁器1)	380
写真図版111	遺構外出土遺物(陶磁器2)	381
写真図版112	遺構外出土遺物(陶磁器3)	382
写真図版113	遺構外出土遺物(石器1)	383
写真図版114	遺構外出土遺物(石器2)	384
写真図版115	遺構外出土遺物(石器3)	385
写真図版116	遺構外出土遺物 (鉄製品他)	386

仁昌寺遺跡

【本文】

I. 基本層序	390
II. 検出された遺構と遺物	391
縄文時代	
(1) 堅穴住居跡	391
(2) 住居跡遺構	397
(3) 炉跡	397
(4) 土坑	397
(5) 土器埋設遺構	406
近世以降	
(1) 骸骨埋納ピット	411
(2) 墓坑	411
(3) 道路	411
III. 遺構外の出土遺物	414
(1) 土器・土製品	414
(2) 石器・その他	416
IV.まとめ	430

【表 目 次】

第1表 石器石材分類表.....	418	第4表 遺物観察表（墓坑）.....	422
第2表 遺物觀察表（土器）.....	420	第5表 遺物観察表（石器）.....	423
第3表 遺物觀察表（土製品）.....	422		

【図版目次】

第1図 基本土層柱状圖.....	390	第14図 1・2号埋設土器.....	409
第2図 1号住居跡.....	392	第15図 1・2号埋設土器出土遺物.....	410
第3図 1号住居跡出土遺物(1).....	393	第16図 1～4号墓坑出土遺物.....	411
第4図 1号住居跡出土遺物(2).....	394	第17図 骸骨出土ビット・1～4号墓坑.....	412
第5図 1号住居跡出土遺物(3).....	395	第18図 遺構配貯洞.....	413
第6図 1号住居跡出土遺物(4).....	396	第19図 遺構外出土遺物（土器1）.....	424
第7図 1号住居跡遺構.....	398	第20図 遺構外出土遺物（土器2）.....	425
第8図 1号炉跡.....	399	第21図 遺構外出土遺物（土器3）.....	426
第9図 1・2号土坑.....	401	第22図 遺構外出土遺物 (土製品・土師器・石器1).....	427
第10図 3・4号土坑.....	402	第23図 遺構外出土遺物（石器2）.....	428
第11図 5～8号土坑.....	404	第24図 遺構外出土遺物（石器3）.....	429
第12図 9～11号土坑.....	405		
第13図 土坑内出土遺物.....	408		

【写真図版】

写真図版1 調査区全景・土層断面.....	433	写真図版11 1号住居跡出土遺物(3).....	443
写真図版2 1号住居跡.....	434	写真図版12 1号住居跡(4).....	
写真図版3 1号住居跡遺構.....	435	写真図版13 炉跡・土坑出土遺物.....	444
写真図版4 1号炉跡・1～3号土坑.....	436	写真図版14 土坑・埋設土器出土遺物.....	445
写真図版5 4～7号土坑.....	437	写真図版15 遺構外出土遺物(1).....	446
写真図版6 9・10号土坑・1・2号埋設土器	438	写真図版16 遺構外出土遺物(2).....	447
写真図版7 骸骨ビット・1～4号墓坑.....	439	写真図版17 遺構外出土遺物(3).....	448
写真図版8 1・2号溝跡.....	440	写真図版18 遺構外出土遺物(4).....	450
写真図版9 1号住居跡出土遺物(1).....	441		
写真図版10 1号住居跡出土遺物(2).....	442		

I. 調査に至る経緯

「仁昌寺Ⅱ遺跡」及び「仁昌寺遺跡」は、小島谷バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に育することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道4号は、東京を起点として、福島県、宮城県、岩手県を経て青森県に至る東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

小島谷バイパスは、二戸郡一戸町小島谷地区の国道4号の人家密集、幅員狭小による交通混雑と、急カーブの連続、冬期間の凍結、降雪等による交通道路の解消を図り、交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に、周辺市町村との連絡を強化して、地域活性化の支援を目的とする道路でもある（延長4,300m）。

昭和63年度に事業着手し、平成7年度に用地着手し今日に至っている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成2年度に分布調査を実施し、「仁昌寺Ⅱ遺跡」「仁昌寺遺跡」も確認されている。

二つの遺跡について試掘調査がなされ、その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成12年度事業について平成12年3月6日付け「教文第1220号」により、平成13年3月1日付け「教文第1342号」により、財團法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受けた財團法人岩手県文化振興事業団は平成12年4月6日付け及び平成13年4月2日付け、同年6月11日付けでそれぞれ岩手工事事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、2遺跡の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所）

II. 遺跡の位置と立地

1. 位置と立地

仁昌寺Ⅱ遺跡は一戸町小島谷字仁昌寺4ほかに所在する。遺跡のある小島谷地区は一戸町の中央部やや北側にあたり、町の中心市街地からほど近い。JR一戸駅から南方向に約5.2km、東北自動車道八戸線の一戸インターチェンジから同方向約7.7kmに位置し、北緯40度9分40秒、東經141度18分34秒の地点にある。一戸町は岩手県の内陸北部、盛岡市から約65kmの地点にあたり、東は九戸村、南東は葛巻町、南は岩手町、西は淨法寺町、北は二戸市と接する。隣県である青森との境までは直線距離にして約15kmほどである。面積は298.58m²、純面積の80%以上を山林原野が占める山間地となっている。町の中央部には馬淵川が北流し、その支流域に集落と耕地が散在しており、国道4号沿いが市街化している。

本遺跡は、西岳（標高1,018m）の裾野付近から端を発して北東方向に延びる丘陵縁辺部の緩やかな斜面上に立地する。下方には沖積世～洪積世に形成されたとされる砂礫（小島谷）段丘と火山灰砂（小姓堂）段丘が広がる。これらの段丘には、下位に八戸火山灰、さらにその上には南部浮石、中根浮石などのテフラが載るが、本地域においてこれらのテフラは浮石粒が黒色土と混合して暗黄褐色土層として見られるにすぎない。

い。遺跡の載る丘陵は、第三紀に堆積した堆積岩を基盤とする四つ段層からなる。この基盤層は青緑色砂岩、泥岩、礫岩、凝灰岩質の砂岩から構成され、下位の泥岩か砂岩からは動物化石を、中位の泥岩・砂岩、上位の砂岩より植物化石を産出する。

調査区は先述の北東方向に延びる丘陵縁辺部の緩斜面上に立地し南北を沢に挟まれ両側が低くなっている。標高200~205mをはかり、現況は畠地及び原野である。遺跡の東側には現在の国道4号に沿うように平穂川が北流し、1.4km北方で馬瀬川と合流する。道路と平穂川との比高差は約25mほどである。馬瀬川はさらに3.3km北方で東流する女鹿川・3.5km北方で西流する根反川を合わせて北流する。

遺跡と東側に広がる小鳥谷地区とは20m前後の比高差があり、現在はおもに、河川に沿った砂礫段丘（本来の沖積地）の部分が水田や宅地として、またその背後の火山性段丘・丘陵縁辺部（台地）が畠地やぶどうの果樹園などとして利用されている。また、平穂川ー根反川流域一帯は珪化木の産地として知られ「根反の大珪化木」が有名である。また、本地区は名勝「藤島の藤」でも知られている。

2. 周辺の遺跡

一戸町では岩手県教育委員会によると、平成13年4月現在で490遺跡が報告されている。本項ではこの中で本遺跡の中心的な所蔵時期である縄文時代についてのみ述べる。今回掲載しているのは、本遺跡を中心として同心円状に半径8km圏内に位置する縄文時代の遺跡で、235箇所（一部中世城館跡を含む）を第2図・第1表に示した。このうち、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査が行われているのは9上野遺跡（2001b）、14平船Ⅲ遺跡（1984）、54小井田Ⅲ遺跡（1985）、55小井田Ⅳ遺跡（1983）の4遺跡である。また一戸町教育委員会で調査が行われているのは1御所野遺跡（1993）、2馬場平遺跡（1983a）、3~7田中I~V遺跡（1981~1983b）、8子守八遺跡（1981）、10大平遺跡、114山井遺跡（1995a）の10遺跡である。これに加えて数少ない数の資料が出土している藤前遺跡（1985）がある。以上に挙げた遺跡以外は表掲資料により推定された時期区分で掲載しており、その詳細は不明である。以下、調査が行われている遺跡を中心に、時期別の道路分布について概観する。

遺跡の立地している馬瀬川上流域には、段丘を中心に縄文時代から中世までの各時期の遺跡が分布している。特に縄文時代の遺跡が多く、県内でも有数の遺跡密集地となっている。

早期の遺跡には平船Ⅲ遺跡と小井田Ⅲ遺跡がある。平船Ⅲ遺跡は土坑6基・炉跡1基・陥穴状造構5基が確認されており、貝殻文土器（白浜式・吹切沢式・物見台式併行）が出土している。また小井田Ⅲ遺跡では竪穴住居跡2棟が確認され、「寺の沢式土器」に比定される尖底深鉢土器が住居跡床面から出土している。このほかに早期の遺物が出土しているのは3田中I、46閑屋、82袖子田Ⅱ、125女鹿口Ⅱ、160西田子X X IXがある。

前期の遺跡には上野遺跡B地点がある。土器埋設造構2基と焼上遺構1基が確認されており、前期後半の円筒下附a式を伴っている。このほかに前期の遺物が出土しているのは3~5田中I~III、11大平II、12平船I、15古里、16下船山、20~21高平I・II、22間木野、27似平、35中野、39~40漆塗・漆塗II、46閑屋、57~58大越田I・II、73種ノ口II、87袖越、99下川原日II、102~104半在家II・IV、107坂ノドII、110能ノ木、124~125女鹿口・女鹿口II、131江六前、159~160西田子X X VII・X X IX、178道白、183東I、195岩木II、199中村III、208~209野馬鹿・野馬鹿II、212鬼洞、214門前、216下村がある。

中期の遺跡には本遺跡（仁昌寺II遺跡）を含め、御所野遺跡、馬場平遺跡、田中I・II・IV・V遺跡、子守A遺跡、大平遺跡など数多く分布している。御所野遺跡は1989年（平成元）からの継続調査により、東西500m・

南北120mの広がりを持つ、中期後葉大木10式期を中心とする大規模なムラであることが明らかとなり、1993年（平成5）に国指定史跡となった。その規模は隣接する馬場平遺跡を含め、中央部の配石遺構群を中心に住居跡や土坑群が馬蹄形に近い形で配置されている。周辺にはいくつかの集落の存在が想定され、500棟以上の堅穴住居跡が広く分布しているものと推定される。また北側に立地する田中遺跡群でも同時期の遺構が確認されており、田中I遺跡では大木9～10式期の堅穴住居跡2棟、田中II・IV・V遺跡ではいずれも大木10式期の堅穴住居跡が3・2・6棟確認されている。南側に立地する下守A遺跡でも大木10式期の堅穴住居跡を2棟検出しており、馬瀬川を挟んで対岸に立地する大平遺跡でも中期末～後期初頭の堅穴住居跡を7棟検出している。本報告には掲載していないが、二戸市荒谷A遺跡（1983）においても中期後半大木8a式～後期前半十腰内II式期の堅穴住居跡19棟が確認されており、大型住居跡を中心とした大規模な集落と考えられる。また九戸村田代遺跡では中期中葉期30棟（円筒上層e式期10棟・大木8b式期15棟・不明5棟）の堅穴住居跡が確認されている。このほかに中期の遺物を出土しているのは11大平II、17下村向、27似平II、29野馬II、32館屋敷、34深持、35中野、38子守C、39・40漆煙・漆煙II、41中瀬、42・43御所野II・III、45下地切、46閑舎、47船越、61・63・66・70親久保II・IV・VI・X I、72・73・74板ノ口I・II・III、84袖子田III、89武道平II、92館、99下川原目II、100釜屋敷、102～105半在家II～V、106・107板ノ下・板ノ下II、110板ノ木、121小姓堂III、124女鹿口II、126岩崎、130中崎IV、135大久保、139焼切、145・146女鹿新川II・III、162西田子XXIX I、185東III、198中村II、201・203野磯鶴・野磯鶴III、209野馬鹿II、211侍村、212鬼潤、214門前、216下村II、219朴館、228古屋敷がある。

後期の遺跡は小井田IV遺跡を含め、数多くが分布している。堅穴住居跡4棟や土坑9基・焼土遺構5基などが確認されており、「十腰内I～V式土器」に比定される後期の土器群全般が出土しているが、遺構の所属時期は十腰内V式期である。本遺跡（仁昌寺遺跡）から確認されている堅穴住居跡1棟は、十腰内II式土器を伴っており、後期中葉期にあたる。このほかに後期の遺物が出土しているのは、5田中III、10・11大平・大平II、12平船I、15古里、16下船山、17下村向、18・19内野I・II、20・21高平I・II、23・24双烟I・II、25小木田、30館野、31茶屋場、32館屋敷、34深持、35中野、36狼ヶ沢、54小井田III、59大越川III、60・66・68親久保I・VI・IX、72・73板ノ口I・II、75草木、79～81小瀬I～III、82袖子田、85・86馬場野・馬場野II、87袖越、88小荒木、89武道平II、90下川原目、91愛宕下、95柄上II、96大屋敷、100釜屋敷、101・102半在家・半在家II、106～108板ノ下I～III、110・112板ノ木・板ノ木III、118山井V、120・121小姓堂II・III、124・125女鹿口II・女鹿口II、126岩崎、127～130中崎I～IV、131江六前、132・133沢内・沢内II、134上女鹿、136～138大久保II～IV、154・155・157・158・162西田子VI・VII・X VI・X VII・X VIII・X X IX、167東火行V、170名子模II、183・187・188東I・V・VI、192・193高間木II・III、196大志田、197落合、200中村IV、201・202野磯鶴・野磯鶴II、204・205一本木・一本木II、208野馬鹿、210・211侍村・侍村II、212鬼潤、214門前、216下村II、217上里、218月花、220駒木、227中村、229高屋敷、230・232若子内・若子内IIIがある。

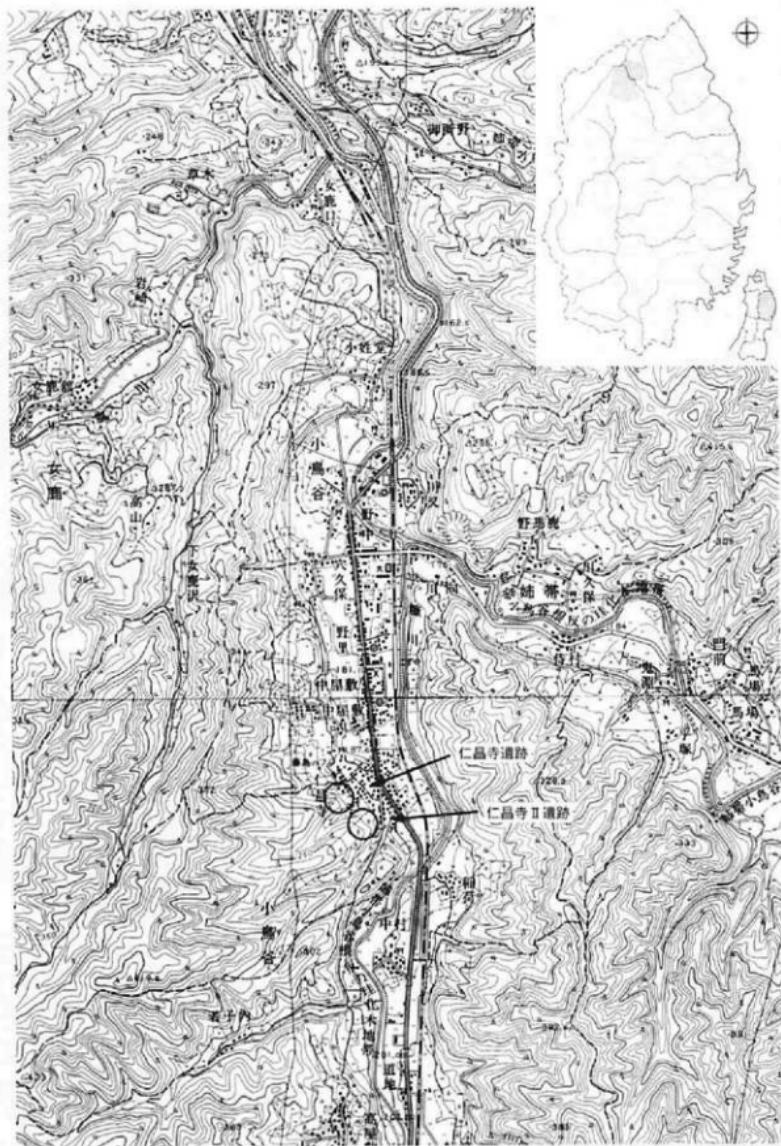
晚期の遺跡は藤前遺跡を含め、数多くが分布している。藤前遺跡は古くは江戸時代から知られており、昭和5年の建設工事に伴って多量の遺物を出土した。しかし、初めて学術的な調査を行われたのは昭和37年になってからである。出土土器は「大洞B～C1式土器」の土器群が主体であり、一部大洞C2式土器を含むが、遺跡の所属時期は晚期前半である。本報告には掲載していないが、馬瀬川上流域には二戸市橋場遺跡や同市雨滝遺跡など晚期の大規模な遺跡が点在している。このほかに晚期の遺物が出土しているのは、3・4田中I・II、12～14平船I～III、15古里I、16下船山、17下村向、18・19内野I・II、20・21高平I・II、22間木野、23・24双烟I・II、25小木田、26・27似平I・II、28・29野馬I・II、30館野、31茶屋場、33中屋敷、34深持、35

中野、36・37猿ヶ沢・猿ヶ沢Ⅱ、49越田橋Ⅰ・50・51大道沢Ⅰ・Ⅱ、52～56小井田Ⅰ～V、59大越田Ⅲ、66親久保Ⅳ、72・73道ノ口Ⅰ・Ⅱ、75龜木、80小池Ⅱ、82袖子田、113桃ノ木Ⅳ、114山井、119・120小姓堂・小姓堂Ⅱ、135・138大久保・大久保Ⅳ、139・141焼切・焼切Ⅲ、146・147女鹿新田Ⅲ・Ⅳ、149～151下平・下平Ⅲ、152小聲、155・158・160～162西田子宿・X X VI・X X IX～X X X I、163東火行Ⅰ、183・184・186～188東Ⅰ・Ⅱ・IV～VI、195岩木Ⅱ、197落合、202野哉鶴Ⅱ、204～206一本木・一本木Ⅱ・Ⅲ、207風口、209野馬庭Ⅱ、210・211侍村・侍村Ⅱ、212鬼測、214門前、215・216下村・下村Ⅱ、219朴館、221野中、222野里、228古屋敷、229高屋敷、230～232若子内・若子内Ⅱ・Ⅲがある。

(北田 熊)

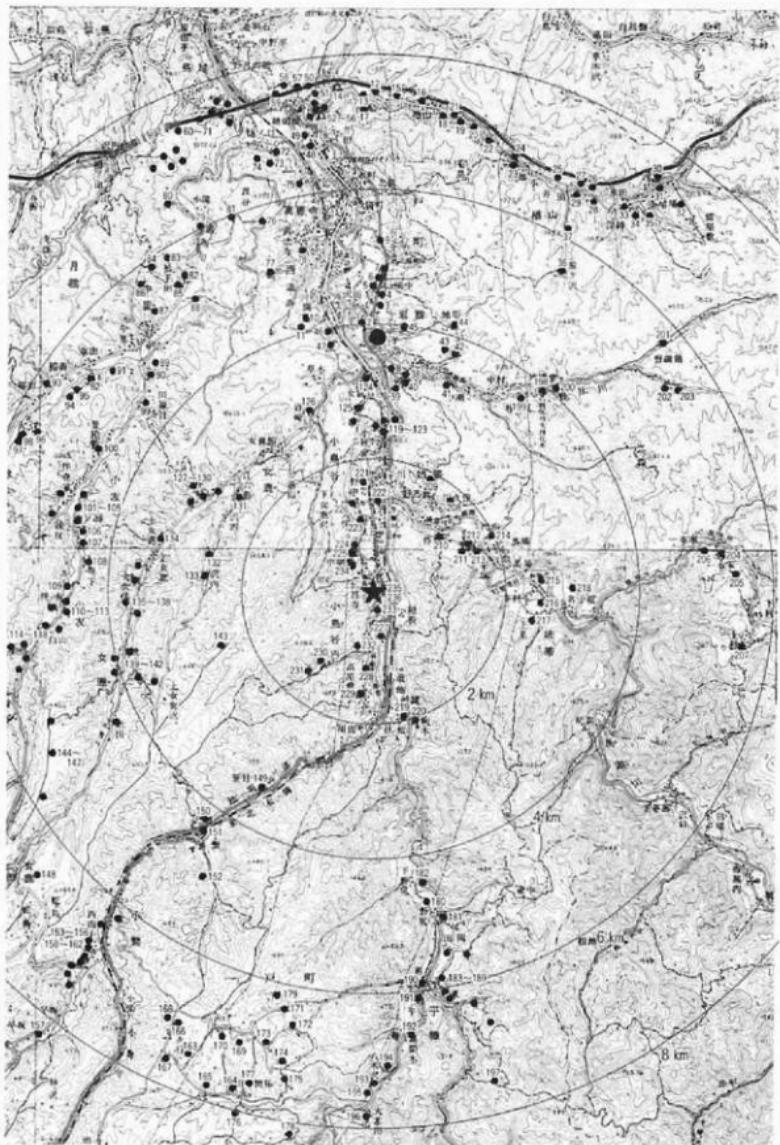
〔参考文献〕

1. 一戸町教育委員会 1981 「一戸バイパス開通歴史文化財調査報告書Ⅰ」 一戸町文化財調査報告書第1集
2. 一戸町教育委員会 1983 a 「一戸バイパス開通歴史文化財調査報告書Ⅱ」 一戸町文化財調査報告書第4集
3. 一戸町教育委員会 1983 b 「一戸バイパス開通歴史文化財調査報告書Ⅲ」 一戸町文化財調査報告書第5集
4. 一戸町教育委員会 1985 「前記」 一戸町文化財調査報告書第17集
5. 一戸町教育委員会 1991 「平成2年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（I）」 一戸町文化財調査報告書第25集
6. 一戸町教育委員会 1992 「平成3年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（II）」 一戸町文化財調査報告書第28集
7. 一戸町教育委員会 1993 a 「平成4年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（III）」 一戸町文化財調査報告書第33集
8. 一戸町教育委員会 1993 b 「御所野道路Ⅰ」 一戸町文化財調査報告書第32集
9. 一戸町教育委員会 1994 「平成5年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（IV）」 一戸町文化財調査報告書第35集
10. 一戸町教育委員会 1995 a 「山井道路」 一戸町文化財調査報告書第36集
11. 一戸町教育委員会 1995 b 「平成6年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（V）」 一戸町文化財調査報告書第37集
12. 一戸町教育委員会 1995 c 「一戸町道路地図」
13. 一戸町教育委員会 1996 「平成7年度一戸道路群詳細分布調査報告書」「一戸の道路（VI）」 一戸町文化財調査報告書第38集
14. 岩手県教育委員会 2000 「平成13年度 道路台帳」



第1図 遺跡位置図

1:25,000 -78



第2図 周辺の遺跡分布図

1:75,000 一戸町・二戸市

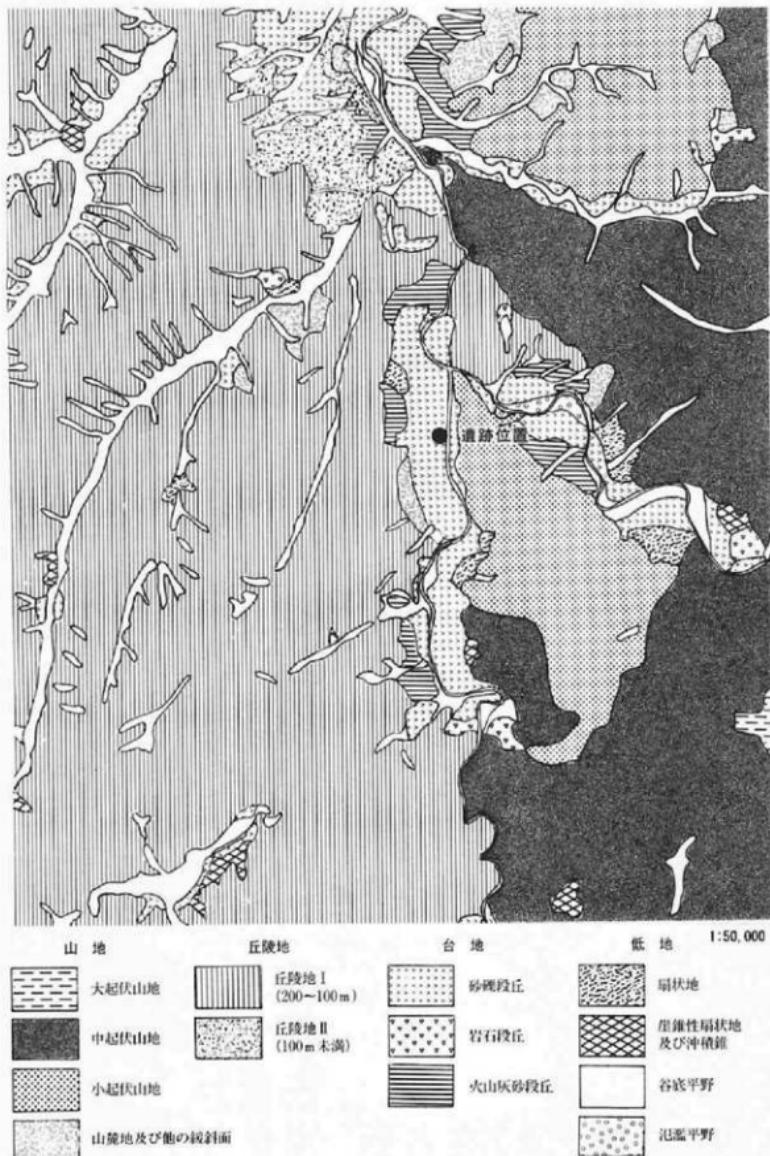
第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	所在地	時代	遺物等	文獻
1	阿須野	散布地	弓削字阿須野	純文・平安	純文土器(中頃)、土師器、石器、磨製石斧	5-8-12-14
2	馬場平	集落跡	弓削字馬場平	純文	純文土器(中頃)	2-12-14
3	田中I	散布地	弓削字田中	純文・中世	純文土器(早・中・晚頃)、磨石、土師器	5-12-14
4	田中II	散布地	弓削字田中	純文・中世	純文土器(中・晚頃)、土師器、石器、石頭	5-12-14
5	田中店	散布地	弓削字田中	純文・平安	純文土器(前・後期)、土師器	1-5-12-14
6	田中前	散布地	弓削字田中	純文・平安	純文土器(中頃)、土師器	1-12-14
7	田中V	散布地	弓削字田中	純文・平安	純文土器(中頃)、土師器	12-14
8	子守A	散布地	弓削字子守	純文・平安	純文土器(中頃)、土師器	1-5-12-14
9	上野	集落跡	弓削字上野・北城	純文・弥生・古墳・中世	純文土器(弥生・古墳)、土師器、石器	3-12-14-20
10	大平	集落跡	西法寺字大平	純文・弥生・平安	純文土器(前・後期)、弥生土器、土師器	12-14
11	大平II	散布地	西法寺字大平	純文・弥生・平安	純文土器(前・中・後期)、弥生土器、土師器	5-12-14
12	平船I	集落跡	猪山字平船	純文	純文土器(前・後・晚頃)	12-13-14
13	平船II	集落跡	猪山字平船	純文	純文土器(晚頃)	12-13-14
14	平船III	集落跡	猪山字平船	純文	純文土器(晚頃)	12-14-16
15	古里I	集落跡	猪山字古里	純文	純文土器(前・後・晚頃)	12-13-14
16	下猪山	集落跡	猪山字下猪山	純文・奈良・平安	純文土器(前・後・晚頃)、平安(土師器)	12-13-14
17	下村向	散布地	一小字下村向日か	純文・古代	純文土器(中・後・晚頃)、土師器	12-13-14
18	内野I	集落跡	猪山字内野	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
19	内野II	集落跡	猪山字内野	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
20	高平I	集落跡	猪山字高平	純文	純文土器(前・後・晚頃)	12-13-14
21	高平II	集落跡	猪山字高平	純文	純文土器(前・後・晚頃)	12-13-14
22	国木野	集落跡	猪山字国木野	純文・弥生	純文土器(前・晚頃)、弥生土器	12-13-14
23	双畠I	集落跡	猪山字双畠	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
24	双畠II	集落跡	猪山字双畠	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
25	小木田	集落跡	猪山字小木田	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
26	船平I	集落跡	猪山字船平	純文	純文土器(後・晚頃)	12-14
27	船平II	集落跡	猪山字船平	純文	純文土器(前・中・晚頃)	12-13-14
28	野馬I	集落跡	猪山字野馬	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
29	野馬II	集落跡	猪山字野馬	純文	純文土器(中・晚頃)	12-13-14
30	洞野	集落跡	猪山字洞野	純文	純文土器(後・晚頃)、弥生土器	12-13-14
31	高坂場	散布地	猪山字高坂場	純文・弥生	純文土器(後・晚頃)、弥生土器(中・後頃)	12-13-14
32	船坂後	散布地	猪山字船坂後	純文・弥生	純文土器(後・晚頃)、弥生土器	12-13-14
33	中坂後	散布地	猪山字中坂後	純文・平安	純文土器(後・晚頃)、土師器	12-13-14
34	深持	散布地	猪山字深持	純文・弥生・平安	純文土器(中・後・晚頃)、弥生土器、原住民	12-13-14
35	中野	散布地	猪山字中野	純文・弥生・平安	純文土器(前・中・後・晚頃)、弥生土器、土師器、石器	12-13-14
36	猿ヶ沢	散布地	猪山字猿ヶ沢	純文	純文土器(後・晚頃)	12-13-14
37	猿ヶ沢II	散布地	猪山字猿ヶ沢	純文	純文土器(後頃)	12-13-14
38	子守C	散布地	弓削字子守	純文	純文土器(中頃)	7-12-14
39	康相	散布地	御厨字康相	純文・弥生	純文土器(前・中頃)、弥生土器	7-12-14
40	御厨II	散布地	御厨字御厨	純文・平安	純文土器(前・中・後頃)、石器、土師器	7-12-14
41	中沼	散布地	猪山字中沼	純文	純文土器(中頃)	7-12-14
42	御所野I	散布地	猪山字御所野	純文・弥生・平安	純文土器(中頃)、弥生土器、土師器、磨石	5-12-14
43	御所野II	散布地	猪山字御所野	純文	純文土器(中頃)	5-12-14
44	上込切	散布地	弓削字上込切	純文・奈良	純文土器、土師器	5-12-14
45	下込切	散布地	弓削字下込切	純文・弥生	純文土器(中頃)、弥生土器	5-12-14
46	間附	散布地	西法寺字間附	純文・弥生・奈良	純文土器(前・中・後・晚頃)、磨石、弥生土器、土師器	5-12-14
47	難越	散布地	西法寺字難越	純文・弥生	純文土器(中頃)、弥生土器、石器	5-12-14
48	河濱	散布地	一小字河濱	純文	純文土器(後頃)、石器、土器、土瓶、土鍋、錫器	4-12-14
49	越前塚I	集落跡	一小字越前塚	純文	純文土器(後頃)	12-14
50	大池代I	散布地	一小字大池代	純文	純文土器(後頃)	12-14
51	大池代II	散布地	一小字大池代	純文	純文土器(後頃)	12-14
52	小井田I	集落跡	一小字小井田	純文	純文土器(後頃)	12-14
53	小井田II	集落跡	一小字小井田	純文・弥生	純文土器(後頃)、弥生土器	12-14
54	小井田III	集落跡	一小字小井田	純文・弥生・平安	純文土器(後・晚頃)、弥生土器、平安土器	12-14-17
55	小井田IV	集落跡	一小字小井田	純文	純文土器(後頃)	12-14-15
56	大庭田I	集落跡	一小字大庭田	純文	純文土器(後頃)	12-14

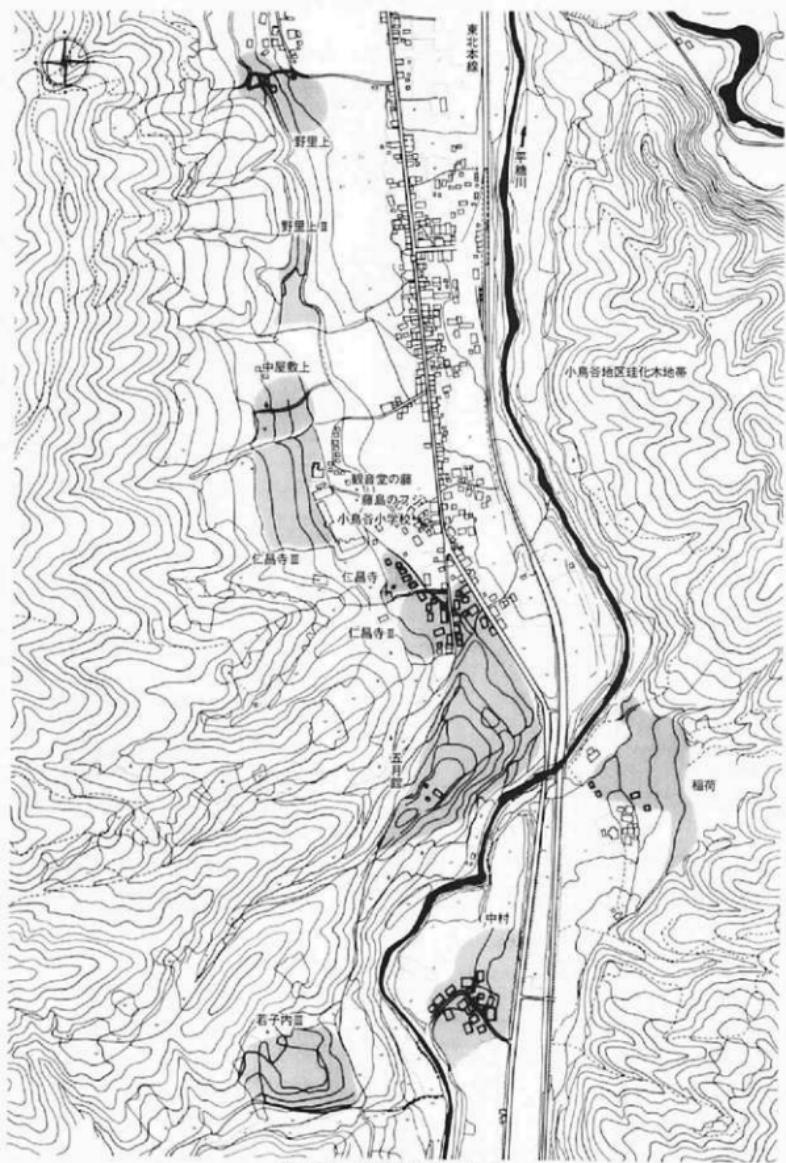
No.	遺跡名	性質	所在地	時代	遺物等	文獻
58	大塚田Ⅱ	散布地	一戸中央越田	绳文	绳文土器(齿期)	12-14
59	大塚田Ⅲ	散布地	一戸中央越田	绳文・朱生	绳文土器(齿・晚期)、朱生土器	12-14
60	現久保Ⅰ	散布地	鳥越字現久保	绳文・朱生	绳文土器(齿期)、朱生土器	12-14
61	現久保Ⅱ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(中期)	12-14
62	現久保Ⅲ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器	12-14
63	現久保Ⅳ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(中期)	12-14
64	現久保Ⅴ	散布地	鳥越字現久保	绳文・弥生	绳文土器、朱生土器	12-14
65	現久保Ⅵ	散布地	鳥越字現久保	绳文・弥生	绳文土器、朱生土器	12-14
66	現久保Ⅶ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(中・後・晚期)	12-14
67	現久保Ⅷ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(晚期)、石器	12-14
68	現久保Ⅸ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(後期)	12-14
69	現久保Ⅹ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器	12-14
70	現久保Ⅺ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器(中期)	12-14
71	現久保Ⅻ	散布地	鳥越字現久保	绳文	绳文土器	12-14
72	鏡ノ口Ⅰ	散布地	一戸鏡ノ口	绳文・弥生・奈良・平安	石器、绳文土器(中・後・晚期)、弥生土器、土器群	5-12-14
73	鏡ノ口Ⅱ	散布地	一戸鏡ノ口	绳文・弥生・奈良・平安	绳文土器(后-晚期)、弥生土器、土器群	5-12-14
74	鏡ノ口Ⅲ	散布地	一戸鏡ノ口	绳文・平安	绳文土器(中期)、土器群	5-12-14
75	余木	散布地	高野寺字余木	绳文	绳文土器(後・晚期)、石器	5-12-14
76	度谷	散布地	高野寺字度谷	绳文・平安	绳文土器、土器群	5-12-14
77	西法寺Ⅰ	散布地	西法寺字西法寺	绳文	绳文土器	5-12-14
78	西法寺Ⅱ	散布地	西法寺字西法寺	绳文・中社	绳文土器、石器、中社退特	5-12-14
79	小崎	散布地	一戸字小崎	绳文	绳文土器(後期)	12-14
80	小崎Ⅱ	散布地	一戸字小崎	绳文・平安	绳文土器(後・晚期)、土器群	5-12-14
81	小崎Ⅲ	散布地	一戸字小崎	绳文	绳文土器(後期)	5-12-14
82	袖子田	散布地	中里字袖子田	绳文・平安	绳文土器(後・晚期)、土器群、绳文器、瓦片	6-12-14
83	袖子田Ⅱ	散布地	中里字袖子田	绳文・弥生・平安	绳文土器(早・前期)、弥生土器、土器群	6-12-14
84	袖子田Ⅲ	散布地	中里字袖子田	绳文・平安	绳文土器(中期)、土器群	6-12-14
85	馬場野	散布地	中里字馬場野	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群、绳文器	6-12-14
86	馬場野Ⅱ	散布地	中里字馬場野	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群、绳文器	6-12-14
87	船越	散布地	中里字船越	绳文・弥生・平安	绳文土器(後・後期)、弥生土器、土器群	6-12-14
88	小笠本	散布地	中里字小笠本	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群	6-12-14
89	武道平Ⅰ	散布地	中里字武道平	绳文・弥生・平安	绳文土器(中・後期)、弥生土器、土器群	6-12-14
90	下川原Ⅰ	散布地	小字下川原	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群、组志器	6-12-14
91	愛宕下	散布地	中里字愛宕下	绳文・弥生・奈良・平安	绳文土器(後期)、弥生土器、土器群、组志器	6-12-14
92	無	散布地	竹中字中	绳文・弥生・平安	绳文土器(中間)、弥生土器、土器群、石器状石器	6-12-14
93	福井	散布地	月給字福井	绳文・平安	绳文土器、土器群	6-12-14
94	新上	散布地	月給字新上	绳文・平安	绳文土器、土器群	6-12-14
95	被上Ⅰ	散布地	月給字被上	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群、砾石	6-12-14
96	大塚敷	散布地	月給字大塚敷	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群	6-12-14
97	月給中坪	北原町	月給字中坪	绳文・奈良・平安	绳文土器、土器群、陶器器	12-14
98	月給中坪Ⅱ	北原町	月給字中坪	绳文・奈良・平安・中社	绳文土器、土器群、陶器器、单柄、刷、土器	12-14
99	下川原Ⅱ	散布地	小字下川原Ⅱ	绳文・奈良・平安	绳文土器(後・中間)、土器群、石器	6-12-14
100	御坂敷	散布地	小字御坂敷	绳文・平安	绳文土器(中・後期)、土器群、石器	6-12-14
101	牛住家	散布地	小字牛住家	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群	6-12-14
102	牛住家Ⅱ	散布地	小字牛住家Ⅱ	绳文・弥生・奈良・平安・中社	绳文土器(後・中・後期)、土器群、陶器器、单柄、刷、土器	6-12-14
103	牛住家Ⅲ	散布地	小字牛住家Ⅲ	绳文・平安	绳文土器(中間)、土器群	6-12-14
104	牛住家Ⅳ	散布地	小字牛住家Ⅳ	绳文・平安	绳文土器(後・中間)、土器群	6-12-14
105	牛住家Ⅴ	散布地	小字牛住家Ⅴ	绳文・平安	绳文土器(中間)、绳文器	6-12-14
106	坂ノ下	散布地	小字坂ノ下	绳文・平安	绳文土器(中・後期)、土器群	6-12-14
107	坂ノ下Ⅱ	散布地	小字坂ノ下Ⅱ	绳文・平安	绳文土器(後-後期)、土器群	6-12-14
108	坂ノ下Ⅲ	散布地	小字坂ノ下Ⅲ	绳文・平安	绳文土器(後期)、土器群	6-12-14
109	坂ノ下Ⅳ	散布地	小字坂ノ下Ⅳ	绳文・平安	绳文土器、土器群	6-12-14
110	坂ノ本	散布地	小字坂ノ本	绳文・平安	绳文土器(後-後期)、土器群、组志器	6-11-12-14
111	坂ノ本Ⅱ	散布地	小字坂ノ本Ⅱ	绳文-古代	绳文土器、弥生七器、土器群	6-11-12-14
112	坂ノ本Ⅲ	散布地	小字坂ノ本Ⅲ	绳文	绳文土器(後期)	6-11-12-14
113	坂ノ本Ⅳ	散布地	小字坂ノ本Ⅳ	绳文	绳文土器(後期)	6-11-12-14
114	山井	散布地	小字山井	绳文	绳文土器(後期)	6-11-12-14
115	山井Ⅱ	散布地	小字山井Ⅱ	绳文・古代	绳文土器、土器群	6-12-14

No.	遺跡名	種別	所在地	時代	遺物等	文献
116	山井Ⅱ	散布地	小字山井	縄文	縄文土器	6-12-14
117	山井Ⅲ	散布地	小字山井移地	縄文	縄文土器	6-12-14
118	山井Ⅳ	散布地	小字山井井	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
119	小姓堂	散布地	小姓移小姓堂	縄文	縄文土器(後期)	9-12-14
120	小姓堂Ⅱ	散布地	小姓移小姓堂	縄文・古代	縄文土器(後期・昭和)	9-12-14
121	小姓堂Ⅲ	散布地	小姓移小姓堂	縄文	縄文土器(早・中・後期)	9-12-14
122	小姓堂Ⅳ	散布地	小姓移小姓堂	縄文	縄文土器	9-12-14
123	小姓堂Ⅴ	散布地	小姓移小姓堂	縄文	縄文土器	12-14
124	安窓Ⅰ	散布地	小字安窓宿前	縄文・平安	縄文土器(前・中・後期)、陶水土器	6-12-14
125	安窓口Ⅱ	散布地	小字安窓宿口II	縄文・平安	縄文土器(早・前・後期)、石器、土器器	9-12-14
126	弓場	散布地	女鹿字弓場	縄文・平安	縄文土器(中・後期)、土器器	6-12-14
127	中崎	散布地	女鹿字中崎	縄文・平安	縄文土器(後期)、土器器、西石	6-12-14
128	中崎Ⅱ	散布地	女鹿字中崎	縄文・平安	縄文土器(後期)、土器器	6-12-14
129	中崎Ⅲ	散布地	女鹿字中崎	縄文・平安	縄文土器(後期)、土器器	6-12-14
130	中崎移	散布地	女鹿字中崎	縄文・平安	縄文土器(中・後期)、土器器	6-12-14
131	江六前	散布地	女鹿字江六前	縄文	縄文土器(前・後期)	6-12-14
132	江内	散布地	女鹿字江内	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
133	洞内Ⅱ	散布地	女鹿字洞内	縄文・弥生	縄文土器(後期)、陶水土器	6-12-14
134	上女塙	散布地	女鹿字上女塙	縄文・平安	縄文土器(後期)、土器器	6-12-14
135	大久保	散布地	女鹿字大久保	縄文	縄文土器(中・後期)	6-12-14
136	大久保Ⅱ	散布地	女鹿字大久保	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
137	大久保Ⅲ	散布地	女鹿字大久保	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
138	大久保Ⅳ	散布地	女鹿字大久保	縄文・平安	縄文土器(後・中・後期)、土器器	6-12-14
139	鏡切Ⅰ	散布地	女鹿字鏡切	縄文	縄文土器(中・後期)	6-12-14
140	鏡切Ⅱ	散布地	女鹿字鏡切	縄文	縄文土器(後期)、陶水土器	6-12-14
141	地切Ⅰ	散布地	女鹿字地切	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
142	地切Ⅱ	散布地	女鹿字地切	縄文		12-14
143	女鹿貝内	散布地	女鹿貝内	縄文	縄文土器	12-14
144	女鹿番田	散布地	女鹿番田	縄文	縄文土器	12-14
145	女鹿新番田	散布地	女鹿字女鹿新番	縄文	縄文土器(中期)	6-12-14
146	女鹿新番田Ⅱ	散布地	女鹿字女鹿新番	縄文	縄文土器(中・後期)	6-12-14
147	女鹿新番田Ⅲ	散布地	女鹿字女鹿新番	縄文	縄文土器(後期)	6-12-14
148	女就蛇ノ島	散布地	女就蛇ノ島	縄文	縄文土器	12-14
149	下平	散布地	小字下平	縄文	縄文土器(後期)	9-12-14
150	下平Ⅱ	散布地	小字下平	縄文	縄文土器(後・後期)	9-12-14
151	下平Ⅲ	散布地	小字下平	縄文	縄文土器(後・後期)	9-12-14
152	小堀	散布地	小字下平	縄文	縄文土器(後・後期)	9-12-14
153	西田子屋	散布地	小字西田子屋	縄文	縄文土器	12-14
154	西田子屋Ⅱ	散布地	小字西田子屋	縄文	縄文土器(後期)	13-12-14
155	西田子屋Ⅲ	散布地	小字西田子屋-3	縄文・平安・近鉄	縄文土器(後・後期)、土器器、陶器器	11-12-14
156	西田子屋Ⅳ	散布地	小字西田子	縄文	縄文土器	12-14
157	西田子屋Ⅴ	散布地	小字西田子	縄文	縄文土器(後期)	11-12-14
158	西田子屋Ⅵ	散布地	小字西田子	縄文	縄文土器(後・後期)	11-12-14
159	西田子屋Ⅶ	散布地	小字西田子	縄文	縄文土器(後期)	11-12-14
160	西田子屋Ⅷ	散布地	小字西田子	縄文	縄文土器(早・前・後期)	11-12-14
161	西田子屋Ⅸ	散布地	小字西田子	縄文・弥生・平安・近鉄	縄文土器(後期)、陶水土器、土器器、陶器器	11-12-14
162	西田子屋Ⅹ	散布地	小字西田子	縄文・平安・近鉄	縄文土器(中・後・後期)、土器器、陶器器	11-12-14
163	東火行Ⅰ	散布地	中山東火行	縄文	縄文土器(後期)、石器	9-12-14
164	東火行Ⅱ	散布地	中山東火行	縄文	縄文土器	12-14
165	東火行Ⅲ	散布地	中山東火行周辺	縄文	縄文土器	12-14
166	東火行Ⅳ	散布地	中山東火行	縄文・台良・平安	縄文土器、土器器	9-12-14
167	東火行Ⅴ	散布地	中山東火行	縄文	縄文土器(後期)	9-12-14
168	西火行	散布地	中山西火行	縄文・台良・平安	土器・古代・土器器	12-14
169	名子根Ⅰ	散布地	平綾名子根121周辺	縄文	縄文土器	12-14
170	名子根Ⅱ	散布地	平綾名子根109周辺	縄文	縄文土器(後期)	9-12-14
171	名子根Ⅲ	散布地	平綾名子根108周辺	縄文	縄文土器	12-14
172	名子根Ⅳ	散布地	平綾名子根167周辺	縄文	縄文土器	12-14
173	名子根Ⅴ	散布地	平綾名子根167周辺	縄文	縄文土器	12-14
174	名子根Ⅵ	散布地	平綾名子根119周辺	縄文	縄文土器	12-14
175	名子根Ⅶ	散布地	平綾名子根158-1周辺	縄文	縄文土器、石器	12-14
176	名子根Ⅷ	散布地	平綾名子根	縄文	縄文土器	9-12-14

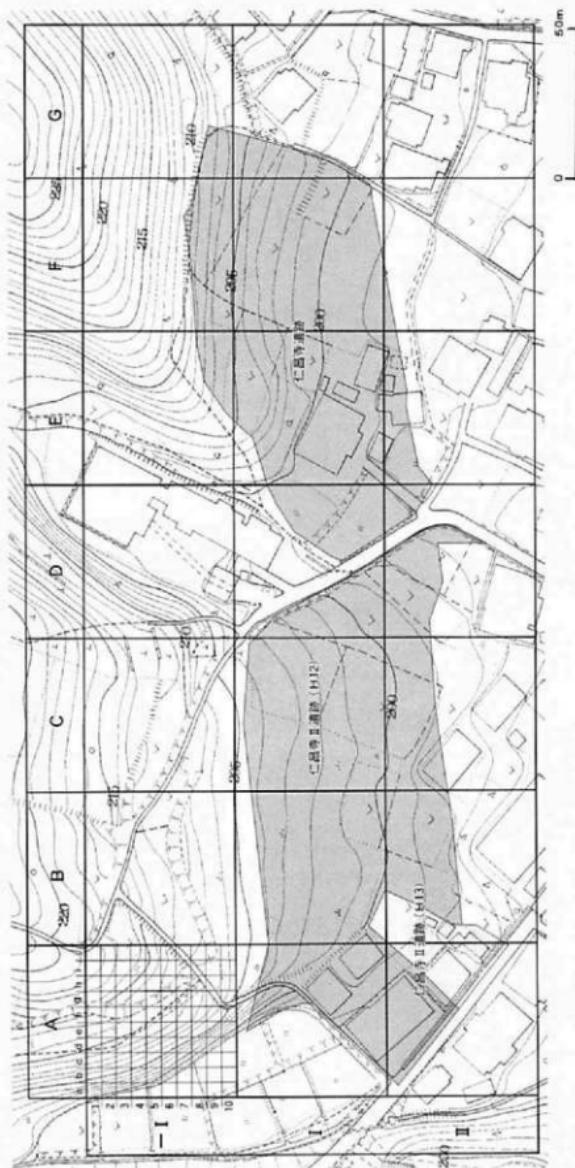
No.	遺跡名	種別	所在地	時代	遺物等	文献
177	名子原X	散布地	平野字名子原	绳文	绳文土器	9-12-14
178	道白	散布地	宇都野字道白	绳文	绳文土器(前期)	9-12-14
179	野尻	散布地	平野野尻周辺	绳文	绳文土器	12-14
180	野尻Ⅱ	散布地	平野字野尻	绳文	土器	12-14
181	田岡	散布地	平野字田岡	绳文	绳文土器、石棒、石斧	12-14
182	田岡Ⅱ	散布地	平野字田岡	绳文	土器	12-14
183	家I	散布地	平野字家	绳文・弥生	绳文土器(高・低・晚期)	9-12-14
184	祇見	散布地	平野字祇見4-1周辺	绳文	绳文土器(晚期?)	9-12-14
185	祇見	散布地	平野字祇見2周辺	绳文	绳文土器(中期)	9-12-14
186	祇見	散布地	平野字祇見2	绳文	绳文土器(晚期中期)	9-12-14
187	家V	散布地	平野字家	绳文	绳文土器(高・晚期)	9-12-14
188	祇見	散布地	平野字祇見	绳文	绳文土器(高・晚期)	9-12-14
189	祇見	散布地	平野字祇見	绳文・古代	土器	12-14
190	弓子根原	散布地	平野字弓子根	绳文	绳文土器	12-14
191	高脚本I	散布地	平野字高脚本-2	绳文	绳文土器	9-12-14
192	高脚本II	散布地	平野字高脚本周辺	绳文	绳文土器(晚期)	12-12-14
193	高脚本III	散布地	平野字高脚本	绳文	绳文土器(洪期)	12-12-14
194	弓子本	散布地	平野字弓子本周辺	绳文	绳文土器	12-14
195	弓子本Ⅱ	散布地	平野字弓子本	绳文	绳文土器(高・晚期)	11-12-14
196	大志田	散布地	平野字大志田	绳文	绳文土器(洪期)、变形土器、片口形土器	12-14
197	落合	散布地	平野字落合	绳文	绳文土器(高・晚期)	12-14
198	中村Ⅰ	散布地	奥坂字中村	绳文	绳文土器(中期)、碧玉質石斧	7-12-14
199	中村Ⅱ	散布地	奥坂字中村	绳文	绳文土器(古期)	7-12-14
200	中村Ⅲ	散布地	奥坂字中村	绳文	绳文土器(古期)、伴生土器	7-12-14
201	野尻原	散布地	奥坂字野尻原	绳文・平安	绳文土器(中・後期)、土器群	7-12-14
202	野尻原Ⅱ	散布地	奥坂字野尻原	绳文・弥生	绳文土器(高・晚期)、石器、装饰土器	7-12-14
203	野尻原Ⅲ	散布地	奥坂字野尻原	绳文	绳文土器(中期)	7-12-14
204	一本木	散布地	奥坂字一本木	绳文・弥生・平安	绳文土器(高・晚期)、磨製石斧、土器群	7-12-14
205	一本木Ⅱ	散布地	奥坂字一本木	绳文	绳文土器(高・晚期)	7-12-14
206	一本木Ⅲ	散布地	奥坂字一本木	绳文	绳文土器(高)	7-12-14
207	里I	散布地	奥坂字里	绳文	绳文土器(中期)、土器群	7-12-14
208	野尻原	散布地	奥坂字野尻原	绳文・平安	绳文土器(古・後期)、装饰土器	7-12-14
209	野尻原Ⅱ	散布地	奥坂字野尻原	绳文・弥生・平安	绳文土器(古・後期)、装饰土器、土器群	7-12-14
210	野尻原Ⅲ	散布地	奥坂字野尻原	绳文	绳文土器(高・晚期)、石器鉄器	7-12-14
211	野尻Ⅱ	散布地	奥坂字野尻	绳文	绳文土器(中・後・晚期)、石制刀劍、石器	7-12-14
212	鬼瀬	散布地	奥坂字鬼瀬	绳文・弥生・平安	绳文土器(中・後・晚期)、伴生土器、土器群	7-12-14
213	鬼瀬Ⅱ	散布地	奥坂字鬼瀬	绳文・弥生・平安	绳文土器、伴生土器、土器群	7-12-14
214	門前	散布地	奥坂字門前	绳文・弥生・奈良	绳文土器(高・中・後・晚期)、伴生土器、土器群	7-12-14
215	F村	散布地	奥坂字下F村	绳文	绳文土器(高)、灰土器、磨製石斧、石器、土器	7-12-14
216	下村Ⅱ	散布地	奥坂字下村	绳文・弥生	绳文土器(高・中・後・晚期)、伴生土器、石器	7-12-14
217	上爪	散布地	奥坂字上爪	绳文	绳文土器(後期)	7-12-14
218	月代	散布地	奥坂字月代	绳文・弥生・平安	绳文土器(後期)、弥生土器、土器群	7-12-14
219	野原	散布地	小鳥谷字野原	绳文	绳文土器(中・後・晚期)、石器	7-12-14
220	野原Ⅱ	散布地	小鳥谷字野原	绳文	绳文土器(後期)、石器	7-12-14
221	野原Ⅲ	散布地	小鳥谷字野原	绳文	绳文土器(後期)、石器	7-12-14
222	野原	散布地	小鳥谷字野原	绳文	绳文土器(後期)、注口土器、石器、土器	7-12-14
223	野原上	散布地	小鳥谷字野原上	绳文	绳文土器	9-12-14
224	野原上Ⅱ	散布地	小鳥谷字野原上	绳文	绳文土器	9-12-14
225	中原上	散布地	小鳥谷字中原上	绳文	绳文土器	9-12-14
226	久久佐	散布地	小鳥谷字久久佐	绳文	土器	9-12-14
227	中村	散布地	小鳥谷字中村	绳文	绳文土器	9-12-14
228	古河敷	散布地	小鳥谷字古河敷	绳文	绳文土器(中・後期)、石器	9-12-14
229	高脚敷	散布地	小鳥谷字高脚敷	绳文	绳文土器(高・晚期)	9-12-14
230	弓子内	散布地	小鳥谷字弓子内	绳文	绳文土器(高・晚期)	9-12-14
231	弓子内Ⅱ	散布地	小鳥谷字弓子内	绳文	绳文土器(後期)	9-12-14
232	弓子内Ⅲ	散布地	小鳥谷字弓子内	绳文	绳文土器(後期)	9-12-14
233	瓦屋跡	散布地	小鳥谷字瓦屋	中井	陶器、平坦、切削	12-14
234	仁丹寺跡	散布地	小鳥谷字仁丹寺	绳文	绳文土器(後期後期)	9-12-14
235	仁丹寺	散布地	小鳥谷字仁丹寺	绳文	绳文土器(十個内外式)	9-12-14
236	仁丹寺Ⅱ	散布地	小鳥谷字仁丹寺	绳文	绳文土器(人字形式)	9-12-14



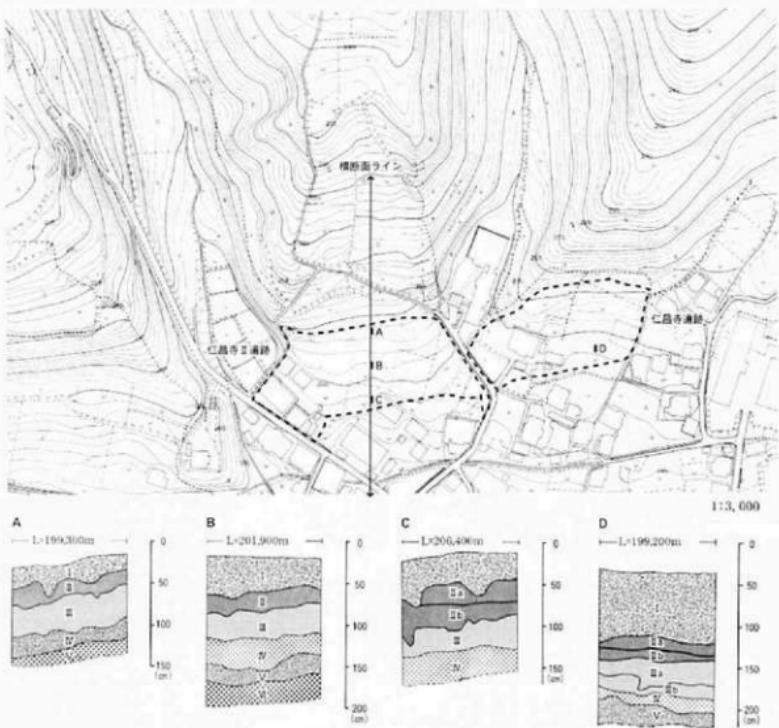
第3図 地形分類図



第4図 周辺の遺跡と地形



第5図 グリッド配置図



メインペルト

- I 10VX3/1 黒褐色シルト・粘性や少弱・しまりやや弱 粘土
- Ia 10YR2/3 黒褐色シルト・粘性中・しまり中
- IIb 10VR2/2 黒褐色シルト・粘性や少弱・しまり中 To aプロック25%
- IIa 10YR2/1 黑色シルト・粘性中・しまり中
- IIIb 10YR4/3 淡い黄色・粘性中・しまり中 To Cu 残50%
- IV 10YR4/4 黄褐色粘土シルト・粘性中・しまり中 To Nb 1%以下
- V 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト・粘性や少弱・しまりやや強
- VI 10YR7/6 明黄褐色粘土・粘性強・しまり強



第6図 調査区内土層断面・調査区地形横断模式図

III. 調査と整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッド設定と遺構名

仁昌寺Ⅱ遺跡のグリッド設定は、国土地標第X系をもとに、調査区を通るX=18050.000のラインを地形に沿うように45度ずらし(E-45°-S)、基準線とした。次に基準線上を通るような任意の2点を設定し、X=18050.000、Y=40550.000を基準点1、X=18018.888、Y=40581.113を基準点2とした。そしてこの基準点および基準線を延長し、40×40mのメッシュで全調査区を区画した。このメッシュの南西端を基準として南東-北西方向には南西からA、Bのアルファベットを与え、南西-北東方向には南西からI、II、IIIの番号を付し、IA区、IB区と表示した。さらにこの大区画を10等分して4m×4mの小区画とし、南東から北西にa～j、南西から北東に1～10を付し、その組み合わせによりIA2b、IB5jのように呼称した。

仁昌寺遺跡のグリッド設定にあたっては、このメッシュをもとに南西方向に更に大区画を延長して-1区、北西方向へも延長してE区、F区、G区とした。次にこの大区画を10等分して4m×4mの小区画とし、南東から北西にa～j、南西から北東に1～10を付し、その組み合わせにより-1G2b、II F 5jのように呼称した。

遺構名は検出順に種別ごとに1号堅穴住居跡、2号掘立柱建物跡というように名称を付した。

(2) 粗掘・遺構検出

仁昌寺Ⅱ遺跡：検出面までの深さ及び層序の確認のため、調査区に地形に沿うかたちでトレンチを入れた。この結果、基本層序の第Ⅲ層の上面が遺構の検出面であることが確認された。このため、基本層序第Ⅳ層～Ⅶ層上面までの除去には重機を使用した。この後、人力によって遺構の有無を確認しながら第Ⅳ層まで掘り下げた。遺構が検出された場合には精査を行い、それ以外の区域に関してはさらに第V層上面までの掘り下げおよび遺構検出を順次行っていた。Ⅶ層上面以下については重機を使用せず、幅2mのトレンチを地形を考慮して設定し、人力によって層位毎に掘り下げ、遺構検出を行うという方法をとったが、V層以下からは遺構・遺物とも検出されなかった。

仁昌寺遺跡：検出面までの深さ及び層序の確認のため、調査区に地形に沿うかたちでトレンチを入れた。その結果、基本層序の第Ⅱ層および第Ⅲ層が遺構の検出面であることが確認された。このため、基本層序第Ⅰ層～Ⅲ層上面までの除去には重機を使用し、その後人力によって遺構の有無を確認しながら第Ⅳ層まで掘り下げた。遺構が検出された場合には精査を行い、それ以外の区域に関してはさらに第V層上面までの掘り下げおよび遺構検出を順次行った。Ⅶ層上面以下については基本的には重機を使用せず、幅2mのトレンチを地形を考慮して設定し、人力によって層位毎に掘り下げ、遺構検出を行うという方法をとったが、斜面下側の壁面で一部、重機を使用した。V層以下からは遺構・遺物とも検出されなかった。

(3) 遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

堅穴住居跡および堅穴住居状遺構の調査は4分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、上層を観察しながら発掘を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

フィルムは35mmモノクローム・カラーリバーサル、および6×9cmモノクロームの3種を使用し、調査終

了時点でセスナ機により空中写真を撮影した。

実測図の縮尺は20分の1を基本としたが、種類や規模の大小により10分の1、40分の1、50分の1を用いた。なお、調査の進行上土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみにとどめた遺構もある。

遺物は、遺構内出土のものは遺構名と出土層位（上位・中位・下位・床面直上・床面）および出土位置を、遺構外出土のものはグリッド毎に層位を記して取り上げた。

2. 室内整理

(1) 遺物整理

現場で水洗しきれなかった遺物の水洗から開始し、注記、仕分け、接合、掲載遺物の選別、写真撮影、実測、法量などの計測、トレースといった手順でおこなった。基本的に遺構内から出土した遺物については出来る限り掲載したが、多量の遺物が出土した遺構については、覆土中出土で同形態の遺物が多い場合、特に縄文土器については状態の良いものを抽出して掲載している。石器・石製品・土製品その他の遺物についてはほとんどすべてを掲載している。

(2) 遺構図面

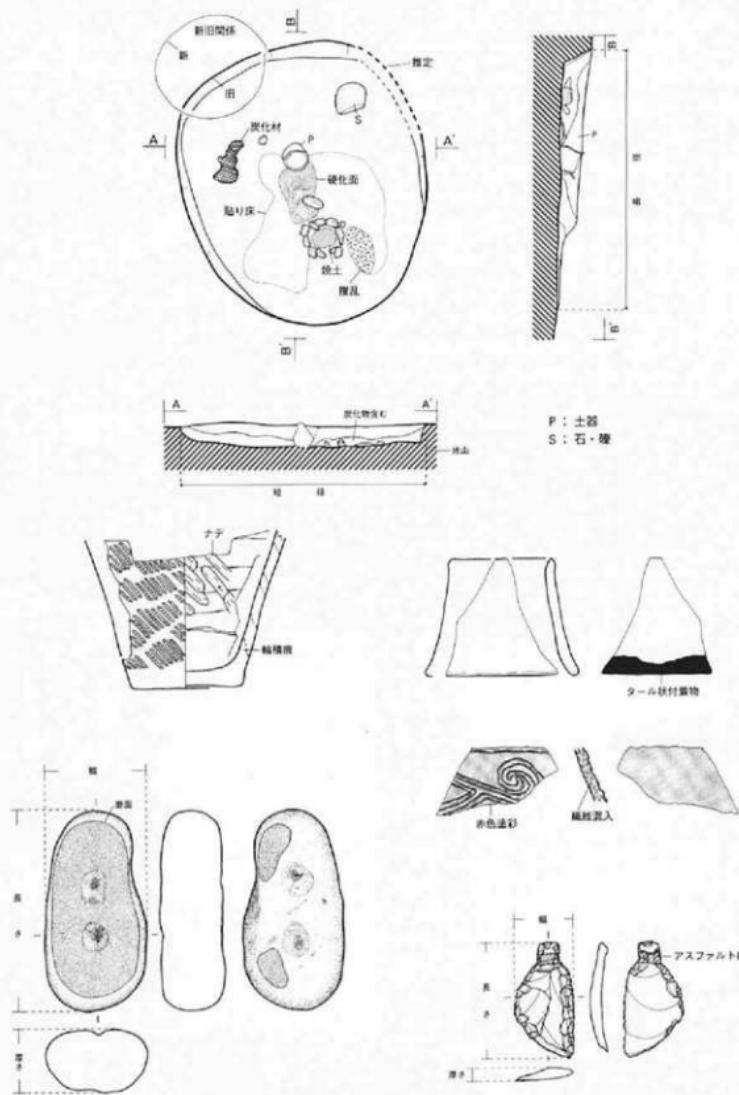
現場で記録した遺構平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認、図面の合成（第2原図の作成）、トレースという手順で進めた。

1. 遺構図の用例は下記の通りである。

- (1) 遺構実測図の縮尺は基本的に竪穴住居跡・掘立柱住物跡・竪穴住居状遺構・工房跡・井戸跡が1/50、土坑・陥落状遺構が1/40、がが1/30、土器埋設遺構が1/20である。ただし、遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。
- (2) 推定線は破線で表記した（これに沿わない場合は挿図中に記した）。
- (3) 層位は基本層序にローマ数字、各遺構覆土にアラビア数字を使用した。これを更に細分した場合は、数字の後に小文字のアルファベットを付けて表記した。
- (4) 土器の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
- (5) 図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。
- (6) 挿図中で使用したスクリーントーンの用例は下図の通りである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。

2. 遺物実測図の用例は下記の通りである。

- (1) 縮尺は土器・砾石器が1/3、古鏡が1/1、そのほかが1/2である。同一図版中に異縮尺の遺物が混在する箇所もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。
 - (2) 土器の実測にあたり、口縁部および底部が1/4以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。
 - (3) 本文および土器観察表「法量」中の（ ）は推定値を、ーは残存値を示している。
 - (4) 遺物中に使用したスクリーントーンの用例は下図の通りである。
3. 遺物写真図版の縮尺は、土器・砾石器が1/3、古鏡が約1/1、そのほかが約1/2になるよう編集している。
4. 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。
5. 引用・参考文献は各章末に記した。

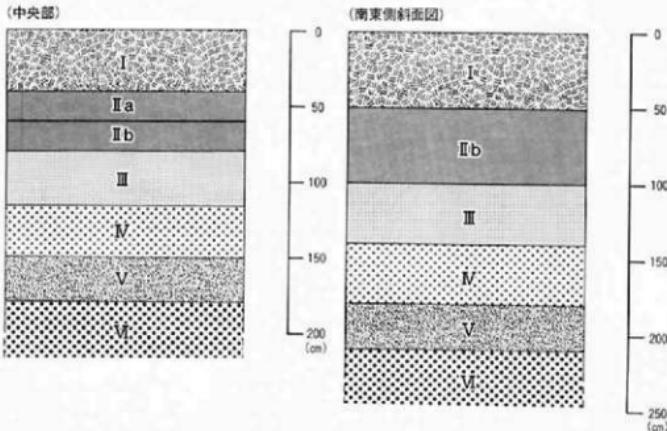


第7図 図版凡例

3. 基本層序

ここでは仁昌寺Ⅱ遺跡の基本層序について記述する。仁昌寺Ⅱ遺跡の調査区は丘陵緩斜面上に位置し、等高線とほぼ並行方向に約145m、斜面方向に最大約65mほどの範囲で設定されている。この調査区の土層を把握するため、斜面方向に沿ったトレンチを3本設定し、そのセクションから基本層序を決定した。

第I層	10YR 3 / 1	黒褐色シルト	粘性やや弱・しまりやや弱	耕作土
第IIa層	10YR 2 / 3	黒色シルト	粘性中・しまり中	
第IIb層	10YR 2 / 2	黒褐色シルト	粘性やや弱・しまり中	To-aブロック25%
第III層	10YR 2 / 1	黒色シルト	粘性中・しまり中	To-Ca 3 %
第IV層	10YR 4 / 4	褐色粘土質シルト	粘性中・しまり中	To-Nb I %以下
第V層	10YR 6 / 6	明黄褐色砂質シルト	粘性やや強・しまりやや強	
第VI層	10YR 7 / 6	明黄褐色粘土	粘性強・しまり強	
第VII層	10YR 7 / 8	黄橙色粘土	粘性強・しまりやや強	埋層



第8図 基本土層柱状図

IV. 検出した遺構と遺構内出土遺物

1. 綱文時代

(1) 壁穴住居跡

1号住居跡

遺構（第9図・写真図版3）

＜位置＞ 調査区西側、斜面上位のIC3-iグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層中で黒色の円形プランとして確認した。プランの北東側に至り削平され、浅くなっている。19号土坑と重複し、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 長径573cm、短径514cmの南西-北東に主軸を持つ梢円形を呈する。

＜埋土＞ 6層からなり、To-Cuをまばらに含む黒色-灰褐色シルト主体で構成される。1・2・4層に炭化物を含む。

＜壁・床＞ 壁高は残存せず、西壁57cm、南壁37cm、東壁30cm、北壁17cmを測る。床はV層黄褐色シルト面まで掘り込まれており、北側部分がやや低くなっている。全体的に緻密で硬く締まり、硬化面は炉の周辺で特に顕著である。貼り床は確認できなかった。

＜柱穴＞ P1-14の14基を検出した。炉を中心とした主軸と対照に廻るP1~6が柱穴を構成すると思われる。

＜炉＞ 北東壁床面に接して複式炉を検出した。石開炉+石圓部+掘り込み部という構造を持つ。石開炉は長径70cm×短径45cmの長方形で、底面に焼土は認められない。石圓部は80×55cmの長方形である。掘り込み部は100×90cmの梢円形基盤を呈する。

＜周溝＞ 南半部の隙縫を中心として廻る。南西側壁付近の溝内で小形の柱穴が多数認められる。

遺物（第10・11図・写真図版71）

＜検出状況＞ 炉・床面・柱穴・埋土からの出土である。

＜土器＞ 11点出土している。1は、炉および床面から出土した深鉢土器片である。3は住居内の柱穴P1から出土した深鉢土器片である。

＜土製品＞ 2点出土した。2は炉内から出土した赤色塗彩のミニチュア形土器で、胎土に海綿骨針を含む。13は土製円盤で胎土に金芸母が混入する。

＜石器＞ 8点が出土した。14-17はスクレイバー類、18はリタッヂド・フレイク、19はユーズド・フレイクである。20の磨製石器は磨製石斧から転用されたものと考えられる。21は漆材礫である。

遺構の時期

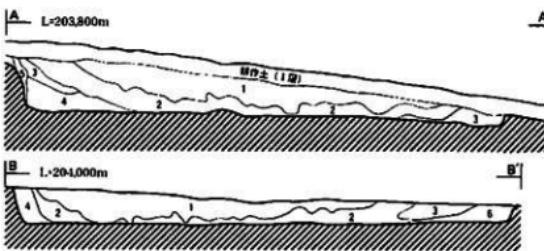
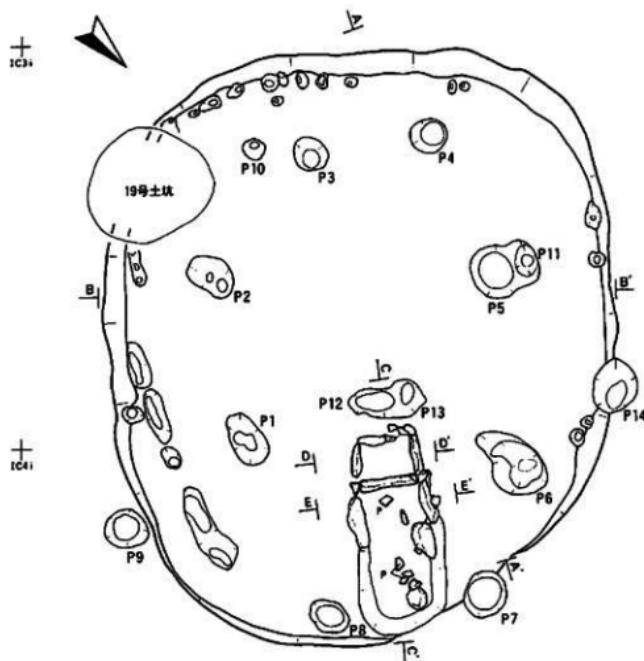
出土した遺物から縄文時代中期末葉-後期初頭と考えられる。

2号住居跡

遺構（第12・13図・写真図版4）

＜位置＞ 調査区北西側、斜面中位のIC6-jグリッドに位置する。

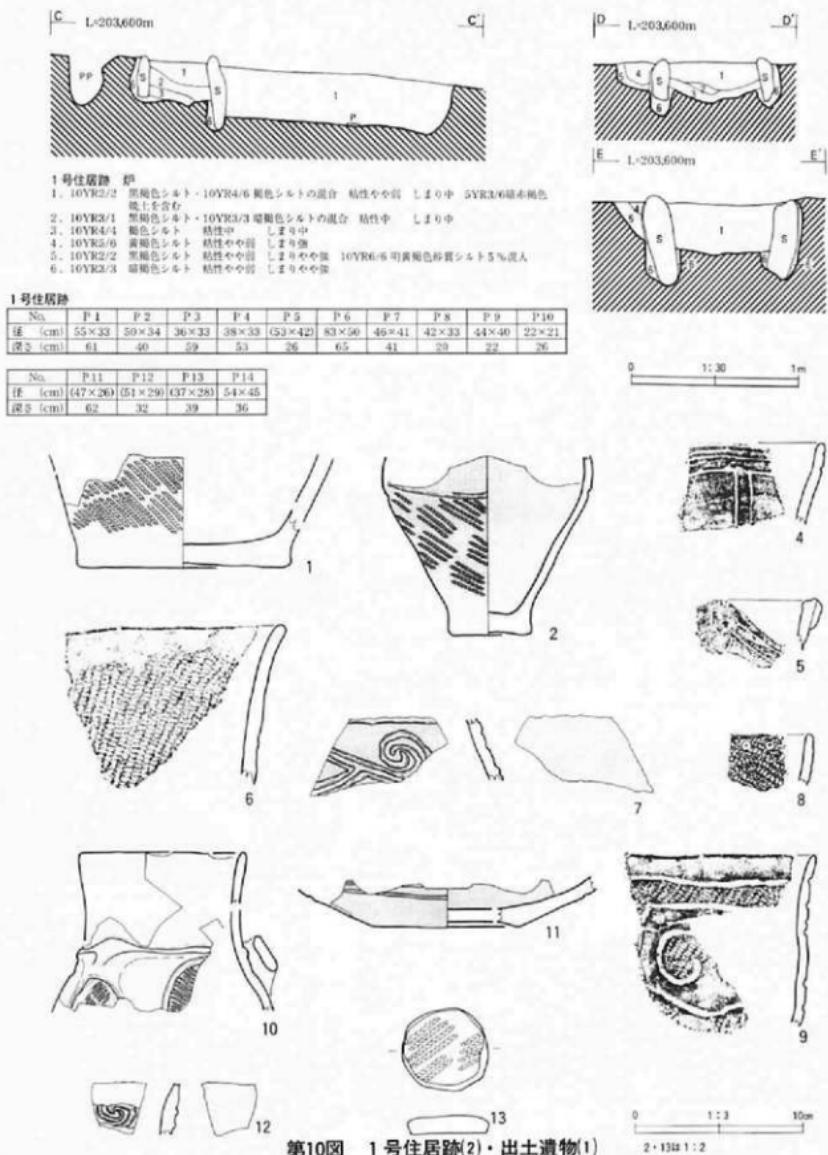
＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層中で黒色の梢円形プランとして検出した。南東側で3号住居跡と重複し、これを切っている。また、斜面下方を削平されており、プランの北側は残存しない。

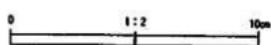
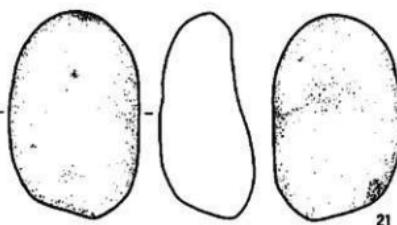
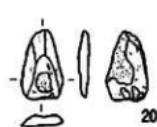
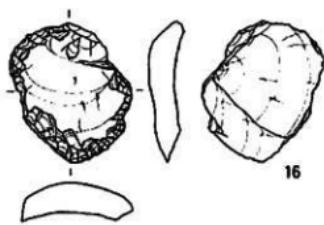
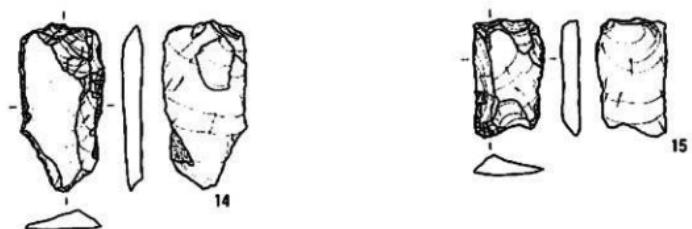


- 1号住居跡
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中 残れ物粒1%、To Cu 2%混入
 2. 10YR4/2 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 残れ物粒1%以上、To Cu 2%混入
 3. 10YX3/1 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 To Cu 1%混入
 4. 10YR4/2 黄褐色シルト・10YR4/4 黑褐色シルトの混合 粘性中 しまり中 残れ物粒混入
 5. 10YR4/4 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 10YR3/1 黄褐色シルト少量混入
 6. 10YR2/1 黑色シルト 粘性中 しまり中 10YR6/8 明黄褐色シルトプロック混入

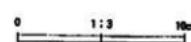
第9図 1号住居跡(1)

0 1:50 2m





第11図 1号住居跡出土遺物(2)



<規模・形状> 長径900cm、短径-465cmのはば楕円形を呈する。斜面下方を削平されているため、短径は残存値である。主軸方向は東-西である。

<埋土> 7層からなり、To-Cuをまばらに含む黒色-暗褐色シルトを主体として構成される。3層に少量の炭化物を含む。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁28cm、西壁18cm、南壁51cmを測る。床はV層黄褐色シルト面まで掘り込まれている。全体的に緻密で硬く締まる。貼り床は認められなかった。

<柱穴> 炉を中心とした主軸の南側にP 2-4・5・7の本の柱穴を確認したことから、おそらく8本の柱が規則的に廻るものと考えられる。

<炉> 東側床面に接する複式か1基と、西側の床面中央部で地床炉2基を検出した。複式かは、燃焼部と掘り込み部から構成されている。燃焼部は長径140×短径100cmの長方形で、底面に淡い焼土が90×70cm・厚さ9cmの範囲で認められる。複式炉を構成したと見られる理は燃焼部中央の1点が認められるのみで大部分が失われており、抜き取り痕が見られる。このことから石闇炉と掘り込み部などの施設からなる複式炉の可能性がある。掘り込み部は150×130cmの不整楕円形基準を呈する。西側の地床かは、西壁付近と床面中央部で見つかっており、規模はそれぞれ①40×35cm・厚さ6cm、②90×58cm・厚さ6cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は不良である。

<周溝> 認められなかった。

遺物（第14図・写真図版72）

<検出状況> 墓土からのみ出土している。

<土器> 12点出土している。28は墓土下位から出土した深鉢形土器破片で、大木10式である。

<土製品> 1点出土している。34は墓土上位から出土したミニチュア形土器で、中期に相当するものと思われる。

<石器> 1点のみ出土している。35は円錐で、卵形に研磨されている。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

3号住居跡

遺構（第15図・写真図版5）

<位置> 洞壳区北西側、斜面中位の1C 6 hグリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 墓土除去後のⅢ層上位面で黒色の円形プランとして検出した。北西側で2号住居跡と重複し、これにより切られる。

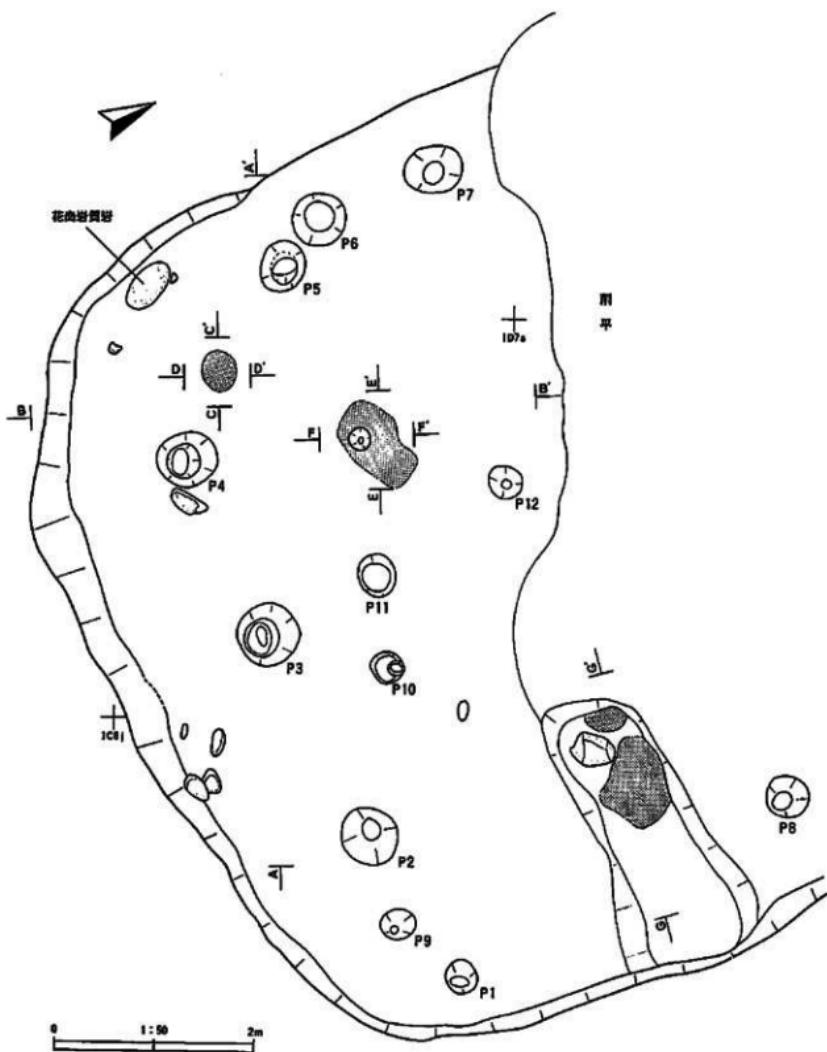
<規模・形状> 長径-560cm、短径-492cmのはば円形を呈する。北西側を2号住居に切られているため、長径は残存値である。主軸方向はほぼ東-西である。

<埋土> 6層からなり、To-Cuをまばらに含む黒色-暗褐色シルト主体で構成される。

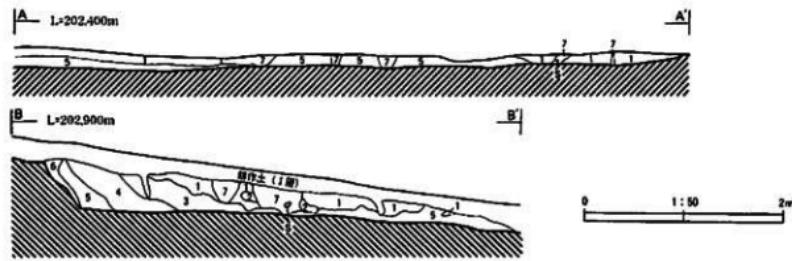
<壁・床> 壁高は残存値で、東壁3cm、西壁30cm、南壁20cm、北壁6cmを測る。床面はV層上面の黄褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体に凹凸が認められ、東側の周溝付近に至ってややせり上がるような様相を呈する。全体にやや硬くしまり、炉周辺で硬化面が認められる。

<柱穴> 炉を中心とした主軸と対象に廻るP 1-7の7本が主柱穴を構成していたと思われる。

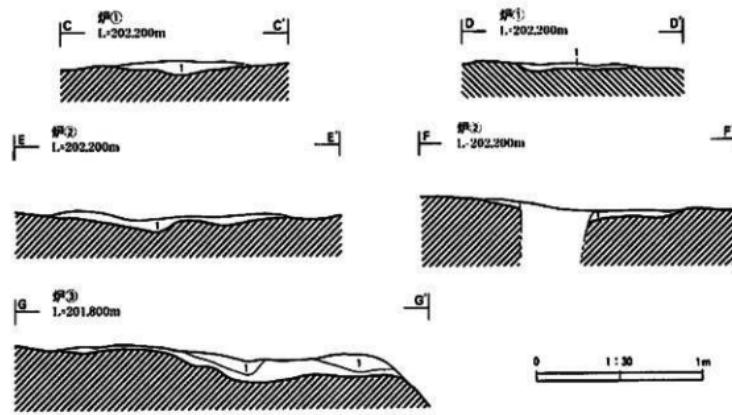
<炉> 東壁に接して複式炉を検出した。石闇炉+石闇部+掘り込み部という構造を持つ。石闇かは長径



第12圖 2号住居跡(1)



- 2号住居跡**
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中
 2. 10YR2/1 黒褐色シルト・10YR2/6 黄褐色シルトの混合 粘性中 しまりなし
 3. 10YR3/2 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 To Cu, 水化物各1%混入
 4. 10YR3/3 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 To Cu 1%, 黄褐色シルト粒2%混入
 5. 10YR3/3 黄褐色シルト・10YR2/1 黑色シルト・10YR4/6 黄褐色シルトの混合 粘性中 しまり中
 6. 10YR4/6 黑色シルト 粘性中 しまり中 10YR3/3 黄褐色シルト混入
 7. 10YR2/1 黑色シルト 粘性中 しまりなし 物質痕 残瓦



- 2号住居跡 層①・②・③**
1. 10YR4/6 黑褐色土 粘性中 しまり強 SYR4/8 黄褐色土ブロック 2%混入
 2. 10YR5/3 に上る黄褐色シルト 粘性中 しまり強

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
幅 (cm)	36×31	57×56	62×51	61×54	50×45	57×55	60×48	46×45	35×31	36×23
深さ (cm)	96	92	97	58	96	(60)	(90)	(90)	60	42

No.	P11	P12
幅 (cm)	43×38	37×32
深さ (cm)	36	28

第13図 2号住居跡(2)

68×短径46cmの長方形である。底面に焼土はほとんど認められず、赤褐色焼土が点在する。がに使用された壁は石頭が部分が残存する他、多くが失われており、内部には抜き取り痕が見られる。掘り込み部は150×120cmの不整な梢円形基調を呈し、石頭部の高さに比べ約16cmほど深く掘り込まれている。

＜周溝＞ 南西部と北東部の壁際を中心として巡る。二重に巡ることから少なくとも一回の拡張が行われたものと考えられる。

遺物（第16・17図・写真図版7・73）

＜検出状況＞ 床面と埋土からの出土である。

＜土器＞ 3点出土した。37～39は埋土から出土した深鉢形土器である。

＜土製品＞ 4点出土している。36は床面から出土したミニチュア形土器である。40は埋土から出土したミニチュア形土器である。41は埋土から出土した土製円盤である。42は埋土から出土した焼成粘土塊である。

＜石器＞ 7点出土した。43は床面から出土した石鏃である。44は石匙で床面から出土した。45はスクレイバー類で炉内より出土している。46は床面出土の門石である。47～49は床面より出土した蓋容器類である。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

4号住居跡

遺構（第18図・写真図版6）

＜位置＞ 調査区北西側、斜面中位 I C 7 h グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ IV層面で石頭が検出し、周辺から黒褐色の淡く不整形なプランを確認した。西側で3号住居跡と重複し、これを切る。

＜規模・形状＞ 長径（395）cm、短径（367）cmのほぼ円形を呈する。確認した時点ですでに床面近くであり、規模はいずれも推定値である。主軸方向は東～西である。

＜埋土＞ Te-Cuを含む少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、北東壁2cm、南西壁10cm、北西壁2cm、南京壁2cmを測る。床面はIV層上面の暗褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に半坦で、硬化面・貼り床は特に認められなかった。

＜炉＞ 床面東寄りのところで石頭が検出した。炉は長径66×短径50の長方形で、焼土はほとんど認められず、40×32cmの範囲で淡い赤色を呈する範囲を認めるのみである。

＜周溝＞ 認められなかった。

遺物

＜検出状況＞ 出土遺物はない。

遺構の時期

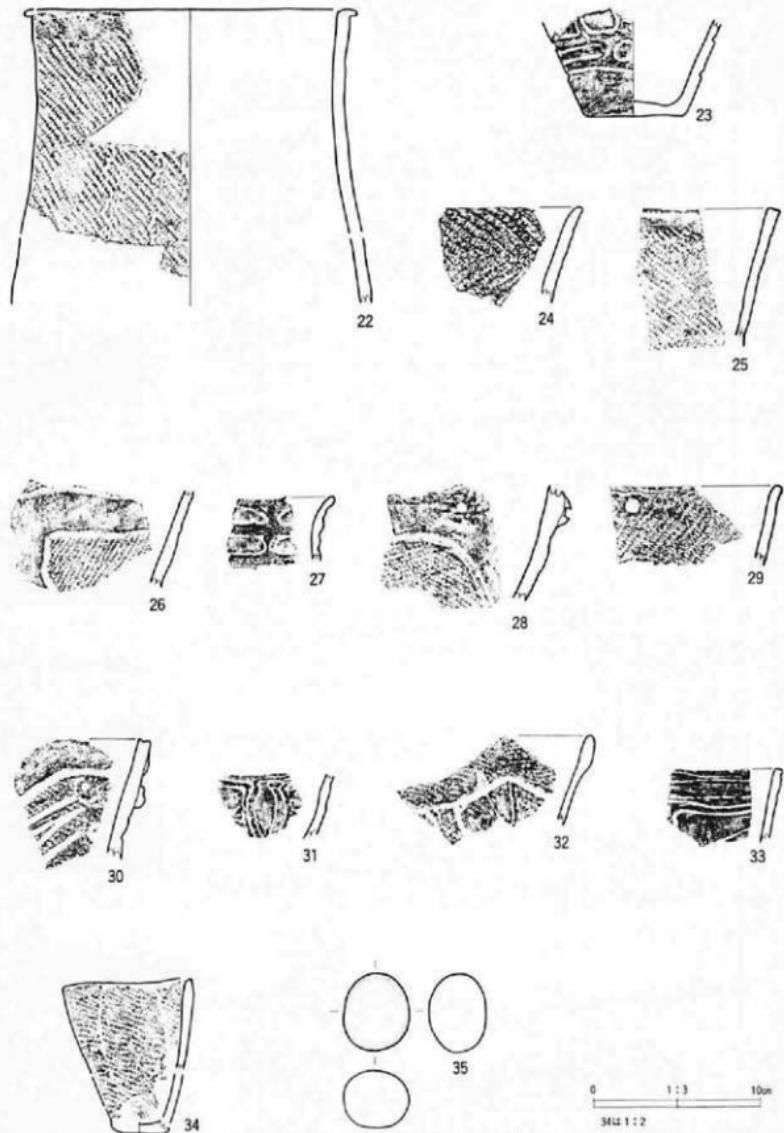
出土遺物がなく詳細は不明であるが、周辺の遺構の時期から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

5号住居跡

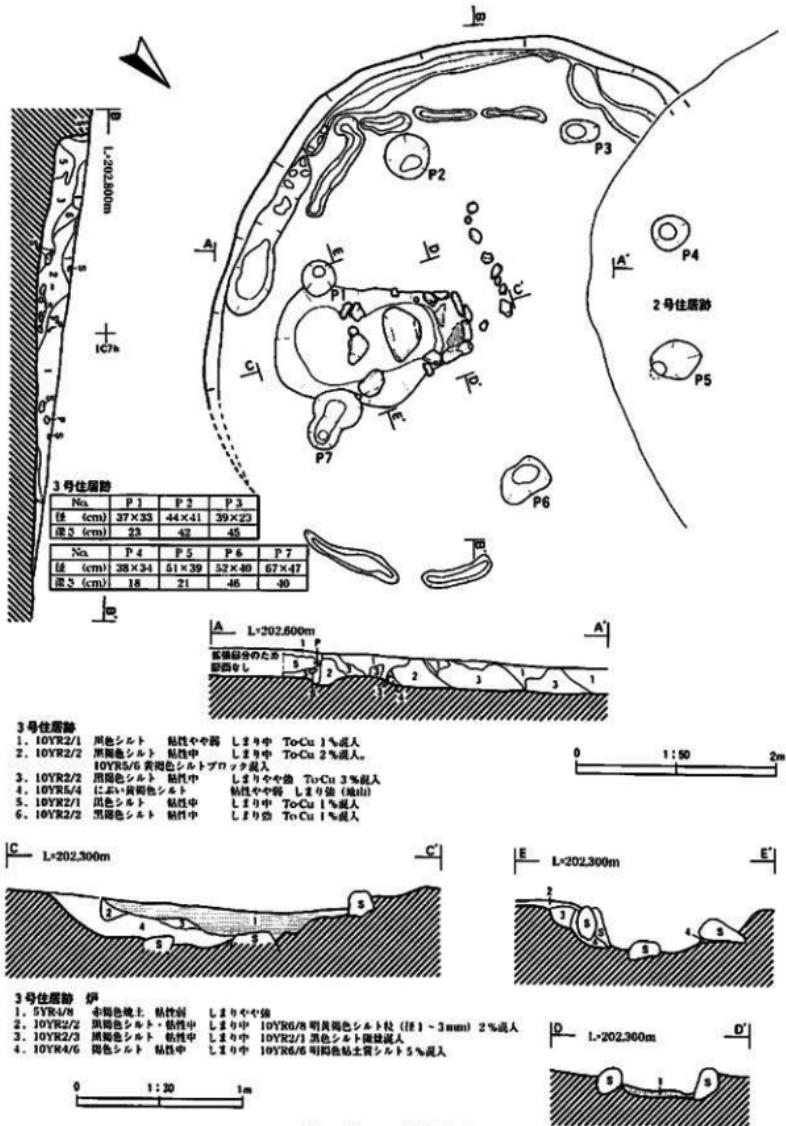
遺構（第19図・写真図版7）

＜位置＞ 調査区西側、斜面中位の I C 3 g グリッドに位置する。

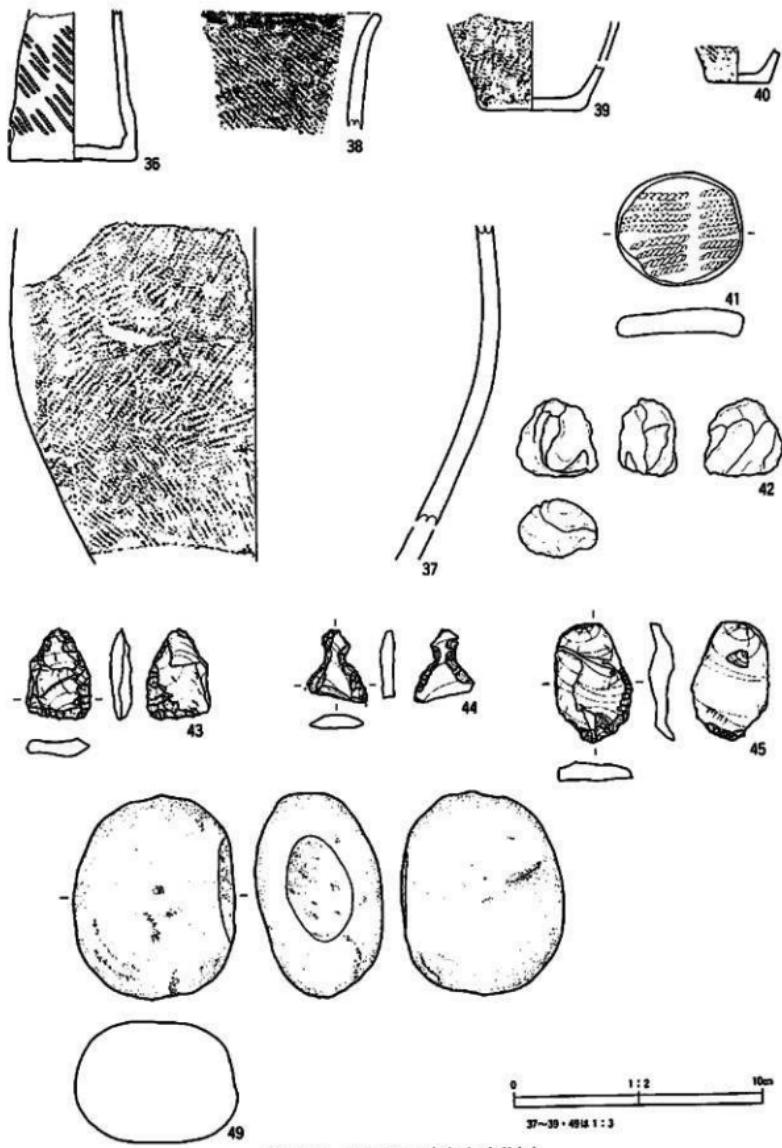
＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のII層上位面で、炭化物の混入する黒色の円形プランとして検出し



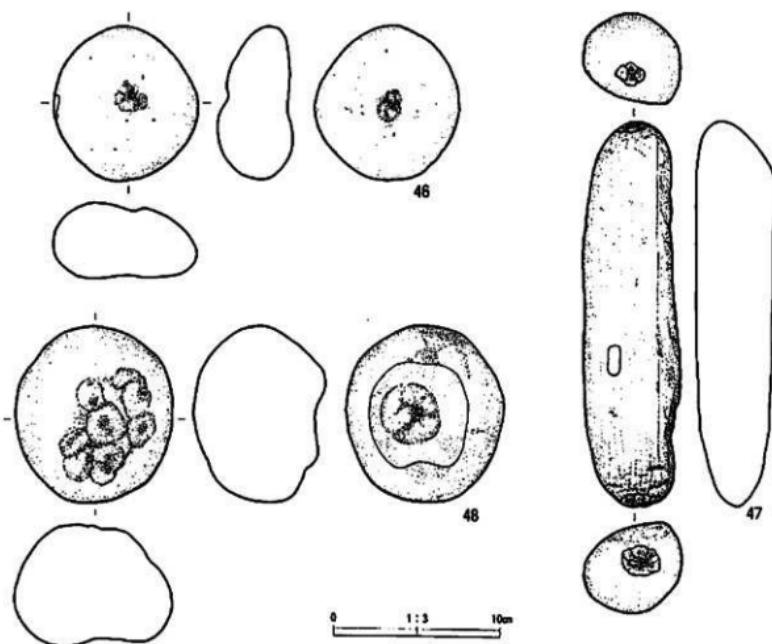
第14図 2号住居跡出土遺物



第15図 3号住居跡



第16圖 3號住居跡出土遺物(1)



第17図 3号住居跡出土遺物(2)

た。南西側で近世～近代の墓壙2基と重複し、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 長径315cm、短径276cmのやや指円形を呈する。主軸方向は南西～北東である。

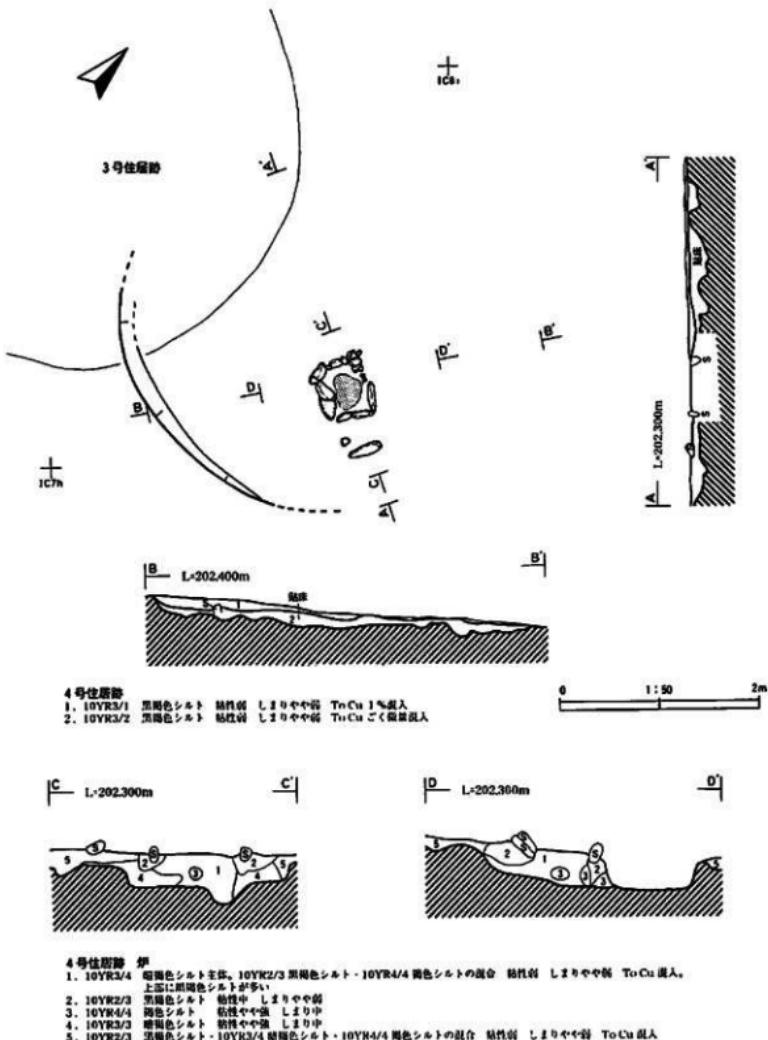
＜埋土＞ 5層からなり、To-Cuを少量含む黒色～黒褐色シルト主体で構成される。全体に炭化物・焼土ブロックを含む。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁2cm、西壁32cm、南壁20cm、北壁20cmを測る。床面は壁上面の黒褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。炉の周囲およそ100×170cmの範囲で貼り床されている。床面は全体的に平坦で、それほど硬く締まらないが、炉周辺に硬化面が認められる。床面上には炭化材が南壁際を中心として多量に認められる。また、南西壁付近から33cm×37cmの扁平な環が床面に落下したような様相で検出されている。焼失住居である。

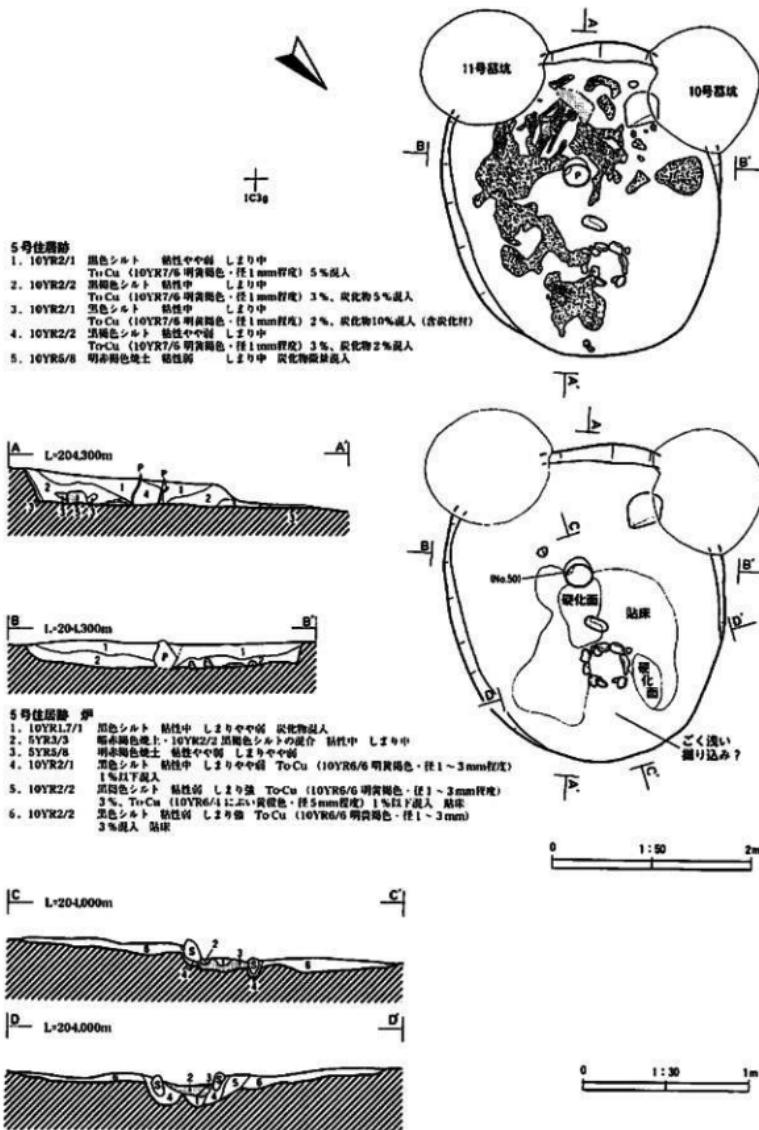
＜柱穴＞ 認められなかった。

＜炉＞ 東壁に接して石圓炉を検出した。炉は長径47×短径46cmの扇円形を呈するが、焼土はほとんど確認されなかった。炉にはごく浅い掘り込み部が付属しており、燃焼部より最深で約5cmほど低くなっている。この浅い掘り込み部分では貼り床が途切れしており、石圓炉+ごく浅い掘り込み部で構成される複式炉とも捉えられる。焼土はほとんど観察できなかった。

＜周溝＞ 確認できなかった。



第18図 4号住居跡



第19図 5号住居跡

遺物（第20図・写真図版73）

＜検出状況＞ 床面から埋土にかけて出土している。

＜土器＞ 4点が出土した。50は床面から出土した深体形土器で、大木10式の特徴を持つ。

＜土製品＞ 1点が出土した。54は埋土から出土したミニチュア形土器で、外面のミガキが顕著である。内面にタール状付着物が認められる。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

6号住居跡

造構（第21図・写真図版8）

＜位置＞ 調査区西側、斜面中位のT C 4 h グリッドに位置する。

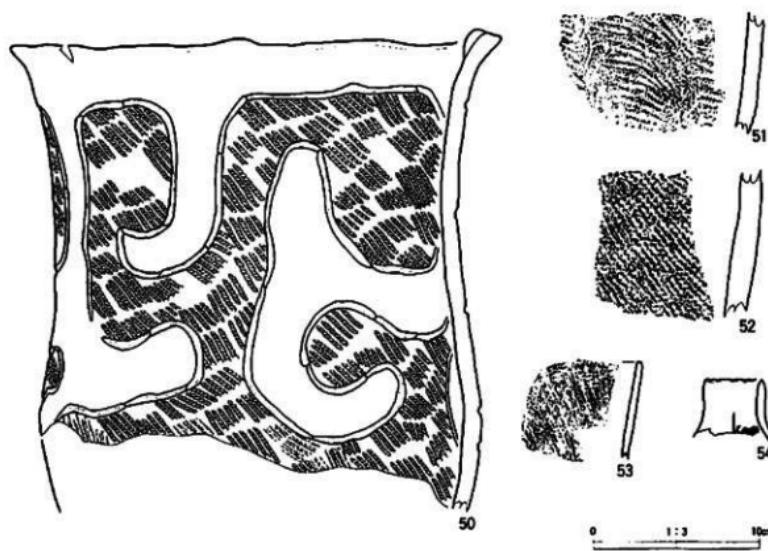
＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅡ層上位面で、炉と思われる焼土を確認し、周辺から淡い黒色の円形プランを検出した。

＜規模・形状＞ 長径360cm、短径356cmのはば円形を呈する。主軸方向は南西～北東である。

＜埋土＞ 3層からなり、To-Cu・炭化物をごく少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存高で、東壁2cm、西壁18cm、南壁10cm、北壁5cmを測る。床面は田畠上面の黒褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平滑で、硬化面は特に認められなかった。

＜柱穴＞ P 1～7の7基の柱穴を確認した。P 1～6が主柱穴を構成する可能性がある。



第20図 5号住居跡出土遺物

＜炉＞ 北東壁付近から焼土を検出した。地床炉と思われるが、上部を削平されたその他の炉であった可能性もあり、詳細は不明である。長径59×短径38cm・厚さ2cmの範囲で現地性の焼土を確認した。

＜周溝＞ 確認できなかった。

遺物（第21図・写真図版74）

＜検出状況＞ 墓土からのみ出土した。

＜土器＞ 1点が出土した。55は墓土から出土した深鉢形土器片で磨消し縦文が認められる。大木10式に位置付けられるものである。

＜土製品＞ 1点が出土した。56はミニチュア形土器の底部である（写真のみ掲載）。

＜石器＞ 1点が出土した。57は完形の磨製石斧で、両凸刃を呈する。

＜石製品＞ 1点が出土した。58は有孔石製品である。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

7号住居跡

造構（第22図・写真図版9）

＜位置＞ 調査区西側、斜面中位のI C 5 g グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅡ層上位面で、がと思われる焼土を確認し、周辺から淡い黒色の円形プランを検出した。8号住居跡と重複し、この上位に位置する。

＜規模・形状＞ 長径444cm・短径347cmのやや指円形を呈する。主軸方向は南西—北東である。

＜埋土＞ 4層からなり、To-Cu・炭化物を含む少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存高で、東壁2cm、西壁36cm、南壁12cm、北壁13cmを測る。床面はⅢ層上面の黒褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められない。

＜柱穴＞ P 1～7の7基の柱穴を確認した。これらが主柱穴を構成していた可能性がある。

＜炉＞ 東側中央のやや壁に近いところから石窯炉を検出した。炉は長径50×短径29cmのはば方形を呈する。焼土はほとんど認められなかった。

＜周溝＞ 確認できなかった。

＜その他＞ 東側床面で埋設土器を確認した（60）。当初この土器は、下位に位置する8号住居跡の埋土掘削時に確認されたもので検出レベルから本住居跡に伴うものと判断した。土器は北側に傾くように倒立の状態で埋設されており、土器の両端部は欠損している。埋土は黒色土主体でしまりはない。

遺物（第23図・写真図版74）

＜検出状況＞ P 1、埋土から出土している。

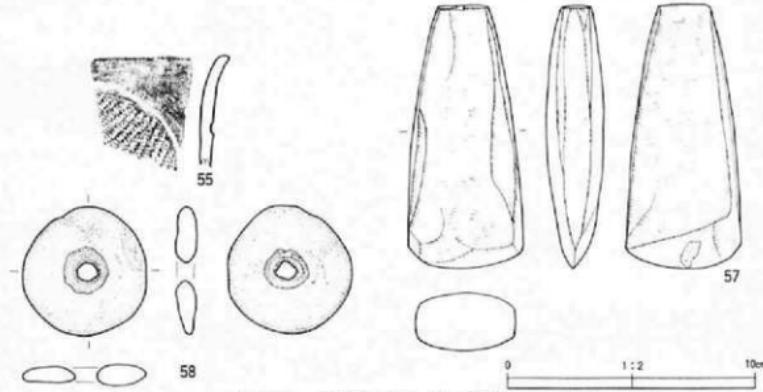
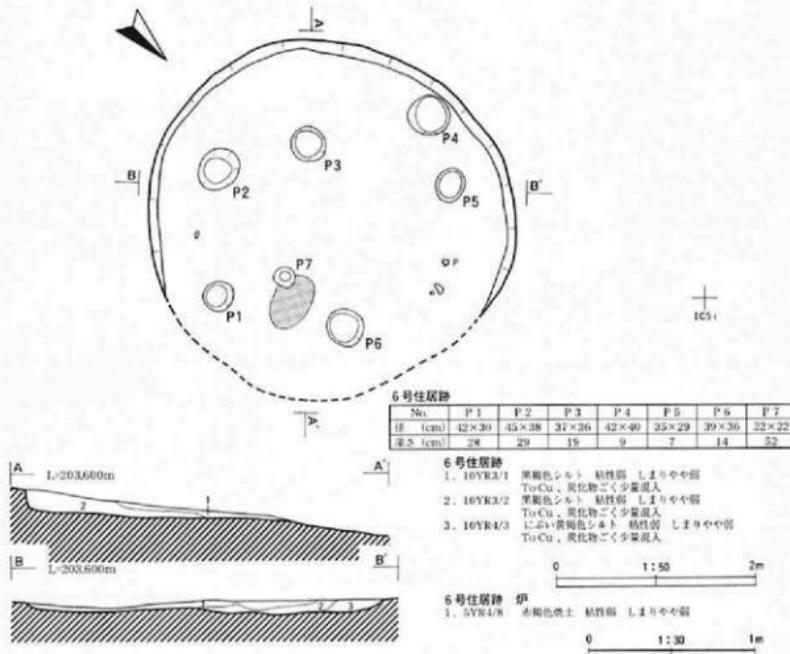
＜土器＞ 5点出土した。59は住居内土坑P 1から出土した深鉢形土器片で、腹部に原体の縱回転文様が施文される。63は埋土から出土した深鉢形土器片で、外面赤色施彩される。

＜土製品＞ 1点出土した。64は床面から出土した斧形土製品で上部に穿孔を持つ。

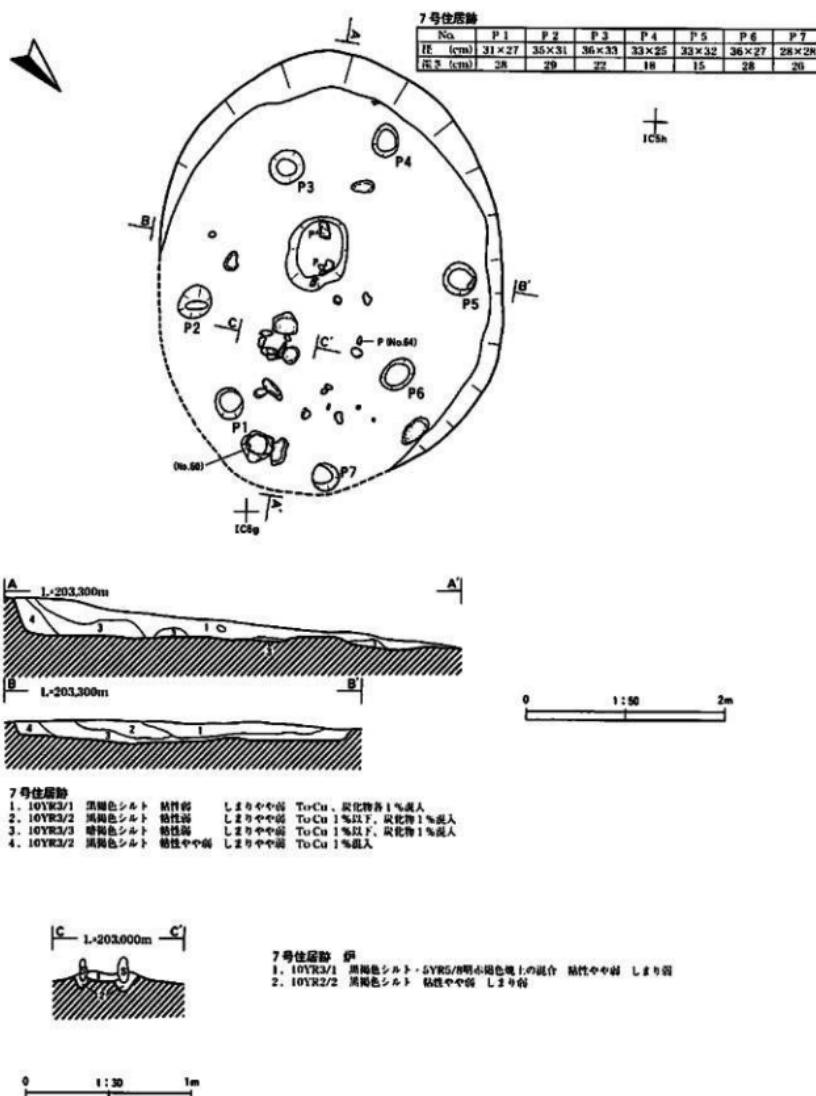
＜石器＞ 4点出土した。65・66は埋土から出土した石鏃である。67は石點で椎形を呈する。68は尖頭器で、両側縁に二次加工を持つ。

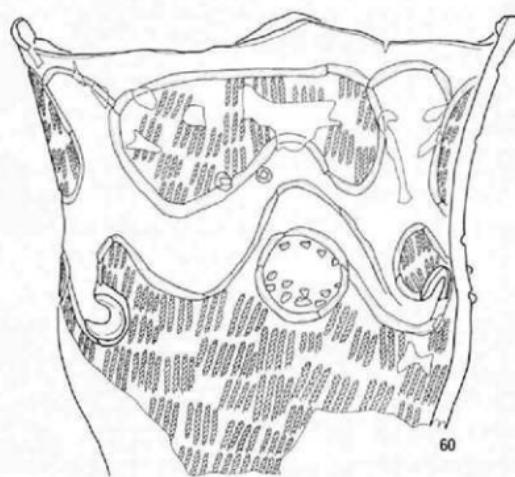
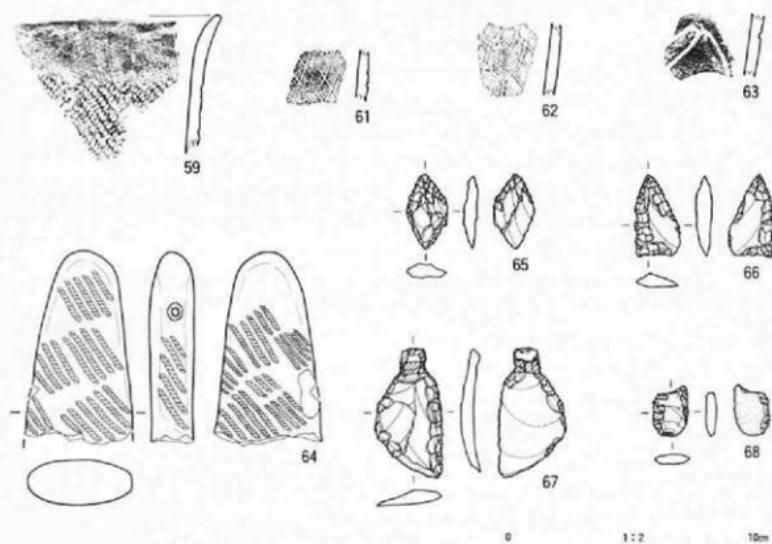
造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。



第21図 6号住居跡・出土遺物





第23図 7号住居跡出土遺物

8号住居跡

遺構（第24図・写真図版10）

＜位置＞ 調査区西側、斜面中位のIC 5 g グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 7号住居跡の完掘終了後、貼り床確認の作業をしていたところ複式炉を検出した。

7号住居跡と上下の重複関係にあり、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 長径358cm、短径320cmのやや梢円形を呈する。主軸方向はほぼ南一北である。

＜埋土＞ To-Cuをわずかに含む黒褐色シルトの単層で構成される。上位に7号住居が構築されていることから人為堆積の可能性がある。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁6cm、西壁10cm、南壁16cm、北壁15cmを測る。床面はⅢ層上面の黒褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。

＜柱穴＞ 認められない。

＜炉＞ 北壁に接して複式炉を検出した。土器裡設炉+石圓部+掘り込み部という構造を持つ。土器裡設炉は併27cmの深鉢形土器を正立の状態で埋設している。石圓部は長径48×短径40cmの方形である。掘り込み部は73×66cmの梢円形基盤で燃焼部より8cmほど深く掘り込まれている。

＜周溝＞ 確認できなかった。

遺物（第25図・写真図版74・75）

＜検出状況＞ 炉、床面、埋土より出土した。

＜土器＞ 6点が出土している。69、70、71の深鉢形土器は炉の埋設土器である。内面に焼け弾けの痕が観察される。大木10式に位置付けられるものである。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

9号住居跡

遺構（第26・27図・写真図版11）

＜位置＞ 調査区北側、斜面中位のIC 9 i グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層上位で、黒褐色の円形プランとして確認した。西側を中世の堅穴造物跡2棟（5・6号堅穴造物跡）と重複し、これにより切られる。

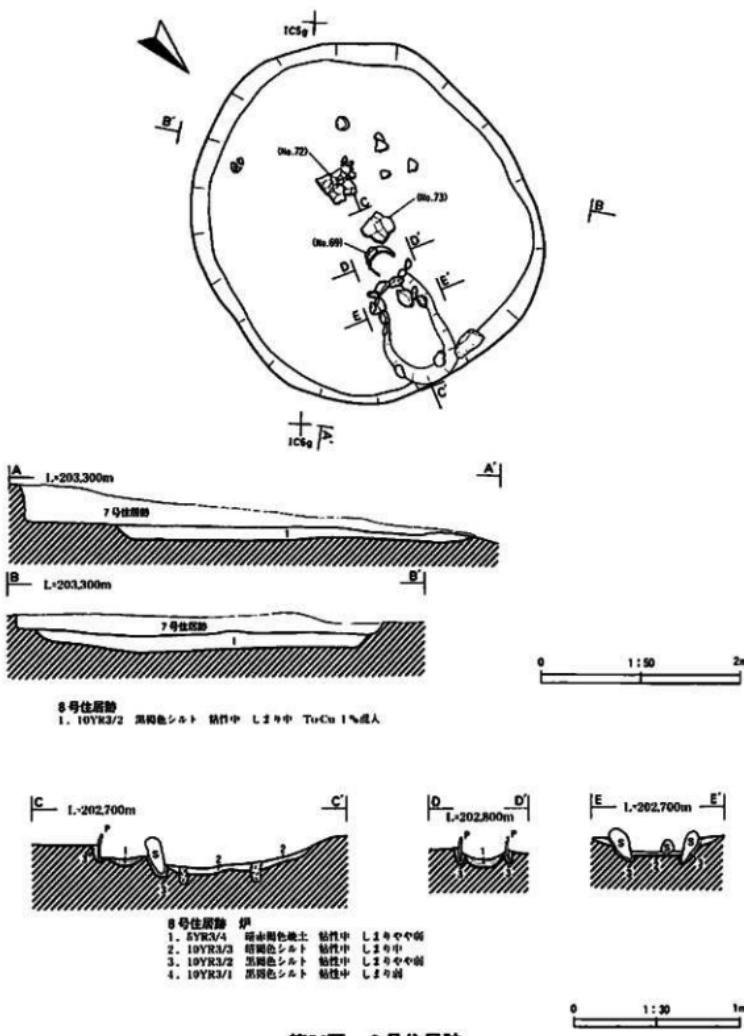
＜規模・形状＞ 長径620cm、短径567cmのほぼ円形を呈する。主軸方向は東一西である。

＜埋土＞ To-Cuを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

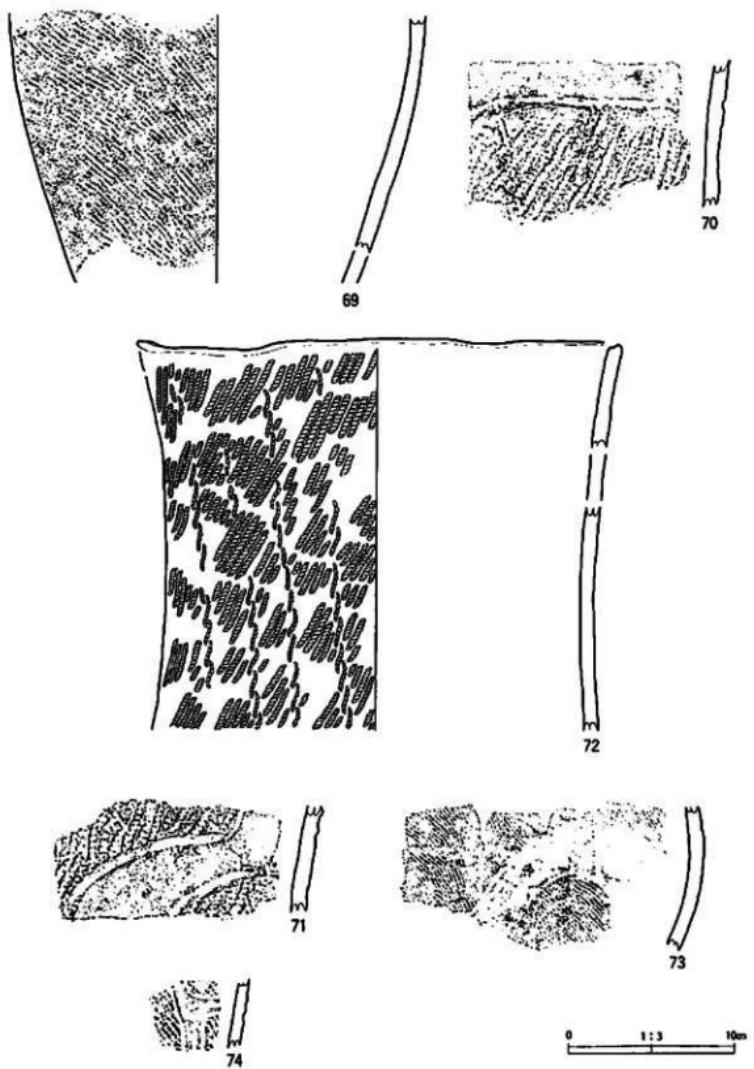
＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁3cm、西壁40cm、南壁18cm、北壁10cmを測る。床面はV層の黄褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で、やや締まっている。貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ P 1～11の11本基の柱穴を確認した。P 1～3・5・8～10が主柱穴を構成していた可能性がある。

＜炉＞ 東壁に接して複式炉を検出した。石圓炉+石圓部という構造を持つ。石圓炉は長径65×短径60cmの方形で、底面に焼土は認められなかった。石圓部は長径110cm×短径60cmの長方形で、石圓部より15cmほど低く掘り込まれている。



第24図 8号住居跡



第25図 8号住居跡出土遺物

＜周溝＞ 南側壁付近から 2 条の周溝を確認した。

遺物（第27図・写真図版75）

＜検出状況＞ 炉、床面、埋土から出土している。

＜土器＞ 6点出土した。75は炉内出土の土器で、格状体文様が施文される。外面には炭化物が付着する。

76は埋土下部～床面出土の深鉢形土器片で、山形口縁を呈する。大木10式に相当すると考えられる。

＜土製品＞ 81の土製円盤が 1 点出土した。

＜石器＞ 5点出土した。82はユーズド・フレイク、83はスクレイバー類で埋土より出土している。85は磨製石斧で、床面から出土した。86は円環で埋土 1 層から出土した。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

10号住居跡

遺構（第28図・写真図版12）

＜位置＞ 調査区北西隅、斜面中位の I C 9 g グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層上位で、黒褐色の円形プランとして確認した。西側で14号土坑と重複し、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 長径362cm、短径360cmのはば円形を呈する。主軸方向は東～西である。

＜埋土＞ 4 層からなり、To-Cu をまばらに含む黒褐～暗褐色シルト土体で構成される。

＜壁・床＞ 整高は残存値で、東壁 6 cm、西壁 4 cm、南壁 4 cm、北壁 8 cm を測る。床面は V 層の黄褐色シルト面まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で、やや縮まる。貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ 炉を中心とした主軸と対象に P 1 ～ 5 の 5 基の柱穴を検出した。これらが主柱穴を構成していた可能性がある。

＜炉＞ 北壁に接して複式炉を検出した。石圓炉+石圓部という構造を持つ。石圓炉は長径50cm×短径45cm の梢円形で底面に焼土はほとんど認められなかった。石圓部は長径68cm×短径57cm の梢円形で、石圓炉とレベルをほぼ同じくする。

＜周溝＞ 西側壁際を中心として廻る。

遺物（第29図・写真図版75・76）

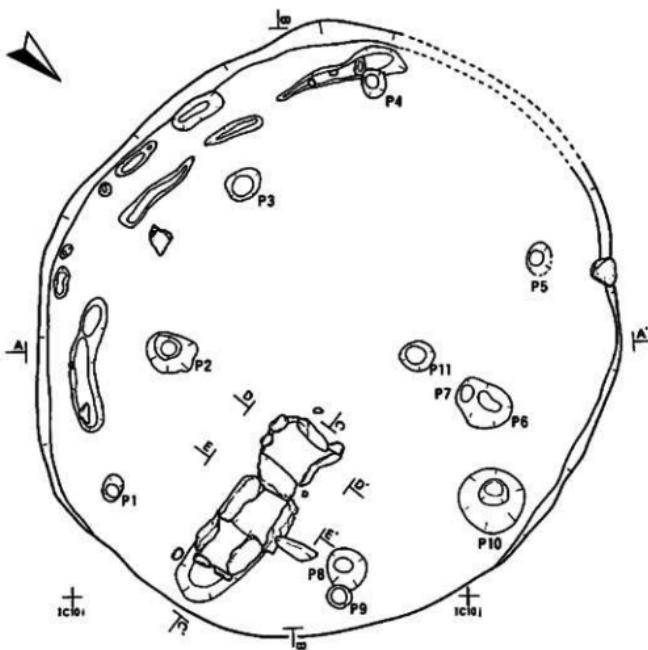
＜検出状況＞ 床面および埋土から出土している。

＜土器＞ 5点出土した。87～90は床面から一括出土した中形の深鉢形土器である。大木10式に位貫付けられる特徴を持つ。

＜石器＞ 3 点が出土した。92はスクレイバー類で、埋土から出土した。93・94はフレイクで、床面一括土器87～90とともに出土したものである。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。



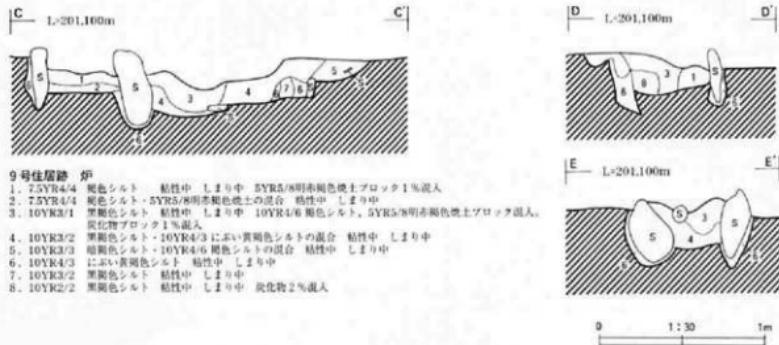
- 9号住居跡
1. 10YR5/2 暗褐色シルト 粒状構造 しまり中 To Cu (10YR7/6 明黄褐色・径1~5mm程度) 5%混入
 2. 10YR2/5 暗褐色シルト 粒状やや粗 しまり中 To Cu (10YR7/6 明黄褐色・径1~3mm程度) 5%混入
 3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粒状やや粗 しまり中 10YR5/6 明黄褐色シルト 5%混入
 4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粒状中 しまりやや粗 To Cu (10YR7/6 明黄褐色・径1mm程度) 2%混入
 5. 10YR5/6 青褐色シルト 粒状中 しまり中

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
幅 (cm)	27×20	51×40	37×30	30×24	33×24	(48×30)	(34×18)	48×40	25×25	66×65
奥行 (cm)	30	72	57	32	31	35	29	66	14	68

0 1:50 2m

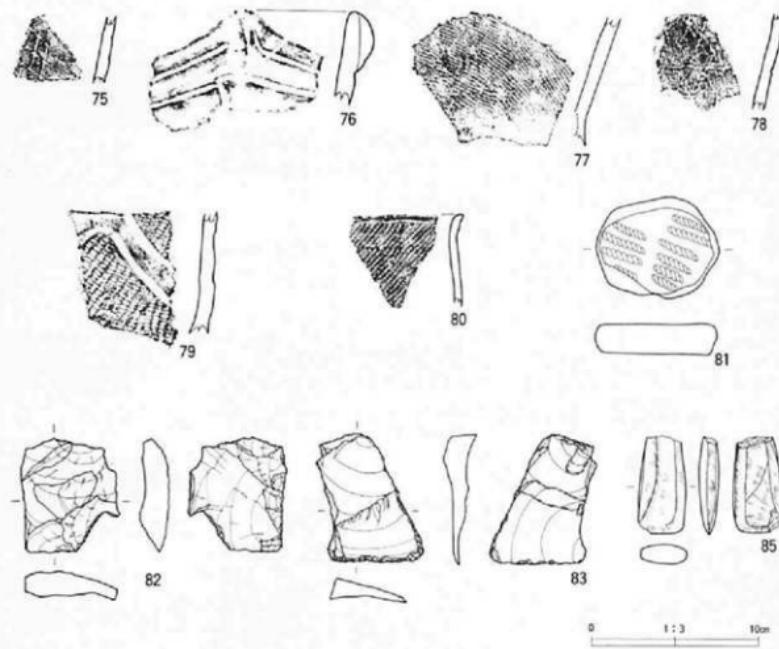
No.	P 11
幅 (cm)	35×29
奥行 (cm)	59

第26図 9号住居跡(1)

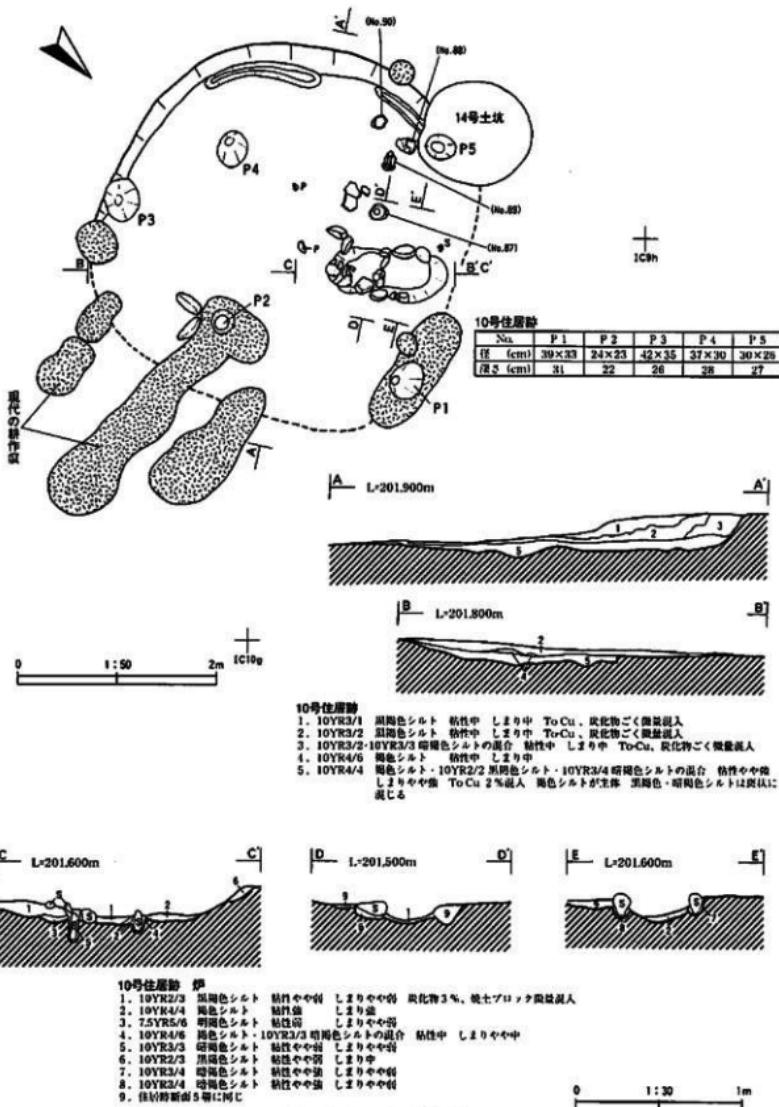


9号住居跡 炉

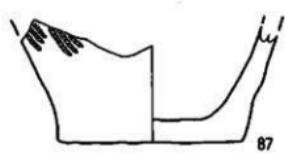
1. 7SYR4/4 黒褐色シルト 粘性中 し上り中 5YR5/8明赤褐色焼土ブロック1%混入
2. 7SYR4/4 黒褐色シルト 5YR5/8明赤褐色焼土の混合 粘性中 し上り中
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 し上り中 10YR4/6 黑褐色シルト 5YR5/8明赤褐色焼土ブロック混入。炭化物ブロック1%混入。
4. 10YR3/2 黒褐色シルト・10YR4/3 に赤い黄褐色シルトの混合 粘性中 し上り中
5. 10YR4/3 黑褐色シルト・10YR4/6 黑褐色シルトの混合 粘性中 し上り中
6. 10YR4/3 に赤い黄褐色シルト 粘性中 し上り中
7. 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性中 し上り中
8. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 し上り中 炭化物2%混入



第27図 9号住居跡(2)・出土遺物



第28図 10号住居跡



87



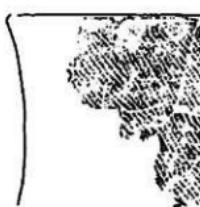
88



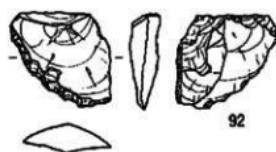
89



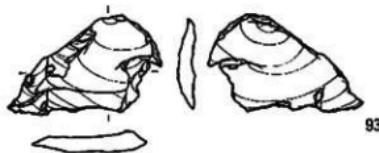
90



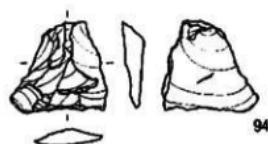
91



92



93



94



第29図 10号住居跡出土遺物

11号住居跡

遺構（第30図・写真図版13）

＜位置＞ 調査区北西側、斜面中位のIC 8 e グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層上位で、黒褐色の円形プランとして確認した。12・13号住居跡と上下の重複関係にあり、これらを切る。

＜規模・形状＞ 長径410cm、短径354cmのはば円形を呈する。主軸方向は南西-北東である。

＜埋土＞ 5層からなり、To-Cuをまばらに含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁2cm、西壁16cm、南壁16cm、北壁4cmを測る。床面は12号住居を埋めて構築されている。床面は全体的に平坦であるが、とくに締まるものではない。明確な貼り床は認められなかつた。

＜柱穴＞ P 1～8 の、不規則な配置をなす8基の柱穴を検出した。

＜炉＞ 北東側の床面の、壁に近い場所から焼土を検出した。規模は長径52×短径(31)cmの梢円形を呈する。短径は新期の土坑に切られているため残存値である。地床炉の様相を呈するが、上部を削平されているため詳細は不明である。

遺物（第30図・写真図版76）

＜検出状況＞ 床面および理土から出土している。

＜土器＞ 5点出土した。95・96は写真的のみの掲載であるが、床面から出土した深鉢形土器の破片である。胴部に充填繩文が施され、中期に位置付けられる特徴を持つ。97～99は埋土1層より出土した深鉢形土器である。

＜土器品＞ 1点出土した。100は埋土から出土したミニチュア形土器である。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

12号住居跡

遺構（第31図・写真図版14）

＜位置＞ 調査区北西側、斜面中位のIC 8 e グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 11号住居跡の発掘終了後に、暗褐色の淡い梢円形プランとして確認した。11・13号住居跡と上下の重複関係にあり、11号住居跡に切られ13号住居跡を切る。

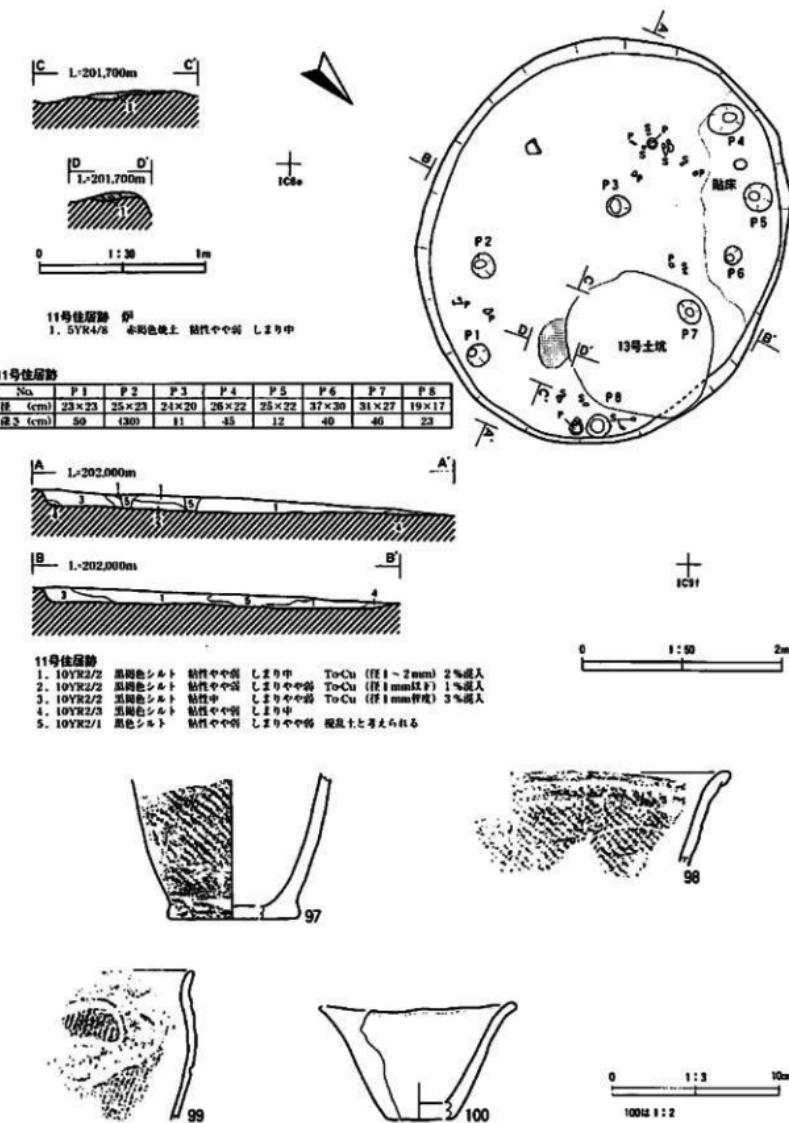
＜規模・形状＞ 長径497cm、短径438cmのはば円形を呈する。主軸方向は南東-北西である。

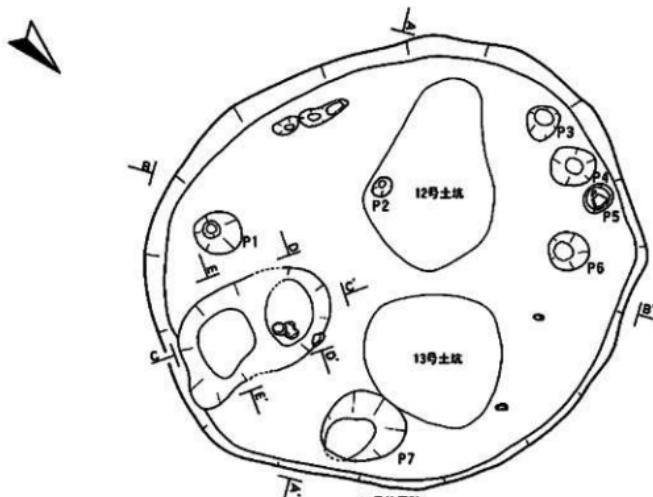
＜埋土＞ 5層からなり、To-Cuをまばらに含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁7cm、西壁8cm、南壁13cm、北壁5cmを測る。床面は13号住居跡を埋めて構築されている。床面は全体的に平坦であるが、とくに締まるものではない。明確な貼り床は認められなかつた。

＜柱穴＞ P 1～7 の、壁際付近に廻る7基の柱穴を確認した。

＜炉＞ 南東壁に接して2つの掘り込みからなる複式炉を検出した。北西側の掘り込みは長径90×短径80cm、東側の掘り込みは長径95×80cmを測りいずれも梢円形基調を呈する。礫や礫抜き取り痕、焼土が確認されなかつたことから炉の形態の詳細は不明である。西側の掘り込みの底面はいずれもやや硬く締まるものである。





12号住居跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
厚さ (cm)	50×43	22×18	37×32	46×41	33×27	41×39	80×70
深さ (cm)	61	50	34	38	9	28	48

IC91

A L=202.000m



B L=202.000m



0 1:50 2m

12号住居跡

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 To-Cu (径1mm以下) 2%, 硫化物鉄 (径10mm程度), 鉄土粒 (径2~3mm程度) 各ごく少量混入
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 10YR2/2 黒褐色シルトゾロッカ (小) 少量混入
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 To-Cu (径1mm以下) 2%程度, 硫化物鉄 (径5~10mm) 2%混入
4. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 To-Cu (径1mm以下) 2%混入
5. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや強

C L=201.600m



C'

D L=201.600m



E L=201.600m

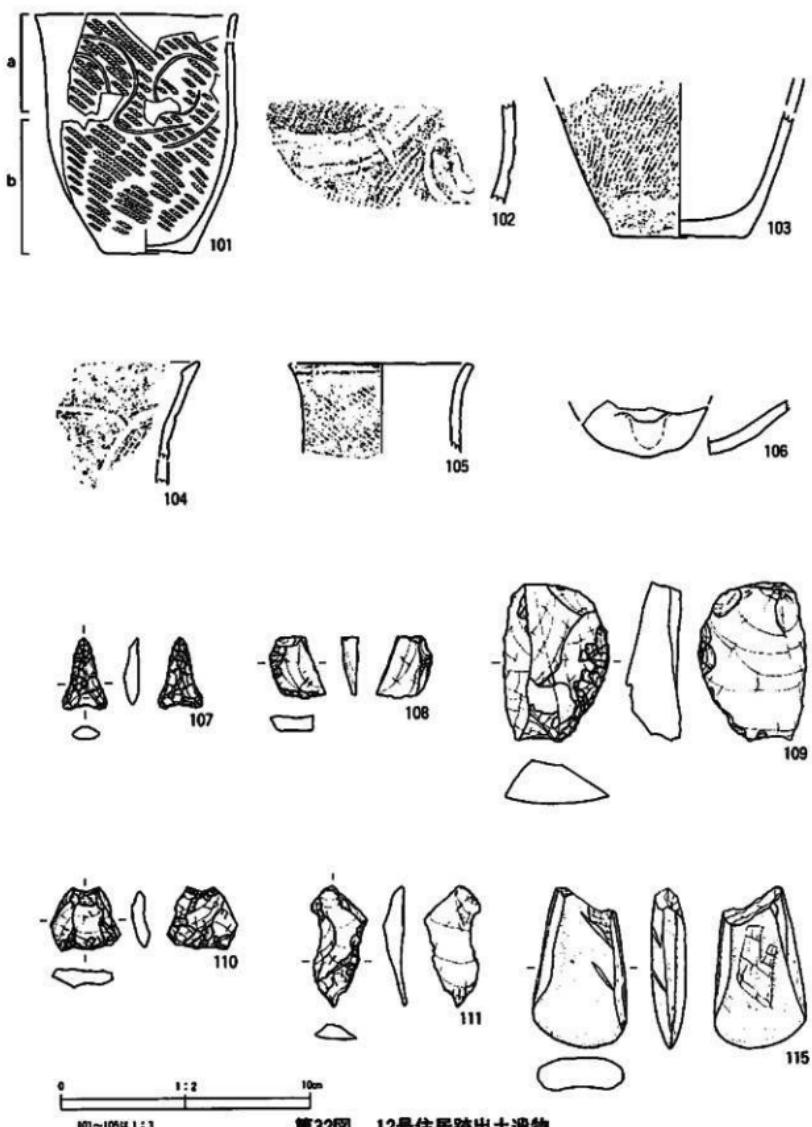


12号住居跡

1. 10YR2/3 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 10YR6/8 明黄褐色バニス粒 (径1mm以下) 2%混入, 硫化鉄
2. 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 10YR6/6 明黄褐色バニス粒 (径1mm以下) 2%混入

0 1:30 1m

第31図 12号住居跡



第32图 12号住居跡出土遺物

遺物（第32図・写真図版77・78）

＜検出状況＞ 床面土坑P1、がおよび埋土から出土している。

＜土器＞ 6点出土した。102は床面土坑P1から出土した深鉢形土器片である。肩部に充填縄文が施され、大木10式に位置付けられる特徴を持つ。101は炉の埋土から出土した中形の深鉢形土器片で、原体の継回転による地文が施される。大木10式期相当のものである。

＜土製品＞ 1点出土した。106は埋土から出土したミニチュア形土器である。

＜石器＞ 9点出土した。107は石鏃、108は縦形の石匙、109はスクレイパー類、110は楔形石器、111はリタッヂド・フレイクである。112-114はフレイク、115は磨製石斧で、基部が欠損する。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

13号住居跡

遺構（第33図・写真図版15）

＜位置＞ 調査区北西側、斜面中位の1C8eグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 12号住居跡の精査終了後に、黄褐色の浅い略円形プランとして確認した。11・12号住居跡と上下の重複関係にあり、これらによって切られる。

＜規模・形状＞ 長径290cm、短径270cmのはば円形を呈する。主軸方向は南-北である。

＜埋土＞ To-Cuを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。上位に12号住居が構築されていることから、人為的な埋め戻しであると考えられる。

＜壁・床＞ 壁高は残存例で、東壁7cm、西壁14cm、南壁14cm、北壁14cmを測る。床面はV層黄褐色土を掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦でやや綺麗な貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ 認められない。

＜炉＞ 南壁に接して石圓炉と掘り込み部からなる複式炉を検出した。石圓炉は長径55×短径45cmの長方形を呈する。燃焼部底面で焼土は確認されなかった。掘り込み部は長径65cm×短径58cmの不整な円形を基調とし、燃焼部より7.5cmほど深く掘り込まれている。

遺物（第34図・写真図版77）

＜検出状況＞ 床面から出土している。

＜土器＞ 1点のみの出土である。116は床面から出土した深鉢形土器で、口縁部に5単位の小形突起、肩上部に磨消し縄文、ヒレ状突起を持つ。大木10式の特徴を持つ。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

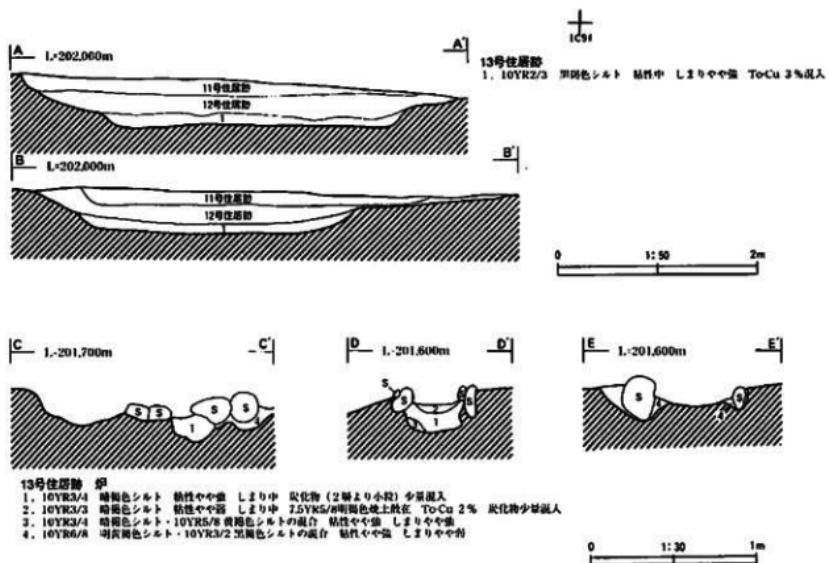
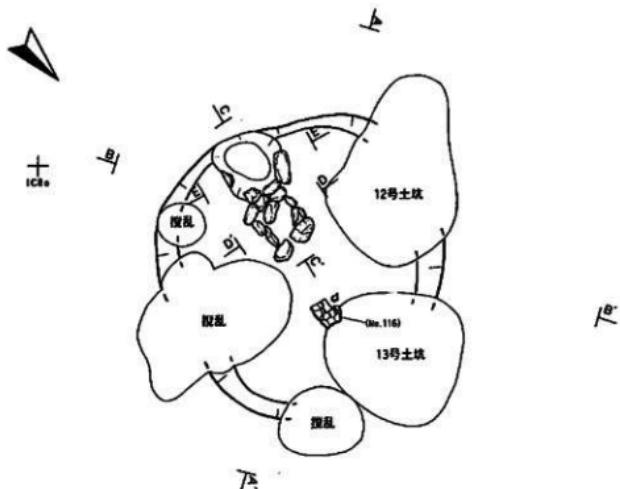
14号住居跡

遺構（第35図・写真図版16）

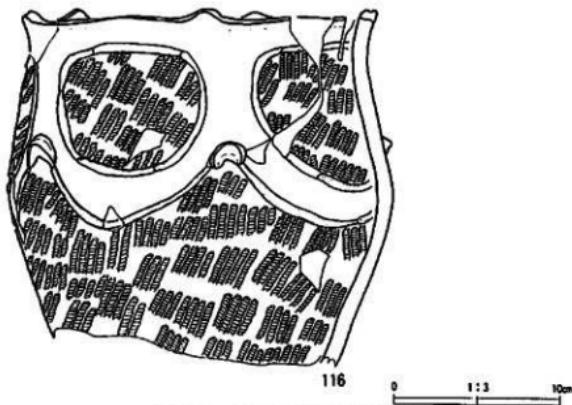
＜位置＞ 調査区中央部北西寄り、斜面中位の1C8dグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 現代の擾乱除去作業後、土層断面に土器片が多量に確認されたことより検出した。

＜規模・形状＞ 長径457cm、短径437cmのはば円形を呈する。主軸方向は南西-北東である。



第33図 13号住居跡



第34図 13号住居跡出土遺物

<埋土> To-Cuを含む少量化した褐色シルト主体で構成される。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁2cm、西壁13cm、南壁8cm、北壁2cmを測る。床面は日影中に構築されている。床面は全体的に平坦で、中央部北寄りに120×80cmの範囲で硬化面が認められる。

<柱穴> P1~8の不規則な配置をなす8基の柱穴を検出した。

<炉> 中央部東寄りで石壺炉を検出した。炉は長径60×短径50cmの隅丸方形基調を呈する。底面の焼土は認められなかった。また、これとは別に東側壁付近から長径98cm×短径80cm、厚さ20cmの範囲で現地性の焼土が確認されている。

遺物（第36図・写真図版7）

<検出状況> 床面および埋土から出土している。

<土器> 6点出土した。117・118は床面から出土した深鉢形土器で、胎土に金雲母を含む。

<石器> 123は埋土から出土した敲磨石で、中央部に微細な敲打痕を持つ。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

15号住居跡

造構（第37・38図・写真図版17）

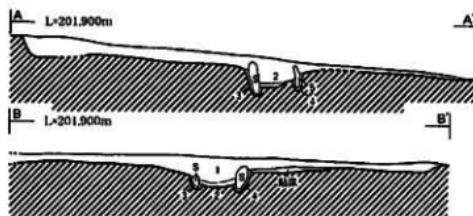
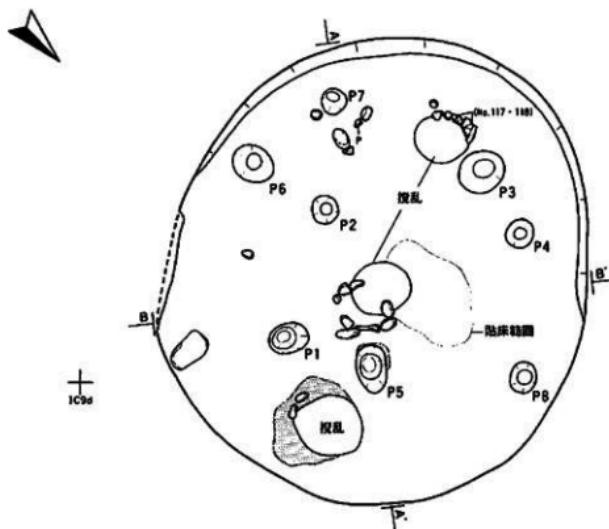
<位置> 調査区北東側、斜面下位のII C 1 g グリッドに位置する。

<検出状況・量質関係> 16号住居跡精査終了後、完掘した柱穴壁面より床面を確認した。

<規模・形状> 長径676cm、短径580cmの梢円形を呈する。主軸方向は南西-北東である。

<埋土> To-Cuをわずかに含む褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土主体で構成される。上位に16号住居跡が構築されており、人为的な埋め戻しが行われたと考えられる。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁10cm、西壁13cm、南壁13cm、北壁8cmを測る。床面はV層まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で硬く縮まるが、貼り床は明確に認められなかった。



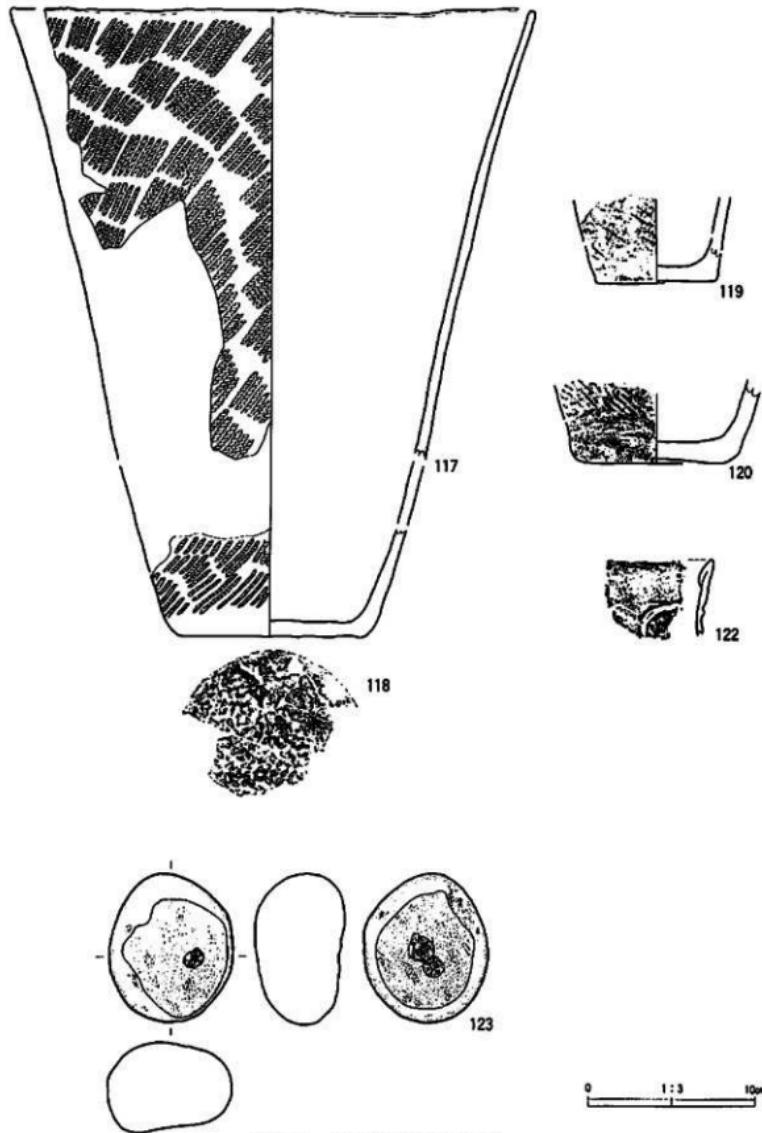
- 14号住居跡 及び 炉**
1. 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性中 しりや中
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しりやや強 10YR2/2 黑褐色シルトブロック少層。To Cu 2%、幾々较少量混入。
火を受けたような部分がある
 3. 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中 しりやや弱
 4. 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中 しりやや弱

14号住居跡 及び 炉

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
縦 (cm)	40×29	29×27	48×42	29×26	48×30	44×36	26×25	31×26
横 (cm)	37	32	55	21	50	23	27	19

0 1:50 2m

第35図 14号住居跡



第36図 14号住居跡出土遺物

＜周溝＞ 西側の壁面近くに沿って2条廻ることから、住居の拡張が行われたと考えられる。なお、斜面下方にあたる東側壁際では周溝が殆ど認められなかった。

＜柱穴＞ P 1～10の10基の柱穴を確認した。

＜炉＞ 南東側の床面に接して複式炉を検出した。複式炉は、2つの掘り込み部からなっており、燃焼部には焼土が60×50cmの範囲で認められる。前庭部は134×105cmの範囲で掘り込まれており、燃焼部より8cmほど深い。前庭部の底面には90×60cmの範囲で硬化面が認められる。また、中央部北西には長径100cm×短径70cmの現地性焼土が形成されている。

遺物（第38図・写真図版78）

＜検出状況＞ 墓土のみから出土している。

＜土器＞ 3点出土した。124a,bは同一個体の深鉢形土器である。125は埋土1層から出土した中形の深鉢形土器で、金糸母・海綿骨針を含み縄文期に位置付けられるものである（造構外部からの混入の可能性が高い）。

＜石器＞ 126は埋土から出土した棒状砾で、欠損している。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

16号住居跡

造構（第39～41図・写真図版18）

＜位置＞ 調査区北東側、斜面下位のⅡ C 1 g グリッドに位置する。

＜検出状況・量複関係＞ IV層暗褐色シルトの漸移層で、黒褐色の指円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 長径746cm、短径-700cmを測り、かに接する壁面が、底の潰れた卵形～マッシュルーム形に近い指円形を呈する。主軸方向は南東～北西である。

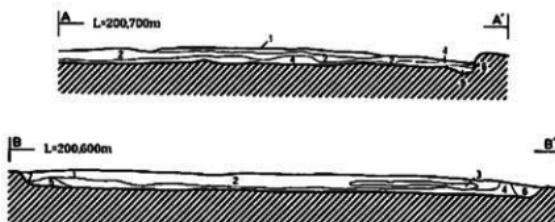
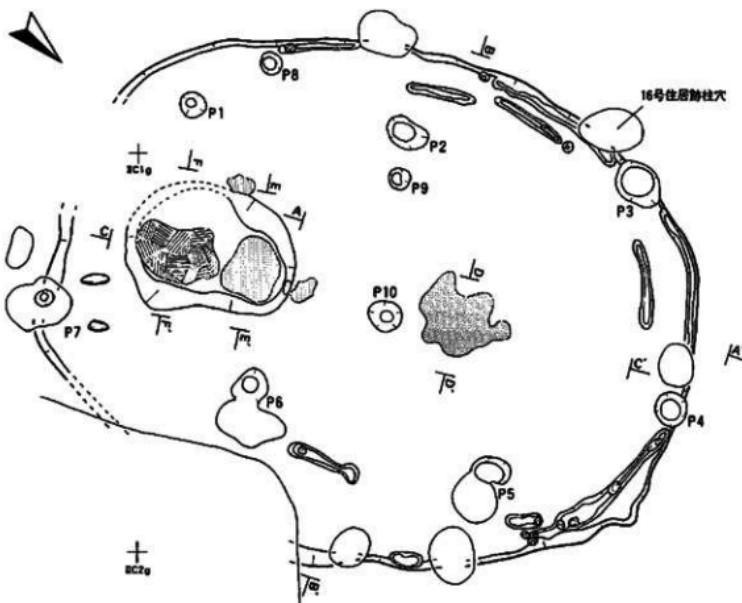
＜埋土＞ 8層からなる。埋土は大きく上位と下位で二分され、上位は炭化物と焼土粒を1～2%含む黒褐色シルト主体、下位は暗褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色シルト主体で構成される。西側では断面の黒褐色シルトと黄褐色シルトの中間に、大木10式土器の破片を多量に含む暗褐色シルトを介している。この土器の広がりはプラン西側全体に認められた。床面からは確実に浮いており本住居跡の埋没が開始されてから投棄されたものと考えられる。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁12cm、西壁42cm、南壁42cm、北壁13cmを測る。床面はV層まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で硬く積まっており、複式炉の周辺を中心とした4.5m×4mの範囲で暗褐色シルトの貼り床が認められた。

＜周溝・住居の拡張＞ 西側の壁面近くに沿って周溝が一条廻ることから、住居の拡張が行われたと考えられる。なお、斜面下方にあたる東側壁際では認められなかった。

＜柱穴＞ 炉を中心とする主軸と対象に7本の柱穴が検出された。また、斜面下方の柱3本分が外側に少し位置をずらして建て直されているのが確認できた。これは拡張に伴う柱の立替えと考えられるが、これに対して斜面上方の柱3本の位置は変わっていない。P 1～P 3の柱穴に柱2本分の掘り方スペースが認められることから同じ場所に建て替えたか、同じ柱材を再利用したものであった可能性が考えられる。

＜炉＞ 南東側の床面に接して複式炉を検出した。複式炉は、石開炉とそれに付属する石開部、掘り込み部の3つの部位で構成されている。石開炉は長径75cm×短径60cmの不整な円形で、焼土が50×33cm・厚さ12cm



15号住居跡

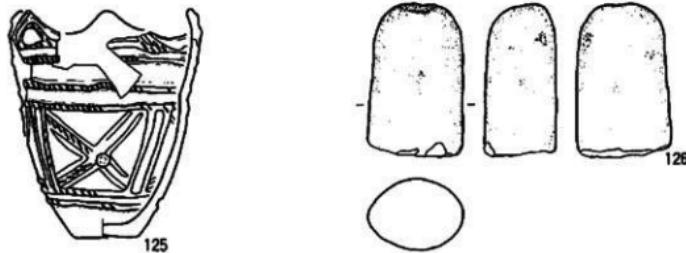
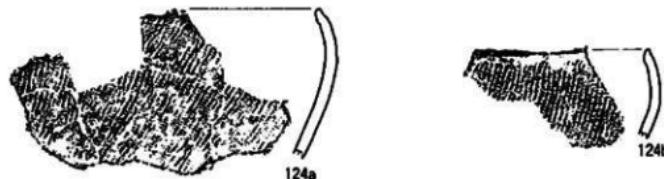
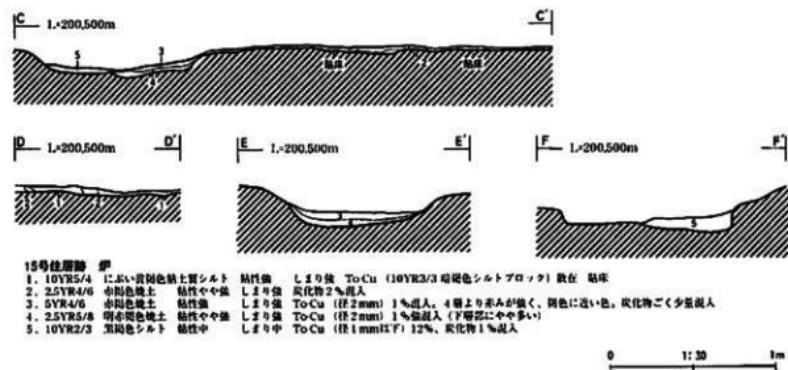
1. 10YR3/4 黄褐色シルト 粘性剤 しまりやや強 10YN2/2 黒色シルト、10YN6/6 明黄褐色シルト各 1%混入
2. 10YR4/4 固色シルト・10YR6/6 明黄褐色シルトの混合 粘性剤 しまりやや強 Ti-Cu 1%混入
3. 10YR2/3 黄褐色シルト 粘性剤やや強 L2り強 To-Cu 1%混入
4. 10YR4/6 黄褐色シルト 粘性剤やや強 L2り強 To-Cu 1%混入
5. 10YR2/4 黄褐色シルト 粘性剤やや強 中 10YR5/4 にぶい青褐色粘土質シルト 2%混入
6. 10YR4/6 黄褐色シルト 粘性剤 しまり中
7. 10YR5/6 明黄褐色シルト・10YR3/3 明黄褐色シルトの混合 粘性中 しまり中

15号住居跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
H (cm)	26×26	33×28	54×42	35×31	(40×30)	(37×35)	20×15	23×23	22×22	35×30
B (cm)	15	52	35	9	32	34	37	24	22	15

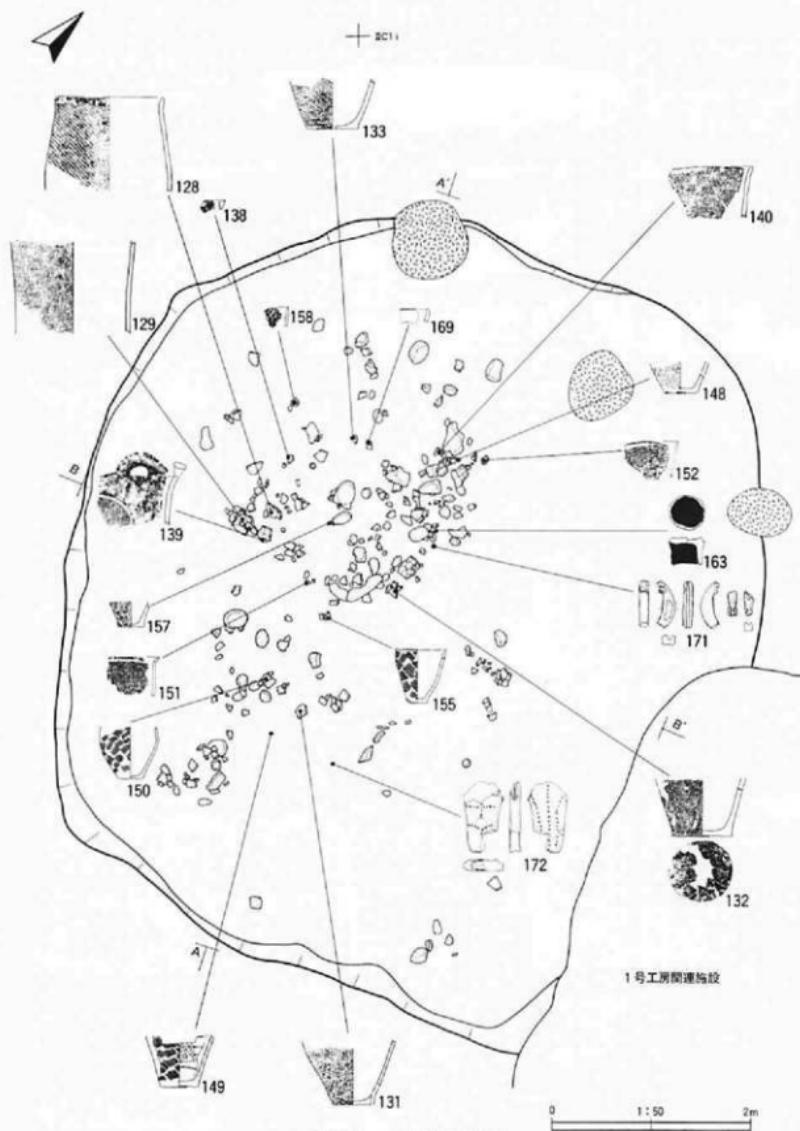
0 1:50 2m

第37図 15号住居跡(1)



第38図 15号住居跡(2)・出土遺物

0 1:3 10cm



第39図 16号住居跡(1)



ECII

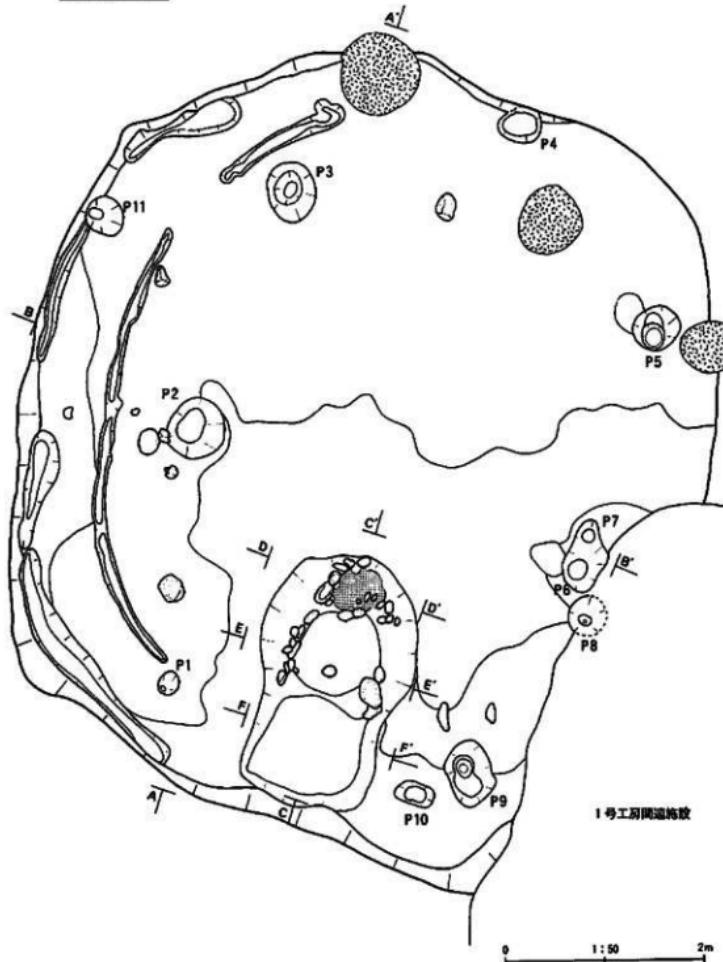
16号住居跡

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
W (cm)	25×21	63×58	60×49	41×38	52×43	445×400	(33×25)	(40×40)	66×49	41×21
深さ (cm)	51	63	65	25	51	51	43	24	65	37

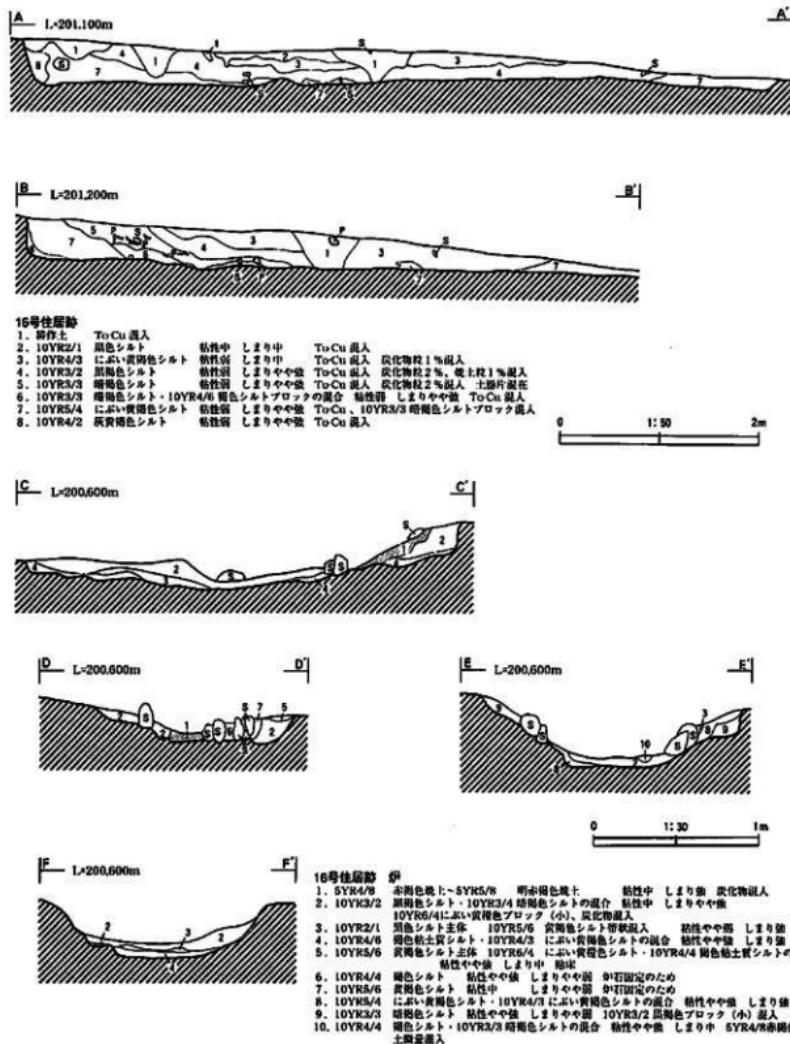
No.

W (cm) 43×37

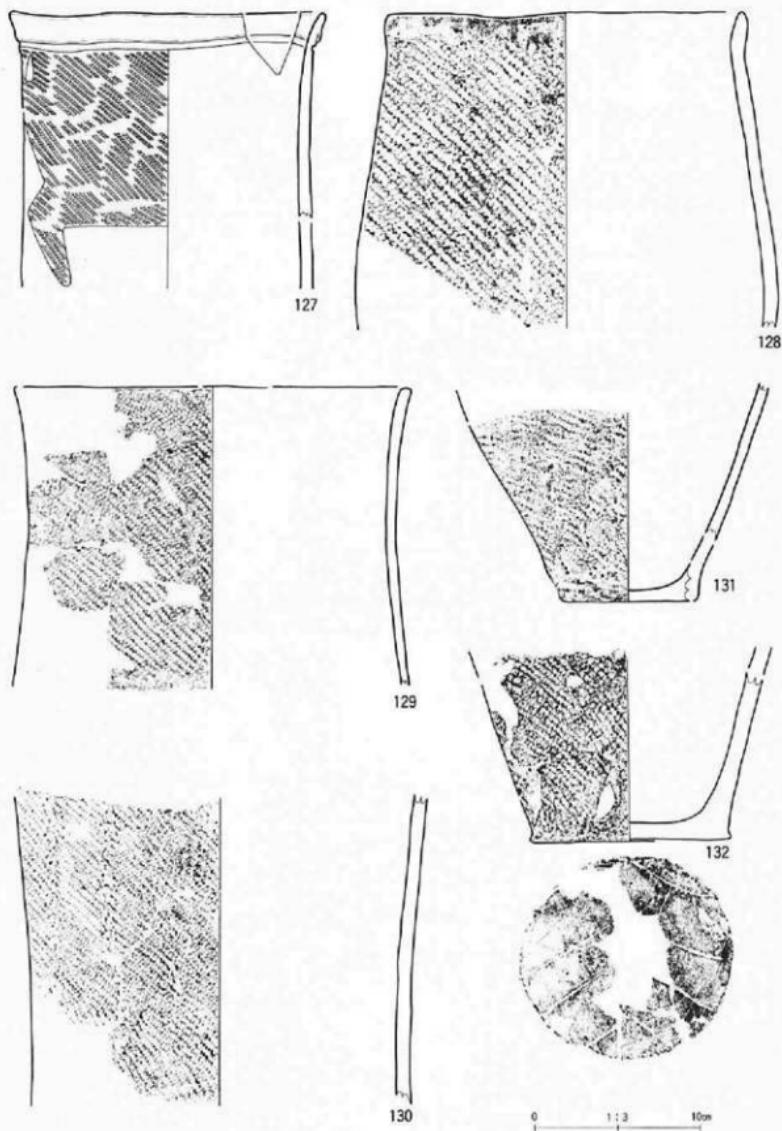
深さ (cm) 44



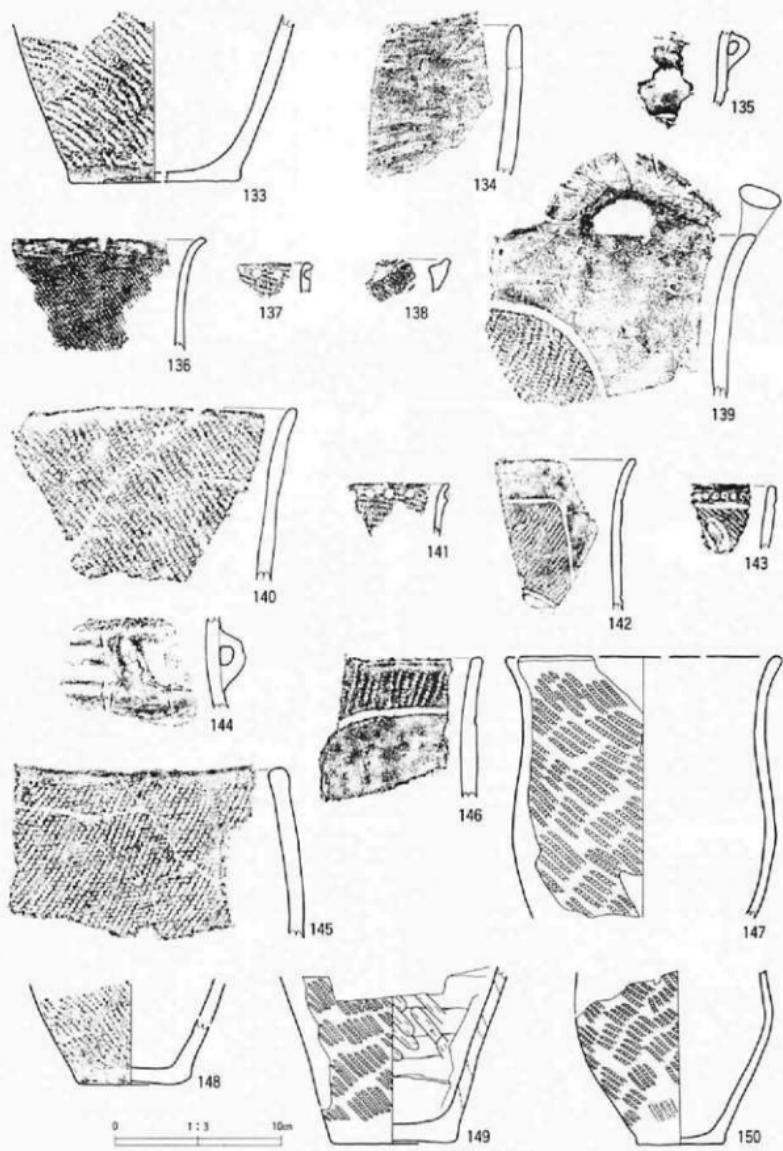
第40図 16号住居跡(2)



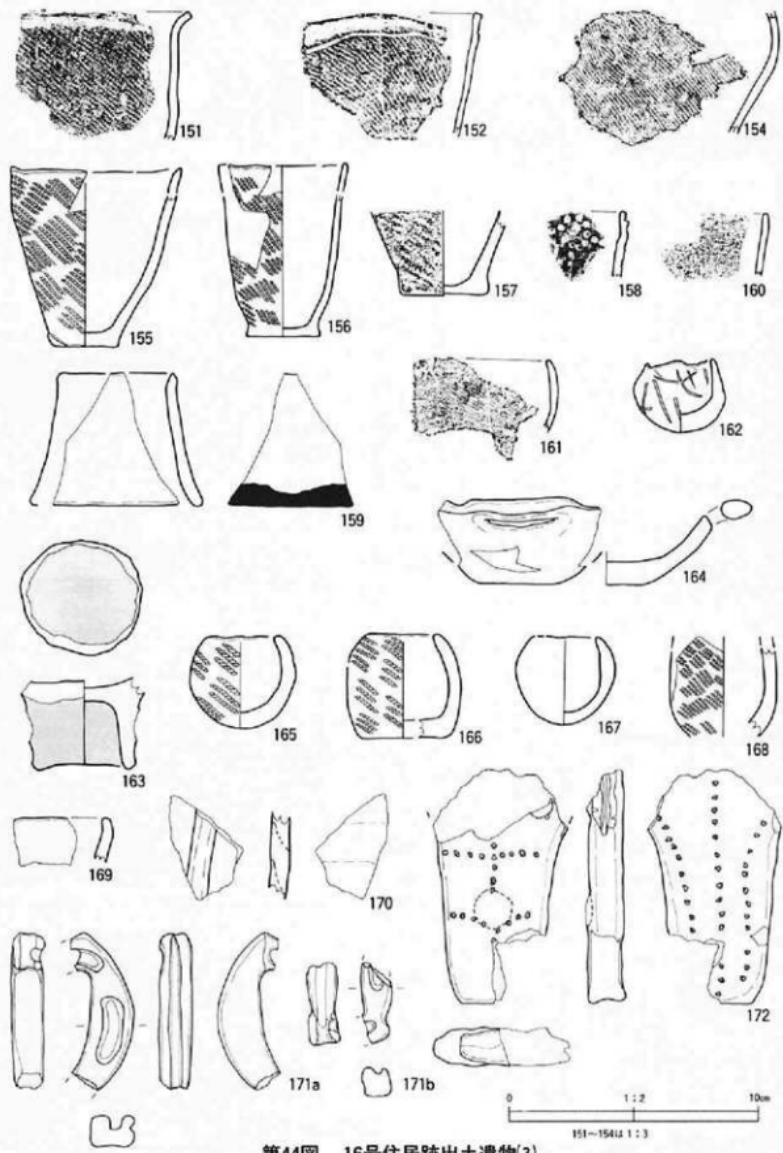
第41図 16号住居跡(3)



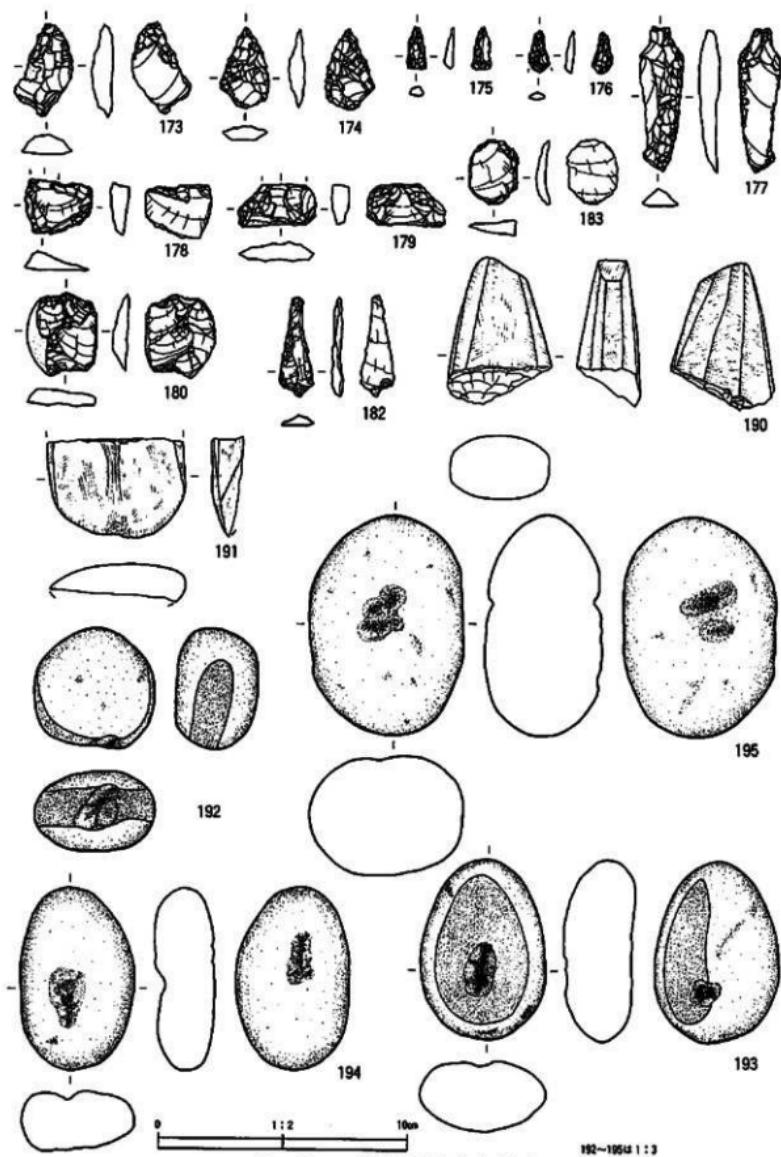
第42図 16号住居跡出土遺物(1)



第43図 16号住居跡出土遺物(2)



第44図 16号住居跡出土遺物(3)



第45図 16号住居跡出土遺物(4)

の範囲で認められる。石頭部は長径110cm×短径90cmの範囲で掘り込まれ、周辺に10cm大の縁を配する。掘り込み部は長径130cm×短径113cmを測り、北西側を除く3方に幅約20cm、深さ5cm前後の溝が巡っている。石頭部と掘り込み部はいずれも不整な円形基調を呈し、底面は硬く締まるものである。このうち掘り込み部の底面は土間状に硬く締まる硬化面を持つものであるが、断面観察から硬化面が2面あることが判明した。このことから擴張にあたっては炉を作りかえることなく、維続して使用していたものと考えられる。

遺物（第42~45図・写真図版78~81）

＜検出状況＞ 墓土から多量に出土している。

＜土器＞ 29点出土した。139は深鉢形土器片で、橋状把手を持つ。胴部には光埴繩文による文様が施され、大木10式に位置付けられる。149は中形深鉢で、輪積みの痕跡が顕著である。

＜土製品＞ 18点が出土した。159はミニチュア形土器で、口縁部内面にタール状の付着物が認められる。163はミニチュア形土器で、胎土に金雲母を少量含む。内面は磨かれ、内外面ともに赤色染彩される。171a,bは垂飾品で、同一個体である。深い沈線による彫刻文が描かれる。172は1層から出土した板状土偶の体部破片で、刺突列・貼り瘤による文様を持つ。

＜石器＞ 25点出土した。173~176は石鐵、177~179は石匙である。180~181は、楔形石器、182~183はリタッヂド・フレイクである。184~189は剥片、190~191は磨製石斧、192は敲磨石、193~195は四（磨）石である。196~197は円礫である。

造構の時期

出土遺物から繩文時代中期末葉と考えられる。

17号住居跡

造構（第46図・写真図版19）

＜位置＞ 調査区北東側、斜面下位のI C10eグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層面で黒褐色の円形プランとして確認した。18号住居跡と上下の重複関係にあり、これを切っている。

＜規模・形状＞ 長径408cm、短径374cmのほぼ円形を呈する。主軸方向は南西~北東である。

＜埋土＞ 検出した時点では床面近くであったため、詳細は不明である。残存部の埋土はTo-Cuを少量含む黒褐色シルトである。

＜壁・床＞ 壁高は残存せず、東壁2cm、西壁6cm、南壁10cm、北壁2cmを測る。床面は18号住居跡を埋めて構築されている。全体的に平坦で硬く締まるが、明確な貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ P1~5の不整な配置をなす5基の柱穴を確認した。

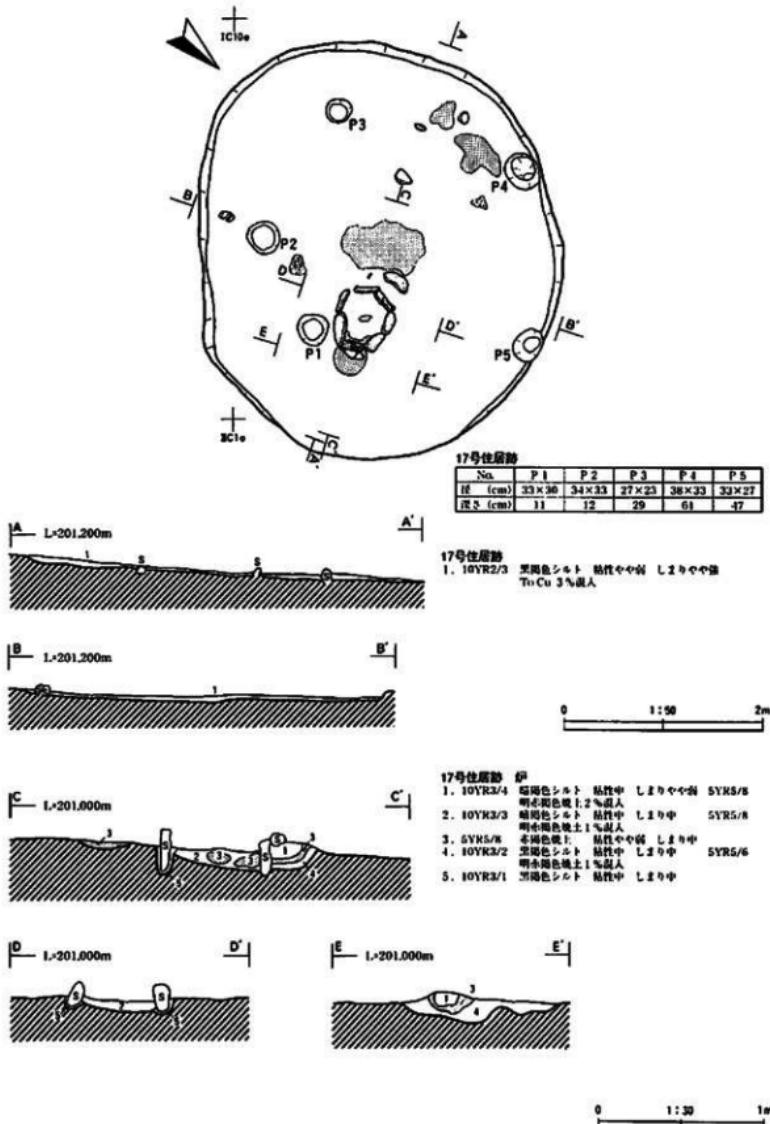
＜炉＞ 北東側の床面から石圓炉を検出した。炉内には焼土が殆ど認められない。石圓炉と東片を接するよううに長辺40cm×短辺32cm・厚さ14cmの範囲で現地性の焼土が形成されている。

遺物（第47図・写真図版82）

＜検出状況＞ 床面、炉の周辺、埋土から出土している。

＜土器＞ 8点出土した。201~203は炉周辺から出土した深鉢形の土器片で、大木10式期相当のものである。205は埋土から出土した深鉢形土器片で、胎土に金雲母が少量含まれる。胴部には3条の陰帯による文様が描かれる。

＜石器＞ 206はリタッヂド・フレイクで、左側縁の一部に腹面からの2次加工が加えられている。



第46図 17号住居跡

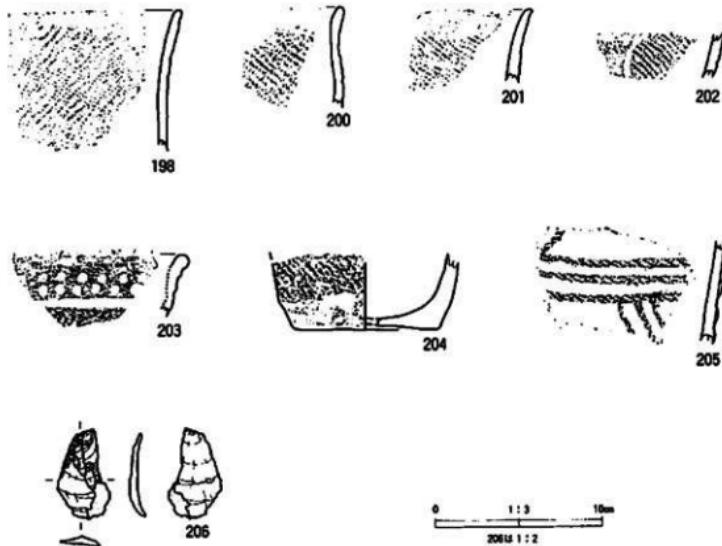
造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

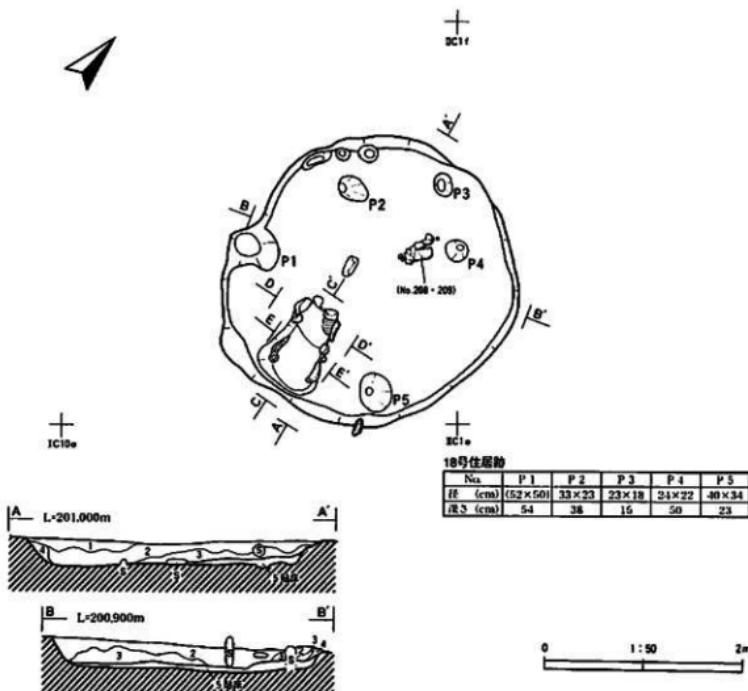
18号住居跡

遺構（第48図・写真図版20）

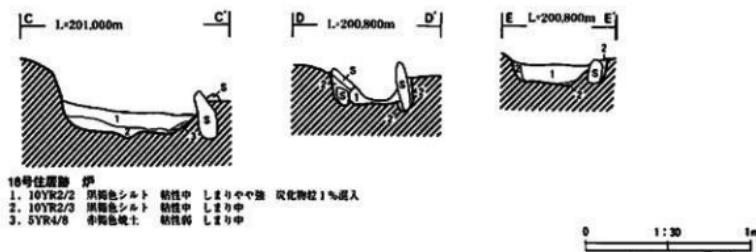
- <位置> 洞室区東側、斜面下位の I C10 e グリッドに位置する。
- <検出状況・重複関係> 表土除去後のⅢ層面で黒褐色の円形プランとして確認した。17号住居跡と上下の重複関係にあり、これにより切られる。
- <規模・形状> 長径290cm、短径274cmのはば円形を呈する。主軸方向は南西～北東である。
- <埋土> 5層からなり、To-Cuをごく少量含む暗褐色～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。
- <壁・床> 壁高は残存値で、東壁6cm、西壁23cm、南壁23cm、北壁2cmを測る。床面はⅣ層黄褐色土を掘り込んで構築されている。全体的に平坦であるが、特に締まるものではない。明確な貼り床は認められなかつた。
- <柱穴> 炉を中心とした主軸と対照に廻るP1～5の5基の柱穴を検出した。
- <炉> 南側に接して複式炉を検出した。石圓炉+石圓部で構成される二つの掘り込みからなる。石圓炉は長径49cm×短径38cmの長方形で、底面に焼土が長径14cm×短径10cm、厚さ2cmの範囲で認められる。石圓部は長径60cm×短径51cmの梢円形基調を呈する。石圓炉と石圓部の底面レベルはほぼ同じである。



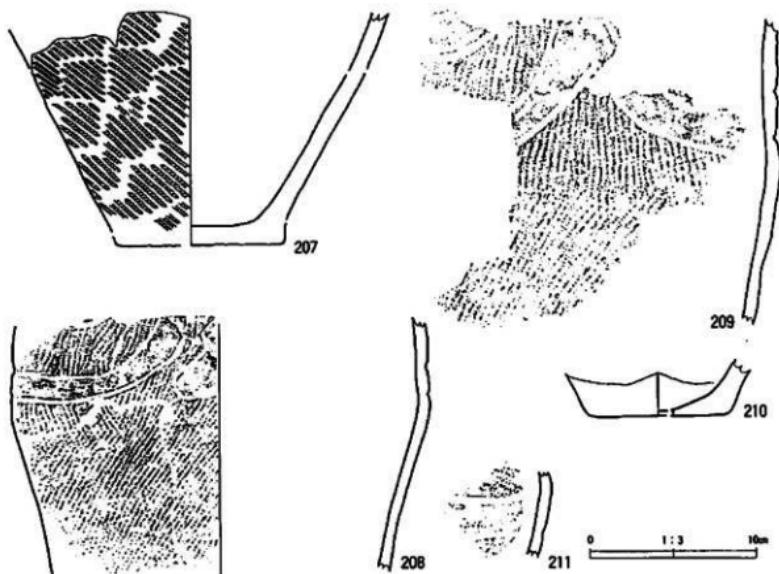
第47図 17号住居跡出土遺物



- 18号住居跡
1. 10YR2/1 黒褐色シルト・10YR3/1 黒褐色シルトの混合 粘性弱 しまり中
 2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 10YR4/6 黄褐色シルト粒1%、炭化物粒微量混入
 3. 10YR4/3 に2-4 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒微量混入
 4. 10YR4/2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中
 5. 10YR3/3 黄褐色シルト・10YR2/3 黑褐色シルト・10YR4/4 四色シルトの混合 粘性やや強 しまりやや強 鳥糞



第48図 18号住居跡



第49図 18号住居跡出土遺物

遺物（第49図・写真図版82）

<検出状況> 床面、炉の周辺、埋土から出土している。

<土器> 5点出土した。207は炉内から出土した土器片である。210は埋土から出土した深鉢形土器片で、内外面のミガキが顕著で、赤色塗彩される。208・209は床面から出土した。胴部には原体縦回転の地文が施され、胴上部に磨消し縄文による文様が描かれる。大木10式に位置付けられるものである。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

19号住居跡

遺構（第50・51図・写真図版21）

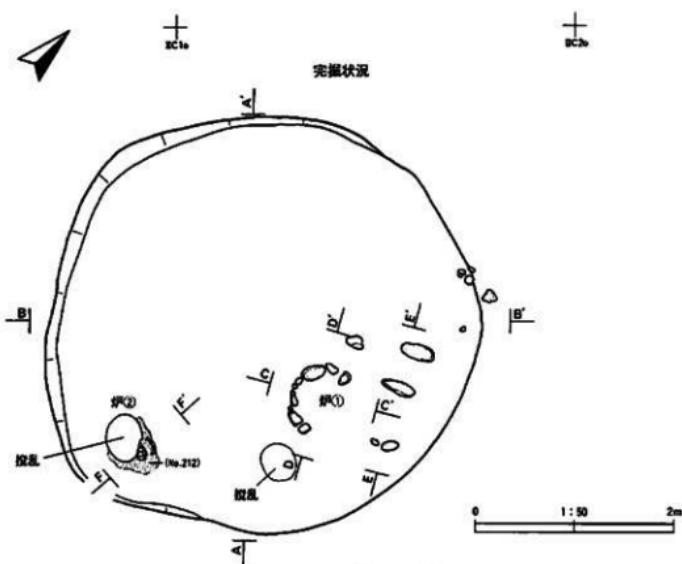
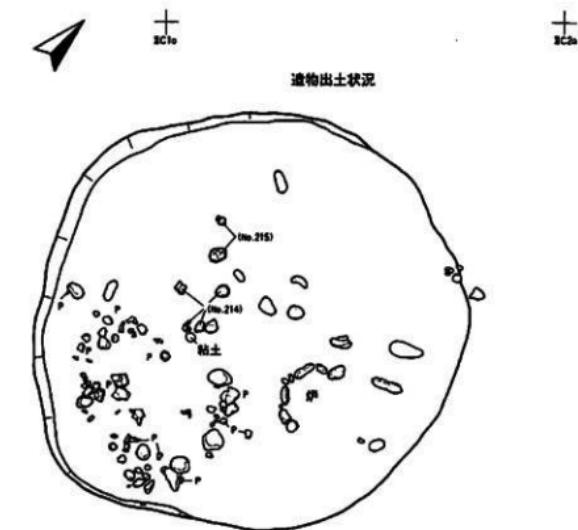
<位置> 調査区東側、斜面下位のⅡ C 1 d グリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後のⅢ層面で黒褐色の円形プランとして確認した。20号住居跡と上下の重複関係にあり、これを切る。

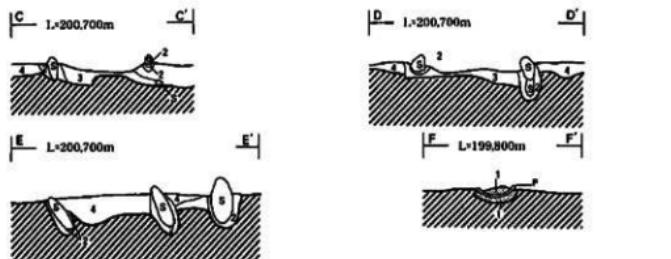
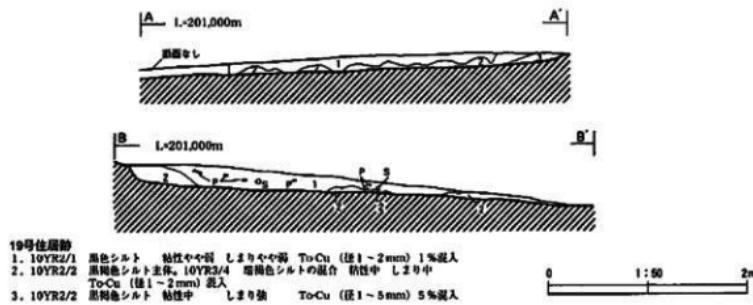
<規模・形状> 長径444cm、短径429cmのはば円形を呈する。主軸方向は東～西である。

<埋土> 3層からなり、To-Cuを少量含む黒色～黒褐色シルト主体で構成される。

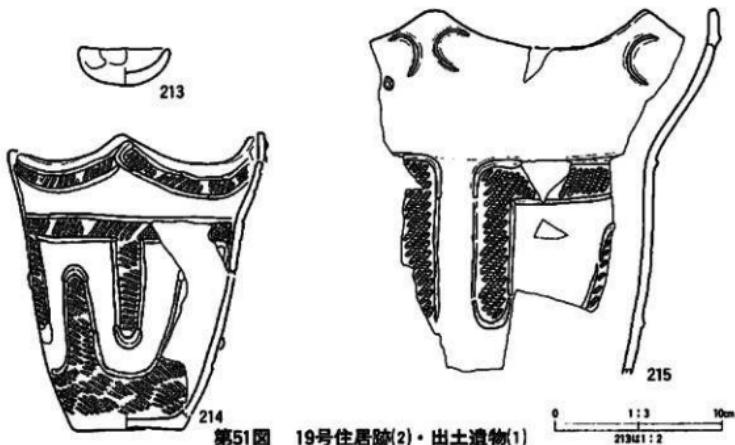
<壁・床> 壁高は残存高で、東壁2cm、西壁15cm、南壁10cm、北壁5cmを測る。床面は20号住居跡を埋めて構築されている。全体的に平坦であるが、特に継まるものではない。明確な貼り床は認められなかった。



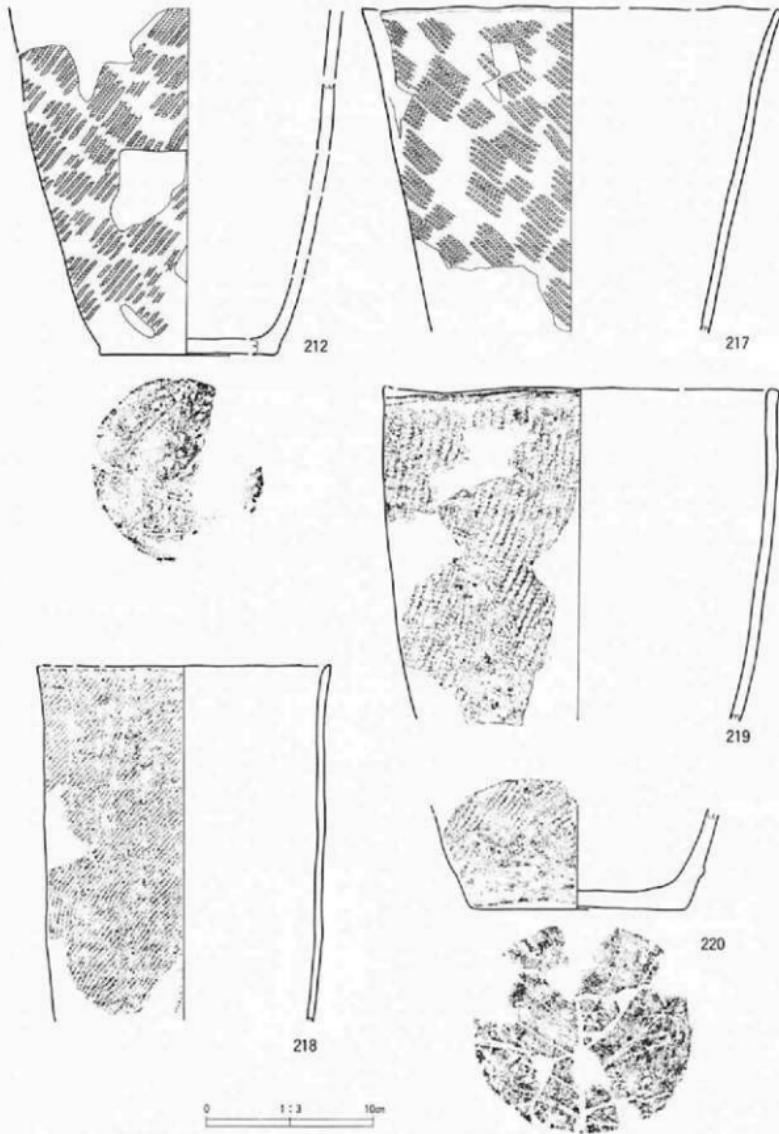
第50図 19号住居跡(1)



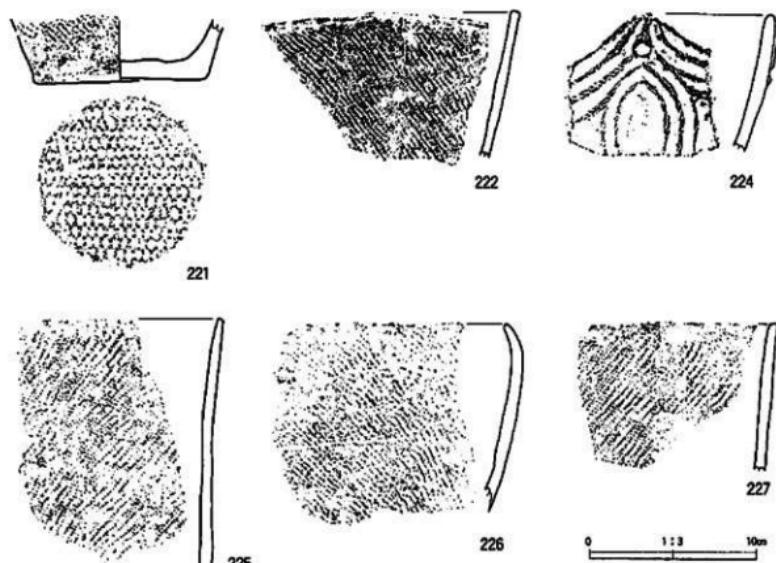
- 19号住居跡 伊①②**
1. 5YR5/8 明赤褐色燒土 粘性中 しまり中
 2. 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや弱
 3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり中
 4. 10YR4/4 暗色シルト - 10YR5/8 暗褐色シルトの混合 粘性やや弱 しまり中



第51図 19号住居跡(2)・出土遺物(1)



第52図 19号住居跡出土遺物(2)



第53図 19号住居跡出土遺物(3)

<柱穴> 認められない。

<炉> 石圓炉と地床炉を検出した。石圓炉は東側燃付近に位置し、長径74cm×短径(42)cmを測る。石圓炉の東側の礫が残存しておらず、焼上も認められることから短径の値については残存値である。南側燃寄りから現地性焼土を検出した。長径55×短径45cm・深さ10cmの範囲で焼土が形成され、深さ10cmの範囲に焼土が広がっている。焼土中に深鉢形の小土器片が認められることから、土器埋設炉的に使用されてた可能性が考えられる。

遺物（第51～53図・写真図版83～85）

<検出状況> 炉、床面、埋土から出土している。

<土器> 16点出土した。212は炉②の埋設土器で、胴部には原体継回転による地文が施される。215は埋土から出土した深鉢形土器で、胴部に弧状の隆帯を持つ。胎土に金雲母を含む。茎窓式期に相当すると考えられる。

<土製品> 1点が出土した。213は床面から出土したミニチュア形土器で、金雲母をごく少量含む。

<石器> 2点が出土している。229は埋土1層から出土した石核である。230は埋土1層から出土した凹頭である。

造構の時期

出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

20号住居跡

遺構 (第55図・写真図版22)

<位置> 調査区北東側、斜面下位のⅡ C 1 d グリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 19号住居跡の精査終了後の土層観察により検出した。19号住居跡と上下の重複関係にあり、これにより切られる。

<規模・形状> 長径411cm、短径391cmのはば円形を呈する。主軸方向は南西-北東である。

<埋土> 2層からなり、To-Cuをわずかに含む黒褐色シルトと明黄褐色シルトブロックの混合土主体で構成される。炭化物粒をごく少量含む。

<壁・床> 壁高は残存例で、東壁10cm、西壁11cm、南壁12cm、北壁11cmを測る。床面は20号住居跡を埋めて構築されている。全体的に平坦で、やや締まる。明確な貼り床は認められなかった。

<柱穴> 認められない。

<炉> 東側壁寄りから石組複式炉を検出した。石圓炉と石圓部から構成される。燃焼部には焼土が径35cm・厚さ8cmの範囲で認められる。石圓部は石圓炉燃焼部より5cmほど低くなっている。

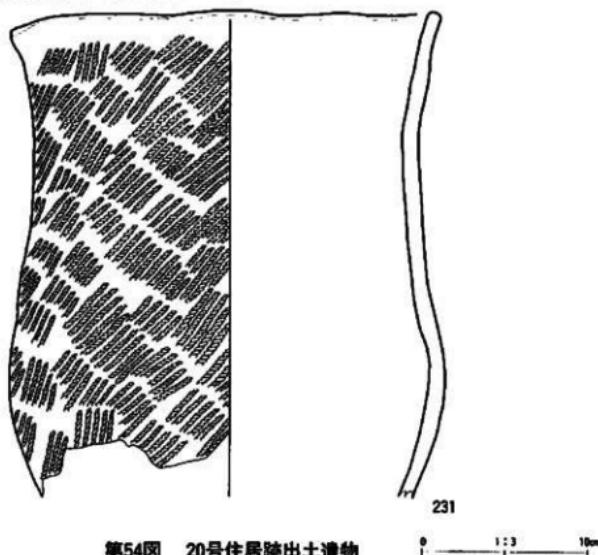
遺物 (第54図・写真図版85)

<検出状況> 床面から出土している。

<土器> 1点のみの出土である。231は床面出土の深鉢形土器で胴部には原体の縦回転による地文が施される。

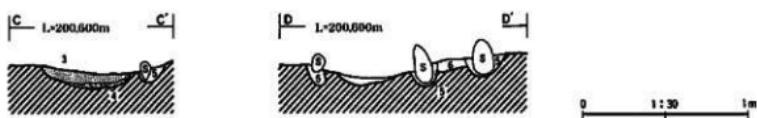
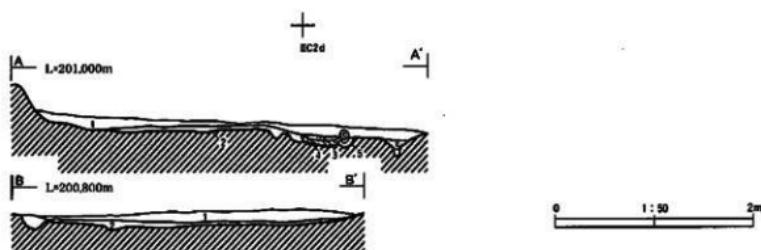
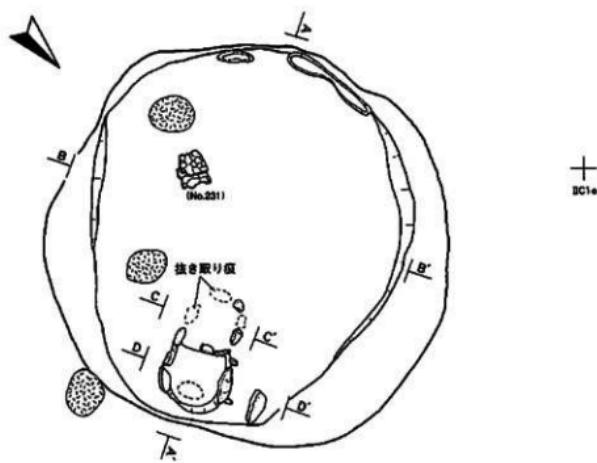
遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉であると考えられる。



第54図 20号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm



20号住居跡 及び 炉

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 硅酸剤 しづり中 10YR6/8 明黄褐色シルトブロック 1%、炭化物粒混在
2. 10YR4/4 開きシルト・10YR6/8 黄褐色シルトの混合 硅酸やや弱 しまり強
3. SYRA4/4 必地シルト 硅酸中 しづり中
4. 10YR2/7 必地シルト 硅酸中 しづり中 上部より構成を受け、炭化層になっている
5. 10YR3/3 黒褐色シルト 硅酸やや弱 しづりやや弱
6. 10YR3/4 黒褐色シルト 硅酸やや弱 しづり強 炭化層であり、施灰の一部と考えられる

第55図 20号住居跡

21号住居跡

造構（第56図・写真図版23）

＜位置＞ 調査区北側、斜面下位のⅡ C 1 i からⅡ C 2 i グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のV層中で黒褐色の円形プランとして検出した。北東側で新期の土坑と重複し、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 長径(326)cm、短径323cmのはば円形を呈する。北東側は新期の土坑に切られているため残存値である。主軸方向は北西—南東である。

＜埋土＞ 削半を受けているため詳細は不明であるがTo-Cuを含む黒褐色土主体の單層で構成される。炭化物を少量含んでいる。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、北西壁2cm、南東壁2cm、南西壁4cm、北東壁2cmを測る。床面はV層黄褐色土層まで掘り込んで構築されている。全体的に平坦であるが、特に縮まるものではない。明確な貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ 炉を中心とした主軸と対象に遡るP 1 ~ 8の8基の柱穴を検出した。

＜炉＞ 北西壁寄りから土器埋設石組複式炉を検出した。土器埋設炉+石開部+礫を伴わない掘り込み部から構成され、長径157cm、短径7.1cmを測る。土器埋設炉は、石開部の掘り込み中に位置しており、残存部径23cmの深鉢形土器を正立の状態で埋設している。この土器内では焼上が形成されておらず、周辺から石開前面部にかけて15×25cm・厚さ3cmの範囲でごく浅い焼土が認められるのみである。前庭部は燃焼部より4cmほど低くなっている。

遺物（第56図・写真図版85）

＜検出状況＞ 炉、柱穴、埋土から出土している。

＜土器＞ 232は炉から出土した深鉢形土器片である。234は埋土から出土した浅い碗形の小形土器で口唇部付近の2箇所に穿孔がある。

＜石器＞ スクレイバー類が1点出土した(235)。

造構の時期

出土遺物から绳文時代中期末葉であると考えられる。

22号住居跡

造構（第57図・写真図版24）

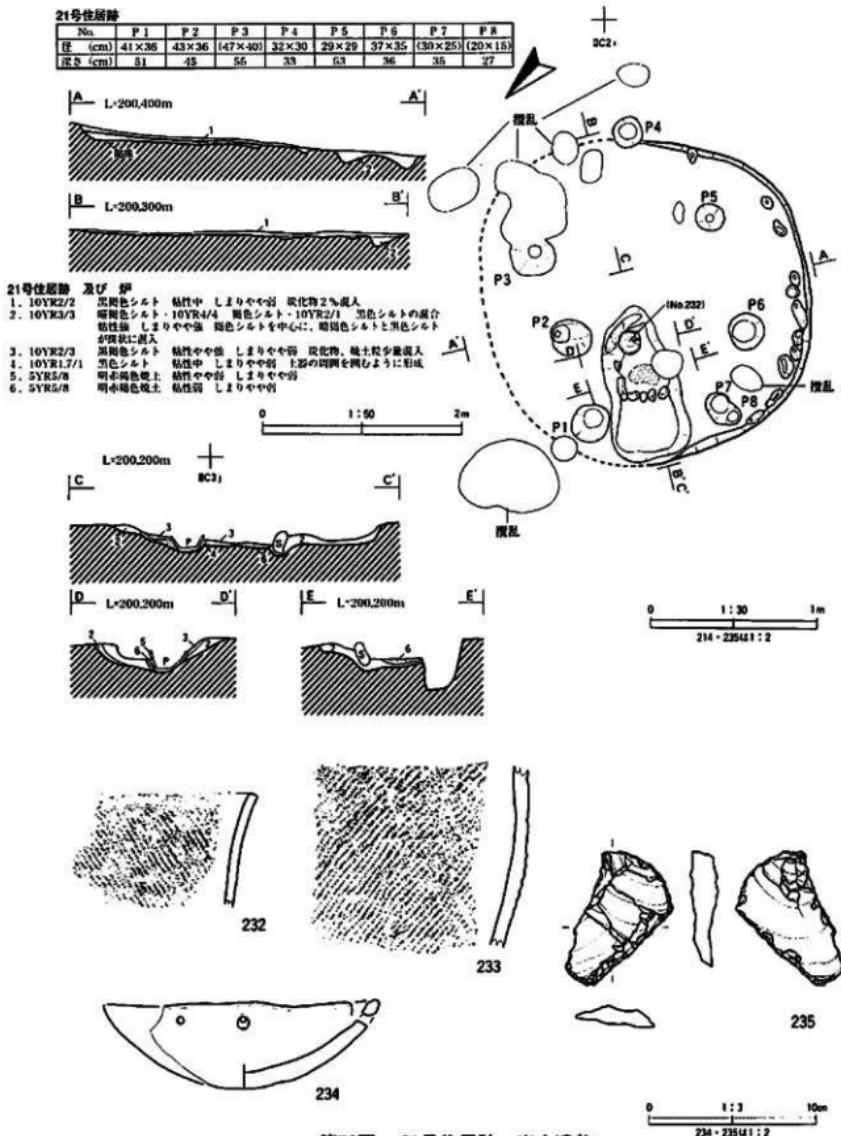
＜位置＞ 調査区北側、斜面下位のⅡ C 3 j グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層中で黒褐色の半円形プランとして検出した。北東側半分が調査区域外にかかる。

＜規模・形状＞ 長径~400cm、短径~130cmのはば円形を呈するものと思われる。北東側半分が調査区域外にかかっているため規模はいずれも残存値である。

＜埋土＞ 3層に細分され、上位は純い赤褐色・黒褐色・明黄褐色シルトの混合土主体、下位は黒褐色シルトを含んだ灰黄褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁36cm、西壁36cm、南壁24cm、北壁28cmを測る。床面はV層黄褐色シルト層まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平らで、南側床面に145×~70cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が認められる。



第56図 21号住居跡・出土遺物

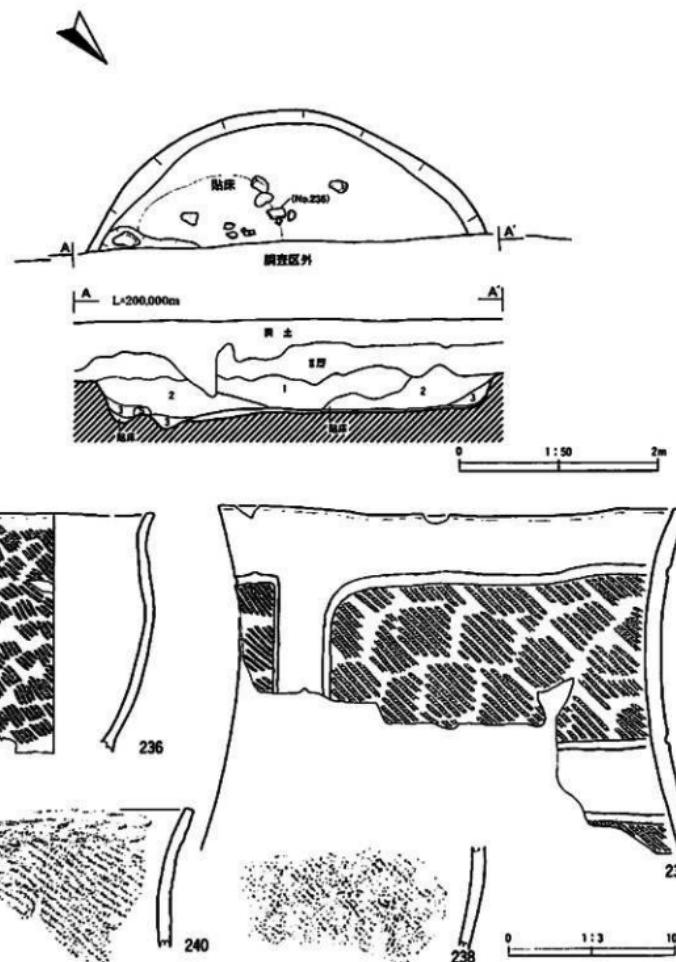
22号供應站

1. 5YR5/4
にふく黒褐色土。未作。10YR5/6 明褐色色シルトロック・10YR3/1 黒褐色シルトの混入。粘性や骨材しまり中等程度ブロッカ (少)。

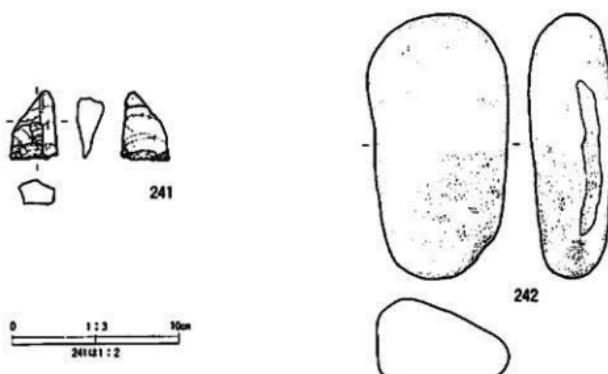
2. 10YR4/2
著者得名シルト土。10YR3/1 黑褐色シルトの混入。粘性や中等度。土中で中等程度ブロッカごく微量混入。

3. 5YR5/3
にふく黒褐色土。粘性中等。10YR6/6 明褐色色シルトブロッカ 2%混入。

4. 10YR3/1
黒褐色シルト。10YR5/3 にふく黒褐色シルトの混入。粘性中しまりや好い。10YR6/6 明褐色色シルトブロッカ 3%混入。



第57図 22号住居跡・出土遺物(1)



第58図 22号住居跡出土遺物(2)

<柱穴> 認められない。

<炉> 検出した範囲内では認められなかった。南側壁面と調査区域外に接する部分で貼り床の無い範囲が確認され、壁が認められた。また、土層断面の観察からは南側床面付近から南壁際において焼上粒の混入が確認されたことから、ここに炉がある可能性がある。

遺物（第57・58図・写真図版86）

<検出状況> 床面および埋土から出土した。

<土器> 5点出土した。236は床面から出土した中形の深鉢形土器破片で、刷部には地文のみ施される。237は埋土から出土した深鉢形土器で胴部には充填繩文による文様が施文される。239は写真のみの掲載であるが、刷部に充填繩文が施される。これらは大木10式の特徴を持つ。

<石器> 2点出土した。241はユーズド・フレイクで基端部に二次加工が施される。242は磨石である。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉であると考えられる。

23号住居跡

造構（第59図・写真図版25）

<位置> 調査区北側、斜面下位のⅡ D 3 d グリッドに位置する。

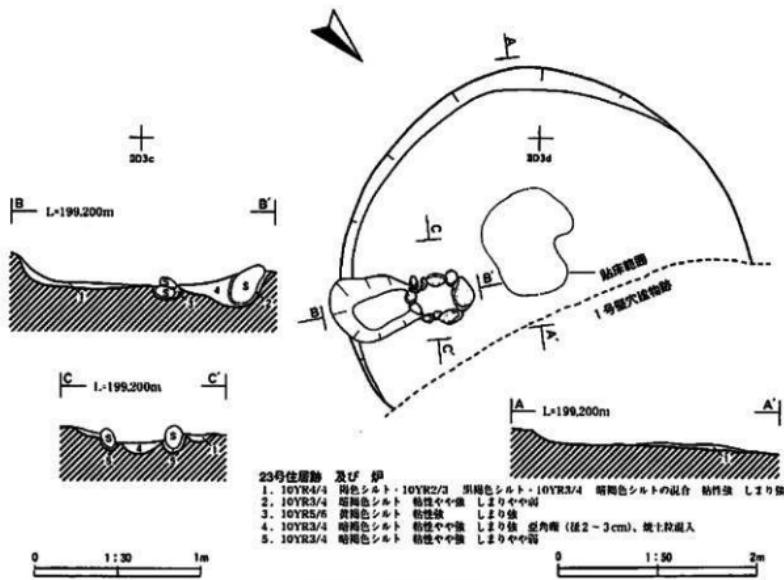
<検出状況・遺構関係> 表土除去後のV層中で暗褐色の深いプランとして検出した。北東側で1号堅穴建物跡と重複し、これにより切られる。

<規模・形状> 長径416cm、短径-250cmのはば円形を呈するものと思われる。北東側で1号堅穴建物跡と重複しているため、短径（南-北方向の規模）は残存値である。主軸方向は南東-北西である。

<埋土> 2層に細分され、褐色-黄褐色・黒褐色シルトの混合土で構成される。

<壁・床> 壁高は、残存値で東壁(5)cm、西壁15cm、南壁6cm、北壁1cmを測る。床面はV層黄褐色シルト層まで掘り込んで構築されている。床面の中央付近では107cm×90cmの範囲で貼り床が認められ、ややしまる。

<柱穴> 認められない。



第59図 23号住居跡

<炉> 床面南東側で石圓炉+浅い掘り込み部からなるがを1基検出した。石圓炉は長径70cm×短径50cmを測り、10~30cm大の礫を円形に配している。炉内に焼土は認められず、暗褐色シルト中に焼土粒をごく微量に認めるのみである。掘り込み部は長径76cm×短径60cmの不整な指円形で、石圓部より3cmほど深く掘り込まれている。

遺物

<検出状況> 出土遺物はない。

遺構の時期

遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出した層位などから縄文時代中期末葉であると考えられる。

24号住居跡

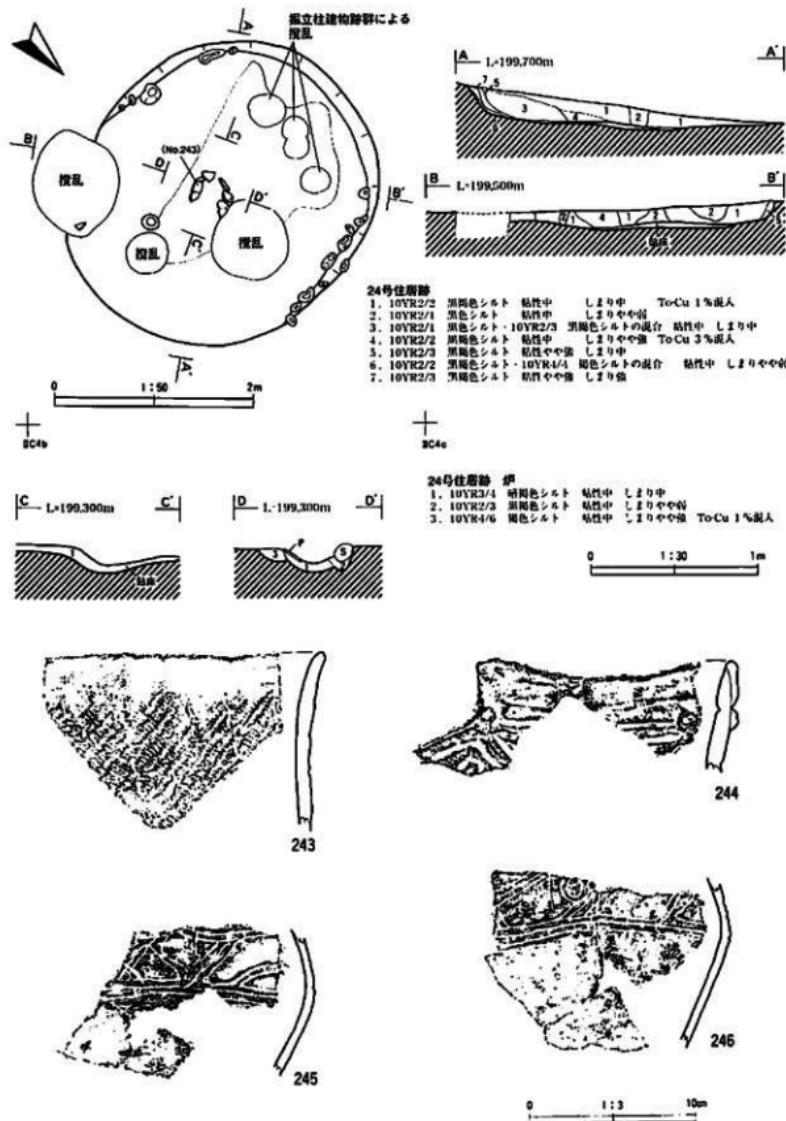
遺構 (第60図・写真図版26)

<位置> 調査区東側、斜面下位のII C 3 b グリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後のIV層中で黒褐色のプランとして検出した。柱穴群と重複し、これらにより切られる。

<規模・形状> 長径(315)cm、短径285cmのほぼ円形を呈する。南東側で新期の土坑と重複しており、南北東~北西方向の規模は推定値である。

<埋土> 7層に細分され、To-Cuを含む黒褐色シルト主体で構成される。



第60図 24号住居跡・出土遺物

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁12cm、西壁25cm、南壁10cm、北壁15cmを測る。床面はV字黄褐色シルト層まで掘り込んで構築されている。床面は全体的に平坦で、炉の周辺を中心約130×140cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が認められる。また、炉の西側に接する床面が約50×50cmの範囲で非常に硬く締まっている。

＜周溝＞ 墓跡に径10~20cm、深さ10cmほどの小規模な柱穴跡が残り、ほぼ一列するのが認められた。

＜柱穴＞ 認められない。

＜炉＞ 床面南東側に土器片石圓が1基検出した。長径(47)cm×短径42cmの範囲に土器片6点と10~18cm大の礫2点を使用して炉を構築している。内部に焼土は確認されなかった。

遺物(第60図・写真図版86)

＜検出状況＞ 炉、埋上から出土した。

＜土器＞ 4点出土した。244は炉から出土した深鉢形土器片で、胴部には原体の縦回転による地文と、絞繩文が施される。246・247は埋土から出土した壺形土器で、沈線によるモチーフが描かれる。上腹内Ia式に相当するものである。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉~後期初頭であると考えられる。

25号住居跡

遺構(第61図・写真図版27)

＜位置＞ 調査区北東側、斜面下位のII C 2 c グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ IV層中で暗褐色の深いプランとして検出した。調査区東側の柱穴群と重複し、これらによって切られる。

＜規模・形状＞ 長径(300)cm、短径(281)cmのほぼ円形を呈するものと思われる。斜面下側にあたる北東側を削平されており、規模は推定値である。

＜埋土＞ 上部を削平されており、詳細は不明である。黒褐色シルトと暗褐色シルトの混合土で構成される。To-Cuをごく少量含む。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁4cm、西壁18cm、南壁13cm、北壁11cmを測る。床面はV字黄褐色シルト層まで掘り込んで構築されており、床面は全体的に平坦である。炉の周辺を中心として長径120cm×短径100cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が施され、硬くしまっている。

＜柱穴＞ 認められない。

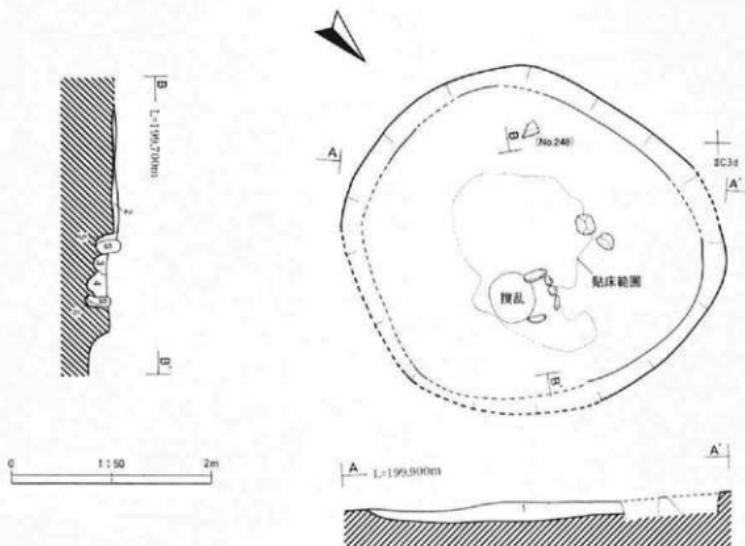
＜炉＞ 床面中央部に石圓炉を1基検出した。がの南側半分を中・近世の柱穴群に切られており、残存状体は不良である。径40cmの範囲に、隅丸円形状に8~20cmの礫を配し、炉としている。底面に焼土は確認されなかった。

遺物(第61・62図・写真図版87)

＜検出状況＞ 炉および埋上から出土した。

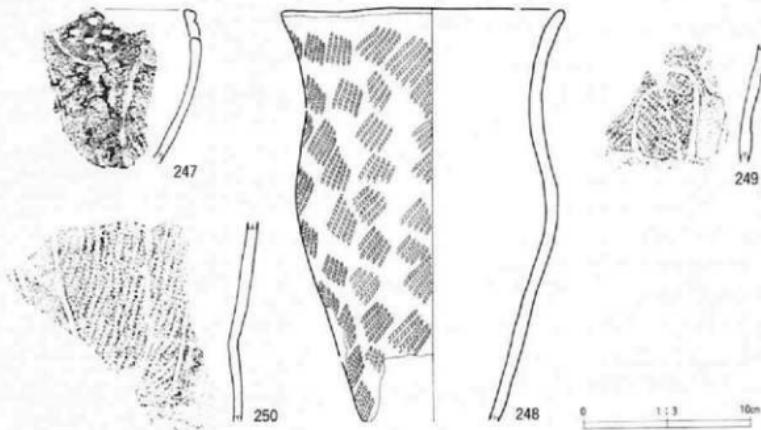
＜土器＞ 4点出土した。248は炉埋上から出土した浅鉢形土器で、口縁部に波状突起・竹管刺突文を持つ。250は埋土から出土した深鉢形土器で、胴部に磨消し繩文を持つ。大木10式土器の特徴を持つものである。

＜石器＞ 3点出土した。251はスクレイバー類、252は凹石である。253は石材礫で、表面に被熱を受けている。

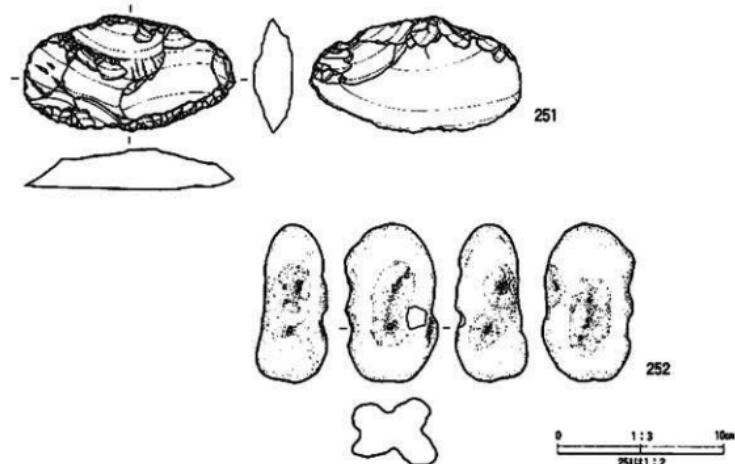


25号住居跡 及び 罫

- | | | |
|-------------------|-------|--|
| 1. 10YR4/2 黄褐色シルト | 粘性不や弱 | しまりやや弱 10YR2/2黒褐色、10YR5/6黄褐色シルトブロック数在 To-Cu 2%混入 |
| 2. 10YR2/2 黄褐色シルト | 粘性中 | 粘性やや弱 しまり強 To-Cn (柱1mm程度) 1%混入 |
| 3. 10YR2/2 黄褐色シルト | 粘性中 | しまりやや弱 7.5YR5-6明褐色塊土粒、瓦化物各1%混入 |
| 4. 10YR2/2 黄褐色シルト | 粘性中 | しまり弱 地山ブロック2%、炭化物、埴土粒各1%混入 |
| 5. 10YR3/4 黄褐色シルト | 粘性やや強 | しまりやや弱 炭化物ごく微量混入 |
| 6. 10YR4/4 黄褐色シルト | 粘性中 | しまり中 |



第61図 25号住居跡・出土遺物(1)



第62図 25号住居跡出土遺物(2)

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

26号住居跡

造構 (第63図・写真図版28)

＜位置＞ 調査区東側、斜面下位のⅡB3dグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ IV層中で暗褐色の円形プランとして検出した。検出時点では床面であり、残存状態はきわめて不良である。調査区南側が調査区域外にかかる。

＜規模・形状＞ 長径475cm、短径-386cmのほぼ円形と思われる。残存状態が不良であり、調査区南側が調査区域外にかかっているため規模は推定値である。主軸方向は東～西である。

＜埋土＞ 黒褐色～暗褐色シルトを主体として構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁10cm、西壁8cm、南壁12cm、北壁13cmを測る。床面はIV層暗褐色シルト層中に構築されている。床面は全体的に平坦で、とくに継まりはない。貼り床は認められなかった。

＜柱穴＞ 認められない。

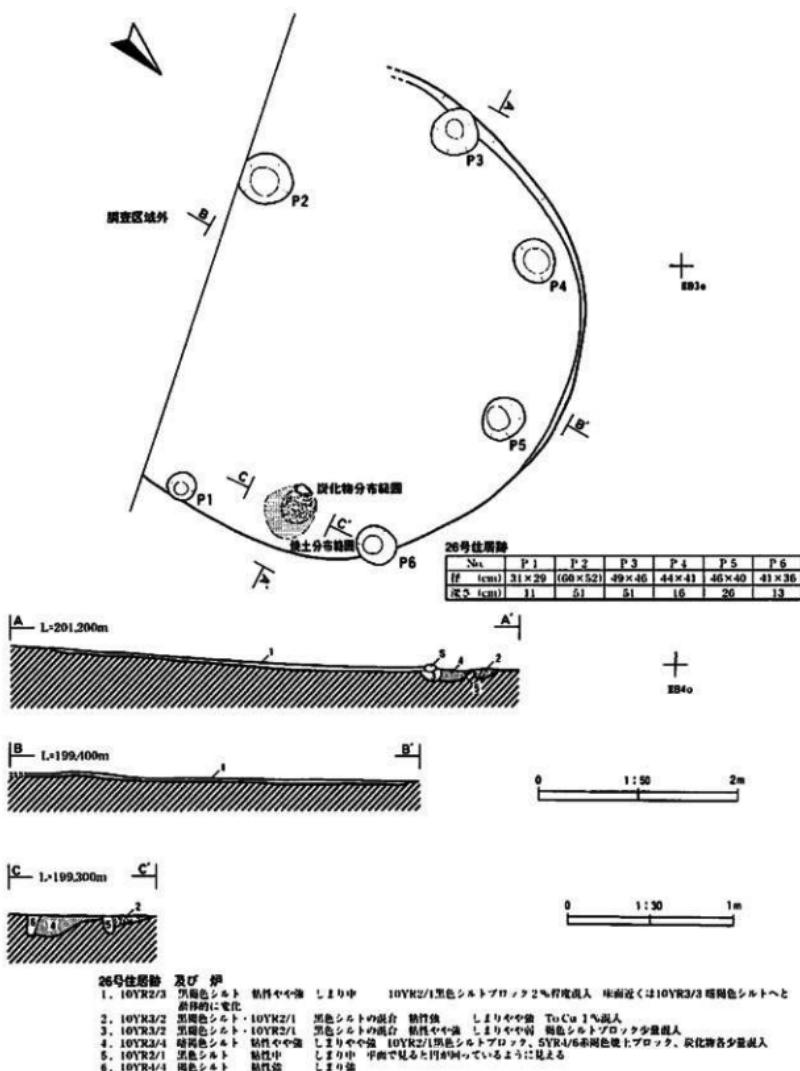
＜炉＞ 床面中央部に焼土粒が淡く分布する範囲を検出した。削平により残存状態は不良であるが、炉であった可能性がある。形態など詳細は不明である。

遺物

＜検出状況＞ 遺物は出土していない。

造構の時期

出土遺物がないため、詳細は不明であるが、検出層位から判断して縄文時代中期末葉～後期初頭であると



第63図 26号住居跡

考えられる。

27号住居跡

遺構（第64図・写真図版29）

＜位置＞ 溝充区北側、斜面下位のⅠ D 9 a～Ⅱ D 1 a グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のV層中で黒褐色の円形プランとして検出した。30号住居跡と上下の重複関係にあり、これにより切られる。斜面下方は削平されており、浅くなっている。

＜規模・形状＞ 長径940cm、短径912cmの南北に主軸を持つ円形を呈する。

＜埋土＞ 30号住居跡が上位に構築されているため、側縁部を残すのみである。残存する壁際の埋土は6層に細分され、To-Cuを含むにぶい黄褐色～暗褐色・黒色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存高で、東壁23cm、西壁31cm、南壁57cm、北壁2cmを測る。床面はV層黄褐色シルト層に構築されている。床面は平坦で特に硬化面は認められないが、疊層の直上まで掘り込まれ全体的に堅硬である。長径370×350cm、厚さ1～8cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が認められた。

＜開溝＞ 墓跡をほぼ一場する。開口部8～15cm、深さ4～14cmで、一定ではない。黒～暗褐色シルトの單層で構成される。

＜柱穴＞ 炉を中心とする主軸と対照に7本の柱穴が認められた。これら7本の柱穴のうち、軸線上のP 4を除いたP 1、P 2、P 3、P 5、P 6、P 7で、丸太材を半分に断ち割った半截木柱痕が確認されている。この柱の痕跡は、平らな面を外側に向けて配される傾向が認められた。柱の規模は70～110cm・深さ73～94cmを測り、柱穴の埋土は暗褐色～黄褐色シルト主体で構成される。半截木柱痕はいずれも埋土の下半部近くまで掘り下げを行わないで確認することができなかつたことから、柱材が抜き取られていた可能性が考えられる。

また、P 4は新規の柱穴P 12と重複しており、これによって切られていることから、拡張されていたことが判明した。この住居跡はのちにP 12を含むP 8、P 9、P 10、P 11、P 13、P 14、P 15、P 16へと柱配置が変化し、壁際を廻るものへと変化している。

＜炉＞ 北側壁面に接して複式炉を検出した。石岡炉+石岡部+掘り込み部からなる。石岡炉は長径50cm×短径35cmの長方形、石岡部は長径70cm×短径45cmの横円形、掘り込み部は長径75cm×短径68cmの横円形を呈する。

遺物（第65・66図・写真図版87・88）

＜検出状況＞ 床面柱穴、床面、埋土から出土している。

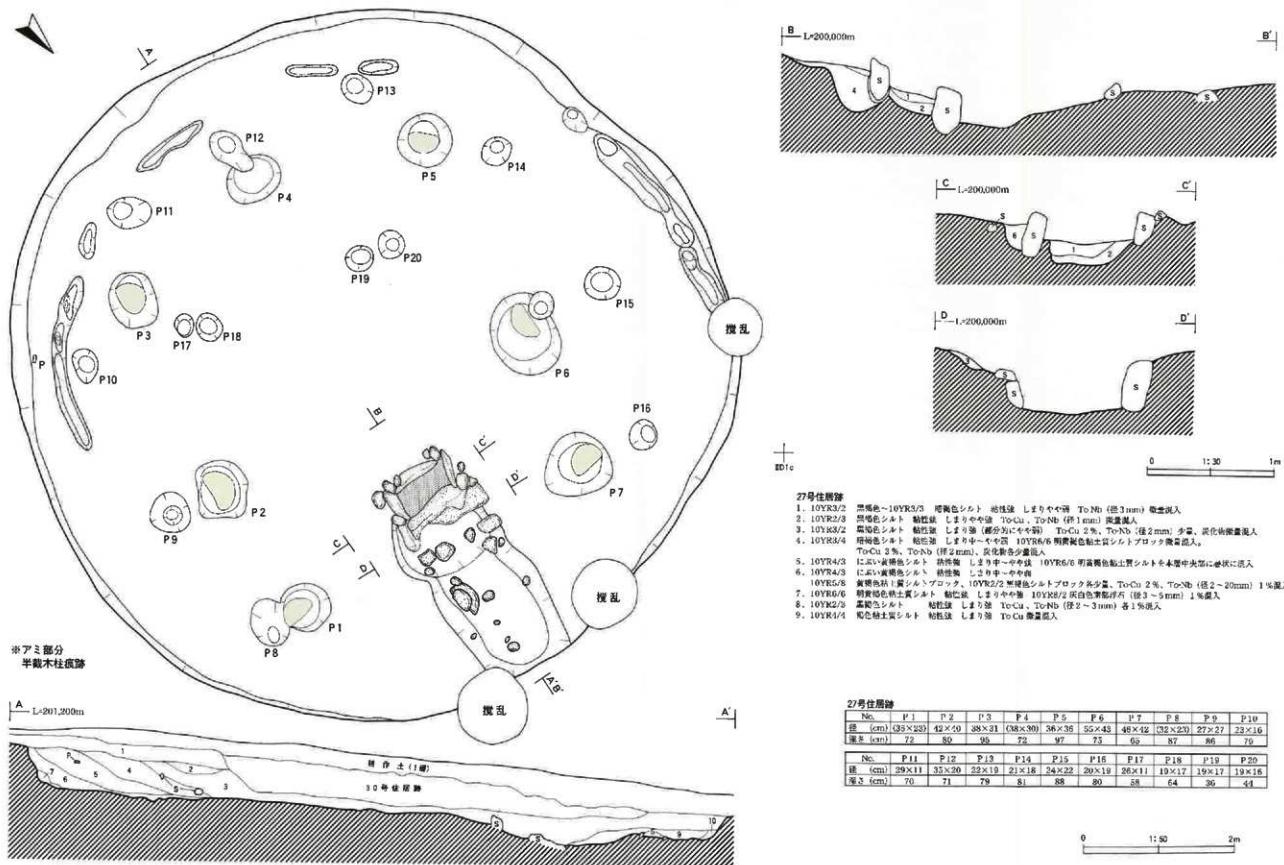
＜土器＞ 10点が出土した。255は床面柱穴P 10から出土した深鉢形土器片光磨繩文・ヒレ状突起を持つ。257はP 20から出土した深鉢形土器片である。これらは中期に位置付けられるものと考えられる。

＜土製品＞ 2点が出土した。254床面から出土したミニチュア形土器、265はキノコ形土製品である。

＜石器＞ 5点出土した。266は横形石匙、267は石鎌、268・269は剝片である。270は安山岩製の円錐である。

遺構の時期

出土遺物から繩文時代中期末葉であると考えられる。



第64図 27号住居跡(1)



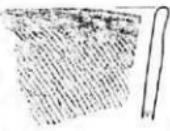
254



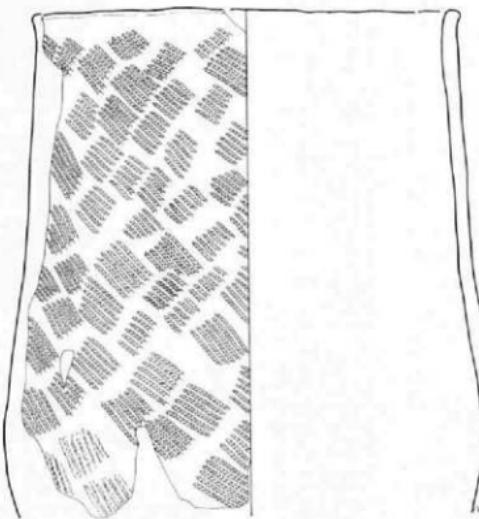
255



256



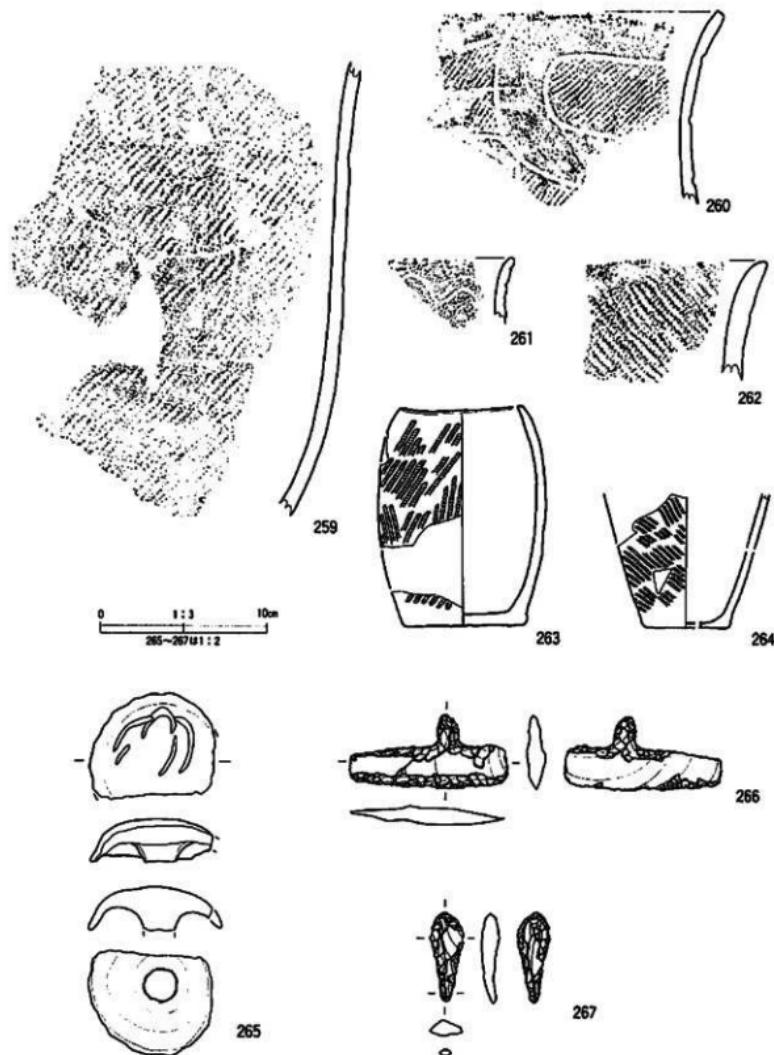
257



258

0 1:3 10cm
254:1:2

第65図 27号住居跡出土遺物(1)



第66図 27号住居跡出土遺物(2)

28号住居跡

遺構（第67図・写真図版30）

＜位置＞ 調査区西側、斜面上位の I C 5 c グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ Ⅲ層中で黒褐色の円形プランとして検出した。28号住居跡と上下の重複関係にあり、これを切っている。また、1～2号階し穴状遺構と重複し、これらを切る。

＜規模・形状＞ 長径602cm、短径490cmの北東～南西に主軸を持つ梢円形を呈する。

＜埋土＞ 8層に細分され、上位はTo-Cuを少量含む黒色シルト主体、下位はTo-Cuと炭化物を少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁25cm、西壁55cm、南壁24cm、北壁37cmを測る。床面はV層黄褐色シルト層中に構築されている。径約400cm、深さ2～8cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が認められた。床面は全体的に平坦で、とくに縮まりはない。

＜柱穴＞ 壁際に複数の小柱穴が覗くものである。P 1～P 14が想定される。

＜炉＞ 東側床面から斜位の上器埋設炉が検出された。深鉢形土器を斜めに据えた土器埋設炉で、複式炉の変形のような形態を呈するものである。こののは28号住居跡の複式炉の掘り込みを埋め戻して作られており、複式炉とは明らかに時期差がある。土器埋設炉検出時、炉の上部で46×24cmの理が確認されている。炉の土器は径20cmほどで、ほぼ同じ規模の掘り方に口縁部を上方に向けて37°斜めに傾けて埋設している。土器内部には暗褐色～灰黃褐色の灰が堆積しており、微量の橙色焼土粒が混入している。また、炉の土器周辺には同様の灰黃褐色灰が長径70cm×短径50cm、厚さ4cmの範囲で認められ、一部が焼土の上位にのる。焼土は土器の口縁部周辺に長径58cm×短径40cm、厚さ最大11cmにわたって形成されている。

遺物（第68・69図・写真図版89・90）

＜検出状況＞ 炉および埋土から出土している。

＜土器＞ 15点が出土した。271は炉埋設土器で胴部に原体の楕円軸による繩文が施される。272は床面から出土した深鉢形土器片で、胴部に充填縄文により文様が施される。大木10式の特徴を持つ。

＜土製品＞ 286はミニチュア形土器で、胎土に金雲母を少量含む。

＜石器＞ 6点出土した。287は楔形石器、288はユーズド・フレイク、289は磨製石斧である。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉であると考えられる。

29号住居跡

遺構（第70図・写真図版30）

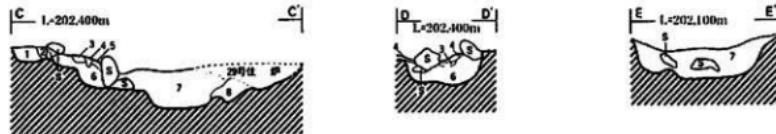
＜位置＞ 調査区西側、斜面上位の I C 5 c グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 29号住居跡の床面積合中に異なる柱穴配置と炉を確認したことから検出した。29号住居跡と上下の重複関係にあり、これにより切られる。また、1～2号階し穴状遺構と重複し、これらを切る。

＜規模・形状＞ 長径(543)cm、短径(506)cmの北東～南西に主軸を持つ梢円形を呈する。

＜埋土＞ 29号住居が本遺構の上位にプランを同じくして構築され、本遺構が切られていることから、埋土は残存しない。

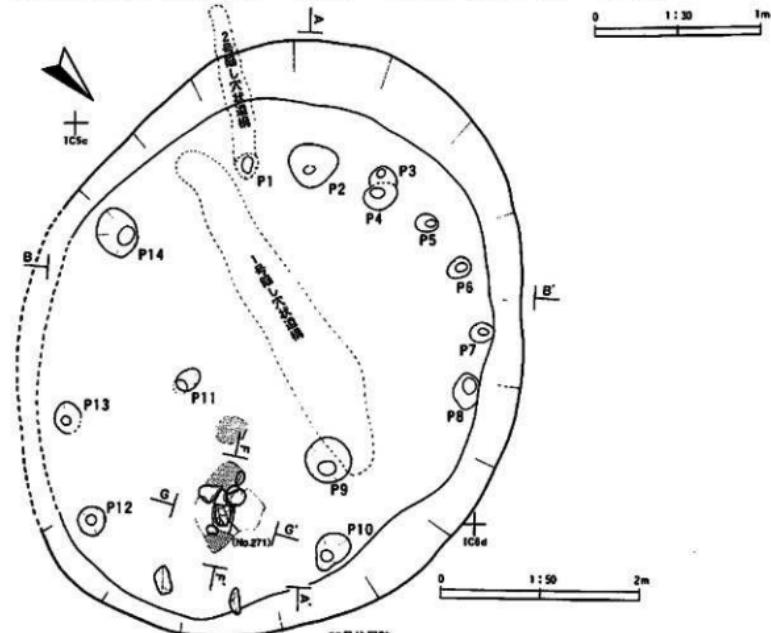
＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁25cm、西壁55cm、南壁24cm、北壁37cmを測る。床面はV層黄褐色シルト



29号住居跡 番

- | | | | | | | | | | |
|-------------|-------|-------|--------|----------|-------------|--------|-------|--------|-----------|
| 1. 10YR3/4 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまりやや弱 | To Cu 面入 | 5. 7.5YR3/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 壁上枝・炭化物混入 |
| 2. 10YR3/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまりやや強 | 土表面最高段 | 6. 10YR1/6 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 | |
| 3. 7.5YR4/6 | 褐色地上 | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | | 7. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性やや弱 | しまりやや弱 | 壁上枝・炭化物混入 |
| 4. 10YR3/3 | 褐色シルト | 粘性やや弱 | しまり中 | | 8. 10YR3/3 | 褐色シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | |

0 1:30 1m



28号住居跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
径 (cm)	(27×23)	50×44	(28×17)	(35×26)	23×17	25×20	25×20
深さ (cm)	55	30	43	48	30	39	41

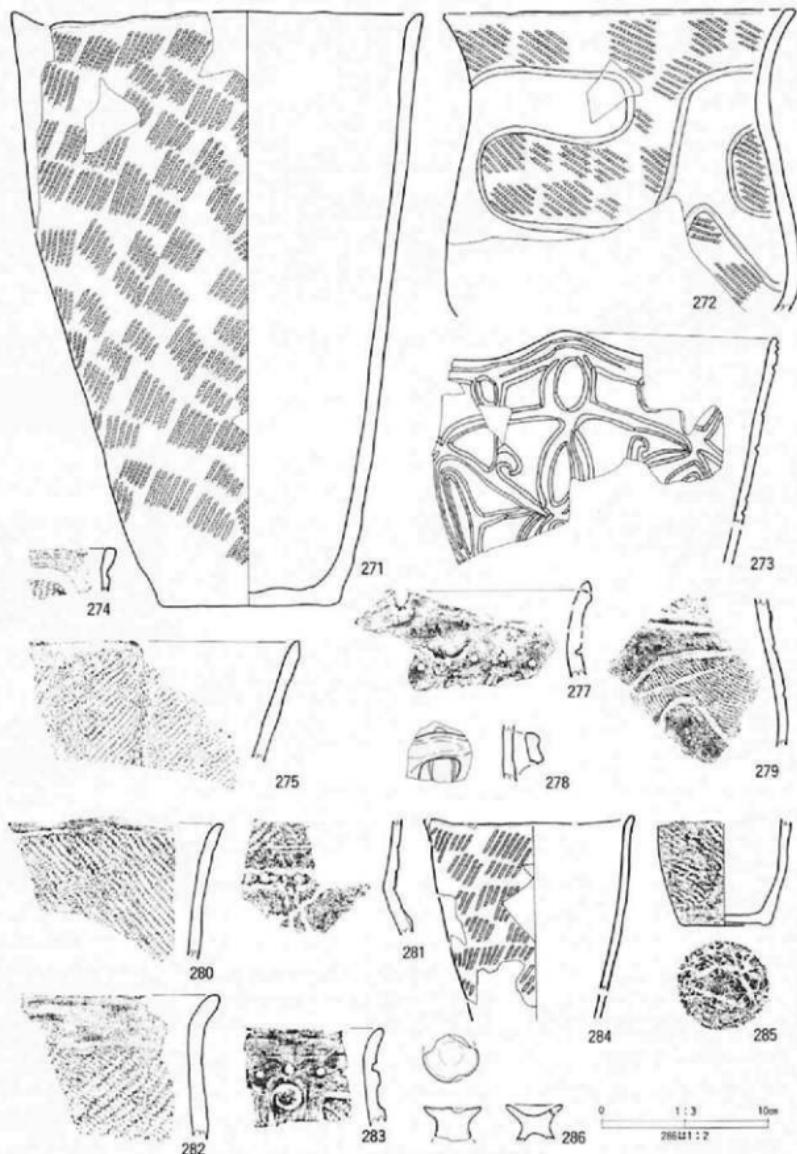
No.	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14
径 (cm)	36×27	47×46	40×32	26×19	29×28	(30×27)	48×42
深さ (cm)	15	50	16	22	17	36	48

29号住居跡 番

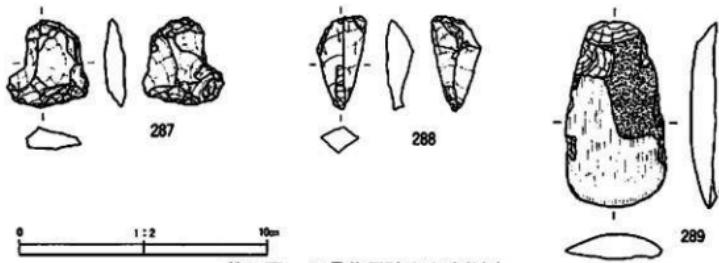
- 10YR3/3 褐褐色シルト しまり弱
- 10YR6/2 有機質を含むシルト 粘性やや強 しまり中
- 5.5YR4/6 褐褐色地上 粘性弱 しまりやや弱
- 4.10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 土壌の上と同じ
- 5.10YR4/4 黄褐色灰 粘性やや強 しまり中 土壌を含むために白っぽく見える
- 6.7.5YR3/3 褐褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱 壁上・粘土混在
- 7.7.5YR6/6-7.5YR3/3 褐褐色シルトの混合 粘性弱 しまり弱 全体的にバサバサしている
- 8.5YR4/6 小褐色地上 粘性弱 しまりやや弱

0 1:30 1m

第67図 28号住居跡



第68図 28号住居跡出土遺物(1)



第69図 28号住居跡出土遺物(2)

層中に構築されているが、東側の床面はIV層漸移層となっている。床面中央部より深約400cm、厚さ2~8cmの範囲で暗褐色シルトによる貼り床が認められた。床面は全体的に平坦で、とくに綺まりはない。

<柱穴> 炉を中心とする主軸と対照にP1~P5の5本の柱が墜る。

<炉> 東側床面に接して複式炉が検出された。石開炉+石圓部+掘り込み部という構造を持つ。複式炉は長径150cm×短径85cmの掘り込みのなかに石開炉と石圓部を設けるように構築されている。石圓炉は長径44cm×短径35cmの長方形で、底面に焼土は認められない。石圓部は長径57cm×短径34cmの長方形を呈する。

遺物

<検出状況> 遺物は出土していない。

遺構の時間

出土遺物がないことから詳細は不明であるが、検出した層位などから縄文時代中期末葉であると考えられる。

30号住居跡

遺構 (第71図・写真図版31)

<位置> 調査区北側、斜面下位のI D10aグリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後の最上層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。27号住居跡と上下の重複関係にあり、これを切っている。

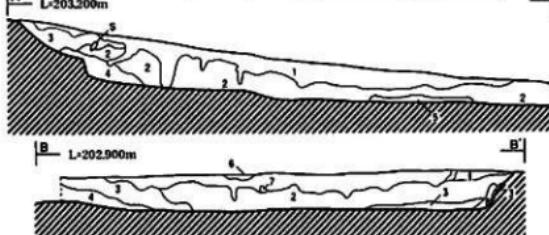
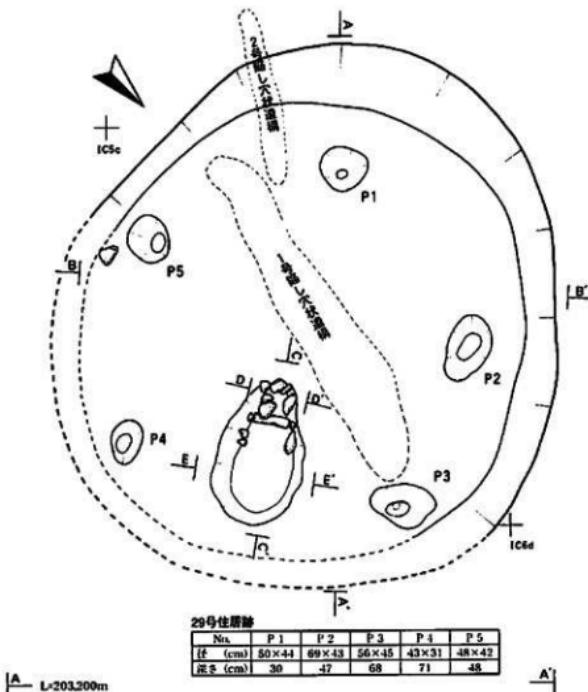
<規模・形状> 長径696cm、短径530cmの北東-南西に主軸を持つ梢円形を呈するものと思われる。

<埋土> 4層に細分され、上位は黒色-黒褐色シルト主体で構成され、上位に十和田a小ブロックをわずかに含む。下位は黒色シルトブロックを少數含む灰黄褐色シルト主体で構成される。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁13cm、西壁30cm、南壁18cm、北壁13cmを測る。床面は27号住居跡の埋没土中に構築されている。床面は全体的に平坦で、それほどしまるものではなく、硬化面は特に認められなかった。

<柱穴> 複数の小柱穴が不規則に存在する。主柱穴としてP1~P5が想定される。

<炉> 北東側床面から石圓土器埋設炉が検出された。深体形土器をほぼ同じ規模の振り方に正位の状態で埋設したもので、周辺には赤褐色を呈する現地性の焼土が長径122cm×短径70cm、厚さ10cmの範囲で形成されている。この焼土の周囲には径10~15cmほどの礫が散在しており、焼土の周りを取り巻くような様相を呈している。

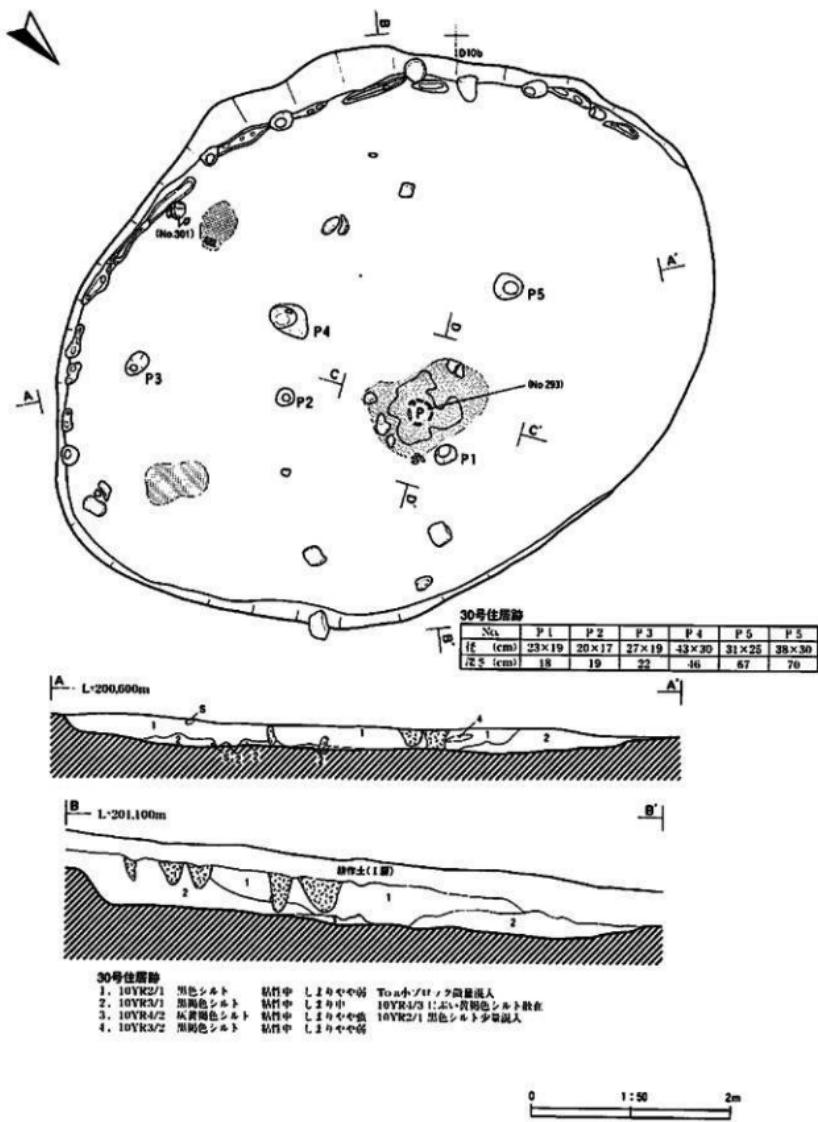


28・29号住居跡

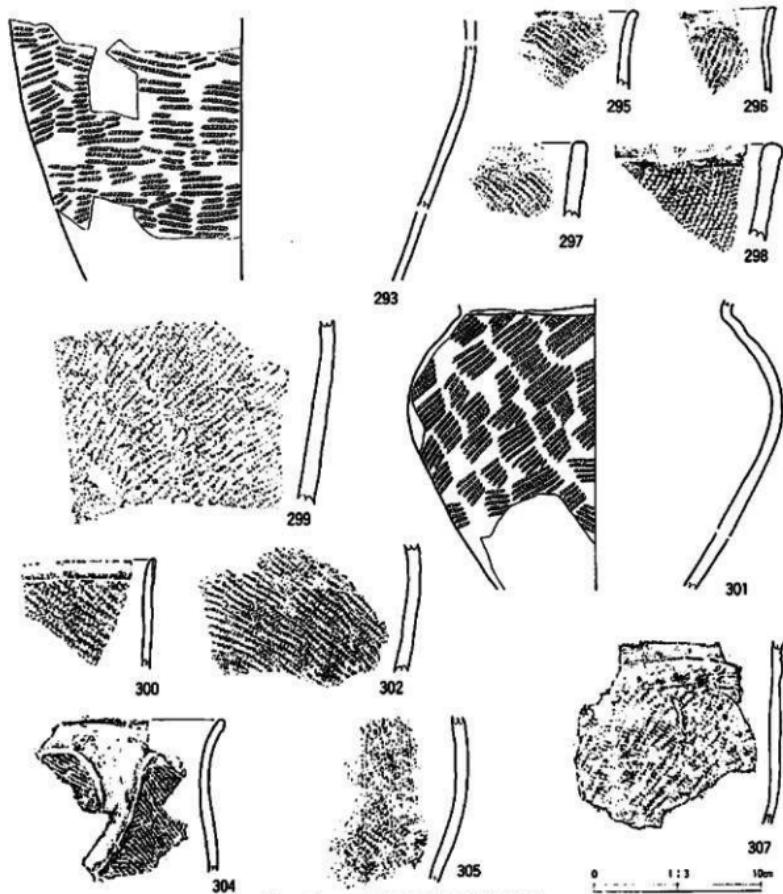
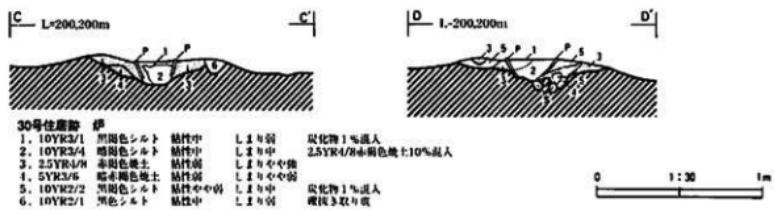
1. 10YR2/1 淡色シート 粘性やや弱 しまりやや弱 ToCu 少量混入
2. 10YR2/1 暗褐色シート 粘性やや弱 しまりやや弱 ToCu 深在 化成物少量混入
3. 10YR2/2 淡褐色シート 粘性やや強 しまりやや強
4. 10YR2/3 暗褐色シート 粘性やや強 しまりやや強
5. 10YR2/3 暗褐色シート 粘性中 しまりやや強
6. 10YR2/2 暗褐色シート 粘性やや弱 しまりやや弱 ToCu , 化成物混入
7. 10YR1.7/1 黒色シート 粘性やや弱 しまりやや弱
8. 10YR4/6 茶色シート 粘性強 しまりやや弱

0 1:50 2m

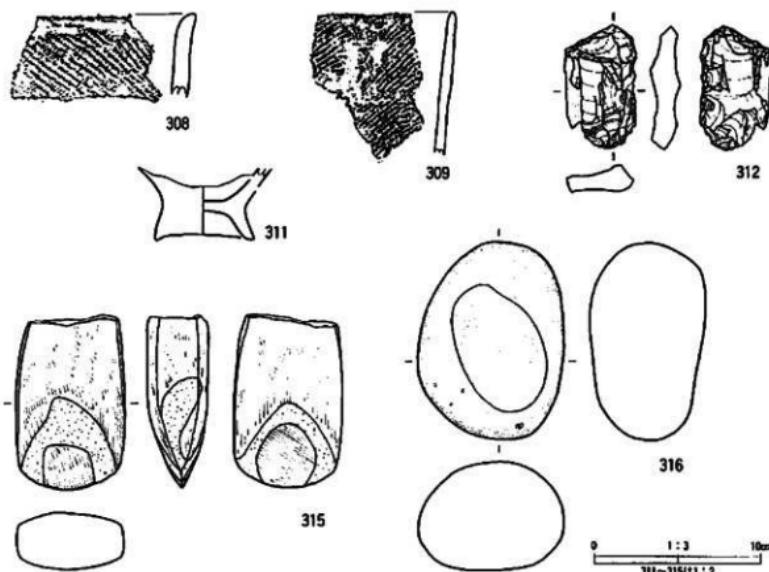
第70図 29号住居跡



第71図 30号住居跡



第72図 30号住居跡出土遺物(1)



第73図 30号住居跡出土遺物(2)

遺物 (第72・73図・写真図版90・91)

<検出状況> 炉、床面P、床面、埋土から出土している。

<土器> 19点出土した。294-297は炉埋土出土の深鉢土器片である。300は床面から出土した深鉢形土器片で、重山線を有する。302は床面柱穴P4から出土した深鉢形土器片である。

<土製品> 311はミニチュア形土器で、内外面赤色染めされる。内面にタール状の付着物が認められる。

<石器> 7点出土した。312は楔形石器、313・314は調片、315は磨製石斧、316は磨石である。317・318は埋土中より出土した円礫である。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

31号住居跡

遺構 (第74図・写真図版32)

<位置> 調査区中央部、斜面中位のIB 6hグリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後のⅢ層上面で黒色の円形プランとして検出した。全体に現代の耕作痕が入っており、残存状態は不良である。

<規模・形状> 長径504cm、短径493cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を見る。

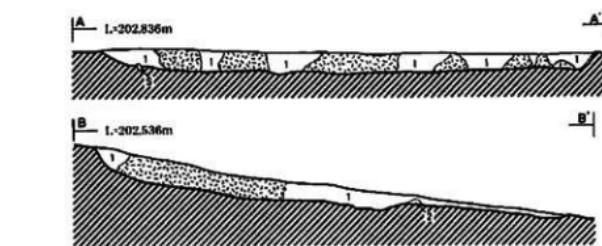
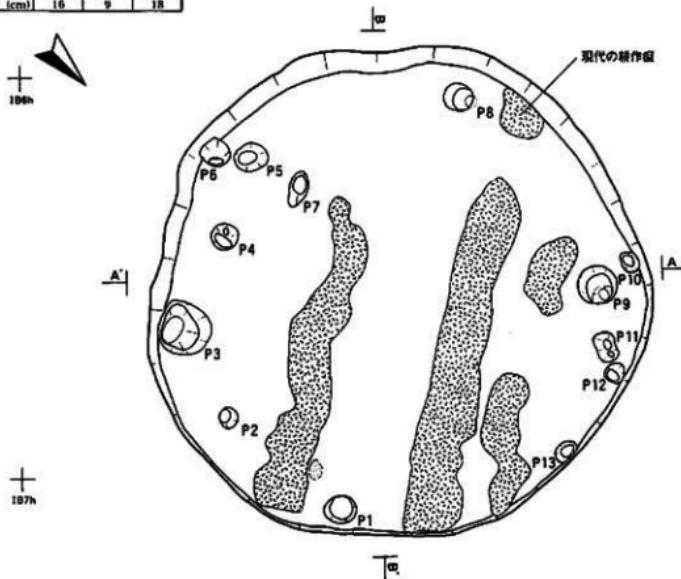
<埋土> 2層に細分され、To-Cuを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

<壁・床> 壁高は残存高で、東壁5cm、西壁22cm、南壁13cm、北壁15cmを測る。床面はⅣ層中に構築され

31号住居跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
幅 (cm)	33×26	22×18	58×53	28×27	35×30	30×30	37×18	36×26	41×39	25×18
奥行き (cm)	32	11	62	18	15	10	6	5	37	11

No.	P 11	P 12	P 13
幅 (cm)	31×18	22×20	25×17
奥行き (cm)	16	9	18

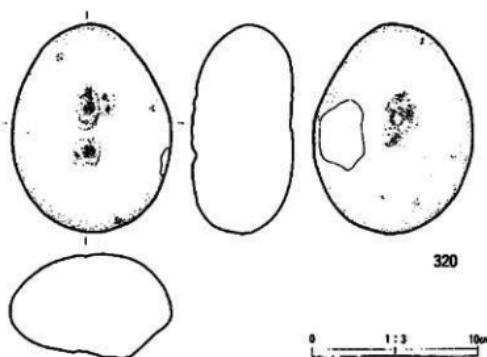


31号住居跡

1. 10YR3/1 黒褐色シート 粘性やや弱 しまりやや弱 To Cu (幅1mm程度) 1%混入
2. 10YR3/3 黄褐色シート 粘性やや弱 しまり中 To Cu (幅1mm程度) 2%混入

0 1:50 2m

第74図 31号住居跡



第75図 31号住居跡出土遺物

ている。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められない。

柱穴 > 複数の小柱穴が不規則に存在する。壁際を巡るような P 1, P 3, P 5, P 8, P 9, P 13が主柱穴を構成していた可能性がある。底面より土器片が数点出土した。

現地性焼土 > 北東側床面から現地性の焼土を検出した。規模は長径20cm×短径13cm、厚さ2cmほどである。焼土は搅乱や削平を受けており、残存状態が悪い。上部を削平されたか跡となる可能性もあるが、柱穴の配置とは一致していないことから詳細は不明である。

遺物 (第75図・写真図版91)

検出状況 > 埋土からのみ出土した。

石器 > 2点が出土した。319は磨製石斧である。320は凹石である。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉であると考えられる。

32号住居跡

遺構 (第76図・写真図版33)

位置 > 調査区中央部、斜面中位の 1B 8 i グリッドに位置する。

検出状況・遺構関係 > 表土除去後の壁面上で黒褐色の円形プランとして検出した。

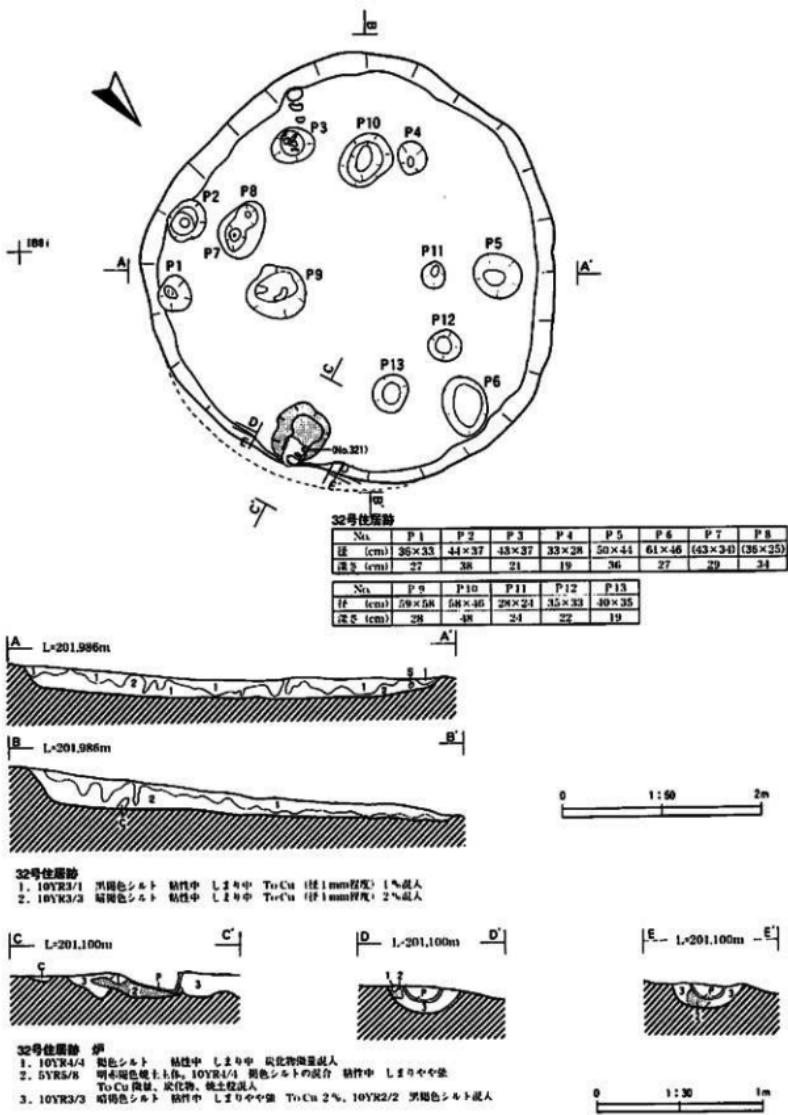
規模・形状 > 長径480cm、短径478cmの北東→南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。

埋土 > 2層からなり、Te-Cuをわずかに含む黒褐色～暗褐色シルト主体で構成される。

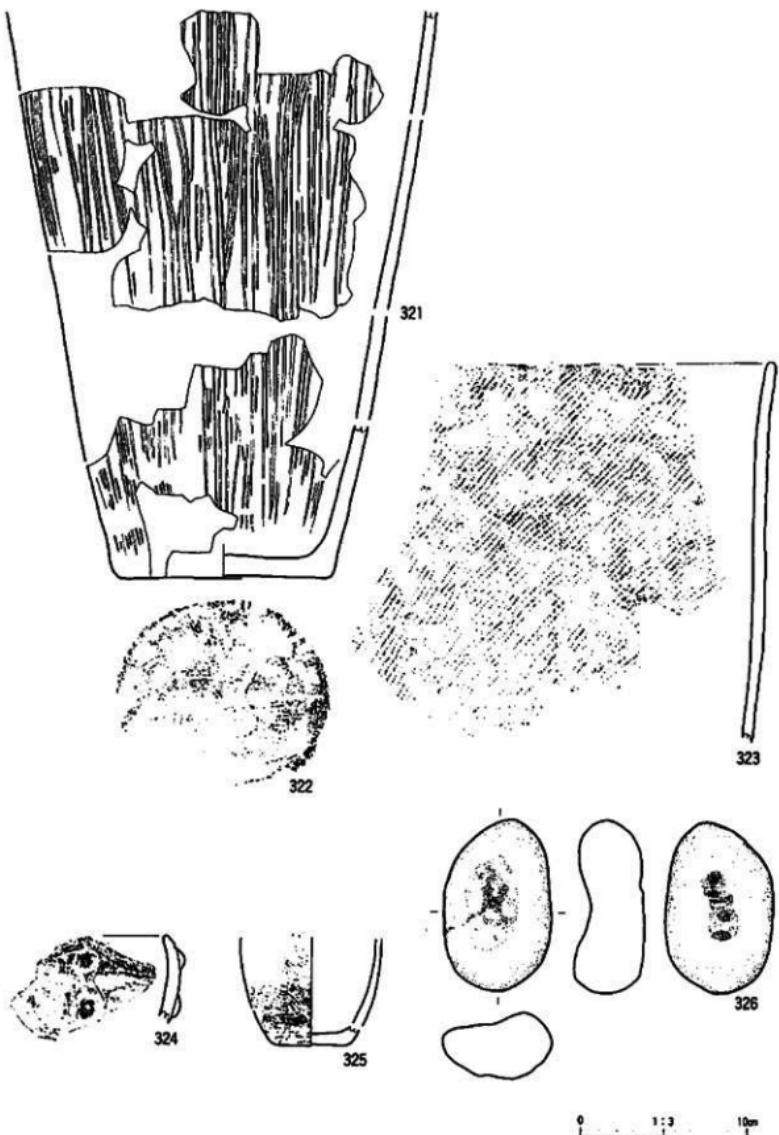
壁・床 > 壁高は残存高で、東壁10cm、西壁30cm、南壁20cm、北壁10cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

柱穴 > P 1 ~ P 13の複数の小柱穴を確認した。規模、深さともばらつきが見られることから、本遺構に伴わないものも混在すると見られる。P 1, P 5, P 6, P 10が主柱穴を構成していた可能性がある。

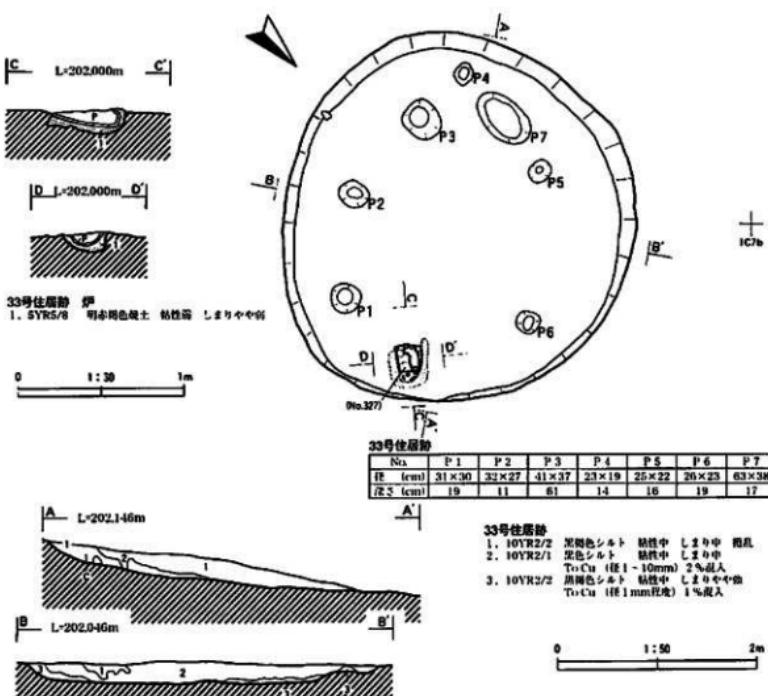
炉 > 北東側床面で深鉢形土器を斜位に据えた土器埋設炉を検出した。炉の土器は径22cmほどで、ほぼ同じ規模の掘り方に円錐部を上方に向けて18° 斜めに傾けて埋設している。土器内部には黒褐色シルトが堆積しており、微量の焼土粒が混入している。焼土は土器の周辺に長径57cm×短径53cm、厚さ最大7cmに



第76図 32号住居跡



第77圖 32号住居跡出土造物



第78図 33号住居跡

わたって形成されている。

遺物（第77図・写真図版92）

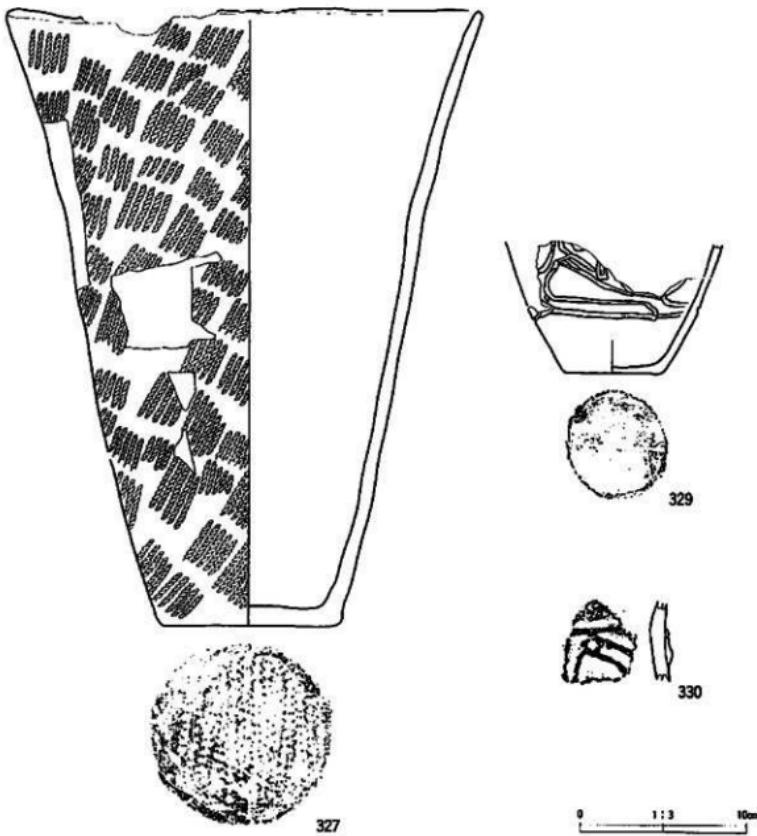
＜検出状況＞ 炉、床面、埋土から出土している。

＜土器＞ 5点出土した。321・322は炉に埋設されていた深鉢形土器片で、内面の焼け弾けが顕著である。323・324は床面から出土した深鉢形土器片で、胎土に金雲母を含む。325は埋土から出土した中形の深鉢形土器で胎土に金雲母を含む。

＜石器＞ 1点のみ出土した。326は埋土下位から出土した凹石である。

造構の時間

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。



第79圖 33號住居跡出土遺物

33号住居跡

遺構（第78図・写真図版34）

＜位置＞ 調査区中央部、斜面中位の I C 7 a グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 長径435cm、短径430cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。

＜埋土＞ 3層からなり、To-Cuをわずかに含む黒色～黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁6cm、西壁4cm、南壁10cm、北壁4cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

＜柱穴＞ P 1～P 7 の7期の柱穴を確認した。がいを中心とする主軸と対照に遡る可能性がある。

＜炉＞ 北東側床面から深鉢形土器を斜位に掘えた土器埋設が検出した。がいの土器は径24cmほどで、ほぼ同じ規模の割り方に口縁部を上方に向けて14° 斜めに傾けて埋設している。土器内部には黒褐～暗褐色シルトが堆積しており、微量の焼土粒が混入している。焼土は土器の周辺を取り巻くように長軸47cm×短軸38cm、厚さ最大約6cmの範囲で形成されている。

遺物（第79図・写真図版93）

＜検出状況＞ 炉および埋土から出土している。

＜土器＞ 6点出土した。327はがいに埋設されていた深鉢土器片で、内面の焼け弾けが顕著である。329は埋土から出土した深鉢形土器片で、胴部に沈線による文様を持つ。十腰内1a式に相当する。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

34号住居跡

遺構（第80図・写真図版35）

＜位置＞ 調査区中央部、斜面中位の I C 8 b グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 長径537cm、短径466cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。

＜埋土＞ 4層からなり、To-Cuをごく少量含む黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁9cm、西壁27cm、南壁14cm、北壁28cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

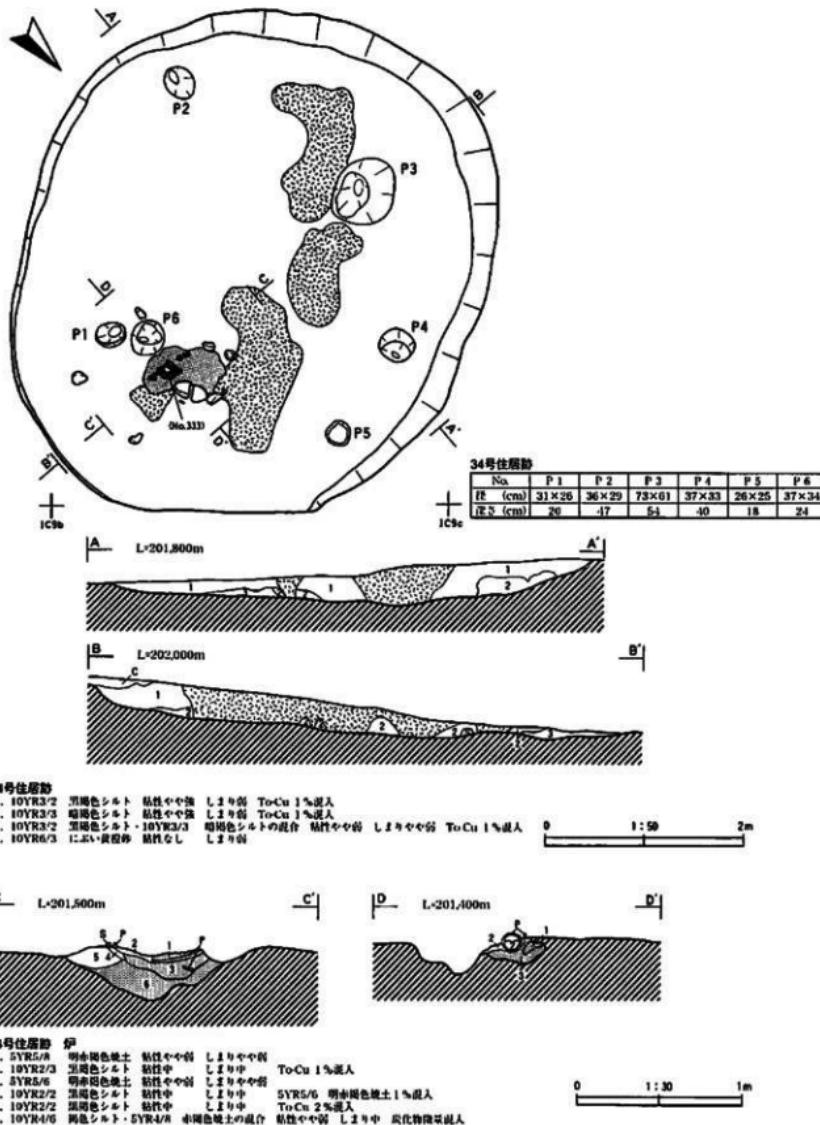
＜柱穴＞ P 1～P 6 の不規則に遡る6基の柱穴を確認した。

＜炉＞ 北東側床面から深鉢形土器を斜位に掘え、焼土の周間に礫を配した土器埋設が検出された。複式がいの変形のような様相を呈する。がいの土器は残存部径18cmほどで、焼土上面に口縁部を上方に向けて15°斜めに傾けて埋設されている。土器内部には黒褐～暗褐色シルトが堆積しており、微量の焼土粒が混入している。焼土は土器の周辺を取り巻くように長軸83cm×短軸43cm、厚さ最大約23cmの範囲で認められ、口縁部側床面に特に広く形成されている。土器の口縁部から、焼土の形成される範囲には径12～35cmほどの礫が数個、縁辺を取り囲むように配置される。

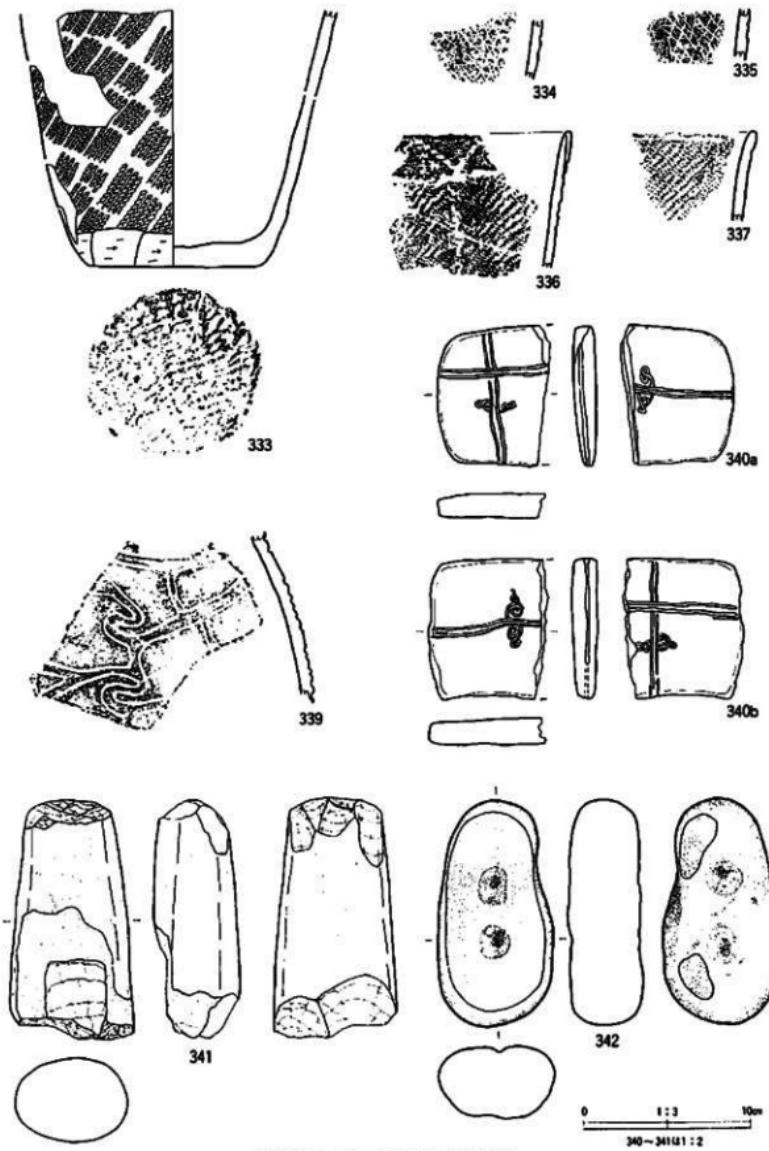
遺物（第81図・写真図版93・94）

＜検出状況＞ がいおよび埋土から出土している。

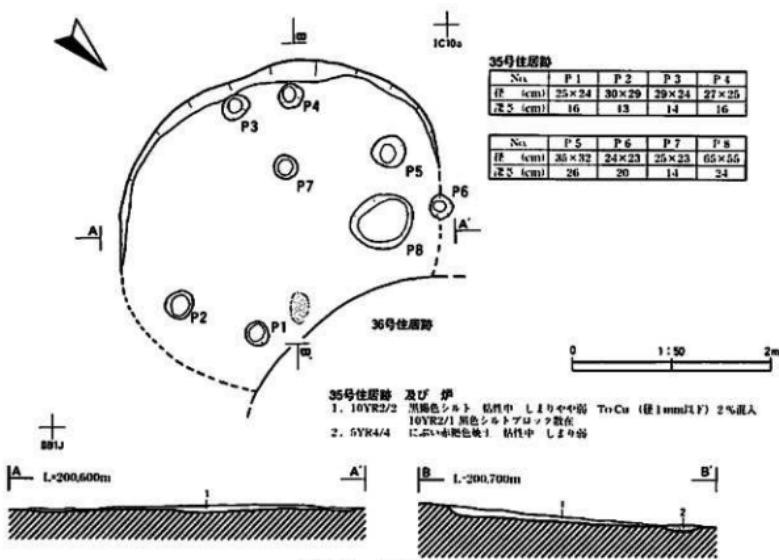
＜土器＞ 7点出土した。333はがいに埋設されていた深鉢土器片で、内面の焼け弾けが顕著である。335は埋



第80図 34号住居跡



第81图 34号住居跡出土造物



第82図 35号住居跡

土から出土した深鉢形土器片で、胎土に金雲母を少量含む。

<土製品> 2点が出土した。340a.bは板状土偶の体部と推測される。両者は、同一個体と考えられる。

<石器> 2点が出土した。341は埋土1層から出土した磨製石斧である。342は凹磨石で、表裏中央部に浅孔を持つ。

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

35号住居跡

造構（第82図・写真図版36）

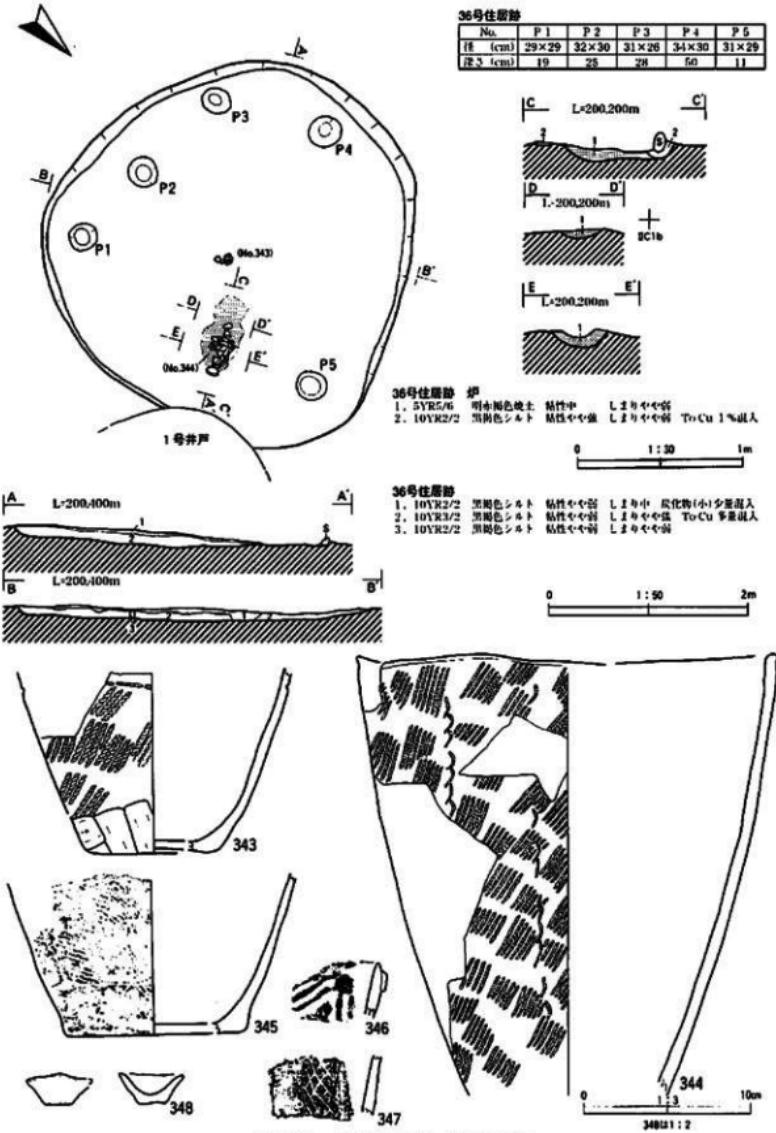
<位置> 調査区東側、斜面中位のI B10 j グリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後の斜面上で黒褐色の円形プランとして検出した。北側で30号住居と重複し、これにより切られる。

<規模・形状> 長径(340)cm、短径(322)cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。長径の規模は推定値である。

<埋土> 上部をほとんど削平されており、詳細は不明である。残存する埋土はTo-Cuをわずかに含む黒褐色シルト主体で構成される。

<盤・床> 盤高は残存値で、東盤2cm、西盤8cm、南盤2cm、北盤2cmを測る。床面は全体的に平坦で、



硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

柱穴 P 1～P 8 の 8 基の柱穴を確認した。

炉 北東側床面から長径32cm×短径18cm、深さ3cmの範囲で現地性の焼土を検出した。上部が削平を受けており、形態は不明であるが、炉跡であった可能性がある。

遺物

検出状況 出土遺物はない。

遺構の時期

遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、検出した層位から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

36号住居跡

遺構 (第83図・写真図版37)

位置 調査区東側、斜面中位の II C 1 a グリッドに位置する。

検出状況・重複関係 表土除去後のⅢ層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。南側を35号住居跡と重複し、これを切る。また、東側で1号戸門跡と重複し、これにより切られる。

規模・形状 長径(380)cm、短径365cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。長径の規模は推定値である。

埋土 3層からなり、To-Cuを含む黒褐色シルト主体で構成される。

壁・床 層高は残存値で、東壁1cm、西壁9cm、南壁10cm、北壁4cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

柱穴 墓際を不規則に巡るP 1～P 5の5基を確認した。

炉 北東側床面から深鉢形土器を斜位に据え、焼土の周間に環を配した土器埋設炉を検出した。複式炉の変形のような様相を呈する。炉の土器は径20cmほどで、焼土上面に口縁部を上方に向けて10°斜めに傾けて埋設されている。焼土は土器の周辺を取り巻くように長軸80cm×短軸39cm、厚さ最大約9cmの範囲で認められ、口縁部側床面に特に広く形成されている。炉の土器は底部を欠いており、14×8cmの環が底部を塞ぐように配されている。

遺物 (第83図・写真図版94)

検出状況 床面および埋土から出土している。

土器 5点出土した。343は床面から出土した深鉢土器片である。347は埋土から出土した深鉢形土器片で、胴部に格条体による撚糸文が施される。胎土には金芸母を少量含む。

土製品 348はミニチュア形土器で、胎土に金芸母を少量含む。

遺構の時期

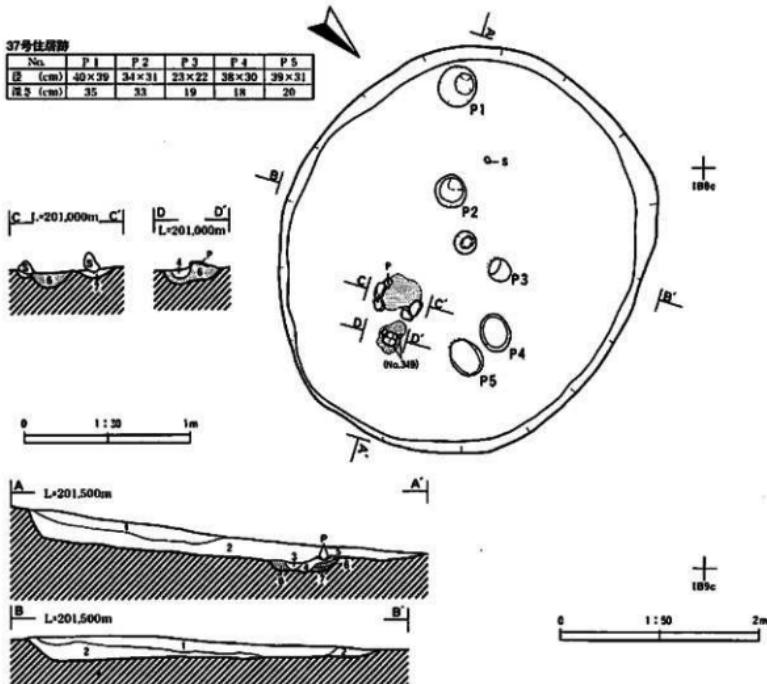
出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

37号住居跡

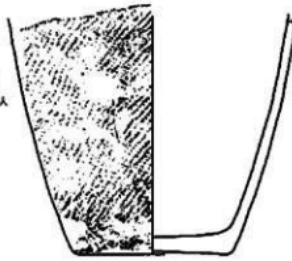
遺構 (第84図・写真図版38)

位置 調査区南東側、斜面中位の I B 8 b グリッドに位置する。

検出状況・重複関係 表土除去後のⅣ層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。



- 37号住居跡 及び 土器
1. 10YR22/1 明褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 Tu Cu 錫鉛混入
 2. 10YR23/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 Tu Cu、灰化物各微量混入
 3. 10YR22/1 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや弱
 4. 10YR22/3 黑褐色シルト 粘性中 しまり中
 5. 10YR22/3 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 SYR5/8明赤褐色土上 2%混入
 6. 5YR3/8 明赤褐色壤土 粘性やや弱 しまり中 SYR4/6赤褐色粘土 ブロック混入
 7. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中



0 1:2 10m
349は1:3

第84図 37号住居跡・出土遺物

<規模・形状> 長径407cm、短径360cmの北東—南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。

<埋土> 2層に細分され、上位は黒褐色シルト、下位は炭化物を少量含む暗褐色シルト主体で構成される。全体にTo-Cuをわずかに含む。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁2cm、西壁23cm、南壁15cm、北壁8cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

<柱穴> P1～P5の不規則な配置をなす小柱穴を確認した。

<炉> 北東側床面から深鉢形土器を斜位に掘え、焼土の周間に礫を配する土器埋設炉を検出した。複式かの変形のような様相を呈する。炉の上器は残存直径18cmほどである。残存している底部から推測すると、焼上面上にU字部を上方に向けるように斜めに傾けて埋設されたものと思われる。焼土は土器の周辺を取り巻く長軸35cm×短軸22cm、厚さ6cmの範囲と、西側に近接して長径40cm×短径35cm、厚さ8cmの範囲で認められ、このうち西側の焼土には14×8cm大的の礫が周辺を囲むように配され、石圓炉の様相を呈する。

遺物（第84図・写真図版95）

<検出状況> 埋土からのみ出土している。

<土器> 2点出土した。349は埋土から出土した深鉢土器片である。346は埋土から出土した深鉢形土器片で、波状口縁を呈する。胎土には金雲母を少量含む。

<土製品> 2点出土した。351・352は埋土から出土したミニチュア形土器である。352は底部に網代模を持つ。

遺構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

38号住居跡

遺構（第85図・写真図版39）

<位置> 調査区南東隅、斜面中位の1A8jグリッドに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後の田尻上面で黒褐色の円形プランとして検出した。東側を宅地造成時に削平されている。

<規模・形状> 長径478cm、短径280cmのほぼ円形を呈する。短径の規模は残存値である。

<埋土> 5層からなり、上位は黑色シルト、下位は黒褐色シルト主体で構成される。To-Caをわずかに含む。

<壁・床> 壁高は残存値で、東壁4cm、西壁26cm、南壁21cm、北壁14cmを測る。床面は全体的に平坦で、硬化面は特に認められなかった。貼り床は認められない。

<柱穴> 不規則な配置をなすP1～P3の柱穴を確認した。

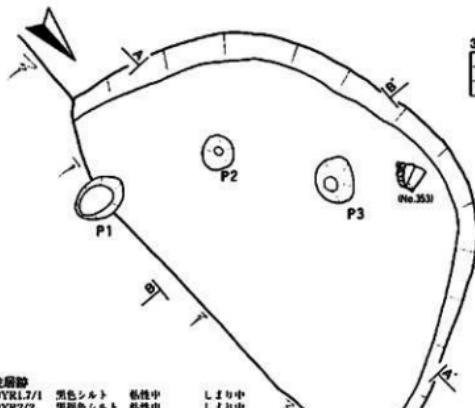
<炉> 北東側床面から斜位の土器埋設炉が検出された。上器の周りには、被熱により焼土が形成されており、焼土を取り囲むように拳大の礫が配置されている。

遺物（第85・86図・写真図版95・96）

<検出状況> 床面および埋土から出土している。

<土器> 14点出土した。353は床面から出土した深鉢土器片で副部には地文のみ施される。362は埋土から出土した深鉢形土器片で、口縁部が山形を呈する。

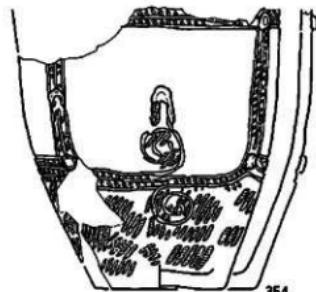
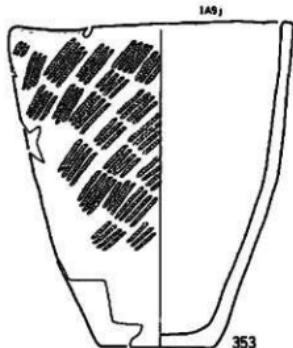
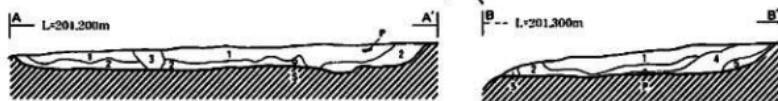
<石器> 1点のみ出土した。367は埋土から出土した磨製石斧で、基部を欠損する。



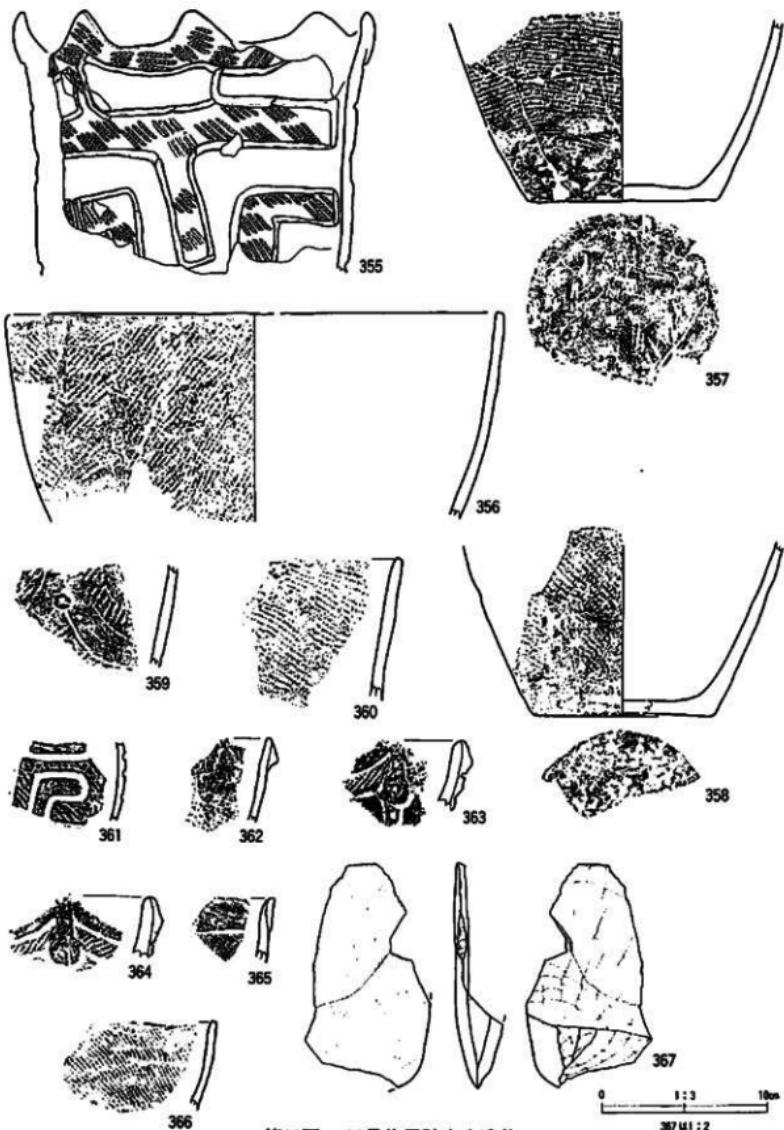
No.	P.1	P.2	P.3
1f (cm)	54×40	35×32	42×39
W. (cm)	28	27	36

- 38号住居跡
 1. 10YR1.7/1 黒色シルト 硬性中
 2. 10YR2/2 明褐色シルト 硬性中
 3. 10YR2/1 黒色シルト 硬性中
 4. 10YR2/1 黒色シルト 硬性やや弱
 5. 10YR3/3 褐褐色粘土質シルト 硬性中
 しより中
 しより中
 しより中
 しより中
 しより中

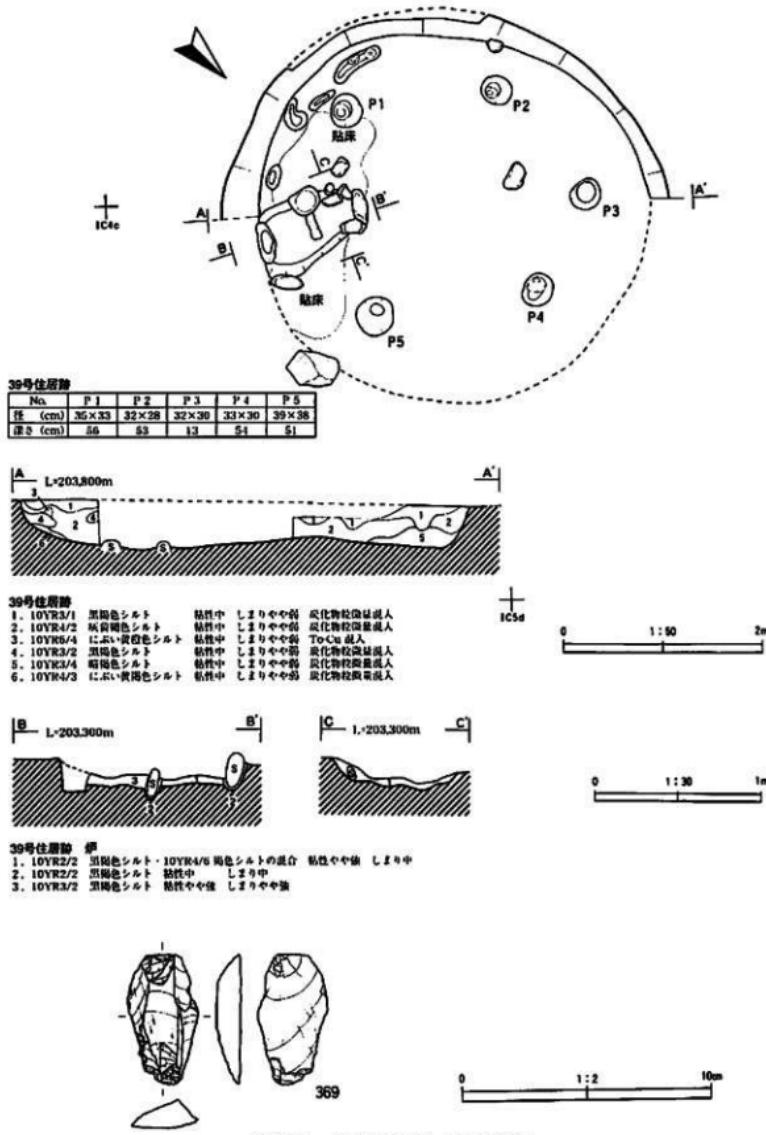
0 1:50 2m



第85図 38号住居跡・出土遺物



第86圖 38號住居跡出土造物



第87図 39号住居跡・出土遺物

造構の時期

出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭であると考えられる。

39号住居跡

造構（第87図・写真図版40）

＜位置＞ 調査区西側、斜面上位の I C 4 c グリッドに位置する。

＜検出状況・重複關係＞ 表土除去後のⅢ層上面で黒褐色の円形プランとして検出した。中央部をトレンチによって切られている。

＜規模・形状＞ 長径448cm、短径(400)cmの北東～南西に主軸を持つほぼ円形を呈する。短径は残存値である。

＜埋土＞ 6層からなり、黒褐色～暗褐色シルトと灰黃褐色シルト主体で構成される。全体的にTo-Cu、炭化物粒を少許含む。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、南壁48cm、西壁43cmを測る。床面は全体的に平坦である。かの周辺は長径230cm×短径90cmの範囲で貼り床されており、この部分のみ硬く結まっている。

＜柱穴＞ かを中心とした主軸と対照に、P 1～P 5 の柱穴を確認した。

＜炉＞ 東壁側で複式炉を検出した。石圓か+石圓部という構造を持つ。石圓炉は長径60cm×短径44cmの長方形を呈する。石圓部は長径57cm×短径(48)cmの長方形を呈する。両者の底面レベルはほぼ同じである。炉内の焼土は確認されなかった。

遺物（第87図・写真図版96）

＜検出状況＞ 埋土からのみ出土している。

＜石器＞ 2点出土した。368はユーズド・フレイクで左側縁に二次加工を持つ。369はリタッチド・フレイクで、基端部、末端部に二次加工を持つ。

造構の時期

出土遺物が乏しく詳細は不明であるが、縄文時代中期末葉であると考えられる。

(中村 直美)

(2) 土坑

1号土坑

造構（第88図・写真図版41）

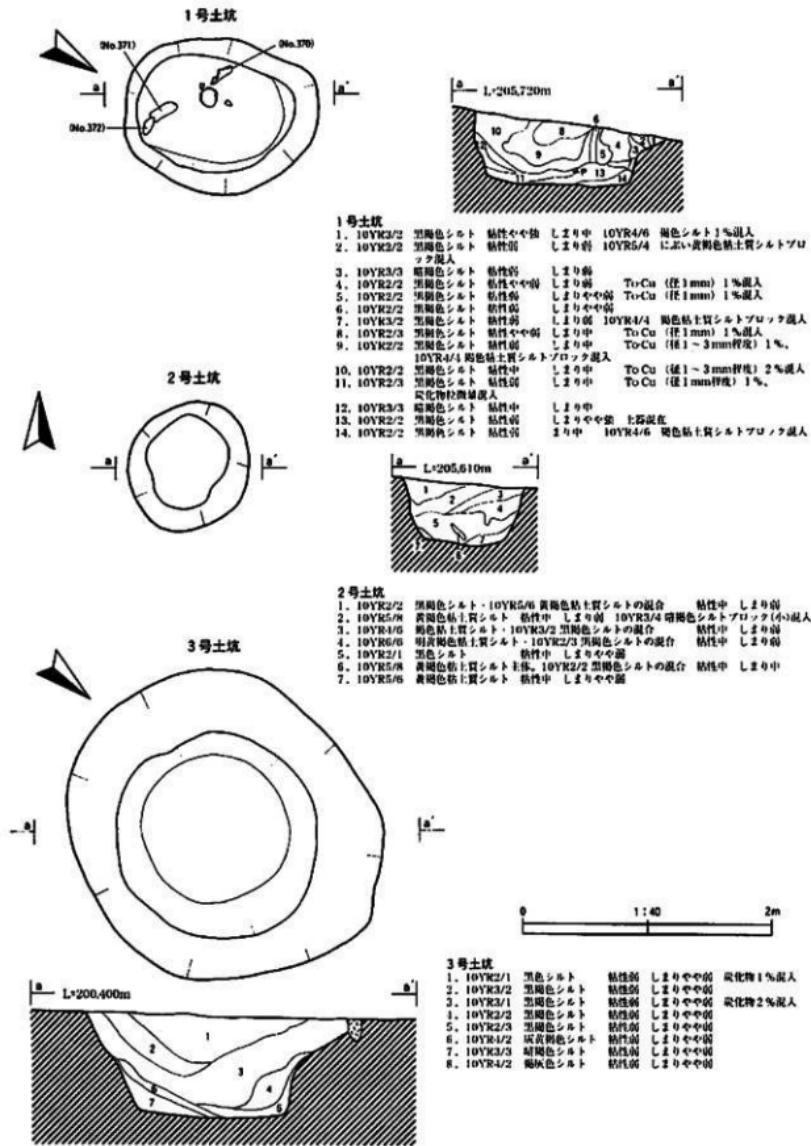
＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面上方 I B 3 c グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の指円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 開口部径165cm×125cm、底部径120cm×88cmの不整指円形を呈する。断面形は逆台形状で、深さは最深部で40cmを測る。

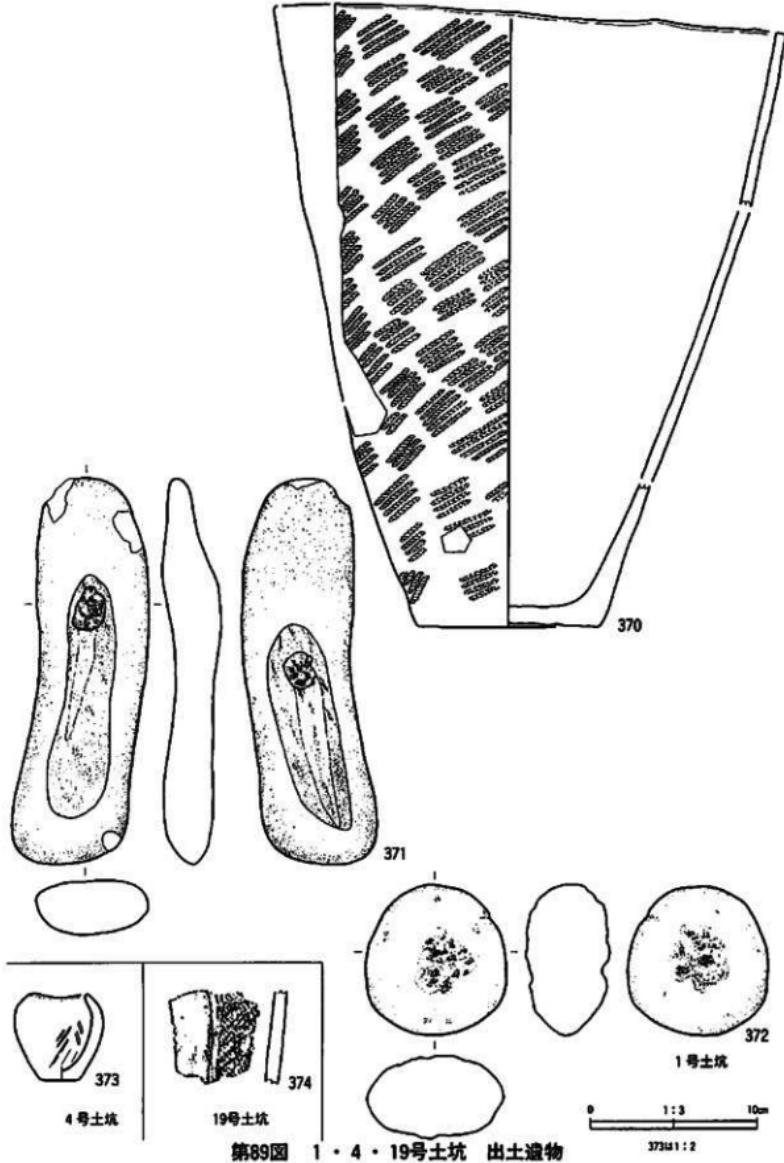
＜埋土＞ 14層からなり、To-Cuを含む黒褐色シルト主体で構成され、中位に褐色の粘土質シルトプロックを含む。人為堆積の様相を呈する。

遺物（第89図・写真図版97）

＜出土遺物・時期＞ 埋土中から、深鉢形土器1点(370)と、石皿1点(371)、凹石1点(372)が出土している。造構の時期は出土遺物、埋土の状況から縄文時代中期であると推測される。



第88図 1～3号土坑



2号土坑

造構（第88図・写真図版41）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面上方、IB4eグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 開口部径105×98cm、底部径73×62cmのはば円形を呈する。断面形は逆台形で、深さは最深部で60cmを測る。

＜埋土＞ 7層からなり、黒褐色シルトと黄褐色粘土質シルト主体で構成される。上層で混合土の堆積が確認されることから、人為的な埋め戻しであると推測される。

＜出土遺物・時期＞ 遺物が出土していないため時期など詳細は不明であるが、埋土から判断して近世以降のものである可能性がある。

3号土坑

造構（第88図・写真図版41）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面中位のIB10eグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径250×250cm、底部径115×125cmの円形を呈する。断面形は逆台形で、深さは最深部で80cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾しながらやや直線的に立ち上がり、上部で外反する。

＜埋土＞ 7層からなり、少量のTo-Cu・炭化物を含む黒色-黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 遺物が出土していないため時期など詳細は不明であるが、埋土から判断して近世以降のものである可能性がある。

4号土坑

造構（第90図・写真図版41）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面中位のIB9eグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、炭化物を含む黒色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径274×267cm、底部径171×186cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で46cmを測る。

＜埋土＞ To-Cuをわずかに含む2層からなり、上位は炭化物を含む黒色シルト、下位は黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

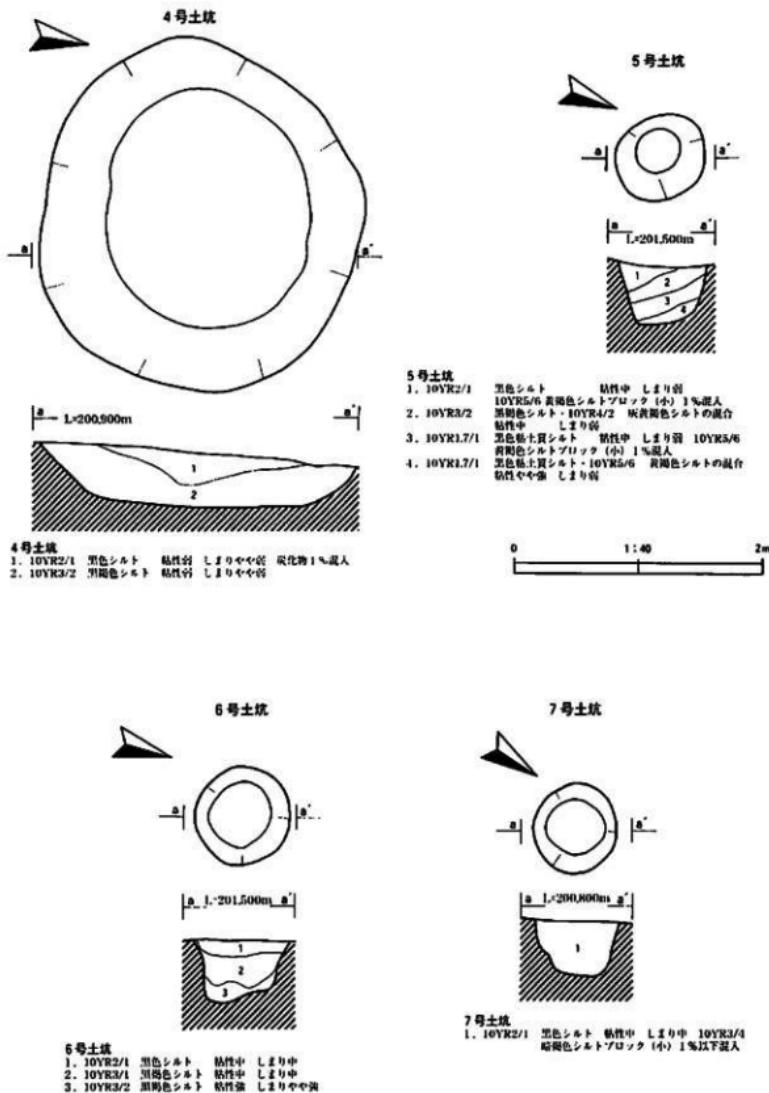
遺物（第89図・写真図版97）

＜出土遺物・時期＞ 遺物は完形の壺形の小形土器が出土している（373）。内面にタール状の付着物がみられる。出土遺物から縄文時代中期頃と考えられる。

5号土坑

造構（第90図・写真図版42）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面中位のIB8fグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黄褐色シルトブロックを含む黒色の円形プランとして確認した。



第90図 4～7号土坑

＜規模・形状＞ 開口部径68×72cm、底部径34×37cmの円形を呈する。断面形は袋状で、深さは最深部で59cmを測る。

＜埋土＞ 4層からなる。黒色・黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土で、下半部は粘土質である。人為的な埋め戻しの様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 埋土中から磨消し縄文の深鉢副部破片が得られた。埋土の状況から判断して本遺構に直接伴うものではないと判断される。埋土の状況から判断して近世以降のものである可能性がある。

6号土坑

遺構（第90図・写真図版42）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面中位ⅠB 8 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径77×77cm、底部径51×50cmの円形を呈する。断面形は袋状で、深さは最深部で35cmを測る。

＜埋土＞ 3層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。人為堆積の様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

7号土坑

遺構（第90図・写真図版42）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側斜面中位ⅠB 9 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、暗褐色ブロックを少量含む黒色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径80×72cm、底部径50×55cmの円形を呈する。断面形は袋状で、深さは最深部で40cmを測る。

＜埋土＞ 暗褐色シルトが混入した黒色シルトの單層である。人為的な埋め戻しであると思われる。

＜出土遺物・時期＞ 土器片が出土している。出土遺物が少ないため、詳細は不明であるが埋土の状況から近世遺構のものである可能性がある。

8号土坑

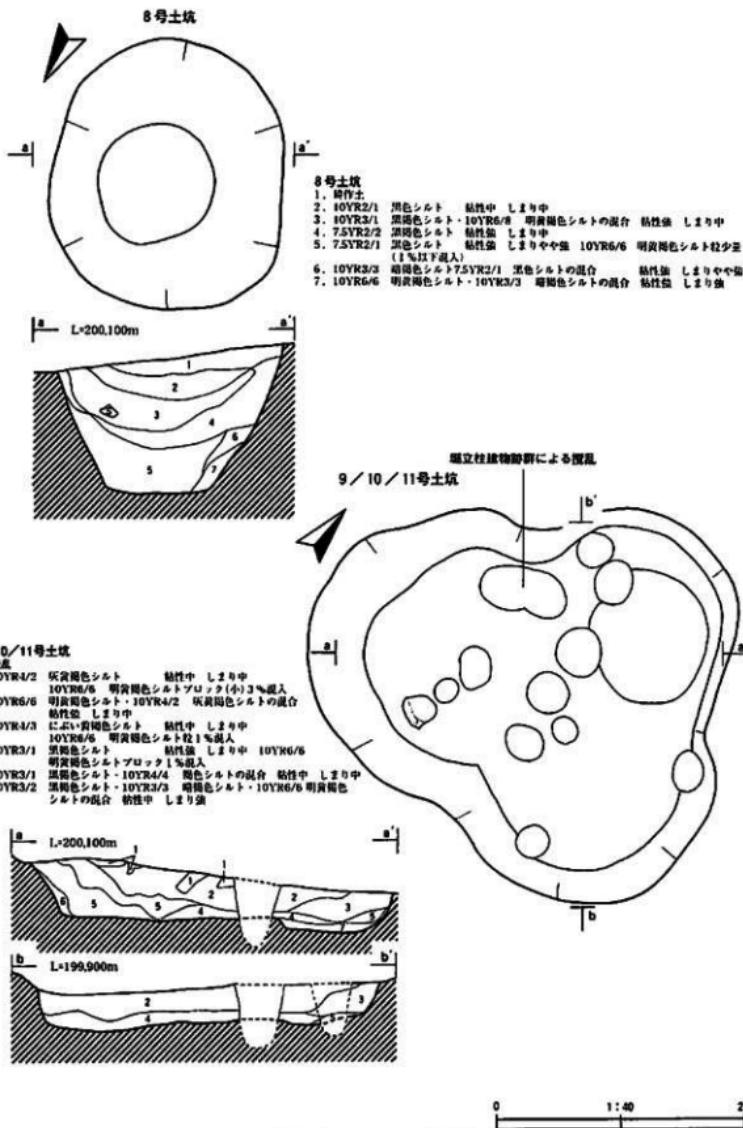
遺構（第91図・写真図版42）

＜位置・検出状況＞ Ⅱ C 2 b グリッドに位置する。調査区中央斜面下側の柱穴状ピット群の中に位置している。検出面はⅢ層で、黒色シルトと明黄褐色シルトの混合土からなる指円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径216×192cm、底部径90×83cmの円形を呈する。断面形は逆台形で、深さは最深部で110cmを測る。

＜埋土＞ 粘性の強い黒色・黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土主体で構成される。埋土の状況から、人為堆積と推測される。底部から湧水が認められる。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物がなく詳細は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構となる可能性がある。



第91図 8~11号土坑

9号土坑

造構（第91図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部斜面下方のⅡ C 2 e グリッド、掘立柱建物跡群の域内に位置する。10号土坑、11号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。検出面はⅢ層で、明黄褐色ブロックを少量含む灰黄褐色シルトの不整な広がりとして確認した。当初、堅穴状造構として精査を行ったため、重複する10号、11号土坑との新旧関係を明らかにすることができなかった。また多数のピットと重複しており、本土坑の方が古い。

＜規模・形状＞ 開口部径(220)×(220)cm、底部径(160)×170cmの円形と推定される。断面形は皿形で、深さは最深部で60cmを測る。

＜埋土＞ 灰黄褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

10号土坑

造構（第91図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ Ⅱ C 2 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、明黄褐色ブロックを少量含む灰黄褐色シルトの不整な広がりとして確認した。9号土坑、11号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

＜規模・形状＞ 開口部径200×(200)cm、底部径145×(150)cmの円形と推定される。断面形は皿形で、深さは最深部で50cmを測る。

＜埋土＞ 灰黄褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

11号土坑

造構（第91図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ Ⅱ C 2 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、明黄褐色ブロックを少量含む灰黄褐色シルトの不整な広がりとして確認した。9号土坑、11号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

＜規模・形状＞ 開口部径(170)×(170)cm、底部径(130)×(130)cmの円形と推定される。断面形は皿形で、深さは最深部で15cmを測る。

＜埋土＞ 灰黄褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

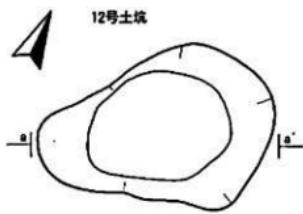
12号土坑

造構（第92図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側斜面中位Ⅰ C 8 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、暗褐色シルトの不整な円形プランとして確認した。11-13号住居跡と重複しており、11号住居よりは旧く12・13号住居よりは新しい。

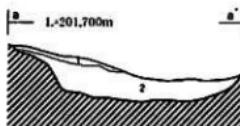
＜規模・形状＞ 開口部径184×120cm、底部径115×78cmの不整な楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で50cmを測る。埋土は暗褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。



12号土坑

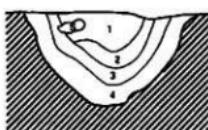
1. 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱



13号土坑

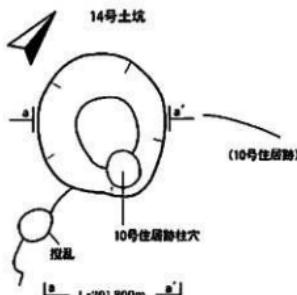
(11号住居跡)

(11号住居跡 JP)



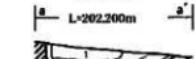
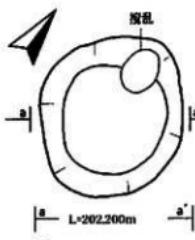
13号土坑

1. 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱
4. 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや弱



- 14号土坑
1. 10YR3/1 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 10YR4/4
暗色シルト+ロック混入
 2. 10YR2/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 10YR4/4
暗色シルト+粘土混入
 3. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
 4. 10YR4/4 暗色シルト・10YR3/1 黑褐色シルトの混合
粘性中 しまりやや弱

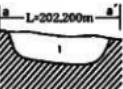
15号土坑



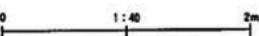
15号土坑

1. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗色シルト粒 7%混入
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗色シルト粒 3%混入
3. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗色シルト粒 10%混入
4. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗色シルト粒 3%混入
5. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中
6. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまり中
7. 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト粒の混入
8. 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト粒の混入
9. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中

16号土坑



- 16号土坑
1. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや弱



第92図 12~16号土坑

13号土坑

遺構（第92図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ 洞査区北側斜面中位 I C 8 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして検出した。11-13号住居跡と重複し、これを切っている。

＜規模・形状＞ 開口部径140×133cm、底部径39×38cmの円形を呈する。断面形はすり鉢形で、深さは最深部で57cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

14号土坑

遺構（第92図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞ 洞査区北側斜面中位の I C 8 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、褐色ブロックを含む黒褐色の円形プランとして確認された。10号住居跡と重複しており、これを切る。

＜規模・形状＞ 開口部径112×92cm、底部径54×40cmの円形を呈する。断面形は逆台形で、深さは最深部で45cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色・褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

15号土坑

遺構（第92図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞ 洞査区北側斜面中位の I C 7 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、褐色ブロックを含む黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径123×112cm、底部径86×82cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で40cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色シルト主体で構成され、褐色～暗褐色のシルトブロックを全体に含む。自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

16号土坑

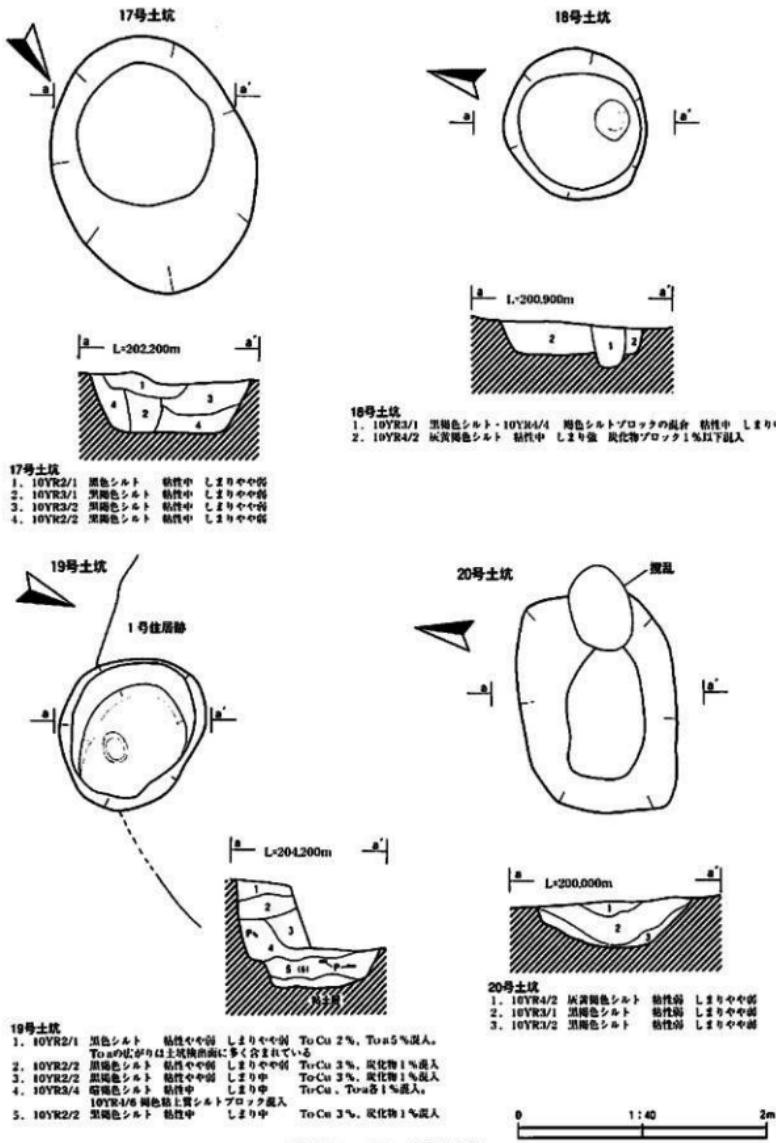
遺構（第92図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞ 洞査区北側斜面中位の I C 7 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の梢円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径100×80cm、底部径74×64cmの円形を呈する。断面形は浅皿状で、深さは最深部で25cmを測る。

＜埋土＞ 黒色シルトの單層である。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。



第93図 17~20号土坑

17号土坑

遺構（第93図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側斜面中位 I C 8 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色シルトの格円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径200×160cm、底部径110×104cmの格円形を呈する。断面形は逆台形で、深さは最深部で50cmを測る。

＜埋土＞ 黒色・黒褐色シルト主体で構成される。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

18号土坑

遺構（第93図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側斜面中位 I C 10 h グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、炭化物を含む灰黄褐色の円形プランとして確認した。土坑内に柱穴状ピットが重複し、これにより切られる。

＜規模・形状＞ 開口部径125×113cm、底部径100×90cmの円形を呈する。断面形は浅皿状で、深さは最深部で25cmを測る。

＜埋土＞ 炭化物を含む灰黄褐色シルトの単層である。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

19号土坑

遺構（第93図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側斜面上方 I C 3 i グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、To-a火山灰がブロック状に分布することから検出した。1号住居跡と重複し、これを切る。

＜規模・形状＞ 開口部径125×115cm、底部径106×100cmの円形を呈する。断面形は袋状で、壁面下位に段を持つ。深さは最深部で60cmを測る。

＜埋土＞ To-Cu、炭化物を含む黒褐色～暗褐色シルト主体で構成される。底部からは灰白色に近いにぶい黄橙色を呈する粘土が検出された。残存部から推測して自然堆積と思われる。

遺物（第89図・写真図版97）

＜出土遺物・時期＞ 埋土中より深鉢形土器片1点が出土している（374）。時期など詳細は不明である。

20号土坑

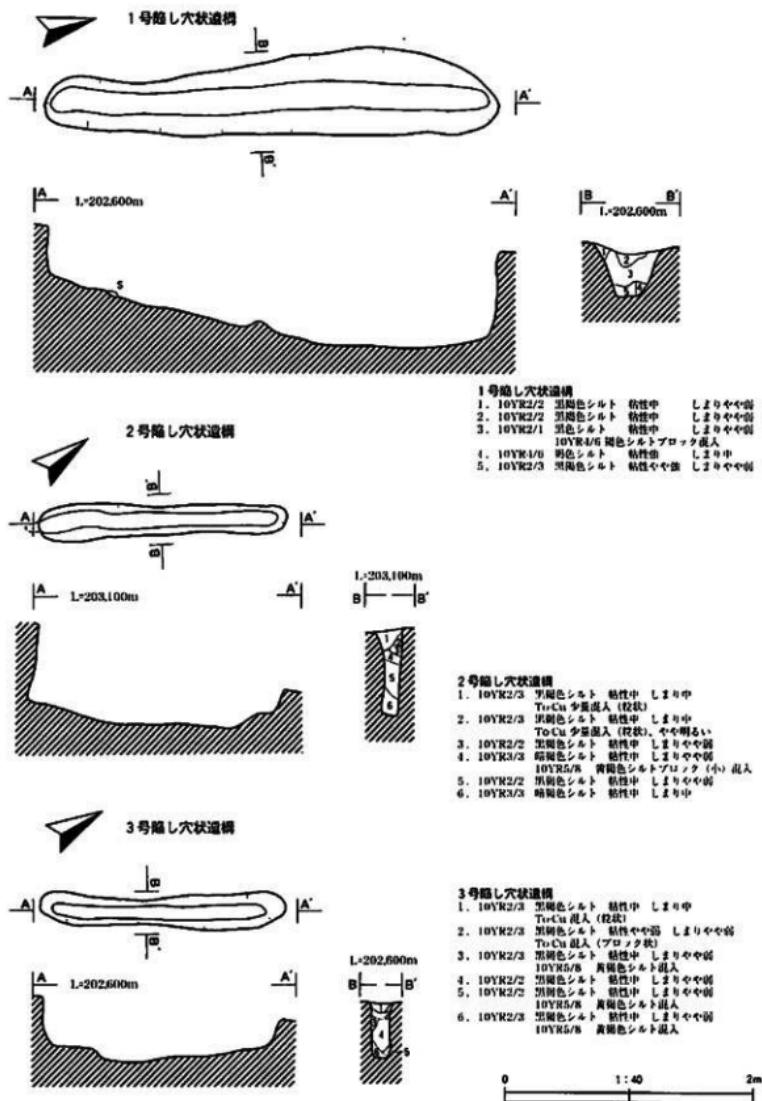
遺構（第93図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側斜面下方 II C 2 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の格円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径100×70cm、底部径65×54cmの長方形に近い格円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で20cmを測る。

＜埋土＞ 黒褐色シルトと灰黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物・時期＞ 出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。



第94図 1～3号陥し穴状造構

(3) 炉跡

現地性の焼土であると判断し、縄文時代と考えられるものを2基掲載した。

1号炉跡（写真図版45）

調査区北側斜面上方、1C 3 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。検出当初、住居跡を想定して精査を進めたが、住居跡と認定するには至らなかった。44×40cmの不整円形の範囲に薄く焼土が広がる。比較的小く形成されている部分では最大が8cmを測る。現地性の焼土と考えられるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

2号炉跡（写真図版45）

調査区北側斜面中央Ⅰ C 9 d グリッド、14号住居跡内に位置する。柱穴列の柱穴の横面で焼土を確認し、14号住居跡の床面で検出した。柱穴に切られているため、残存状況は悪い。規模は残存部から推定して97×80cm、最大16cmの厚さで形成され、不整な梢円形を呈する。14号住居跡と重複する住居の炉である可能性が高いが、住居跡としての床面、様を確認できなかった。14号住居跡と同時期と考えられる。当遺構への帰属が断定できる遺物は無い。

(4) 陥し穴状造構

調査区全域から10基を検出した。堅穴住居跡の床面や壁面で確認されることが多く、いずれも埋土の上部にTo-Cu火山灰が淡く堆積することから、To-Cu降下以前に構築されたものと考えられ、堅穴住居跡よりも古いと推測される。

1号陥し穴状造構（第94図・写真図版46）

＜位置・重複関係＞ 調査区中央斜面上方1 C 5 c グリッドに位置する。28号住居跡床面精査時に、純い黄褐色の梢円形プランとして検出した。住居跡により切られる。検出面はⅣ層である。

＜規模・形状＞ 開口部径360×60cm・底部径350×24cm・深さ70cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-16°-Eである。短軸の断面形は底部から立ち立氣味に立ち上がり開口部に向って外傾するY字形である。長軸の断面形は両側が内済するフラスコ形を呈し、底部はほぼ平坦である。

＜埋土＞ 5層からなる。黒色～黒褐色シルトで構成され、上位にTo-Cuが淡く堆積する。

＜時期＞ To-Cu降下以前の構築と思われる。

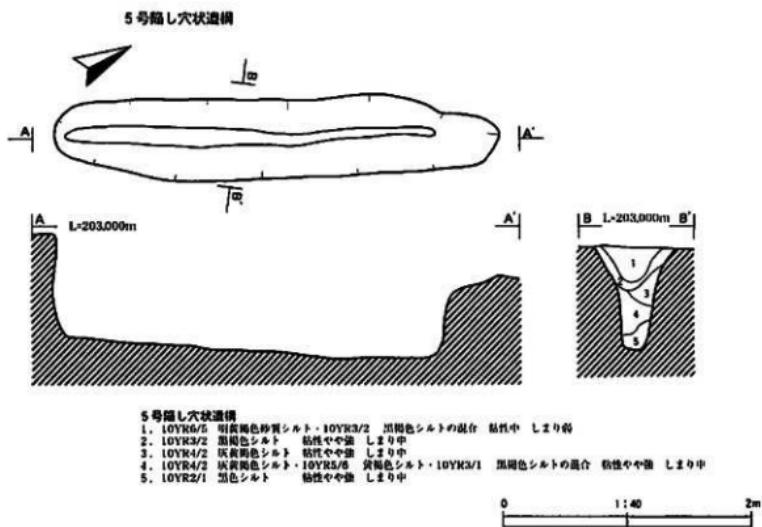
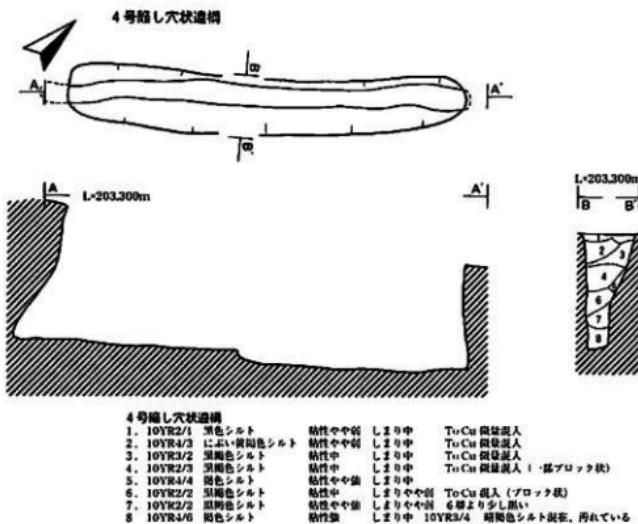
2号陥し穴状造構（第94図・写真図版46）

＜位置・重複関係＞ 調査区中央斜面下方、1 C 4 c グリッドに位置する。28号住居跡精査時に、純い黄褐色のプランを埋階で検出した。1号陥し穴状造構の南西に隣接しており、住居跡に切られる。検出面はⅣ層中位である。

＜規模・形状＞ 開口部径200×24cm・底部径186×14cm・深さ70cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-38°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は両側がやや内済するフラスコ形を呈し、底部は北東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は24cmである。

＜埋土＞ 6層からなり、黒褐色、暗褐色シルト主体で構成される。埋土上位にTo-Cuが淡く堆積する。

＜時期＞ To-Cu降下以前の構築と思われる。



第95図 4・5号陥し穴状造構

3号陥し穴状造構（第94図・写真図版47）

＜位置・重複関係＞ 調査区中央斜面上方、IC5aグリッドに位置する。V層（地山）で暗褐色の梢円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 開口部径194×20cm、底部径170×10cm、深さ40cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-29°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部まで直立気味に立ち上がるU字形である。長軸の断面形は北東側がやや外傾、南西側が内湾気味に立ち上がる不整逆台形を呈する。

＜埋土＞ 6層からなり、黒褐色シルトを主体に構成される。上位にはTo-cuが淡く堆積している。

＜時期＞ To-Cu降下以前の構築と考えられる。

4号陥し穴状造構（第95図・写真図版47）

＜位置・重複関係＞ 調査区中央斜面上方、IC4dグリッドに位置する。28号住居跡の西側、III層下位で、暗褐色の梢円形プランとして検出した。

＜規模・形状＞ 開口部320×50cm、底部376×18cm、深さは105cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-43°-Eである。短軸の断面形は底部から35cmほど垂直に立ち上がり、そこから開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は両側が内湾するラスコ形を呈し、底部は北東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。底部両端の高低差は26cmである。

＜埋土＞ 8層からなり、黒褐色シルトを主体として構成される。上位にはTo-cuが淡く堆積している。

＜時期＞ To-Cu降下以前の構築と考えられる。

5号陥し穴状造構（第95図・写真図版47）

＜位置・重複関係＞ 調査区北側斜面上方、IC4eグリッドに位置する。4号陥し穴状造構の北西にあたり、V層（地山）まで下げた確認トレンチ内で検出した。

＜規模・形状＞ 開口部360×65cm、底部296×14cm、深さ80cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-26°-Eである。短軸の断面形は底部から40cmほど直立気味に立ち上がり、そこから開口部に向かって緩やかに外反するY字形である。長軸の断面形は両側が内湾するラスコ形を呈し、底部は北東側に傾斜しているが、ほぼ平坦である。底部両端の高低差は16cmである。

＜埋土＞ 上部を削平されており、To-Cuの堆積を欠く。5層からなり、明黄褐色・灰黄褐色の明度の高いシルトを主体として構成される。

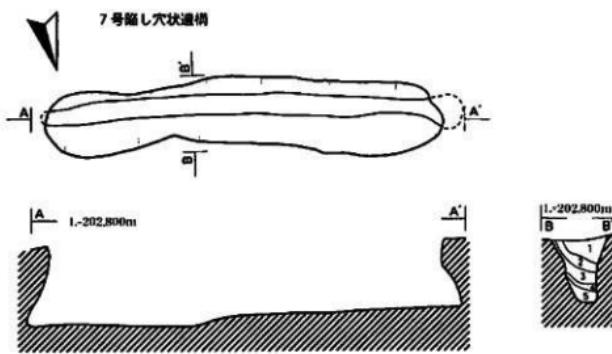
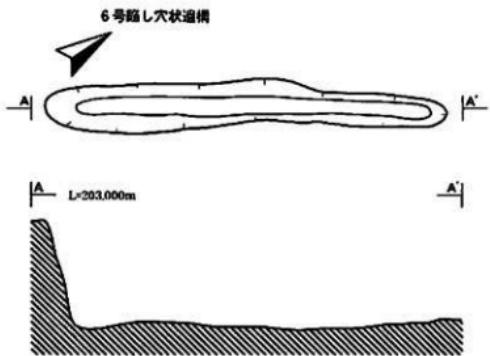
＜時期＞ To-Cuの堆積を欠くため詳細は不明であるが、他の陥し穴状造構と同時期のものと考えられる。

6号陥し穴状造構（第96図・写真図版47）

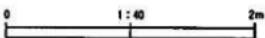
＜位置・重複関係＞ 調査区北側斜面上方、IC5iグリッドに位置する。2号住居跡を縦堀中に南側埋床で確認した。北東側を住居跡により切られる。検出面はIV層上面である。

＜規模・形状＞ 開口部318×32cm、底部288×14cm、深さ70cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-34°-Eである。短軸の断面形は底部から直立気味に立ち上がりU字形を呈する。長軸の断面形は北東側を欠くため詳細は不明であるが、南西部は底部から開口部に向かって外傾する逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞ 断面の記録を欠くが、黒色・暗褐色・褐色のシルト主体で構成される。



- 7号陥し穴状遺構
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 10YR3/4 緑褐色シルトブロック 1%、To-Cu (Erimm程度) 2%混入
 - 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 10YR3/4 緑褐色シルトブロック 2%混入
 - 3. 10YR2/1 黄褐色シルト 粘性強 しまり中
 - 4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 2層に近似 ただし、10YR3/3 緑褐色シルトブロックの割合が多い (約3%)
 - 5. 10YR3/3 黄褐色シルト 粘性強 しまり中 地層層に断続的に混入



第96図 6・7号陥し穴状遺構

<時期> To-Cuの堆積を欠くため詳細は不明であるが、他の陥し穴状造構と同時期のものと考えられる。

7号陥し穴状造構（第96図・写真図版48）

<位置・重複関係> 調査区南側斜面上方、IB5hグリッドに位置する。31号住居跡の斜面上方にいたトレンチのV層で検出した。

<規模・形状> 開口部320×42cm、底部350×16cm、深さ60cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-74°-Eである。短軸の断面形は底部から30cmほど直立気味に立ち上がり、そこから開口部に向かって緩やかに外傾するY字形である。長軸の断面形は両側が内渦するラスコ形を呈し、底部は南東側に傾斜しているがほぼ平坦である。底部両端の高低差は14cmである。

<埋土> 5層からなり、黒褐色・暗褐色シルトが層状に堆積している。上位にTo-Cuが薄く堆積する。

<時期> To-Cu降下以前の構築と思われる。

8号陥し穴状造構（第97図・写真図版48）

<位置・重複関係> 調査区中央斜面上方、IB5jグリッドに位置する。33号住居跡の斜面上側をV層まで下げた確認トレンチ内で検出した。これももっと上層からの掘り込みであったと考えられる。

<規模・形状> 開口部182×30cm、底部154×12cm、深さ50cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-27°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって緩やかに外傾するY字形である。長軸の断面は南西側がほぼ直立、北東側が外傾気味に立ち上がる逆台形を呈する。底面は若干凹凸があり、北東側に傾斜している。底部両端の高低差は15cmである。

<埋土> 3層からなり、中位は黒褐色シルト、下位は暗褐色シルト主体で構成される。上位にTo-Cuが薄く堆積する。

<時期> To-Cu降下以前の構築と思われる。

9号陥し穴状造構（第97図・写真図版48）

<位置・重複関係> 調査区南側斜面中程、IB8cグリッドに位置する。3号聚穴建物跡の南側をV層まで下げた確認トレンチ内で検出した。

<規模・形状> 開口部262×46cm、底部208×10cm、深さ70cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-53°-Eである。短軸の断面形は底部から外傾気味に立ち上がり、30cmほどで大きく外傾するY字形を呈する。長軸の断面形は両側が外傾して立ち上がる逆台形を呈する。底面は北東側に傾斜しているが、ほぼ平坦である。

<埋土> 6層からなり、黒褐色シルトを主体として構成される。上一中位にTo-Cuが薄く堆積する。

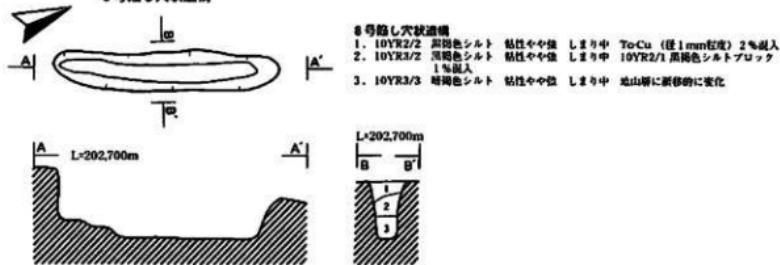
<時期> To-Cu降下以前の構築と思われる。

10号陥し穴状造構（第97図・写真図版48）

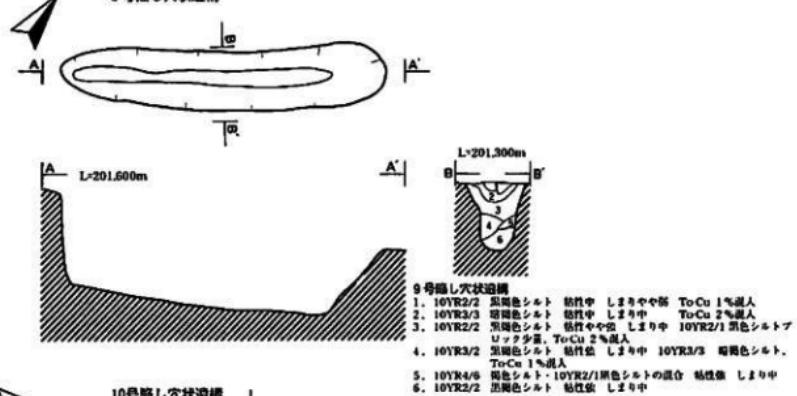
<位置・重複関係> 調査区北側斜面上方、IC5hグリッドに位置する。2号住居跡の南側に入れたトレンチ内V層で検出した。

<規模・形状> 開口部352×74cm、底部348×14cm、深さ70cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-9°-Wである。短軸の断面形は底部から16cmほど垂直に立ち上がり、そこから開口部に向かって外傾するY

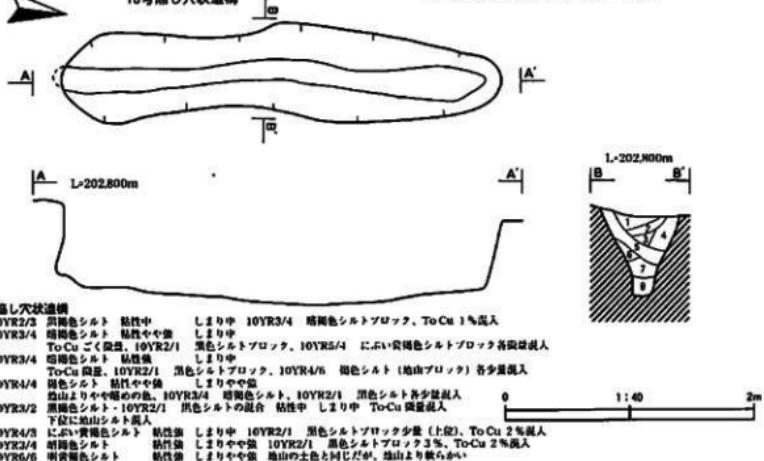
8号陥し穴状造構



9号陥し穴状造構



10号陥し穴状造構



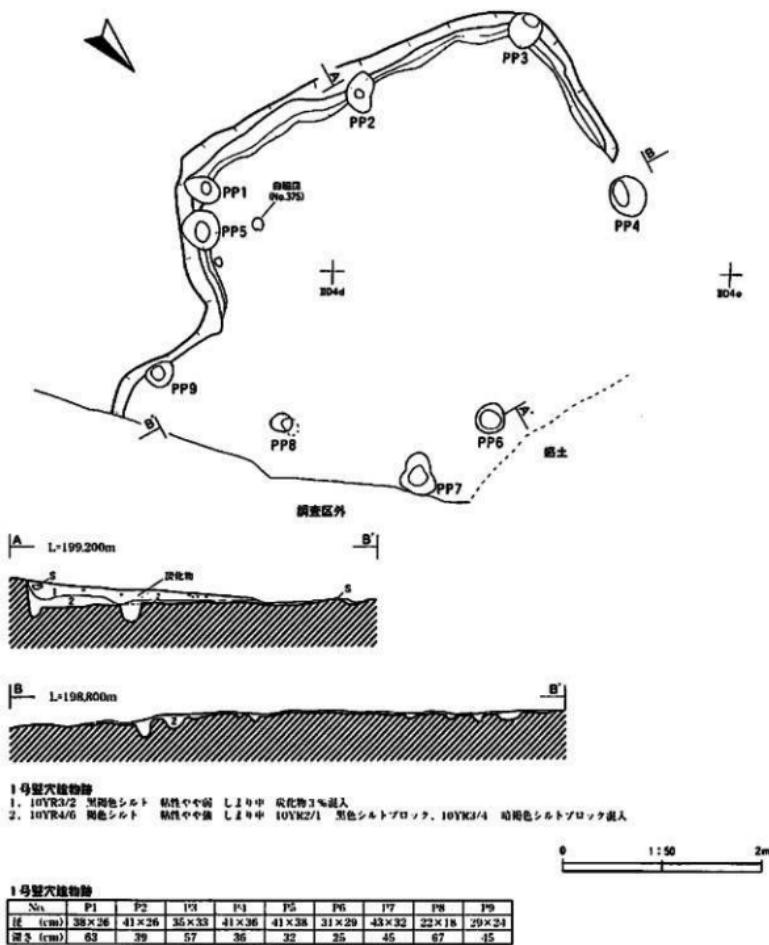
第97図 8～10号陥し穴状造構

字形である。長軸の断面形は南側がやや内湾、北側がやや外傾する不整な逆台形状を呈する。底部は中央部に向かって深くなるが、概ね平坦である。

＜埋土＞ 8層からなり、黒褐色・暗褐色シルトを主体として構成される。上位にTo-Cuが淡く堆積する。下位には粘性の強い明黄褐色シルトが堆積している。

＜時期＞ To-Cu層下以前の構築と考えられる。

(原 美津子)



第98図 1号竖穴建物跡

2. 中世以降

(1) 穹穴建物跡

穹穴建物跡は、合計6棟検出した。平面図の縮尺は1/50である。また、柱間寸法を計測する際の尺間は1尺30.3cmとして計算した。柱穴規模は表で記載した。

1号穹穴建物跡

遺構（第98図、写真図版49）

＜位置＞ II D 3c～3d、II D 4c～4d グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のII層中で、黒褐色の長方形プランとして検出した。北側及び東側は溝在区外に伸びている。また、斜面下方を削平されており、プラン北側は残存しない。

＜平面形式・規模＞ 桁行が2間の隅丸長方形のプランで、東間に張り出し部をもつ。長径は(570)cm(張り出し部を含む)、短径は(413)cmの遺物である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-73°-Wである。

＜柱間寸法＞ 6尺(約182cm)を基準にしている。

＜埋土＞ 炭化物を僅かに含む黒褐色シルトの堆積からなる。

＜壁・床面＞ 壁高は残存値で、東壁6cm、西壁6cm、北壁16cmを測る。床はV層黄褐色シルトまで掘り込まれており、褐色シルト主体の土で平坦にされている。

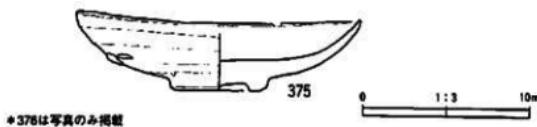
＜柱穴＞ 墓際に遡るように配されている。建物に伴うものは検出した範囲で9個と考えられる。

＜周溝＞ 南端際を中心と遡る。開口部径は8～22cmで、深さは8cm前後である。

遺物（第99図・写真図版98）

＜出土遺物＞ 南側床面直上から完形の白磁皿1点(375)と模造鏡1点(376)が出土している。白磁皿は中国産で、生産年代は15初めに位置づけられる。

＜時期＞ 出土遺物である白磁皿の年代から中世の建物跡と考えられる。



第99図 1号穹穴建物跡出土遺物

2号堅穴建物跡

造構（第100図、写真図版50）

＜位置＞ IA 6 j・IA 7 i～7 jグリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅡ層中で黒色の長方形プランとして検出した。斜面下方は削平されおり、プラン東側の壁面は残存しない。

＜平面形式・規模＞ 衍行が5間の隅丸長方形のプランで、東側に張り出し部をもつ。長径は643cm（張り出し部を含む）、短径は440cmの建物である。

＜建物方位＞ 衍行の軸方向はN-69°-Eである。

＜柱間寸法＞ 3尺3寸（約100cm）と4尺（約121cm）を多用しているが、一定しない。

＜埋土＞ 黒色シルトを主体とする5層からなる。地山である黄褐色粘土質シルトを部分的に含んでおり、全体にしまりが強めである。

＜壁・床面＞ 壁高は残存値で、西壁37cm、南壁8cm、北壁10cmであり、緩やかに外傾しながら立ち上がる。床はV層黄褐色シルトまで掘り込まれており、にぶい黄褐色・黒色シルトの混合が貼床され、全体に平坦で整っている。

＜柱穴＞ 壁際～建物中央を廻るように配される。使用された柱穴は19個である。

＜周溝＞ 無隙を廻るように配される。開口部径は7～20cmで、深さは15cm前後である。

＜出土遺物＞ なし

＜時期＞ 出土遺物がないので不明ではあるが、造構の形態から中世の建物跡と考えられる。

3号堅穴建物跡

造構（第101図、写真図版51）

＜位置＞ II B 8 e～8 f・II B 9 e～9 fに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅡ層中で黒色の長方形プランとして検出した。斜面下方は削平されおり、北東側の壁の立ち上がりはみられない。

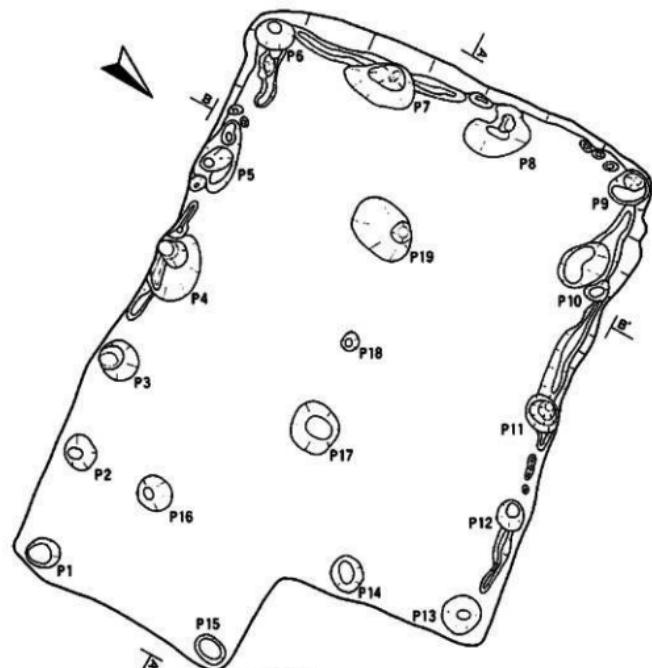
＜平面形式・規模＞ 衍行が3間の隅丸長方形のプランで張り出し部は持たない。長径は406cm、短径は328cmの建物である。

＜建物方位＞ 衍行の軸方向はN-52°-Eである。

＜柱間寸法＞ 3尺5寸（約106cm）、4尺4寸（約133cm）を多用している。

＜埋土＞ 黒色シルト主体の7層からなる。埋土上部には再堆積とみられる十和田a降下火山灰の混入がみられる。

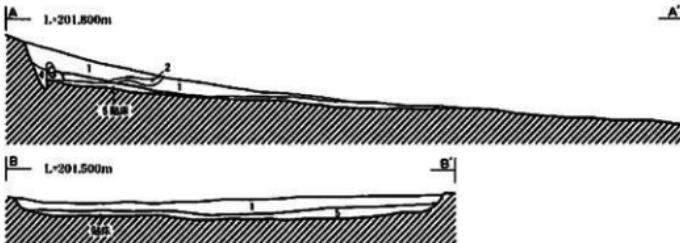
＜壁・床面＞ 壁高は残存値で、北東壁4cm、北西壁16cm、南東壁17cm、南西壁37cmであり、やや直立気味に外傾して立ち上がる。床はV層黄褐色シルトまで掘り込まれており、床を斜面に対して平坦にするため、To-Cu混じりの黒色シルトを厚く敷いて、床面構築している。床面中央部を中心に炭化材と焼土の分布が広く認められることから、本造構は焼失建物と考えられる。中央部南西側からはか跡が確認されており、長径52cm×短径41cm、厚さ8cmを測る。南西壁付近の床面には梢円形のピットaがあり、規模は長径106cm×短径47cm、深さ24cmを測る。ピット底面からは炭化材及び焼土が検出された。また、床面中央部付近には10×20cm大の被熱した釋が多数散乱している。炉跡も近いことから、何らかの作業場として使用されていたと考えられる。



1号竖穴建物跡

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
尺 (cm)	34×31	37×32	42×38	34×27	34×29	40×31	73×49	68×52	43×34	26×18
寸 (cm)	23	32	46	47	49	37	35	27	26	34

No.	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19
尺 (cm)	20×16	31×27	41×38	37×34	33×26	37×36	52×49	19×19	22×22
寸 (cm)	40	44	49	41	27	38	46	41	50



2号竖穴建物跡

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまりやや強 10YR4/4 開色粘土質シルトブロック2%混入
2. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 しまり強
3. 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト2%混入
4. 10YR1.7/1 黑土シルト 粘性中 しまりやや強
5. 10YR6/4 にぶい青褐色シルト・10YR2/1 黒色シルトの混合 粘性やや強 しまりやや強 黏土

0 1:50 2m

第100図 2号竖穴建物跡

- <柱穴> 主に壁際に廻るように配される。使用された柱穴は10個である。
- <周溝> なし
- <出土遺物> なし
- <時期> 出土遺物がないので詳細は不明であるが、造構の形態から中世の建物跡と考えられる。

4号豊穴遺物跡

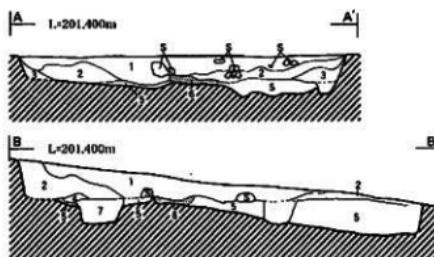
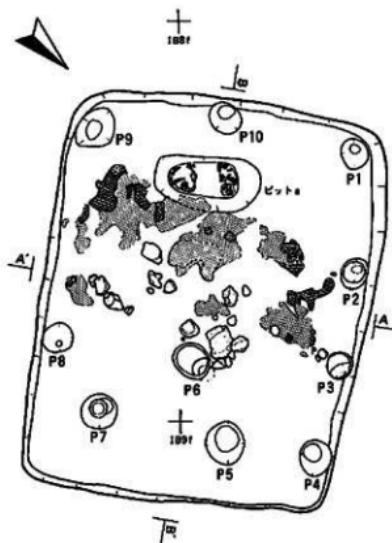
造構（第102図、写真図版52）

- <位置> II C 1 g ~ 1 h・II C 2 f ~ 2 g に位置する。
- <検出状況・重複関係> 1号工房跡の床面積存中に、下層にもう一面の床があることを確認した。その後の発掘で、同一プランに2棟の異なる建物跡が重複していたことが分かった。このことから、本造構のプランをそのままに、床面だけを貼り替えた「建て替え」が行われたと考える。本造構は「建て替え」以前の建物跡である。
- <平面形式・規模> 柱行が3間の隅丸長方形のプランで張り出し部はもたない。長径は562cm、短径435cmの建物である。
- <建物方位> 柱行の軸方向はN-22°-Wである。
- <柱間寸法> 様々な寸法を使用しており、基準寸法は判然としない。
- <埋土> 黒褐色シルト主体の5層からなる。地山である明黄褐色・黄褐色シルトが僅かに混入する。
- <壁・床面> 壁高は残存値で、東壁14cm、西壁20cm、南壁34cm、北壁15cmであり、緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面は混合土上で貼り床が成されており、平坦で締まっている。
- <柱穴> 造構内を廻るように配されており、使用された柱穴は9個である。
- <周溝> なし
- <出土遺物> なし
- <時期> 出土遺物がないので不明ではあるが、造構の形態と重複関係にある1号工房跡から中世の建物跡と考えられる。

5号豊穴遺物跡

造構（第103図、写真図版53）

- <位置> I C 7 j・8 j・9 j・I D 8 a に位置する。
- <検出状況・重複関係> 表土除去後のI層中で暗褐色-褐色の長方形プランとして検出した。南東側は6号豊穴遺物跡と重複しているが、本造構が切っているため、こちらの方が新しい。
- <平面形式・規模> 柱行が1間の隅丸長方形プランで、張り出し部はもたない。長径は476cm、短径は354cmの建物である。
- <建物方位> 柱行の軸方向はN-16°-Eである。
- <柱間寸法> 3尺（約91cm）を基準にしている。
- <埋土> 暗褐色-褐色シルト主体で、4層からなる。全体にしまりが強い。
- <壁・床面> 壁高は残存値で、北東壁4cm、北西壁18cm、南東壁17cm、南西壁50cmであり、外傾しながら立ち上がる。床はV列黄褐色シルトまで掘り込まれており、褐色シルト主体の混合土で貼床が成されており、平坦に堅く踏みしめられている。



3号堅穴建物跡

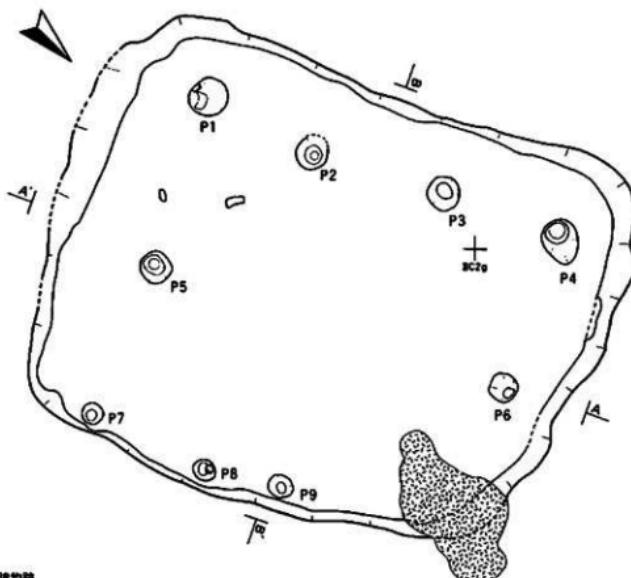
1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中 10YR3/1 暗褐色シルト微量, To Cu 1%混入
2. IOYR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中
3. IOYR1/7/1 黒色シルト 粘性中 しまり中
4. IOYR2/4 黑褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中
5. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 10YR2/2 出褐色シルトゾムック3%, To Cu 1%混入
6. SYR4/8 水成粘土 粘性弱 しまり中 10YR2/1 黑色シルトゾロッタ上位に混入(?)
7. IOYR1/1-3/2 黑褐色シルトの混合 粘性中 しまりやや弱 SYR4/8赤褐色地土、氯化物鉄化

3号堅穴建物跡

Nx	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
lt (cm)	30×27	33×26	29×26	36×32	43×40	40×33	36×35	32×29	47×46	34×30
深さ (cm)	56	41	48	54	38	57	63	47	59	52

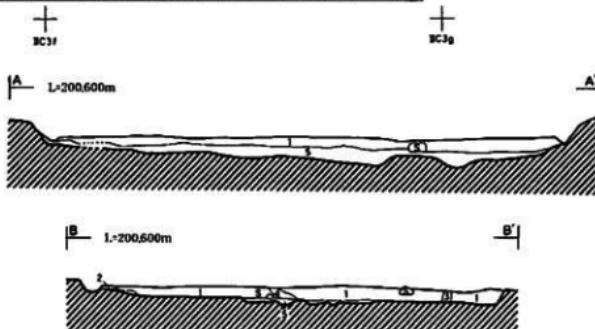
0 1:50 2m

第101図 3号堅穴建物跡



4号竖穴建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
W (cm)	39×37 (37×32)	34×33	44×37	32×30	28×28	22×21	24×20	26×22	
H (cm)	53	26	39	23	46	35	29	33	19

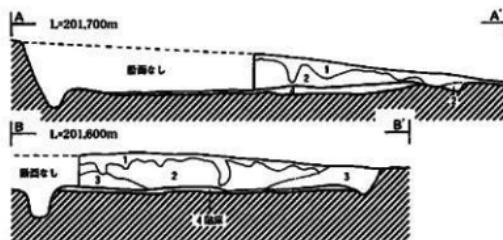
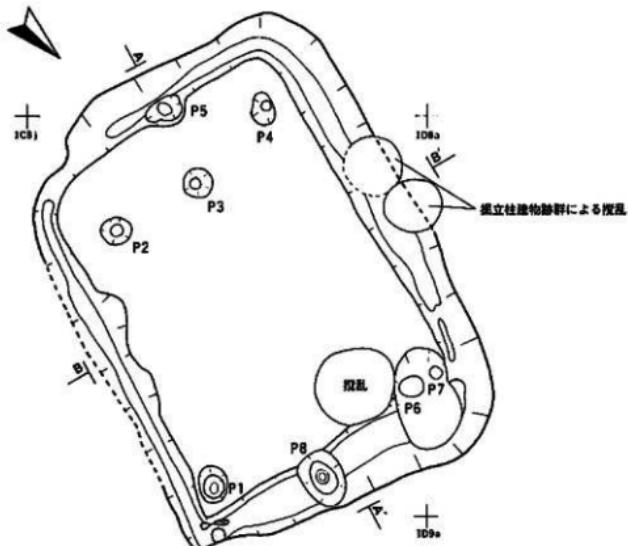


4号竖穴建物跡

1. 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性中 し2りやや少
2. 10YR2/3 黄褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや少 10YR6/6 明黄色シルト 2%混入
3. 10YR2/1 黄色シルト 粘性少 しまりやや少 10YR5/4 茶褐色シルト 1%混入
4. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中 し2り中 10YR5/6 黄褐色シルト 2%混入
5. 10YR2/1 黑色シルト 10YR3/4 嫩褐色シルト 10YR6/6 明黄色シルト (地山) 内混合 粘性やや強 しまり中 駆除

0 1:50 2m

第102図 4号竖穴建物跡



5号竖穴建物跡

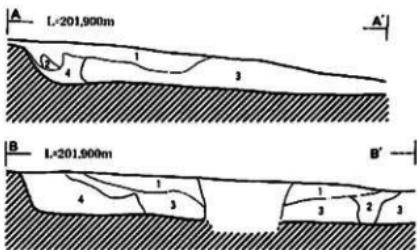
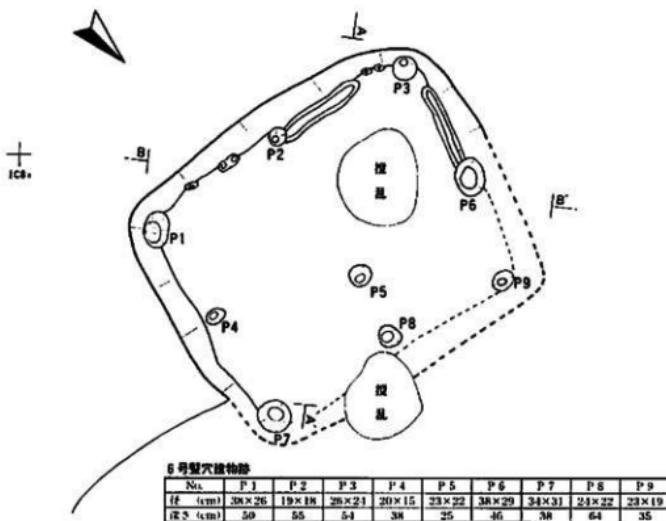
1. 10YR3/3 暗褐色シルト土。10YR2/1 黒色シルトの混合。粘性弱や弱。しまり強。埋土上部を中心に混合。
2. 10YR4/4 黑色シルト。粘性弱。しまり強。10YR2/1 黑色シルト 2%混入。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト。粘性弱。しまりや強。10YR4/3 にぶい暗褐色粘土質シルト 1%混入。
4. 10YR4/4 黑色シルト土。10YR2/1 黑色シルト・2.5YR7/6明褐色砂質シルトの混合。粘性強。しまり中。粘土。

5号竖穴建物跡

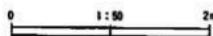
No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
H (cm)	37×28	31×28	31×29	33×29	40×26	(60×35)(40×23)	58×42	
底 (cm)	55	37	27	16	36	65	69	65

0 1:50 2m

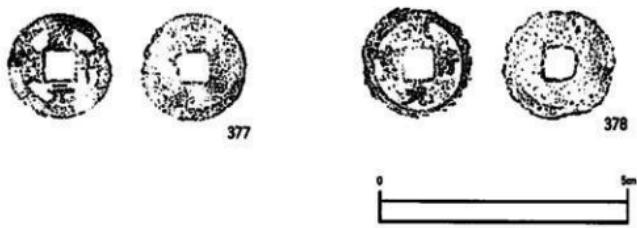
第103図 5号竖穴建物跡



- 6号竖穴建物跡
1. 10YR2/1 黒褐色シート 粘性中 しまりやや弱 10YR5/8 明黄色シート粒 (15.1~10mm) 10%混入
 2. 10YR1/1 黒褐色シート 粘性中 しまりやや弱 10YR5/6 黄褐色粘土質シートブロック混入
 3. 10YR2/2 黑褐色シート 粘性中 しまりやや弱 10YR5/4 淡い黄褐色粘土質シート粒15%混入 (部分的にブロック)
 4. 10YR3/1 黑褐色シート 粘性中 しまり中 10YR4/4 同色粘土質シートブロック混入



第104図 6号竖穴建物跡



第105図 6号竪穴建物跡出土遺物

<柱穴> 建物の間に配されており、柱穴を6個使用している。

<周溝> 墓際を廻るように配されている。開口部径は10~50cmで、深さは20cm前後である。

<出土遺物> なし

<時期> 出土遺物がないので不明ではあるが、造構の形態から中世の建物跡と考えられる。

6号竪穴建物跡

造構（第104図、写真図版54）

<位置> IC7i~7j・IC8i~8jに位置する。

<検出状況・重複関係> 表土除去後のⅡ層中で黒色～黒褐色のはば方形プランとして検出した。北西側は5分竪穴建物跡と重複しているが、本造構が切られているため、こちらの方が古い。また、北側は9号住居跡と重複しているが、9号住居跡は绳文の造構であるため、本造構の方が新しい。

<平面形式・規模> 衍行が2間の隅丸方形のプランで、張り出し部をもたない。長辺は363cm、短辺は(300)cmの建物である。

<建物方位> 衍行の輪方向はN-82°-Wである。

<柱間寸法> 5尺（約152cm）を多用しているが、一定しない。

<埋土> 黒色～黒褐色シルト主体で、4層からなる。全体的にしまりは弱い。

<壁・床面> 壁高は残存値で、東壁40cm、西壁34cm、南壁51cm、北壁40cmであり、外傾しながら立ち上がり。床はV層黄褐色シルトまで掘り込まれており、貼床は成されていない。しかし、床面は平坦で締まっていている。

<柱穴> 造構内を廻るように配されており、使用された柱穴は9個である。

<周溝> 南側隙を中心に廻る。開口部径は15cm前後で、深さは8cm前後である。

遺物（第105図、写真図版98）

<出土遺物> 初鎌年998年の咸平元寶（北宋）、初鎌年1009年の祥符元寶（北宋）の銭貨が2枚検出されている。

<時期> 出土遺物である銭貨と造構の形態から中世の建物跡と考えられる。

(2) 据立柱建物跡

据立柱建物跡は本遺跡では合計15棟を検出した。平面図の縮尺は1/100である。平面図に付してある寸法はカッコ内の単位は尺、カッコのないものはcmである。一尺は30.3cmとして計算した。また、柱穴規模は表で記載した。

1号据立柱建物跡

造構 (第107図・写真図版55)

<位置> IC 4 j・5 i～5 j, ID 4 a～4 b・5 b グリッドに位置する。

<重複> なし

<平面形式> 据立柱建物である。桁行は5間で長方形のプランと考えられる。桁行は955cm、梁間は591cmで面積は56.44m² (約17.1坪) である。使用した柱穴は15個 (1個は推定) である。

<建物方位> 桁行の方向はN-51°-Wである。

<柱間寸法> 6尺5寸 (約197cm) を基準にしている。

<出土遺物> なし

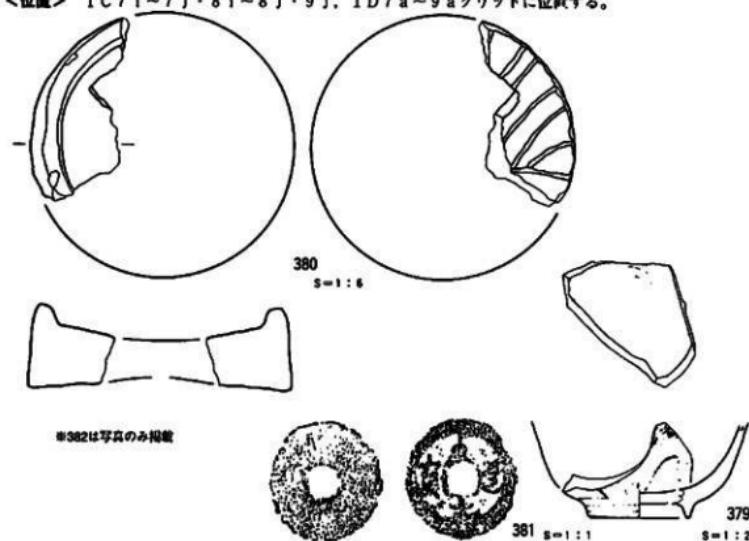
<付属施設> なし

<年代> 中世～近世の所属と考えられる。

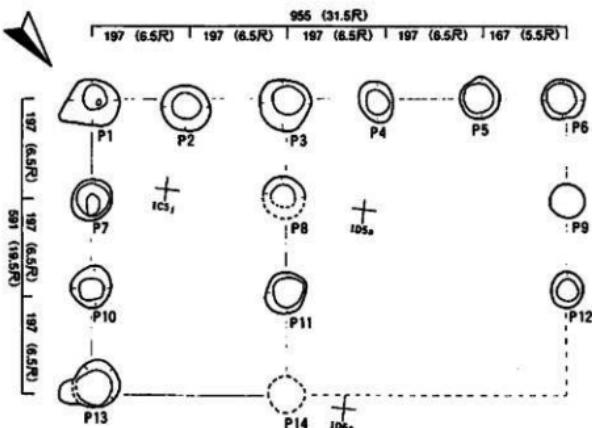
2号据立柱建物跡

造構 (第107図・写真図版55)

<位置> IC 7 i～7 j・8 i～8 j・9 j, ID 7 a～9 a グリッドに位置する。



第106図 2号据立柱建物跡出土遺物

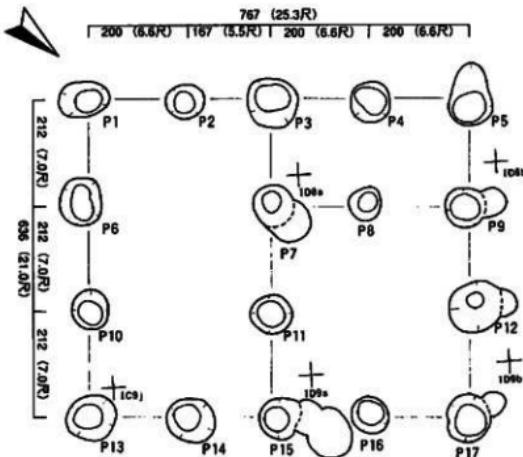


1号掘立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径 (cm)	127×96	96×94	107×104	87×67	85×84	88×80	92×79	(86×83)	(55×58)	85×82
高さ (cm)	104	101	96	74	70	83	83	71	(35)	68

No.	P 11	P 12	P 13	P 14
径 (cm)	87×80	74×63	(96×94)	(76×76)
高さ (cm)	59	5	34	-

0 1 : 100 2m



2号掘立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径 (cm)	105×50	77×71	105×100	81×79	129×78	95×84	(85×81)	71×65	82×77	80×74
高さ (cm)	88	88	56	70	74	53	62	48	47	56

No.	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17
径 (cm)	86×78	(116×10)	104×91	96×88	(90×77)	78×70	97×74
高さ (cm)	50	77	32	56	43	36	41

第107図 1・2号掘立柱建物跡

＜重複＞ 3号掘立柱建物と重複するが、柱穴の新旧関係から本建物のはうが新しいと考えられるが、詳細は不明である。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行は5間で長方形のプランである。桁行は767cm、梁間は636cmで面積は48.78m²（約14.8坪）である。使用した柱穴は17個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-41°-Wである。

＜柱間寸法＞ 6尺6寸（約200cm）を多用している。

遺物（第106図・写真図版98）

＜出土遺物＞ P13から挽き臼（上臼）の一部が出土した。

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。

3号掘立柱建物跡

遺構（第109図・写真図版55）

＜位置＞ 1C8j、1D8a・9aグリッドに位置する。

＜重複＞ 2号掘立柱建物と重複し、これにより切られる。

＜平面形式＞ 掘立柱建物跡である。桁行は2間で方形のプランである。桁行は424cm、梁間は394cmで面積は16.71m²（約5.1坪）である。使用した柱穴は8個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-41°-Eである。

＜柱間寸法＞ 7尺（約212cm）を基準としている。

遺物（第106図・写真図版99）

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。

4号掘立柱建物跡

遺構（第109図・写真図版56）

＜位置＞ II D 1b・2a-2cグリッドに位置する。

＜重複＞ 5号掘立柱建物と重複するが、柱穴の重複がないため、新旧関係は不明である。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行及び梁間いずれも3間の方形のプランである。桁行は636cm、梁間は600cmで面積は38.16m²（約11.6坪）である。使用した柱穴は13個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-1°-Wである。

＜柱間寸法＞ 6尺6寸（約200cm）が多用されている。

遺物（第108図・写真図版100）

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

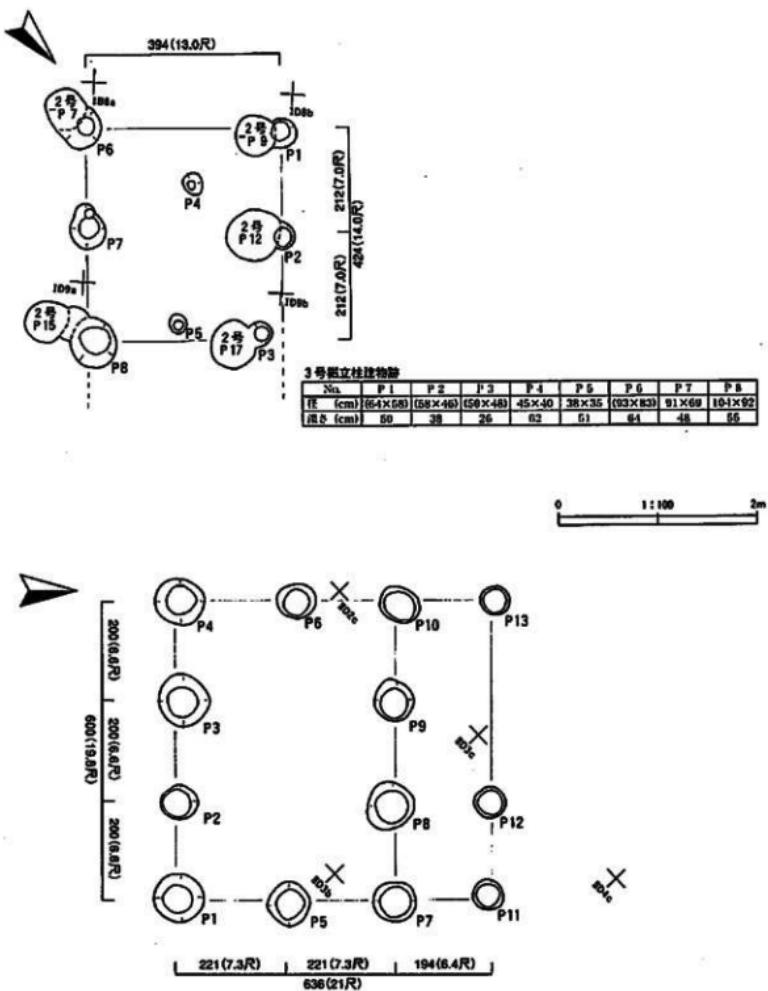
＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。



386

S=1:2

第108図 4号掘立柱建物跡出土遺物



第109圖 3・4号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡

遺構（第110図・写真図版56）

＜位置＞ II D 2 c・3 b - 3 c グリッドに位置する。

＜重複＞ 4号掘立柱建物と重複するが、柱穴の重複がないため、新旧関係は不明である。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行及び梁間いずれも2間の方形のプランである。桁行は400cm、梁間は376cmで面積は15.04m²（約4.6坪）である。使用した柱穴は6個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-3°-Eである。

＜柱間寸法＞ 6尺6寸（約200cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。

6号掘立柱建物跡

遺構（第110図・写真図版56）

＜位置＞ II B 1 d - 1 e - 2 d - 2 f - 3 d - 3 f グリッドに位置する。

＜重複＞ なし

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行は4間で長方形のプランである。桁行は824cm、梁間は1681cmで面積は56.11m²（約17坪）である。使用した柱穴は10個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-18°-Wである。

＜柱間寸法＞ 6尺6寸（約200cm）、7尺5寸（約227cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。

7号掘立柱建物跡

遺構（第111図・写真図版57）

＜位置＞ II C 2 c - 2 e - 3 e - 3 g - 4 d - 4 g グリッドに位置する。

＜重複＞ 8・9号掘立柱建物と重複する。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。北側の柱穴は調査区外のため確認できないが、身舎に四面庇が付く形態と推定される。身舎の桁行は5間であると考えられ、また梁間は2間である。庇を含めた長さは桁行1,532cm、梁間は785cmで、面積は120.3m²（約36.4坪）である。使用した柱穴は22個である。

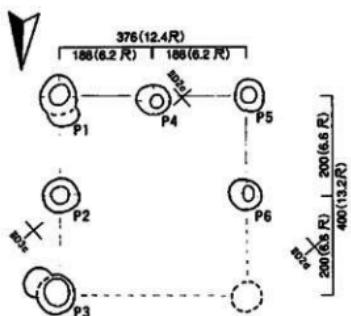
＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-21°-Wである。

＜柱間寸法＞ 身舎は8尺（約242cm）、庇部分は5尺3寸（約161cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

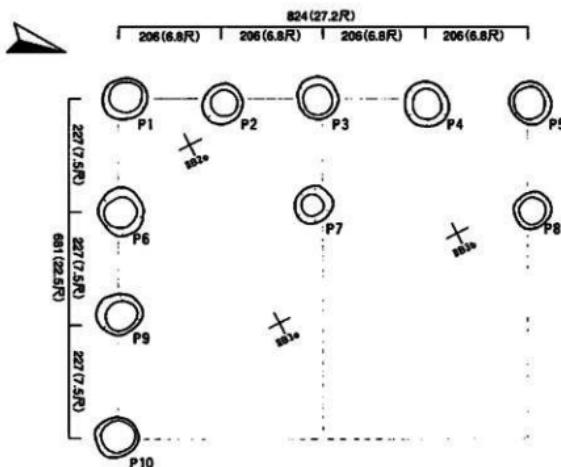
＜付属施設＞ 10号掘立柱建物が本遺構に伴うと考えられるが、詳細は不明である。

＜年代＞ 中世～近世の所屬と考えられる。



5号獨立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
径 (cm)	682×729	74×69	(76×76)	68×59	68×59	68×61
深さ (cm)	41	24	22	50	55	39

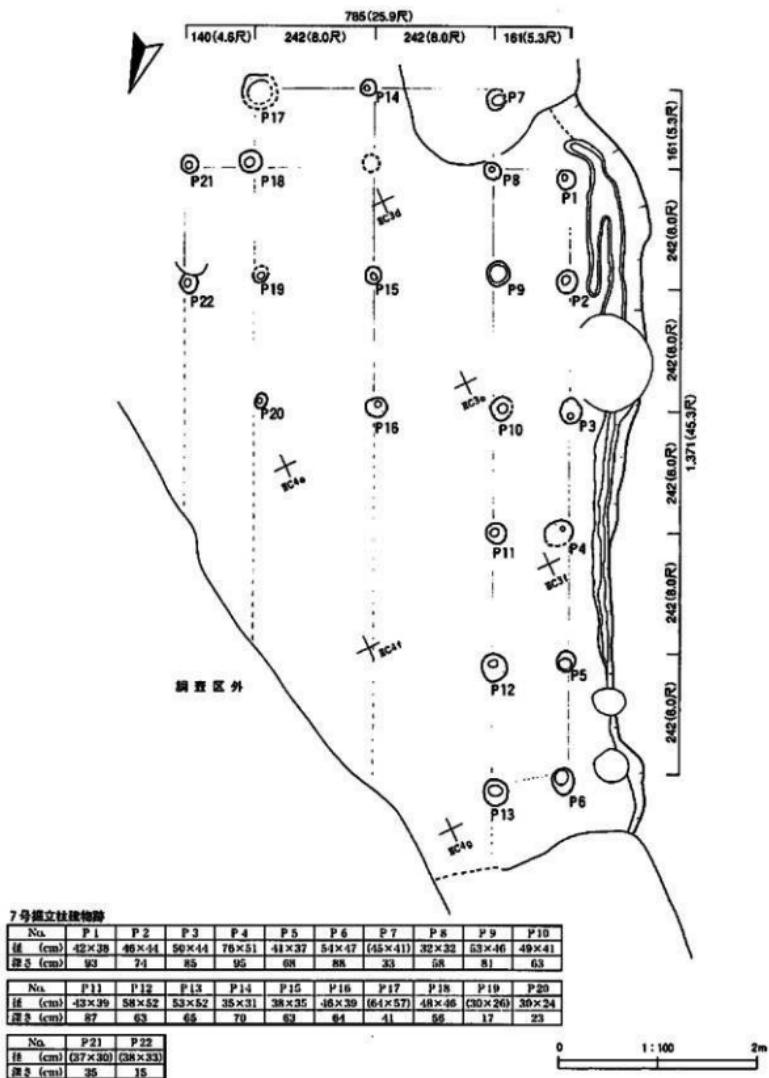


6号獨立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径 (cm)	90×83	84×76	86×83	91×89	86×86	100×92	79×72	75×73	93×85	88×86
深さ (cm)	49	47	54	47	26	36	37	21	28	10

0 1:100 2m

第110図 5・6号独立柱建物跡



第111図 7号掘立柱建物跡

8号掘立柱建物跡

造構（第112図）

＜位置＞ II C 2 c ~ 2 d · 3 c ~ 3 f · 4 c ~ f グリッドに位置する。

＜重複＞ 7・9号掘立柱建物と重複する。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。北側の柱穴は調査区外のため確認できないが、東側に半間の下屋が付く。西側にも下床柱と考えられる柱穴があるが、判然としないため認定しなかった。しかし、本来はあった可能性が高いと考えられる。桁行は1,174cm、梁間は605cmで、面積は71.03m²（約21.5坪）である。使用した柱穴は15個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-28°-Wである。

＜柱穴寸法＞ 様々な寸法を使用しており基準寸法は判然としない。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ 11号掘立柱建物が本造構に伴うと考えられるが、詳細は不明である。

＜年代＞ 中世～近世の所属と考えられる。

9号掘立柱建物跡

造構（第113図・写真図版50）

＜位置＞ II C 2 d ~ 2 e · 3 c ~ 3 g · 4 d ~ 4 f グリッドに位置する。

＜重複＞ 7号掘立柱建物と重複する。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。北側の柱穴は調査区外のため確認できないが、南側に半間の下屋が付くため、北側にもあった可能性がある。桁行は1,343cm、梁間は515cmで、面積は69.17m²（約21坪）である。使用した柱穴は11個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-67°-Eである。

＜柱間寸法＞ 8尺2寸（約248cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ 12号掘立柱建物が本造構に伴うと考えられるが、詳細は不明である。

＜年代＞ 中世～近世の所属と考えられる。

10号掘立柱建物跡

造構（第114図・写真図版58）

＜位置＞ II C 1 a ~ 1 c · 2 a ~ 2 c · 3 a ~ 3 b グリッドに位置する。

＜重複＞ 11・12号掘立柱建物と重複する。

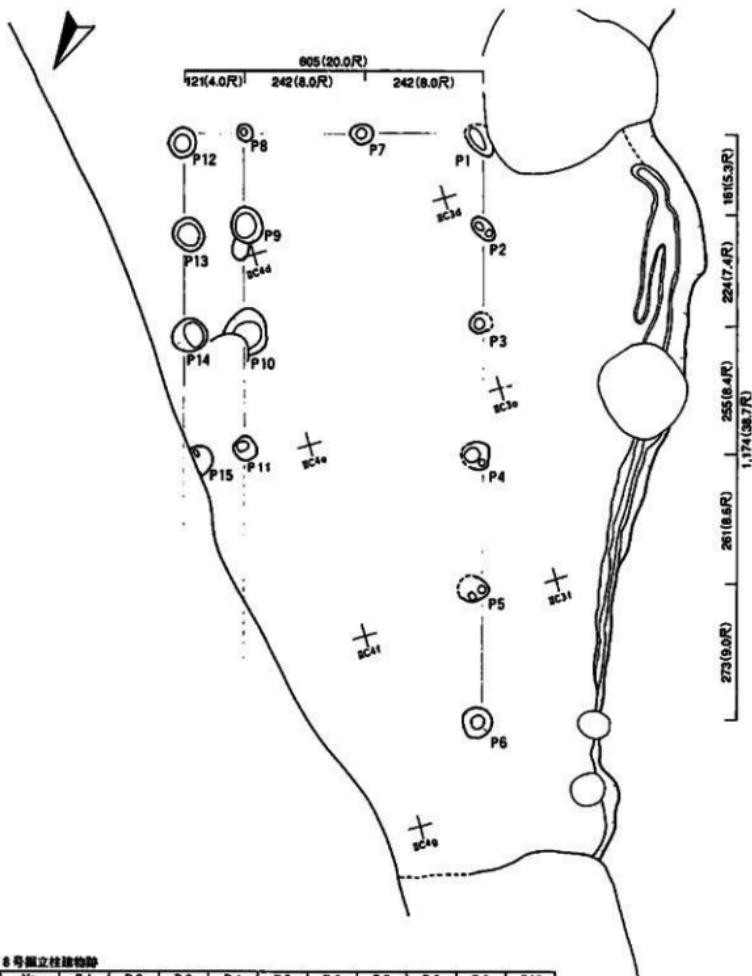
＜平面形式＞ 掘立柱建物である。南側に半間の下屋が付くため、本来は北側にもあった可能性があるが柱穴は検出できなかった。建物は桁行が3間の長方形のプランである。桁行は1733cm、梁間は599cmで、面積は43.91m²（約13.3坪）である。使用した柱穴は13個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-67°-Eである。

＜柱間寸法＞ 7尺5寸（約227cm）、8尺（約242cm）を多用している。

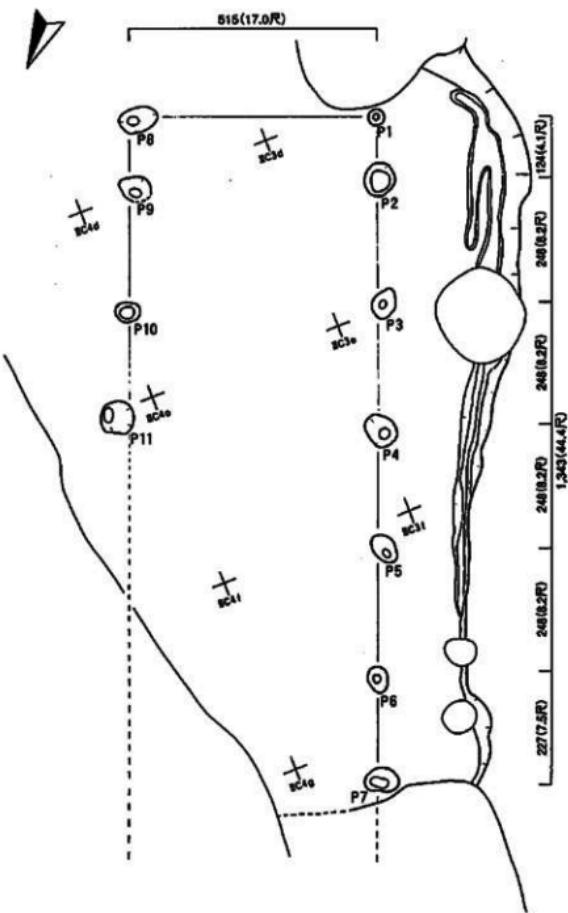
＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ 7号掘立柱建物に本造構が伴うと考えられるが、詳細は不明である。



第112図 8号掘立柱建物跡

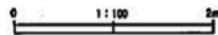
0 1:100 2m



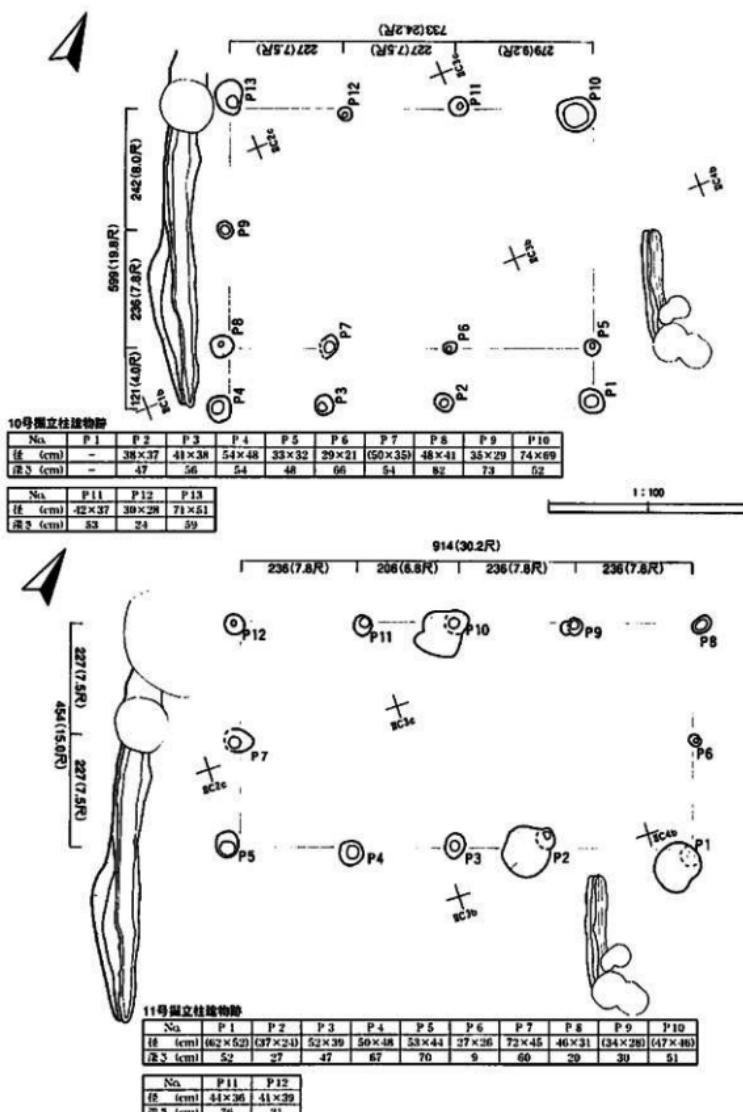
9号掘立柱建物跡

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
幅 (cm)	32×32	69×82	69×48	73×58	65×42	55×40	69×48	76×48	(68×48)	50×38
奥行き (cm)	68	74	82	77	64	52	67	38	34	41

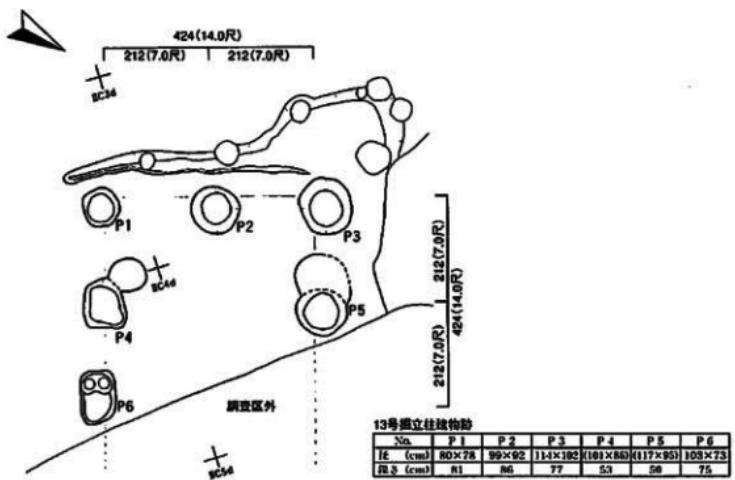
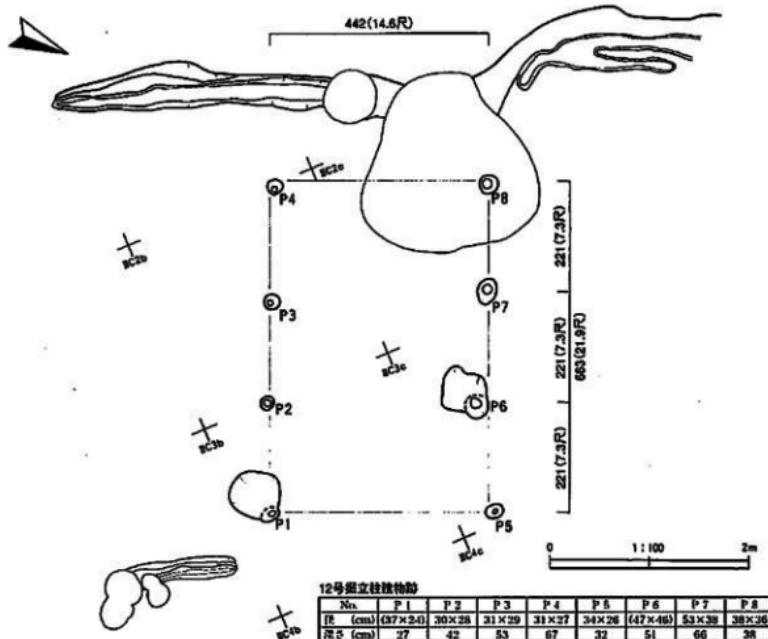
No.	P11
幅 (cm)	70×79
奥行き (cm)	32



第113図 9号掘立柱建物跡



第114図 10・11号圆立柱建物跡



第115図 12・13号掘立柱建物跡

<年代> 中世～近世の所蔵と考えられる。

11号掘立柱建物跡

遺構（第114図・写真図版59）

<位置> II C 1 b・2 b～2 c・3 b～3 c・4 b～4 c グリッドに位置する。

<重複> 10・12号掘立柱建物と重複する。

<平面形式> 掘立柱建物である。桁行が4間の長方形のプランである。桁行は914cm、梁間は454cmで、面積は41.5m²（約12.6坪）である。使用した柱穴は12個である。

<建物方位> 桁行の軸方向はN-63°-Eである。

<柱間寸法> 7尺8寸（約236cm）を多用している。

<出土遺物> なし

<付属施設> 8号掘立柱建物に本遺構が伴うと考えられるが、詳細は不明である。

<年代> 中世～近世の所蔵と考えられる。

12号掘立柱建物跡

遺構（第115図・写真図版59）

<位置> II C 2 b～2 c・3 b～3 c グリッドに位置する。

<重複> 10・11号掘立柱建物と重複する。

<平面形式> 掘立柱建物である。桁行が3間の長方形のプランである。桁行は663cm、梁間は442cmで、面積は29.31m²（約8.9坪）である。使用した柱穴は8個である。

<建物方位> 桁行の軸方向はN-67°-Eである。

<柱間寸法> 7尺3寸（約221cm）を基準にしている。

<出土遺物> なし

<付属施設> 9号掘立柱建物に本遺構が伴うと考えられるが、詳細は不明である。

<年代> 中世～近世の所蔵と考えられる。

13号掘立柱建物跡

遺構（第115図・写真図版60）

<位置> II C 3 c～3 d・4 c～4 d グリッドに位置する。

<重複> なし

<平面形式> 掘立柱建物である。東側の柱穴は調査区外のため確認できないが、桁行が3間以上の長方形のプランであると考えられる。桁行は残存部のみで424cm、梁間は424cmで、面積は17.98±m²（約5.5±坪）である。使用した柱穴は6個である。

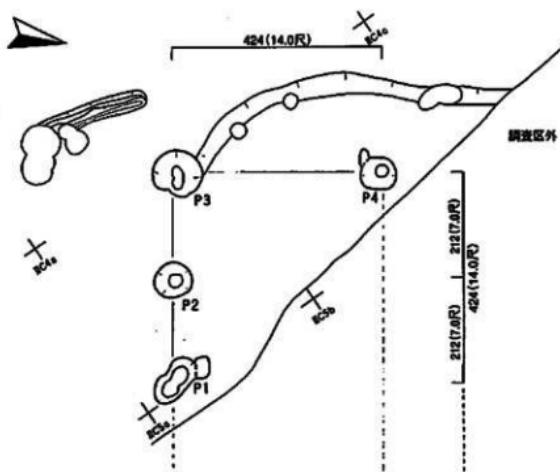
<建物方位> 桁行の軸方向はN-62°-Eである。

<柱間寸法> 7尺（約212cm）を基準にしている。

<出土遺物> なし

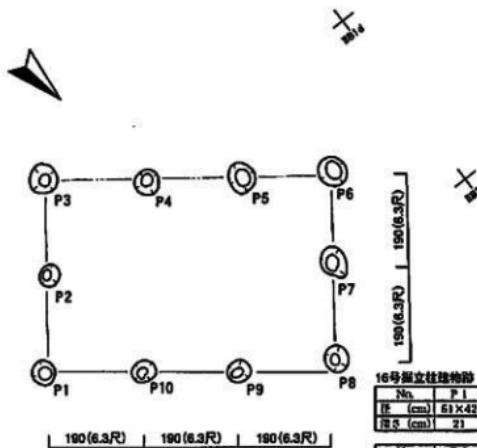
<付属施設> なし

<年代> 中世～近世の所蔵と考えられる。



14号掘立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4
(尺 cm)	68×580	77×71	(102×92)	76×66
(尺 丈 cm)	62	78	75	58



16号掘立柱建物跡

No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
(尺 cm)	61×42	43×40	60×68	52×48	61×68
(尺 丈 cm)	21	28	37	29	34

No.	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
(尺 cm)	64×62	68×66	63×48	48×46	49×42
(尺 丈 cm)	44	34	36	26	19

第116図 14・16号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡

遺構（第116図・写真図版60）

＜位置＞ II C 4 a～4 b・5 a～5 b グリッドに位置する。

＜重複＞ なし

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。東側の柱穴は調査区外のため確認できないが、桁行が3間以上の長方形のプランであると考えられる。桁行は残存部のみで424cm、梁間は424cmで、面積は $17.98+ \text{m}^2$ （約5.5+ 坪 ）である。使用した柱穴は4個である。残存した規模から13号掘立柱建物跡と類似している。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-80°-Eである。

＜柱間寸法＞ 7尺（約212cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 中世～近世の所蔵と考えられる。

15号掘立柱建物跡

＜位置＞ II C 2 i・3 h～3 i グリッドに位置する。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行が2間の長方形のプランである。桁行は576cm、梁間は266cmで、面積は 15.32 m^2 （約4.8坪）である。使用した柱穴は9個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-88°-Eである。

＜柱間寸法＞ 9尺5寸（約288cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜建物の性格＞ 地主さんの話によると今から20年前まであったはせ収納のための小屋であったとのこと。

＜年代＞ 現代（昭和50年代）

16号掘立柱建物跡

遺構（第116図・写真図版61）

＜位置＞ II B 1 b・II B 1 c グリッドに位置する。

＜平面形式＞ 掘立柱建物である。桁行が3間の長方形のプランである。桁行は570cm、梁間は380cmで、面積は 21.66 m^2 （約6.6坪）である。使用した柱穴は9個である。

＜建物方位＞ 桁行の軸方向はN-8°-Wである。

＜柱間寸法＞ 6尺3寸（約190cm）を基準にしている。

＜出土遺物＞ なし

＜付属施設＞ なし

＜年代＞ 地上の状況から近世～近代の遺構と考えられる。

（北田 熊）

(3) 柱穴群

遺構（第118・119図・写真図版62）・遺物（第117図・写真図版99）

調査区全域から373基を検出した。個々の柱穴状ピットの計測値・位置関係については、第2表と第118・119図の遺構配図を参照していただきたい。柱穴状ピットはピット同士の重複が激しく、平面形の定かでないものが多いが、ほぼ円形を店調とする。調査区東側すなわち斜面下方に密集しており、そのエリアでは掘立柱建物跡が16棟構成される。掘立柱建物跡を構成する柱穴配列を想定できないものを、柱穴状ピットとして登録した。調査区南側でも柱穴状ピットを多数検出したが、掘立柱建物跡らしき配列は認められなかつた。ピットの数からすれば今回想定した他にも、掘立柱建物跡を構成しうる配列の存在する可能性は大きい。

平面規模は柱穴としては大規模なものも見られるが、押し並べて100m以内に収まる範囲である。深さは浅すぎるものもあるが、耕作などの擾乱を受けていることを考慮すると、実際はより深いものであったと考えられる。ここでは現場で計測した実測図を機械的に図表に掲載した。

意味を成す柱穴配列を想定できないことから、個々のピットの性格は不明である。他の遺構との新旧関係から判断すると、古いものでは掘立柱建物跡と同時期のもの、新しいものでは近世以降に比定されると推測される。

（原 美津子）



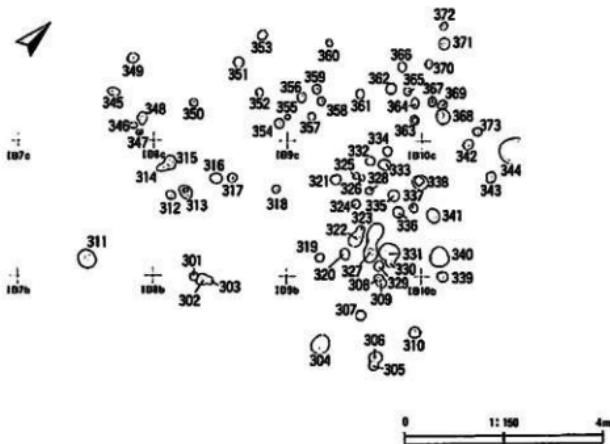
第117図 柱穴群出土遺物

No.	グリッド	大きさ			No.	グリッド	大きさ		
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	EC 5 a	31.0	33.0	15.9	27	EC 3 a	41.0	35.0	36.1
2	EC 4 a	11.0	31.0	16.5	28	EC 3 a	24.0	29.0	17.0
3	EC 4 a	19.0	35.0	21.6	29	EC 3 a	(65.0)	37.0	60.3
4	EC 4 a	46.0	29.0	29.5	30	EC 3 a	(40.0)	(31.0)	43.0
5	EC 4 a	21.0	21.0	11.9	31	EC 3 a	42.0	36.0	40.1
6	EC 4 a	13.0	26.0	14.5	32	EC 3 a	40.0	(35.0)	23.5
7	EC 4 a	41.0	33.0	18.0	33	EC 3 a	31.0	25.0	30.2
8	EC 4 a	28.0	28.0	13.6	34	EC 3 a	87.0	76.0	14.1
9	EC 4 a	60.0	32.0	25.3	35	EC 3 a	50.0	29.0	47.2
10	EC 4 a	65.0	31.0	35.1	36	EC 2 a	29.0	28.0	26.2
11	EC 4 a	33.0	29.0	22.1	37	EC 2 a	33.0	26.0	22.9
12	EC 4 a	46.0	35.0	68.6	38	EC 2 a	38.0	31.0	62.5
13	EC 4 a	21.0	18.0	12.9	39	EC 2 a	81.0	45.0	32.3
14	EC 4 a	31.0	22.0	10.1	40	EC 2 a	42.0	32.0	30.2
15	EC 4 a	39.0	31.0	19.2	41	EC 1 a	59.0	32.0	52.2
16	EC 1 a	40.0	23.0	26.4	42	EC 4 b	20.0	16.0	12.1
17	EC 3 a	36.0	32.0	31.6	43	EC 4 b	30.0	12.0	27.8
18	EC 3 a	29.0	26.0	17.2	44	EC 4 b	32.0	32.0	18.7
19	EC 3 a	(68.0)	58.0	36.8	45	EC 4 b	43.0	38.0	43.2
20	EC 3 a	77.0	(61.0)	52.4	46	EC 4 b	29.0	24.0	19.1
21	EC 3 a	47.0	42.0	58.6	47	EC 4 b	33.0	30.0	41.1
22	EC 3 a	(52.0)	44.0	27.8	48	EC 4 b	31.0	29.0	33.6
23	EC 3 a	35.0	24.0	17.1	49	EC 4 b	31.0	26.0	48.1
24	EC 3 a	53.0	42.0	4.4	50	EC 4 b	27.0	22.0	11.4
25	EC 3 a	40.0	32.0	29.0	51	EC 4 b	(28.0)	21.0	27.1
26	EC 3 a	45.0	33.0	35.8	52	EC 4 b	39.0	36.0	59.1

第2表 柱穴群計測値一覧

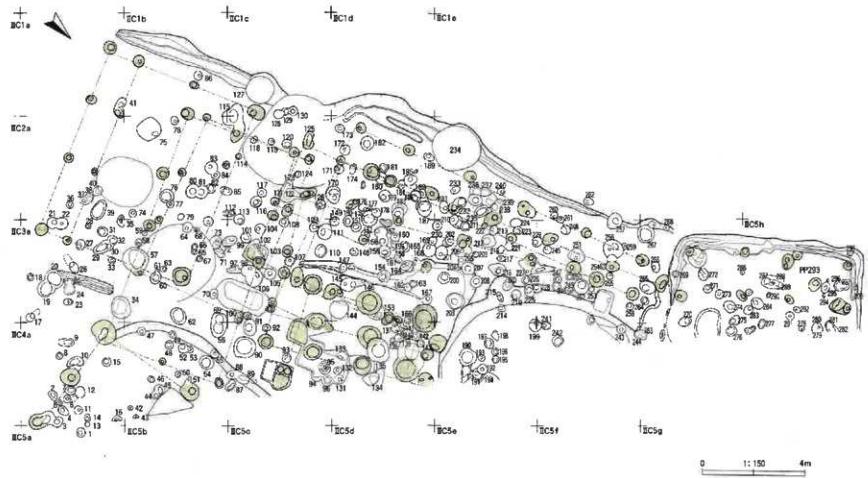
No.	グリッド	大きさ			No.	グリッド	大きさ		
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
53	H C 4 b	(27.0)	25.0	22.2	118	H C 2 c	32.0	27.0	13.3
54	H C 4 b	60.0	55.0	54.5	119	H C 2 c	25.0	24.0	13.4
55	H C 4 b	35.0	31.0	45.8	120	H C 2 c	36.0	36.0	14.4
56	H C 4 b	70.0	(60.0)	28.7	121	H C 2 c	59.0	(42.0)	59.5
57	H C 3 b	102.0	96.0	65.9	122	H C 2 c	(54.0)	(45.0)	62.6
58	H C 3 b	28.0	25.0	29.9	123	H C 2 c	45.0	(39.0)	47.7
59	H C 3 b	24.0	22.0	39.9	124	H C 2 c	25.0	24.0	—
60	H C 3 b	51.0	41.0	25.1	125	H C 2 c	(39.0)	33.0	43.1
61	H C 3 b	17.0	15.0	26.4	126	H C 2 c	36.0	34.0	47.4
62	H C 3 b	70.0	59.0	37.8	127	H C 1 c	113.0	106.0	55.4
63	H C 3 b	24.0	18.0	30.1	128	H C 1 c	37.0	35.0	—
64	H C 3 b	40.0	35.0	53.3	129	H C 1 c	30.0	28.0	—
65	H C 3 b	23.0	(19.0)	14.2	130	H C 1 c	39.0	32.0	—
66	H C 3 b	(26.0)	23.0	15.4	131	H C 4 d	40.0	33.0	39.4
67	H C 3 b	25.0	24.0	12.1	132	H C 4 d	31.0	25.0	16.5
68	H C 3 b	19.0	17.0	26.1	133	H C 4 d	49.0	33.0	55.2
69	H C 3 b	70.0	(45.0)	38.6	134	H C 4 d	66.0	46.0	35.1
70	H C 3 b	36.0	28.0	33.9	135	H C 4 d	103.0	88.0	65.4
71	H C 3 b	31.0	26.0	26.8	136	H C 4 d	20.0	18.0	13.4
72	H C 3 b	32.0	29.0	41.8	137	H C 4 d	33.0	30.0	26.1
73	H C 3 b	52.0	48.0	33.7	138	H C 4 d	35.0	31.0	36.7
74	H C 2 b	32.0	29.0	28.5	139	H C 4 d	132.0	(101.0)	76.4
75	H C 2 b	99.0	92.0	40.3	140	H C 4 d	26.0	13.0	18.3
76	H C 2 b	58.0	54.0	27.6	141	H C 4 d	36.0	29.0	23.0
77	H C 2 b	34.0	(26.0)	25.3	142	H C 4 d	37.0	33.0	13.2
78	H C 2 b	33.0	30.0	42.8	143	H C 4 d	29.0	28.0	15.3
79	H C 2 b	26.0	23.0	12.0	144	H C 3 d	75.0	68.0	43.8
80	H C 2 b	58.0	(46.0)	61.1	145	H C 3 d	78.0	44.0	35.7
81	H C 2 b	51.0	(41.0)	52.2	146	H C 3 d	(32.0)	24.0	19.2
82	H C 2 b	40.0	37.0	46.9	147	H C 3 d	38.0	30.0	37.6
83	H C 2 b	51.0	46.0	54.5	148	H C 3 d	33.0	28.0	54.9
84	H C 2 b	34.0	(32.0)	43.4	149	H C 3 d	39.0	34.0	60.2
85	H C 2 b	48.0	30.0	36.0	150	H C 3 d	44.0	39.0	66.3
86	H C 1 b	35.0	34.0	46.8	151	H C 3 d	37.0	36.0	62.3
87	H C 4 c	47.0	29.0	35.1	152	H C 3 d	(34.0)	33.0	31.0
88	H C 4 c	56.0	36.0	56.9	153	H C 3 d	66.0	(45.0)	28.4
89	H C 4 c	(50.0)	40.0	36.8	154	H C 3 d	50.0	48.0	69.7
90	H C 4 c	92.0	87.0	52.4	155	H C 3 d	49.0	48.0	72.2
91	H C 4 c	67.0	50.0	52.5	156	H C 3 d	45.0	41.0	39.6
92	H C 4 c	29.0	27.0	15.3	157	H C 3 d	51.0	40.0	29.8
93	H C 4 c	36.0	33.0	42.5	158	H C 3 d	(37.0)	(24.0)	32.9
94	H C 4 c	44.0	(42.0)	24.3	159	H C 3 d	35.0	(28.0)	46.8
95	H C 4 c	52.0	43.0	46.2	160	H C 2 d	34.0	31.0	55.9
96	H C 4 c	34.0	33.0	37.3	161	H C 3 d	24.0	23.0	26.7
97	H C 3 c	58.0	26.0	31.3	162	H C 3 d	33.0	(26.0)	12.4
98	H C 3 c	58.0	(38.0)	49.6	163	H C 3 d	28.0	23.0	28.2
99	H C 3 c	62.0	34.0	54.1	164	H C 3 d	53.0	38.0	13.4
100	H C 3 c	28.0	(23.0)	21.9	165	H C 2 d	44.0	30.0	59.0
101	H C 3 c	42.0	41.0	13.9	166	H C 3 d	28.0	24.0	18.5
102	H C 3 c	38.0	(26.0)	55.9	167	H C 3 d	41.0	35.0	31.0
103	H C 3 c	57.0	(40.0)	29.0	168	H C 3 d	(56.0)	51.0	37.3
104	H C 3 c	42.0	36.0	66.7	169	H C 3 d	(35.0)	32.0	14.6
105	H C 3 c	45.0	44.0	45.5	170	H C 2 d	68.0	56.0	63.6
106	H C 3 c	73.0	(64.0)	60.2	171	H C 2 d	40.0	35.0	79.5
107	H C 3 c	39.0	34.0	25.0	172	H C 2 d	41.0	39.0	41.0
108	H C 3 c	37.0	33.0	47.7	173	H C 2 d	38.0	31.0	3.9
109	H C 3 c	48.0	35.0	62.8	174	H C 2 d	42.0	23.0	19.9
110	H C 3 c	53.0	45.0	20.5	175	H C 2 d	65.0	62.0	27.5
111	H C 3 c	63.0	52.0	65.9	176	H C 2 d	(32.0)	30.0	36.9
112	H C 2 c	43.0	27.0	39.9	177	H C 2 d	29.0	21.0	35.5
113	H C 2 c	44.0	42.0	55.0	178	H C 2 d	35.0	31.0	32.3
114	H C 2 c	23.0	23.0	29.3	179	H C 2 d	46.0	45.0	50.5
115	H C 2 c	98.0	(68.0)	71.9	180	H C 2 d	45.0	(40.0)	69.7
116	H C 2 c	47.0	43.0	63.1	181	H C 2 d	38.0	30.0	17.6
117	H C 2 c	38.0	36.0	51.1	182	H C 2 d	55.0	52.0	15.6

No.	グリップ	大きさ			No.	グリップ	大きさ		
		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
183	H C 2 d	68.0	58.0	60.0	246	H C 3 f	38.0	35.0	59.3
184	H C 2 d	31.0	29.0	49.8	249	H C 3 f	24.0	18.0	15.8
185	H C 2 d	53.0	41.0	54.1	250	H C 3 f	31.0	29.0	24.1
186	H C 2 d	55.0	40.0	31.1	251	H C 3 f	67.0	55.0	61.7
187	H C 2 d	69.0	56.0	33.1	252	H C 3 f	69.0	58.0	58.5
188	H C 2 d	35.0	23.0	52.1	253	H C 3 f	22.0	19.0	37.6
189	H C 2 d	43.0	29.0	24.9	254	H C 3 f	24.0	23.0	42.7
190	H C 4 e	70.0	65.0	53.7	255	H C 3 f	29.0	25.0	40.5
191	H C 4 e	45.0	(34.0)	15.1	256	H C 3 f	83.0	75.0	47.8
192	H C 4 e	41.0	38.0	32.2	257	H C 3 f	69.0	53.0	50.2
193	H C 4 e	37.0	33.0	14.8	258	H C 3 f	32.0	31.0	44.6
194	H C 4 e	79.0	(34.0)	20.4	259	H C 2 f	25.0	18.0	11.4
195	H C 4 e	29.0	29.0	20.8	260	H C 2 f	28.0	23.0	60.0
196	H C 4 e	25.0	26.0	15.7	261	H C 2 f	29.0	24.0	45.2
197	H C 4 e	41.0	38.0	22.9	262	H C 4 f	41.0	30.0	20.2
198	H C 4 e	42.0	26.0	16.6	263	H C 4 g	37.0	36.0	47.2
199	H C 4 e	50.0	48.0	39.1	264	H C 3 g	34.0	29.0	40.4
200	H C 3 e	48.0	45.0	14.7	265	H C 3 g	66.0	45.0	40.9
201	H C 3 e	55.0	48.0	40.5	266	H C 3 g	39.0	29.0	39.0
202	H C 3 e	49.0	36.0	38.8	267	H C 3 g	68.0	65.0	35.0
203	H C 3 e	74.0	63.0	59.6	268	H C 3 g	23.0	19.0	17.5
204	H C 3 e	28.0	20.0	16.4	269	H C 3 g	27.0	25.0	30.6
205	H C 3 e	(36.0)	(28.0)	34.5	270	H C 3 g	53.0	37.0	45.2
206	H C 3 e	52.0	(41.0)	49.1	271	H C 3 g	35.0	30.0	58.3
207	H C 3 e	53.0	50.0	69.6	272	H C 3 g	48.0	40.0	31.6
208	H C 3 e	45.0	44.0	53.3	273	H C 3 g	36.0	32.0	68.6
209	H C 3 e	21.0	19.0	18.1	274	H C 3 g	53.0	45.0	18.6
210	H C 3 e	41.0	33.0	37.9	275	H C 3 g	46.0	34.0	51.1
211	H C 3 e	37.0	35.0	6.6	276	H C 4 g	43.0	39.0	16.0
212	H C 3 e	58.0	54.0	73.8	277	H C 4 h	38.0	29.0	9.6
213	H C 3 e	40.0	30.0	46.5	278	H C 4 h	23.0	19.0	35.0
214	H C 3 e	32.0	26.0	29.4	279	H C 4 h	49.0	(31.0)	45.0
215	H C 3 e	42.0	20.0	25.3	280	H C 4 h	(39.0)	(23.0)	20.0
216	H C 3 e	72.0	46.0	54.9	281	H C 4 h	(46.0)	(33.0)	9.7
217	H C 3 e	32.0	20.0	13.2	282	H C 4 h	(45.0)	(40.0)	90.2
218	H C 3 e	35.0	24.0	9.4	283	H C 3 h	39.0	34.0	58.3
219	H C 3 e	39.0	37.0	30.3	284	H C 3 h	49.0	36.0	45.6
220	H C 3 e	41.0	36.0	44.6	285	H C 3 h	28.0	24.0	38.8
221	H C 3 e	32.0	30.0	3.8	286	H C 3 h	16.0	15.0	47.8
222	H C 3 e	26.0	19.0	36.2	287	H C 3 h	(50.0)	(40.0)	48.3
223	H C 3 e	36.0	30.0	41.1	288	H C 3 h	(48.0)	(37.0)	25.5
224	H C 3 e	49.0	31.0	13.7	289	H C 3 h	(50.0)	(30.0)	17.2
225	H C 3 e	50.0	(36.0)	57.6	290	H C 3 h	24.0	14.0	19.8
226	H C 3 e	42.0	31.0	21.6	291	H C 3 h	31.0	33.0	41.7
227	H C 3 e	32.0	(29.0)	52.8	292	H C 3 h	28.0	22.0	31.3
228	H C 3 e	38.0	35.0	29.6	293	H C 3 h	13.0	9.0	28.8
229	H C 3 e	40.0	35.0	23.3	294	H C 3 h	20.0	10.0	9.0
230	H C 3 e	36.0	36.0	68.2	295	H C 3 h	45.0	30.0	16.1
231	H C 2 e	49.0	33.0	45.3	296	H C 3 h	43.0	(35.0)	10.5
232	H C 2 e	47.0	38.0	16.6	297	H C 3 h	33.0	(21.0)	11.6
233	H C 2 e	39.0	27.0	61.1	298	H D 3 a	26.0	21.0	11.5
234	H C 2 e	49.0	43.0	16.2	299	H D 2 e	55.0	46.0	19.1
235	H C 2 e	58.0	43.0	18.3	300	H C 2 e	18.0	16.0	19.4
236	H C 2 e	45.0	46.0	15.3	301	I B 8 a	23.0	(23.0)	43.0
237	H C 2 e	43.0	33.0	13.8	302	I B 8 a	(41.0)	31.0	17.0
238	H C 2 e	44.0	(34.0)	58.6	303	I B 8 a	(20.0)	17.0	11.3
239	H C 2 e	32.0	32.0	59.0	304	I B 9 a	60.0	49.0	64.3
240	H C 2 e	28.0	28.0	70.4	305	I B 9 a	33.0	(24.0)	18.5
241	H C 4 f	36.0	30.0	32.2	306	I B 9 a	41.0	(30.0)	23.8
242	H C 4 f	45.0	40.0	18.9	307	I B 9 a	31.0	30.0	41.0
243	H C 4 f	36.0	32.0	57.9	308	I B 9 a	30.0	(29.0)	55.1
244	H C 4 f	32.0	(22.0)	32.5	309	I B 9 a	29.0	(26.0)	53.4
245	H C 3 f	34.0	30.0	48.3	310	I B 9 a	35.0	34.0	78.5
246	H C 3 f	37.0	34.0	14.7	311	I B 7 b	54.0	49.0	35.1
247	H C 3 f	31.0	(29.0)	14.0	312	I B 8 b	25.0	23.0	52.2



第118図 南東側柱穴群

No.	グリッド	大きさ			No.	グリッド	大きさ		
		幅 (cm)	奥行き (cm)	高さ (cm)			幅 (cm)	奥行き (cm)	高さ (cm)
313	I B 8 b	45.0	34.0	40.0	344	I B 10 b	27.0	(65.0)	18.1
314	I B 8 b	(30.0)	24.0	10.8	345	I B 7 c	38.0	23.0	59.5
315	I B 8 b	49.0	35.0	26.4	346	I B 7 c	23.0	19.6	16.0
316	I B 8 b	32.0	29.0	44.8	347	I B 7 c	24.0	18.9	23.4
317	I B 8 b	27.0	25.0	28.9	348	I B 7 c	37.0	26.9	28.0
318	I B 8 b	21.0	20.0	22.0	349	I B 7 c	32.0	29.0	14.1
319	I B 9 b	34.0	24.0	33.5	350	I B 8 c	25.0	23.0	42.0
320	I B 9 b	29.0	28.0	30.0	351	I B 8 c	30.0	29.0	20.2
321	I B 9 b	32.0	30.0	31.8	352	I B 8 c	24.0	22.0	26.2
322	I B 9 b	(45.0)	39.0	61.3	353	I B 8 c	31.0	26.0	27.8
323	I B 9 b	(27.0)	23.0	31.5	354	I B 8 c	29.0	27.0	13.0
324	I B 9 b	27.0	25.0	28.3	355	I B 8 c	16.0	16.0	59.4
325	I B 9 b	22.0	19.0	45.2	356	I B 9 c	36.0	26.0	28.8
326	I B 9 b	19.0	15.0	15.1	357	I B 9 c	22.0	20.0	14.0
327	I B 9 b	(51.0)	43.0	29.6	358	I B 9 c	24.0	21.0	27.8
328	I B 9 b	23.0	20.0	37.3	359	I B 9 c	26.0	25.0	39.0
329	I B 9 b	31.0	27.0	36.1	360	I B 9 c	21.0	17.0	6.2
330	I B 9 b	27.0	(27.0)	59.7	361	I B 9 c	26.0	25.0	27.8
331	I B 9 b	60.0	(46.0)	82.5	362	I B 9 c	32.0	30.0	55.7
332	I B 9 b	27.0	25.0	25.1	363	I B 9 c	27.0	25.0	43.1
333	I B 9 b	35.0	31.0	47.8	364	I B 9 c	29.0	24.0	42.1
334	I B 9 b	26.0	24.0	38.5	365	I B 9 c	23.0	20.0	32.0
335	I B 9 b	35.0	34.0	43.4	366	I B 9 c	26.0	25.0	39.6
336	I B 9 b	33.0	32.0	39.6	367	I B 10 c	27.0	24.0	38.1
337	I B 9 b	25.0	24.0	12.4	368	I B 10 c	42.0	40.0	71.9
338	I B 9 b	48.0	43.0	56.4	369	I B 10 c	29.0	25.0	43.4
339	I B 10 b	33.0	27.0	26.8	370	I B 10 c	25.0	24.0	10.8
340	I B 10 b	58.0	55.0	25.1	371	I B 10 c	35.0	32.0	40.7
341	I B 10 b	42.0	40.0	66.3	372	I B 10 c	21.0	19.0	44.7
342	I B 10 b	32.0	29.0	64.0	373	I B 10 c	27.0	25.0	29.6
343	I B 10 b	34.0	30.0	68.1					



第119図 北側掘立柱建物跡群

(4) 工房関連施設・工房跡

本遺跡では測定区北東側より鉄器生産工房跡の関連施設と見られる堅穴建物跡を計2棟検出した。ひとつはI号工房関連施設で、その床面からは半裁された鉄鍋、鉄札、雁股鑓、刀子、棒状鉄器、塊状滓、錫片、鋳造渦片と見られる遺物、扁平礫が出土し、中央部からは還元色を示す現地性の焼土が確認されている。

もう一つはI号工房跡で、その床面からは炭化物が充填されたピットaとそれに繋がる細い溝、還元色を示し埋土中に渦片状の鉄滓を多量に含むピットbと、鐵関連炉と見られる現地性焼土、部分的に黒色を呈する扁平礫などが検出されている。検出された渦片状の鉄滓からは磁石による抽出の結果、明らかに鋳造渦片が混在するものであることが確認されている。

1号工房関連施設

遺構（第120～121図、写真図版63・64）

＜位置＞ II C 1 g～II C 2 g グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去後のⅢ層中で黒色～黒褐色の隅丸長方形プランとして検出した。4号堅穴建物跡と上下の重複関係にあり、本遺構が新しい。北方3mには1号工房跡が位置する。

＜平面形式・規模＞ 長径は607cm、短径は460cmの遺物である。

＜建物方位＞ 指行の軸方向はW-68°-Nである。

＜柱穴＞ 黒色～黒褐色シルト主体で、8窟からなる。7窟中に炭化物粒と焼土粒を含む。全体的にしまりは強くなく、粘性もやや弱い。

＜壁・床面＞ 壁高は残存値で東壁5cm、西壁51cm、南壁31cm、北壁15cmを測り、外傾しながら立ち上がる。床は4号堅穴建物跡を埋め戻した上面に構築されており、やや硬くしまるもので、床面中央部の現地性焼土の周辺は特に堅固である。

床面からは多量の甕が炭化した状態で検出されており、移地性焼土が多く認められることから、本遺構は焼失建物と考えられる。

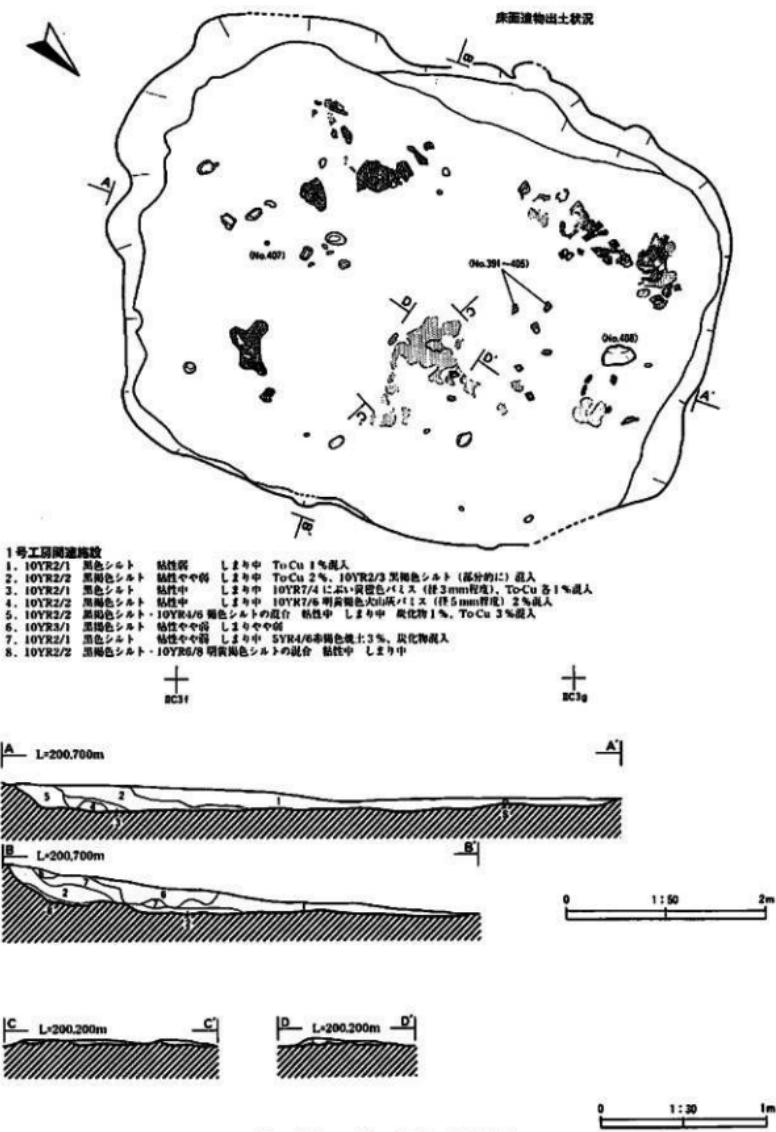
＜現地性焼土＞ 床面やや中央部より長径5.5cm×短径5.2cm、厚さ2cmの現地性の焼土が検出された。この焼土の周辺には10cmほど暗灰色を呈する範囲が認められ、その周囲は非常に硬くしまる。検出されたのは焼土のみであり、周辺から炉壁と思われるような構築材などは発見できなかった。

＜周溝＞ 東側をのぞいて墻際をほぼ全周する。開口部径は15～25cm前後で、深さは6～7cm前後である。

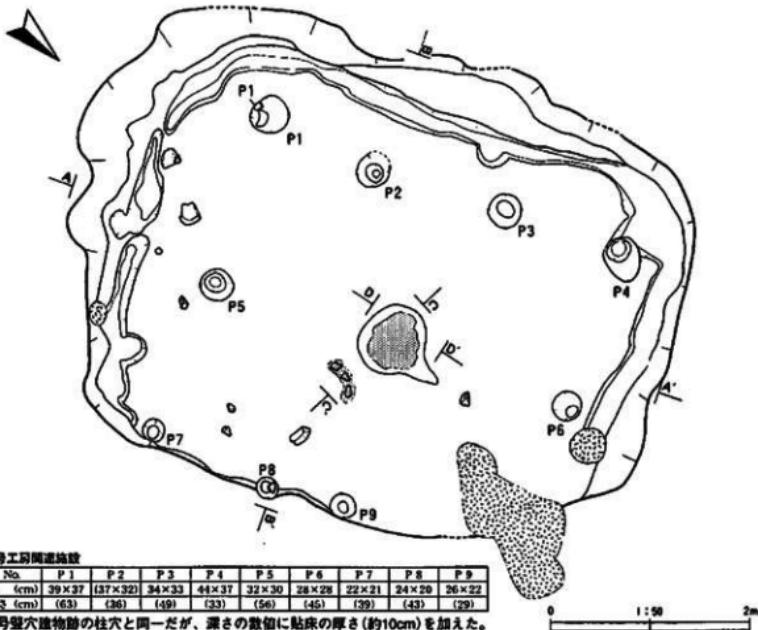
遺物（第122図～124図、写真図版99～101）

＜出土遺物＞ 床面から鉄札15枚と半裁された鉄鍋、雁股鑓、刀子、棒状鉄器、塊状滓、錫片、鋳造渦片と見られる遺物、扁平礫が出土した。

＜時期＞ 鉄鍋の時期は形式学的には、13世紀代のものと推測される（財團法人北海道埋蔵文化財センター越田賢一郎氏のご教示による）。一方、鉄札の時期は形式学的に11世紀後～12世紀前葉のものと推測される（財團法人北海道埋蔵文化財センター津野仁氏のご教示による）。どちらも時期決定の決め手とはならず、詳細については不明であるが、これらの遺物より遡ることはなく、中世までの時期と幅広く捉えておきたい。



第120図 1号工房間連施設(1)



第121図 1号工房間連施設(2)

1号工房跡

造構 (第125・126図、写真図版65)

<位置> II C 3 g ~ h, II C 4 g ~ h に位置する。

<検出状況・重複関係> 斜面最下位の細耕作土除去後、すぐに焼土が露出したため造構の存在を確認した。南方3mには1号工房間連施設が位置する。

<平面形式・規模> 長辺800cm、短辺~380cmの建物である。短辺は残存値である。

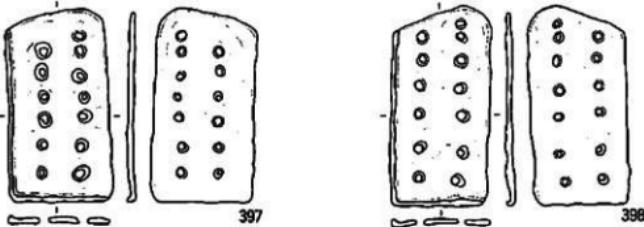
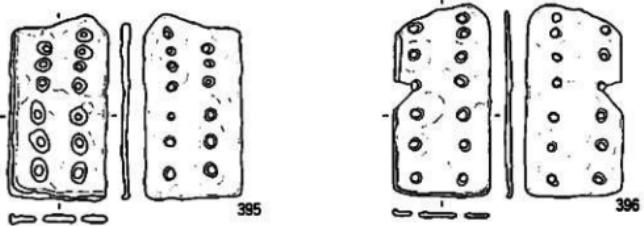
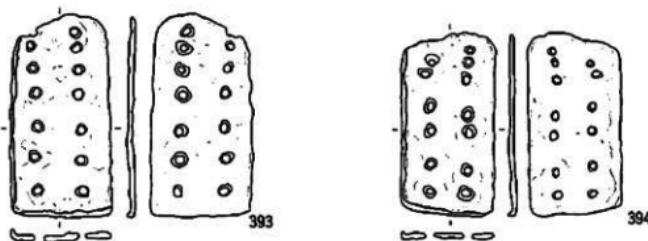
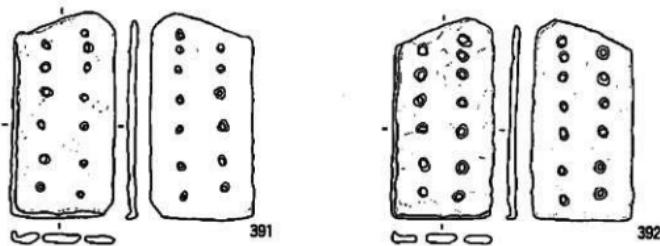
<建物方位> 衍行の軸方向はW-52°Nである。

<柱穴> 確認できた範囲で、床面にP 1 ~ 8の8個の柱穴が規則的に廻る。東半部が調査区域外にかかっており全体の配置は不明であるが、さらに東側に柱が延びてゆくものと考えられる。

<埋土> 黒褐色シルト主体で5層からなる。現代の耕作による搅乱を受け、埋土の上位は殆ど残存しない(巻頭カラー図版参照)。

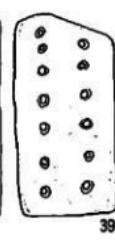
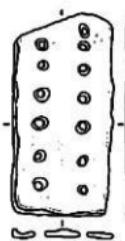
<壁・床面> 壁高は残存値で西壁34cm、南壁21cm、北壁14cmであり、外傾しながら立ち上がる。床面は全体に2~26cmの貼り床が施されており、中央部と壁際で厚くなっている。床面の積まりは硬い。

<炭化物充填ピット a と小窓> 検出した建物プランのほぼ中央部から長辺60cm×短辺50cm、深さ10cmほどピットを検出した。底面には炭化物細片がびっしりと充填されている。また、このピットから幅20cm、深

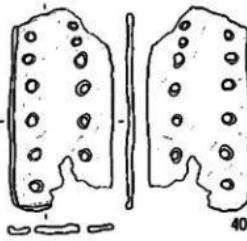


0 1:2 10cm

第122図 1号工房関連施設出土遺物(1)



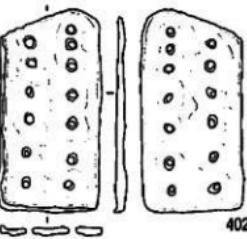
399



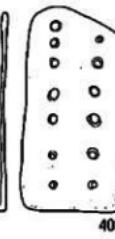
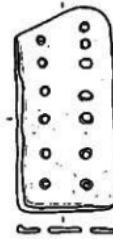
400



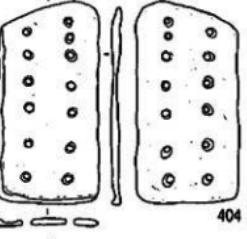
401



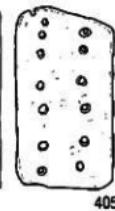
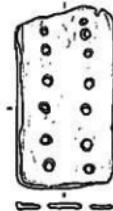
402



403



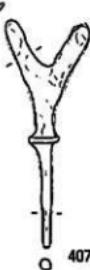
404



405



406



407

0 1:2 10cm

第123図 1号工房関連施設出土遺物(2)

さ10cmほどの細い溝が、北東方向に約12.5cmほど延び、調査区域外へと続いているのが確認できた。

＜現地性焼土＞ 床面やや中央部より長径8.6cm×短径7.2cm、厚さ5cmの現地性の焼土を確認した。この焼土の底面には暗灰色の薄層が10cmほど認められる。検出できたのは焼土のみであるが、本米あったが壁が耕作等による擾乱で失われた可能性や、あるいは東側の調査区域外に残存している余地も残される。本焼土と前述のピットa、小溝が一連の生産活動に使用されていたかどうかは今後吟味を要するところである。

＜鍛造鋤片が検出されたピットb＞ 底面に炭化物が認められたピットaの北東方向70cmから、長径40cm×短径34cm、深さ10cmほどの規模を持つピットbを検出した。このピットの墨土は5層に細分され、褐灰色～暗赤褐色などの還元色を主体として構成される。このピットの内部からは鋤片状の鉄屑が多く得られており、磁石を用いた抽出の結果、その中に明らかに鍛造鋤片が混在する状況が確認できた。鉄生産活動に使用された火窑炉の可能性が考えられる。

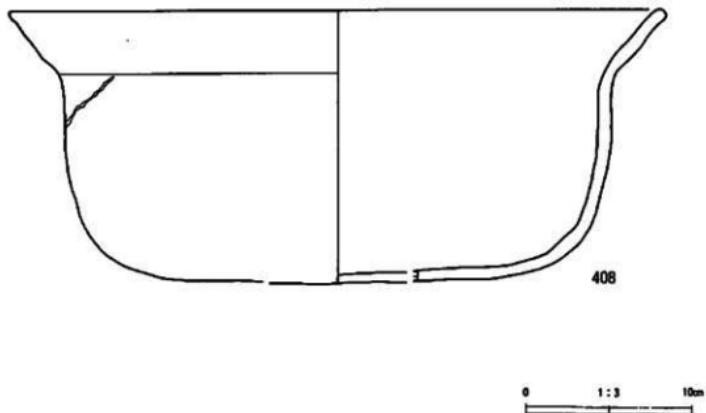
＜周溝＞ 東側を除いて壁際をほぼ全周する。開口部径は15～25cm前後で、深さは6～7cm前後である。

遺物（第126図・写真図版101）

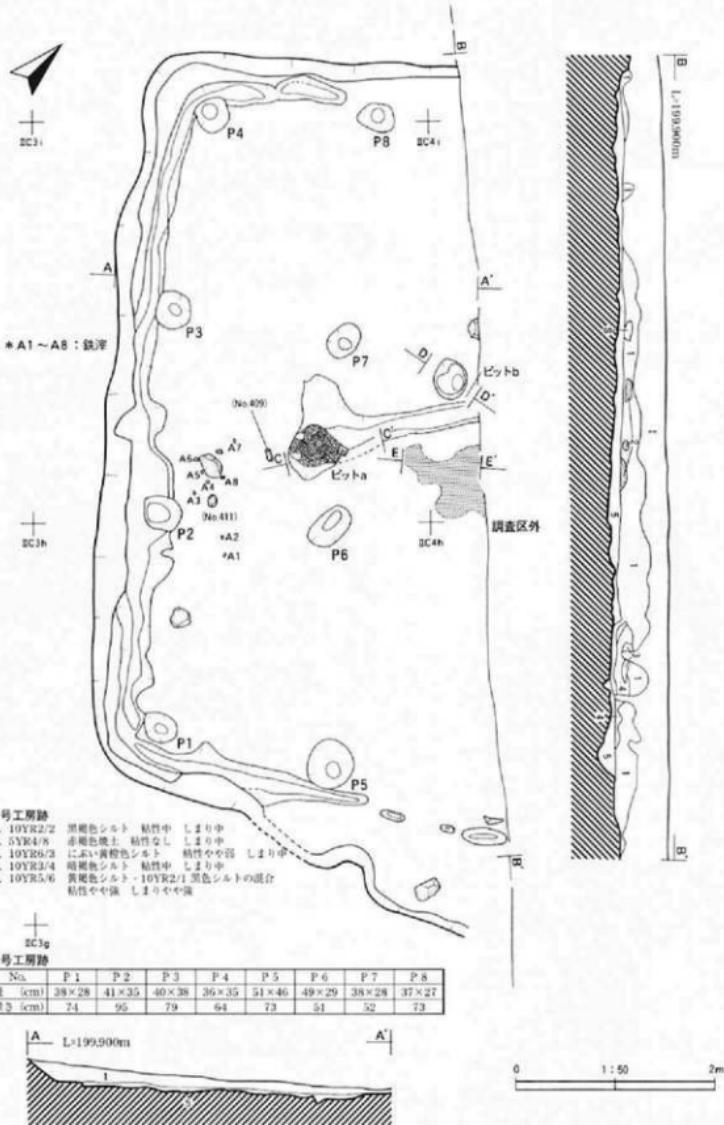
＜出土遺物＞ 床面から鍛造鋤片、台石の可能性のある扁平磧が出土した。

＜時期＞ 時期決定できる遺物を欠くため、詳細は不明である。近接する1号工房関連施設との関係（立地、建物形態）から推測してこれと同時期のものである可能性が高い。

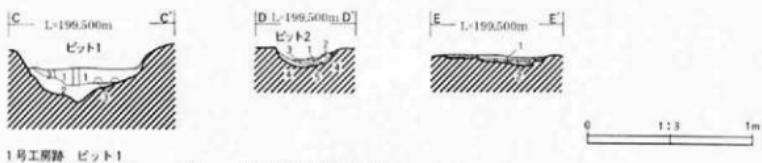
（中村 直美）



第124図 1号工房関連施設出土遺物(3)



第125図 1号工房跡(1)



1号工房跡 ピット1

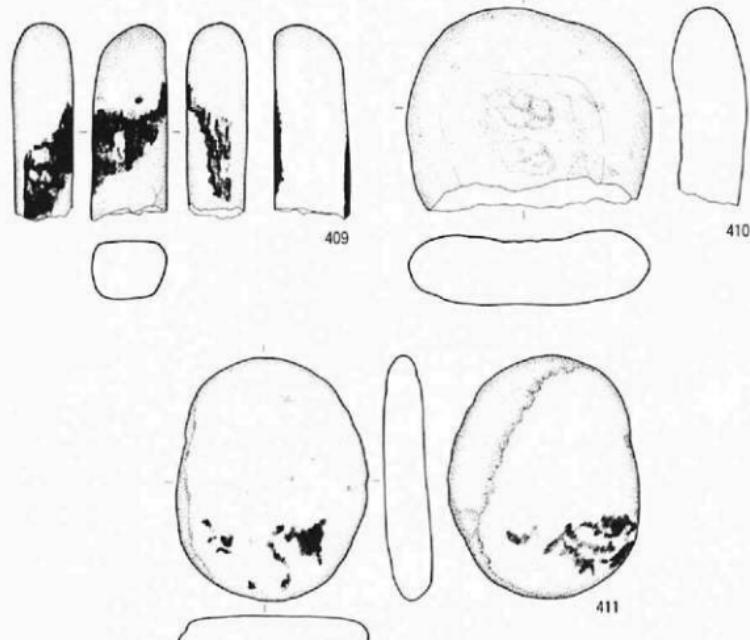
1. 5YR6/1 黒色シルト 粘性中 しまりやや弱 塗化物5%混入
2. 10YR2/1 黄色シルト 粘性やや強 しまりやや弱 塗化物混入(炭化物)
3. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性中 しまりやや弱 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト(施山) プロック混入

1号工房跡 ピット2

1. 5YR6/1 褐灰色黑色地土 粘性弱 しまり弱 上部に鍛造跡付少量混入
2. 10YR1/7/1 黑色シルト 粘性弱 しまり弱
3. 5YR3/6 黑赤褐色地土 粘性中 しまり弱 1層の影響を受けて赤色化
4. 10YR3/4 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 地の土よりやや暗め 2層の土から漸移的に変化
5. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 5YR6/6褐色シルト・10YR1/7/1 黑色シルトを縦状に混合 粘性弱 しまりやや弱 塗化物微量混入

1号工房跡 床面発土

1. 5YR5/8 明赤褐色地土 粘性やや弱 しまり中 To Cu 3%混入
2. 10YR1/7/1 黑色シルト 粘性中 しまり中 塗化物層



※ 412・413は写真のみ掲載



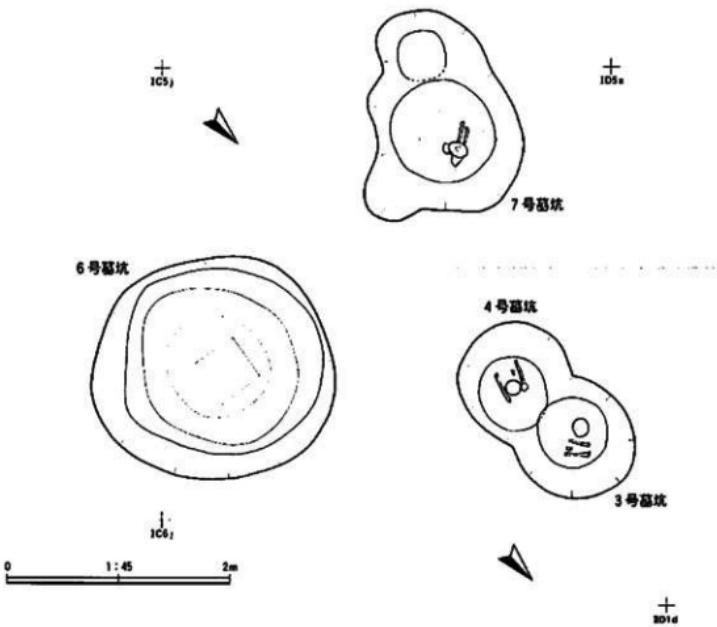
第126図 1号工房跡(2)・出土遺物

(5) 墓坑

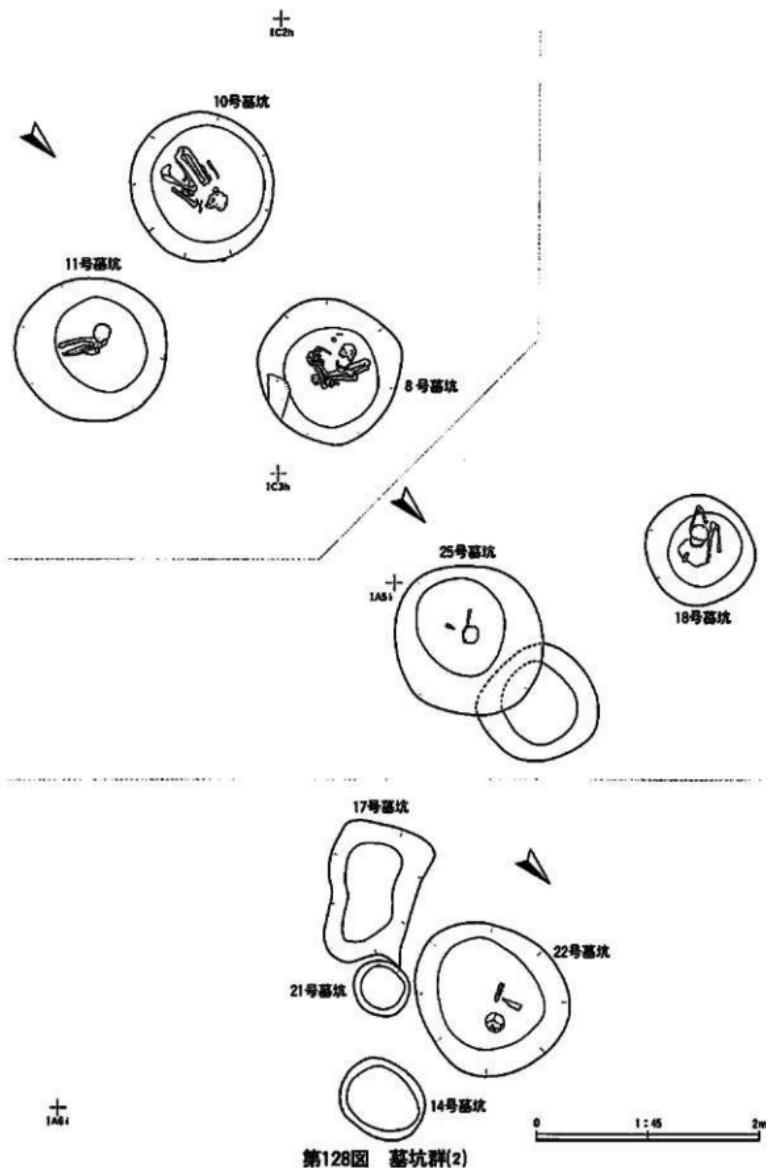
遺構(第127~131図・写真図版66~68)

調査区全域から51基を検出した。調査区南側斜面上方と北側に集中している。特に南側の墓坑群は墓坑同士が近接し、重複している。北側でも他の遺構との重複が見られる。個々の墓坑の情報と位置関係については第5表(E)と第130~131図の遺構配置図を合わせて参照されたい。検出された墓坑の形態は、ほぼ全て平面形が円形で断面形は逆台形状を呈している。規模は大小様々であるが、開口部径が100~150cmのものが多い。深さは残存値6~147cmと多様な値を示す。調査前の調査区は畠地であり、その造成や耕作により削平を受けたため、浅いものもあると思われる。人骨が残っている墓坑が多く、それらは個々に図版を掲載した。その多くが腰を折り曲げ座るように埋葬された状態を示している。

谷を挟み北西に隣接して仁昌寺という寺院がある。「一戸町誌」によると、仁昌寺の開山は正徳二年(1712)年(元禄初年・1688頃との説もある)である。調査区の斜面上には現在も墓所がある。今回の道路工事事業に伴い、調査区内の埋葬されていた墓は移動したとのことだったが、墓碑や記録が失われてしまったもの



第127図 墓坑群(1)

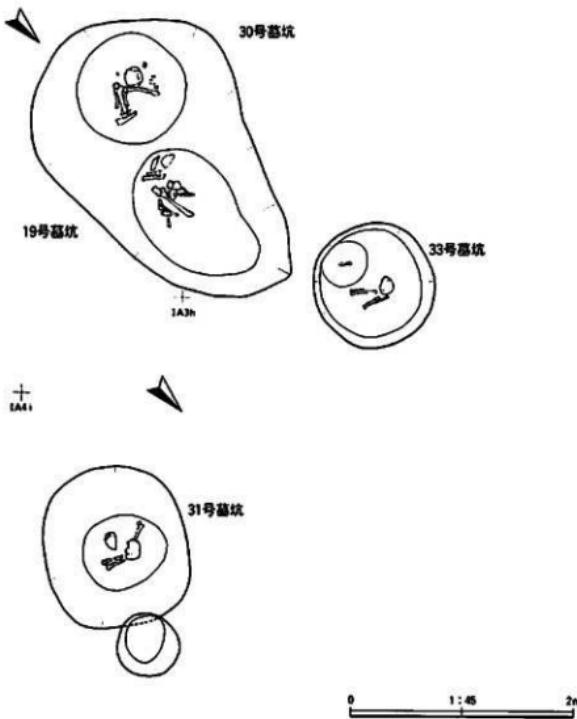


など、古い時代のものが残ってしまったものと考えられる。これらの入骨は然るべき供養を行い、曹洞宗仁昌寺に納骨した。

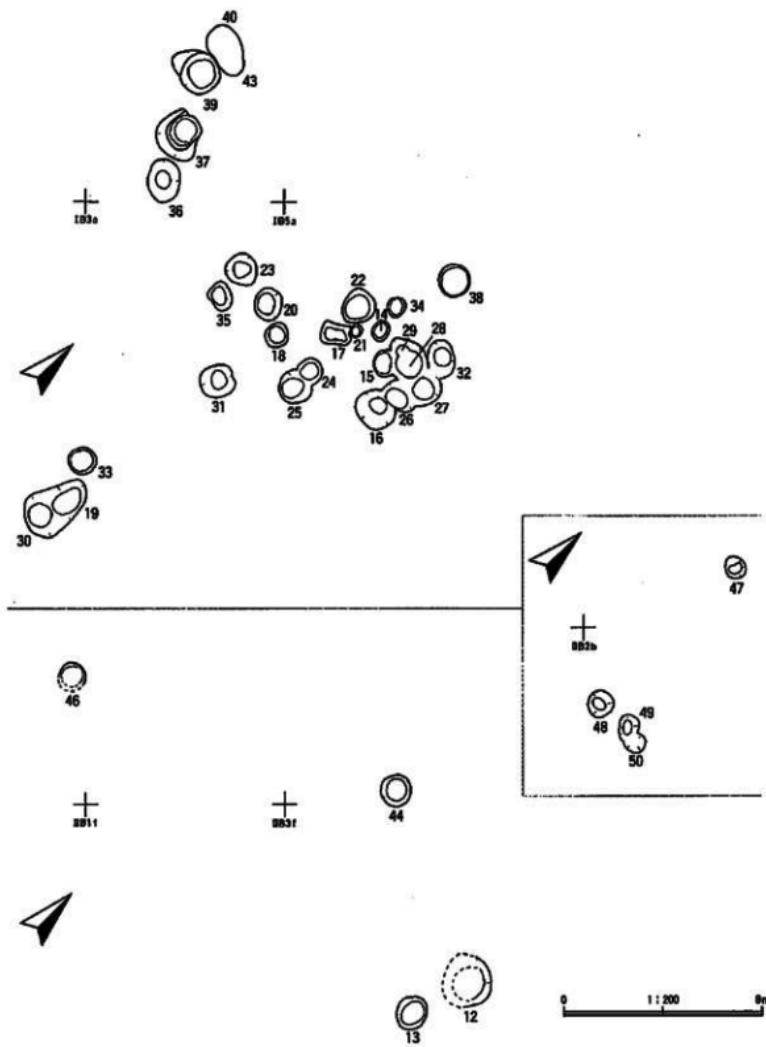
遺物（第132～139図・写真図版102～106）

出土遺物は棺桶の釘、副葬品として古鏡（寛永通宝）のほか、煙管、簪、小型鉈などが納められていた。釘は鉄製で頭部が折り曲げられている。煙管は銅製の吸い口、雁首だけでなく、竹管である羅宇も残っており、縁石を生じている。簪はガラス製のものと毛髪の絡んだ銅製のものが出土している。墓坑の中には棺桶の材が残っているものもあったが、腐朽が激しく原形をとどめてはいなかった。出土した遺物・副葬品、人骨の残存状況などから考え合わせて、仁昌寺が開山した近世以降の墓所であったことは確かであろう。6・7号墓坑は底面に方形の棺痕が見られることから、近代以前のものである可能性が高い。

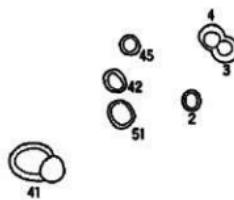
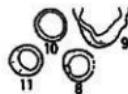
（原 美津子）



第129図 墓坑群(3)



第130図 墓坑群(南側)



0 1:200 8m

○₁
第131図 墓坑群(北西側)



414



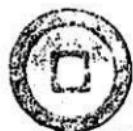
415



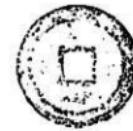
416



417



418



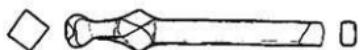
3号墓坑 419



420



421



422



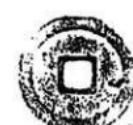
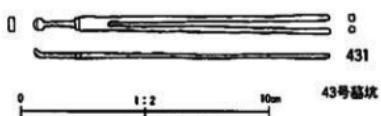
26号墓坑



423



第132图 墓坑内出土遗物(1)



0 1:1 5mm

第133圖 墓坑內出土遺物(2)



439



440



441



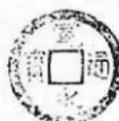
442



443



444



445



446



447



448



449



450



451



452

第134図 墓坑内出土遺物(3)

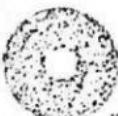
厚寸



453



454



455



456



457



458



459



460



461



462



463



464



465



466

厚寸

第135図 墓坑内出土遺物(4)



468



469



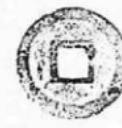
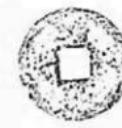
470



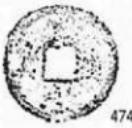
471



472



473



474



475



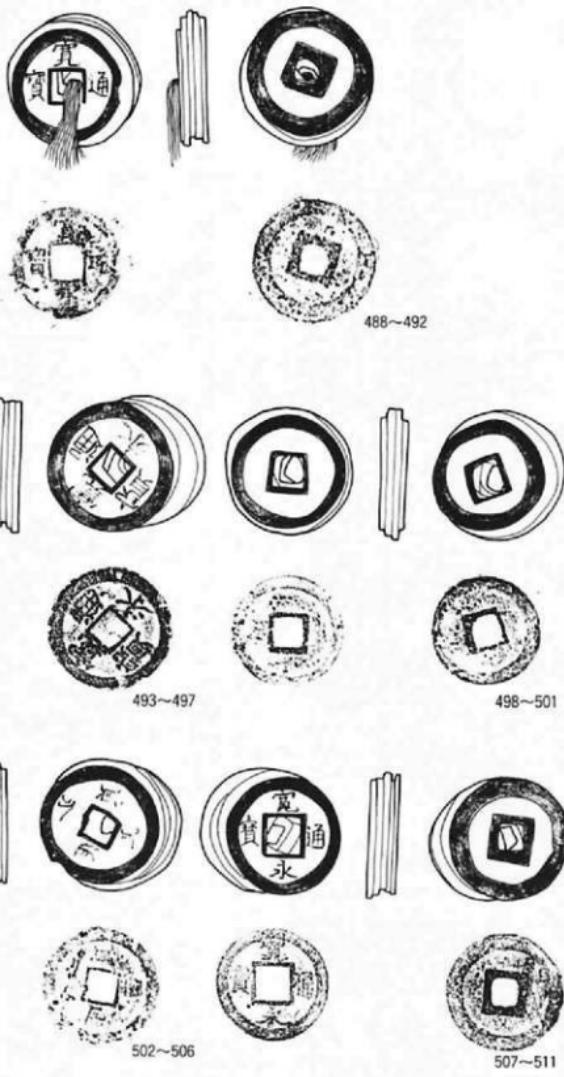
476~481



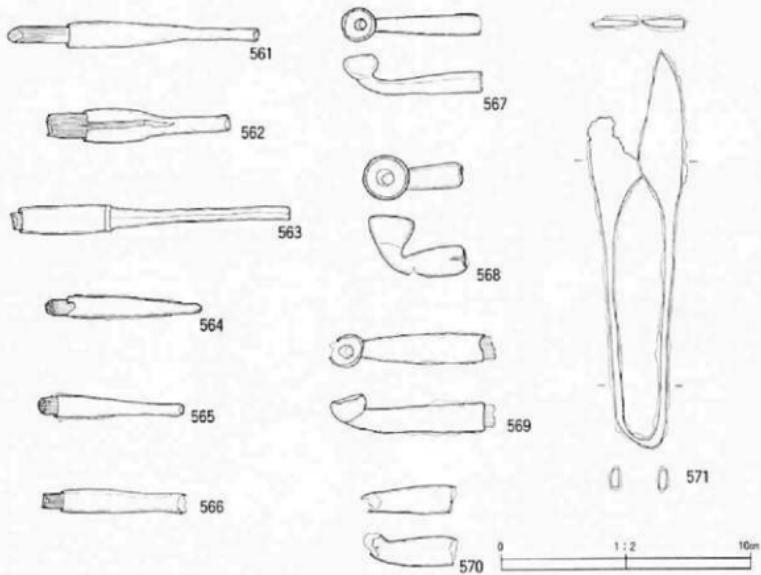
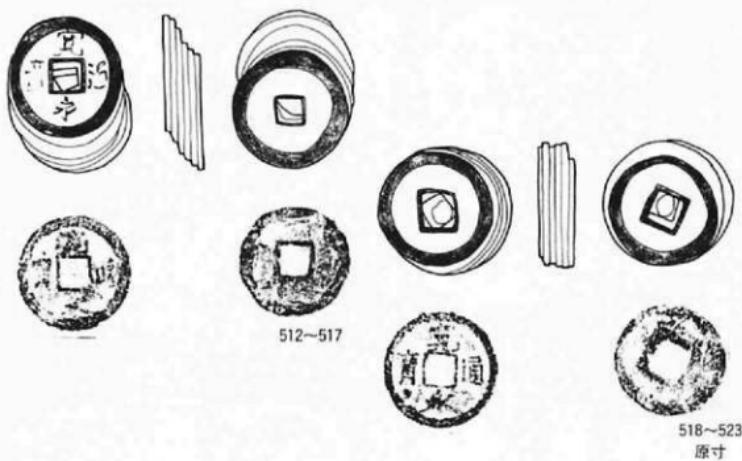
482~487

原寸

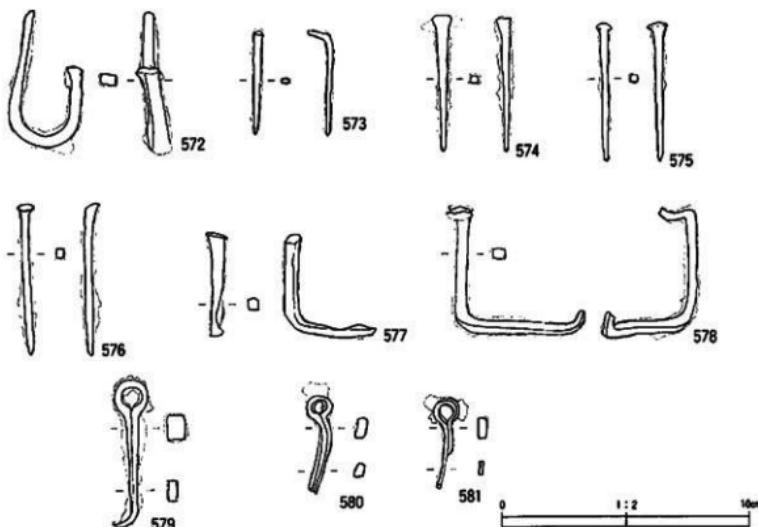
第136図 墓坑内出土遺物(5)



第137図 墓坑内出土遺物(6)



第138図 墓坑内出土遺物(7)



第139図 墓坑内出土遺物(8)

銭貨 (第133~139図、写真図版102~106)

本遺跡で出土している銭貨は合計159枚である。時期は中世と近世、また近現代のものに分けられる。中世の銭貨は、北宋の至道元寶（初鑄年995年）、成平元寶（初鑄年998年）祥符元寶（初鑄年1009年）、皇宋通寶（初鑄年1038年）、熙寧元寶（初鑄年1068年）、元豐通寶（初鑄年1078年）、明代の永樂通寶（初鑄年1408年）の計7枚である。これらは国内で鋳造された模鋳銭（私鋳銭）の可能性もあるが、区分が困難であるため渡来銭として扱う。近世の銭貨は、そのほとんどが墓坑からの出土であり、いわゆる六道銭と呼ばれる性格のものである。六道銭は6枚とも固着して一塊となっている場合が多く、穿に縫が通されているものもある。しかし、残念ながら墓坑からの出土遺物が人為ミスにより人骨供養の埋葬時に混在してしまい、遺物出土地点が復元できない。資料としての価値の半減は否めないが、固着した六道銭から銭貨の共伴関係だけでも復元を試みようと考える。

本遺跡より検出された墓坑のはほとんどは近世墓であり、一部近現代のものも含まれる。当時は土葬墓が一般的であり、副葬品として銭貨の他にも骨や鉛、煙管など生前に愛用していたものなども埋葬されていた。出土銭貨はいずれも寛永通寶であり、その内訳は寛永～万治年間（1636～1659年）に鋳造された古寛永20枚、寛文～天和年間（1668～1683年）に江戸亀戸所で鋳造された文銭12枚、元文年間（1736～1740年）に鋳造された新寛永82枚、寛保年間（1741～1743年）に相模高津新地所で鋳造された背元銭2枚、明和年間（1764～1770年）に肥前長崎所で鋳造された背長銭1枚である。また、判読不明の銭貨は32枚である。そのほかに堅穴建物跡から中世と考えられる模鋳銭が2枚出土している。

銭貨の合計159枚のうち、墓坑から出土した銭貨は合計144枚である。このうち出土地点がはっきりしているものは3号、22号、42号、45号の4墓坑である。ここで、このほかに固着した六道鏡からA～Lの12墓坑を設定し、以下の第3表に示した。各墓坑の合計は復元出来るもののみで、このほかにも数枚プラスされる可能性がある。最も多いのは元文年間の鋳造された無背銭を主体とする墓坑であり、それに文銭・占寛永を作うものである。これは墓坑に埋葬された時期が元文年間かそれ以前のあまり時期差をもたない18世紀中葉期であることを示している。また寛保年間に鋳造された背元銭を作出している22号・45号墓坑はそれ以前に埋葬されたのは確かであることから、これらも同じく上限年代は18世紀中葉期とみられる。

特徴的なのは、これだけの数の銭貨を出土しながら、明和5年（1768年）以降登場する四文銭が出土しないことは、墓坑の下限年代が四文銭が流通する以前であることを示しているといえよう。

（北田 熊）

第3表 墓坑内出土銭貨内訳表

古 寛 永	寛 永 通 寶			流 来 銭	不 明	計			
	新 寛 永		背 元 銭						
	文 銭	無 背 銭							
寛永一万治年間 (1636~1659年)	寛文一天保年間 (1688~1683年)	元文年間 (1736~1740年)	寛保年間 (1741~1745年)						
3号墓坑	1	1	4			6			
22号墓坑			1	1		2			
42号墓坑	3	1	1		2	7			
45号墓坑			1	1		5			
A号墓坑	1		5			6			
B号墓坑		4	2			6			
C号墓坑	1		3		1	5			
D号墓坑	2	2	1			5			
E号墓坑			3			4			
F号墓坑	2	1	2			5			
G号墓坑	1		4			5			
H号墓坑			5		1	6			
I号墓坑	1	1	4			6			
J号墓坑					6	6			
K号墓坑			1		5	6			
L号墓坑			1	1(寛永通寶)	8	10			

（6）住居状造構

1号住居状造構

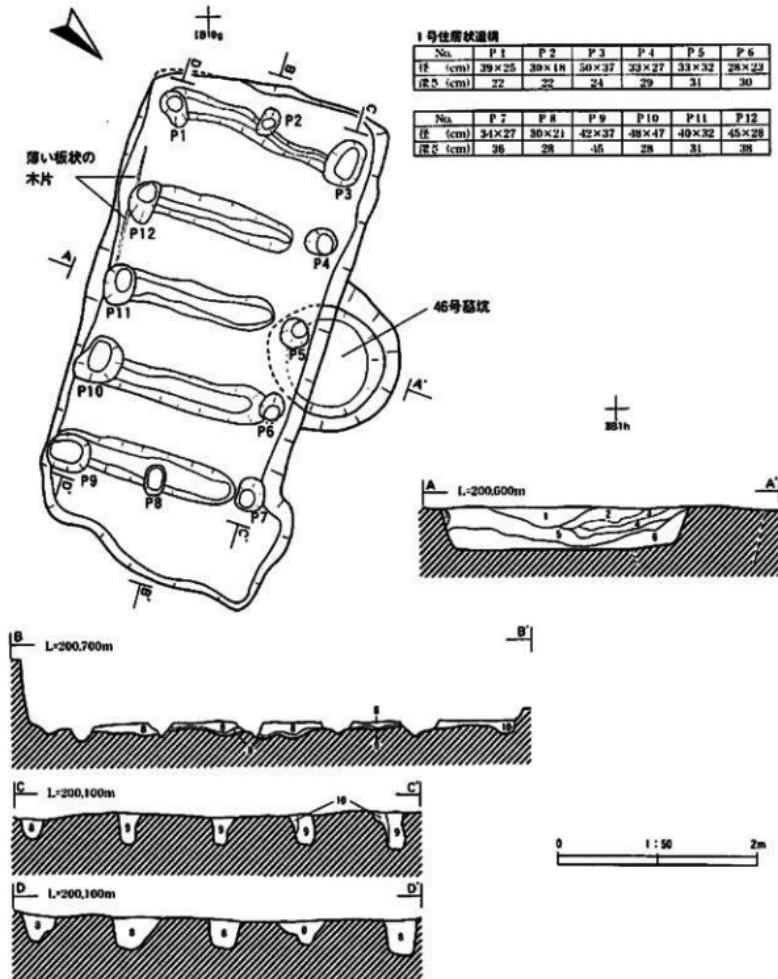
造構（第140図・写真図版68）

調査区中央部、I B10gグリッドから1棟を検出した。53号墓坑と重複し、これを切る。メインベルト断面に表土直下からの掘り込みを確認できること、近世の墓坑より新しいことから、本造構の時期は少なくとも近世～近代を遡らないであろう。規模は長径502cm×短径250cm、平面形は長方形を呈する。深さは残存値で42cmを測る。埋土は10枚からなり、黒褐色シルト主体で構成され、全体に褐色～黄褐色のシルトブロックを含む。床面には長さ150~190cm、幅20~38cm、深さ12~14cm程度の浅い掘り込みが5箇所、ほぼ等間隔で見つかった。これらはその形状から推測して根太柱とされるものに類似し、上部に板を敷いて床面としていた可能性が考えられる。横に近いところには柱穴が12基等間隔で並ぶ。また、南側の壁と柱穴の間で薄い板状の木片が確認され（写真図版68参照）、板壁として用いられていた可能性がある。

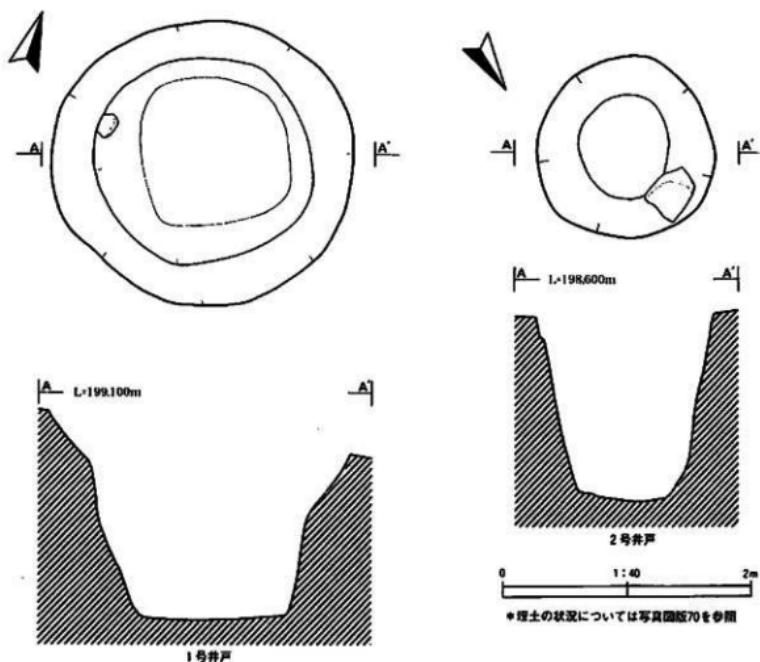
（7）井戸跡

造構（第141図・写真図版69）・遺物（第141図・写真図版107）

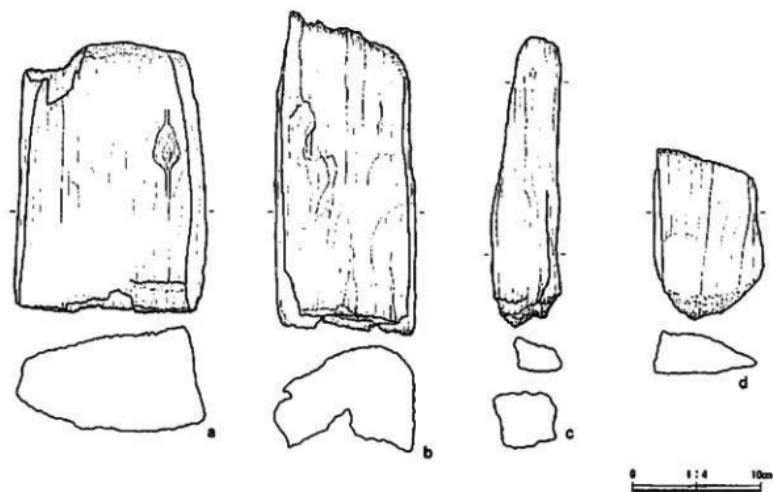
調査区中央の斜面下方で、井戸跡2基を検出した。1号井跡は、36号住居跡と重複しており、これを切っ



第140図 1号住居状造構



*埋土の状況については写真図版70を参照



第141図 1～2号井戸跡・出土遺物

ている。平面形は円形で、開口部径は250cm弱、深さ170cm程度である。埋土は黒色シルト主体で、多量の砾を含む。側縁上部は粘土で貼り、壁面は砾を積み上げて補強が成されているようである。また底面付近からは井戸枠らしき材木片が出土している。

2号井戸跡は、1号よりかなり小規模で、開口部径150cm以下、深さ160cm程である。埋土は1号と同様である。

2基の底面のレベル差は150cm近い。いずれも底面からの湧水が著しい。詳細な時期は不明であるが、出土した井戸枠の形状などから推測して、近世～近代のものと位置付けられる。

(8) 柱穴列

造構（写真図版62・63）

柱穴列は調査区の全域から計12列検出された。集中するエリアは、東側斜面下位である。規模は径20～50cm、深さ30～50cmほどをはかり、一列8個から12個で構成される。のちに地墳杭と判明したり、以前は水田を行っていたという話などから、水田のはせ杭ではないかとのお話を地元の方から伺った。柱穴の埋土断面は、黒色～黒褐色土が主体で構成され、埋土のしまりもない。時折、柱材が残存しており、腐敗も進んでいないことから、ほぼ現代のものとして大過ないと思われる。

(9) 集石造構

調査区全域から4基を検出した。人為によって意図的に集められたと判断した砾の集合である。検出面は5基ともⅡ層上位である。検出面が上位であることから判断しても、いずれも新しいものであり、旧くとも近世を遡らないであろう。すべて不整に集石されており、特置的な配列などは見られないため、その性格は不明である。出土造物もない。

1号集石（写真図版69）

調査区中央斜面上方 I B 3 j グリッドに位置する。20cm以下の角砾・亜角砾が120～140cmの不整形の範囲に無作為に広がる。掘り込みは見られない。

2号集石（写真図版69）

調査区北側斜面上方 I C 2 d グリッドに位置する。10～35cm 大の角砾・亜角砾が100×210の不整形の範囲に無作為に広がる。砾の下位には径約90cm、厚さ20cm程度の掘り込みがある。埋土は焼土・ブロックと炭化物粒を含む黒褐色土主体で構成される。

3号集石（写真図版69）

調査区北側斜面上方 I C 5 i グリッドに位置する。20cm 大の角砾・亜角砾が60×70cmの不整な半円形の範囲に分布する。掘り込みは見られない。

4号集石（写真図版69）

調査区中央斜面上方 I C 5 c グリッドに位置する。大小二つの集合に分かれ、10～25cm 大の角砾・亜角砾が、それぞれ200×80cm と 45×40cm の不整形な範囲で分布する。掘り込みは見られない。

（原 美津子）

第4表 繩文時代造構一覧

(A) 墓穴住居跡

遺構名	アリヤ・V	度数 (北/東/西)	測量法	細目状	主軸	柱配置	時期	詳細説	
1号住居跡	I C 3 i	373×314/556×480/W37×E30, S 37	E	A-①	SW-NE	A-5	中期末葉-後期初頭		
2号住居跡	I C 6 j	500×-465/465×-450/W18×E38	S E	A-② D	E-W	A-7 ?	中期末葉	3号住と重複。これを切る?	
3号住居跡	I C 6 h	-500×485/-550×-370/W30×E2	S E	A-②	E-W	A-4	中期末葉-後期初頭	2, 4号住と重複。これらに切られる?	
4号住居跡	I C 7 i	(287)×(267)/(400)×(310)/W30×E10	N X N X E 2, N X S E = 2	中央南北 ±偏南北	B-①	E-W	C	中期末葉-後期初頭	3号住と重複。これを切る
5号住居跡	I C 3 s	315×276/313×274/W32×E 2, N X S X E 2	中央南北 ±偏南北	H-①	SW-NE	C	中期末葉-後期初頭		
6号住居跡	I C 4 h	355×360/356×341/W18×E 2, N 5 X S 16	中央南北 ±偏南北	D	SW-NE	D	中期末葉		
7号住居跡	I C 5 g	441×347/-460×332/W26×E 2, N 13 X S 12	中央南北 ±偏南北	B-①	SW-NE	B ?	中期末葉-後期初頭		
8号住居跡	I C 5 s	256×278/251×302/S16×N 8, W10 X E 6	S E	A-①	S-N	C	中期末葉		
9号住居跡	I C 9 i	628×562/607×549/N10×S18, W40 X E 3	N	A-①	E-W	A-5 ?	中期末葉		
10号住居跡	I C 9 g	362×366/341×316/N 8×S 4, W 1	N	A-①	E-W	A-2	中期末葉		
11号住居跡	I C 8 c	410×351/397×336/W16×E 2, N 1 X S 16	E	D	SW-NE	D	中期末葉	12号住と13号住を切る	
12号住居跡	I C 8 c	497×438/-466×410/W 8×E 7, N 5 X S 13	S E	A-②	SE-NW	A-1 ?	中期末葉	13号住に切られる。13号住を	
13号住居跡	I C 8 e	268×275/(270)×(330)/S 14×N 44 W14×E 7	S	A-② ?	S-N	C	中期末葉	11号住と12号住に切られる	
14号住居跡	I C 8 d	457×437/-447×404/N 7×S 6, W13 X E 2	S	B-①	SW-NE	D	中期末葉		
15号住居跡	I C 1 x	676×590/(620)×503/N 8×S 12, W 13×E 10	S, 中央 D	A-②, B	SW-NE	A-4	中期末葉	16号住と重複。これに切られ	
16号住居跡	I C 1 z	745×-700/-754×(660)/N13×S 4, W22×E 12	S	A-①	SE-NW	A-4	中期末葉	15号住と重複。これを切る	
17号住居跡	I C 10 c	386×374/404×349/N 2×S 16, W 6 X E 2	N E	B-①	SW-NE	D	中期末葉-後期初頭	18号住を切る	
18号住居跡	I C 10 c	396×274/271×352/N 2×S 21, W23 X E 6	S	A-①	SW-NE	A-2	中期末葉-後期初頭	17号住に切られる	
19号住居跡	I C 1 d	411×425/424×406/W15×E, N 5×S 10	中央±C E 4-S 5	B-①, D	E-W	C	後期初頭	20号住を切る	
20号住居跡	I C 14	441×291/381×302/W11×E 10, N 11 X S 1	E	A-①	SW-NE	C	中期末葉	19号住に切られる	
21号住居跡	I C 1 i	323×(380)/346×(320)/N 2×S 5,E 2, S 2 W 4×N 2	NW	A-①	NW-SE	A-4	中期末葉		
22号住居跡	I C 2 i	-400×-130/-370×-117/N 28×S 21, W 2 ×E 36	S	E	-	C	中期末葉		
23号住居跡	I D 2 d	186×-250/-200×-226/N 1×S 6, W33×E (5)	S E	A-①	NW-SE	C	中期末葉		
24号住居跡	I C 3 b	(315)×285/-305×268/N 15×S 10, W 25×E 12	中央 H-②	-	C	中期末葉-後期初頭			
25号住居跡	I C 2 c	(360)×(261)/(267)×(245)/W18×E 4, N11×S 12	中央小分 H-②	B-①	-	C	中期末葉-後期初頭		
26号住居跡	I H 3 d	475×-365/-472×-360/N 2×S 3, W 2 ×E 3	E	E	E-W	A-3	中期末葉-後期初頭		
27号住居跡	I D 10 a	846×812/-812×808/W31×E 23, N 2 X S 20	N	各 A-②	S-X	A-4 A-6	中期末葉	30号住に切られる。2時期ある	
28号住居跡	I C 5 c	662×450/-(560)×506/N 37×S 24, W 25×E 25	N E	C-②	NE-SW	B	中期末葉	29号住と重複。これを切る	
29号住居跡	I C 5 c	619×(395)/(459)×(441)/N 37	N E	A-②	NE-SW	A-2	中期末葉	28号住と重複。これに切ら	
30号住居跡	I D 10 a	530×496/-482×499/W30×E 12, N 13 X S 16	中央小分 H-②	C-②	NE-SW	D	中期末葉-後期初頭	27号住を切る	
31号住居跡	I B 6 h	501×493/-485×463/N 15×S 13, W22	E	E	NE-SW	B ?	中期末葉		
32号住居跡	I B 8 i	480×476/-400×380/W30×E 10, N 10 X S 20	E	C-①	NE-SW	D	中期末葉-後期初頭		
33号住居跡	I C 7 a	333×430/-348×322/N 4×S 10, W 4 X E 6	N E	C-①	NE-SW	B	中期末葉-後期初頭		
34号住居跡	I C 8 b	327×466/-506×430/N 28×S 14, W27	中央小分 H-②	C-②	NE-SW	D	中期末葉-後期初頭		
35号住居跡	I B 10 j	(310)×(322)/(316)×(315)/N 4× S 2, W 2 ×E 2	中央小分 H-②	E	NE-SW	D	中期末葉-後期初頭	36号住に切られる	
36号住居跡	I C 1 a	(360)×368/-(365)×351/N 4×S 10, W 9 ×E 1	中央小分 H-②	C-①	NE-SW	B ?	中期末葉-後期初頭	35号住を切る	
37号住居跡	I B 8 b	487×560/-590×336/N 8×S 16, W23	E	C-② ?	NE-SW	D	中期末葉-後期初頭		
38号住居跡	I A 8 j	376×-492/-442×-360/N 14×S 21, W23×E 4	-	E	-	D	中期末葉-後期初頭		
39号住居跡	I C 4 c	448×(400)/393×(360)/S 48, W43	S	A-①	NE-SW	A-2	中期		

(B) 土坑

遺構名	グリッド	規模(上/下/高)cm	備考
1号土坑	I B 3 c	165×125/120×88/40	
2号土坑	I B 4 e	105×98/73×62/60	
3号土坑	I B 10 e	250×250/115×125/80	
4号土坑	I B 9 e	274×267/171×186/46	
5号土坑	I B 8 f	68×72/34×37/59	
6号土坑	I B 8 g	77×77/51×50/35	
7号土坑	I B 9 g	80×72/50×55/40	
8号土坑	II C 2 b	216×192/90×83/110	
9号土坑	II C 2 e	(220)×(220)/(160)×170/60	
10号土坑	II C 2 e	200×(200)/145×(150)/50	
11号土坑	II C 2 e	(170)×(170)/(130)×(130)/15	
12号土坑	I C 8 e	184×120/115×78/50	
13号土坑	I C 8 e	140×133/39×38/57	
14号土坑	I C 8 g	112×92/54×40/45	
15号土坑	I C 7 e	123×112/86×82/40	
16号土坑	I C 7 e	100×80/74×64/25	
17号土坑	I C 8 g	200×160/110×104/50	
18号土坑	I C 10 h	125×113/100×90/25	
19号土坑	I C 3 i	125×112/90×80/62	
20号土坑	II C 2 j	100×70/65×54/20	

(C) 脇し穴状遺構

遺構名	グリッド	規模(上/下/高)cm	備考
1号脇し穴状遺構	I C 5 c	360×60/350×24/70	28号住居跡に切られる
2号脇し穴状遺構	I C 4 c	200×24/186×14/70	
3号脇し穴状遺構	I C 5 a	194×20/170×10/40	
4号脇し穴状遺構	I C 4 d	320×50/376×18/105	
5号脇し穴状遺構	I C 4 e	360×65/276×14/80	
6号脇し穴状遺構	I C 5 i	318×32/288×14/70	
7号脇し穴状遺構	I B 5 h	320×42/-350×16/60	
8号脇し穴状遺構	I B 5 j	182×30/154×12/50	
9号脇し穴状遺構	I B 8 c	262×46/208×10/70	
10号脇し穴状遺構	I C 5 h	352×74/348×14/70	

第5表 中世以降遺構一覧

(A) 穴穴建物跡

遺構名	グリッド	規模(上/下/高)cm	備考
1号堅穴建物跡	II D 4 d	-570(張出部含)×-413/-540×-400/16	白磁瓶・模範鐵出土
2号堅穴建物跡	II A 7 j	613(張出部含)×440/620×400/37	
3号堅穴建物跡	I B 8 f	406×328/390×310/37	焼失建物
4号堅穴建物跡	II C 2 f	562×435/506×404/34	1号工房跡に切られる
5号堅穴建物跡	I C 8 j	476×354/370×268/50	
6号堅穴建物跡	I C 8 i	363×(300)/314×(254)/40	

(B) 工房間連施設・工房跡

遺構名	グリッド	規模(上/下/高)cm	備考
1号工房間連施設	II C 2 f	602×475/560×412/39	
1号工房跡	II C 3 g	752×-380/720×-360/46	

(C) 住居状遺構

遺構名	グリッド	規模(上/下/高)cm	備考
1号住居状遺構	I B 10 g	500×240/480×215/39	

(D) 据立柱建物跡データ

No.	プラン	桁行×梁行(cm)	面積	建物方位	柱間寸法	柱穴	備考
1号	長方形	5間×3間(955×591)	56.44m ²	N-51°-W	6.5尺(約197cm)	15	
2号	長方形	4間×3間(767×636)	48.78m ²	N-41°-W	6.6尺(約200cm)	17	
3号	方形	2間×1間(424×394)	16.71m ²	N-41°-E	7尺(約212cm)	8	
4号	方形	3間×3間(636×600)	38.16m ²	N-1°-W	6.6尺(約200cm)	13	
5号	方形	2間×2間(400×376)	15.04m ²	N-3°-E	6.6尺(約200cm)	6	
6号	長方形	4間×3間(824×681)	56.11m ²	N-18°-W	6.6尺(約200cm)・7.5尺(約227cm)	10	
7号	長方形	-6間×4間(-1371×785)	-102.44m ²	N-21°-W	身舎8尺(約242cm)・廂5.3尺(約161cm)	-22	
8号	長方形	-5間×3間(774×605)	-46.83m ²	N-28°-W	不明	-15	
9号	長方形	5間×1間(1371×785)	62.78m ²	N-67°-E	8.2尺(約248cm)	11	
10号	長方形	3間×3間(737×478)	35.23m ²	N-67°-E	7.5尺(約227cm)・8尺(約242cm)	13	
11号	長方形	4間×2間(914×599)	54.75m ²	N-63°-E	7.8尺(約236cm)	12	
12号	長方形	3間×1間(663×442)	29.31m ²	N-67°-W	7.3尺(約221cm)	8	
13号	長方形	-2間×2間(-424×424)	17.98+αm ²	N-62°-E	7尺(約212cm)	6	
14号	長方形	-2間×1間(-424×424)	17.95+αm ²	N-80°-E	7尺(約212cm)	4	
15号	長方形	2間×2間(576×266)	15.32m ²	N-88°-E	9.5尺(約288cm)	9	昭和50年代
16号	長方形	3間×2間(570×380)	21.66m ²	N-8°-W	6.3尺(約190cm)	10	

※マイナス値は調査区外へ続くため、増加する可能性がある。

(E) 仁昌寺Ⅱ遺跡墓塚データー観

遺跡名	グリッド	層位	規模(上・下・高) cm	人骨	副葬品	備考
1号墓坑	I C 3 j	II	82×84 70×79 H=6	有		
2号墓坑	I D 1 c	II	82×73 65×53 H=15	無		
3号墓坑	I D 10 c	II	106×100 59×62 H=50	有		
4号墓坑	I D 10 c	II	106×100 54×60 H=41	有	古銭(寛永通宝)	
5号墓坑	I C 6 i	II	128×122 105×108 H=130	無	古銭(寛永通宝)	
6号墓坑	I C 5 j	II	218×197 100×93 H=110	有	古銭(寛永通宝)	棺桶底有り
7号墓坑	I C 5 j	II	130×(130) 93×82 H=100	有	古銭(寛永通宝)	棺桶底有り
8号墓坑	I C 2 h	II	125×128 87×82 H=40	有	古銭(寛永通宝)	
9号墓坑	I C 2 h	II	218×170 170×110 H=50	無	古銭(寛永通宝)	
10号墓坑	I C 2 g	II	126×126 100×103 H=20	有	古銭(寛永通宝)・煙管・釘	
11号墓坑	I C 2 g	II	134×123 82×82 H=60	有	古銭(寛永通宝)	
12号墓坑	I B 4 d	II	215×194 130×127 H=105	有		
13号墓坑	I B 4 c	II	135×128 105×86 H=80	無		
14号墓坑	I A 5 i	II	75×68 55×63 H=20	有	釘ほか	
15号墓坑	I A 6 i	II	(112)×85 88×67 H=50	無	釘ほか	
16号墓坑	I A 5 h	II	162×158 72×68 H=85	無		
17号墓坑	I A 5 i	II	115×73 88×44 H=20	無	釘ほか	
18号墓坑	I A 4 i	II	102×97 64×65 H=30	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
19号墓坑	I A 2 g	II	(180)×140 130×88 H=40	有	釘ほか	
20号墓坑	I A 4 i	II	124×107 83×73 H=50	無	釘ほか	
21号墓坑	I A 5 i	II	50×45 38×38 H=10	有	釘ほか	
22号墓坑	I A 5 i	II	134×135 94×98 H=48	有	古銭(寛永通宝)・小形鉈	
23号墓坑	I A 4 j	II	127×120 60×67 H=50	無	釘ほか	
24号墓坑	I A 5 i	II	108×100 70×66 H=25	無		
25号墓坑	I A 5 i	II	130×130 86×75 H=75	有	古銭(寛永通宝)	
26号墓坑	I A 6 i	II	(130)×133 88×68 H=70	無	骨(ガラス製)	
27号墓坑	I A 6 i	II	(140)×(130) 83×91 H=85	無		
28号墓坑	I A 6 i	II	(160)×(150) 108×105 H=70	無		
29号墓坑	I A 6 i	II	(100)×(80) 55×50	無		
30号墓坑	I A 2 g	II	172×(120) 97×97 H=80	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
31号墓坑	I A 4 i	II	142×127 74×65 H=80	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
32号墓坑	I A 6 i	II	155×110 72×69 H=70	無	釘ほか	
33号墓坑	I A 2 h	II	112×105 96×86 H=60	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
34号墓坑	I A 6 i	II	75×73 62×55 H=29	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
35号墓坑	I A 4 j	II	116×90 73×56 H=48	無		
36号墓坑	I B 3 a	II	170×130 69×63 H=110	有	古銭(寛永通宝)	
37号墓坑	I B 3 a	II	206×178 95×90 H=140	有	古銭(寛永通宝)・釘ほか	
38号墓坑	I A 6 j	II	128×125 116×113 H=11	有	古銭(寛永通宝)	
39号墓坑	I B 4 b	II	161×160 110×108 H=149	無		
40号墓坑	I B 4 b	II	(150)×135 (100)×(100) H=100	有	古銭(寛永通宝)・骨	
41号墓坑	I D 1 a	II	186×160 139×105	無		
42号墓坑	I D 10 b	II	96×73 71×46	有	古銭(寛永通宝)	
43号墓坑	I B 4 b	II	(100)×(100) (80)×(80) H=110	有	古銭(寛永通宝)・骨・釘	
44号墓坑	I B 4 f	II	126×114 88×80 H=94	無		
45号墓坑	I B 10 b	II	80×78 51×50 H=18	無	古銭(寛永通宝)	
46号墓坑	I B 10 g	II	(116)×108 (80)×81 H=95	無		
47号墓坑	I B 3 b	II	91×80 50×32 H=49	無		
48号墓坑	I B 2 a	II	106×100 59×41 H=50	無		
49号墓坑	I A 2 j	II	116×80 58×30 H=46	無		
50号墓坑	I A 2 j	II	81×79 30×30 H=42	無		
51号墓坑	I D 1 b	II	116×97 89×70	無		

V. 遺構外出土遺物

1 土器・土製品・陶磁器

(1) 純文～弥生時代の土器

2ヵ年にわたる調査で出土した土器はコンテナ(42×32cm・深さ30cm)で38箱に上る。遺構外出土土器の整理にあたっては、分類の資料となるものを中心として、本遺跡において出土例の少ないものを抽出するよう努めた。土器の分類は遺構内・外同じとし、現在までの研究成果に従って大まかな時期区分毎に以下のように群を設定した。また、細分の可能なものに関しては更に分類を行った。

第Ⅰ群	縄文時代早期前～中葉	貝殻沈線文系土器群(白浜式、物見台式)相当
第Ⅱ群	縄文時代早期後～末葉	表裏縄文系土器群(赤御式、早編田5類)相当
第Ⅲ群	縄文時代前期初頭	羽状縄文系土器群(長七谷地Ⅲ群、早編田6類)相当
第Ⅳ群	縄文時代中期	大木9式、大木10式相当
第Ⅴ群	縄文時代後期	上村式、葦窓式、賀沢、十勝内I式相当
第Ⅵ群	縄文時代晚期	大洞B、大洞C2式相当
第Ⅶ群	弥生時代後期	小田野編年Ⅳ期相当
第Ⅷ群	粗製土器一括	第Ⅳ群から第Ⅵ群に伴うもの

第Ⅰ群土器(第142図)

縄文時代早期前葉～中葉に位置付けられ、貝殻沈線文系土器群に含まれるもの第Ⅰ群とした。分布は調査区南東部の斜面下位に限定され、そのほかのエリアや遺構埋土中からの出土はない。層位は第Ⅲ層下位のほか、搅乱などにより第Ⅱ層にも混入する。いずれも小破片であり、全体の器形や文様構成が判明するものは皆無である。焼成は全体的に良好で、胎土は硬質でよく焼き締まる。色調は褐色、にぶい黄橙色、黒褐色が主体である。器面調整は外面とともにミガキ調整されるものが多く見受けられる。以下、文様構成、施文手法により、A類とB類に細分を行った。

A類—地文に貝殻条痕文を持ち、口縁部～胴部に刻目状の連続刺突文が巡るもの(582～586)

5点が該当する。白浜式土器に相当するものである。582は深鉢形尖底土器の口縁部で、口縁部に2段の刻目状連続刺突文を持ち、胴部には貝殻条痕文が施される。胎土は硬質でよく焼き締まり、黒褐色を呈する。583は胴部の上半部になると思われる。2段の刻目状連続刺突文が施される。地文は貝殻条痕文である。内面は炭化物の付着が僅かにみられ、褐灰色である。胎土は硬質で、褐色を呈する。584は胴部の下半部で、器面に貝殻条痕文が施される。内面は炭化物が付着し、黒褐色を呈する。胎土はよく焼き締まり、明褐色となる。585は胴下部の破片になると思われる。地文として貝殻条痕文を持つ。内面は炭化物が付着し、黒褐色である。胎土は硬質で、明褐色を呈する。586は底部片である。地文として貝殻条痕文が施され、器面は磨いたような光沢を持つ。破片の下半部は炭化物が付着し、やや黒ずむ。内面は上半部に炭化物の付着が見られる。胎土はやや砂粒を含むが硬質で、よく焼き締まる。

B類—貝殻腹縁压痕と沈線を組み合わせた文様を持つもの(587、588)

2点が該当する。物見台式土器に相当するものである。587は胴部破片である。複数の沈線文で区画を設け、内部に貝殻腹縁文や貝殻条痕文を斜位や縱位に組み合わせて施され、文様を構成すると見られる。胎土はやや砂粒を含むが、硬く締まる。色調はにぶい黄橙色を呈する。588は口縁部破片になると思われる。2重沈線と斜位の貝殻腹縁文の組み合わせで文様が施される。沈線間に細い棒状工具により刺突列点文が施される。内面は炭化物の付着が見られ、黒褐色となる。胎土は硬質で、褐色を呈する。

第Ⅱ群土器（第142図589～596）

縄文時代早期後葉～末葉に見られる表裏縄文を持つ土器群を第Ⅱ群とする。赤御堂式～早塙式5類に相当するものである。分布は調査区南東部のⅡB区に集中する。層位はⅢ層中～下位からのものが殆どで、搅乱内からも若干出土している。いずれも小破片のうえ歪みや磨耗が著しく、器形の判明するものはない。一樣に焼成が不良で脆く、器厚も一定しないものが多い。断面は黒色の屑を介したサンドイッチ状を呈する。胎土には植物繊維を多量に含む。

589は口縁部片で、外面は横位のLR0多縄文を地文とする。内面は斜位のLR縄文が口縁部付近のみ微かに認められる。胎土はにぶい黄橙色～褐灰色を呈する。590は口縁部片で、外面は横位のLR0多縄文、内面は付加条を伴うLR縄文が斜位に施される。胎土はにぶい黄橙色を呈し、内面には炭化物が付着し若干黒ずんでいる。592は胴上部片で外面は継位のRL縄文を地文とする。内面はRL縄文が斜位に施される。胎土はにぶい黄橙色で、内面は炭化物が付着し若干暗い色調を呈する。596は胴部破片である。磨耗が著しく、施文された文様は不明である。外面はにぶい黄橙色、内面は炭化物が付着するため、若干暗い色調を呈する。これらは、焼成が良好で色調も肌色～オレンジ～くすんだ黄橙色を呈し、光沢を持つほど堅く焼結まる本米の赤御堂式～早塙式5類の特徴とは様相をやや異にするが、施文手法の特徴などから総合的にみて同時期と位置付けられる。

第Ⅲ群土器（第142図597）

1点のみ該当する。縄文時代前期初頭に位置付けられる羽状縄文系の土器群に含まれ、長七谷地Ⅲ群土器に並行するものと考えられる。中近世の造構埋土からの出土である。

597は器面に0段多条の非結束羽状縄文（LR/LR）が施文される。胎土には繊維を多量に含む。焼成は不良で、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

第Ⅳ群土器（第143図）

縄文時代中期の土器で、中期大木式土器様式に位置付けられる土器群である。本遺跡では該期の住居跡の埋土中から出土するものが主体で、その他のもので器形の判明する個体は少ない。遺構外のものはⅠC区に出土の集中がみられ、出土層位はⅢ層上位が最も多い。焼成は明褐色を呈し緻密なものと、褐灰色を呈しやや粗なものが混在する。胎土は砂粒を含むものが多い。本遺跡ではこの群の土器が遺構内、遺構外を通じて最も多く、土器総量の大半を占める。以下、様式別にさらにA類と、B類とに細分を行った。

A類—大木9式に比定される土器群（599、605～606）

遺構外のものは3点が該当する。文様が口縁部～胴部へ横方向に展開するもので、継位の梢円文や、U字状文が陰線や沈線によって描かれるものと思われ、大木9式土器の特徴を持つ。しかしいずれも小破片であるため、器形、文様構成など全体がわかる資料に乏しく、詳細は不明である。

599は深鉢形土器の胴部片で、胴部に陰沈線により縱方向の区画文様を持つ。区画内には付加条を伴うLR縄文が継位に施文される。605は小形の深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部が小さな波状を呈する。RL縄文を継位に施文した後、浅い沈線によって継位の区画を描く。その後、区画の外を磨消している。606は小形の深鉢形土器口縁部片で、胴部に浅い沈線による縱方向の区画文様を持ち、区画内にRL縄文が継位に施文されるものと思われる。

B類—大木10式に比定される土器（601～607）

遺構外のものは6点が該当する。いずれも小片であるため、全体の器形、文様構成などを知ることのできる資料は少ない。器形は口縁部が外反～外傾し、文様は器面全体にわたって横方向に展開するものでアルファベットの<S><C>字状と、それらの変形したものが陰線、沈線、もしくは両者の組み合わせによって描かれるものと思われる。大木10式土器の特徴を持つ。

601は胴部でやや膨らみ、胴上部で一旦折れたのち口縁部に坐ってやや外傾するような器形を呈する。胴部には幅広の沈線によりS字状の文様が描かれる。602は胴部がやや張り、頸部で一旦くびれて口縁部が外

反する器形を呈する。胴部には幅広の沈線による曲線文様が描かれ、R L 縄文が縦位に施文される。口縁部に無文部を持つ。603は深鉢形土器片の口縁部で、口縁部は綺やかな波状を呈する。胴部にはし R 縄文が縦位に施文され、その上から幅広の沈線によって曲線文を描き、その内部を磨消している。

607は胴部片で、細く浅い沈線によりJ字状の曲線文様が描かれ、その内部にはR L R 縄文が縦位に施文される。内面に炭化物が付着する。

第V群土器（第144図）

縄文時代後期の上村式、葦窓式、蛋沢式、十腰内I式に比定される土器群を第V群とした。分布は調査区のI C区～II C区に集中する。層位はII層～III層が主体である。小破片が多く、土器全体の器形、文様構成が判明する個体を欠くため、不明な点が多い。ここでは縄文時代後期初頭にあたる上村、葦窓式、蛋沢式期に相当する上器群をA類、後期前葉にあたる十腰内I式に相当する土器群をB類として、更に時期別に細分を行った。

A類—上村、葦窓式、蛋沢式、宮戸I b式に比定される土器群（612～610、612～620）

608は深鉢形土器の口縁部片で、小形の山形口縁を呈する。頂部下位に竹管状の工具によって刺突文様が円形に刻まれ、口縁部にも同様の刺突列が巡る。胴部には浅い沈線によってK両文が描かれ、内部には縦位のL R 縄文が描かれる。609は浅鉢形の土器片で、口縁部に竹管刺突列が巡る。胴部は細く浅い沈線によってK両文が描かれる。内部には縦位のL R 縄文が施文される。610は深鉢形土器の口縁部片で、口縁部無文帯に2段の竹管刺突列が巡る。胴部には浅い沈線によりK両文が描かれ、内部にはし R 縄文が縦位に施文される。612は胴部に円形の浮文を持ち、胴部には蛇行沈線による文様が施される。613は頸部が括れる鉢形～深鉢形の器形を呈するものと思われる。隆底～沈線によって曲線的なモチーフが描かれる。615は山形の口縁を呈し、頂部から蛇行隆底が垂下する。619は口縁部片で、山形を呈する口縁に隆底を貼りつけ、山形や菱形にモチーフを構成する。617・618・620は縄文を施した太陣唇により文様を構成するものと思われる。

B類—十腰内I式に比定される土器群（611）

611は壺形土器の口縁部破片で、無文の器面上に細い沈線により文様を描くものである。内外面に赤色塗彩が施される。

第VI群土器（第145図）

縄文時代晩期に位置付けられる。大洞B式、大洞C 2式に比定される土器群である。調査区全域から出土しており、層位はⅢ層および擾乱内である。全体の器形や文様構成が判明する個体が無く、詳細は不明である。

621は鉢形土器の胴部破片で、沈線による雲形文様のモチーフを持つものと思われる。622は深鉢形土器の口縁部片である。口部に細かい刻目を持つもので、胴部には雲形文様のモチーフが描かれるものと思われる。623は壺形土器の頸～口縁部片である。625は深鉢形土器の口縁部片で、口唇部は小刻みな波状に形成される。口縁部には2重の平行沈線が巡る。地文として横位のR L 縄文が施文される。626は台付深鉢の底部片で、台部に2重の平行沈線が巡る。地文は横位のL R 縄文である。

第VII群土器（第145図）

弥生時代初頭～後期までの土器を含めて第VII群とした。小田野編年I a期、IV期の特徴を持つ。調査区全域から3点が出土している。層位はII層～III層である。小破片のため、器形や文様構成が判明するものはないが、施文の特徴などから一定時期別に細分を行った。

A群—小田野編年I a期相当（627、629）

627は深鉢形土器の胴上部片で、口縁部文様帶に細い沈線によって変形工字文が描かれる。胴部には地文として横位のL R 縄文が施文される。629は1段の捺糸文（L / R）によって羽状縄文が表出される。

B群—小田野編年IV期相当（628）

628は鉢形土器の口縁部～胴部片で、胴部にメガネ状の区画文様が沈線によって描かれる。内部にはL R

縄文が斜位に施される。

第四群土器（第145図630～636）

第四群から第四群に伴うとみられる粗製土器を一括した。調査区全域から出土している。層位はⅡ層下～Ⅲ層で、遺構埋土からも若干出土している。焼成は明褐色を呈し硬質で良好なものと、黒褐色で砂粒を含み、やや不良なものがある。器種は全て深鉢形土器片で、器形の判明するものはない。口縁部の形状は平縁のもの、平縁で折り返し口縁を呈するものがある。胴部の地文は、R L 縄文が縱方向に施文されるものが最も多く、その他L R 縄文の縱回転文、L 1段縄の縱回転文、R 1段の縄を用いた網目状捺糸文などが認められる。底部片は出土していない。

（2）ミニチュア形土器・土製品

ミニチュア形土器・土製品は計19点が出土した。内訳はミニチュア形土器が15点、土偶が1点、斧形土製品が1点、形態不明の土製品が2点である。以下、種類毎に概略を記す。

ミニチュア形土器（第146図640～653）

ここでは口径、底径ないし器高が概ね5cm未溝の土器をミニチュア形土器とし、遺構外出土のものを一括した。ミニチュア形土器として登録したのは15点で、すべて図示した。643は、底部が指円形を呈するものである。647は壺形で、胴部に小形の把手が付く。651、652は内外面ともに赤色塗彩される。沈線による文様を持つ。時期は中期末から後期初頭に相当するものと考えられる。

土偶（第146図654）

1点のみ出土している（654）。破損品で、頭部のみの出土である。頭部の破損面にはアスファルトの付着がみられる。顔面には鼻がつまみ出されるように作出されている。また、全体に刺突列による裝飾が施されている。時期は後期に相当するものと考えられる。

その他（第146図655～658）

657は斧形土製品で、1点のみ出土している。体部にL R 縄文が施文される。656は筒形の土製品で無文となる。655、658の土製品の形態は不明である。

（3）陶磁器

2ヵ年の調査で出土した陶磁器は28点である。中世のものと考えられる336（1号竪穴建物跡床面出土）、339、340、342、343、350（遺構外）を除く22点は、近世～近代の陶磁器であり、78.5%を占める。以下、遺構外のものについて国産陶磁器と中国磁器に分けて記述する。

国産陶磁器（第147図659、660、664～683）

調査区斜面下側の平場を中心に24点が出土した。659はⅡ B 1 f から出土した灰釉陶器の壺片で、胎土が常滑窯のものに似る。660は酒美窯の灰釉陶器の壺片で、生産年代は12世紀末から13世紀初頭に位置付けられるものである。そのほか生産年代17世紀後半～19世紀初頭と推測される肥前窯の染付磁器片が9点、19世紀前半以降の東北窯とみられる灰釉磁器片の碗、皿、鉢、搖鉢などがあわせて9点出土している。

中国磁器（第147図661～663）

I D 7 a 区Ⅱ層から2点、I C 10 b Ⅱ層から1点が出土した。661は青磁の皿片で、内側に半円彫りの牡丹文が描かれる。生産年代は12世紀後半に位置付けられる。662、663は青磁の皿片で、線描き連弁文を持つ。明代のものと推測され、製作年代は15世紀代に比定される。

（中村真美）

2 石器・石製品・その他

① 石器組成と石材

本遺跡の出土土器は早期から晩期にまで及ぶが、その主体をなすのは大木10式期の中期末で、十腰内IA式期の後期前葉がそれに次いでいるが微量である。従って、石器の所属時期は中期末とみてよいであろう。また、1号工房跡より検出された鉄床石は、同一遺構内の出土品とその用途からみて中世に所属する。

石器組成と石材の数量、重量を第1表に示した。剥片石器及び剥片・石核などが459点、磨製石斧や敲磨器類などの鍛造素材の石器が50点で、总数は509点である。このうち製品として使用されたのは115点で、石臼・砥石・台石など中近世の遺物10点を含む。

石器の種類は石鐵、石匙、石錐、スクレイバー類、尖頭器、楔形石器、リタッヂド・フレイク、ユーズド・フレイク、磨製石斧、敲石、凹石、磨石、敲磨石、石皿などである。剥片石器の合計65点(100%)の石材は、頁岩が42点と最も多く64.6%を占める。次いで珪質頁岩が17点(26.2%)、チャートが3点(4.6%)、瑪瑙が2点(3.1%)、赤色頁岩1点(1.5%)であった。また、磨製石斧は合計11点(100%)のうち、頁岩が8点(72.7%)、ひん岩が3点(27.3%)であった。砾石器は合計29点(100%)で、安山岩が19点(65.5%)、ひん岩が3点(10.3%)、礫灰岩が2点(6.9%)、頁岩・閃綠岩・斑禿岩・ホルンフェルス・砂岩が各1点(各3.4%)であった。表を見て分かるように石材は多様であるが、剥片石器・磨製石斧と砾石器ではその様相を異にする。傾向として、頁岩や石英などの貝殻状断面を示す石材は剥片石器に用いられ、安山岩などの粗粒の石材は原石に近い状態で砾石器として使用されたと見られる。

② 剥片石器

石鐵(43, 64, 65, 107, 173, 174, 175, 176, 684, 685, 686, 687)

石鐵または石鐵未成品は計12点で、最長のものは65・174の3.2cm、最短のものは175で1.7cmである。また、43・64・173・684の4点は未成品で、176・685・686・687は欠損品である。形状は茎部を作出しているものなく、すべて無茎鐵に属する。その種類は確認できるもので、65・175のように基部が直線的なもの(平基鐵)が2点、174・687の基部がやや丸みを帯びているもの(円基鐵)が2点、107・685のように基部に抉り込みのあるもの(凹基無茎鐵)2点である。計12点いずれもアスファルトの付着はみられない。出土地点からみると、遺構内からの出土遺物が最も多かった16号住居跡埋土から4点が出土しており、また7号住居跡埋土からも2点が出土している。

石材は、64・174・684は頁岩、43・107・173・175・176・686は珪質頁岩、65は赤色頁岩、685・687は瑪瑙である。微細な細部調整を必要とする石器のため、比較的硬質な石材が選択されているのがわかる。

石匙(44, 66, 108, 177, 178, 179, 266, 688, 689, 690, 691, 692)

石匙は計12点で、横型の石匙は178・266の2点のみで、そのほかは縱型である。石材は、12点すべてが頁岩製であり、石材はすべて剥片である。44・691を除き、ほかのすべては剥片の打面側をつまみ部としている。縱型で最長のものは690の6.8cm、横型は266で最長6.3cmである。

44は、刃部が欠損し、つまみ部のみが残存している。縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面側を刃部に作出、浅形調整が施されている。また691も同じ形態を持っている。66はつまみ部及び刃部に自然面を残しており、右側縁に片面浅形調整が施されている。抉り部には帯状のアスファルト痕がみられる。108は浅形調整を施して刃部を形成している。178も同じ形態であるが、深形調整を施しており欠損品である。177は右側縁の両面に浅形調整が有り、左側縁は微細削離痕がみられる。178は全周に浅い片面調整がみられ、つまみ部を作出している。266は刃部の一部は両面調整、そのほかは規則的な浅形片面調整が行われている。石材

第6表 石器石材分類表

	石	岩	砂岩	頁岩	泥岩	石	灰岩	砾岩	頁岩	泥岩	砂岩	頁岩	泥岩	砂岩	頁岩	泥岩	合計
石	3 (0.40)	6 (17.94)	1 (1.94)	2 (0.40)													12 (31.40)
砂	12 (0.40)																12 (0.40)
岩	2 (1.20)																2 (4.20)
ト	7 スクリーパー	14 (30.20)	2 (02.97)														16 (30.20)
ト	丸頭	1 (0.30)	1 (1.90)														2 (7.30)
ト	板岩	1 (7.10)	2 (0.80)						2 (21.00)								5 (46.30)
ト	リチャード・フレイタ	2 (0.40)	2 (0.50)														9 (40.40)
ト	ルーベド・フレイタ	2 (0.10)	4 (07.10)						1 (13.20)								7 (49.40)
ト	砂	90 (203.10)	196 (410.00)	4 (20.10)	23 (101.30)	1 (0.10)	46 (225.40)	27 (07.50)								1 (0.30)	6 (292.40)
ト	片	3 (531.30)	2 (305.70)														5 (900.00)
ト	石	3 (2.40)															3 (2.40)
ト	石	0 (728.50)															11 (1292.00)
ト	石							2 (2000.20)									2 (2000.20)
ト	石	1 (009.60)							1 (017.00)	1 (050.00)	3 (257.00)	10 (1000.20)	1 (021.00)	1 (122.00)	1 (122.00)		27 (1673.00)
ト	その他(625 - 砂岩 - 灰岩)								3 (046.00)	1 (071.00)		5 (746.00)	1 (231.00)				10 (3024.00)
合	計	167 (356.90)	215 (086.40)	5 (019.00)	23 (064.90)	1 (18.10)	40 (225.40)	30 (101.70)	20 (000.20)	2 (227.50)	4 (050.00)	2 (134.40)	6 (1700.20)	2 (012.00)	1 (122.00)	1 (122.00)	109 (3485.00)

注) 例題・カット用具成績(%)

には薄い横長剥片が用いられ、素材末端部にヒンジ・フラクチャーがある。素材剥片の打面側につまみ部を作出している。688は三角形状のもので、刃部は弧形を呈している。抉り部の剥離は浅い。689は右側縁と左側縁の一部に腹面からのやや深い片面調整が施されおり、刃部は右側縁に形成されている。690は縱長剥片を素材としており、全周に規則的な深形調整を施し整形されている。刃部は左右側縁及び末端部にも形成されているが、左側縁は両面調整が施されている。692はつまみ部を作出しているが、刃部は欠損している。

本遺跡出土の石器は片縁刃に調整を施して刃部とするものが大半を占め、全周に調整を施すことはまれであり、片面だけの資料が多い。

石鎚 (267, 693)

石鎚は計2点出土しており、いずれも石材は頁岩である。267は頭部と錐部の境が判然とせず、円基盤とも考えられるがここでは石鎚に分類した。267は両側縁・両面に深形調整が施されており、頭部は丸くなっている。693は素材剥片をかなり変形させたもので、錐部のつくりは非常に精緻である。両者とも丁寧な押圧剥離が認められ、693は錐部の横断面は明瞭な菱形を呈しているが線状痕などはみられない。

スクレイパー類 (14, 15, 16, 17, 45, 83, 92, 109, 235, 252, 694, 695, 696, 697, 698, 699)

当初、搔器・削器の分類を行ったが、相似点が多いため一括することとした。ただし刃部の作出位置によって分類を行う。

I-A類 : 左右側縁(片側または両側)に細部調整がある(片面)

I-B類 : 左右側縁(片側または両側)に細部調整がある(両面)

II-A類 : 端部(基・末)に細部調整がある(片面)

II-B類 : 端部(基・末)に細部調整がある(両面)

III-A類 : 側縁・端部(基・末)に細部調整がある(片面)

III-B類 : 側縁・端部(基・末)に細部調整がある(両面)

I-A類 → (14, 17, 694, 695)

14は、縱長に剥離された剥片を素材とし、左右両側縁に極浅形の片面調整が施されている。主剥離面には原石の節理面が大きく残されている。17は、縱長の剥片を素材とし、末端はヒンジ・フラクチャーを呈している。右側縁には背面からの浅形片面調整があり、素材剥片打面方向からの剥離痕が腹面に残されている。694は縱長剥片を素材としており、右側縁に極浅形の片面調整を施し、刃部を作出している。左側縁は意図的に背面からの刃滑し加工が行われている。695は縱形の剥片を素材とし、末端はヒンジ・フラクチャーを呈する。刃部は右側縁の一部に極浅形片面調整が施されている。石材はいずれも頁岩製である。

I-B類 → (109)

109は必ずしも縱長剥片を素材とし、右側縁に浅形の調整を両面に加え、刃部を作出している。石材は珪質頁岩である。

II-A類 → (696, 699)

696は縱形の剥片を素材としているが寸詰まりしている。刃部は左側縁から末端部の一部にかけて極浅形片面調整によって作出されている。699は素材剥片の腹面側末端部に極浅形片面調整を施している。石材は696が珪質頁岩、699が頁岩製である。

II-B類 → 誤当なし。

III-A類 → (15, 16, 92, 697, 698)

15は縱長の剥片を素材とし、右側縁と左側縁の一部・末端部の一部に腹面からの極浅形片面調整がある。

16は厚手の縦長剥片を素材として直接打撃と押圧剥離による全周的な浅い片面調整を施している。92は楔形の剥片を素材とし、腹面左側縁から末端部にかけて背面からの浅形片面調整がみられる。697は縦長剥片を素材としているが、末端部は欠損している。左右側縁及び基端部に極浅形片面調整がある。698は縦長剥片を素材としているが、基端部は欠損している。全周に規則的な極浅形片面調整が施されており、刃部を形成している。石材はいずれも頁岩製である。

Ⅲ-B類 → (45, 83, 235, 252)

45は原石を打ち欠いた剥片をそのまま使用しており、素材剥片打面側から左側縁にかけて自然面を残している。右側縁の一部に極浅形片面調整と末端部に両面調整がみられる。83は左側縁と基端部に自然面を残しており、刃部は右側縁下半部に極浅い両面調整と末端部に背面からの片面調整を施して形成されている。235も同様に右側縁下半部に極浅い両面調整と末端部に背面からの片面調整を施して刃部を作出している。252は当初、削器としたがここに分類した。横長の剥片を素材としており、右側縁は深い両面調整によるプランティング、左側縁及び末端の一部には規則的な極浅形片面調整が施されており、刃部を形成している。石材はいずれも頁岩製である。

尖頭器 (67, 700)

尖頭器と分類したのは2点である。両者とも先端部は欠損しており、大きさは不明である。67は剥片を素材としており、大きさからバイボーラ・テクニックが用いられたと考えられる。主剥離面には押圧剥離による浅形両面調整が全周に行われ、それは背面の一部にもみられる。背面は自然面を残しており、腹面には打点も確認できる。700は縦長剥片を素材としており、腹面からの規則的な浅い片面調整が全周に施されている。先端部欠損のため、大きさは不明であるが10cmは越えないであろう。石材は、67が珪質頁岩であり、700が頁岩である。

楔形石器 (110, 180, 181, 287, 312)

楔形石器と認定したものは計5点である。いずれも素材剥片剥離段階ではバイボーラ・テクニックが使用されている。110は両端部に浅形の両面調整がみられ、刃部を作出している。180はリングの密集が著しい。両端部に直接打撃による浅形両面調整を施し、刃部を作出している。両側縁には自然面を残している。181は両端に浅形調整を施しているが、石材が硬質なためか片面のみになっている。287は両端及び側縁にも浅形調整が施され、刃部を作出している。312は両端及び右側縁に浅形両面調整があり、両側剥離痕が大きく残されている。石材は110・312が珪質頁岩、181・287がチャート、180が頁岩である。

リタッヂド・フレイク (18, 111, 182, 183, 206, 369, 701, 702, 703)

微細な調整剥離が連続的に觀察される剥片をリタッヂド・フレイクとして分類する。18は剥片を素材としているが、打面は確認できない。末端部はヒンジ・フラクチャー気味で、右側縁から末端部にかけての腹面側に極浅い片面調整がある。111は縦長剥片を素材としており、右側縁に腹面からの極浅い片面調整が施されている。182は縦に細長い剥片を素材としており、左側縁に腹面からの浅い片面調整を施している。形状から石錐の未成品とも考えられるが、錐部とするところの作りが歎削なため、こちらに分類した。183は小形の剥片を素材とし、全周に腹面から極浅い片面調整がみられる。206小形の縦長剥片を素材とし、左側縁及び基端部に腹面からの浅形片面調整を持つ。右側縁には一部自然面を残している。369は縦長剥片を素材とし、基端部及び末端部に直接打撃による浅い両面調整がある。701は小形の剥片を素材とし、素材打面側に浅形の両面調整が施されている。702は縦長剥片を素材としており、両側縁に腹面からの極浅い片面調整がみられる。703は縦長剥片を素材とし、末端部及び右側縁の一部に直接打撃による極浅い片面調整が施さ

れている。石材は111・206が珪質頁岩、それ以外は頁岩製である。

ユーズド・フレイク (19, 82, 241, 288, 368, 704, 705)

微細な使用痕跡が観察される剥片をユーズド・フレイクとして分類する。19は横長剥片を素材とし、腹面末端部に微細剥離痕がみられる。82は根長剥片を素材とし、右側縁の一部に微細剥離痕がみられる。241は小形の縦型剥片を素材とし、打面間に微細剥離痕を有する。基端部には自然面を残している。288は縦型剥片を素材とし、末端部に微細剥離痕を持つ。368は厚手の縦型剥片を素材とし、左側縁及び末端部の一部に微細剥離痕がみられる。704は小形剥片を素材とし、基端部に微細剥離痕がみられる。705は横長剥片を素材とし、左側縁の一部及び基端部に微細剥離痕を持つ。石材は19・241が頁岩、368がチャート、それ以外は珪質頁岩製である。

③ 磨製石斧 (57, 85, 115, 190, 191, 289, 315, 319+367, 341, 710, 711)

本遺跡で出土している磨製石斧は計11点で、このうち完形品は57のみである。319と367は接合したため同一個体とする（ただし、登録は別途）。

石材をみると、315・711・710はひん岩で、そのほかはすべて頁岩製である。85は小形磨製石斧で、長さ4.0cm・幅1.85cm・厚さ0.8cmであるが、基端部は欠損しているため実際は6cm前後程度であろう。このなかで341だけが乳棒状磨製石斧である。基端部及び刃部は欠損しているため、大きさは不明であるが、11点の中では最大であると考えられる。断面は梢円形を呈している。そのほかはすべて定角式磨製石斧である。完形品は57のみのため大きさや形態の相違によっての種類は見出しつらいが、長さ10~12cm・幅4~5cm・厚さ2cm付近のものが多い。形態はどれも刃部幅に比べて基端部幅が狭いもので、1:2.3~2.5の割合のものを中心としている。刃部の形態は確認できるもの57・115・191・289・315のうち、289・315が中央部分の弧が緩い円刃で、57・115・191は偏刃を呈している。破損のパターンであるが、(1) 刀部付近において使用中の被加工物からの衝撃によるとみられる剥離→191・289・319+367・710・711、(2) 剛部において長軸に対し横もししくは斜め方向の力が加わった「折れ」の状況もしくは刃の柄から加わった力による破損→115・190・315・341が考えられる（鶴巣 1997）。115・315は刃部に摩滅痕がみられ、191・315にもその痕跡があるが使用中の破損に伴い、刃部を研磨して再形成を行ったと考えられる。また、341・710・711は刃部破損後も繼續して使用した可能性がある。102は両端を使用したことが考えられ、敲打痕がみられる。これは341にも顕著である。

④ 磨石器（石皿・敲磨器類）

【1】石皿 (371, 712)

本遺跡で2点出土した。石材はいずれも凝灰岩を用いている。371は縱長扁平で表裏面ともに摩滅による擦痕が縱方向に入っている、窪んでいる。また、同じく表裏面ともに擦痕の端に敲打痕がみられる。1号土坑底面付近からは完形の土器と出土した。712は縁辺に縁が形成されており、裏面には脚を有する。約1/4に欠損しているが、原形は四脚の石皿であったと考えられる。

【2】敲磨器類

敲石・磨石・凹石という呼称があるが、同一個体でこれらの機能を複合した使用痕を併存するものが多く、分類するのが困難なため、敲磨器類と一括した。その上で、以下のような類型化を行う。

- | | | |
|-------|------------------|--------------------|
| I-A類 | ： 四石の要素をもつもの | →表または裏にI-3カ所の凹痕がある |
| I-B類 | ： 四石と磨石の要素をもつもの | →表または裏に凹痕と擦痕を併存する |
| II-A類 | ： 凹石（長形）の要素をもつもの | →長形の縁に敲打痕がある |

- | | | |
|------|-----------------|--------------|
| Ⅲ-B類 | 磨石（丸形）の要素をもつもの | →丸形の縁に敲打痕がある |
| Ⅲ-A類 | 磨石（表・裏）の要素をもつもの | →表または裏に擦痕がある |
| Ⅲ-B類 | 磨石（側面）の要素をもつもの | →側面に擦痕がある |
| Ⅲ-C類 | 磨石+敲石の要素をもつもの | →擦痕と敲打痕を併存する |

I-A類(凹石) → (46, 194, 195, 253, 320, 326, 372, 713, 714, 721)

いわゆる凹石の要素をもつもので、本道跡におけるものは表・裏に2カ所の凹痕をもつものが多い。凹痕を表・裏1カ所もつものは46・194・714で、195・253・320・326・372・713・721は2カ所ないし2カ所以上の凹痕を有する。石材は713のみがホルンフェルスで、ほかは安山岩製である。特記すべきは713で、表・裏以外にも側面にもそれぞれ2カ所の凹痕を持っている。

I-B類(凹石+磨石) → (193, 342, 716)

凹石と磨石の要素を併せ持つものである。観察からいずれも凹石として使用されてから、後に磨石に転用されたのではないかと考えられる。193は表裏に凹痕を1カ所もち、裏面の一部に擦痕がみられる。342は表裏に2カ所の凹痕があり、表面の全面と裏面の一部に擦痕を残している。716は凹痕を表に2カ所・裏に1カ所もち、裏面の全面に擦痕がみられる。石材は193・342が安山岩製で、716は閃錫岩製である。

I-A類(鍛石・長形) → (47, 719, 720)

長形の縁を用いた敲石の要素をもつものである。3点いずれも石材である縁の形状は変えずに部分的な敲打痕がみられる。47は突端部に1カ所の敲打痕をもっている。また、719は縁の両端に敲打痕があり、長形の縁の一端を持って使用されたことが理解される。同様な用途で、720は表に1カ所、裏に2カ所の敲打痕を残している。石材は47が頁岩で、719はひん岩、720は安山岩である。

II-B類(鍛石・丸形) → (718)

丸形の縁を用いた敲石の要素をもつものである。718の1点のみで、表面のほぼ中央に敲打痕がみられる。石材は安山岩製である。

III-A類(磨石・表裏面) → (316, 722)

表面を広く用いた擦痕をもつものである。316は石器を置いたときに縦軸に対して斜め方向に擦痕が入っている。722も同様で、縦軸に対して斜め方向の擦痕を持っている。これはおそらく右手に持って作業を行ったのではないかと考えられる。722は表・裏面どちらにも擦痕がみられる。石材は316・722ともに安山岩製である。

III-B類(磨石・側面) → (242, 715, 723)

側面に擦痕をもつものである。242は右側縁に縦方向の擦痕をもつ。715は右側縁から末端部にかけて擦痕がみられる。723も同様に右側縁に縦方向の擦痕をもつ。石材は、242・723はひん岩で、715は砂岩である。

III-C類(磨石+敲石) → (48, 49, 123, 192, 717)

磨石と敲石の要素を併せ持つものである。被加工物に対しての作業という点から、磨ると敲くという行為は同時に行われたと考えられる。作業面を異にしているものもあるが、石器の転用というよりは、そちらの方が妥当であろう。48は表面に敲打痕があり、裏面は自然に擦んでいるが周囲には擦痕がみられる。49は裏面中央付近に微細な敲打痕があり、また右側縁に擦痕がみられる。123は表・裏に擦痕がみられ、その中央には微細な敲打痕がみられる。192は左側面下から末端を通り、右側面下までの擦痕がみられ、末端部に敲打痕をもつ。717は左右側面にそれぞれ擦痕をもち、末端に敲打痕を有する。石材は123が頁岩で、そのほかは安山岩である。

⑤ 石製品

石劍 (728)

細身に研磨された棒状の磨製石器で、断面は梢円形を呈する。長さ193mm、幅32mm、厚さ21mmであるが、両端部が欠損しているため、本来はもう少し長かったと考えられる。先端部が瘤状・円柱状を呈する例があるが、不明である。石材は頁岩である。

有孔石製品 (58)

採取してきた円盤形の礫に表・裏面から穴を穿ち、中央に孔を有する石製品である。6号住居跡埋土から1点のみ出土した。乗飾品とも考えられるが用途は不明である。石材は頁岩である。

磨製石器 (20)

欠損した磨製石斧の破片に研磨を加えたものである。小形磨製石斧の製作を試みたのであろうか、意図は不明である。1号住居跡埋土から出土している。石材は頁岩である。

⑥ 中近世の遺物 (石臼・砾石・台石)

(1) 石臼 (415)

2号獨立柱建物跡のP13柱穴内より1点のみ出土した。石材は安山岩製で、挽き臼の上臼である。ひき臼の日のパターンは残存部より考えると、中心から放射状に走る主溝により8分割されており、主溝から枝分かれした副溝が葉脈のごとく弧を描いている。石材は安山岩である。

(2) 砾石 (416)

獨立柱建物跡群のP191より1点のみ出土した。石材は頁岩製で、欠損品であるが左右側面及び基端部が残存している。縱方向に擦痕がみられる。時代は出土遺構より求められ、中世に位置づけられる。

(3) 台石 (400, 401, 402, 403)

1号工房跡から4点が検出されている。鍛造の金屬加工の際に被加工物をのせて作業したと考えられる。

⑦ その他

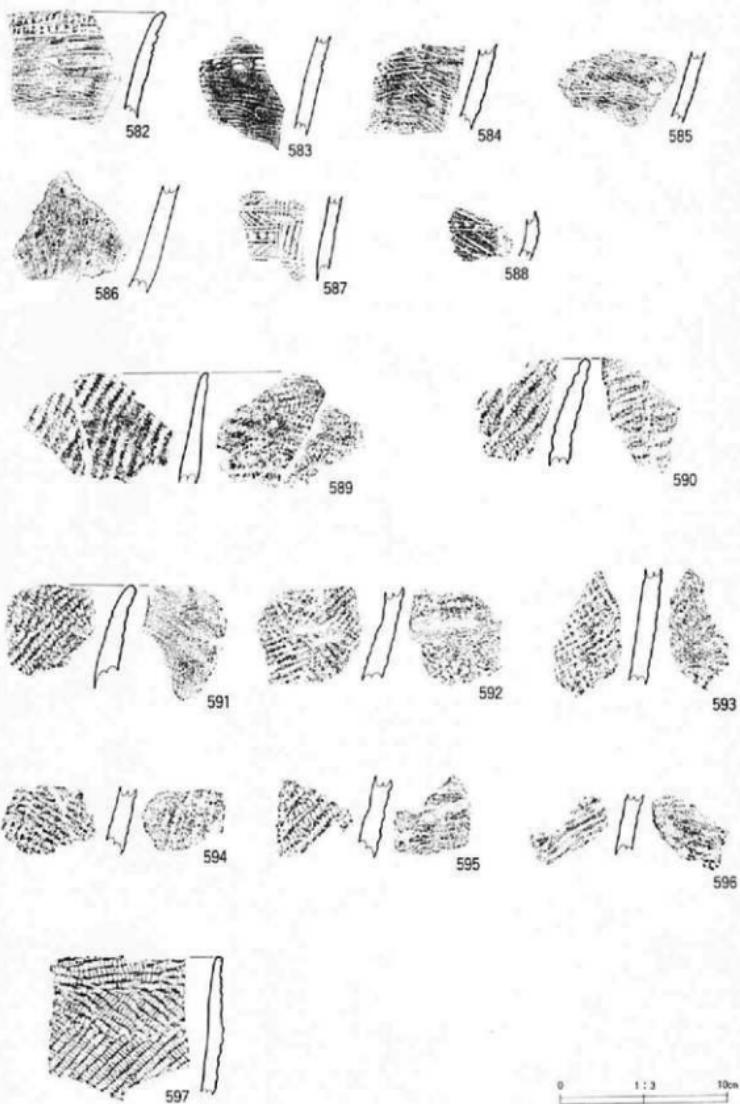
円礫 (35, 86, 196, 197, 230, 270, 290, 291, 292, 317, 318, 724, 725)

球状を呈し、手で握った際に手のひらに隠れる程度の小形のものや野球のボールくらいの大きさの礫を一括した。整形を施して球状にする例もあるが、本遺跡で出土する円礫は河川から採取してきたそのままの礫である。用途は不明であるが、大きさ4cm程度で重さが70~80gのものがほとんどである。石材は35が頁岩、724が凝灰岩で、それ以外はすべて安山岩製である。

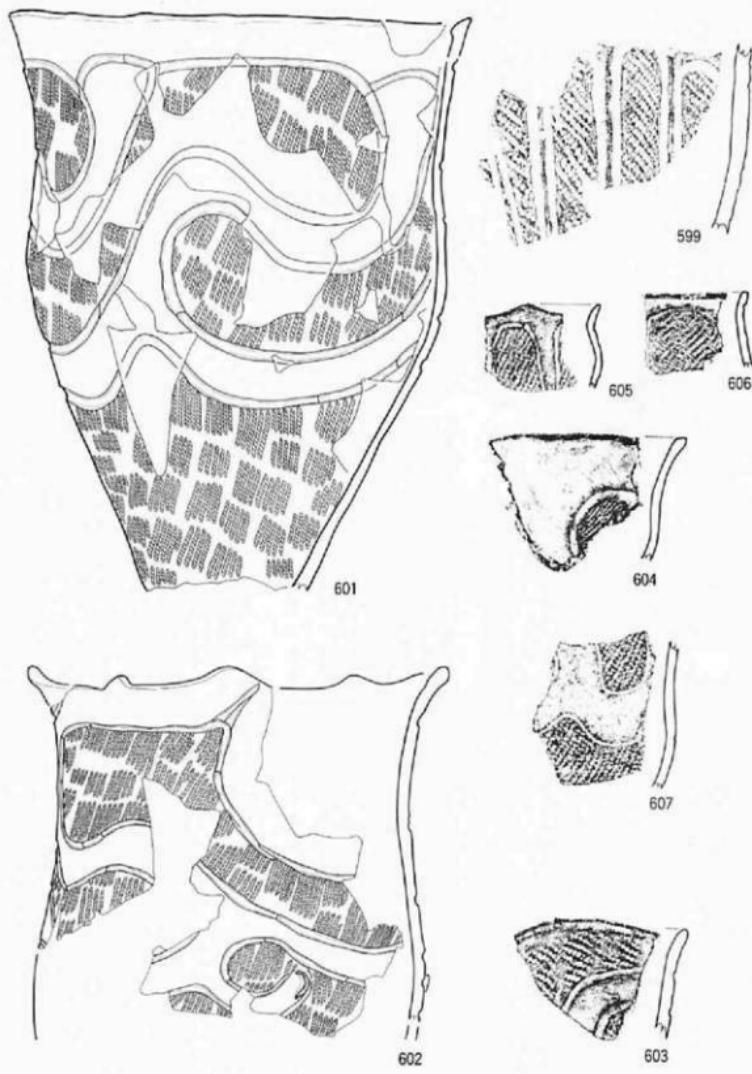
棒状礫 (126, 726, 727)

何らかの意図を持って採取された棒状を呈する礫を一括した。用途は不明であるが、石棒のような要素を持っているのであろうか。石材は126・726が閃緑岩、727は安山岩製である。

(北田 熊)

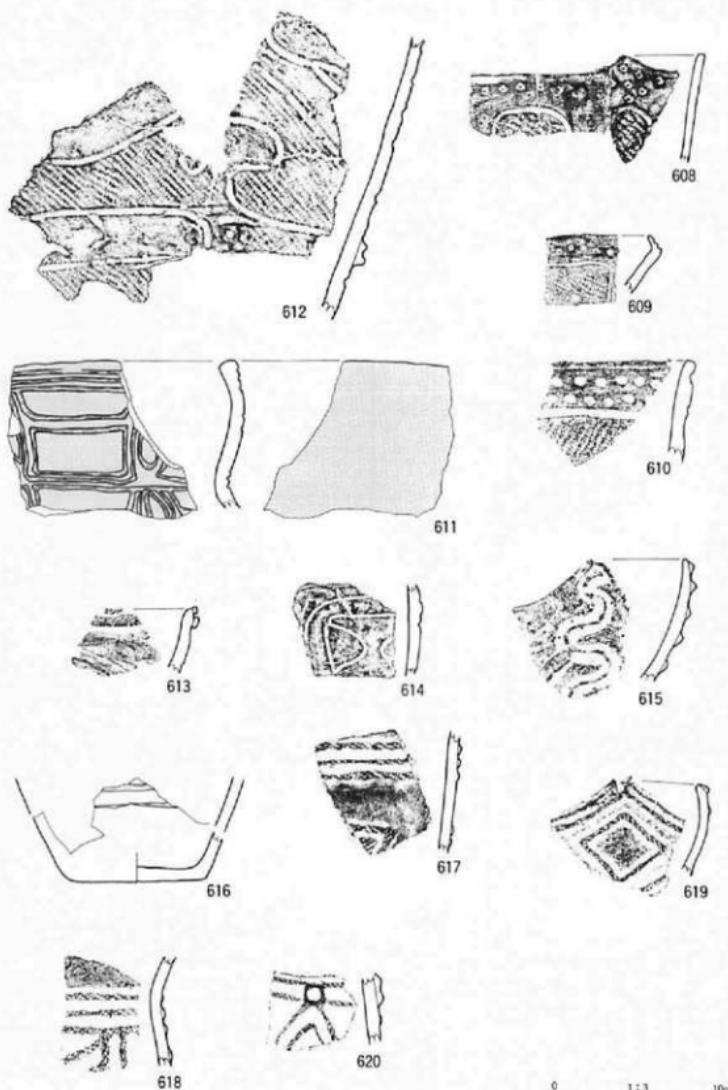


第142図 遺構外出土遺物(土器1)



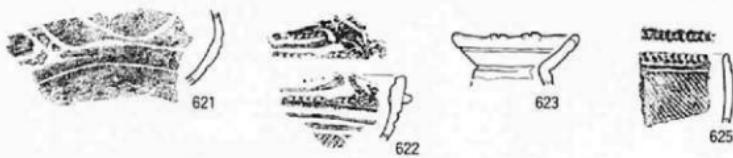
第143図 遺構外出土遺物(土器 2)

0 1:3 10cm

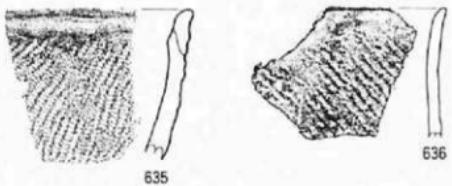
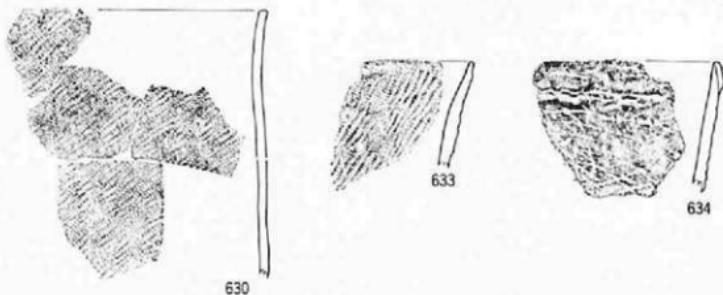


第144図 遺構外出土遺物(土器 3)

0 1:3 10cm

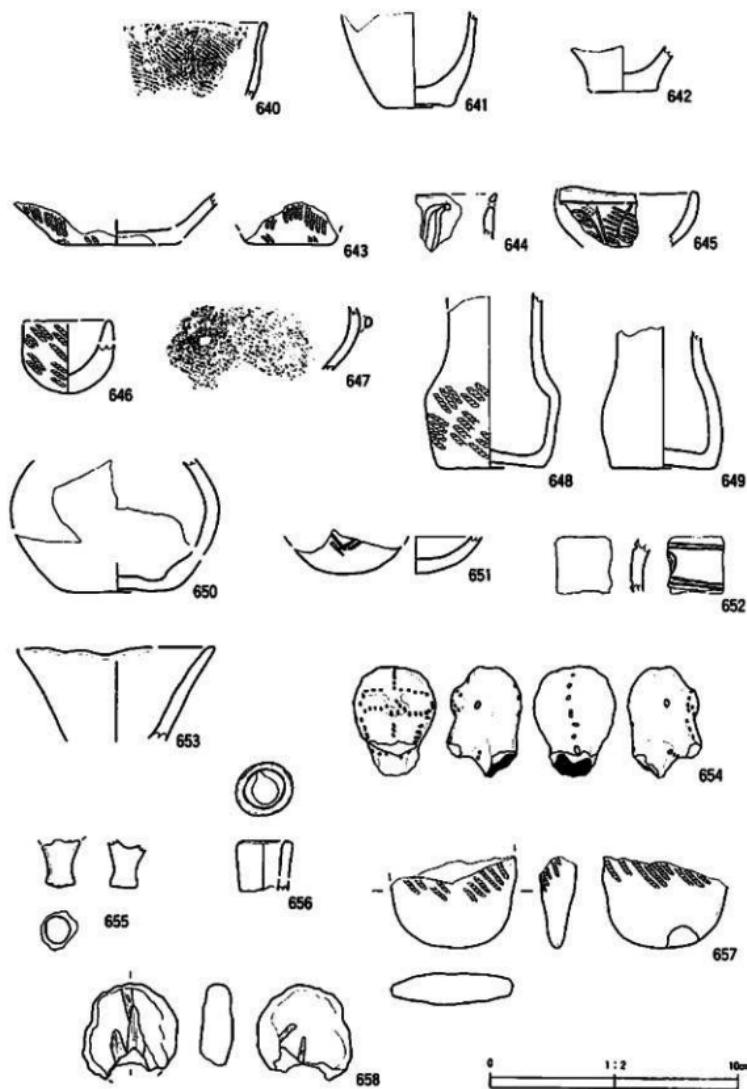


※ 624・631～632は写真のみ掲載

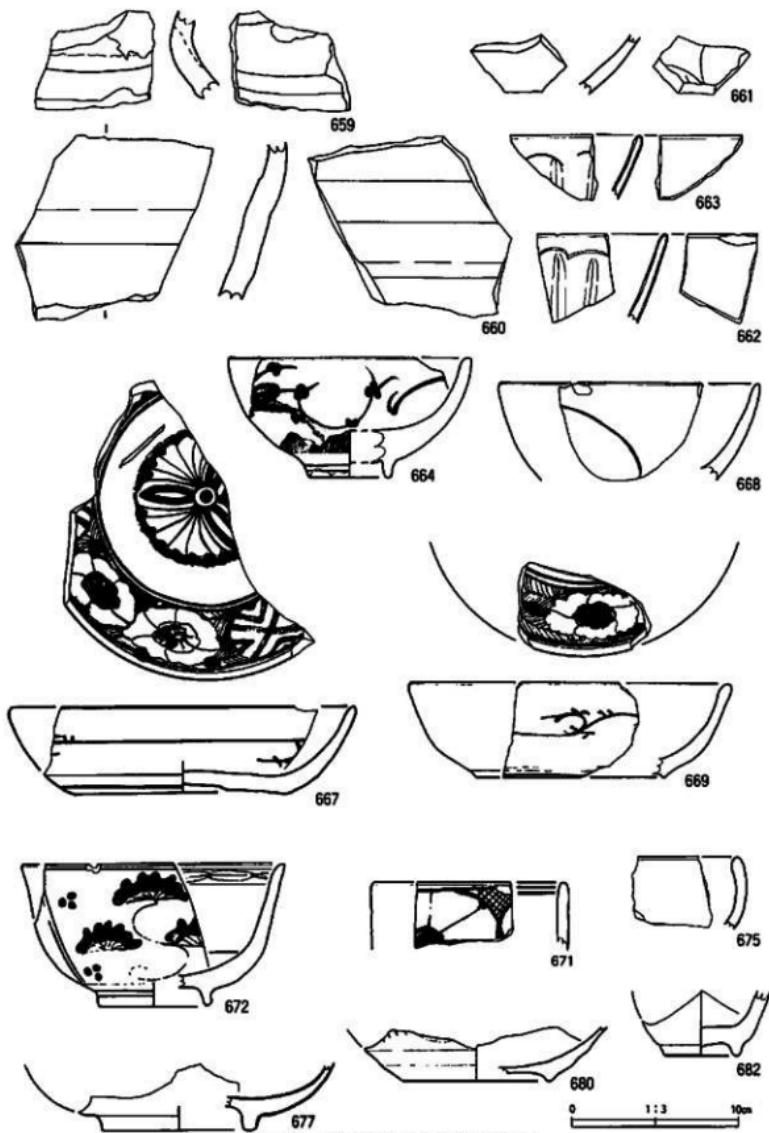


0 1:3 10cm

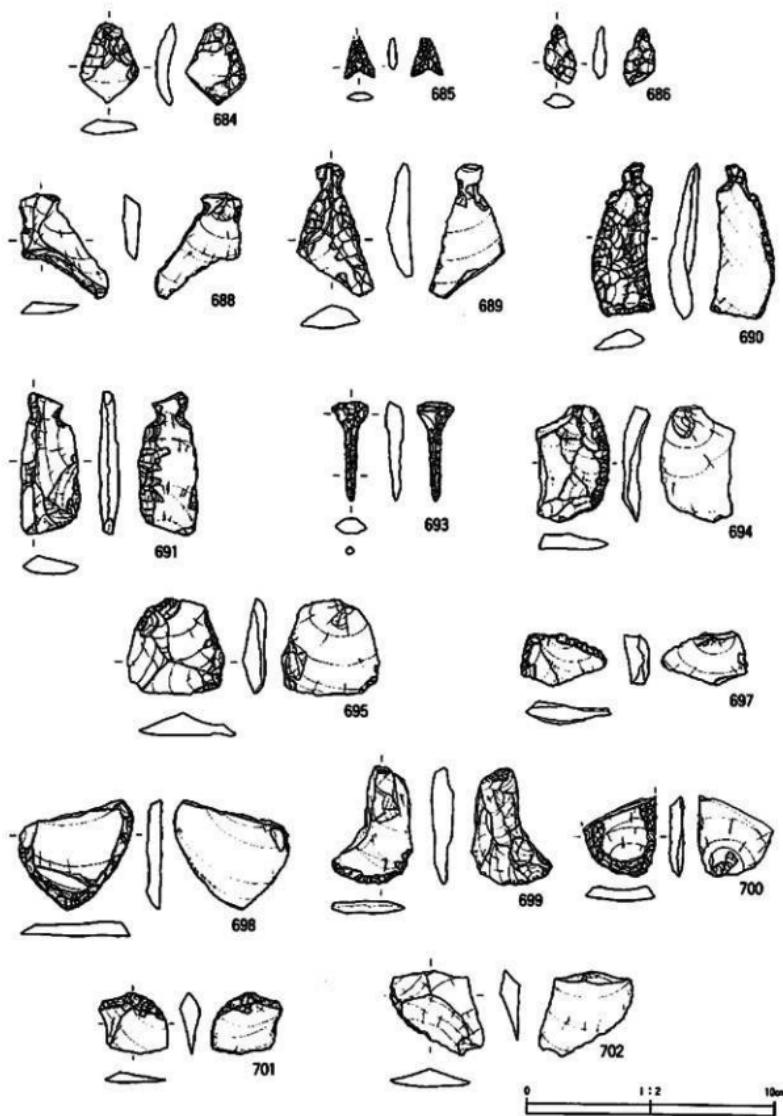
第145図 遺構外出土遺物(土器4)



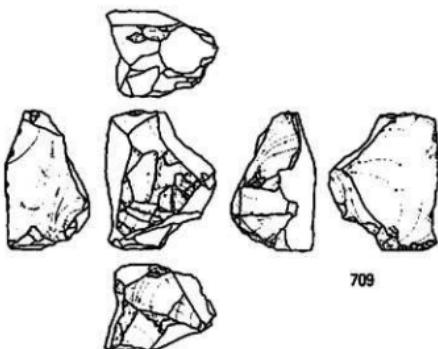
第146図 遺構外出土遺物(ミニチュア形土器・土製品)



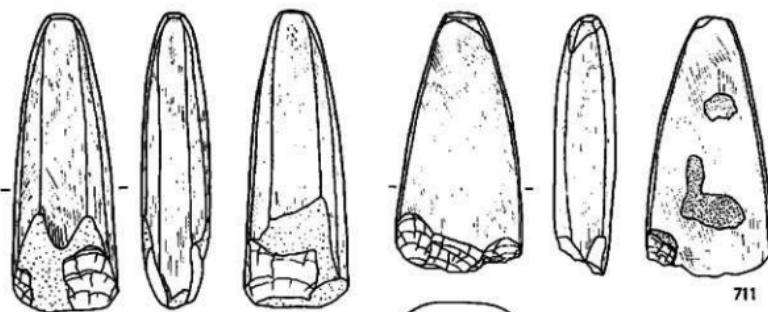
第147図 造構外出土遺物(陶磁器)



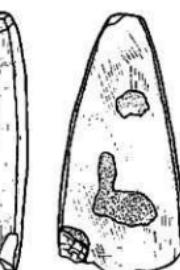
第148図 造精外出土遺物(石器1)



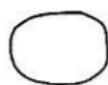
709



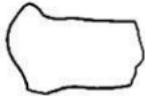
710



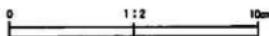
711



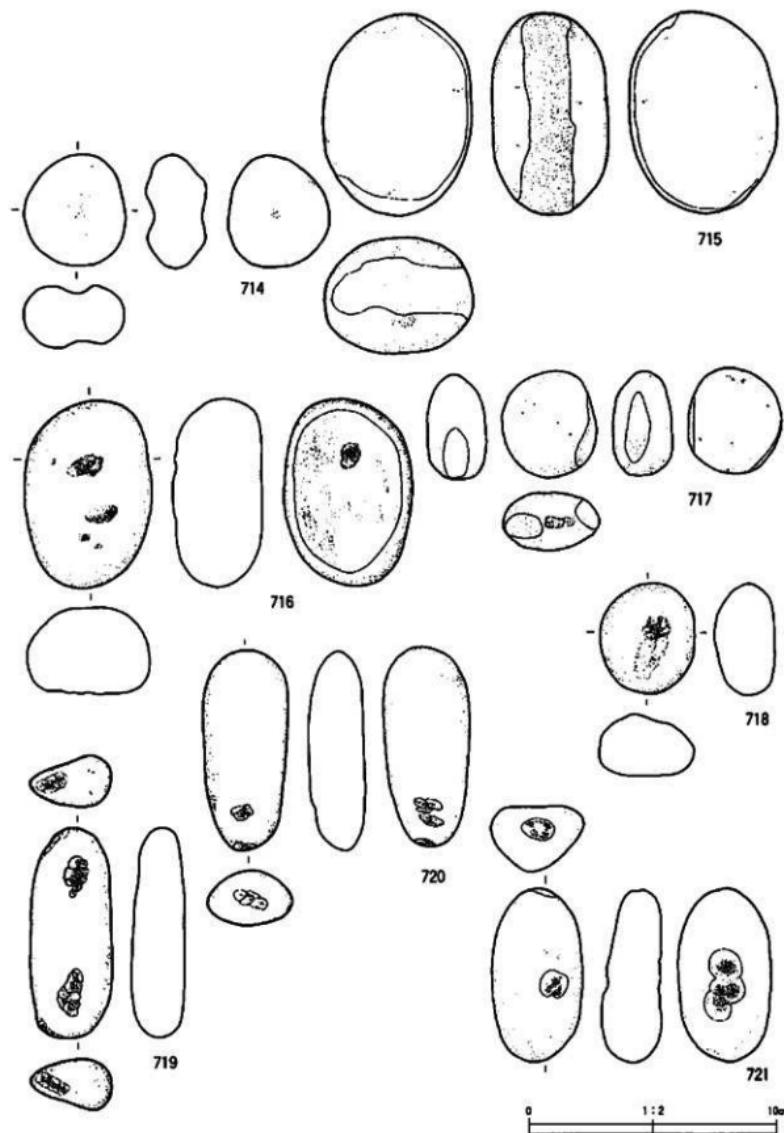
712



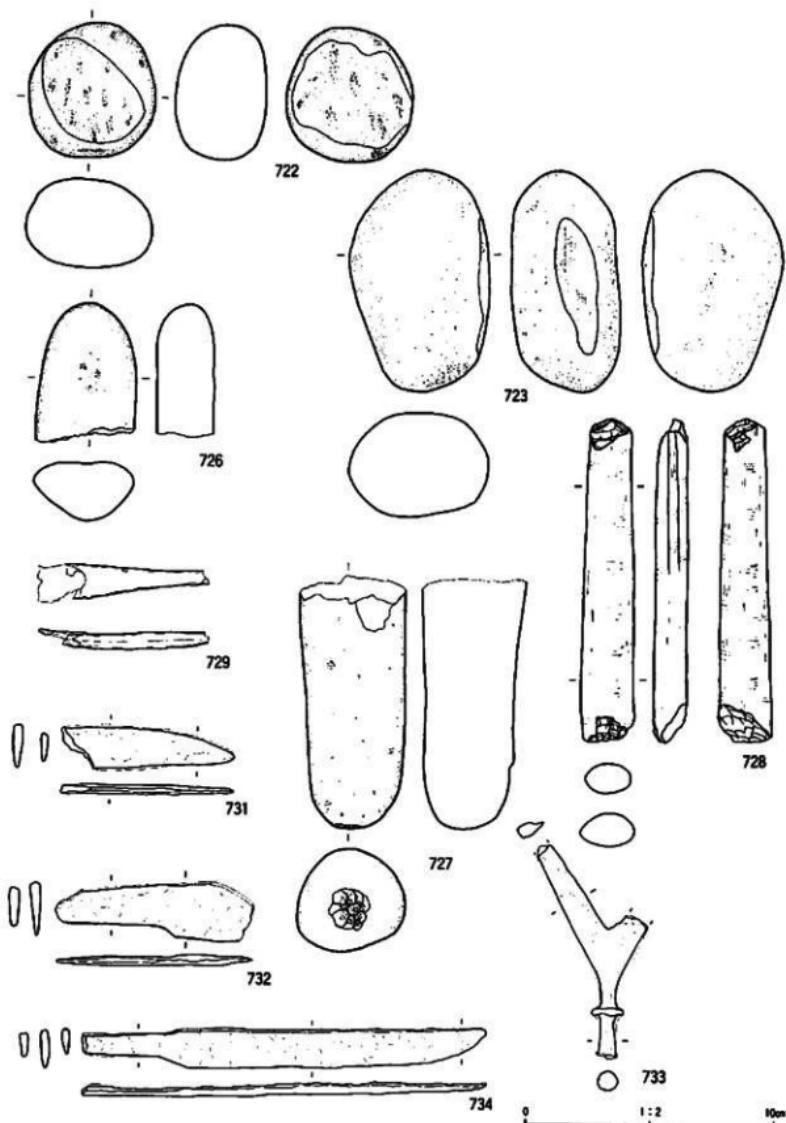
713



第149圖 造橋外出土遺物(石器2)



第150図 造構外出土遺物(石器3)



第151図 遺構外出土遺物(石器4・鉄製品他)

第7表 遺物観察表（土器・ミニチュア形土器）

発掘場所	層位	器種名	残存部位	出土上	文様特征	原体	内面調査	時期	分類	備考
1 1号住	床・床直	深鉢	胴・底	砂粒含む	原体裏面同様	L.R.	ナデ	中期	V	
2 1号住	床	ミニチュア	胴・底	海綿竹針	原体裏面同様	L.R?	ナデ	大木10式	—	外表面赤色地
3 1号住	P 1	深鉢	胴	砂粒含む	原体裏面文を伴う底部による文様崩成	R.L.	ナデ	後期	V	外表面灰化物 な質のみ 海綿
4 1号住	埋土	深鉢	口	沈縫による文様崩成	なし	ミガキ	十輪内 I a	V B		
5 1号住	埋土	深鉢	口	山形口縁、頂部に貼面・沈縫	なし	ミガキ	重久保式期	V A		
6 1号住	2層	深鉢	口・胴	砂粒含む 地文のみ	なし	ミガキ	中期	V	外表面灰化物	
7 1号住	1層	深鉢	胴	海綿竹針 少量	沈縫により文様施文	なし	ナデ	十輪内 I a	V B	
8 1号住	1層	中形深鉢	口	砂粒含む 平縫、口縁部に竹管刺突縫	なし	ナデ	—	V		
9 1号住	2層	中形深鉢	口・胴	砂粒含む 原体裏面同様	なし	ナデ	中期	V?	外表面灰化物	
10 1号住	2層	壺形土器	口・胴	手縫、口縁部にミガキ顯著、口頭部に隆起、横状把手。制版比較的の消褪文	なし	ミガキ	後期	V		
11 1号住	1層	彌形?	体・底	海綿竹針 体部に手縫小沈縫、ミガキ顯著	なし	ミガキ	後期	V	外表面赤色地	
12 1号住	埋土	彌形?	胴	沈縫による文様きず文	なし	ミガキ	後期	V	外表面赤色地	
22 2号住	1～2層	深鉢	口・胴	砂粒少量 原体裏面同様、施文文	なし	ミガキ	中期	V		
23 2号住	1層	深鉢	口・底	沈縫による文様崩成	なし	ミガキ	十輪内 I a	V B		
24 2号住	1～2層	深鉢	胴	極端多量 手縫、羽根状縫	なし	ミガキ	前中期後半	III		
25 2号住	1層	深鉢	口・胴	地文のみ、原体裏面同様	なし	ミガキ	中期	V		
26 2号住	2層	深鉢	胴	砂粒少量 原体裏面同様	なし	ミガキ	後期?	V?	外表面灰化物	
27 2号住	1層	深鉢	口	砂粒少量 口縁部瓦窓縫、沈縫+唇消文	なし	ミガキ	後期	V		
28 2号住	4～7層	深鉢	胴	火炎+竹管刺突縫文	なし	ミガキ	大木10式	V B		
29 2号住	1～2層	深鉢	口	口縁部に施文	なし	ミガキ	中期	V	外表面灰化物	
30 2号住	1層	深鉢	口	施文を呈する2重口縁、ボタン状跡付・沈縫	なし	ミガキ	重久保式期	V A		
31 2号住	1層	深鉢	胴	砂粒含む 沈縫	なし	ミガキ	十輪内 I a	V B		
32 2号住	1層	深鉢	口	砂粒含む 山形口縁・沈縫文	なし	ミガキ	重久保式期	V A		
33 2号住	1層	深鉢	口	沈縫文	なし	ミガキ	十輪内 I a	V B		
34 2号住	1層	ミニチュア	2.5形	砂粒含む 原体裏面同様	なし	ミガキ	中末～後初	—		
36 3号住	床面	ミニチュア	胴・底	砂粒含む 原体裏面同様	なし	ミガキ	中末～後初	—		
37 3号住	埋土	深鉢	胴	砂粒含む 不整な羽根状縫	なし	ミガキ	中期	V	外表面灰化物	
38 3号住	埋土	深鉢	口	手縫、原体裏面同様	なし	ミガキ	中期	V	外表面灰化物	
39 3号住	1層	中形深鉢	口・底	地文のみ	なし	ミガキ	中期?	V		
40 3号住	埋土	ミニチュア	胴・底	地文のみ	なし	ミガキ	中末～後初	—		
50 5号住	床面	深鉢	口～底	砂粒含む 原体裏面同様・唇消文	なし	ミガキ	大木10式	V B	内面灰化物	
51 5号住	埋土	深鉢	胴	砂粒含む	なし	ミガキ	中期	V	内面灰化物	
52 5号住	埋土	深鉢	胴	砂粒含む	なし	ミガキ	中期	V	外表面灰化物	
53 5号住	埋土	ミニチュア	口～底	砂粒含む	なし	ミガキ	中末～後初	—		
54 5号住	埋土	ミニチュア	口	外縫ミガキ顯著	なし	ミガキ	中末～後初	—	内面タール状付着物	
55 6号住	埋土	深鉢	口	唇消文	なし	ミガキ	大木10式	V B		
56 6号住	埋土	ミニチュア	底	砂粒含む 原体裏面同様	なし	ミガキ	中期	—	写真のみ尚載	
59 7号住	P 1	深鉢	口・胴	口縁部施文帯・脇部平化施文帯・縫続文	なし	ミガキ	中期	V		
60 7号住	床面	深鉢	口・底	4重立山形口縁、胴上部に施文孔、脇部唇消文・ビレ状突起	なし	ミガキ	大木10式	V B		
61 7号住	埋土	深鉢	胴	砂粒体	なし	ミガキ	後期	V		
62 7号住	埋土	深鉢	胴	砂粒体	なし	ミガキ	後期	V	内面灰化物	
63 7号住	埋土	深鉢	胴	沈縫	なし	ミガキ	後期	V	外表面赤色地	
69 8号住	剝離段	深鉢	胴	砂粒含む 地文のみ	なし	ミガキ	中期	V	内面焼け跡付	
70 8号住	剝離段	深鉢	胴	砂粒含む 唇消文	なし	ミガキ	中期	V	内面焼け跡付	
71 8号住	剝離段	深鉢	胴	砂粒含む 唇消文	なし	ミガキ	大木10式	V B	内面焼け跡付	

測点No.	出土地点	種類	器種名	残存部数	施上	文様特徴	原体	内面調査	時期	分類	備考
72	8号住 床面	漆抹	口一刷	砂粒合む	原体復元記・縫織文	RL	ナデ	中期	追		
73	8号住 床面	漆抹	刷		硝消織文	LR	ミガキ	大木10式	N.B.		
74	8号住 理土	漆抹	刷	砂粒合む	吹き抜きによる凹凸モチーフ	LR?	ナデ	大木8b	N.F.		
76	9号住 剥	漆抹	刷	砂粒合む	縫糸条	R?	ナデ	後期	V	外面炭化物	
76	9号住 壁下～床	漆抹	口		山形模・沈鏡	なし	ミガキ	後期	V		
77	9号住 壁土	漆抹	刷		筒の一部を巻き付けた原体(付加系)	L	ミガキ	中期～後期	追		
78	9号住 1層	漆抹	刷		縫糸条	L	ミガキ	後期	V		
79	9号住 1層	漆抹	刷	砂粒合む	硝消織文	RL	ナデ	大木10式	N.B.	外面炭化物	
80	9号住 1層	漆抹	口		口部底に深い沈鏡・刷底地文のみ	RL	ミガキ	中期	追	外面炭化物	
87	10号住 床面	漆抹	刷下～底		地文のみ	LR	ナデ	中期	追		
88	10号住 床面	中形漆抹	刷～底		口削底模・刷上部硝消織文	LR	ミガキ	大木10式	N.B.		
89	10号住 床面	中形漆抹	(は)完形		刷底部前縫糸	RL	ナデ	大木10式	N.B.		
90	10号住 床面	中形漆抹	刷～底		地文のみ	LR	ナデ	中期	追		
91	10号住 壁土	漆抹	口経模	砂粒合む	筒の一部を巻き付けた原体文様(付加系)？	LR	ナデ	中期	追		
95	11号住 床面	漆抹	口		硝消織文	LR	ナデ	中期～後期	V?		
96	11号住 床面	漆抹	刷	砂粒合む	吹き抜き・筒の一部による円形文様	RL	ナデ	中期?	N.F.	外面炭化物	
97	11号住 1層	漆抹	刷下～底		地文のみ	LR	ナデ	中期?	追		
98	11号住 1層	漆抹	口		砂粒合む	平絹・口部底模り巻し状・刷底地文のみ	LR	ナデ	中期	追	外面炭化物
99	11号住 1層	漆抹	刷		硝消織文	RL	ミガキ	大木10式	N.B.		
100	11号住 壁土	ミニチュア	口～底	砂粒合む	ナデ	なし	ナデ	中期	—		
101a	12号住 壁土	中形漆抹	口～底		原体復元記・刷上部に細く浅い沈鏡による曲線モチーフ	LR	ミガキ～ナデ	大木10式期	N.B.	101bと同一個体	
101b	12号住 壁土	中形漆抹	口～底		原体復元記・刷上部に細く浅い沈鏡による曲線モチーフ	LR	ミガキ～ナデ	大木10式期	N.B.	101aと同一個体	
102	12号住 P 1	漆抹	刷	砂粒合む	硝消織文	RL	ナデ	大木10式	N.B.		
103	12号住 壁土	漆抹	刷～底		地文のみ	RL	ナデ	中期	追	外面炭化物	
104	12号住 壁土	漆抹	口T		硝消織文	RL	ミガキ	大木10式	N.B.		
105	12号住 壁土	中形漆抹	口経模		平絹・刷底部原体復元記・刷底模	LR	ミガキ	中期	追		
106	12号住 壁土	ミニチュア	刷	砂粒合む	ナデ	なし	ナデ	中期	—		
116	13号住 床面	漆抹	口～刷下	砂粒合む	口部底に5段位の小形突起・刷上部硝消織文・ヒレ状突起	RL	ナデ	大木10式	N.B.	II+12号住床面口部破片と接合	
117	14号住 床面	漆抹	LI～刷下	金雲母	平絹・刷底部代痕	RL	ミガキ	中期	追	床面pot.3-4, 24と同一個体	
118	14号住 床面	漆抹	刷下～底	金雲母	地文のみ	RL	ミガキ	中期	追	床面pot.1-2, 22と同一個体	
119	14号住 壁土	漆抹	刷下～底	砂粒合む	地文のみ	LR	ナデ	中期	追		
120	14号住 壁土	漆抹	底部	砂粒合む	地文のみ	LR?	ナデ	中期	追		
121	14号住 壁土	漆抹	口		II棒筋下巻なミガキ		ミガキ	中期?	N.F.	2頁のみ掲載	
122	14号住 1層	漆抹	口	砂粒合む	硝消織文		ミガキ	中期	N.F.		
123a	15号住 壁土	漆抹	刷		地文のみ	RL	ナデ～ミガキ	中期～後期	追	124bと同一個体	
124b	15号住 壁土	漆抹	口～刷		地文のみ	RL	ナデ～ミガキ	中期～後期	追	124aと同一個体	
125	15号住 1層	中形漆抹	口～底部	金雲母・刷底部骨付	山形模・刷底部底模・沈鏡による区画・刷消織文	RL?	ナデ	重文化期	V.A		
127	16号住 1層	漆抹	口～刷		2重口縫・刷底部原体復元記	LR	ナデ	後期?	追		
128	16号住 壁土	漆抹	口～刷	砂粒合む	平絹・刷底部原体復元記	LR	ナデ～ミガキ	中期	追		
129	16号住 壁土	漆抹	口～刷	平絹・刷底部原体復元記	LR	ミガキ	中期	追			
130	16号住 壁土	漆抹	刷	砂粒合む	地文・画面ループ付原体压痕	LR	ナデ	中期	追		

区号	出土位置	場所	器種名	既存部位	新土	文様特徴	埋作	内面調査	時期	分類	圖号
131	16号住	州北	漆钵	刷~底	地文・絆縫文	LR	ナデ~ミガキ	中期	通		
132	16号住	州北	漆钵	刷下~底	刷縫合む 底部地文のみ・底部木座痕	LR	ナデ	中期?	通		
133	16号住	州北	漆钵	刷下~底	地文のみ	LR	ナデ	中期?	通		
134	16号住	1刷	漆钵	口	刷縫合む 底部地文のみ	なし	ナデ~ミガキ	後期?	V?		
135	16号住	1刷	漆钵	刷	刷縫合む	LR	ナデ	中期	IV		
136	16号住	州北	漆钵	口~刷	刷縫合む 地文のみ	LR	ナデ	中期	通	外縁炭化物	
137	16号住	州北	漆钵	口	口縫部に竹管突起列	LR	ナデ	後期?	V?		
138	16号住	州北	漆钵	口	口縫部に虫歯合せつ。	LR	ナデ	中期	IV?		
139	16号住	州北	漆钵	口~刷	刷縫合む 刷状把手・刷縫合文	RL	ミガキ	大木10式	IVB		
140	16号住	州北	漆钵	口~刷	平縫・地文のみ	LR	ナデ~ミガキ	中期	通		
141	16号住	州北	漆钵	口	口縫部に竹管突起列	LR	ナデ	後期	V		
142	16号住	2~4刷	漆钵	口~刷	所消文	RL	ミガキ	中期?	IV?		
143	16号住	州北	漆钵	口	口縫部に竹管突起列刷縫合文	LR	ナデ	中期?	IV?		
144	16号住	州北	漆钵	刷	刷状把手・ミガキ丁寧	なし	ミガキ	中期	IV		
145	16号住	州北	漆钵	口	平縫・刷縫合文のみ	RL	ナデ	中期	通		
146	16号住	7刷	漆钵	口~刷	刷縫合む 口縫部平縫・刷縫合文	RL	ナデ	大木10式	IVB		
147	16号住	州北	中形漆鉢	口~刷	平縫・刷縫合文	LR	ミガキ	中期	通	内面焼付着	
148	16号住	州北	中形漆鉢	刷下~底	地文のみ	LR	ナデ	中期	通		
149	16号住	州北	中形漆鉢	刷下~底	地文のみ	LR	ナデ	中期	通	輪積み直頭着	
150	16号住	州北	中形漆鉢	刷~底	地文のみ	LR	ナデ	中期	通		
151	16号住	州北	中形漆鉢	口~刷	原体復元	LR	ナデ	中期	通	内外面ともに炭化物付有	
152	16号住	州北	中形漆鉢	口~刷	刷縫合む 口縫部に沈縫	RL	ナデ	後期?	V?		
153	16号住	7刷	中形漆鉢	口~刷	口縫部に竹管突起列	LR	ナデ	後期?	V?	方言のみ複縫	
154	16号住	2~4刷	漆钵	刷	刷縫合む 地文のみ	LR	ナデ	後期?	通	外縁炭化物付着	
155	16号住	州北	ミニチュア	口~底	地文のみ	LR	ナデ	中期	—	円筒窯付着・輪積み直頭着	
156	16号住	1刷	ミニチュア	口~底	地文のみ	LR	ナデ	中期	—	外縁焼付着	
157	16号住	州北	ミニチュア	刷下~底	原体復元記・地文のみ	LR	ナデ	中期	—		
158	16号住	州北	ミニチュア?	口	成袋口縫・口縫に沿うような竹管突起による円形モチーフ・粘結物質	なし	ナデ	後期	—		
159	16号住	州北	ミニチュア?	口	口縫部内面にタール状付着物	なし	ナデ	中末~後期	—		
160	16号住	州北	ミニチュア?	口~刷	地文のみ	RL	ナデ	中末~後期	—		
161	16号住	州北	ミニチュア?	口~刷	地文のみ	LR?	ナデ	中末~後期	—		
162	16号住	州北	ミニチュア?	完形	刷縫合む	なし	ナデ	中末~後期	—		
163	16号住	州北	ミニチュア?	底	金合叶柄 少	ミガキ・内面炭化物吸着	なし	ミガキ	中末~後期	—	内外面赤色塗彩
164	16号住	1刷	ミニチュア?	口~底	刷縫合む ナデ~ミガキ 内面炭化物吸着	なし	ナデ~ミガキ	中末~後期	—		
165	16号住	州北	ミニチュア?	はげ穴形	刷縫合む 地文のみ	LR	ナデ	中末~後期	—		
166	16号住	州北	ミニチュア?	口~底	刷縫合む 地文のみ	LR	ナデ	中末~後期	—		
167	16号住	州北	ミニチュア?	口~底	ナデ	なし	ナデ	中末~後期	—	内面炭化物	
168	16号住	州北	ミニチュア?	刷	原体復元記	LR	ナデ	中末~後期	—		
169	16号住	州北	ミニチュア?	口	ミガキ	なし	ナデ~ミガキ	中末~後期	—		
170	16号住	州北	漆钵	刷	沈縫	なし	ナデ	後期?	V?	内外面赤色塗彩	
171	16号住	州北	漆钵	口~刷	金合叶 平縫・原体復元記	RL	ナデ	中期	通		
172	16号住	州北	漆钵	刷	崩削し開文	RL	ナデ	大木10式?	IVB?	方言のみ複縫	
200	17号住	州北~底	漆钵	口~刷	原体復元記	LR	ミガキ	中期	通		

標高	出土地点	種類	岩場名	既存部数	出土	文 件 参 照	原 体	内面調査	時 期	分類	備 考	
201	17号住	陶器遺	深井	口~胴	砂粒含む 地文のみ	L R	ナデ~ミガキ	中期	V	外因炭化物		
202	17号住	陶器遺	深井	胴	砂粒含む 地文のみ	L R	ナデ	大木10式	V B			
203	17号住	陶器遺	深井	口	砂粒含む 口部部に2列の竹管刺突	R L	ミガキ	後期	V	外因炭化物		
204	17号住	陶土	深井	胴下~底	砂粒含む 地文のみ	L R	ナデ	中期	V			
205	17号住	陶土	深井	胴	金雲母少 量	3本1組の隔壁による文様構成	R L	ナデ	後期	V	外因炭化物	
207	18号住	骨	深井	胴~底	地文のみ	L R	ナデ	中期	V			
208	18号住	床面	深井	胴	粗砂含む 原体表面剥離・削上部に削削繩文	R L	ナデ	大木10式	V B	209と同一個体		
209	18号住	床面	深井	胴	粗砂含む 原体表面剥離・削上部に削削繩文	R L	ナデ	大木10式	V B	208と同一個体		
210	18号住	陶土	深井	底	内外面ミガキ剥落	なし	ミガキ	後期	V	内外面赤色地帯		
211	18号住	陶土	深井	胴	内面ミガキ剥落	なし	ミガキ	大木10式?	V B?			
212	19号住	陶器遺	深井	胴下~底	砂粒含む 削削仕様回転・底部木筋痕(横?)	R L	ナデ	中期?	V			
213	19号住	床面	ミニチュア	完形	金雲母	ナデ	なし	ナデ				
214	19号住	1層	深井	(1)完形	金雲母	南口様・副部削削繩文・ヒレ状突起	L R	ミガキ	大木10式	V B		
215	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母	口様部山形で大きく外反、ヒレ状突起付、諸修孔あり・副部削削繩文	R L	ミガキ	重久保式周	V A		
216	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母	口様部山形で大きく外反、ヒレ状突起付・副部削削繩文	R L	ミガキ	重久保式周	V A	写真のみ掲載	
217	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	平根・副部原体縦回転	L R	ナデ~ミガキ	中期?	V		
218	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	平根・副部地文のみ	R L	ナデ	中期?	V		
219	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母	平根・副部地文のみ	R L	ナデ	後期	V		
220	19号住	1層	深井	胴下~底	底部木筋痕(横?)	R L	ナデ	中期?	V			
221	19号住	1層	深井	胴下~底	金雲母	底部側面底	R L	ナデ	後期?	V		
222	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	地文のみ	L R	ナデ	中期	V		
223	19号住	陶土	深井	口~胴	口様部山形で大きく外反・ヒレ状突起付・副部削削繩文	R L	ナデ~ミガキ	重久保式周	V A	写真のみ掲載		
224	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母	口様部山形・座沈窓による底堅化モチーフ	R L?	ナデ	重久保式周	V A		
225	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	平根・副部地文のみ・副部原体縦回転	R L	ナデ~ミガキ	中期	V	外因炭化物	
226	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	結合部	L	ナデ	中期?	V		
227	19号住	1層	深井	口~胴	金雲母少 量	平根・原体縦回転	R L	ナデ	中期	V	外因炭化物	
228	19号住	陶土	深井	口	口底部に附着付	R L	ナデ	中期	V	写真のみ掲載		
231	20号住	床面	深井	口~胴	砂粒含む 平根	R L	ナデ	中期	V			
232	21号住	骨	深井	口~胴	砂粒含む 平根・副部地文のみ・原体縦回転	L R	ナデ	中期	V			
233	21号住	骨	深井	胴	砂粒含む 副部地文のみ・原体縦回転	R L	ナデ	中期	V			
234	21号住	陶土	圓形?	口~底	砂粒含む 口部部付近2箇所に凹孔あり	なし	ナデ	中期				
236	22号住	床面	中形圓井	口~胴	地文のみ	L R	ミガキ	中期	V			
237	22号住	1層	深井	口~胴	平根・副部削削繩文	L R	ナデ	大木10式	V B			
238	22号住	2層	深井	胴	砂粒含む 平根+複施文	L R	ナデ	中期	V			
239	22号住	陶土	深井	胴	光磨地文	L R	ナデ	大木10式	V B	外因炭化物・写のみ		
240	22号住	1層	深井	口~胴	砂粒含む 原体縦回転	L R	ナデ	中期	V			
243	24号住	骨	深井	口	原体縦回転・絞繩文	R L	ナデ	中期	V			

発見No.	出土地点	層位	器物名	既存部位	地 土	文 件 特 徴	型 体	内面調査	時 期	分類	備 考
244	24号住	埋土	漆鉢	口	砂粒含む	二重口縁・貼窓	LR	ナデ	後期	V	
245	24号住	埋土	漆形土器	頭	砂粒含む	沈窓	なし	ナデ	十額内 I a	VB	247と同一個体
246	24号住	埋土	漆形土器	頭	砂粒含む	沈窓	なし	ナデ	十額内 I a	VB	246と同一個体
247	25号住	埋土	漆鉢	口～脚	砂粒含む	口縁波状突起・竹管刺文	LR	ナデ	後期	V	内外面炭化物
248	25号住	埋土	漆鉢	口～脚	砂粒含む	平縁・地文のみ	RL	ミガキ	中頃	Ⅳ	
249	25号住	埋土	漆鉢	頭	砂粒含む	頭部有唇圓文	RL	ナデ	大木10式	NB	内面炭化物
250	25号住	埋土	漆鉢	頭	砂粒含む	頭部有唇圓文	RL	ナデ～ミガキ	大木10式?	NB?	外側炭化物
251	25号住	JR道	ミニチュア	空形	砂粒含む	地文有唇圓文・沈窓	L	ナデ	大木10式		
255	25号住	P10	漆鉢	口～脚	砂粒含む	昭和初期文・レ状突起	LR	ナデ	大木10式	VB	
256	25号住	P10	漆鉢	口～脚		山形口縁・刷毛有唇圓文	LR	ミガキ	中頃	Ⅳ	
257	25号住	P20	漆鉢	口～脚	砂粒含む	平縁・口縁波状突起・地文のみ	LR	ナデ	中頃	Ⅳ	
258	27号住	4階	漆鉢	口～脚		平縁・原作復刻	LR	ナデ	中頃	Ⅳ	30号住4層北器片と複合
259	27号住	埋土	漆鉢	頭	砂粒含む	地文のみ	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	
260	27号住	1層	漆鉢	口	金芸母	刷毛圓文	RL	ナデ	後期	V?	
261	27号住	1層	漆鉢	口		細波旋による曲線モチーフ	RL?		中頃	Ⅳ	
262	27号住	埋土	漆鉢	口～脚		地文のみ	LR	ナデ	中頃	Ⅳ	
263	27号住	6階	中形漆鉢	口～底		平縁・地文のみ	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	30号住東面出土土器片と複合
264	27号住	4階下	中形漆鉢	頭下～底		地文のみ	LR?	ナデ	中頃	Ⅳ	30号住前庭部土器片と複合
271	28号住	漆鉢	口～底			平縁・原作復刻	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	
272	28号住	床修理設	漆鉢	口～脚	砂粒含む	平縁・頭部有唇圓文	LR	ナデ	大木10式	VB	
273	28号住	埋土	漆鉢	口～脚		口縁波状・口～脚部に比較による曲線モチーフ	なし	ナデ	十額内 I a	VB	
274	28号住	埋土	漆鉢	口		刷毛圓文	RLR?	ミガキ	大木10式	VB	
275	28号住	埋土	漆鉢	口～脚	砂粒含む	平縁・脚部原作復刻・輪條文	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	
276	28号住	埋土	漆鉢	口		平縁・頭部地文のみ	LR	ナデ	中頃	Ⅳ	277ののみ異色
277	28号住	埋土	漆鉢	口		波狀口縁・棒状工具により頭部をM字形に形成・頭部に竹筋刺繍	なし	ミガキ	後期?	V?	
278	28号住	埋土	漆鉢	頭	砂粒含む	棒状把手	なし	ミガキ	後期?	V?	
279	28号住	埋土	漆鉢	頭		頭部に施苦・刷毛有唇圓文・格仔作	R	ミガキ	後期	V	
280	28号住	埋土	漆鉢	口～脚	粗砂含む	頭部地文のみ	LR	ナデ	中頃	Ⅳ	
281	28号住	埋土	漆鉢	頭	粗砂含む	頭空・沈窓	RL?	ナデ	後期	V	
282	28号住	埋土	漆鉢	口～脚	粗砂含む	平縁・口縁部ミガキ・頭部有唇圓文・地文のみ	RL	ミガキ	中頃	Ⅳ	
283	28号住	埋土	漆鉢	口		口縁部に竹筋刺繡・刷毛有唇圓文	RL	ミガキ	中頃?	N?	
284	28号住	中形漆鉢	口～脚			原体復元	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	
285	28号住	埋土	中形漆鉢	頭～底		地文のみ。底部小窓底	L	ナデ	中頃	Ⅳ	
286	28号住	埋土下	ミニチュア	金芸母少 益	ナデ		—	ナデ	中末～後初	—	
288	30号住	漆鉢	頭	地文のみ		LR	ナデ	中頃	Ⅳ	内外面焼け剥離	
294	30号住	か	漆鉢?	口	砂粒含む	路面焼残	なし	ナデ	中頃?	Ⅳ	方舟のみ複数
295	30号住	か	漆鉢?	口		原体復元	LR	ミガキ	中頃	Ⅳ	内外面炭化物
296	30号住	か	漆鉢	口		口縁ミガキ・頭部原作復元	RL	ミガキ	中頃	Ⅳ	内外面炭化物
297	30号住	か	漆鉢	口	砂粒含む	口縁部ミガキ・頭部原作復元	LR	ナデ～ミガキ	中頃	Ⅳ	D 5 299と同一個体
298	30号住	中面	漆鉢	口	砂粒含む	地文のみ	RL	ミガキ	中頃	Ⅳ	298と同一個体
299	30号住	中面	漆鉢	頭	砂粒含む	地文のみ	RL	ナデ	中頃	Ⅳ	D 6 外側炭化物
300	30号住	床面	漆鉢	口		二重口縁	LR	ミガキ	後期?	Ⅳ	D 6 外側炭化物

地名	出土地点	種類	形範名	残存部位	断面	大様特徴	取手	内部状態	時期	分類	備考
301	30号住	床面	漆形土器	刷		地文のみ	L R	ナデ	中期	追	
302	30号住	P 4	漆钵	刷	砂粒合む	刷部底付縦縫合	L R	ナデ	中期	追	内外面炭化物
303	30号住	埴土	漆钵	刷		磨消し模様	L R	ナデ	六木10式	前B	301と同一側面・左のみ
304	30号住	埴土	漆钵	口～刷		平縫・刷部底付縦縫	L R	ナデ	六木10式	前B	303と同一側面
305	30号住	埴土	漆钵	刷		地文+刷部底付縦縫	R L	ナデ-ミガキ	中期-後期	追?	
306	30号住	1層	漆钵	口	砂粒合む	口縁部に竹管削刃跡	なし	ナデ	中期?	追?	写真のみ掲載
307	30号住	1層	漆钵	刷	砂粒合む	地文+刷縫	R L	ミガキ	中期?	追?	
308	30号住	1層	漆钵	口		地文のみ	L R	ミガキ	中期	追	
309	30号住	1層	漆钵	口～刷	金云母少 量	原体底付縫+被縫文	R L	ナデ	中期	追	
310	30号住	1層	漆钵	刷		地文のみ	L R	ナデ	中期-後期	追	写真のみ掲載
311	30号住	ミニチュア	底	砂粒合む	ナデ		なし	ナデ	中期-後期	追?	内外面底付縫形・内面 ダール底付縫者
321	32号住	炉焼設	漆钵	刷～底	砂粒合む	底付縫+底部木魚痕(後?)	なし	ナデ	中期?	追?	内面焼け斜行縫者
322	32号住	炉焼設	漆钵	刷	砂粒合む	底付縫+被縫文	なし	ナデ	中期?	追?	内面焼け斜行縫者
323	32号住	床面	漆钵	口～刷	金云母	平縫・地文のみ	R L	ミガキ	中期	追	外表面炭化物
324	32号住	床面	漆钵	口	金云母	波状口縫・口縁部に沿う原体押圧痕・口縁部に複位の 貼跡	なし	ナデ	後期	V	
325	32号住	埴土	中形漆钵	刷下～底	金云母少 量	地文のみ	L	ナデ	中期?	追	
327	33号住	炉焼設	漆钵	口～底	砂粒合む	刷部地文のみ・底部刷付縫	R L	ナデ	中期?	追	内面焼け斜行縫者
328	33号住	炉	漆钵	刷	金云母少 量	地文のみ	R L?	ミガキ	中～後期	追	写真のみ掲載
329	33号住	1層	漆钵	刷～底	刷部底付縫	によりモチーフを描く・底部木魚痕(後?)	なし	ミガキ	十櫻内 1 a	V B	
330	33号住	1層	漆钵	刷	砂粒合む	地文底付縫	なし	ナデ	後期	V	
331	33号住	1層	漆钵	口	口縁部に墨体押圧痕		なし	ナデ-ミガキ	後期?	V?	写真のみ掲載
332	33号住	埴土	漆钵	口	二重底付縫による変形「不文」		なし	ナデ	地羽 A?	V?	写真のみ掲載
333	34号住	炉焼設上 部	漆钵	刷～底	刷部地文のみ・底部刷付縫	R L	ナデ	中期	追		
334	34号住	炉	漆钵	刷	金云母少 量	箱条体	L	ナデ	後期	V	
335	34号住	2層	漆钵	刷	金云母少 量	箱条体	L	ナデ	後期	V	
336	34号住	1層	漆钵	口～刷	二重口縫・口縁部にジグザグ状の原体押圧痕・刷部は 原体底付縫+被縫文	R L	ミガキ	後期	V	外表面炭化物多量	
337	34号住	1層	漆钵	口	金云母	原体底付縫	R L	ナデ	後期?	追	
338	34号住	1層	小形漆鉢	口～刷	砂粒合む	刷条体	L	ナデ	後期?	追	内面炭化物
339	34号住	埴土	漆形土器	刷	砂粒合む	底付縫	なし	ナデ-ミガキ	後期	V	
343	36号住	床面	漆钵	刷～底	地文+底付縫・底部刷付ケズリ、穿孔?	R L	ナデ	中期?	追?		
344	36号住	炉	漆钵	口～刷	平縫・被縫文	R L	ナデ	中期	追		
345	36号住	1層	漆钵	刷～底	地文のみ	R L - L R	ナデ	中期	追		
346	36号住	1層	漆钵	口	金云母少 量	波状口縫・口縁部に二本の縫合+贴跡	なし	ナデ	後期	V	
317	36号住	1層	漆钵	刷	金云母少 量	箱条体	L	ナデ	後期	追	
318	36号住	1層	ミニチュア	金云母少 量	ナデ	-	ナデ	中～後期	-		
319	37号住	埴土	漆钵	刷～底	刷部地文のみ・底部刷付縫	R L	ナデ-ミガキ	中期	追		

区画	土地名	等級	割合名	内面部位	地土	文様・形質	原体	内面調査	時期	分類	番号	
350	37号住	理土	深井	口~刷	金雲母少 量	原体擬似板・地文のみ	LR	ナデ	中期	Ⅳ	写真のみ掲載	
351	37号住	理土	ミニチュア	口~底	砂粒含む	ナデ	なし	ナデ	中期~後期	—		
352	37号住	理土	ミニチュア	底	刷下端部ナデ・底部網代痕	なし	ナデ	中期~後期	—			
353	38号住	理土	深井	ほほ完形	砂粒含む	平様・網代地文のみ	RL	ナデ	中期	Ⅳ		
354	38号住	理土	深井	刷~底	比較による区分、底消褪文、底轍・底部網代痕	RL	ナデ~ミガキ	新久保式期	V A	内外面模化物付着		
355	38号住	理土	深井	口~刷	粗砂含む	8号底山形口目・刷底比較による区分、底消褪文	LR	ナデ	新久保式期	V A		
356	38号住	理土	深井	刷~底	砂粒含む	平様・底部擬似板・棘葉文	RL	ミガキ	中期	Ⅳ		
357	38号住	理土	深井	刷~底	砂粒含む	地文のみ	LR	ナデ	中期	Ⅳ		
358	38号住	理土	深井	刷~底	砂粒含む	別部地文のみ・底部網代痕	LR	ミガキ	中期	Ⅳ		
359	38号住	2・3刷	深井	刷	金雲母少 量	底消褪文・底轍	RL	ナデ	後期	V		
360	38号住	理土	深井	口~刷	砂粒含む	原体擬似板	LR	ナデ	中期	Ⅳ		
361	38号住	理土	深井	刷	金雲母	地文+枕轍	LR	ナデ~1ガキ	後期	V		
362	38号住	理土	深井	口	口絞部山形、頂部に粘土貼付	山形の二重口形・頂部にボタン状跡付け・東下する隙	LR?	ミガキ	中期?	IV?		
363	38号住	理土	深井	口	砂粒含む	山形の二重口形・頂部にボタン状跡付け・東下する隙	LR	ナデ	後期	V	361と同一個体	
364	38号住	理土	深井	口	砂粒含む	山形の二重口形・頂部にボタン状跡付け・東下する隙	LR	ナデ	後期	V	365と同一個体	
365	38号住	理土	深井	口	砂粒含む	二重口形	RL	ナデ~1ガキ	後期	V		
366	38号住	理土	小品深井	口~刷	砂粒含む	地文のみ	L	ナデ	中期?	Ⅳ		
370	1号土坑	理土	深井	口~底	粗砂含む	平様・網代地文のみ・底部網代痕	RL	ナデ	中期	Ⅳ		
373	4号土坑	直削	ミニチュア	完形	砂粒含む	ナデ	なし	ナデ	内面タルル状付着物?	—		
374	15号土坑	理土	深井	刷	砂粒含む	底消褪文	RL	ナデ	中期	Ⅳ		
582	B B 4 c	直削	深井	口	口絞部斜刺・先端文	—	—	—	早期	IA		
583	B B 4 e	直削下	深井	刷	柔韌文・爪形文	なし	ナデ~ミガキ	早期	IA			
584	B B 3 c	直削	深井	刷	柔韌文	—	ナデ~ミガキ	早期	IA			
585	B B 4 c	直削	深井	刷	柔韌文	—	ナデ~ミガキ	早期	IA			
586	B B 5 c	直削	深井	刷下	砂粒含む	笠面丁字なみミガキ	なし	ナデ~ミガキ	早期	IA		
587	B B 4 c	直削下	深井	刷	砂粒含む	貝紋御舞文・押し引き文	且数	ナデ	早期	IB		
588	B B 2 d	直削	深井	刷	且数御舞文・平行沈幅	且数	ナデ	早期	IB			
589	B B 1 e	直削	深井	口~刷	帆織多底	表裏織文	LR 0多	LR	早明後~末	II		
590	B B 3 c	複乱	深井	口	帆織多底	表裏織文	LR 0多	LR (付加名)	早明後~末	II		
591	B B 2 b	直削下	深井	刷	帆織多底	表裏織文	LR	LR	早明後~末	II		
592	B B 3 b	直削	深井	刷	帆織多底	表裏織文	RL	RL	早明後~末	II		
593	B B 3 d	直削下	深井	刷	帆織多底	表裏織文	RL?	RL?	早明後~末	II		
594	B B 3 d	直削	深井	刷	帆織多底	表裏織文	RL 0多	RL?	早明後~末	II		
595	B B 3 d	直削	深井	刷	帆織多底	表裏織文	LR 0多	不明	早明後~末	II		
596	B B 3 d	複乱	深井	刷	帆織多底	表裏織文	不明	不明	早明後~末	II		
597	B D 4 d	直削	深井	刷	帆織多底	39状織文	LR - RL 0多	ナデ	前期初期	III		
598	B B 2 d	直削中	深井	刷	砂粒含む	比段	LR	ナデ	大木8号?	IV?		
599	B C 1 a	直削上	深井	刷	砂粒含む	刷底部に発沈織による縮縫の凹肉、底消褪文	LR	ナデ	大木9式	VA		
600	I C 5 e	直削	深井	口~刷	砂粒含む	底消褪文	RL	ナデ	大木10式	VB		
601	I C 7 b	直削	深井	口~刷下	砂粒含む	甲様、口脇部に無文帯・刷底部沈縫+底消褪文、ミガキ	LR?	ミガキ	大木10式	VB		
602	I C 5 j	直削	深井	口~刷	砂粒含む	口絞部波状、山形小突起・刷底部沈縫+底消褪文、ヒレ状突起	RL	ナデ~1ガキ	大木10式	VB		

地名	出土場所	層位	断面名	地質	文様	形	内面調査	時期	分類	圖号	
603	I C 4 f	Ⅲ層	深井	口	口縁部幾やかな波状・断面横文	LR	ミガキ	大木10式	N B		
604	I C 4 f	Ⅲ層	深井	口	断面横文・ミガキ丁寧	RL	ミガキ	大木10式	N B	外面炭化物	
605	I C 7 f	Ⅲ層上	小形深井	口～閉	口縁部小波状・断面横文	RL	ミガキ	大木9式?	N A ?		
606	I C 8 a	Ⅲ層	深井	口～閉	断面横文	RL	ミガキ	大木9式?	N A ?		
607	I C 6 g	Ⅲ層下	深井	閉	砂粒含む 断面横文	RL R?	ナデ	大木10式?	N B ?	外面炭化物	
608	I C 3 g	Ⅲ層	深井	口	口縁部に円形の範囲1断面横・断面横文	LR	ミガキ	中期	N	内外炭化物	
609	I C 8 i	Ⅲ層	深井	口	口断感に竹割裂空窓・断面横文	LR	ミガキ	中期	N		
610	I C 1 c	Ⅲ層下	深井	口	粗砂含む 文	RL	ミガキ	後期	V	外面炭化物	
611	I C 7 j	Ⅲ層	砂形土器	口～閉	比較	なし	ミガキ	後期	V		
612	I C 3 g	Ⅲ層	深井	口	金糸井 断面横文・ボタン状跡付	LR	ナデ	後期	V		
613	B B 3 a	カララン	深井?	口	金糸井 口断感により肥厚・断続口桂	LR	ナデ	後期	V		
614	文化遺ト	I層	深井	閉	砂粒含む 斜線による横文	なし	ナデ-ミガキ	後期	V		
615	I C 6 d	Ⅲ層下	深井	口	粗砂含む 波状口桂・重唇より肥厚筋が底下	なし	ナデ	後期	V		
616	I C 4 i	Ⅲ層?	深井	閉～底	断面下平外輪ケズリ・平行比較	なし	ナデ	後期	V		
617	I C 2 f	Ⅲ層	深井	閉	金糸井含む 亂断跡付・ミガキ頭若	RL	ナデ-ミガキ	重久保式期	V A	外面炭化物	
618	I C 1 a	Ⅲ層上	深井	頭	砂粒含む 断面に3本の隆起線・崩部に斜行文	RL	ミガキ	後期	V		
619	I C 3 f	Ⅲ層上	深井	口	砂粒含む 金糸井含むごく少	山形口桂・口縁部文様帶に隆起による方形モチーフ	RL	ミガキ	後期	V	内外炭化物
620	I B 2 i	Ⅲ層中	深井	閉	金糸井少	隆起	RL?	ナデ	後期	V	外面炭化物
621	I B 8 d	Ⅲ層	砂形土器	閉	砂粒含む 外面ミガキ丁寧・比較	なし	ナデ	後期?	V?		
622	I C 2 d	Ⅲ層上	深井	口	口断面発比較により肥厚・崩部平行比較・断面横文	LR	ミガキ	後期	V		
623	I C 5 d	Ⅲ層F	砂形土器	口	口断感に肥厚・口縁部に文様含む	なし	ミガキ	後期	V		
624	I C 5 d	Ⅲ層F	深井	口	口断感に大波状・重唇による長軸を持つ。	RL	ミガキ	後期	V		
625	I C 7 d	Ⅲ層	深井	口	口断感小波状・口縫部平行比較	RL	ミガキ	後期	V		
626	I C 2 e	Ⅲ層	台付甕	底	崩下部地文のみ・ミガキ・崩部比較過る	RL?	ミガキ	後期	V	外面炭化物吸着	
627	I B 3 j	Ⅲ層上	深井	閉上	砂粒含む	RL	ミガキ	生前中期	V A	外面炭化物	
628	I C 5 e	Ⅲ層	砂形土器	口～閉	断面横文	LR	ナデ-ミガキ	生前中期	V B		
629	I C 4 i	Ⅲ層下	深井	閉	砂粒含む 环状横文	LR - RL	ナデ	生前中期?	V A		
630	I B 2 j	Ⅲ層上	深井	口～閉	金糸井少 地文のみ	RL	ミガキ	中期	V		
631	I C 8 f	Ⅲ	深井	口～閉	原体断面付・横横文	RL	ミガキ	中期	V		
632	I C 5 j	Ⅲ	深井	口～閉	原体断面付・横横文	LR	ミガキ	中期	V		
633	ひょうさ	-	深井	口	原体断面付	RL	ミガキ	中期	V		
634	式削T 3	Ⅲ層上	深井	口～閉	砂粒含む 二重口桂・崩部横状	L	ナデ-ミガキ	後期	V	外面炭化物	
635	I B 9 d	Ⅲ層	深井	口～閉	砂粒含む 二重口桂付・原体断面付	RL	ナデ	中期	V		
636	I C 6 e	Ⅲ層	深井	口	粗砂含む 横横文	L	ナデ	中期?	V	外面炭化物	
637	I C 8 f	Ⅲ	深井	閉～底	地文のみ	LR	ミガキ	中期	V		
638	I C 8 f	Ⅲ	深井	口	粗砂含む 断面横	RL?	ナデ	中期	V		
639	I C 5 j	Ⅲ	深井	閉～底	粗砂含む 地文のみ	RL	ナデ	中期	V		
640	I C 3 g	Ⅲ層下	ミニチュア	口～閉	口断面横やかな波状	LR	ナデ-ミガキ	中末～後期	—		
641	式削T 2	I層	ミニチュア	土器～底	砂粒含む ミガキ	なし	ミガキ	中末～後期	—		

No.	出土場所	材質	器種名	残存部位	胎土	文様特徴	墨体	内面調査	時期	分類	備考
642	I C 8 g	日輪	ミニチュア	底	無	無文・ミガキ丁寧	L	ミガキ	中期末～後期	一	内面灰化物吸着
643	I C 2 f	日輪	ミニチュア	底	砂粒含む	縄の一周を巻き付いた原体(付加系)・底部椭円形	R L	ナデ～ミガキ	中期末～後期	一	
644	I C 4 f	日輪	ミニチュア	口～腹	砂粒含む	口縁部凹丸・充填焼成	なし	ナデ	中期末～後期	一	
645	I D 2 d	日輪上	ミニチュア	口～腹	無	無文+細泥繩モチーフ	L	ナデ	中期末～後期	一	
646	I D 2 d	日輪上	ミニチュア	口～底	砂粒含む	地文のみ	L R	ナデ	中期末～後期	一	
647	I C 7 i	口～肩附	ミニチュア	肩	泥平付	泥平付	L R	ナデ～ミガキ	中期末～後期	一	
648	I C 2 i	日輪上	ミニチュア	ほぼ完形	砂粒含む	側面下半施文のみ	L R	ナデ	中期末～後期	一	
649	I D 10 a	口唇下	ミニチュア	ほぼ完形	砂粒含む	ミガキ	なし	ナデ	中期末～後期	一	
650	I B 4 e	直唇下	ミニチュア	肩～底	砂粒含む	ナデ～ミガキ	なし	ナデ	中期末～後期	一	内外面赤色染彩
651	I B 2 d	日輪	ミニチュア	底	金雲母	細泥繩	なし	ナデ	中期末～後期	一	内外面赤色染彩
652	I C 4 i	直唇下	ミニチュア	肩	泥斑	無	なし	ナデ	中期末～後期	一	外侧面赤色染彩
653	I C 7 f	直唇上	ミニチュア	口～腹	砂粒含む	無	なし	ナデ	中期末～後期	一	

第8表 遺物観察表(土製品)

No.	出土場所	部位	器種	部位	胎土	文様特徴	大きさ			重量	時期	備考
							最大径	最小径	最大厚			
13	1号住	1層	土製円錐	全周部・底粒	R L	3.3	3.4	0.7	7.68	中期?		
41	3号住	1層	土製円錐	砂粒含む	L R	4.55	5.1	0.95	24.8	中期?		
42	3号住	1層	粘土塊	指紋压痕	無	3.1	3.15	2.3	17.35	不明		
64	7号住	床面	板状土製品	砂粒含む	L R	7.8	4.3	1.8	66.52	中期		
81	9号住	1層	土製円錐	砂粒含む	R L	4.1	4.95	1.25	27.54	中期		
171a	16号住	堆土	系繩	砂粒含む	縄辺部中央に沈線一周・縫い沈継による彫刻文	6.25	2.5	1.3	13.59	中期	171bと同一個体	
171b	16号住	堆土	系繩	砂粒含む	縫い沈継による彫刻文	3.35	1.25	1.25	3.8	中期	171aと同一個体	
172	16号住	1層	板状土製	底部	砂粒含む	刺突列・断面	9.33	5.35	1.55	58.19	中期	
265	27号住	堆土	キノコ形土製品	砂粒含む	無	4.2	4.95	1.7	21.63	中期		
340a	34号住	1層	板状土製	体部	金雲母少認	細泥繩による青緑的モチーフに曲線モチーフが付加・体部に穿孔	5.6	4.55	0.95	29.11	中期～後期	340bと同一個体
340b	34号住	1層	板状土製	体部	金雲母少認	細泥繩による青緑的モチーフに曲線モチーフが付加・体部に穿孔	5.1	4.83	1.02	34.09	中期～後期	340aと同一個体
654	I B 7 g	直唇下	土偶	頭部	砂粒含む	無	4.4	3.3	2.85	32.92	後期	
655	I C 6 i	直唇上	不明	砂粒含む	無	1.85	1.5	0.3	2.62	中期～後期		
656	I C 5 b	直唇下	不明	砂粒含む	無	2.0	2.3	0.4	6.28	中期～後期		
657	I C 6 g	直唇下	板状土製品	砂粒含む	L R	3.65	5.0	1.45	20.73	中期		
658	試掘T	堆土	粘土塊	砂粒含む	植物压痕を微かに認める	3.83	3.78	1.25	14.70	不明		

第9表 遺物観察表（陶磁器）

No.	出土地点	層 級	器 形	胎 土	施薬・繪付	製 作 地	製 作 年 代	そ の 他
375	I号堅穴建物跡	床	磁器碗	白色	灰釉	中国産	14c末~15c初	
379	2号掘立柱建物	PP13	磁器碗	白色	朱付	東北産	19c前半以降	
386	4号掘立柱建物跡	埋土	磁器皿	暗灰色	灰釉	東北産	19c前半以降	古久慈焼に似る
559	II B 1 f	Ⅱ	陶器皿	青灰色	灰釉	常滑	12~13c	
660	I C 6 j	1層	陶器皿	青灰色	灰釉	渥美	15~13c	
661	I C 10 b	Ⅱ中	磁器碗	灰色	青磁	中国産	12c後半代	半面彫り牡丹文
662	I D 7 a	Ⅱ中	磁器碗	灰色	青磁	中国産	14c末~15c初	模様と溝弁文
663	I D 7 a	Ⅱ中	磁器碗	灰色	青磁	中国産	14c末~15c初	模様と溝弁文
664	II C 2 e	Ⅲ層	磁器碗	灰白色	朱付	肥前	17c後~18c後	
665	II B 3 f	Ⅲ上	磁器皿	灰白色	朱付	肥前	17c後~18c後	
666	II C 1 d	Ⅲ下	磁器皿	白色	朱付	肥前	17c後~18c後	元禄~天明
667	平場	埋土	磁器皿	白色	朱付	肥前	18c後~19c初	四蛇の日高台
668	I B 6 h	I層	磁器碗	白色	朱付	肥前	17c後~18c後	1690~1780
669	I C 6 j	I層	磁器皿	白色	朱付	肥前	18c後~19c初	四蛇の日高台
670	I C 8 b	I層	磁器皿	白色	朱付	肥前	18c後~19c初	四蛇の日高台
671	I C 7 j	Ⅲ~Ⅳ	磁器碗	白色	朱付	肥前	18c後~19c初	
672	I D 7 a	Ⅱ中	磁器碗	白色	朱付	東北産	19c前半以降	
673	平場	埋土	磁器碗	白色	朱付	肥前?	19c前半	肥前に跡土似る
674	I D 10 a	I層	磁器碗	白色	朱付	東北産?	19c前半	
675	27号住	Ⅱ中	磁器皿	暗灰色	灰釉	東北産	19c前半以降	古久慈焼に似る
676	I B 8 f	Ⅱ	瓶体	暗灰色	灰釉	東北産	19c~	
677	平場	埋土	磁器瓶	灰色	灰釉	東北産	19c前~	目跡あり
678	87号土坑	I層	磁器皿	白色	朱付	東北産	19c前	型起し形成
679	I C 5 g	Ⅱ下	磁器土瓶	灰白色	朱付	—	19c中以降	近代にかかる
680	II B 2 j	Ⅲ	雪平鍋	灰白色	灰釉	—	19c中~明治	底部片
681	メイントレンチ3東	I層	磁器皿	灰白色	灰釉	—	不明	
682	サブトレンチ5	I層	小杯	灰白色	灰釉	—	不明	
683	II D 2 a	II層	磁器碗	灰白色	朱付	—	20世紀	

第10表 造物觀察表(石器・石製品)

No.	遺構名	グリッド	方位	基準	大・中・小(m)			重量(g)	石種	产地	特徴・備考
					長さ	幅	厚さ				
11	1号住居跡	IC3-i	北上	スクリューバー頭	47	31	8	22.90	良石	北上山地	【一・A類 内側材に擦痕有り(表面)】
15	1号住居跡	IC3-i	北上	スクリューバー頭	47	29	8	11.49	良石	北上山地	【一・A類 左右脚に、北端部に擦痕有り(表面)】
16	1号住居跡	IC3-i	北上	スクリューバー頭	56	19	8	36.93	良石	北上山地	【一・A類 全周に擦痕有り(表面)】
17	1号住居跡	IC3-i	北上	スクリューバー頭	55	21	7	16.06	良石	北上山地	【一・A類 右脚部に擦痕有り(表面)】
18	1号住居跡	IC3-i	北上	リッチャード・フレイタ	29	26	8	2.32	良石	北上山地	右脚部から北上に擦痕有り(表面)】
19	1号住居跡	IC3-i	北上	ユーズド・フレイタ	16	23	8	1.67	良石	北上山地	北端部に擦痕有り(表面)】
20	1号住居跡	IC3-i	北上	野原石斧	27	16	4	2.46	良石	北上山地	内側が少しあくし用し、外らべの理由で選出したもの
21	1号住居跡	IC3-i	南面	骨材	123	17	38	760.41	骨材	北上山地	圓筒・泥棒に、チル孔のものが付着している
25	2号住居跡	IC6-j	内壁	円錐	16	20	24.5	87.14	良石	北上山地	表面に保護されている
33	3号住居跡	IC6-h	東面	石版	27	26	8	8.48	良質良石	良品	良品
41	5号住居跡	IC6-h	北壁	石版	29	21	6	2.41	良石	北上山地	風化のみ
45	3号住居跡	IC6-h	北壁	スクリューバー頭	45	31	10	15.73	良石	北上山地	【日・B類 右脚部に擦痕有り(表面)】
46	3号住居跡	IC6-h	北壁	四角石	92	68	47	156.93	良質良石	良品	良品
47	3号住居跡	IC6-h	北壁	石版	238	35.8	15.5	1009.05	良石	北上山地	【日・B類 良好な擦痕有り】
48	3号住居跡	IC6-h	北壁	敲打石	805	94	72	929.59	良質良石	良品	良品
49	3号住居跡	IC6-h	床面	石版	822	97	16	2225.77	良質良石	良品	良品
57	6号住居跡	IC7-h	東面	石版	105	46	23	17.14	良石	北上山地	形態・内側に擦痕有り
58	6号住居跡	IC7-h	東面	有孔石板	31	30	8.5	33.85	良石	北上山地	【日・B類】
65	2号住居跡	IC5-g	北壁	石版	29	16	6	2.16	GT石	北上山地	良品
66	2号住居跡	IC5-g	北壁	石版	22	16	6	2.94	良石	北上山地	半風化
67	2号住居跡	IC5-g	北壁	石版	32	27	5	7.02	GT石	北上山地	超型
68	2号住居跡	IC5-g	北壁	尖頭石	20	11	1	1.5	良質良石	北上山地	内側不規則 内側材に擦痕有り(右内側・左片表) 丸端部欠損
70	2号住居跡	IC5-i	北上	ユーズド・フレイタ	35	37	11.5	25.39	鐵鍛直石	良品	良品
85	9号住居跡	IC5-i	北上	スクリューバー頭	35	36	11	14.53	良石	北上山地	【日・B類 右脚部に擦痕有り(表面)・右端部有り(表面)】
94	9号住居跡	IC5-i	北上	鉄鍛	23	22	18	3.38	生鐵	良品	良品
95	9号住居跡	IC5-i	北上	敲打石	39	19.5	7.3	30.8	良石	北上山地	小形 丸底直脚 内内身
96	9号住居跡	IC5-i	北上	円錐	25	22.5	20	12.29	良質良石	良品	良品
97	10号住居跡	IC5-g	北上	スクリューバー頭	38	16	12	16.66	良石	北上山地	【日・A類 左脚部・右端部に擦痕有り(表面)】
98	10号住居跡	IC5-g	北上	石版	39	62	7	15.88	良石	北上山地	【日・B類】
99	10号住居跡	IC5-k	南面	鉄鍛	27	29	8	7.94	良石	北上山地	内側不規則
107	12号住居跡	IC5-e	北上	石版	29	16	5	1.91	良質良石	良品	良品
108	12号住居跡	IC5-e	北上	石版	23.5	17	5	3.53	良石	北上山地	顕性 左脚部に擦痕有り(表面)
109	12号住居跡	IC5-e	北上	スクリューバー頭	63	42	19.5	33.31	鐵鍛直石	良品	良品
110	12号住居跡	IC5-e	北上	石版	28	23	8	4.84	良質良石	良品	良品
111	12号住居跡	IC5-e	北上	リッチャード・フレイタ	18	23	8	6.36	良質良石	良品	良品
112	12号住居跡	IC5-e	北上	鉄鍛	25	27	7	4.05	良石	北上山地	良品
113	12号住居跡	IC5-e	北上	鉄鍛	16.5	12.5	2.5	0.32	鉄鍛	北上山地	良品
114	12号住居跡	IC5-e	北上	鉄鍛	30.5	9	5.5	1.1	良石	北上山地	良品
115	12号住居跡	IC5-e	北上	前鋸刃石	61	37	13	52.61	良石	北上山地	尾端部直脚 内内身
123	14号住居跡	IC5-d	北上	敲打石	69	74	53	580.82	良品	北上山地	【日・A類 中央に細かな敲打有り】
126	15号住居跡	IC5-tx	中壁	鉄鍛	91	58	43	399.74	圓錐2	北上山地	本端部とそえられ。裏部は欠損している
127	16号住居跡	IC5-tx	北上	石版	36	23	6	5.88	鐵鍛直石	良品	良品

No.	道 標 名	グリッド	基 索	基 索	大 き さ (m)			重 量 (t)	石 材	場 地	特 許・備 考	
					底	中	顶					
174	16号住居跡	EC 1 g	地中	石版	32	19	7	3.22	貫 石	北上山地 内浦組		
175	16号住居跡	EC 1 g	地中	石版	17	8	4	0.34	底貫 石	奥羽山脈 平昌組		
176	16号住居跡	EC 1 g	地中	石版	17	8	3.5	0.26	社貫 石	奥羽山脈 高部火頭		
177	16号住居跡	EC 1 g	地上	石版	37	17	7	4.75	貫 石	北上山地 御前		
178	16号住居跡	EC 1 g	地中	石版	22	27	7	4.21	貫 石	北上山地	全間に浅形調整(片側) つまみ部を有する	
179	16号住居跡	EC 1 g	地中	石版	17	32	7	4.81	貫 石	北上山地 米良山	つまみ部が切られた箇所を有する	
180	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石等	40	15.5	1	7.11	貫 石	北上山地 御前組・北端部に浅形調整(片側)		
181	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石等	25.5	19.5	6	12.58	チャート	奥羽山脈 高部組・本部部に浅形調整(片側) 写真のみ掲載		
182	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石等	34	20	7	1.67	貫 石	北上山地 内浦組に浅形調整(片側)		
183	16号住居跡	EC 1 g	地中	リチャード・フレイク	35.5	19.5	6.5	2.72	貫 石	北上山地	全間に浅形調整(片側)	
184	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	28.5	16	6.5	4.22	底貫 石	奥羽山脈 バーボーラクニッタ使用 写真のみ掲載		
185	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	25	23.5	11	6.10	貫 石	北上山地 写真のみ掲載		
186	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	29.5	24.5	5	3.66	貫 石	北上山地 写真のみ掲載		
187	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	32	19	5.5	2.92	貫 石	北上山地 写真のみ掲載		
188	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	35	9.5	5	0.99	底貫 石	奥羽山脈 写真のみ掲載		
189	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石	31.5	18	7	4.01	貫 石	一 バーボーラクニッタ使用 写真のみ掲載		
190	16号住居跡	EC 1 g	地中	板形石等	58	39.5	25	75.91	貫 石	北上山地 刀根火頭 砂部のみ		
191	16号住居跡	EC 1 g	地中	板質平行	39.5	66	12	45.91	貫 石	北上山地 品川大屋 万部のみ 同上		
192	16号住居跡	EC 1 g	地中	板質平行	72	72	48	338.23	貫 石	奥羽山脈 日-C型 御前組に浅形調査		
193	16号住居跡	EC 1 g	地中	巴形石	106	75	42.5	451.73	安山岩	奥羽山脈 I-B型 武・美中央部に径1cmの孔1ヶ所ずつ		
194	16号住居跡	EC 1 g	地中	巴形石	109	68	35	382.09	安山岩	奥羽山脈 I-A型 中央部に径1cmの孔1ヶ所		
195	16号住居跡	EC 1 g	地中	巴形石	132	92	70	582.48	安山岩	奥羽山脈 I-A型 武・美中央部に径8cmの孔1ヶ所ずつ		
196	16号住居跡	EC 1 g	地中	円錐	41.5	44.5	34.5	71.1	安山岩	奥羽山脈 写真のみ掲載		
197	16号住居跡	EC 1 g	地中	円錐	43.5	30	39	33.47	貫 石	奥羽山脈 写真のみ掲載		
200	17号住居跡	IC 10 c	凡土	リチャード・フレイク	36	21.5	5	2.18	底貫 石	奥羽山脈 左岸壁・御前組に浅形調整(片側)		
209	19号住居跡	EC 1 d	凡土	石版	21.5	62.5	50	291.94	底貫 石	奥羽山脈 写真のみ掲載		
220	19号住居跡	EC 1 d	凡土	円錐	46.5	45	33.5	59.19	安山岩	奥羽山脈 写真のみ掲載		
233	21号住居跡	EC 2 i	凡土	スクライバー型	51	43	11	14.04	貫 石	北上山地 日-C型 右岸壁に浅形調整(片側)・末端部調査(片側)		
241	22号住居跡	EC 2 j	凡土	ユーズド・フレイク	26	19.5	11	4.03	貫 石	北上山地 品川大屋に浅形調査		
242	22号住居跡	EC 3 i	1号	板形石	157.5	84.5	43	1029.65	ゆん石	北上山地 日-B型 中央部分に浅形調査が見られる		
251	25号住居跡	EC 2 c	凡土	スクライバー型	46	85	36	63.41	貫 石	北上山地 日-B型 左岸壁・末端部に浅形調査(片側)		
322	25号住居跡	EC 2 c	凡土	板形石	95	55	42	233.93	安山岩	奥羽山脈 I-A型		
323	25号住居跡	EC 2 c	凡土	板形石	96	68.5	64	860.93	安山岩	奥羽山脈 表面に難熱が見られる		
360	27号住居跡	ID 10 a	凡土	石版	29	63	7	8.72	貫 石	北上山地 後壁 品川大屋に浅形調査		
367	27号住居跡	ID 10 a	凡土	石版	36	12	7	2.45	貫 石	北上山地		
368	27号住居跡	ID 10 a	凡土	板形石	34.5	38	8	9.3	底貫 石	底地-手切 写真のみ掲載		
369	27号住居跡	ID 10 a	凡土	板形石	27	50	5	7.91	底貫 石	奥羽山脈 写真のみ掲載		
370	27号住居跡	ID 10 a	凡土	円錐	37	41	22	57.29	安山岩	奥羽山脈 写真のみ掲載		
387	28号住居跡	IC 5 c	凡土	板形石等	35	53	8	8.42	チャート	奥羽山脈 奥羽山脈・御前組に浅形調査(片側)		
388	28号住居跡	IC 5 c	凡土	ユーズド・フレイク	37	26	10	6.05	底貫 石	奥羽山脈 水谷郡に浅形調査		
389	28号住居跡	IC 5 c	凡土	板質石等	73	39	10	45.11	貫 石	北上山地 墨俣火頭 半分のみ		
390	28号住居跡	IC 5 c	凡土	円錐	46	40.5	27	82.53	安山岩	奥羽山脈 写真のみ掲載		
391	29号住居跡	IC 5 c	凡土	円錐	35	34	29	46.94	安山岩	奥羽山脈 写真のみ掲載		

No.	通 勘 名	ゲリッド	層位	基盤	大 3 2 (cm)			高さ (m)	石林	产地	特 訴・備 考
					北 S	南	西 S				
305	20号住居跡	1 C 5 c	地下	円窓	26.5	41.5	20	66.00	安山岩	鳥羽山脈	万葉のみ岡林
312	20号住居跡	1 D 10 a	地土	御鏡石器	48	29	18	14.02	住吉貝殻	鳥羽山脈	岡林原・右側縁に後退調査 (岡林)
332	20号住居跡	1 D 10 a	地土	御鏡石	25	44	15	8.26	住吉貝殻	鳥羽山脈	岡林のみ岡林
314	20号住居跡	1 D 10 a	地土	御鏡石	62	68	30	22.72	貝殻	鳥上山地	万葉のみ岡林
335	20号住居跡	1 D 10 a	地土	御鏡石器	69	41	23	233.50	ゆん岩	鳥上山地	高見田原・西山口
316	20号住居跡	1 D 10 a	地土	御鏡石	117	89	69	1004.64	安山岩	鳥羽山脈	始端に3列して列の方向の後退有り
337	20号住居跡	1 D 10 a	1 層	円窓	56	51	36	319.37	安山岩	鳥羽山脈	万葉のみ岡林
318	20号住居跡	1 D 10 a	地土	円窓	35	37.5	27	74.77	安山岩	鳥羽山脈	万葉のみ岡林
329	21号住居跡	1 B 6 b	地上	御鏡石序	-65	-46	-17.5	12.42	貝殻	鳥上山地	高須原片 No.307と連合 岩の本岡林
330	21号住居跡	1 B 6 b	地土	御鏡石	109	68	36	912.44	安山岩	鳥羽山脈	1-A組 中央部分に孔孔が数ヶ所見られる
356	21号住居跡	1 B 8 l	地下	御鏡石	163	65	10	373.48	安山岩	鳥羽山脈	1-A組 中央部分が大きくなっています。表・裏に浅孔
311	24号住居跡	1 C 8 b	1 層	御鏡石序	95.5	50	33	266.80	貝殻	鳥上山地	刀根・高須原
312	24号住居跡	1 C 8 b	2 層	御鏡石序	135	79	13	651.65	安山岩	鳥羽山脈	1-B組 表・裏共に柱に1段の孔孔 2ヶ所づつ
367	24号住居跡	1 A 8 c	地土	御鏡石序	-65	-46	-17.5	26.88	貝殻	鳥上山地	高須原・刀根原のみ 西山口 No.310と連合
368	24号住居跡	1 C 4 c	地土	ユーズド・フレイク	37	38	10	13.2	チャート	鳥羽山脈	左側斜面・東側斜面に細網形横筋 万葉のみ岡林
369	24号住居跡	1 C 4 c	地土	リタッチド・フレイク	32	27	12	12.34	貝殻	鳥上山地	高須原・東側斜面に後退調査 (岡林)
371	1号土塁	1 B 3 c	地下	御鏡石	260	110	12	169.58	御鏡石	鳥上山地	壁面で丸い穴が複数に開けている
372	1号土塁	1 B 3 c	地土	御鏡石	90	84	50	461.54	安山岩	鳥羽山脈	J-A組 表・裏中央部分に孔孔が数ヶ所
400	1号工部跡	1 B 10 a	地土	白石	117	45	35	321.40	カルシフロース	鳥上山地	
401	1号工部跡	1 B 10 a	地土	白石	121	141	42	1352.01	安山岩	鳥羽山脈	
402	1号工部跡	1 B 10 a	地土	白石	196	154	36	1669.64	安山岩	鳥羽山脈	
403	1号工部跡	1 B 10 a	地土	白石	179.5	109.1	47	1680.58	安山岩	鳥羽山脈	
435	2号住居跡動物群P13	1 C 9 i	1 層	白石 (上部)	145	307	66	2227.70	安山岩	鳥羽山脈	上口 半穴居
436	2号住居跡動物群P14	1 C 4 e	地土	御鏡石	46	72	14	43.53	貝殻	鳥上山地	丸根原 中央に丸根有り
681	—	1 C 6 i	地土	御鏡石	22	21	6	4.38	貝殻	鳥上山地	万葉台作 完成品
685	—	1 C 4 f	地土	御鏡石	15	12.5	3	6.42	電線	—	電線名
686	—	1 C 10 j	地土	御鏡石	23	13	5.5	9.85	住吉貝殻	鳥羽山脈	高須原・左側斜面 先頭部のみ
687	—	1 A 7 j	地土	御鏡石	16	21.5	5	2.18	電線	—	右側斜面に細網調査 先頭部欠損 完成品
688	—	1 C 3 f	地土	御鏡石	43	36	7	4.97	貝殻	鳥上山地	両側斜面に細網調査 (岡林) つまみ部を仕上げ
689	—	1 C 4 l	地土	御鏡石	53	51	9.5	16.23	貝殻	鳥上山地	両側斜面に刀把形成
690	—	1 B 2 c	地土	御鏡石	62	36	11	11.33	貝殻	鳥上山地	全物に浮彫調査 (片側) 破壊
691	—	—	地土	御鏡石	57	33.5	7	10.52	貝殻	鳥上山地	両側斜面に浮彫調査 (片側) 破壊
692	—	—	地土	御鏡石	21.5	34	6	5.31	貝殻	鳥上山地	高須原
693	—	1 C 8 i	地土	御鏡石	19	14	2	1.77	貝殻	鳥上山地	
694	—	1 B 5 c	地土	スクリューバー型	46.5	81	7.5	11.70	貝殻	鳥上山地	J-A組 右側斜面に後退調査 (片側)
695	—	1 C 8 c	地土	スクリューバー型	38	38.5	9	11.94	貝殻	鳥上山地	J-A組 左側斜面に後退調査 (片側)
696	—	—	1 層	スクリューバー型	45	56	9	17.63	住吉貝殻	鳥羽山脈	J-A組 在縫材・木造部に後退調査 (片側)
697	—	1 B 3 b	地土	スクリューバー型	22	34	9	5.45	住吉貝殻	鳥羽山脈	J-A組 両側斜面・馬蹄形に後退調査 (片側)
698	—	—	地土	スクリューバー型	44	46	6	13.18	貝殻	鳥上山地	J-A組 全周的に前後調査 (片側) 欠品
699	—	1 C 5 h	地土	スクリューバー型	47	32	9	9.95	貝殻	鳥上山地	J-A組 北側部に後退調査 (片側) 先頭部欠損
700	—	1 C 5 h	地土	尖頭鉄	22	25.5	5	5.87	貝殻	鳥上山地	両側斜面に複数部からなる後退調査 (片側) 先頭部欠損
701	—	1 C 5 h	地土	リタッチド・フレイク	21.5	27	7	3.58	貝殻	鳥上山地	両側斜面に複数部調査 (片側)
702	—	1 C 5 j	地土	リタッチド・フレイク	30	32	7	6.01	貝殻	鳥上山地	両側斜面に複数部調査 (片側)

No.	規格	アリヤ	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格	規格
703	—	—	1C5j	BMW 1-2-2P・2-1-1P	22	21.5	9.3	9.36	AT3	—	—	—	—	—
704	1B1j	BMW 2-2-2P・2-1-1P	21	20	8.3	2.15	10.07	AT3	—	—	—	—	—	
705	1B1a	BMW 2-2-2P・2-1-1P	24	31	8.3	11.45	10.07	AT3	—	—	—	—	—	
706	1B1a	BMW 2-2-2P・2-1-1P	73	153	25	33.27	AT3	—	—	—	—	—	—	—
707	1C5h	BMW 618	11	98.9	29	73.46	AT3	—	—	—	—	—	—	—
708	1C7f	BMW 618	54	69.5	31	136.49	AT3	—	—	—	—	—	—	—
709	OB1a	BMW 618	56	44	31	40.31	AT3	—	—	—	—	—	—	—
710	1C5e	BMW 618	119	87	27	227.05	0.4-3	—	—	—	—	—	—	—
711	DC3e	BMW 618	99	50	25	201.9	0.4-3	—	—	—	—	—	—	—
712	—	BMW 618	—	-85	49	400.36	0.4-5/2	AT3	—	—	—	—	—	—
713	1C7e	BMW 616	123	49	261.43	0.5-7+1.1	AT3	—	—	—	—	—	—	—
714	1C8g	BMW 616	67	60	27	161.17	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
715	1D8a	BMW 616	101	90	70	1128.1	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
716	1C8h	BMW 616	112	112	24	417.01	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
717	1B5t	BMW 616	66	16	17	302.56	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
718	OB1i	BMW 616	67	37	37	192.99	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
719	1C24	BMW 616	126.9	49	21	233.29	0.4-3	—	—	—	—	—	—	—
720	BB1e	BMW 616	129	32	25	237.11	0.4-3	AT3	—	—	—	—	—	—
721	—	BMW 616	—	—	35	26	276.13	0.4-3	AT3	—	—	—	—	—
722	BC1h	BMW 616	81.8	70	34	106.92	0.4-3	AT3	—	—	—	—	—	—
723	—	BMW 616	—	—	133	81	63	1169.37	0.4-3	AT3	—	—	—	—
724	BC21	BMW 616	84.8	26.5	25	86.67	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
725	1B8e	BMW 616	63	63.4	71	617.44	0.5/0.2	AT3	—	—	—	—	—	—
726	1C6e	BMW 616	45	39	24	276.41	0.4-3	AT3	—	—	—	—	—	—
727	—	BMW 616	—	—	132	65	60	579.67	0.4-3	AT3	—	—	—	—
728	EC34	BMW 616	193	32	21	212.66	0.4-3	AT3	—	—	—	—	—	—

第11表 遺物観察表(鉄製品他)

No.	遺物名	グリッド	層位	器種	大きさ(cm)			重量(g)	材質	備考
					長さ	幅	厚さ			
391	1号工路	EC 2 f	上F	鍔札	81	41	3	33.22	銅	
392	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	81	41	2	28.63	銅	
393	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	81	41	2	19.62	銅	
394	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	74	37	2	22.35	銅	
395	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	74	39	2	26.05	銅	
396	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	-41	38	2	10.94	銅	
397	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	78	42	2	31.32	銅	
398	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	81	39	3	29.40	銅	
399	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	81	40	3	33.13	銅	
400	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	80	41	2	(49.06)	銅	No.388~399は付着
401	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	81	41	2	(49.06)	銅	同上
402	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	82	41	2	33.93	銅	
403	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	82	40	2	26.28	銅	
404	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	82	40	2	39.65	銅	
405	1号工路	EC 2 f	下F	鍔札	72	38	2	16.24	銅	
406	1号工路	EC 2 f	F	棒状鍛造削	62	-40	5	19.82	銅	
407	1号工路	EC 2 f	F	環又頭	106	5	6	12.12	銅	
408	1号工路	EC 2 f	F	筒頭	-370	-230	-5	-	銅	欠損
422	26号灰	I A 6	地下	斧	104	17	15	21.04	ガラス	欠損
423	40号灰	I B 4 b	埋F	斧	137	6	2	8.10	銅	
431	43号灰	I B 4 b	埋F	斧	120	8	2	6.85	銅	
561	馬具	地下	埋F	環	101	11	1	8.42	銅	吸口 欠損した環子が残存 古京御年V類
562	馬具	地下	埋管	74	14	1	8.26	銅	吸口 欠損した環子が残存 古京御年重類(17世紀後半)	
563	馬具	地下	埋管	112	12	1	11.34	銅	吸口 欠損した環子が残存 古京御年重類(17世紀後半)	
564	馬具	地下	埋管	63	10	1	4.16	銅	吸口 欠損した環子が残存 古京御年重類(18世紀前半-19世紀)	
565	馬具	地下	埋管	59	11	2	2.85	銅	吸口 欠損した環子が残存 古京御年重類(18世紀前半-19世紀)	
566	馬具	地下	埋管	58	10	1	4.24	銅	首筋 欠損した環子が残存 古京御年V類(18世紀後半?)	
567	馬具	地下	埋管	56	13	1	4.80	銅	首筋 古京御年G類(18世紀前半)	
568	馬具	地下	埋管	41	18	1	5.63	銅	里筋 欠損した環子が残存 古京御年重類(18世紀前半)	
569	馬具	地下	埋管	63	18	10	10.93	銅	里筋 欠損した環子が残存 古京御年V類(18世紀後半)	
570	馬具	地下	埋管	38	12	1	4.96	銅	吸口 大田久角 古京御年田-N(17世紀後半-18世紀前半)	
571	馬具	地下	鍔	161	40	10	45.89	銅	欠損	
572	馬具	地下	鍔	57	12	5	13.17	銅	頭部を折り曲げてある	
573	馬具	地下	鍔	43	6	5	1.67	銅	頭部を折り曲げてある	
574	馬具	地下	鍔	55	14	8	4.46	銅	頭部を折り曲げてある	
575	馬具	地下	鍔	55	7	4	3.04	銅	頭部を折り曲げてある	
576	馬具	地下	鍔	60	8	5	3.73	銅	頭部を折り曲げてある	
577	馬具	地下	鍔	42	9	5	6.39	銅	頭部を折り曲げてある	
578	馬具	地下	鍔	54	11	5	13.96	銅	頭部を折り曲げてある	
579	馬具	地下	鍔止?	60	14	10	13.56	銅		
580	馬具	地下	鍔止?	40	10	9	5.83	銅		
581	馬具	地下	鍔止?	36	11	8	4.78	銅		

No.	遺物名	グリッド	層位	器種	大きさ(mm)			重量(g)	材質	備考
					長さ	幅	厚さ			
729	I C 7 j	II層	焼管		70	15	1	2.90	陶	喉口 古風簡單形一直頸(18世紀前半~19世紀)
730	I C 7 j	II下	焼管		42	13	1	8.26	陶	底部 古風簡單V頸(18世紀後半)
731	II B 2 d	II中	鉢		-69	16	3	11.82	陶	
732	—	III上	鉢		-78	-24	4	22.01	陶	
733	II C 2 c	II中	腹又鉢		-82	-64	5	23.73	陶	
734	I C 6 f	III層	刀子		162	16	3	27.21	陶	

No.	遺物名	グリッド	層位	器種	大きさ(mm)			重量(g)	材質	備考
					長さ	幅	厚さ			
387 13分組立往復物跡76	II C 4 c	II層	赤漆塗鏡片		-85	-60	5	—	木	鏡の一部で4片に分かれている

第12表 遺物観察表（銭貨）

No.	遺物名	グリッド	層位	器種	大きさ(cm)			重量(g)	材質	鉛造年代	備考
					長さ	幅	厚さ				
376	1号龜六隻物跡	B D 4 d	II層	銭貨(複鋳銅)					銅	-	鑄地不明
377	6号龜六隻物跡	J C 8 i	II層	咸平元寶	(21.5)	5.8	0.8	1.24	銅	初唐年998年	北宋
378	6号龜六隻物跡	J C 8 i	II層	祥符元宝	(22.6)	5.9	1.1	2.04	銅	初期年1009年	北宋
381	2号龜立柱造物跡	J D 8 a	II層	道元寶(草書)	(23.4)	6.1	1.0	1.70	銅	初唐年995年	北宋
382	2号龜立柱造物跡	J D 8 a	II層	銭貨(複鋳不明)	(23.6)	5.8	(4.2)	(5.69)	銅	-	No.382-38311因着 同一遺構出土 鑄地不明
383	3号龜立柱造物跡	J D 8 a	II層	銭貨(複鋳不明)	(23.8)	5.8	(4.2)	(5.69)	銅	-	同上 鑄地不明
384	3号龜立柱造物跡PP1	J D 8 a	II層	銭貨(複鋳不明)	(24.4)	6.2	(3.6)	(4.65)	銅	-	No.384-38511因着 同一遺構出土 鑄地不明
385	3号龜立柱造物跡PP1	J D 8 a	II層	銭貨(複鋳不明)	(24.4)	6.2	(3.6)	(4.65)	銅	-	同上 鑄地不明
386	龜立柱造物跡PP24	-	II層	聖宋元宝(篆書)	23.6	6.0	1.2	2.72	銅	初期年1068年	北宋 No.386-38912同一遺構出土
389	龜立柱造物跡PP24	-	II層	元祐通寶(篆書)	25.0	6.8	1.3	3.19	銅	初期年1078年	北宋 No.388-38912同一遺構出土
414	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(文書)	25.1	5.9	1.5	3.33	銅	1668-1683年	寃上-天和江戸亀戸所
415	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(古文書)	25.1	6.3	1.3	3.47	銅	1636-1659年	
416	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(新文書)	23.1	6.0	1.2	2.65	銅	1736-1740年	元文治11川平野新田所
417	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(新文書)	22.5	6.2	1.2	2.19	銅	1736-1740年	元文相模志津・吉田島所
418	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(新文書)	24.8	5.7	1.5	3.54	銅	1736-1740年	元文治11萬坪所
419	3号龜坑	J D 10 c	埋下	寃水通寶(新文書)	24.5	5.8	1.4	2.91	銅	1736-1740年	元文治11小柳所
420	22号龜坑	J A 5 i	埋下	寃水通寶(行記)	22.6	6.4	1.1	2.08	銅	1741年-	No.420とNo.421は因着 同一遺構出土 元文福津高津新地所
421	22号龜坑	J A 5 i	埋下	寃水通寶(新文書)	24.6	6.5	1.1	2.61	銅	1736-1740年	No.420とNo.421は付着 同一遺構出土 元文山城根人跡所
424	42号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(古文書)	24.6	5.4	1.2	2.86	銅	1636-1659年	No.424-425は付着
425	42号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(古文書)	24.9	5.6	1.2	2.98	銅	1636-1659年	同上
426	42号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(文書)	25.3	5.8	1.3	3.47	銅	1668-1683年	寃上-天和江戸亀戸所
427	42号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(新文書)	23.0	5.6	1.8	3.13	銅	1736-1740年	元文治11中之島所
428	42号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(古文書)	23.7	5.8	(1.9)	4.23	銅	1536-1659年	
429	42号龜坑	J D 10 b	埋下	銭貨(刺波不明)	(25.8)	(5.3)	(5.4)	(5.69)	銅	-	No.429-430は因着 同一遺構出土
430	42号龜坑	J D 10 b	埋下	銭貨(複鋳不明)	(25.8)	(5.3)	(5.4)	(5.69)	銅	-	同上
432	45号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(新文書)	24.1	6.0	1.1	2.94	銅	1736-1740年	No.432-433は因着 同一遺構市上 元文山城根大路所
433	45号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(行記)	22.8	6.3	1.0	2.33	銅	1741年-	同上 元文福津高津新地所
434	45号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(新文書)	24.5	5.5	1.0	2.78	銅	1736-1740年	No.434-435は因着 同一遺構出土 元文下野日光所
435	45号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(新文書)	23.8	5.8	1.2	2.85	銅	1736-1740年	同上 元文山城根大路所
436	45号龜坑	J D 10 b	埋下	寃水通寶(新文書)	24.2	5.8	1.2	2.53	銅	1736-1740年	元文山城根大路所
437	調査区南側龜坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	25.6	5.8	1.4	3.40	銅	1736-1740年	元文下野日光所
438	調査区南側龜坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	23.4	6.1	1.1	2.34	銅	1736-1740年	元文山城根秋田所
439	調査区南側龜坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	23.0	6.7	1.6	2.93	銅	1736-1740年	元文治11瀬川平野新田所
440	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	22.1	6.7	1.0	1.86	銅	1736-1740年	No.440-441は因着 同一遺構出土 元文相模志津・吉田島所
441	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	23.5	6.3	1.1	2.59	銅	1736-1740年	同上 元文山城根秋田所
442	基坑	-	埋下	寃水通寶(古文書)	24.4	5.7	1.3	2.87	銅	1636-1659年	
443	基坑	-	埋下	寃水通寶(古文書)	24.5	5.4	1.2	3.60	銅	1636-1659年	
444	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	24.5	5.6	1.6	3.29	銅	1736-1740年	元文紀伊中之島所
445	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	23.5	5.9	1.5	2.61	銅	1736-1740年	元文山城根秋田所
446	基坑	-	埋下	寃水通寶(古文書)	25.2	6.3	1.2	2.77	銅	1636-1659年	
447	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	22.8	6.2	1.0	2.51	銅	1736-1740年	元文紀伊中之島所
448	基坑	-	埋下	寃水通寶(新文書)	22.9	6.2	1.1	2.42	銅	1736-1740年	元文治11小柳所

No.	遺物名	グリッド	層位	器種	大きさ (cm)			重量(g)	材質	鉛造年代	備考
					長さ	幅	厚さ				
449	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	24.1	6.1	1.2	3.07	銅	1736~1740年	元文江戸十萬坪所
450	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	24.1	5.8	1.4	2.98	銅	1736~1740年	元文山城横大路所
451	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(古寛永)	23.7	5.9	0.9	1.74	銅	1636~1659年	
452	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.5	6.2	1.0	2.32	銅	1736~1740年	元文紀伊中之島所
453	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	22.9	5.9	1.3	2.60	銅	1736~1740年	元文紀伊中之島所
454	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(古寛永)	25.0	6.4	1.3	2.83	銅	1636~1659年	
455	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.3	6.0	1.2	2.44	銅	1736~1740年	元文江戸小海所
456	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.4	5.9	1.4	2.37	銅	1736~1740年	元文山城羽田所
457	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.9	6.4	1.0	1.79	銅	1697~1747年	跡地不明
458	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	27.6	7.0	1.7	2.31	銅	1736~1740年	元文相模鶴ヶ崎・吉田鳥所
459	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	22.8	6.7	1.8	2.49	銅	1736~1740年	元文江戸十萬坪所
460	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.8	6.2	1.2	2.61	銅	1736~1740年	元文山城羽田所
461	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(研究品)	22.7	6.9	1.2	2.24	銅	1741~1743年	寛保記前長崎所?
462	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(文政)	25.2	5.9	1.4	3.09	銅	1668~1683年	寛文・火和江戸小海所
463	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	(23.1)	(6.6)	(2.8)	(5.49)	銅	1736~1740年	No.463~461は同一遺器出土元文相模鶴ヶ崎・吉田鳥所
464	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	(23.1)	(6.6)	(2.8)	(3.49)	銅	1697~1747年	久松 同上 跡地不明
465	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.1	6.2	1.2	2.53	銅	1736~1740年	元文紀伊中之島所
466	馬蹄	-	埋下	寛永通寶	25.1	5.2	1.2	2.64	銅	初期1608年 明代	
467	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.4	6.2	1.3	1.92	銅	1736~1740年	元文山城横大路所
468	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	(23.1)	(6.6)	(1.9)	2.18	銅	1697~1747年	跡地不明
469	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.9	6.4	1.0	2.07	銅	1736~1740年	元文山城横大路所
470	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	21.6	6.2	1.1	1.90	銅	1736~1740年	元文山城横大路所
471	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(研究品)	22.7	6.6	(2.3)	3.35	銅	1697~1747年	跡地不明
472	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.1	6.0	1.0	2.31	銅	1736~1740年	No.472~474は同一遺器出土 元文江戸諏訪平野新田所
473	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	22.9	6.2	0.9	2.41	銅	1736~1740年	同上 元文紀伊中之島所
474	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.5	6.0	1.3	2.78	銅	1736~1740年	同上 元文山城横大路所
475	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(古寛永)	24.8	5.8	1.0	2.99	銅	1636~1659年	
476	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(古寛永)	25.0	5.7	1.2	3.35	銅	1636~1659年	No.476~481は同一遺器出土
477	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.0	5.9	1.1	2.82	銅	1736~1740年	同上 元文江戸諏訪平野新田所
478	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.0	6.0	1.3	3.32	銅	1736~1740年	同上 元文江戸小海所
479	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.1	6.2	1.0	2.58	銅	1736~1740年	同上 元文山城羽田所
480	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.0	6.2	1.0	2.62	銅	1736~1740年	同上 元文江戸諏訪平野新田所
481	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	22.5	6.7	1.1	2.00	銅	1736~1740年	同上 元文紀伊中之島所
482	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	25.3	5.9	1.4	3.42	銅	1736~1740年	No.482~487は同一遺器出土 元文江戸小海所
483	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(文政)	25.4	5.8	1.2	3.23	銅	1668~1683年	同上 寛文・火和江戸鬼戸所
484	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(研究品)	25.2	6.1	1.4	3.55	銅	1668~1683年	同上 寛文・火和江戸鬼戸所
485	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	24.7	6.5	1.0	2.43	銅	1736~1740年	同上 元文山城横大路所
486	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(文政)	25.0	5.8	1.6	3.67	銅	1668~1683年	同上 寛文・火和江戸鬼戸所
487	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(文政)	25.0	5.9	1.5	3.77	銅	1668~1683年	同上 寛文・火和江戸鬼戸所
488	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	21.8	6.9	1.0	1.40	銅	1736~1740年	No.488~492は同一遺器出土 元文江戸小海所
489	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	24.9	6.2	1.5	3.36	銅	1697~1747年	跡地不明
490	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(古寛永)	24.7	5.7	1.0	2.56	銅	1636~1659年	同上
491	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.9	6.2	1.0	2.35	銅	1736~1740年	同上 元文山城羽田所

No.	遺構名	グリッド	網目	置場	大きさ(mm)			重量(g)	材質	鉛造年代	調査号
					長さ	幅	厚さ				
492	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.1	6.7	1.0	2.39	銅	1736~1740年	同上 宮文出羽秋田所
493	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.7	5.6	1.2	2.49	銅	1736~1740年	No.493-397は同者 同一遺構出土 宮文江口小梅所
494	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	24.3	5.6	1.1	2.79	銅	1636~1659年	同上
495	墓坑	-	埋下	寛永通寶(文銘)	24.9	5.9	1.4	3.40	銅	1656~1683年	同上 宮文一矢相口(亀)所
496	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	24.9	5.8	1.6	3.85	銅	1636~1659年	同上
497	墓坑	-	埋下	寛永通寶(文銘)	25.0	5.6	1.5	3.52	銅	1656~1683年	同上 宮文一矢相口(亀)所
498	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	24.5	6.1	1.2	2.84	銅	1736~1740年	No.498-501は同者 同一遺構出土 宮文江口小梅所
499	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.7	6.2	1.3	2.20	銅	1736~1740年	同上 宮文江口小梅所
500	墓坑	-	埋下	寛永通寶(文銘)	25.0	6.2	1.2	2.87	銅	1656~1683年	同上 宮文一矢相口(亀)所
501	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.1	6.1	1.0	1.92	銅	1736~1740年	同上 宮文江口小梅所
502	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.2	5.9	1.0	2.14	銅	1736~1740年	No.502-506は同者 同一遺構出土 宮文江口小梅所
503	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	24.3	5.2	1.1	2.91	銅	1636~1659年	同上
504	墓坑	-	埋下	寛永通寶(文銘)	25.0	5.9	1.2	2.93	銅	1656~1683年	同上 宮文一矢相口(亀)所
505	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	24.2	6.1	1.1	2.50	銅	1636~1659年	同上
506	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.7	6.1	1.1	1.88	銅	1736~1740年	同上 宮文山城橋大路所
507	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.2	6.6	0.9	1.96	銅	1736~1740年	No.507-511は同者 同一遺構出土 宮文紀伊中之鳥所
508	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.7	6.0	1.1	2.43	銅	1736~1740年	同上 宮石口(沼川平野新田)吉田島所
509	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.8	6.9	1.2	2.58	銅	1736~1740年	同上 宮文相模面澤(吉田島所)
510	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	23.8	5.6	1.2	3.15	銅	1636~1659年	同上
511	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.9	6.1	1.0	2.12	銅	1736~1740年	同上 宮文紀伊中之鳥所
512	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.8	5.7	1.2	(3.68)	銅	1736~1740年	No.512-517は同者 同一遺構出土 宮文山城橋大路所
513	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.8	5.7	1.2	(3.68)	銅	1697~1747年	同上 距地不明
514	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.9	5.9	0.9	1.83	銅	1736~1740年	同上 宮文江口(沼川平野新田)所
515	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.7	6.1	0.9	1.63	銅	1736~1740年	同上 宮文江口(沼川平野新田)所
516	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.9	6.2	1.0	2.02	銅	1736~1740年	同上 宮文江口小梅所
517	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.8	6.1	1.0	2.27	銅	1736~1740年	同上 宮文江口(沼川平野新田)所
518	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	25.5	5.7	1.0	2.71	銅	1636~1659年	No.518-523は同者 同一遺構出土
519	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	23.2	5.9	1.1	2.73	銅	1736~1740年	同上 宮文相模面澤(吉田島所)
520	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.7	6.7	0.9	2.14	銅	1736~1740年	同上 宮文紀伊中之鳥所
521	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	22.2	6.9	0.9	1.58	銅	1736~1740年	同上 宮文相模面澤(吉田島所)
522	墓坑	-	埋下	寛永通寶(文銘)	21.5	6.0	1.2	3.07	銅	1656~1683年	同上 宮文一矢相口(亀)所
523	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	21.5	6.8	0.8	1.44	銅	1736~1740年	同上 宮文相模面澤(吉田島所)
524	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	(23.3)	6.6	1.3	1.91	銅	1697~1747年	距地不明
525	墓坑	-	埋下	寛永通寶(折壹文)	(23.5)	(6.8)	(1.7)	1.94	銅	1697~1747年	距地不明
526	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	21.8	5.6	1.0	2.61	銅	1636~1659年	No.526-527は同者 同一遺構出土
527	墓坑	-	埋下	寛永通寶(古壹文)	-	-	-	-	銅	1636~1659年	同上
528	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	(25.0)	(5.1)	(3.3)	(2.84)	銅	-	No.528-529は同者 同一遺構出土 銅鑄不明
529	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	(25.0)	(5.1)	(3.3)	(2.84)	銅	-	同上 距地不明
530	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	(23.9)	(6.8)	(3.8)	(2.98)	銅	-	No.530-531は同者 同一遺構出土 距地不明
531	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	(23.9)	(6.8)	(3.8)	(2.98)	銅	-	同上 距地不明
532	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	-	-	-	-	銅	-	No.532-537は同者 同一遺構出土 銅鑄不明
533	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	-	-	-	-	銅	-	同上 距地不明
534	墓坑	-	埋下	錢銭(特認不明)	-	-	-	-	銅	-	同上 距地不明

No.	遺構名	グリッド	層位	器種	大きさ(cm)			重量(g)	材質	鉛造年代	備考
					長さ	幅	厚さ				
535	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	-	銅	-	同上 鋼地不明
536	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	-	銅	-	同上 鋼地不明
537	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	-	銅	-	同上 鋼地不明
538	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	22.7	5.9	1.0	2.36	銅	1736~1740年	No.538~543は同一回収出土 元文江戸角口所
539	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	23.8	6.7	(1.4)	(10.33)	銅	-	同上 鋼地不明
540	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(10.33)	銅	-	同上 鋼地不明
541	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(10.33)	銅	-	同上 鋼地不明
542	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(10.33)	銅	-	同上 鋼地不明
543	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(10.33)	銅	-	同上 鋼地不明
544	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.7	7.0	(1.7)	2.99	銅	1697~1708年	北紫 No.544~553は同一回収出土 同一遺構出土
545	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(24.4)	(6.7)	(1.4)	(4.25)	銅	-	同上 鋼地不明
546	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(4.25)	銅	-	同上 鋼地不明
547	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	(21.7)	6.4	1.1	(3.15)	銅	1736~1740年	同上 元文江戸小梅所
548	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(25.0)	-	(2.1)	(3.15)	銅	-	同上 鋼地不明
549	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(24.1)	(6.6)	(1.7)	(3.37)	銅	-	同上 鋼地不明
550	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(3.37)	銅	-	同上 鋼地不明
551	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(5.43)	銅	-	同上 鋼地不明
552	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(5.43)	銅	-	同上 鋼地不明
553	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	-	-	-	(5.43)	銅	-	同上 鋼地不明
554	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(24.3)	-	(2.6)	3.41	銅	-	欠組 鋼地不明
555	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(23.9)	(5.8)	(2.4)	2.89	銅	-	欠組 鋼地不明
556	馬蹄	-	埋下	鉄貨(判読不明)	(24.0)	(5.8)	(1.8)	2.87	銅	-	欠組 鋼地不明
557	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	23.7	6.7	1.3	2.35	銅	1697~1747年	牛久組の古錢が回着 鋼地不明
558	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	(22.7)	6.7	1.4	(4.23)	銅	1697~1747年	No.558~559は同一回収出土 鋼地不明
559	馬蹄	-	埋下	寛永通寶(新寛永)	-	-	-	(4.23)	銅	1697~1747年	同上 鋼地不明
560	馬蹄	-	埋下	鉄貨(荷物鉄)	-	-	-	-	銅	-	紗地不明
735	E C 3 f H F			寛永通寶(新寛永)	22.8	6.5	1.1	2.12	銅	1736~1740年	元文山城根大跡所
736	I C B j H F			寛永通寶(新寛永)	(23.1)	-	1.0	1.33	銅	1736~1740年	欠組 元文山城根大跡所
737	E C 3 f H F			寛永通寶(新寛永)	23.3	5.3	1.3	3.13	銅	1764~1770年	明和御前長崎所
738	E C 1 K H F			寛永通寶(新寛永)	21.8	6.9	0.9	1.62	銅	1736~1740年	元文山城根大跡所

VI 若干の考察

1. 造構

〔縄文時代〕

豊穴住居跡

本遺跡では縄文時代の住居跡が全部で39棟確認されている。その殆どが縄文時代中期末葉～後期初頭に集約されるもので、時期的な幅は狭い。これらの住居跡について分布・規模・柱配置・か形態などの属性毎に特徴をまとめた。

分布状況： 本遺跡は南西側から張り出す丘陵の緩斜面上に立地するもので、南北を沢に挟まれた中間部にあたる。遺構の分布はこのうち標高203m以下の部分に多く、特に北西側の沢際での密度が高い傾向にある。

複式炉を持つ大形～中形の住居跡の分布は北西側で目立つのに対し、それ以外の炉形態を伴う中形～小形の住居跡は、中央部付近に散在するような分布の傾向を示している（第153図参照）。

平面形・規模： 平面形は円形～梢円形を基調とし、規模は最小のもので長径約270cm×短径290cm、最大のもので長径約940cm×短径912cmを測る。平面形と規模の間に法則性が見受けられ、おおむね6m以上の住居跡の平面形には円形と梢円形の両者が存在するが、5m以下の住居跡の平面形では梢円形を呈するものが認められていない（第4表参照）。

重複関係が認められたのは39棟中14棟で、そのうち建て替えによる拡張が認められたのは15号住居跡、16号住居跡、27号住居跡である。15号住居跡、16号住居跡では周溝が2条検出され、拡張が行われたことが確認された。また、本遺跡で最大の27号住居跡では炉を通る主軸を対称にして7本の柱穴が規則的に廻る配置を持つが、柱穴（P4、P12）の重複関係から、後に拡張され柱が中心よりや壁際を廻るものへと変化していることが判明した（第64図）。

〔柱穴〕 配置形態により以下のように分類した（第152図）。

A：炉を通る主軸と対称に規則的に配置されるもの

これについては本数によって更に細分している。

1…3本 2…5本 3…6本 4…7本 5…8本 6…9本 7…10本

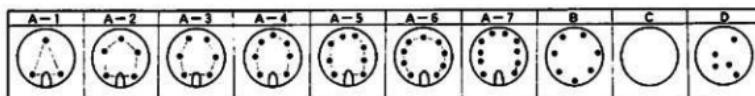
B：複数の柱穴が壁際附近に近いところを廻るもの

C：プラン内に柱穴がみられないもの

D：不規則なもの

E：不明（調査区域外など）

以上10タイプの構成率は、A-1 (2.5%)、A-2 (10%)、A-3 (2.5%)、A-4 (12.5%)、A-5 (5%)、A-6 (2.5%)、A-7 (2.5%)、B (12.5%)、C (25%)、D (25%) となっている（Eタイプを除く）。



• 柱穴

△ 炉

第152図 柱穴配置模式図

炉跡： 炉跡はおおむね斜面下方の壁面に接して構築されるか、等高線に並行するように南東側に構築されるものが殆どで、斜面上方にあたる西側を向くものは皆無である。構築される方向に関しては、炉形態の違いや出土した遺物などから特に時期的な変遷の傾向を辿ることができないことから、地形に沿って作られたものと考えるのが妥当と思われる。炉跡の形態についてはA：複式炉（17基）、B：石圓炉（8基）、C：土器埋設炉（8基）、D：地床炉（2基）、E：不明（3基）の5群が確認された。それぞれを形態や構築材の違いなどによって更に細分している。

A：複式炉： 5つのタイプに細分できる。複式炉については、東北地方南部の事例にもとづく梅宮茂氏、丹羽茂氏、日黒吉明氏の論考がある。岩手県内の複式炉の事例については、中村良幸氏、小原真一氏によりそれぞれ集成・分類が成されている（中村1986、小原1995）。本報告書では複式炉をいわゆる「燃焼部を複数もつもの」として捉えることとし、2つ以上の施設で構成されているものについては住居跡の最内間に接する施設を燃焼部、それより壁間にあたる施設を前庭部（ここでは掘り込み部として扱う）と位置付け、以下そのように記述した。分類の基準は小原氏の論考を参考とした。

- ① 石圓炉+掘り込み部
- ② 石圓炉+石組部+掘り込み部
- ③ 土器埋設石圓炉+石組部+掘り込み部
- ④ 石圓炉+石組部
- ⑤ 掘き取りなどによる形態不明

B：石圓炉： 3つのタイプに分けられる。

- ① 石圓炉
- ② 石圓炉+土器片
- ③ 石圓炉+焼土

C：土器埋設炉： 3つのタイプに分けられる。なお、土器埋設炉C類①、②とした炉については中村良幸氏の観音堂E、C類、小原真一氏の柳上H類に近似するものである。ここではこれらの研究成果を踏まえ、炉の再考を行った小倉和重氏の論考（小倉1998）に基づき、斜位土器埋設炉として述べることとする。

- ① 斜位土器埋設炉（観音堂E類に類似）
- ② 斜位土器埋設炉+石圓炉（観音堂C類、柳上H類に類似）
- ③ 土器正立埋設石圓炉

D：地床炉

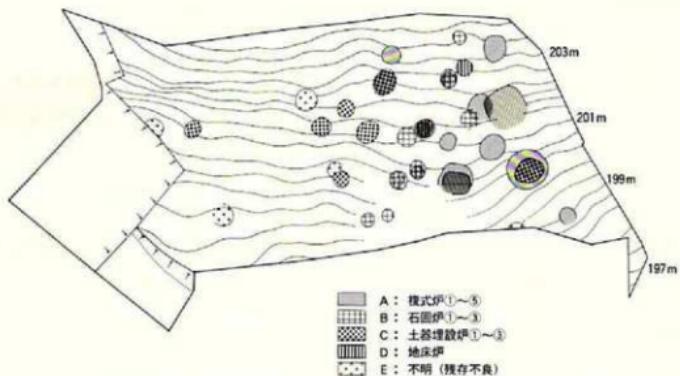
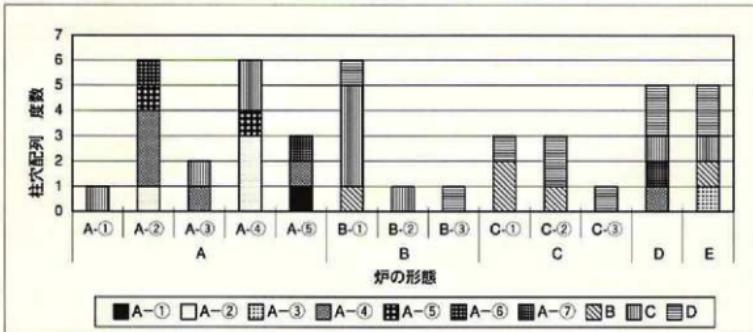
E：不明（残存不良など）

次に、炉と柱穴配置の関係について次頁のグラフに示した。

A：住居跡における炉の形態と柱穴配置の関係

柱穴配置	炉の形態										D	E	計
	A-①	A-②	A-③	A-④	A-⑤	B-①	B-②	B-③	C-①	C-②			
A	-①				1								1
	-②		1		3								4
	-③												1
	-④	3	1		1							1	6
	-⑤	1		1									2
	-⑥	1											1
	-⑦				1							1	2
B						1							1
C	1		1	2		4	1		2	1		1	11
D						1		1	1	2	1	2	10
計	1	6	2	6	3	6	1	1	3	3	1	5	43

B：



第153図 炉形態別住居分布図

炉石に用いられた砾の石質について

炉石として用いられた砾の石質について、一戸町の文化財調査専門委員である川守田浩氏に内眼による鑑定を依頼した。対象となる住居跡は1号、4号、7号、5号、9号、10号、13号、14号、16号、18号、20号、21号住居跡である。その結果、炉石として使用されているのは主に、凝灰岩、チャート、花崗岩質岩、砂岩、安山岩などであり、このうち凝灰岩、花崗岩質岩、安山岩などの産地は、主として遺跡の東側を流れる平穂川流域である可能性が高いという鑑定結果を得た。

次に、複式炉に用いられる石質の傾向を列記する。燃焼部である石組炉には凝灰岩、安山岩が多く使用され、これに花崗岩質岩、チャート、砂岩が次ぐ。火を受けた面は珊瑚色～弱い赤色に変化している。炉石はいずれも大形で、長辺50cm以上のものも目立つ。これに対して石組部に使用されるものにはチャート、砂岩が多い（第154図参照）。

尚、2号住居跡において炉の構築壁と反対側の隙間で大形の花崗岩質岩製の梢円窓を検出した。炉が構築される壁面の反対側に大形の花崗岩（質岩）が置かれるという現象は、本遺跡と同様に平穂川沿いに位置する御所野遺跡においても同様に認められ、共通点として注目される。これに隣接して御所野遺跡では、遺跡から出土する炉石や配石を構成する花崗岩が、同遺跡から約2kmも離れた茂谷山から搬入されたものであるとの鑑定結果を得ており、同遺跡の居住者が茂谷山に対して何らかのシンボリックなイメージを持っていた可能性を示唆している。この点においては、本遺跡の花崗岩質岩は平穂川の河原を産地とする可能性が高いという鑑定結果を得ており、御所野遺跡の例とは様相を異にしている。

半截柱穴を持つ住居跡について

本遺跡で見つかっている27号住居跡は坪9m超と、他の住居跡に比べ抜き出で大形である。この住居では柱の迹え痕跡から抜張が行われたことが判明している。このうち、抜張前のA-4タイプの柱穴で炉を中心とした主軸と対称に7本の柱穴が認められた。半截柱穴が認められたのはP1～P3、P5～P7で、当初は通常の柱穴同様に、プランを5cmほど掘り下げた段階で柱痕の有無を確認した後精査を行った。この際、柱痕は確認されず、掘削を続行した。その後、30cmほど掘り下げた段階で三日月形の柱痕を認めたものである。このため、柱材が寄ってそのまま残存したのではなく、抜き取られた状態を示すものである可能性が考えられる。

県内の同様の事例は、一戸町の御所野遺跡（高田和徳氏のご教示による）、大迫町の觀音堂遺跡（中村良幸氏のご教示による）の堅穴住居跡でも確認されている。また、一関市の清水遺跡は縄文時代後期初頭の集落遺跡であるが、この遺跡において外径13mを測る円形の半截柱穴列が確認されており、本遺跡の事例とは時期の点で若干の相違はあるものの同様の柱痕を持つ事例である（村上2002）。

重複関係が認められた住居跡と床面出土遺物について

本遺跡で見つかった39棟の住居跡のうち、住居跡同士の重複関係が認められたのは2号～4号、12号、15～20号、27号、30号、35号、36号の14棟である。これら床面出土遺物と、遺構の新旧関係を第155図～158図の遺物集成図に示した。

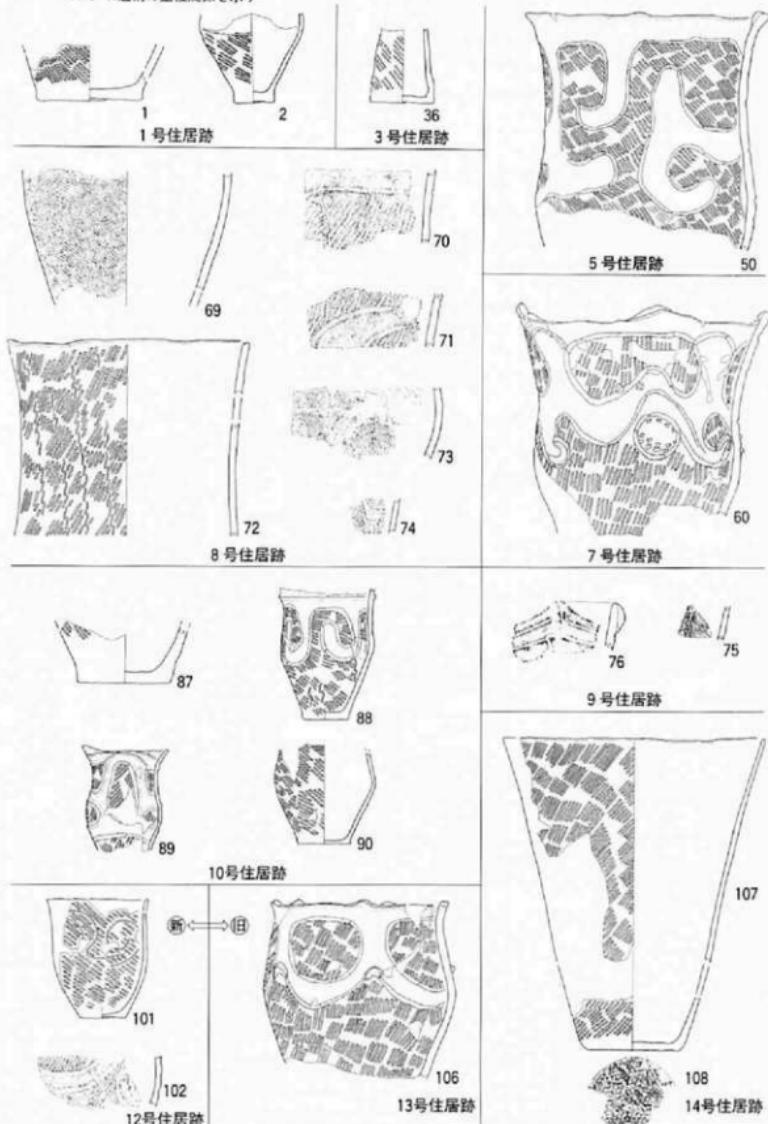
土坑

本遺跡では20基の土坑が検出されている。このうち、明確に底面遺物が伴っていたのは1号土坑のみで、出土した遺物などからみて墓坑であった可能性が考えられる。他の土坑についての性格など詳細については不明な点が多いが、出土した遺物、埋土の状況などから相対的に判断して堅穴住居跡とほぼ同時期の縄文時代中期末～後期初頭と捉えておきたい。また、本遺跡では住居数39棟に対して土坑数20基と、土坑が少ない

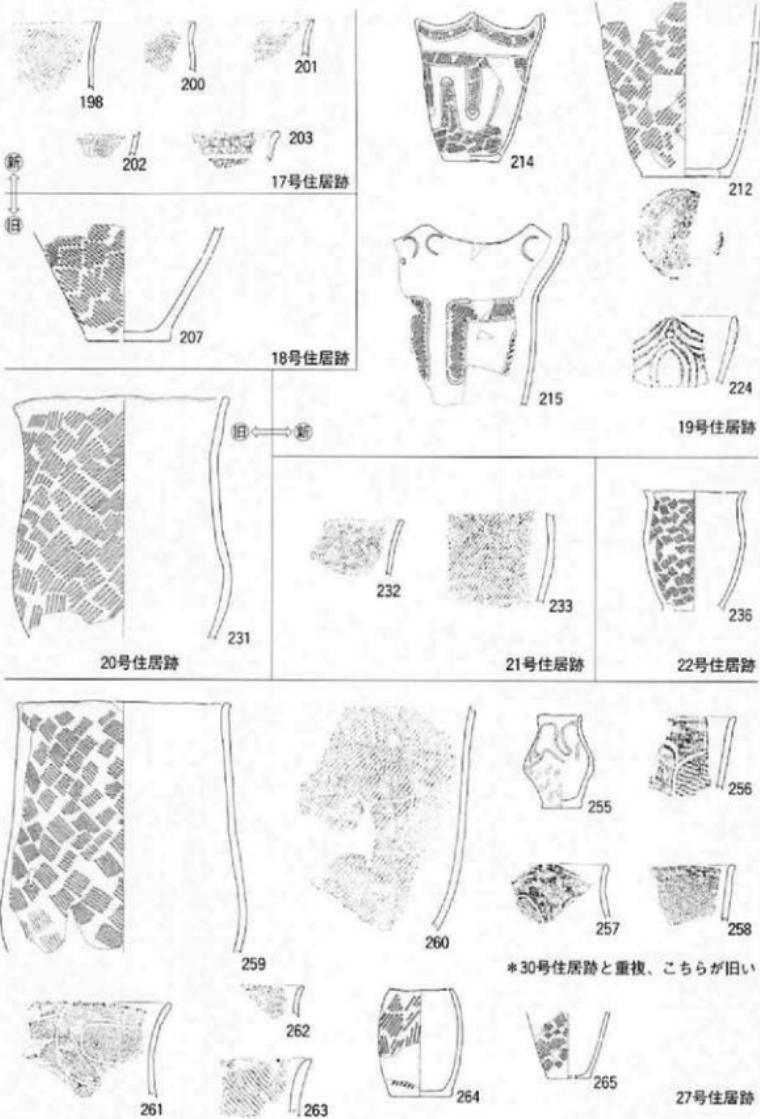


第154図 炉石に用いられた砾の石質・炉形態分類図

* ⇔ 遺構の重複関係を示す

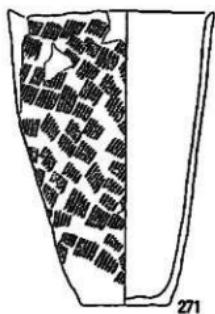


第155図 住居跡床面出土遺物集成(1)

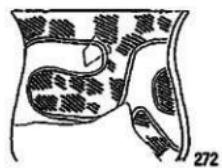


第156図 住居跡床面出土遺物集成(2)

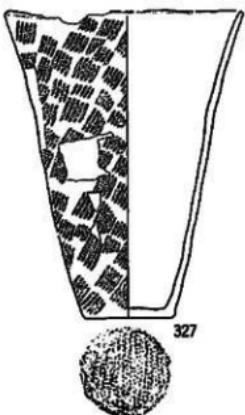
*27号住居跡と重複、こちらが新しい



271

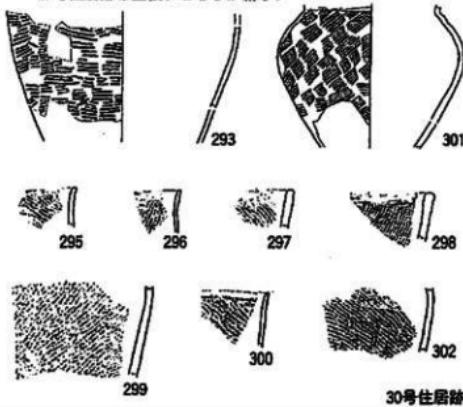


28号住居跡

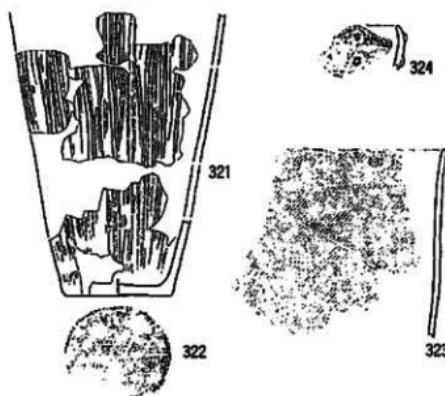


327

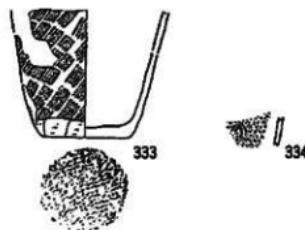
33号住居跡



30号住居跡

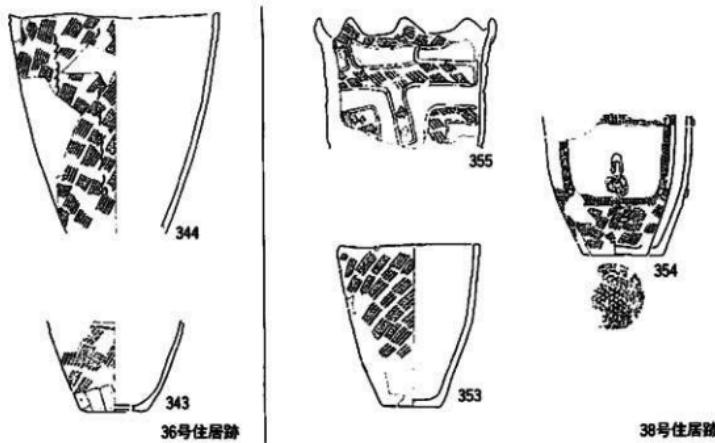


32号住居跡



34号住居跡

第157図 住居跡床面出土遺物集成(3)



第158図 住居跡床面出土遺物集成(4)

ことが特徴として挙げられる。

中世以降

豊穴建物跡： 豊穴建物跡は調査区域内から6棟が確認された。これらは形態の違いによって、①壁の一方に張り出しを持つもの、②張り出しが持たず、長方形を呈するものの2つのタイプに分けられる。その性格については（住居跡なのか、倉庫的な性格をもつものなのか）不明な点が多いが、掘立柱建物跡とは作られる場所を異にするなど、相違点が認められることから、使用方法に関して違いがあったことが窺える。1号豊穴建物跡床面からは14世紀末～15世紀初頭に相当する白磁皿1点と模造鏡1点が完全な形状で出土しており、時期としては中世の建物跡として大過ないものと思われる。掘立柱建物跡と同時存在していたかどうかについては、出土遺物が少なくて確証は得られていないが、柱間寸法の傾向や北宋錢が出土するものが存在することなどから可能性としては否定できない。

掘立柱建物跡： 掘立柱建物跡は16棟が確認された。本跡跡で検出した柱穴の総数は480基に上る。このうち建物跡に帰属すると仮定したのは107基である。掘立柱建物跡は調査区東側斜面下部分および北側から確認されており、ほとんどが重複している。このことから同じ場所で繰り返し建て替えが行われたことが窺える。調査区東側斜面下の半場は後世の搅乱が著しく、調査区際の断面観察からは推定不能であったが、平面の形状から4回以上造成された可能性があり、長期間にわたり同一の場所に改築が行われ使用されていたものと考えられる。各建物跡は長方形のプランを持つものが殆どで、方形を呈するのは3～5号掘立柱建物跡のみである。長方形プランを呈するものはいわゆる「直家」形式の建物跡で、そのなかでも7号掘立柱建物跡は四面廊建物、8・10号掘立柱建物跡は下屋が付属する建物と考えられる。柱間寸法の内訳は6.3尺（約190cm）が1棟、6.5尺（約197cm）が1棟、6.6尺（約200cm）が4棟、7尺（約212cm）が3棟、7.5尺（約227cm）

が1棟、8尺（約242cm）が1棟、9.5尺（約288cm）が1棟である。掘立柱建物跡の間寸について、羽柴直人氏は「盛岡藩領における近世掘立柱民家の柱間寸法は5寸で割り切れる数値が使用され、多用される寸法は7尺以上が一般的である。この寸法の長さは、家の規模についての規制から生じている可能性がある。」と指摘し、また「岩手県北部の中世後半の堅穴建物に伴う掘立柱民家の主屋では5寸で割り切れる数値の柱間寸法が用いられている。それらには近世掘立柱民家の柱間寸法より短い6尺台の寸法が用いられている例がある。」としている（羽柴2001）。

本調査で検出している建物跡においても5寸刻みまたはそれに近似する基準寸法を用いているものが多く、この傾向は見受けられる。しかし建物跡の年代を決定する共伴遺物は2号掘立柱建物跡から出土した至道元宝1枚（初鎌年995年）・石臼（上臼）、13号掘立柱建物跡出土の赤漆塗椀片、掘立柱建物跡群出土の燕寧元宝1枚（初鎌年1068年）・元宝通宝1枚（初鎌年1078年）・紙石のほか、判読不明銭貨4枚と少ないため、時期の特定は困難と思われ、広く中世～近世と捉えたい。

調査区東側の掘立柱建物跡は堅穴建物跡と同時期に存在したこととも考えられるが、両者を結びつける要素が不明なため、とくに言及は避ける。しかし、建物の主軸方向と一致して接する1号工房間連施設や4号堅穴建物跡、近距離にある1・2号戸門跡はその対応関係が想定される。また、調査区北側に立地する1～5号掘立柱建物跡は、本調査区に隣接する青洞宗仁昌寺との関連も考えられる。なお、15号掘立柱建物跡は、地主の澤口萬蔵氏によると昭和50年代まで船架（はさ）収納用の小屋があったとのことで、柱材も残存していることからおそらくこれであろう。

鐵冶工房跡について

調査区北東側より鐵冶工房跡間連施設とみられる堅穴建物跡を2棟検出した。1号工房間連施設の床面からは鍛鉄製品である鉄鍋（半截された状態）、銅製品である鉄札、雁股磁、素材鉄の可能性のある棒状鉄器が得られている。一方、1号工房跡床面からは炭化物が充填された小ピットとそれに落がる細い渦、還元色をしめす現地性の焼土、部分的に黒色を示す扁平磚、鐵塊系遺物と剝片状鐵滓、鍛造削片などが得られた。後三者はそれぞれ、鍛鉄の脱炭時、銅製品加工時、小鐵治の際に発生する遺物であることから、1号工房跡ではそれらの各作業が行われていた可能性が高い。一方、1号工房間連施設から出土した鉄鍋、鉄札、雁股磁、棒状鉄器のうち、鉄鍋は半截状態にあることから新たな鉄製品を作る際の素材（再利用）の可能性が高い。また、棒状鉄器は同形態の資料が検出された北海道千歳市のオサツ2遺跡、同平取町のカンカン2遺跡の例などから釣針の製作に使用されたものと推測されており、こちらも素材である可能性が考えられる。また、鉄札は当初、鍛鉄素材を元に新たに製作されたものか、あるいは他と同じく側素材として保管されていたものか、両方の可能性があると想定された。しかしながら鉄札の形式学的年代は11世紀から12世紀後葉（津野仁氏のご教示による）に相当するとみられるものであり、鉄鍋の製作年代は13世紀前（越田賢一郎氏のご教示による）とみられることから、この時点で鉄札はすでに廃用・再生産のための素材となっていた鉄鍋より古いことになる。武具は伝世することが知られており概ねは判断できないが、床面出土遺物4種の内の3種までが素材であろうことから、鉄札も素材として保管されていたと考えるのが適当であろう。

また、今回の調査では小鐵治作業のうちに生産された鋼製品が未確認であり、詳細を知ることができなかつたが、鐵製品の廃用・再生産のしくみについてはその当時の小島谷地区の社会背景やニーズなどから考慮する必要があり、今後の検討課題としたい。

まとめ

仁昌寺Ⅱ遺跡は、西側から北東方向に張り出す丘陵の斜面に立地し、縄文時代中期末葉～後期初頭、中世～近世にかけて営まれた複合遺跡である。遺物総数は大コンテナ38箱で、その内訳は土器（縄文時代早・前・中・後・晚期、弥生時代後期）、土製品、陶磁器、石器、石製品、金属製品である。以下では時代毎に遺構、遺物の特徴を箇条書きに列記してまとめたい。

（縄文）

- 1 本遺跡で見つかった縄文時代住居跡からは大木10式～十腰内1式相当の遺物が出土しており、ごく狭い時期幅の中で営まれた集落跡であることが判明した。
- 2 縄文時代の遺構としては竪穴住居跡39棟、上坑20基、炉跡2基、竪穴状遺構10基が確認された。
- 3 縄文時代の遺構は北側を沢に面した丘陵斜面部で比較的密であり、そのほか中央部の緩斜面にまとまって見られる傾向が認められる。
- 4 竪穴住居跡はかの形態によって分布の傾向を異なる。複式炉と石圓炉は北西部を沢と接した丘陵斜面、土器埋設炉は中央部のやや低くなった地点に位置する傾向が認められる（第153図）。
- 5 竪穴住居跡はその規模によって炉の形態を異なる。複式炉を持つ住居跡は長径9m以上の大形のもののが存在し、石圓炉を持つ住居跡では長径4m前後の小形のものが多い。そのほかは中間的な様相を示す傾向が認められる。
- 6 27号住居跡と30号住居跡、28号住居跡と29号住居跡、17号住居跡と18号住居跡、19号住居跡と20号住居跡には重複関係が認められ、炉の形態が変化している。前二者は複式炉⇒土器埋設炉、後二者は複式炉⇒石圓炉への変遷が看取できる。このことから本遺跡において、新旧関係が明瞭な住居跡においては炉の変遷が、複式炉⇒土器埋設炉⇒石圓炉と辿れる傾向が見出せそうである。規模はその変化に対応するように小型化してゆくという傾向が見られるが、新旧関係やプランの判断が困難であるものにおいてはこれに当てはまらないものも存在し、すべてがこの限りではない。
- 7 27号住居跡からは柱穴に半截状の柱材を用いたものが計6基確認された。同様の柱穴は御所野遺跡でも例があり（一）町教育委員会高田氏のご教授による）、この遺跡との関連性が示唆される。
- 8 炉の素材として用いられている礫は、その大部分が平瀬川流域を産地とするものであることが判明した。

（中世以降）

- 1 中世以降の遺構としては、竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡16棟、工房開連施設1棟、工房跡1棟、井戸跡2基、墓坑51基、住居状遺構1棟、集石遺構4基が確認された。
- 2 竪穴建物跡は、壁の一辺に出入り口状の張り出しを持つものと持たないものの2種類が認められる。1号竪穴建物跡床面からは製作年代14世纪末～15世纪初頭と思われる中国系の白磁皿1点と模範鏡1点が完形で出土した。
- 3 掘立柱建物跡は調査区の北側緩斜面と東側斜面下位に集中して確認され、東側では平場を構築し、繋り返し建て替えが行われているのが確認された。建物跡の時期は柱間寸法や出土した遺物などから中世～近世に相当する可能性がある。
- 4 1号工房開連施設の床面からは銛鉄製品である鉄鍋（半截された状態）、銅製品である鉄札、雁股轍、素材鉄の可能性のある棒状鉄器が得られている。これらの遺物は形態から推定される製作年代がまちま

ちであること、鉄錆が半蔵状態にあることなどから新たな鉄製品を作る際の素材（再利用）として保管されていた可能性が高い。

- 5 1号工房跡床面からは炭化物が充填された小ピットとそれに繋がる細い溝、還元色をしめす現地性の焼土、部分的に黒色を示す扁平錆、鉄塊系遺物と剝片状鉄錆、鍛造剝片などが得られた。後二者はそれぞれ、錆鉄の脱炭時、鉄製品加工時、小鋳冶の際に発生する遺物であることから、1号工房跡ではそれらの各作業が行われていた可能性が高い。
- 6 墓坑は調査区の南側と北西側の斜面上方に集中して51基が確認された。出土した遺物から近世に位置付けられるものと思われる。底面に方形の棺桶痕を認めるものも存在することから、近代以降のものも混在すると見られる。

【参考文献】

1. 一ノ関町誌編纂委員会 1982 「一ノ関町誌」
2. 大迫町教育委員会 1986 「観音堂遺跡」 大迫町埋蔵文化財報告第11集
3. 北海道平取町教育委員会 1996 「カンカン2遺跡」 平取町文化財調査報告書Ⅲ
4. (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 「オサツ2遺跡(2)」 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第103集
5. 小倉和重 1998 「斜壁土器埋設坑についての一考察」『奈和』第36号 奈和人会
6. 横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター 1998 「兵の時代 古代末期の東国社会」
7. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1983 「小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第69集
8. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1984 「平船Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第76集
9. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1985 「小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第85集
10. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 「柳上遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第213集
11. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 「田代遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第262集
12. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「清水ヶ野遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第351集
13. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「上野遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第359集
14. (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「鳥田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第368集

VII 仁昌寺Ⅱ遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

岩手県二戸郡一戸町に所在する仁昌寺Ⅱ遺跡は、国道4号線小島谷バイパス建設に伴い、平成12年から平成13年の2カ年にわたり発掘調査された遺跡である。調査の結果、縦文時代中期末葉から後期初頭の住居跡、中世堅穴建物跡6棟・掘立柱建物跡16棟・工房関連施設1棟・工房跡1棟が検出された。1号工房関連施設には床面をすり鉢状に掘り込んで焚却された直径約40cmの火葬焼跡と推定される遺構が残っていて、その周辺の床面からは鐵塊系遺物に加え、塊状滓、粒状滓、薄片状鐵滓、および台石と思われる礫などが見出された。隣接する1号工房跡では鉄札、雁股轍、刀子、半裁された鐵鍋、銅素材と推定される棒状鐵器、塊状滓、鋸片、鍛造制片と見られる遺物などが見出されていて、鉄札、鐵鍋は形態学的にそれぞれ11後半から12世紀代、13世紀代の資料と推定された¹⁾。鐵器および鐵関連遺構の検出状況から、遺跡内では堅穴建物内で保管された鉄札や鐵鍋をはじめとする鐵器を再処理して、目的とする鋼または製品鐵器を製作するという操作が実施されていたものと推定された¹⁾。

鉄に関する生産活動状況を解明する方法の一つに、出土遺物の金属考古学的調査がある。仁昌寺Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査の結果、2棟の堅穴建物内では酸化鉄と粘土状物質が反応し生成したと推定される鐵滓、鍛造制片が確認され、鍛造制片と鉄札、鐵滓中に残存する鉄と鐵鍋に含有される銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)三成分の組成比はほぼ同じものが見られた。考古学的発掘調査結果を考え合わせると、遺跡内では、①鐵鉄の脱炭による鋼の製造(精錬)、②鋼を加熱・鍛造打して目的とする鐵器を製作する鍛冶、という2つの操作が行われていて、鉄札をはじめとする鋼製鐵器については②、鐵鍋については①の素材として使用されたとみることができた。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は鉄札9点、刀子1点、雁股轍1点、鐵鍋1点、鐵精片2点、鐵塊系遺物1点、薄片状鐵滓2点、および鐵滓7点である。表1-1から表1-4に調査資料番号、資料名、検出遺構、層位、および遺物番号を示す。

3 調査試料片の抽出

鐵器についてはダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル(以下、ハンドドリルという)を使い、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、約0.1gの試料片を2つ抽出した。鐵塊および鐵滓についてはハンドドリルで深さ1~2cmの切り込みを入れ、それぞれの切り込み面から0.5~1gの試料片を2つ抽出した。鍛造制片については2分しそれぞれを分析試料とした。各資料から抽出した試料片のうち多き方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料片抽出位置は図1~12に示すところである。

4 調査方法

組織観察用試料片はエボキシ樹脂に埋め込み、エメリーペーパー、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄器および鉄塊に残存する非金属介在物、鉄滓の量を、エレクトロニ・プローブ・マイクロアナライザ（EPMA）で分析した。

化学分析用試料片は表面に付着する土砂、鏽をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチアルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料片を130°Cで2時間以上乾燥し、鉄器、鉄滓とともにメノー乳鉢で粉砕した後テフロン分解容器に秤量し酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定容とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、チタン（Ti）、けい素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-OES法）で分析した。

5 調査結果

5-1 鉄器・鉄塊・薄片状鉄滓の化学組成

鉄器、鉄筋片、鉄塊系遺物および鉄造剝片（肉眼観察で薄片状鉄滓に分類された資料のうち、5-4の組織観察結果に基づき鉄造剝片であることが確実になったもの）から抽出した試料片の化学成分分析結果を、表2～4に示す。No.1、No.4、No.7、No.9 Eg・Rg、No.10、No.14Aから抽出した試料片のT.Feは94%以上で、ほぼメタルからなる試料片が、他の12試料片は73%未満で、錆化が進んだ試料片が分析されている。No.7およびNo.10にはそれぞれ0.052%、0.058%のNi、0.107%、0.091%のCoが、No.9 Eg・Rg、No.14A・Bには0.1%を上回るPが含有されている。これらの微量元素はほぼメタルからなる試料片から検出されており、鉄器地金または鉄塊そのものに含有されていたとみることができる。

No.2からも0.1%を上回るPが検出されている。Pについては埋蔵環境下から富化されることがあるため、検出されたPを鉄器の素材となった地金そのものに含有されていたものとして扱うことは危険である³⁾。ここでは上記3点の製作に使用された地金に0.1%を超えるPが含有されていた可能性があることを指摘するにとどめる。

5-2 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果

No.1(図1a₁)から抽出した試料片はそのほとんどがメタルによって構成されていたので、ナイタールで腐食した。マクロエッチング組織はほぼ一様に腐食されている(図1b₁)。b₁領域R₁・R₂はパーライトとフェライトからなり(図1c₁₋₂)、炭素量0.2～0.3%の鋼とみることができる³⁾。メタル部分にはCaO、Al₂O₃、K₂O、MgO、SiO₂を主成分とし、数%のFeOを含む微細な非金属介在物(鋼を製造する過程で除去されずに残った異物)がいたるところにみられた(図1d₁・d₂)。

No.9 Rg部から抽出した試料片のメタル部分は、炭素濃度分布が不均一な割である。マクロエッチング組織は主としてフェライトからなる領域と、炭素量0.2～0.3%の鋼(図2マクロエッチング組織枠で囲んだ部分に対応)が層状に重なった組織により構成される。Egのメタル部分には図1c₁とは同じ組成の非金属介在物が、Rgのメタル部分にはウスタイト(W: 化学理論組成FeO)およびマトリックス(M)からなる非金属介在物が観察された(図2)。

No.10から抽出した試料片のマクロエッチング組織は、その全域がほぼ一様に腐食されている。併せて囲んだ内部はパーライトとフェライトからなり、炭素量0.2～0.3%の鋼と推定される。メタル部分には、ウスタ

イト(W)、Fe-Ti-Al-V-O系化合物(XT)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、およびマトリックス(M)によって構成される非金属介在物がみられた。

No. 2・3、およびNo. 5～8から摘出した試料片にはそれぞれ、ウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、およびマトリックス(M)、ウスタイト(W)、Fe-Ti-Al-V-Mg-O系化合物(XT)、およびマトリックス(M)、ガラス質ケイ酸塩(S)、ガラス質ケイ酸塩(S)、ウスタイト(W)、Fe-Ti-Al-V-O系化合物(XT)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、およびマトリックス(M)、ガラス質ケイ酸塩(S)からなる非金属介在物が見出された(図4)。

No. 13(図7a)から摘出した試料片のマクロエッティング組織はその全域が黒く腐食されている(図7b・c)、併で開んだ内部のミクロエッティング組織は初析セメントタイト(PCm)とバーライトによって構成され、鋼中にウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(F)、および微細な化合物を内包するガラス質ケイ酸塩(S)からなる非金属介在物がいたるところに残存していた。No. 14A・Bから摘出した試料片はレーデブライト組織によって構成されている³⁾。鋳型に注ぎ込まれた浴銅が急冷された可能性が高いことを示している(図5)。

No. 4、No. 11、およびNo. 12から摘出した試料片にはメタル組織を推定できる領域を見出すことができなかった。No. 3、No. 5、No. 7、およびNo. 9 Egから摘出した試料片には局所的にメタルが残存していたが(図3・4)、腐食によるメタル部分の喪失をさけるため、その実施を見合せた。

5-3 鉄滓の化学組成

No. 15およびNo. 16のT.Feは71.82%、70.37%で、それぞれ1.77%、2.96%のSi、0.536%、1.03%のAlを含有する。主として酸化鉄からなる試料である(表4)。

No. 13鉄塊系造物に固着する鉄滓、No. 17、No. 18、No. 20～No. 24のT.Feは39～74%、Si、Alはそれぞれ1.6～13.4%、0.559～5.34%である。酸化鉄と粘土状物質が反応し生成したスラグである。No. 19のT.Feは8.40%、Si、Alはそれぞれ22.2%、8.26%で、他の7点の鉄滓に比べ高レベルにある。主として粘土状物質からなる資料と推定される。

5-4 鉄滓から摘出した試料片の組織観察結果

No. 15のマクロ組織にはいたるところに空隙が残存している。併で開んだ内部のEPMAによる組成像はウスタイト(W)からなり、その回りは微細な化合物が残存したガラス質ケイ酸塩(M)が取り囲んでいる。No. 16は主としてウスタイトによって構成され、表面にはヘマタイト(Hem)と推定される領域が固着している(図8)。

No. 20はウスタイトとガラス質ケイ酸塩によって構成されている(図11)。No. 22から摘出した試料片のマクロ組織は、やや暗灰色のFeO-MgO-SiO₂系化合物[F:マグネシウムを固溶する鉄かんらん石:2(Fe,Mg)O·SiO₂と推定される]、暗灰色のFeO-Al₂O₃系化合物(H)、および微細な化合物が混在したマトリックス(M)からなる領域R₁と、R₁にウスタイト(W)が混在した領域R₂によって構成されている(図9)。No. 13鉄塊系造物に固着する鉄滓、No. 17、およびNo. 23もNo. 22とは同じ組成をとる。No. 21はウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(P)、およびマトリックス(M)からなる(図10・11)。

No. 18のマクロ組織にはいたるところに空隙がみられる。併で開んだ内部にはFe-Ti-Al-V-O系化合物〔マグネタイト(Mag)と思われる〕とガラス質ケイ酸塩(S)によって、No. 19から摘出した試料片は、Fe-O系、FeO-CaO-Al₂O₃-SiO₂系(S₁)、FeO-Al₂O₃-MgO-SiO₂系(S₂)、Al₂O₃-SiO₂系(S₃)領域が残存している(図10)。

6 考察

6-1 推定される古代の鋼製造法

古代および中世の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一一致をみるにいたってはない。その主因は、原料鉱石【砂鉄もしくは鐵鉱石¹¹⁾】を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違によると考えられる。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、銅と純鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力銅部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある⁶⁾。製錬炉で直接に銅が造り出されるという意味で、この方法は近世たら吹製鉄における錠押法⁷⁾によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄【炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に銅からなるが純鉄も混在すると考えられている）】を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶⁸⁾と呼ばれている。古代・中世に銅を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1~0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550°C以上に保つ必要がある⁹⁾）、主として銅から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

おびただしい数の銅仏や銅鍋、銅釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように¹⁰⁾、遅くとも9世紀には銅鉄を生産する技術、すなわち銅鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている¹⁰⁾。得られた銅鉄を溶解し錠型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銅鉄を脱炭することにより銅の製造也可能となる。後者はこの方法に基づくもので、銅鉄を経由して銅が製造されるという意味で、間接製銅（鉄）法¹¹⁾に位置づけられる。

銅鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たら吹製鉄における大鍛冶¹²⁾がよく知られている。たら吹製鉄には錠押法と錠押法⁷⁾の2つの方法がある。後者における生産の主目的は錠鉄（主として銅からなる鉄塊）、前者は炉外に流し出される銅鉄で、副生成物として炉内に錠鉄もできる。錠押法において錠鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銅鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銅鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銅鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火炎にふれ酸化され、銅（左下鉄）となる。ここまで操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である錠とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にしてさらに脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている¹²⁾。上述から明らかのように、大鍛冶における「本場」の操作内容は、先に述べた精錬鍛冶と出発物質こそ異なるものの、基本的には同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銅鉄の脱炭が図られるが、溶銅（銅鉄を溶融状態とする）を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている^{13)~15)}。この場合、溶銅の確保とそれを脱炭するための設備が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

古代ならびに中世には、複数の鋼製造法があった可能性がある。以下では、この点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、鉄滓の成因について検討し、併せて鉄器地金の分類

を行うこととする。

6-2 鉄滓の成因と検出遺構における生産活動

金属考古学的調査を行った鉄滓の外観形状は、薄片状または塊状のいずれかに分類される。薄片状鉄滓に分類されたNo.16は、摘出した試料片の全城がウスタイトとヘマタイトからなる。純化された銅を加熱・鍛打した際に、銅表面が剥離して生成した鍛造剥片である。同じく薄片状鉄滓に分類されたNo.15、No.20から摘出した試料片にはいたるところに空隙がみられ、そのほぼ全城がウスタイトとマトリックスまたはガラス質けい酸塩によって構成されていた。溶融または部分溶融状態にある酸化鉄に富んだ鉄滓が固化した資料と推定される。No.15・16、およびNo.20が検出された1号工房跡からは、鉄滓が固着したNo.13鉄塊系遺物が見出されていることを加味すると、鉄塊表面に固着した鉄滓を過熱・鍛打して除去する操作、およびある程度純化された銅を加熱・鍛打する操作が行われていた可能性の高いことを指摘できる。

上記4点の資料に加え、1号工房跡からは粒状、流状、および塊状をした鉄滓が出土している。塊状滓であるNo.18はマグネタイトと推定される化合物、流状滓であるNo.21は、ウスタイト、 $\text{FeO}\text{-MgO}\text{-SiO}_2$ 系化合物、塊状滓であるNo.22、No.23、およびNo.13鉄塊系遺物に固着する鉄滓は、それに $\text{FeO}\text{-Al}_2\text{O}_3$ 系化合物が加わった化合物がガラス質ケイ酸塩または微細結晶を内包するガラス質ケイ酸塩によって取り囲まれた組織からなる。No.13鉄塊系遺物に固着する鉄滓、No.18、No.22、No.23の各鉄滓がFe、Si、Alを主成分することを考慮すると、酸化鉄に富んだ鉄滓と粘土状物質とが反応し生成した試料であり、その成因として、製錬、精錬鍛冶、精錬、および小鍛冶の4つを考えることができる。

製錬を想定した場合、鉄滓の組成から、始発原料としてチタン鉱物をほとんど含まない塊鉱である鉄磁石、または粉鉱である砂鉄が使用されたとみることができる。遺跡周辺にそのような組成の鉱物資源は貯蔵しないこと¹¹、発掘調査区域内には製錬の実施を示唆する気密性に富んだ炉跡が未検出であること¹²をふまると、製錬して得られた組成不均一な鉄が遺跡内にもたらされたとみることによって、鉄滓が固着する鉄塊系遺物、塊状、流状滓の存在についての説明が可能となる。そのような組成の鉄塊を入手するには、流通品の購入、または遺跡直隣の製錬所の確保が不可欠である。流通品の場合、価値換算が容易に行えるよう、組成と形状または重量が規格化されている必要がある。鉄滓が固着した組成不均一な鉄塊が商品として市場に供給されていたとは考えにくい。遺跡直隣の製錬所が別に確保されていたことを前提として、組成不均一な鉄滓が固着した鉄塊を過熱・鍛打し清純な銅を得るという精錬鍛冶が、1号工房跡において実施されていたことを主張できると筆者は考える。

なお、検出された鉄滓のほとんどが碎片の状態で見出されている。製錬過程で生成し固体鉄に固着した鉄滓が精錬鍛冶操作における鍛打の過程で破碎されることによって生成した、あるいは精錬鍛冶の過程で破砕された鉄滓、または鉄の表面が酸化され剥離したものが火窓の中に入り、溶融または部分溶融した後、火窓の粘土と反応し固化したもの、再度固体鉄に固着した後、鍛打によって除去されたものと推定される。また、T.Feが8.40%でSi、Alを主成分とするNo.19鉄滓は、固体鉄を加熱する際に鉄が木炭に接触するのを防止するために固体鉄表面を覆った粘土状物質、あるいは固体鉄に固着したが焼材の一部が剥離することによって生成したものと思われる。

1号工房間連施設では鉄札、刀子、雁股鎌、鉄鎌片に加え、No.14鉄鍋片、No.17鉄滓が見出されている。遺跡内において鋸型やとりべは確認されていないことから、鉄鍋を再溶融し新たな鋸型を製作する操作が行われていたことを主張することは難しい。形態学的に鉄札が11世紀末から12世紀代、鉄鍋が13世紀代に

比定されること、および鉄鍋が半裁された状態で検出されていることを考慮すると、出土した鉄器は利用目的を失った伝世品とみることができる。1号工房跡からは、13鉄塊系遺物に因着した鉄滓、No.22およびNo.23鉄滓とほぼ同じ鉱物組成を持つNo.17鉄滓が見出されている。銑鉄を脱炭する際に使用された造滓材もしくは脱炭に使用された設備の一部が溶融し固化したものと推定され、ほぼ同じ鉱物組成を持つ鉄滓を出土する1号工房関連施設でも同様の操作が行われていた可能性がある。

6-1に基づけば、古代・中世における銅製造法には複数の銅製造法があり、いずれの方法であっても多段階の生産工程を経て目的とする銅が製造されたことは間違いない。同一の製鉄原料を用いたとしても、生産方法により異なる組成の銅が製造される。従って、表2の結果を単純に比較するという方法では、実態に合致した分類結果を得ることは難しい。

表2の中で、Cu、Ni、Coの3成分は鉄よりも錫にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかつたとすると、その組成比は銅製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図12aは表2-4の化学成分分析結果から、メタル試料、および100ppm以上のNiを含有する精試料片を抽出し、(mass%Cu) / (mass%Ni)、(mass%Co) / (mass%Ni)を求めプロットしたもの、図12bはメタル試料、および100ppm以上のCoを含有する精試料片を抽出し、(mass%Cu) / (mass%Co)、(mass%Ni) / (mass%Co)を求めプロットしたものである。図12aではNo.1、No.9 Eg・Rg、No.13、およびNo.14Aが右方に、No.2、No.4、No.5、No.6、No.7、No.8およびNo.10が左方に分布する。位置関係は逆になるが、図12bにおいても上記11試料は図12aとほぼ同じように分かれて分布し、さらにNo.1、No.9 Eg・Rg、No.13、およびNo.14AにはNo.6、およびNo.16が接近する。また、左下方にはNo.3、No.12が新たに開プロットされる。図12a・bから鉄札には組成の異なる銅を素材とするものがあり、刀子および盾牌歯も異なる組成の銅を用いて製作された可能性が高い。第1号工房関連施設から見出された鉄器は伝世品で、化学組成の異なる原鉄¹⁰⁾(鉄器を製作するために使用された素材)を用いて製作されたものが混在していたものと推定される。一方、図12bから、No.14鉄銅AとNo.13鉄塊系遺物、No.6鉄札とNo.16锻造剥片に含有されるCu、Ni、Co三成分比はほぼ同じとみることができ、この結果と前述の鉄滓の成因についての検討結果を考え合わせると、鉄鍋を脱炭して得られた銅を製造する操作、鉄札を加熱・鍛打して目的とする銅製鉄器に加工する操作が行われていたことを想定することができる。

これまでの検討結果から、1号工房関連施設および1号工房跡の機能を整理すると以下のとおりとなる。

① 1号工房関連施設

ア 利用価値を失った鉄器の保管場所

イ 半裁された鉄鍋の脱炭による銅製造とその加工

② 1号工房跡

ア 銑鉄(鉄銅)の脱炭による銅製造

イ 組成不均一な銅の純化

ウ イで純化された銅または1号工房関連施設に保管されていた銅製鉄器を出発とする銅製鉄器製作
仁昌寺II遺跡では、伝世され利用価値を失った鉄器の再処理による、銅または銅製鉄器の製作が行われていた可能性が高い。さらに他地域からの原料鉄および製品鉄器の供給をも考慮に入れ、金属考古学的調査結果と考古学的発掘調査結果を多面的に検討することによって、鉄・鉄器生産の実態がみえてくるものと思われる。

註

- 1) 道路を発掘調査された財團法人岩手県文化振興事業団振蔵文化財センター 丸山直美氏からのご教授による。
- 2) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 3) 「鉄鋼の顕微鏡写真と解説」九音株式会社、1968年。
- 4) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの溶出・淋浴作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている⁵⁾。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、磁鉄石と区別して使用することは岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 5) 「鉄鋼便覧」日本鉄鋼協会編、1981年。
- 6) 大澤正己「古墳供獻鐵滓からみた製鐵の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 7) 河瀬正利「中國地方におけるたら製鐵の展開」「たらから近代製鐵へ」平凡社、1990年、p.11。
- 8) 五十川伸矢「古代・中世の彷彿物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.1-79。
- 9) 五十川伸矢「古代から中世前半における鎌鉄物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 10) 関清「古代末の北陸・富山湾岸部の遺跡群」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 11) 空気酸化により鎌鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちに α -Feに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製武器によく使用される亜共析鋼が鎌鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼(鉄)法という表現をとった。
- 12) 村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たら研究、36・37、1996、p.78-88。
- 13) 楠田義彦「近世における「和鉄」とその技術・中世の「和鉄」解明のために~」「製鐵史論文集たら研究会創立四十周年記念」たら研究会、2000、pp.195-228。
- 14) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たら研究、39、1999年、pp.15-24。
- 15) 赤沼英男「みらのくの地から中世の鉄を見る」ふえらむ、Vol.2 No.1、財團法人日本鉄鋼協会、1997年、pp.44-51。
- 16) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤蒸「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」「製鐵史論文集」たら研究会編、2000年、pp.553-576。

表1-1 調査した鋼製鉄器・鉄塊の概要

No.	資料名	検出遺構		遺物番号
		遺構名	層位	
1	鉄札			392
2	鉄札			393
3	鉄札			394
4	鉄札			397
5	鉄札		II 2C25 II 下	398
6	鉄札			399
7	鉄札	1号工房間連施設		402
8	鉄札			403
9	刀子		I C65 II	406
10	雁股鎌		II C25 II 中	407
11	鉄鎌片		床面上	-
12	鉄鎌片		床面上	-
13	鉄塊系遺物	1号工房跡	床面上	-

注) 資料名、検出遺構、遺物番号は財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 中村直美氏による。

表1-2 調査した鋳造鉄器の概要

No.	資料名	検出遺構		遺物番号
		遺構名	層位	
14	鉄鍋	1号工房間連施設	II C25 II 下	408

注) 資料名、検出遺構、遺物番号は財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 中村直美氏による。

表1-3 調査した薄片状鉄滓の概要

No.	資料名	検出遺構	
		遺構名	層位
15	薄片状鉄滓		床面上
16	薄片状鉄滓	1号工房跡	ピットb埋土

注) 資料名、検出遺構、遺物番号は財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 中村直美氏による。

表1-4 調査した鋳造鉄器の概要

No.	資料名	検出遺構		形 状
		遺構名	層位	
17	鉄滓	1号工房間連施設	床面上	塊状
18	鉄滓		床面上	塊状
19	鉄滓		床面上	粒状
20	鉄滓	1号工房跡	ピットb埋土	薄片状
21	鉄滓		床面上	塊状
22	鉄滓		床面上	塊状
23	鉄滓		床面上	塊状

注) 資料名、検出遺構、遺物番号は財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 中村直美氏による。

表2 鋼製鉄器の分析結果

No.	L	化 学 成 分(mass%)										Cu [*]	Co [*]	Cu ^{**}	Ni ^{**}	ミクロ組織	非金属介在物組成	
		T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al							
1	-	96.84	0.017	0.013	0.034	(0.001)	0.09	(0.001)	0.40	0.016	0.017	(0.001)	0.002	1.31	2.62	0.50	0.38	Pa(0.2-0.3) S
2	-	68.80	0.022	0.018	0.031	(0.001)	0.11	(0.001)	0.61	0.041	0.032	0.019	(0.001)	1.22	1.72	0.71	0.58	no W,F,M
3	-	72.61	0.005	0.003	0.023	0.003	0.06	0.122	0.93	0.040	0.169	0.022	(0.001)	-	-	0.13	0.13	no W,XT,F,M
4	-	94.71	0.018	0.028	0.042	(0.001)	0.05	0.032	0.37	0.020	0.018	0.010	(0.001)	0.64	1.50	0.43	0.67	no
5	-	69.19	0.015	0.029	0.036	0.001	0.06	0.014	0.31	0.006	0.014	0.005	0.001	0.52	1.24	0.42	0.81	no W,S
6	-	71.14	0.013	0.007	0.020	0.001	0.06	(0.001)	0.63	0.022	0.082	0.007	(0.001)	-	-	0.65	0.35	no S
7	-	96.81	0.016	0.052	0.107	0.001	0.01	0.029	0.36	0.022	0.017	0.006	(0.001)	0.31	2.06	0.15	0.49	no XT,M
8	-	63.93	0.009	0.014	0.026	0.001	0.07	(0.001)	0.45	0.041	0.011	0.005	(0.001)	0.64	1.86	0.35	0.54	no S
9	Eg	96.27	0.002	0.004	0.013	0.002	0.16	0.003	0.36	0.017	0.027	0.001	0.007	0.50	3.25	0.15	0.31	no S
	Rg	96.77	0.002	0.005	0.013	0.002	0.14	0.001	0.28	0.820	0.619	(0.001)	0.005	0.40	2.60	0.15	0.38	Pa(0.2-0.3) W,M
10	-	98.66	0.047	0.058	0.091	(0.001)	<0.05	0.010	0.31	0.001	0.017	0.002	(0.001)	0.81	1.57	0.52	0.64	Pa(0.2-0.3) W,XT,F,M
11	-	55.42	<0.001	0.002	0.005	0.502	0.04	0.007	8.96	0.135	0.138	0.050	0.005	-	-	-	no	no
12	-	62.56	0.001	0.004	0.019	0.005	0.05	0.014	1.62	0.128	0.281	0.032	(0.001)	-	-	0.05	0.21	no
13	-	83.96	0.008	0.008	0.023	(0.001)	<0.05	0.002	0.66	0.017	0.145	0.021	(0.001)	-	-	0.35	0.35	Pa(PCm) W,F,S

注1) 分析はICP-OES法による。Cu^{*}:mass%Cu/mass%Ni, Co^{*}:mass%Co/mass%Ni, Cu^{**}:mass%Cu/Co, Ni^{**}:mass%Ni/Co。

注2) Paはナイタールでエッチングを施した組織、括弧内の数値はミクロエッチング鏡鏡から推定される炭素含有量。PCmは初折セメントタイト。

注3) W:ウスマイト(化学組成FeO), F:FeO-MgO-SiO₂系化合物, H:FeO-Al₂O₃系化合物, S:ガラス質けい酸塩, M:マトリックス, noは見いだされず。

表3 鋳造鉄器の分析結果

No.	L	化 学 成 分(mass%)										Cu [*]	Co [*]	Cu ^{**}	Ni ^{**}	ミクロ組織		
		T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al							
14	A	96.21	0.017	0.012	0.028	0.005	0.20	(0.001)	0.47	0.016	(0.001)	(0.001)	0.015	1.42	2.33	0.61	0.43	L
	B	68.54	0.019	0.006	0.017	0.001	0.24	(0.001)	0.40	0.008	0.002	0.006	0.018	-	1.12	0.35	L	

注1) 分析はICP-OES法による。Cu^{*}:mass%Cu/mass%Ni, Co^{*}:mass%Co/mass%Ni, Cu^{**}:mass%Cu/Co, Ni^{**}:mass%Ni/Co。

注2) L:レーデブライト組織。

表4 鋼造剥片の分析結果

No.	化 学 成 分 (mass%)											Ca ⁺	Co ⁺	Cu ⁺⁺	Ni ⁺⁺	鉱物組成	
	T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg						
15	71.82	0.003	(0.001)	0.005	0.008	0.08	0.038	1.77	0.235	0.536	0.072	(0.001)	-	-	-	W,Hem,M	
16	70.37	0.019	0.009	0.025	0.022	0.09	0.197	2.96	0.409	1.03	0.185	(0.001)	-	-	0.26	0.36	W,Hem,M

注1) 分析はICP-OES法による。

注2) W:ウスタイト、Hem:ヘマタイト、S:ガラス質けい酸塩、M:マトリックス。

表5 鉄滓の分析結果

No.	化 学 成 分 (mass%)											鉱物組成				
	T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg					
17	55.05	0.002	(0.001)	0.002	0.039	0.13	0.127	7.52	1.23	2.54	0.523	(0.001)	W,H,F,M			
18	61.11	0.001	(0.001)	0.001	0.027	0.11	0.149	5.99	0.428	2.18	0.521	(0.001)	W,H,F,M			
18	39.17	0.002	(0.001)	0.004	0.141	0.19	1.80	11.1	2.68	5.34	1.07	0.011	Mng,S			
19	8.40	0.002	(0.001)	0.004	0.113	0.59	1.31	22.2	2.49	8.26	1.38	(0.001)	Fe-O,R,S(S ₂ S ₂ S ₃)			
20	73.59	0.004	0.010	0.025	0.013	0.04	0.064	1.60	0.301	0.587	0.149	(0.001)	W,S			
21	21.12	0.002	(0.001)	0.005	0.068	0.10	0.385	2.38	0.340	0.559	0.191	0.034	W,F,M			
22	40.09	0.002	(0.001)	0.002	0.076	0.14	0.330	13.4	2.46	4.86	0.942	(0.001)	(F,H,M)(W,H,F,M)			
23	54.76	0.003	(0.001)	0.007	0.060	0.12	0.206	9.94	0.968	3.29	0.519	(0.001)	W,H,F,M			

注1) 化学成分分析はICP-OES法による。

注2) W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、XT:Fe-Ti-Al-O系化合物、H:FeO-Al₂O₃系化合物、Mag:マグネタイトと推定される化合物、S:ガラス質けい酸塩(No.19のS₁、S₂、S₃はいずれも組成が異なる)、M:マトリックス。

注3) No.13は鉄塊に固着する鉄滓を分析。

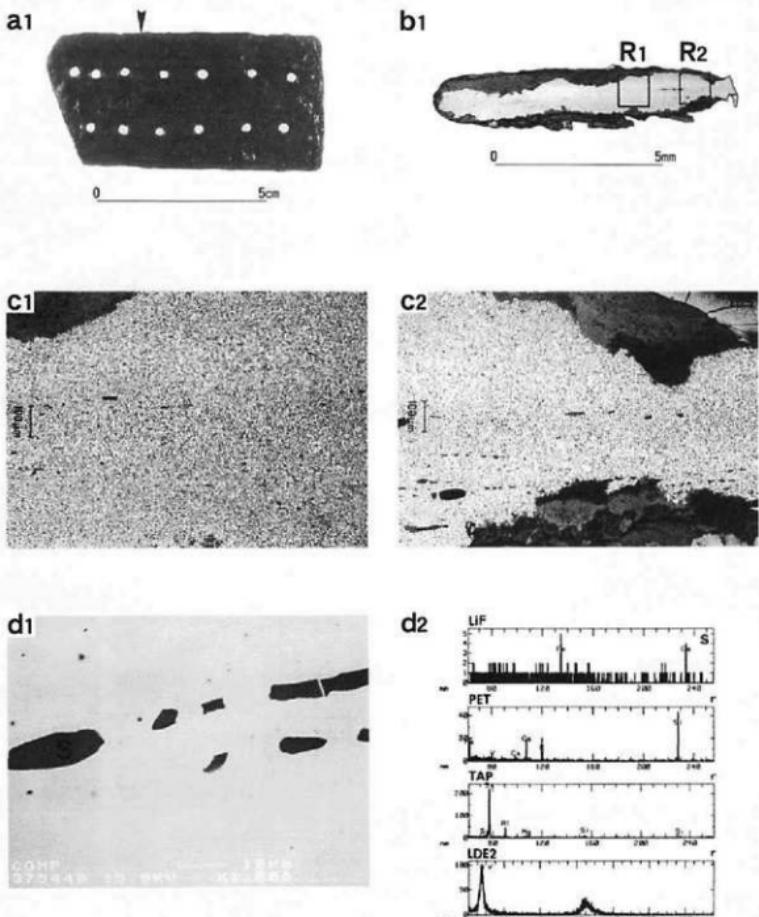


図1 No. 1の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a1: 外観、矢印は試料片摘出位置。b1: 抽出した試料片のマクロエッティング組織。エッティングはナイタールによる。c1, c2: 領域R_{1,2}のミクロエッティング組織。d1, d2: b1のメタルに残存する非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。S:ガラス質けい酸塩。

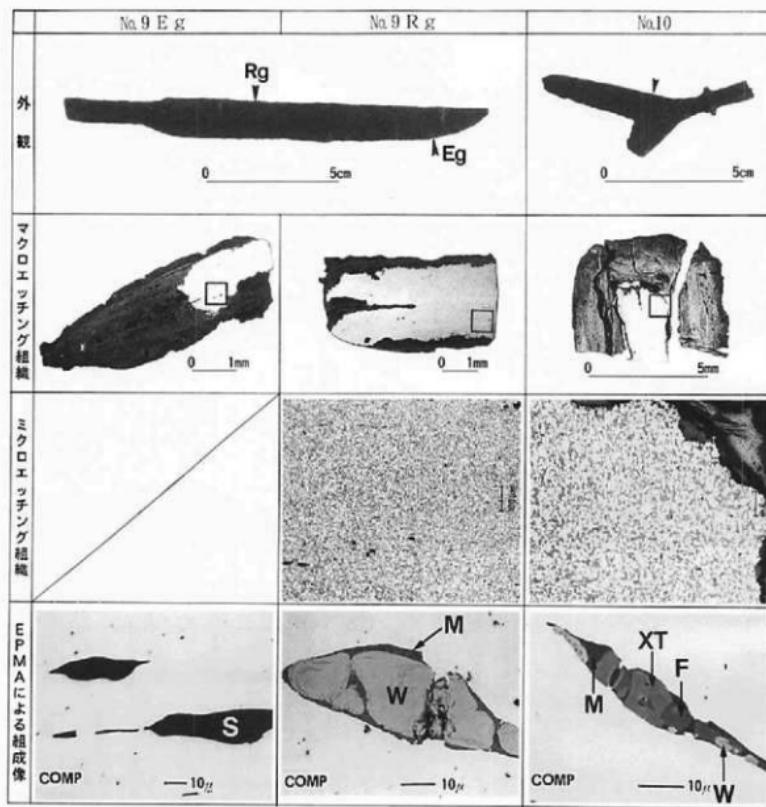


図2 No.9・10の外観と摘出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片摘出位置。ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠で囲んだ内部。エッチングはナイタールによる。W:ウスタイト(化学理論組成 FeO)、XT: Fe-Ti-Al-V-O 系化合物、 FeO-MgO-SiO_2 系化合物(F)、S:ガラス質けい酸塩、M:マトリックス。

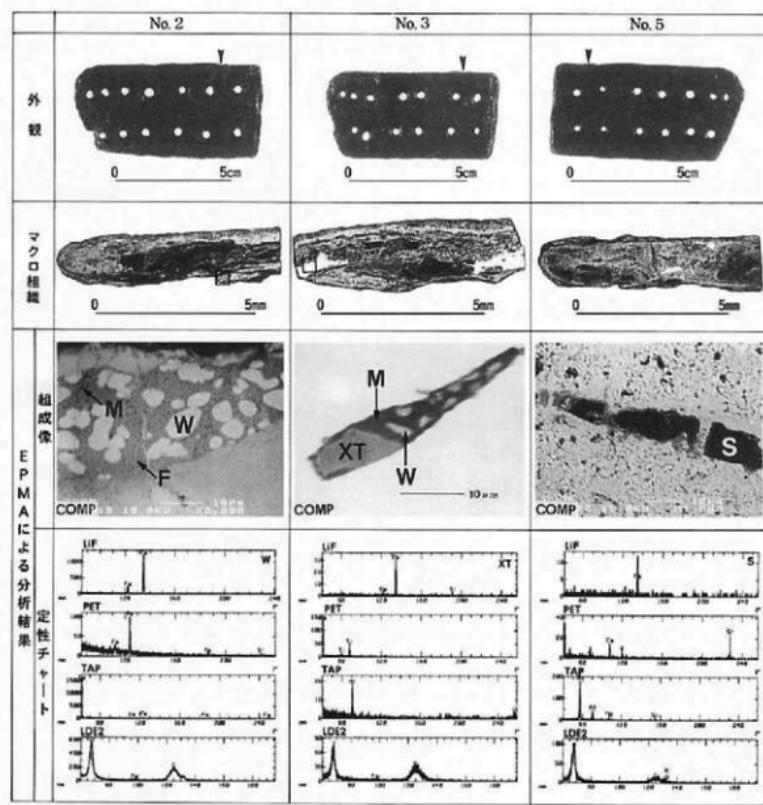


図3 No. 2・3・5の外観と抽出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、XT:Fe-Ti-Al-V-O系化合物、S:ガラス質けい酸塩、M:マトリックス。

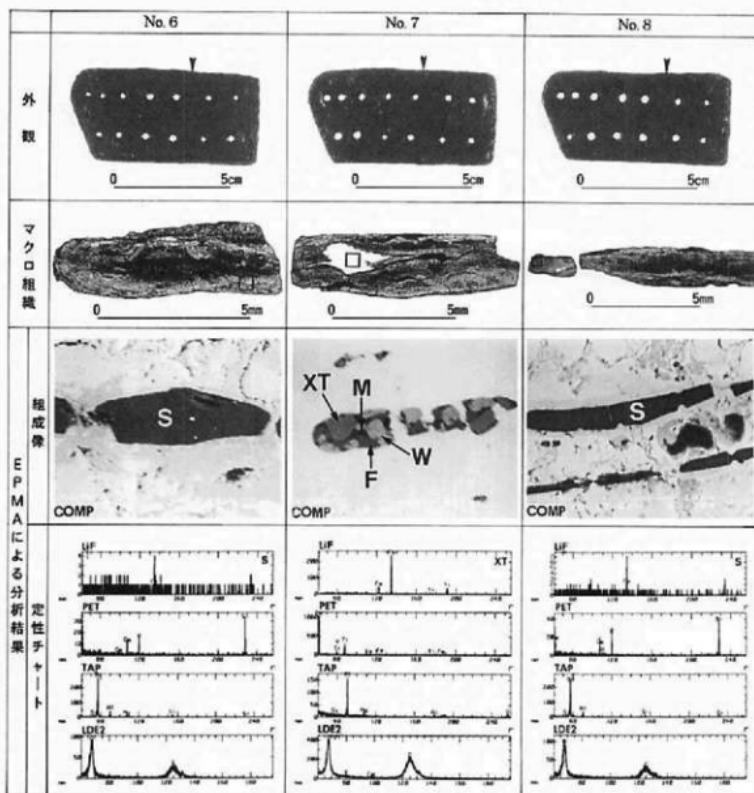


図4 No. 6・7・8の外観と抽出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、XT:Fe-Ti-Al-V-O系化合物、S:ガラス質い酸塩、M:マトリックス。

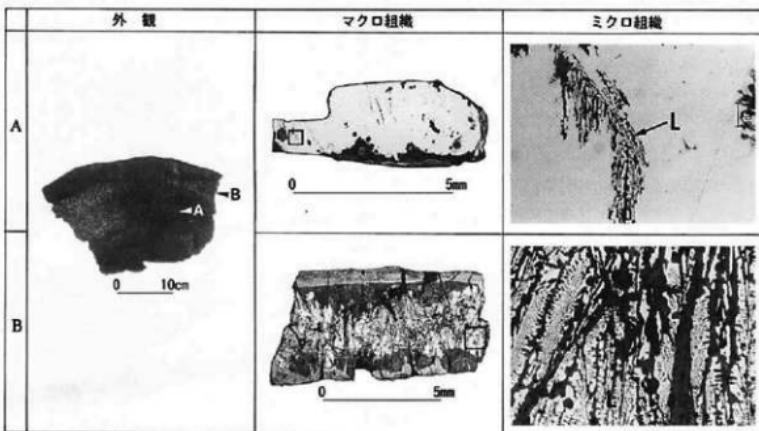


図5 No.14の外観と摘出した試料片の組織観察結果
外観の矢印は試料片摘出位置。L:レーデブライト組織。

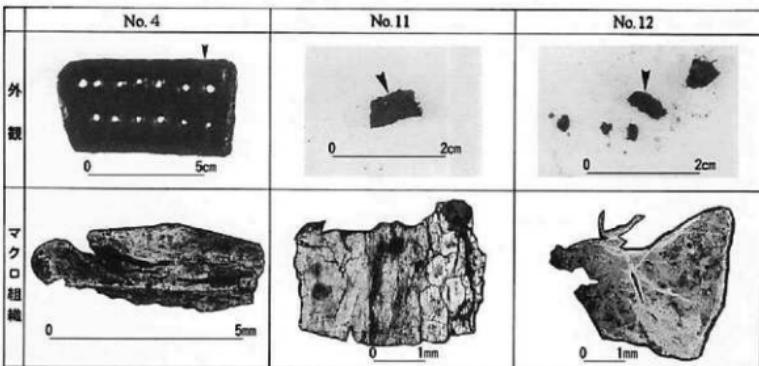


図6 No.4・No.11・No.12の外観と摘出した試料片のマクロ組織

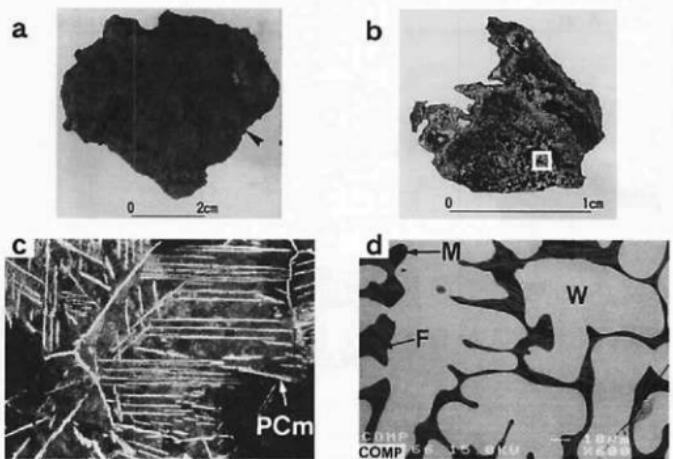


図7 No.13の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a:外観。矢印は試料片抽出位置。b:抽出した試料片のマクロエッチング組織。エッティングはナイタールによる。
 c: bの枠で囲んだ内部のミクロエッチング組織、PCm:初析セメンタイト。d:bのメタルに残存する非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、M:マトリックス。

	外観	マクロ組織	EPMAによる組成像
No.15			
No.16			

図8 No.15・No.16の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 外観の矢印は調査資料。ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部。W:ウスタイト、Hem:ヘマタイト、M:マトリックス。

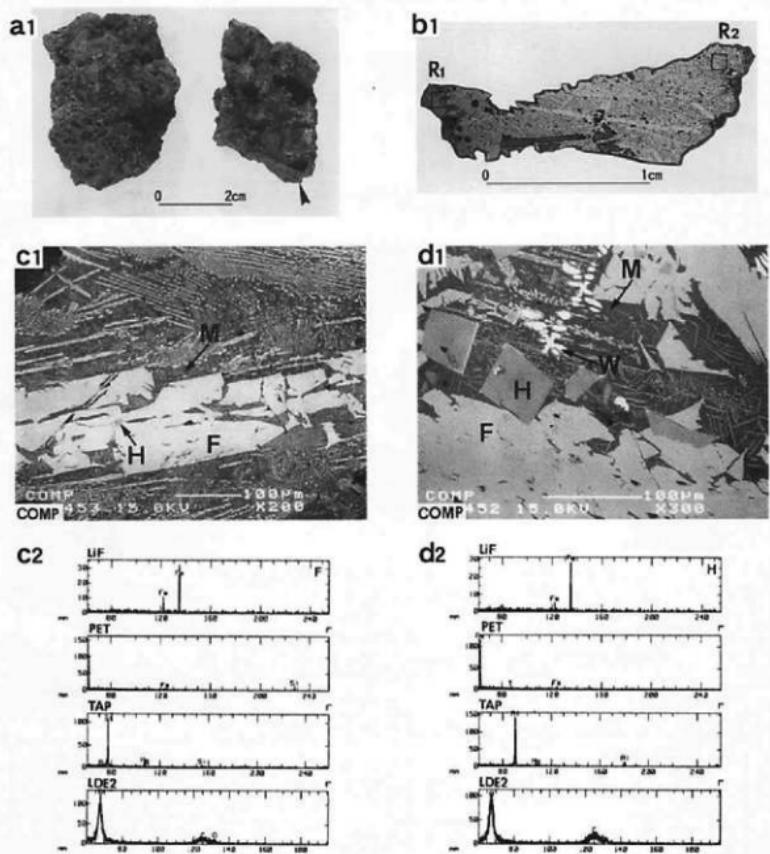


図9 No.22の外観と抽出した試料片の組織観察結果

a1: 外観、矢印は試料片抽出位置。b1: 抽出した試料片のマクロ組織。c1, d1: 領域R₁のEPMAによる組成像と定性分析結果。d1, e: 領域R₂のEPMAによる組成像と定性分析結果。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、H:FeO-Al₂O₃系化合物(H)、M:マトリックス。

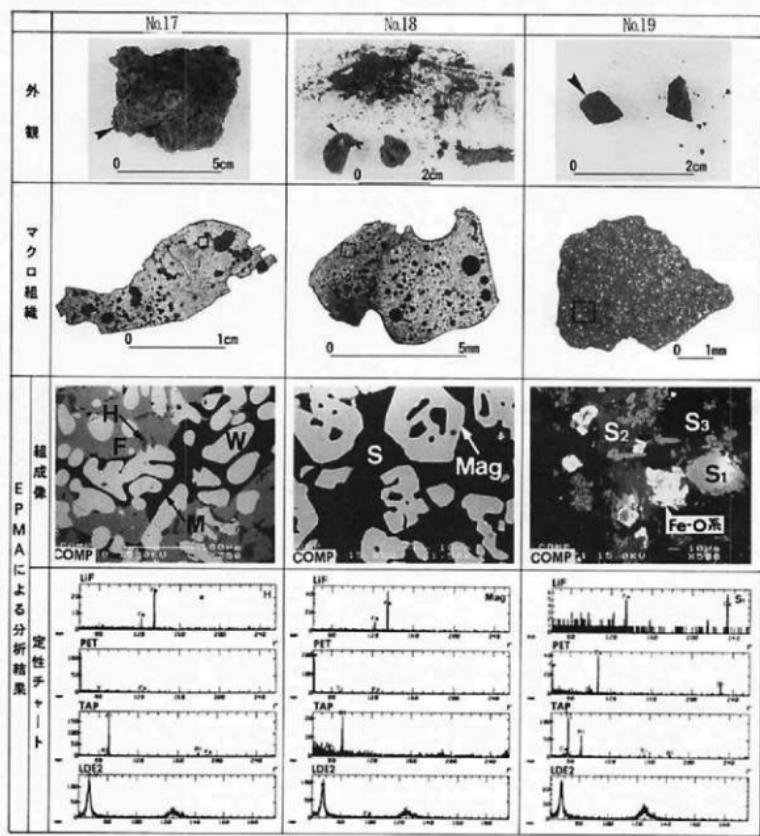


図10 No.17・18・19の外観と抽出した試料片の組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。EPMAによる組成像はマクロ組織の枠で囲んだ内部。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、H:FeO-Al₂O₃系化合物)、Mag:Fe-Ti-Al-O系化合物(マグネタイトと思われる)、S₁:ガラス質けい酸塩(S₁、S₂、S₃によって組成は異なる)、M:マトリックス。

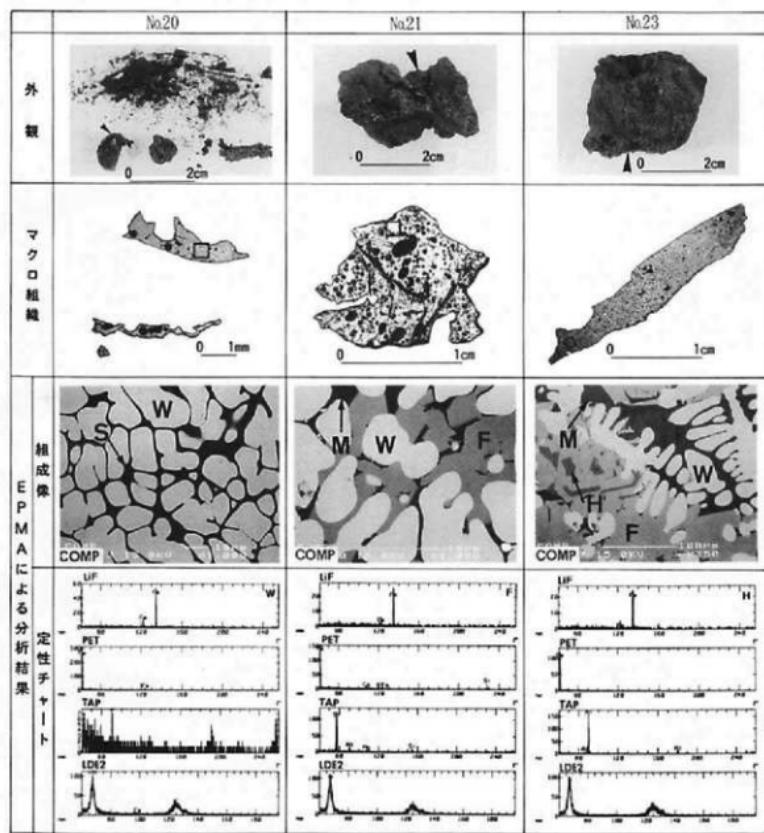


図11 No.20・No.21・No.23の外観と摘出した試料片の組織観察結果
外観の矢印は試料片摘出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠で囲んだ内部。W:ウスタイト、F:FeO-MgO-SiO₂系化合物、H:FeO-Al₂O₃系化合物(H)、M:マトリックス。

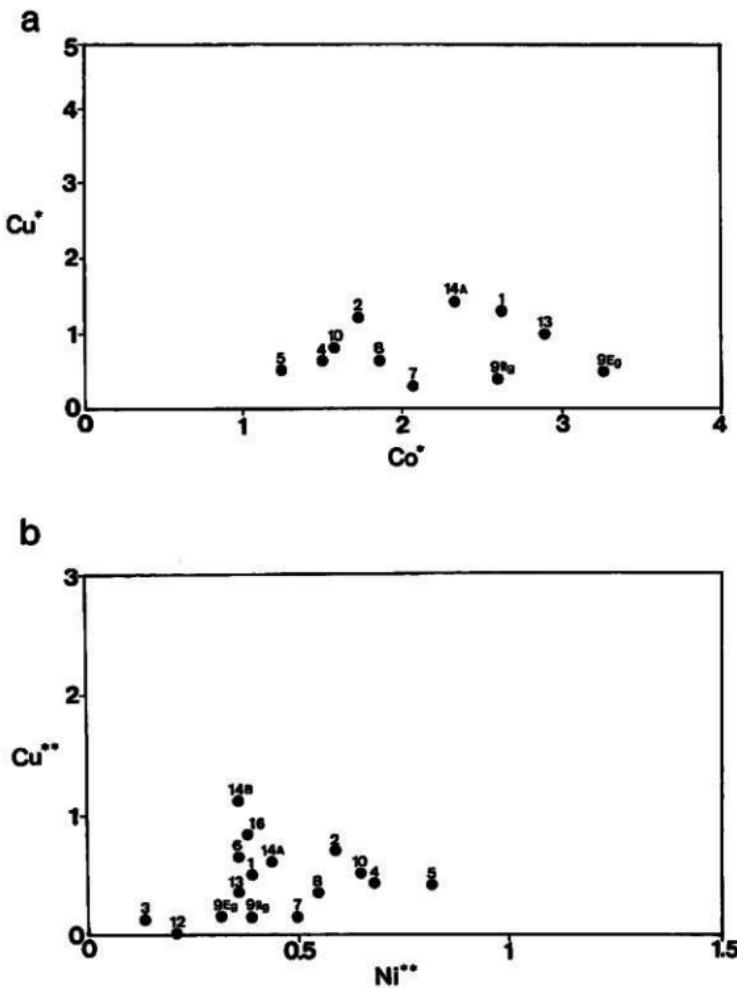
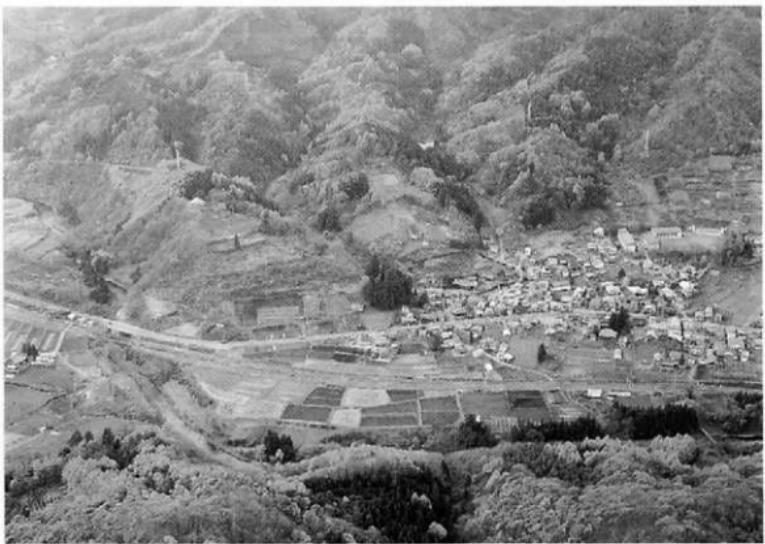
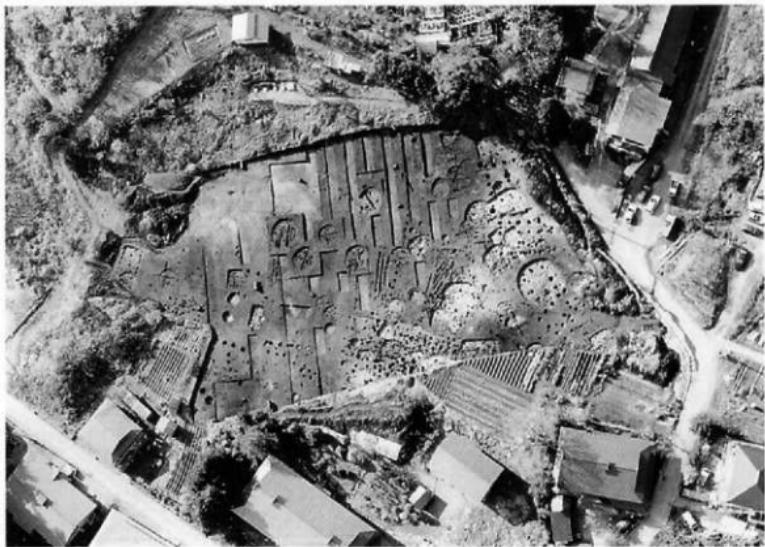


図12 出土鉄器に含有されるCu、Ni、Co三成分比
 $\text{Cu}^* = (\text{mass\%Cu}) / (\text{mass\%Ni})$ 、 $\text{Co}^* = (\text{mass\%Co}) / (\text{mass\%Ni})$ 、 $\text{Cu}^{**} = (\text{mass\%Cu}) / (\text{mass\%Co})$ 、
 $\text{Co}^{**} = (\text{mass\%Ni}) / (\text{mass\%Co})$ 。No.は表1-1～3に対応。

写 真 図 版



調査区遠景



調査区全景（H12）

写真図版 1 調査区遠景・調査区全景



調査区全景（H13）



土層断面（上位）



土層断面（中位）



土層断面（下位①）



土層断面（下位②）

写真図版2 調査区全景・土層断面



1号住居跡全景



1号住居跡断面

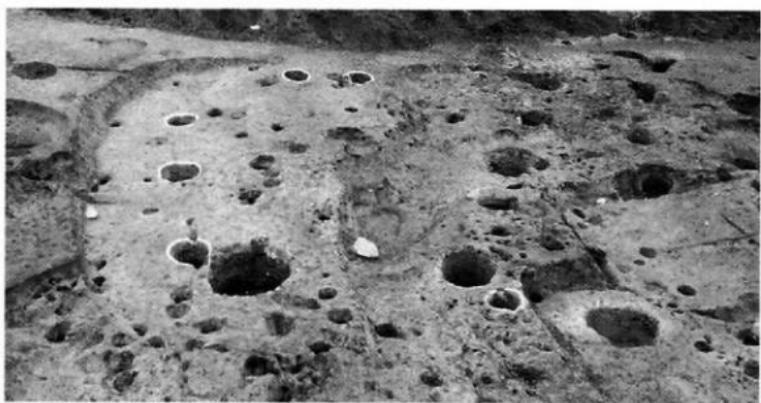


1号住居跡検出



現地説明会

写真図版 3 1号住居跡



2号住居跡全景



2号住居跡断面

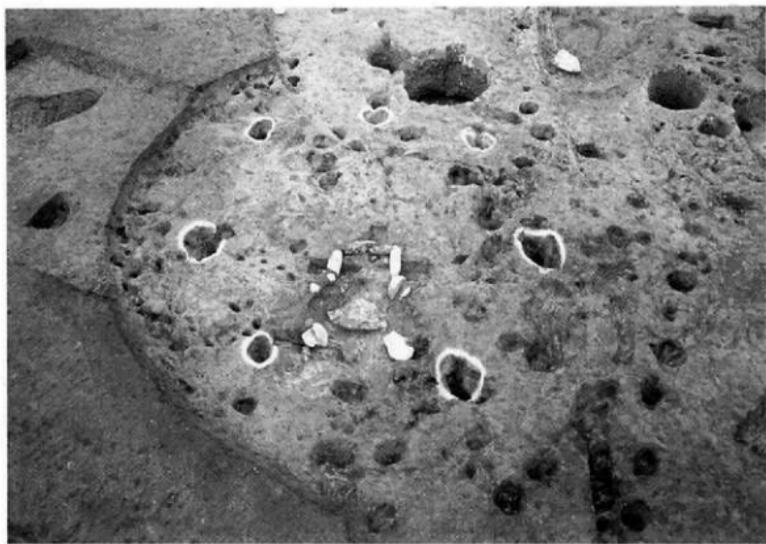


2号住居跡床面礫検出

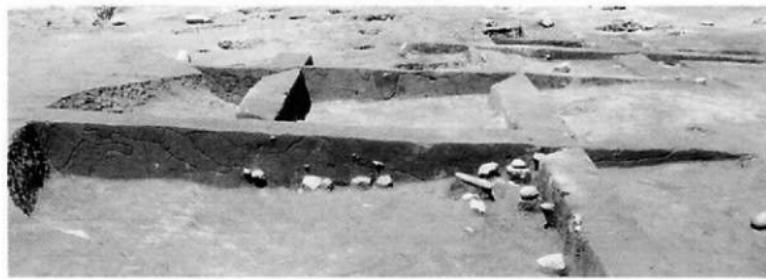


2号住居跡炉平面

写真図版 4 2号住居跡



3号住居跡全景



3号住居跡断面



3号住居跡炉全景



3号住居跡断面

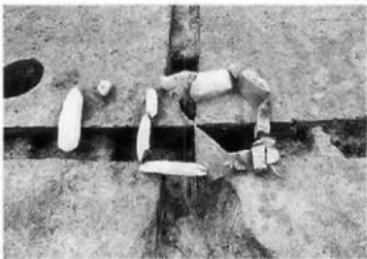
写真図版 5 3号住居跡



4号住居跡全景



4号住居跡断面



4号住居跡炉断面



作業風景

写真図版 6 4号住居跡



5号住居跡全景



5号住居跡断面



5号住居跡床面土器出土状況

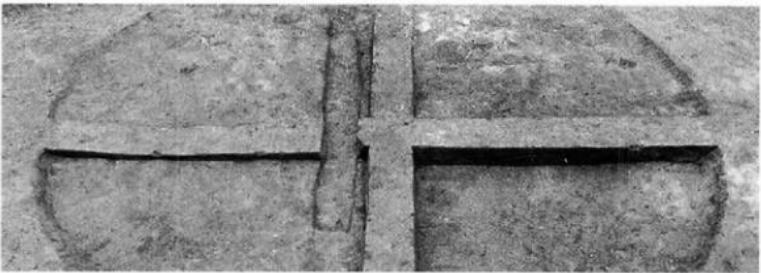


5号住居跡炭化材除去後全景

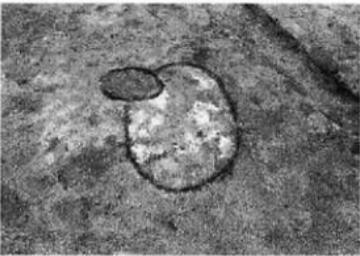
写真図版 7 5号住居跡



6号住居跡全景



6号住居跡断面



6号住居跡炉全景

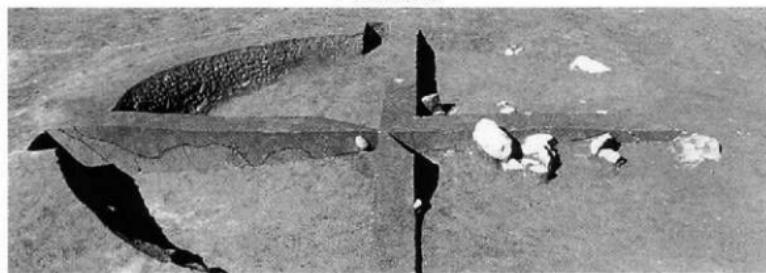


6号住居跡炉断面

写真图版 8 6号住居跡



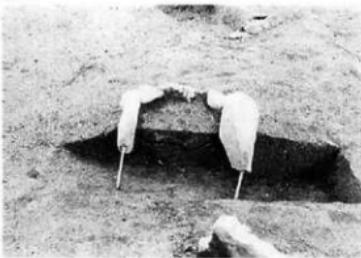
7号住居跡全景



7号住居跡断面



7号住居跡埋設土器

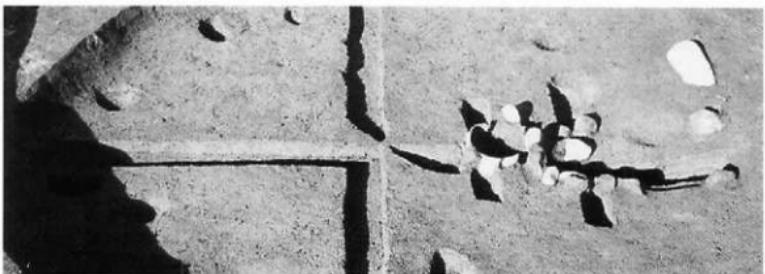


7号住居跡断面

写真図版 9 7号住居跡



8号住居跡全景



8号住居跡炉・貼り床断面



作業風景

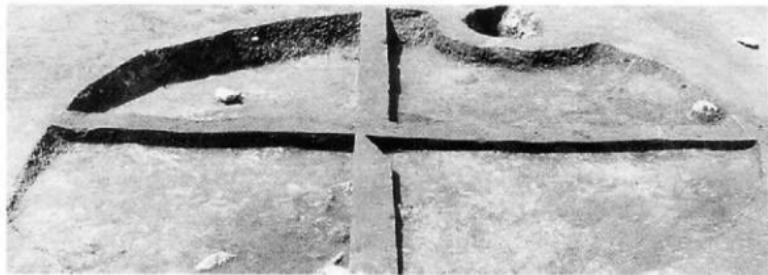


作業風景

写真図版10 8号住居跡



9号住居跡全景



9号住居跡断面



9号住居跡炉断面①



9号住居跡炉断面②

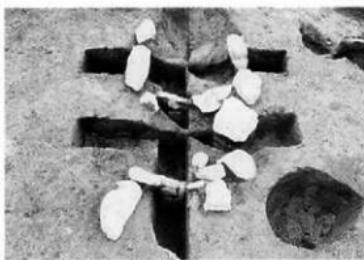
写真図版11 9号住居跡



10号住居跡全景



10号住居跡断面

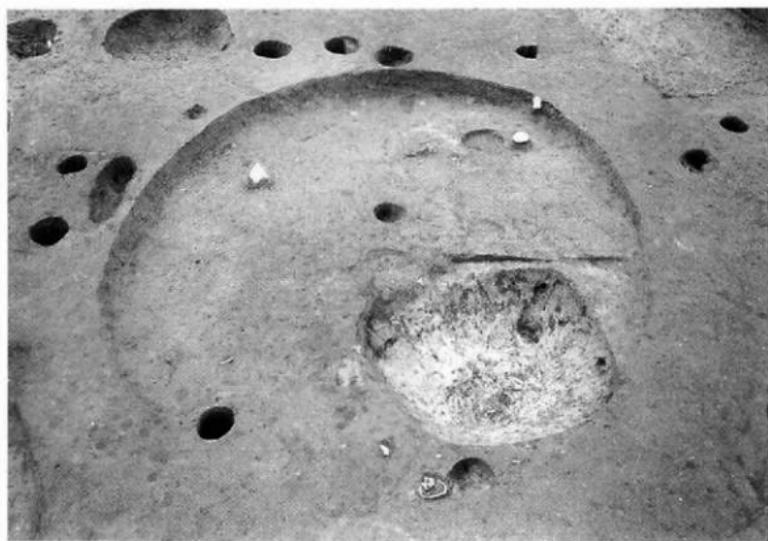


10号住居跡炉断面

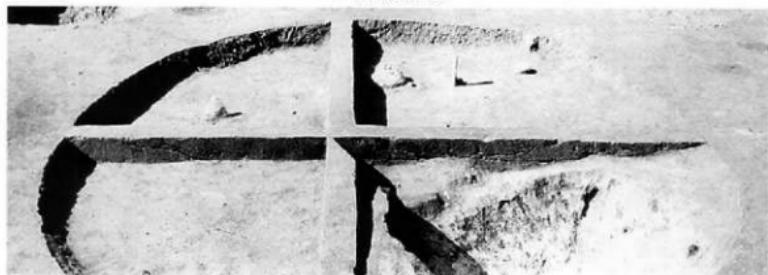


10号住居跡遺物出土状況

写真図版12 10号住居跡



11号住居跡全景



11号住居跡断面

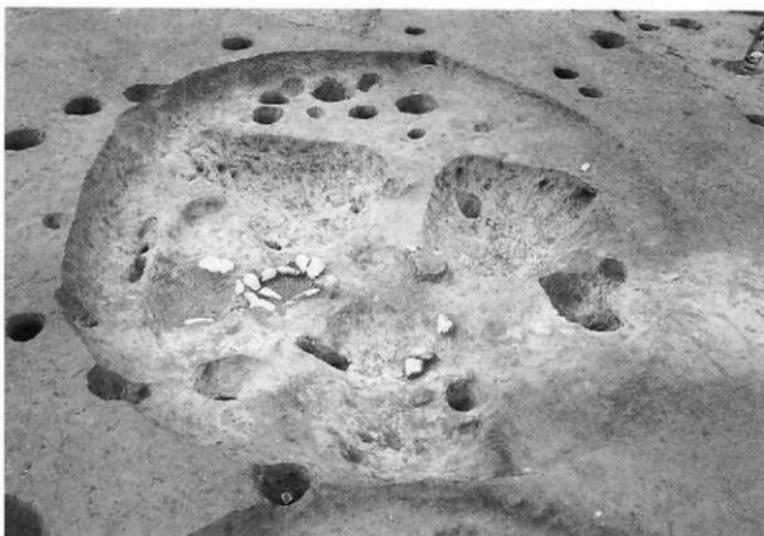


11号住居跡炉全景

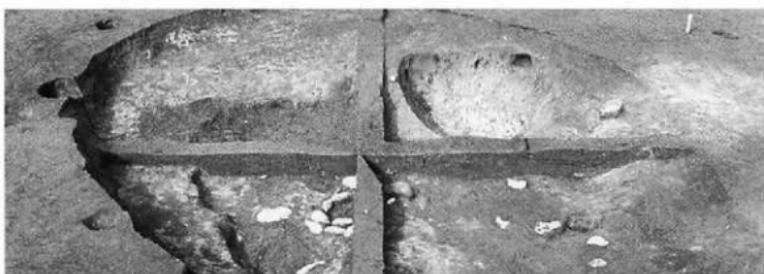


11号住居跡炉断面

写真図版13 11号住居跡



12号住居跡全景



12号住居跡断面

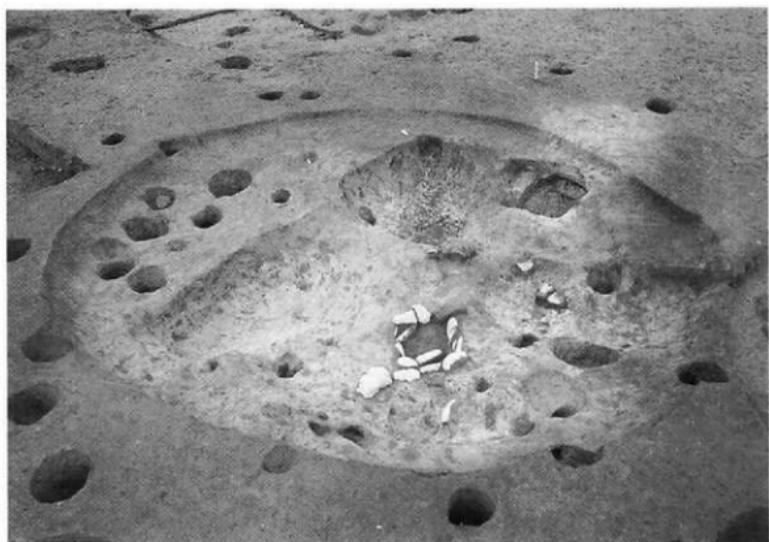


12号住居跡炉全景



作業風景

写真図版14 12号住居跡



13号住居跡全景



13号住居跡断面

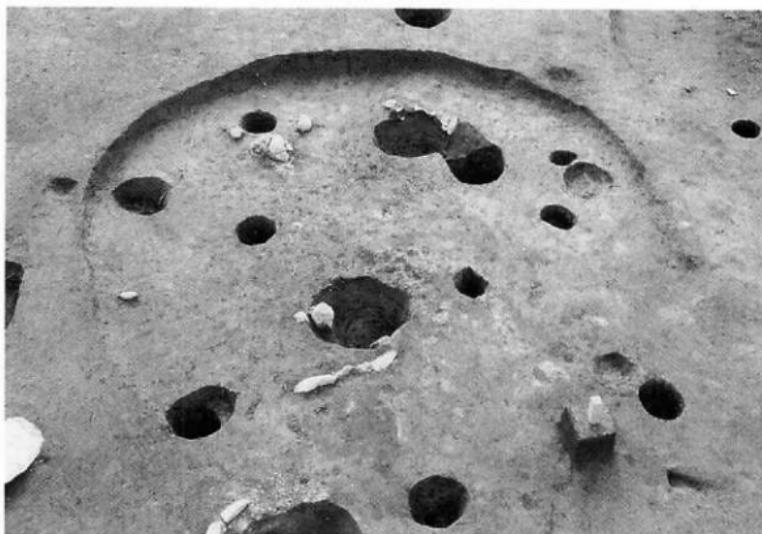


13号住居跡炉断面①



13号住居跡炉断面②

写真図版15 13号住居跡



14号住居跡全景



14号住居跡断面



作業風景



15号住居跡炉断面①

写真図版16 14号住居跡



15号住居跡全景



15号住居跡断面



15号住居跡炉断面②



15号住居跡炉断面③

写真図版17 15号住居跡



16号住居跡全景



16号住居跡断面



16号住居跡炉全景



16号住居跡炉断面

写真図版18 16号住居跡



17号住居跡全景



17号住居跡断面



17号住居跡炉断面



作業風景

写真図版19 17号住居跡



18号住居跡全景



18号住居跡断面

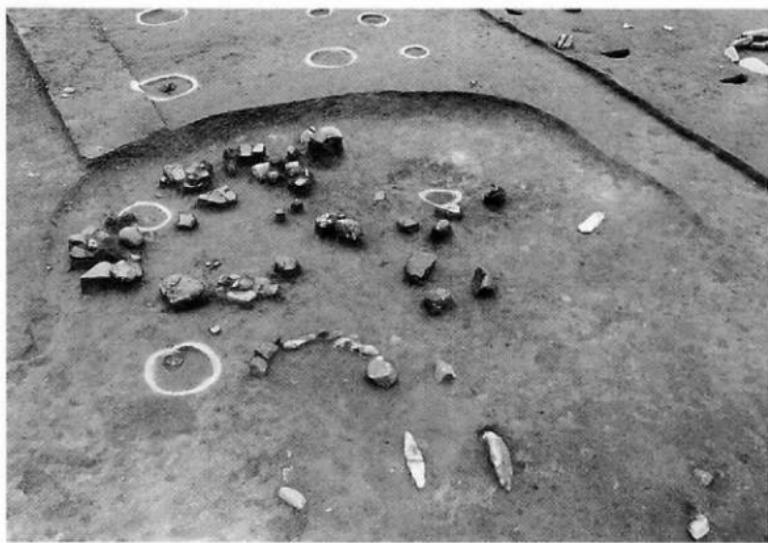


18号住居跡炉全景

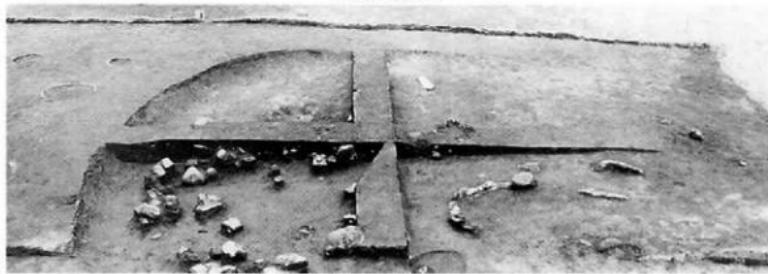


18号住居跡炉断面

写真図版20 18号住居跡



19号住居跡全景



19号住居跡断面



19号住居跡炉①断面



19号住居跡炉②全景

写真図版21 19号住居跡



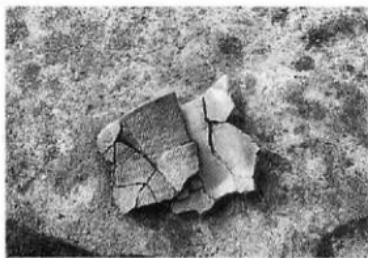
20号住居跡全景



20号住居跡断面



20号住居跡炉断面



20号住居跡遺物出土状況

写真図版22 20号住居跡



21号住居跡全景



21号住居跡断面



21号住居跡炉断面



現地説明会

写真図版23 21号住居跡



22号住居跡全景



22号住居跡断面



作業風景

写真図版24 22号住居跡



23号住居跡全景



23号住居跡炉断面



23号住居跡炉全景



現地説明会



現地説明会

写真図版25 23号住居跡



24号住居跡全景



24号住居跡断面

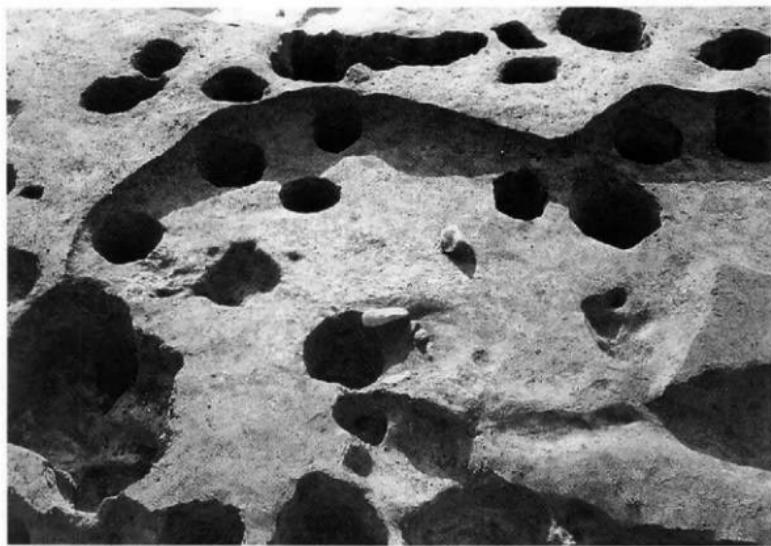


24号住居跡炉全景



24号住居跡炉・貼り床断面

写真図版26 24号住居跡



25号住居跡全景



25号住居跡断面



作菜風景

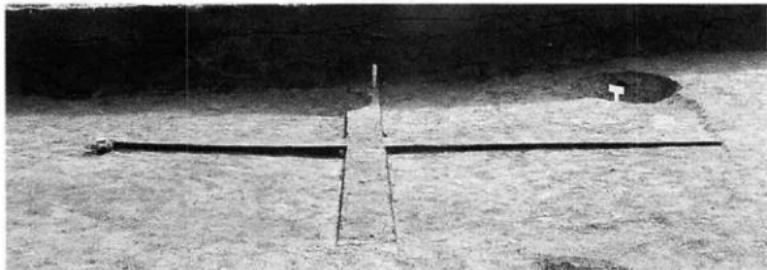


作菜風景

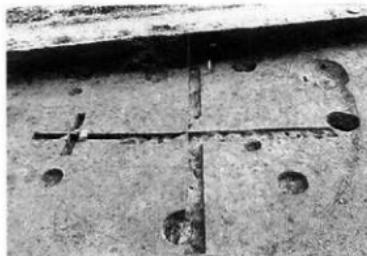
写真図版27 25号住居跡



26号住居跡全景



26号住居跡断面



26号住居跡貼り床断面



26号住居跡炉断面

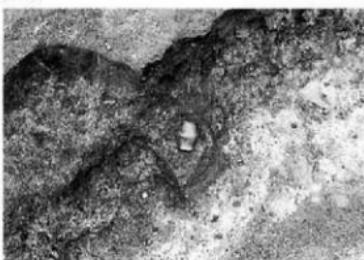
写真図版28 26号住居跡



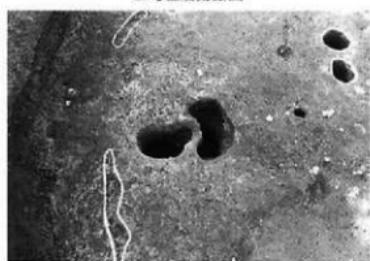
27号住居跡全景



27号住居跡断面



27号住居跡遺物出土状況



27号住居跡 P 4・P 12

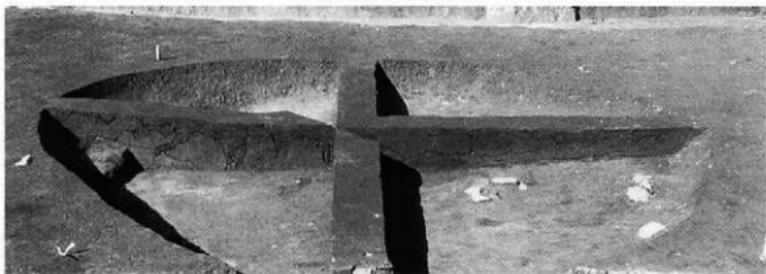


27号住居跡 P 5

写真図版29 27号住居跡



28・29号住居跡全景



29号住居跡断面



28・29号住居跡炉全景



28・29号住居跡炉断面

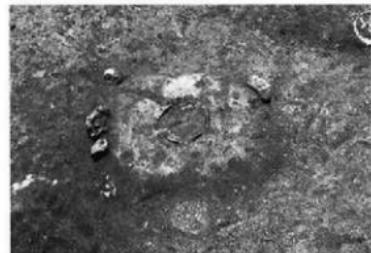
写真図版30 28・29号住居跡



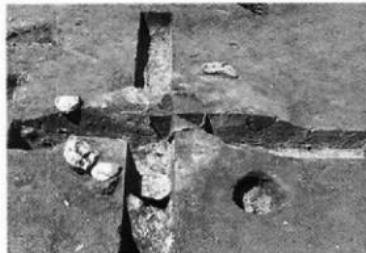
30号住居跡全景



30号住居跡断面



30号住居跡炉全景



30号住居跡炉断面

写真図版31 30号住居跡



31号住居跡全景



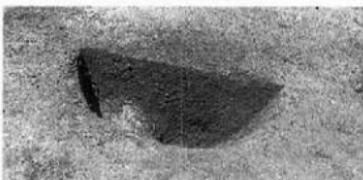
31号住居跡断面



31号住居跡炉痕跡



31号住居跡 P 1 断面

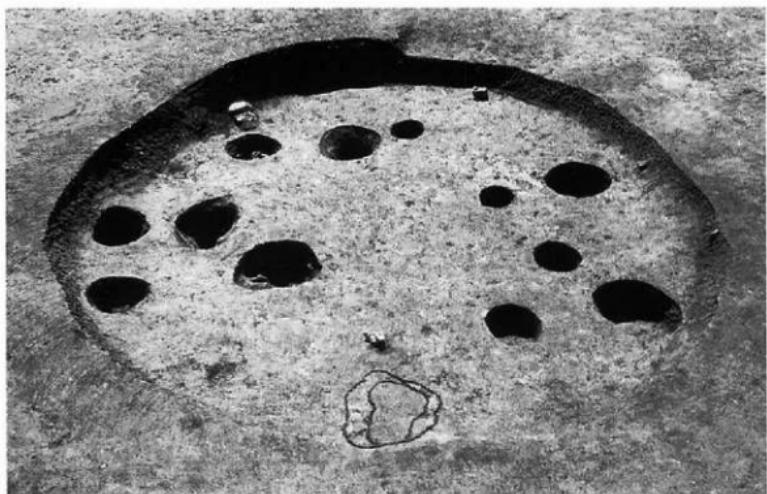


31号住居跡 P 2 断面



31号住居跡 P 3 断面

写真図版32 31号住居跡



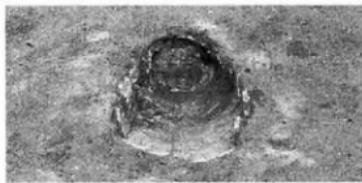
32号住居跡全景



32号住居跡断面



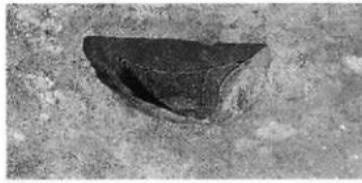
32号住居跡炉断面



32号住居跡炉全景

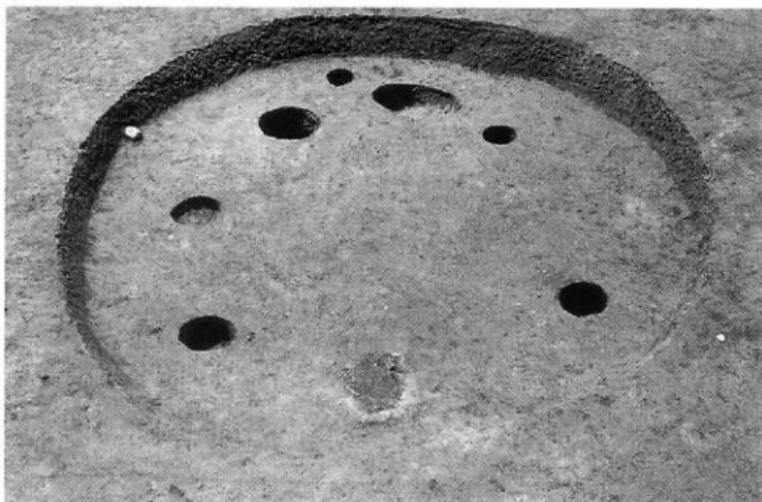


32号住居跡 P 8 断面



32号住居跡 P 9 断面

写真図版33 32号住居跡



33号住居跡全景



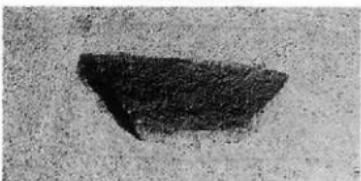
33号住居跡断面



33号住居跡炉全景



33号住居跡炉断面



33号住居跡 P 2 断面



33号住居跡 P 3 断面

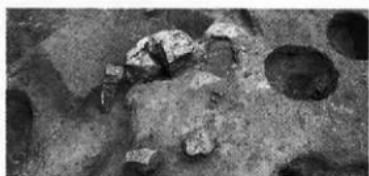
写真図版34 33号住居跡



34号住居跡全景



34号住居跡断面



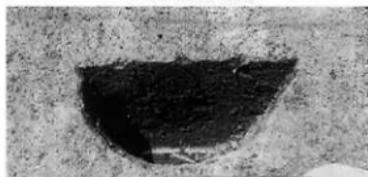
34号住居跡炉全景



34号住居跡炉断面



34号住居跡 P 4 断面



34号住居跡 P 5 断面

写真図版35 34号住居跡



35号住居跡全景



35号住居跡断面



35号住居跡炉断面

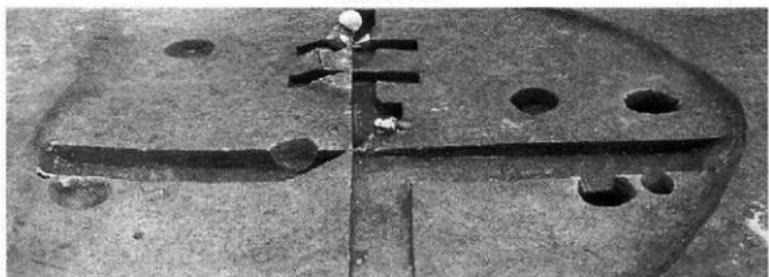


調査風景

写真図版36 35号住居跡



36号住居跡全景



36号住居跡炉断面

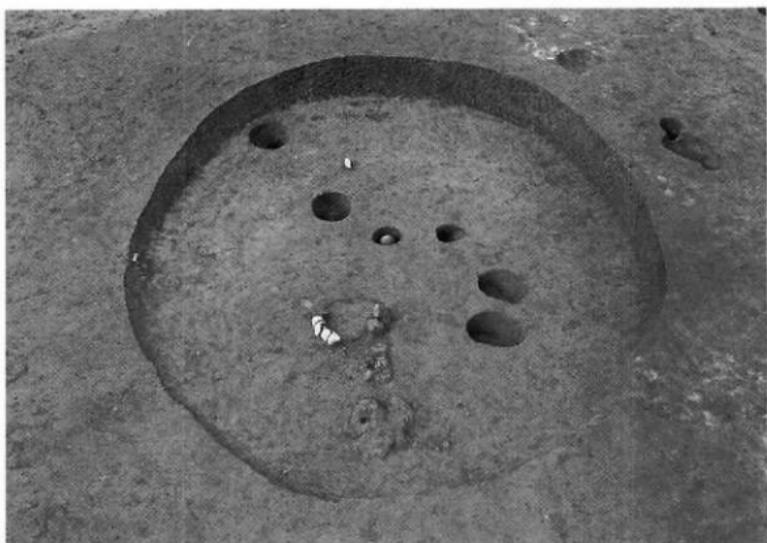


36号住居跡炉断面①

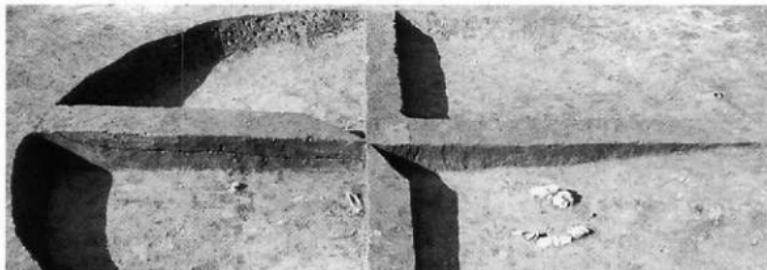


36号住居跡炉断面②

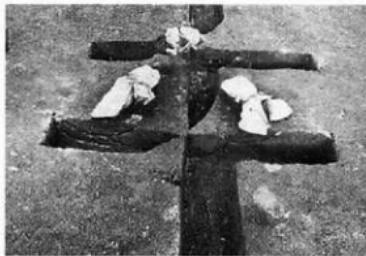
写真図版37 36号住居跡



37号住居跡全景



37号住居跡断面



37号住居跡炉断面①

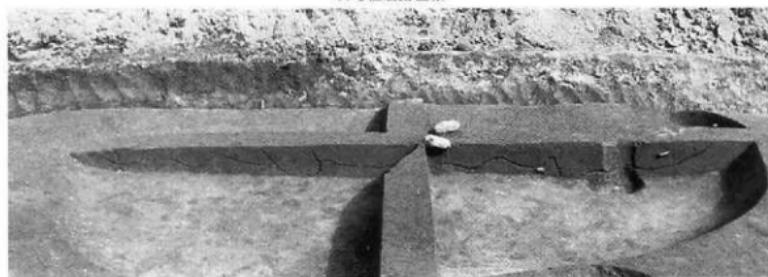


37号住居跡炉断面②

写真図版38 37号住居跡



38号住居跡全景



38号住居跡炉断面



38号住居跡遺物出土状況



南側宅地部分雜物撤去

写真図版39 38号住居跡



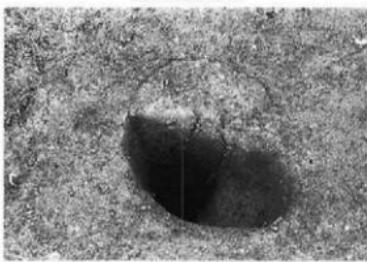
39号住居跡全景



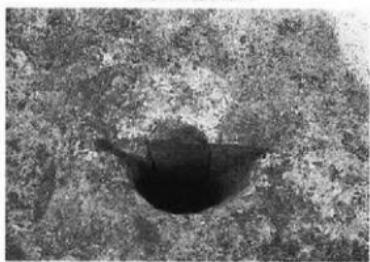
39号住居跡炉全景



39号住居跡炉断面



39号住居跡 P 1断面



39号住居跡 P 2断面

写真図版40 39号住居跡



1号土坑平面



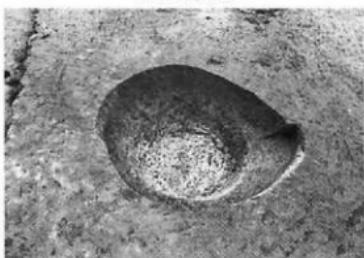
1号土坑断面



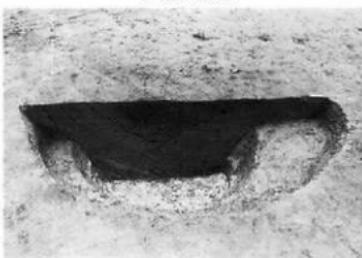
2号土坑平面



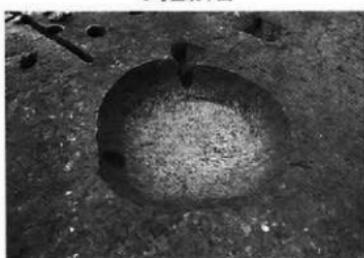
2号土坑断面



3号土坑平面



3号土坑断面

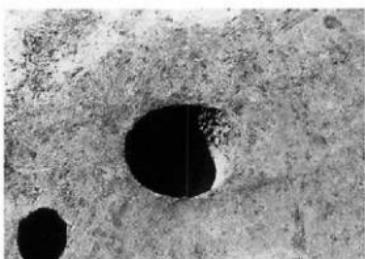


4号土坑平面



4号土坑断面

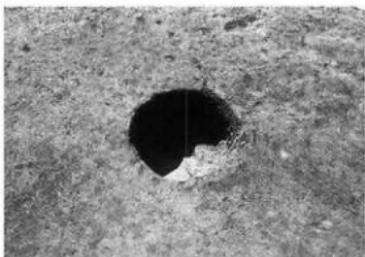
写真図版41 1~4号土坑



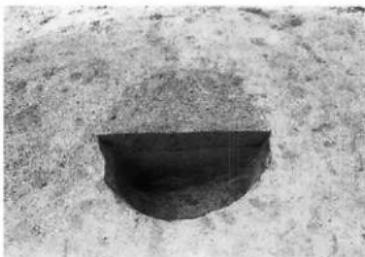
5号土坑平面



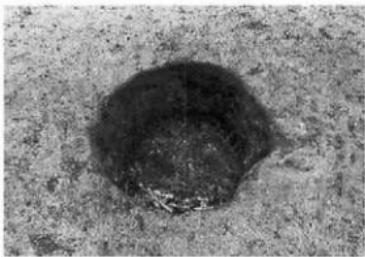
5号土坑断面



6号土坑平面



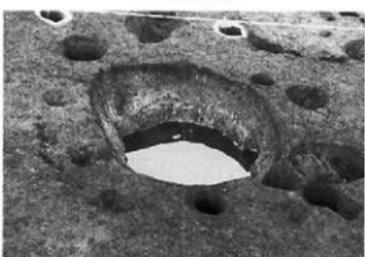
6号土坑断面



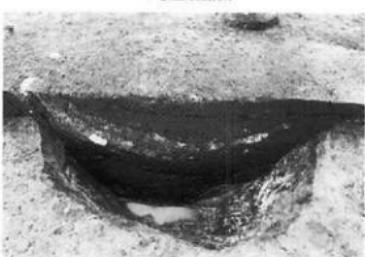
7号土坑平面



7号土坑断面



8号土坑平面



8号土坑断面

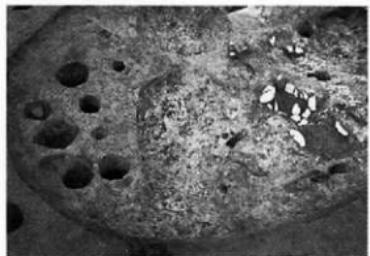
写真図版42 5～8号土坑



9・10・11号土坑平面



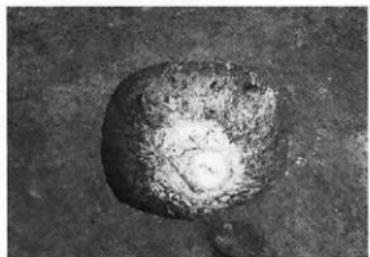
9・10・11号土坑断面



12号土坑平面



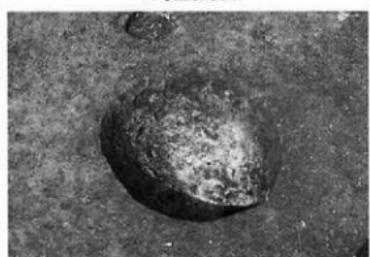
12号土坑断面



13号土坑平面



13号土坑断面



14号土坑平面



14号土坑断面

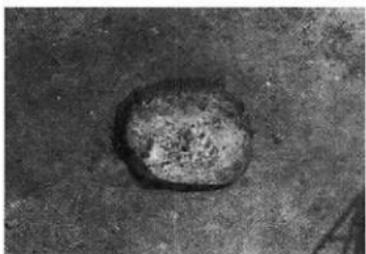
写真図版43 9～14号土坑



15号土坑平面



15号土坑断面



16号土坑平面



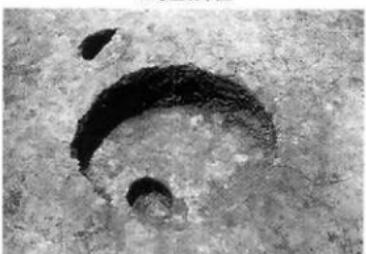
16号土坑断面



17号土坑平面



17号土坑断面



18号土坑平面



18号土坑断面

写真図版44 15~18号土坑



19号土坑平面



19号土坑断面



20号土坑平面



20号土坑断面



作業風景

写真図版45 19・20号土坑



試掘風景



試掘風景



調査区北端部



調査区南側宅地部分



1号陥し穴状遺構平面



1号陥し穴状遺構断面



2号陥し穴状遺構平面



2号陥し穴状遺構断面

写真図版46 試掘風景・1・2号陥し穴状遺構



3号陥し穴状遺構平面



3号陥し穴状遺構断面



4号陥し穴状遺構平面



4号陥し穴状遺構断面



5号陥し穴状遺構平面



5号陥し穴状遺構断面



6号陥し穴状遺構平面



6号陥し穴状遺構断面

写真図版47 3～6号陥し穴状遺構



7号陷し穴状造構平面



7号陷し穴状造構断面



8号陷し穴状造構平面



8号陷し穴状造構断面



9号陷し穴状造構平面



9号陷し穴状造構断面



10号陷し穴状造構平面



10号陷し穴状造構断面

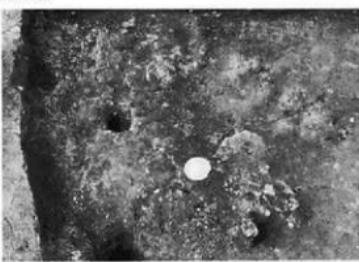
写真図版48 7～10号陷し穴状造構



1号竖穴建物跡全景



1号竖穴建物跡断面



1号竖穴建物跡遺物出土状況



1号竖穴建物跡 P2 断面



1号竖穴建物跡 P4 断面

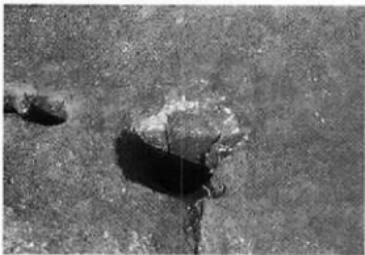
写真図版49 1号竖穴建物跡



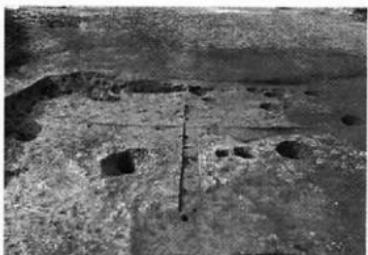
2号竪穴建物跡全景



2号竪穴建物跡断面



2号竪穴建物跡 P 9断面



2号竪穴建物跡貼り床断面

写真図版50 2号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡全景



3号竪穴建物跡断面

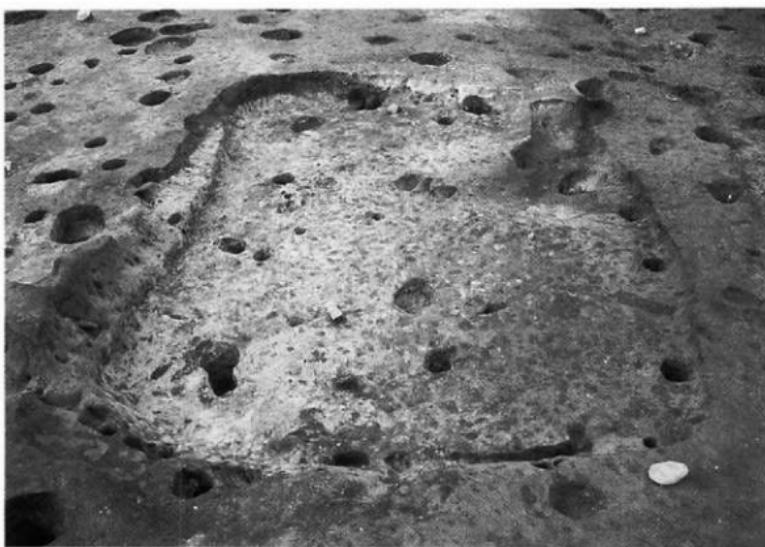


3号竪穴建物跡炭化材検出状況



3号竪穴建物跡ピット a 断面

写真図版51 3号竪穴建物跡



4号竖穴建物跡全景



4号竖穴建物跡断面

写真図版52 4号竖穴建物跡



5号竖穴建物跡全景



5号竖穴建物跡断面

写真図版53 5号竖穴建物跡



6号竖穴建物跡全景



6号竖穴建物跡断面

写真図版54 6号竖穴建物跡

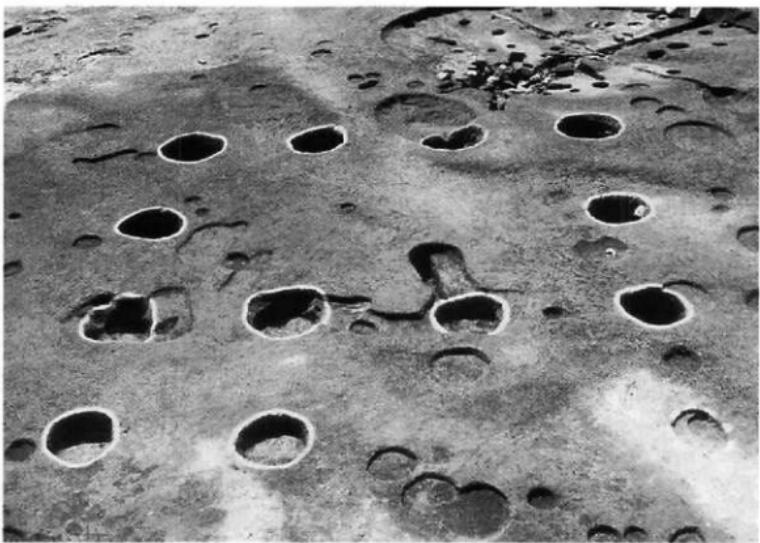


1号掘立柱建物跡全景

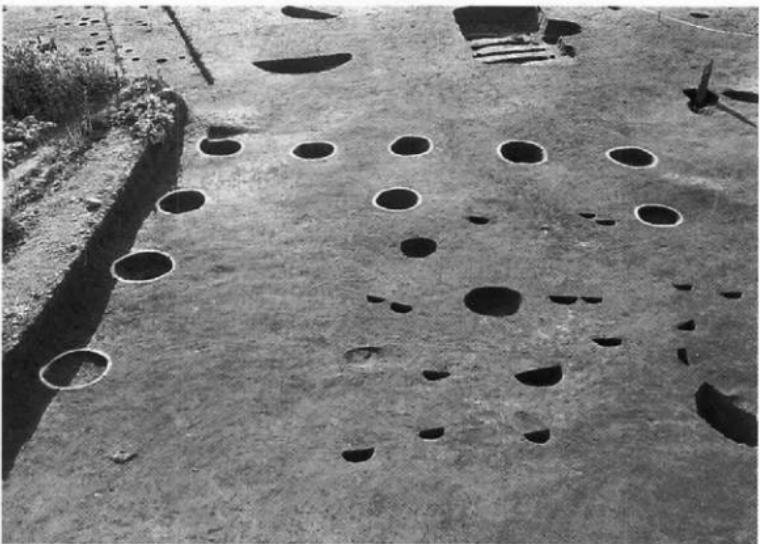


2・3号掘立柱建物跡全景

写真図版55 1～3号掘立柱建物跡

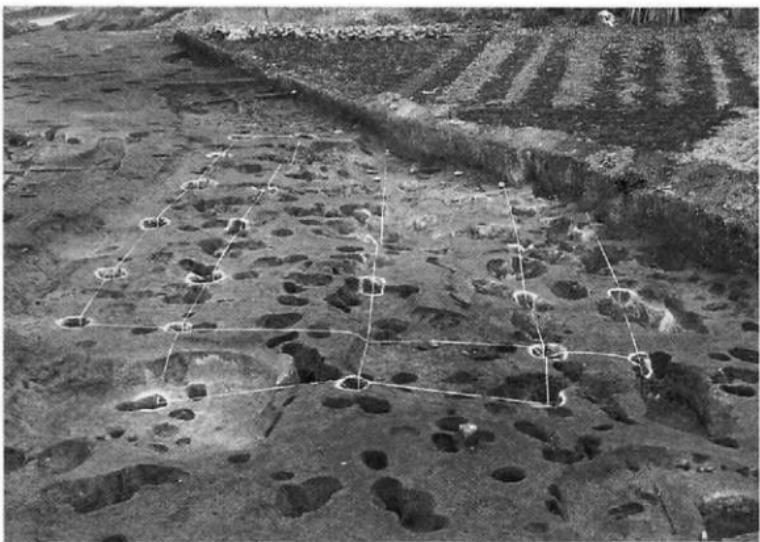


4号掘立柱建物跡全景



6号掘立柱建物跡全景

写真図版56 4・6号掘立柱建物跡



7号掘立柱建物跡全景

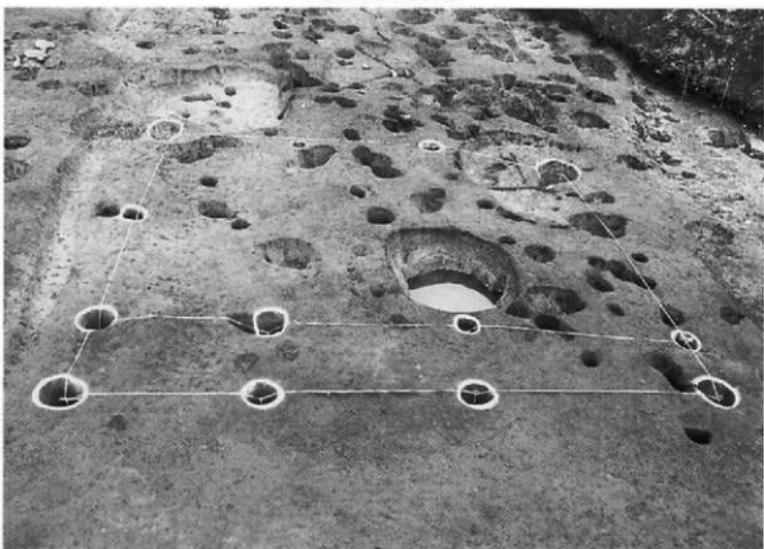


掘立柱建物跡群・平場全景

写真図版57 7号掘立柱建物跡・平場全景



9号掘立柱建物跡全景



10号掘立柱建物跡全景

写真図版58 9・10号掘立柱建物跡



11号掘立柱建物跡全景



12号掘立柱建物跡全景

写真図版59 11・12号掘立柱建物跡



13号掘立柱建物跡全景

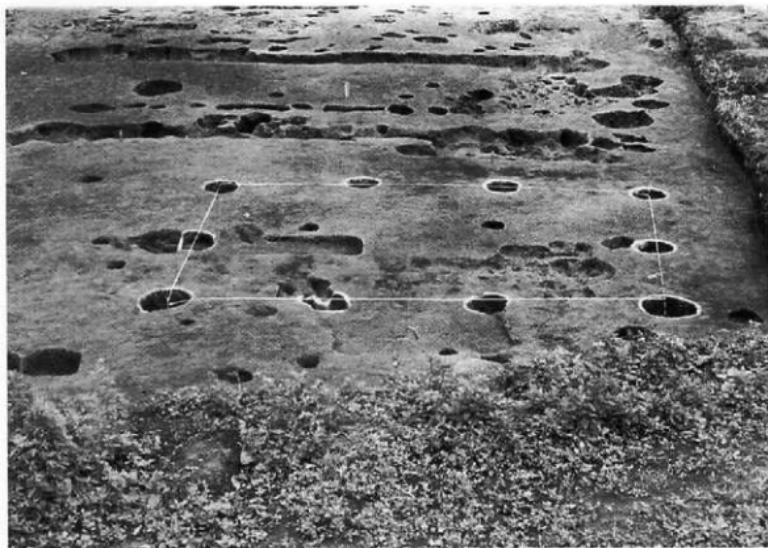


14号掘立柱建物跡全景

写真図版60 13・14号掘立柱建物跡



15号掘立柱建物跡全景

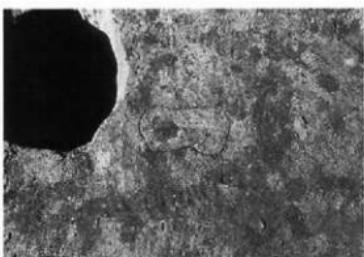


16号掘立柱建物跡全景

写真図版61 15・16号掘立柱建物跡



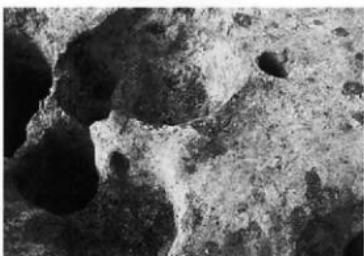
掘立柱建物跡群平場断面



掘立柱建物跡群焼土①



掘立柱建物跡群焼土②



掘立柱建物跡群焼土③



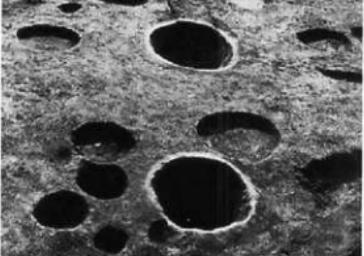
掘立柱建物跡群焼土④



北西侧柱穴列全景



柱穴列断面



北西侧柱穴列全景

写真図版62 掘立柱建物跡群焼土・柱穴列(1)



東側柱穴列群全景



南側柱穴列全景



南東側柱穴列全景

写真図版63 柱穴列(2)



1号工房間連施設・遺物出土状況

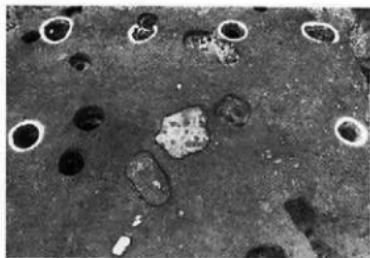


1号工房間連施設断面



1号工房跡全景

写真図版64 1号工房間連施設(1)



1号工房関連施設焼土・礫検出状況



1号工房関連施設焼土断面



1号工房関連施設鉄鍋出土状況

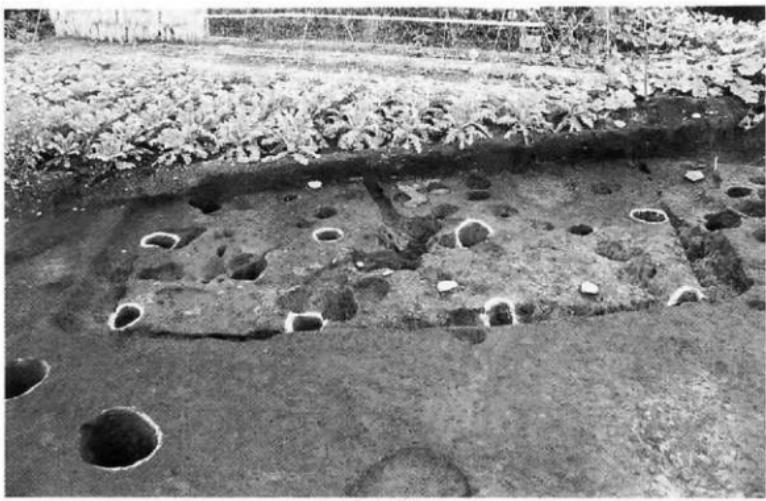


1号工房関連施設鉄札出土状況

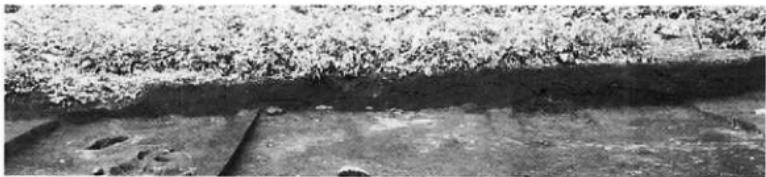


1号工房関連施設床面土壤サンプリング風景

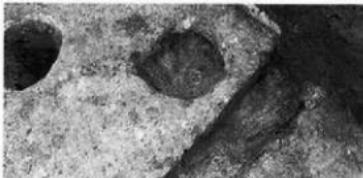
写真図版65 1号工房関連施設(2)



1号工房跡全景



1号工房跡断面



1号工房跡 P 2 平面



1号工房跡 鉄滓 條出狀況



1号工房跡 P 1 断面



1号工房跡 烧土 · P 1 平面

写真図版66 1号工房跡



南侧墓坑群全景



3·4号墓坑全景



7号墓坑全景



8号墓坑全景



10号墓坑全景

写真图版67 南侧墓坑群，3·4·7·8·10号墓坑



11号墓坑全景



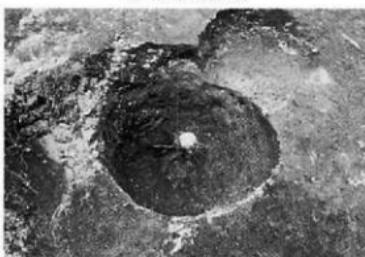
18号墓坑全景



19·30号墓坑全景



22号墓坑全景



25号墓坑全景



31号墓坑全景

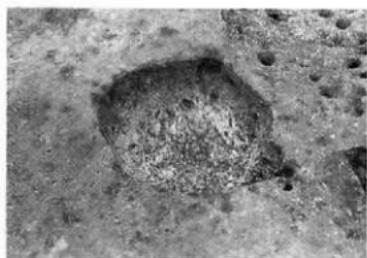


33号墓坑全景



34号墓坑全景

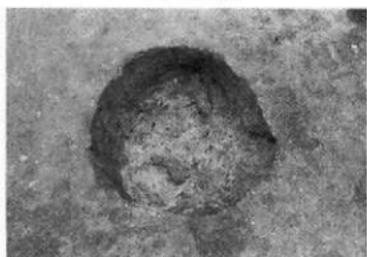
写真图版68 11·18·19·22·25·30·31·33·34号墓坑



44号墓坑全景



45号墓坑全景



46号墓坑全景



五月館を望む (W→)



1号集石全景



2号集石全景

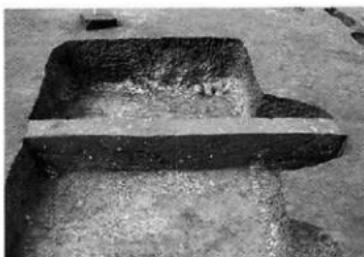


3号集石全景



4号集石全景

写真図版69 44~46墓坑・1~4号集石全景



1号住居状遺構断面



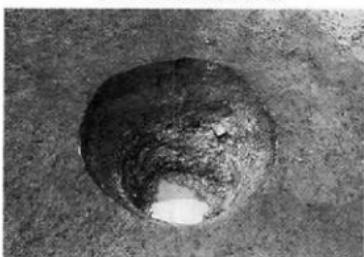
1号住居状遺構根太痕検出状況



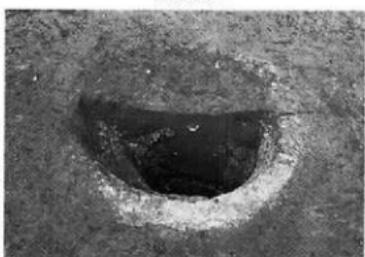
1号住居状遺構壁板検出状況



作業風景



1号井戸跡平面



1号井戸跡断面

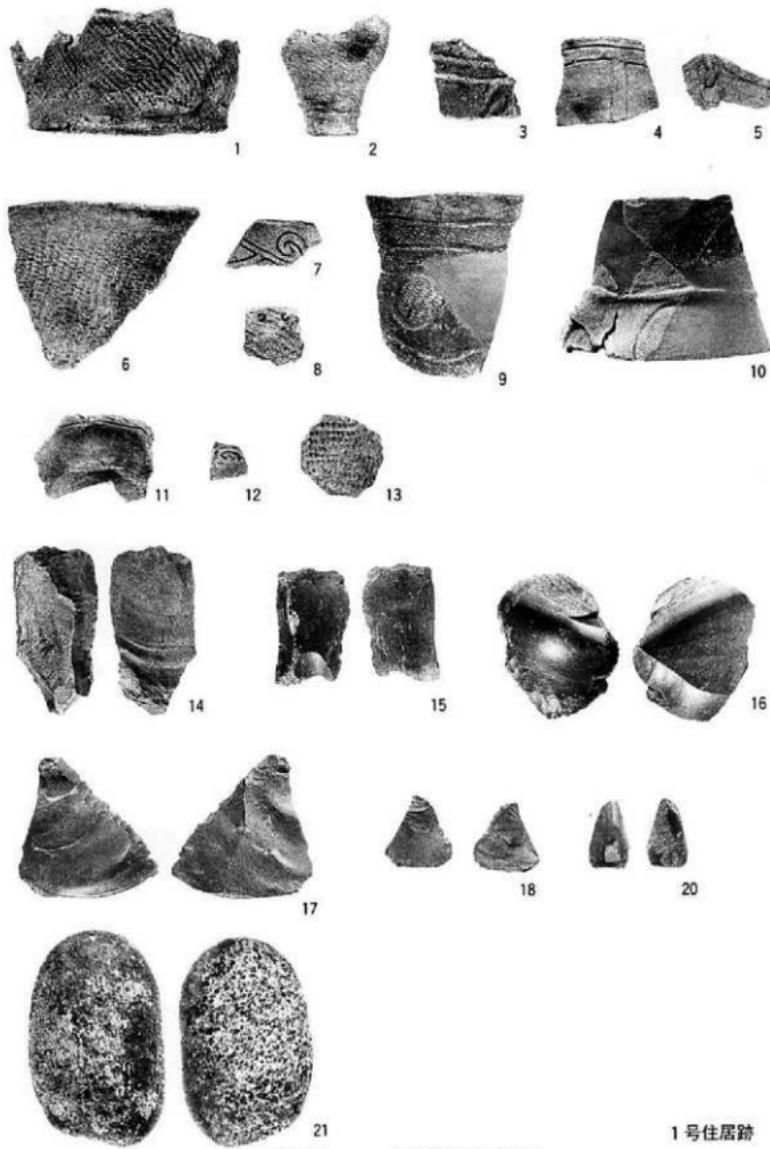


2号井戸跡平面



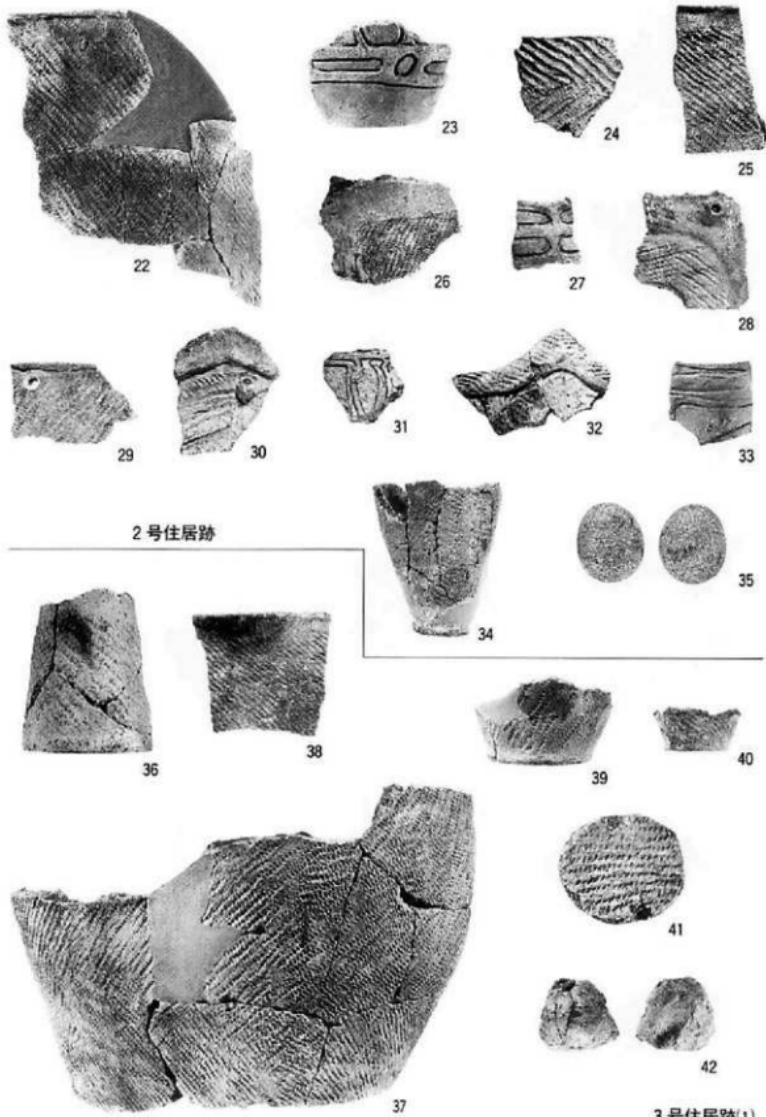
2号井戸跡断面

写真図版70 1号住居状遺構・1・2号井戸跡

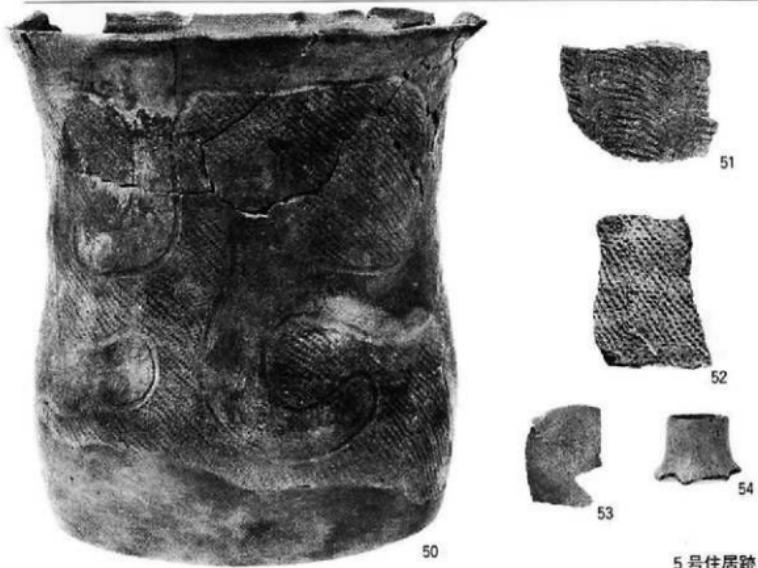
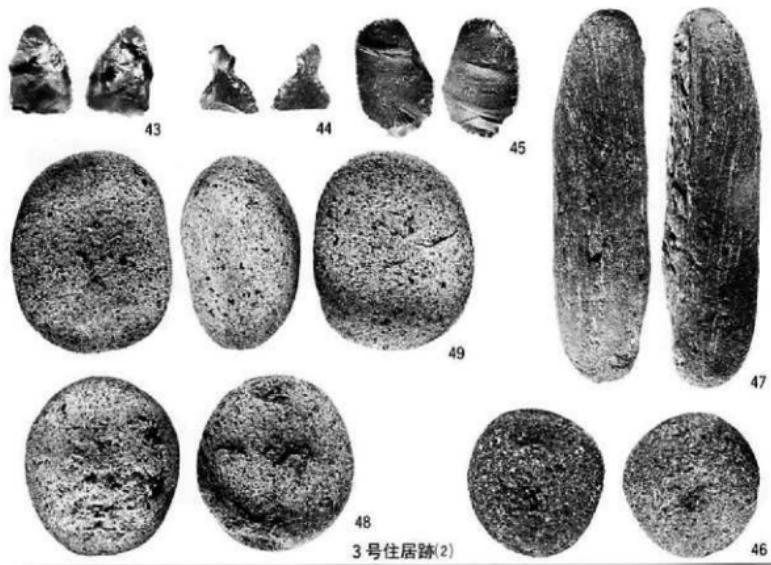


写真図版71 1号住居跡出土遺物

1号住居跡



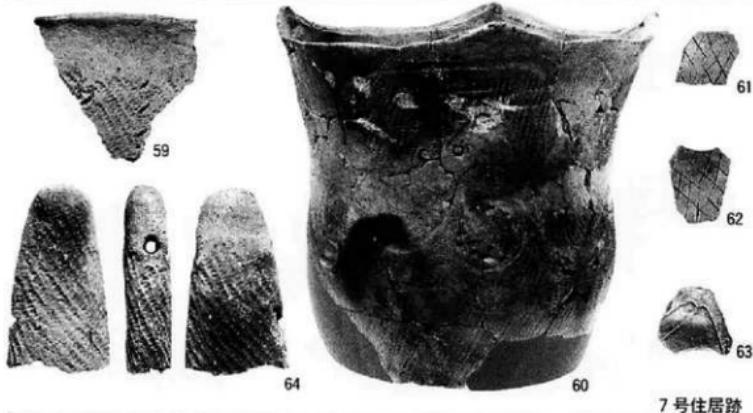
写真図版72 2・3号住居跡出土遺物



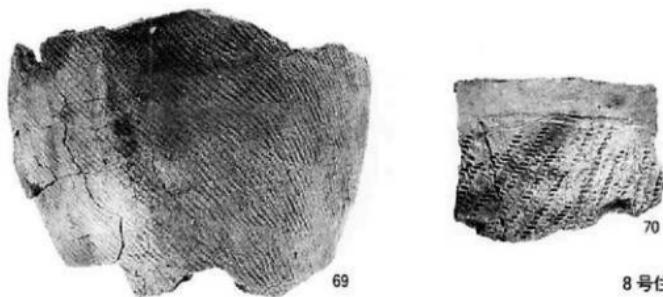
写真図版73 3・5号住居跡出土遺物



6号住居跡



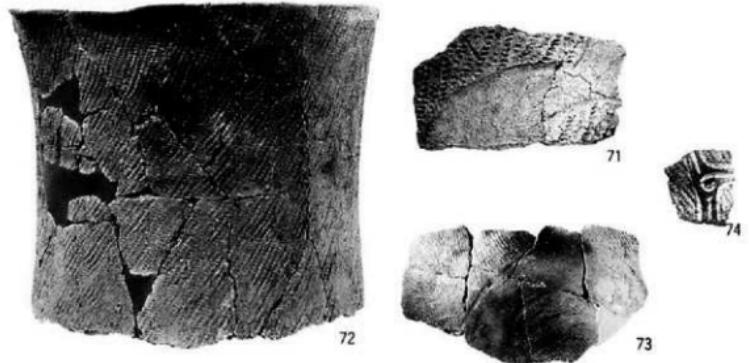
7号住居跡



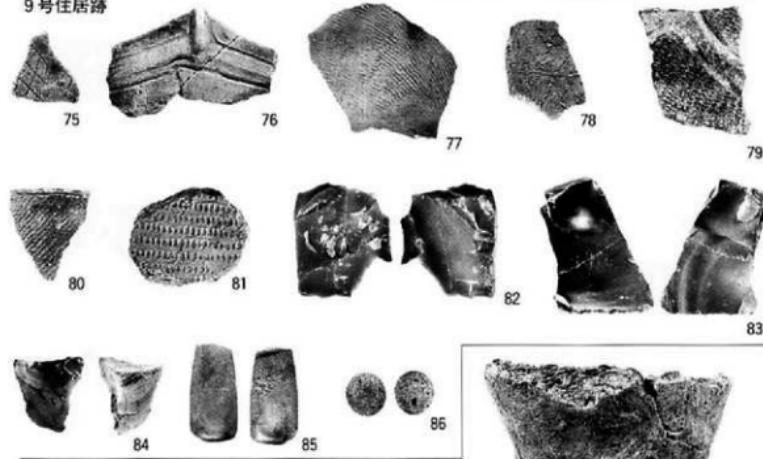
8号住居跡(1)

写真図版74 6～8号住居跡出土遺物

8号住居跡(2)



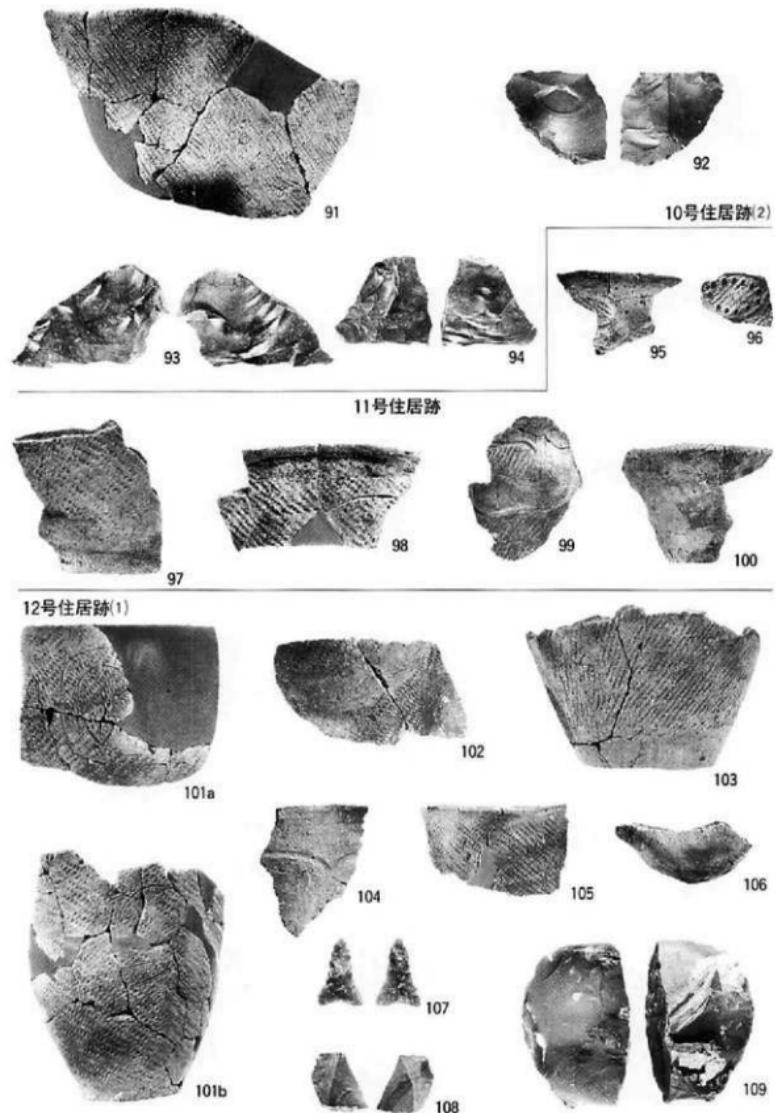
9号住居跡



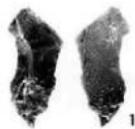
10号住居跡(1)



写真図版75 8～10号住居跡出土遺物



写真図版76 10~12号住居跡出土遺物



111



110



112



113



114



115

12号住居跡(2)



118



119



13号住居跡



120



121



122



123



117

14号住居跡

写真図版77 12~14号住居跡出土遺物



15号住居跡

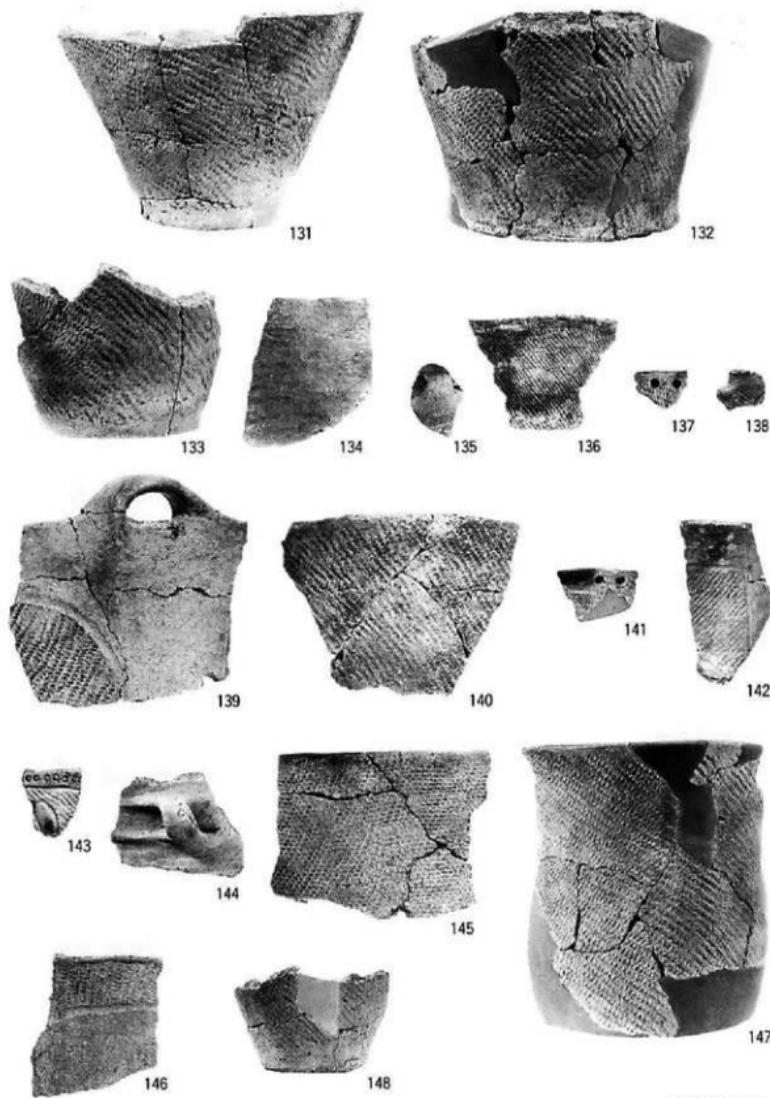
125

130

128

16号住居跡(1)

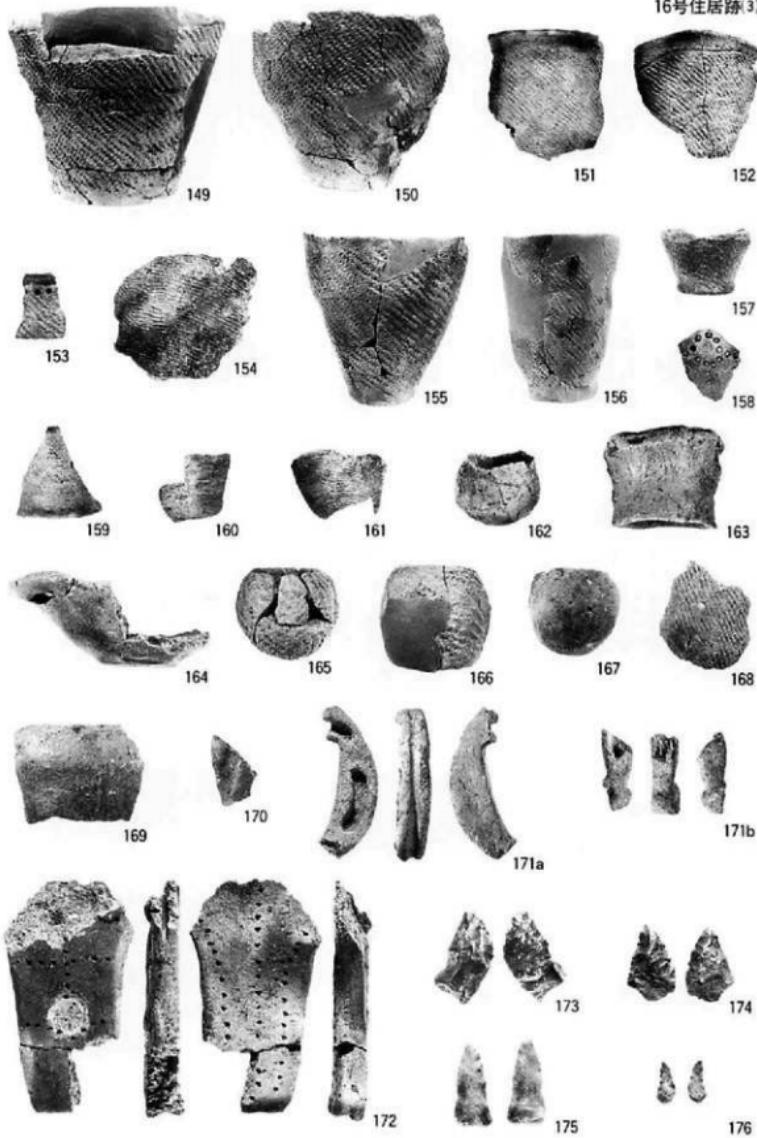
写真図版78 15・16号住居跡出土遺物(1)



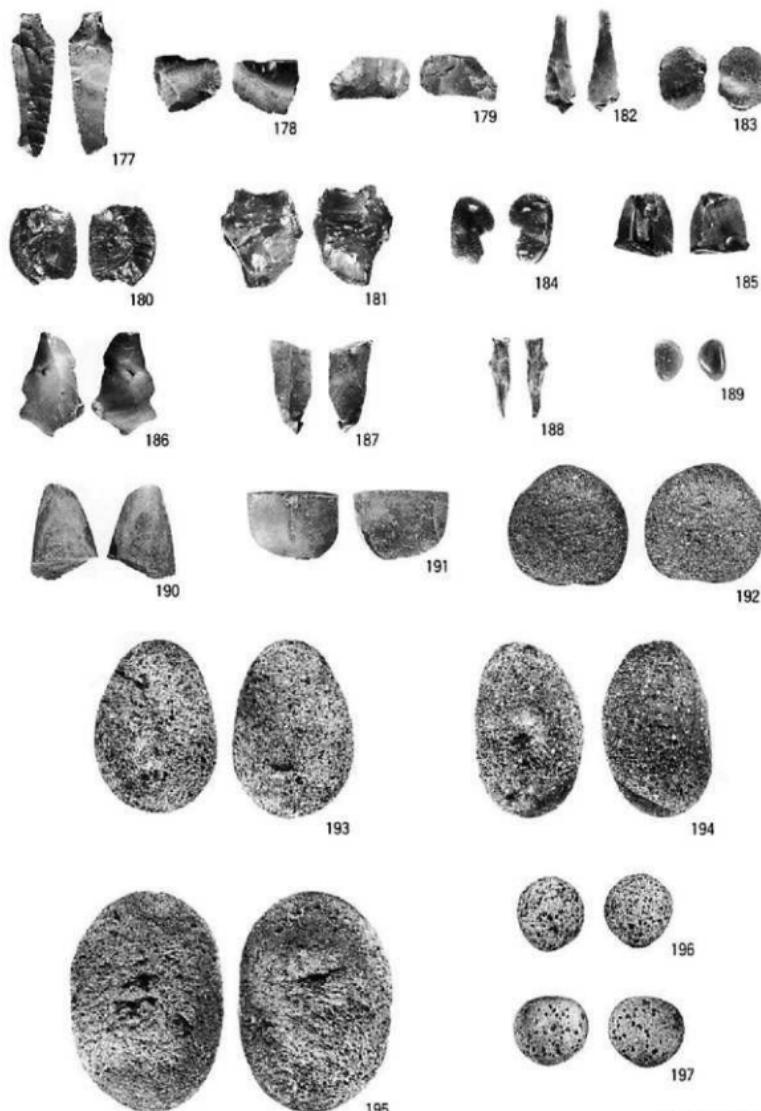
写真図版79 16号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡(2)

16号住居跡(3)

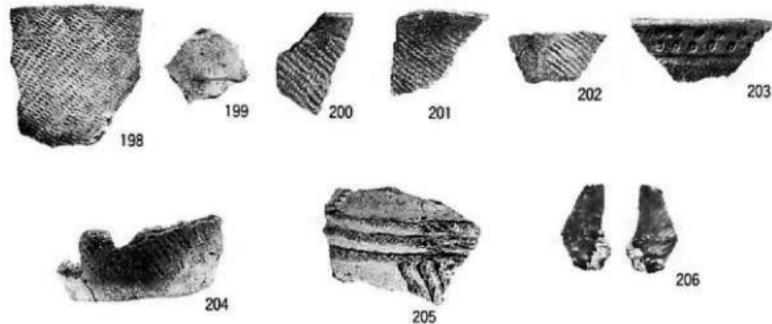


写真図版80 16号住居跡出土遺物(3)

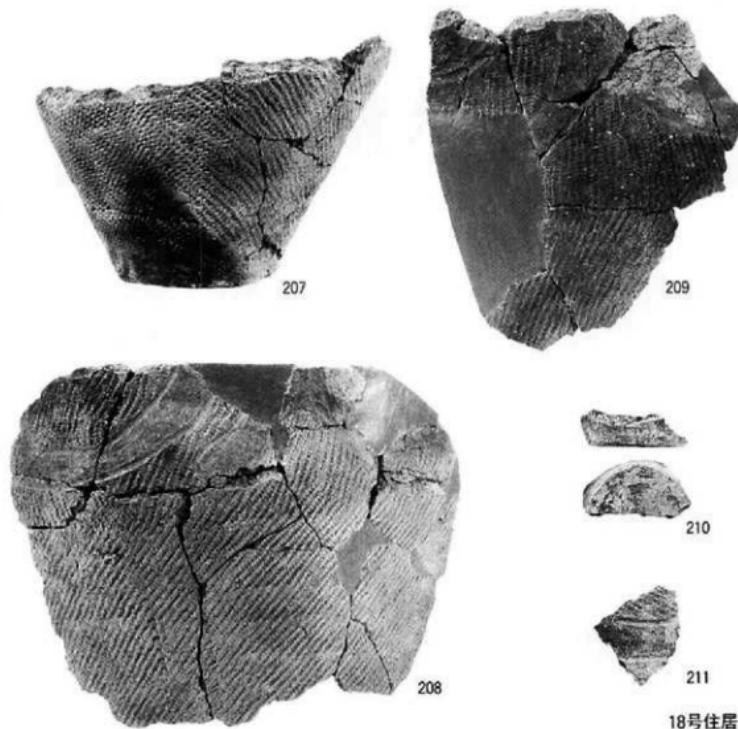


写真図版81 16号住居跡出土遺物(4)

16号住居跡(4)



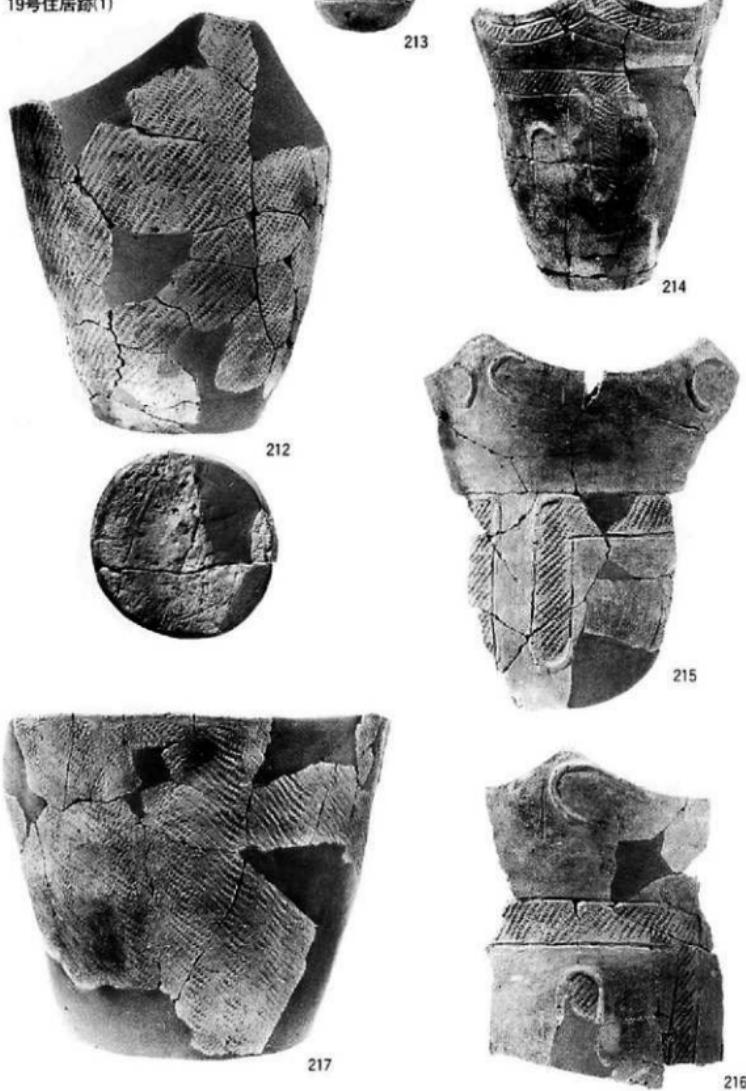
17号住居跡



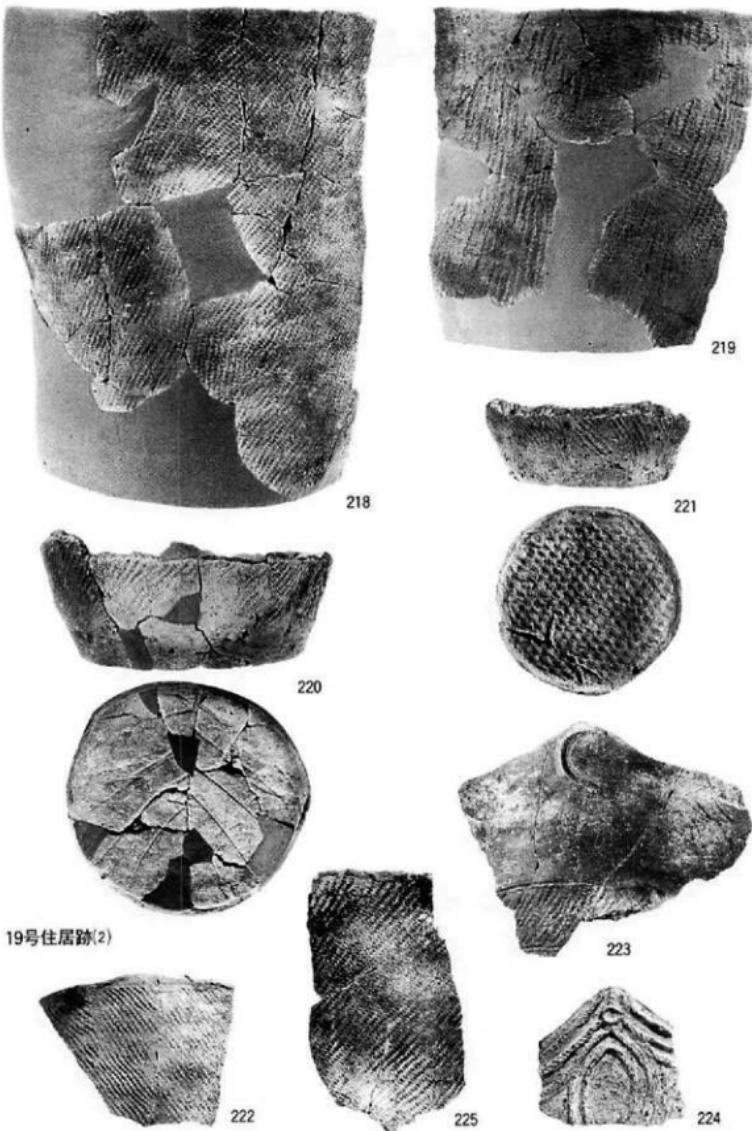
18号住居跡

写真図版82 17・18号住居跡出土遺物

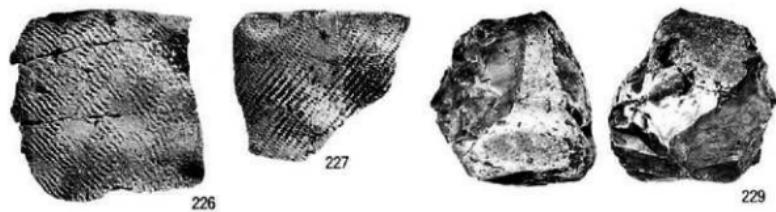
19号住居跡(1)



写真図版83 19号住居跡出土遺物(1)



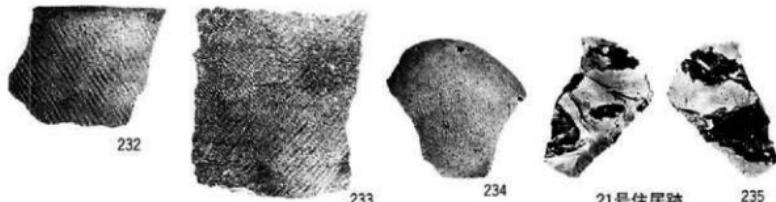
写真図版84 19号住居跡出土遺物(2)



19号住居跡(3)



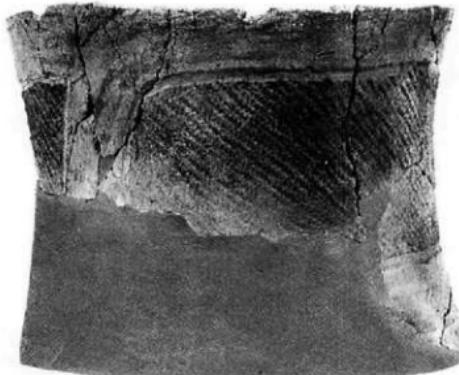
20号住居跡



写真図版85 19~21号住居跡出土遺物



236



237



238



239



240



241



242

22号住居跡



243



244



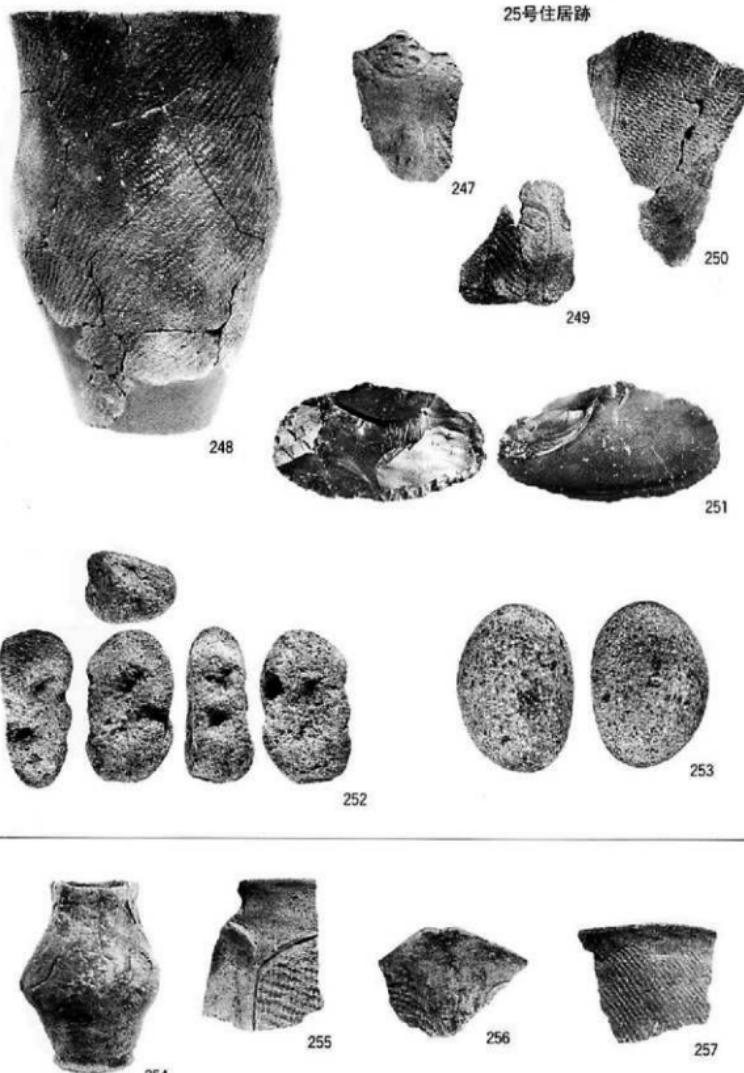
245



246

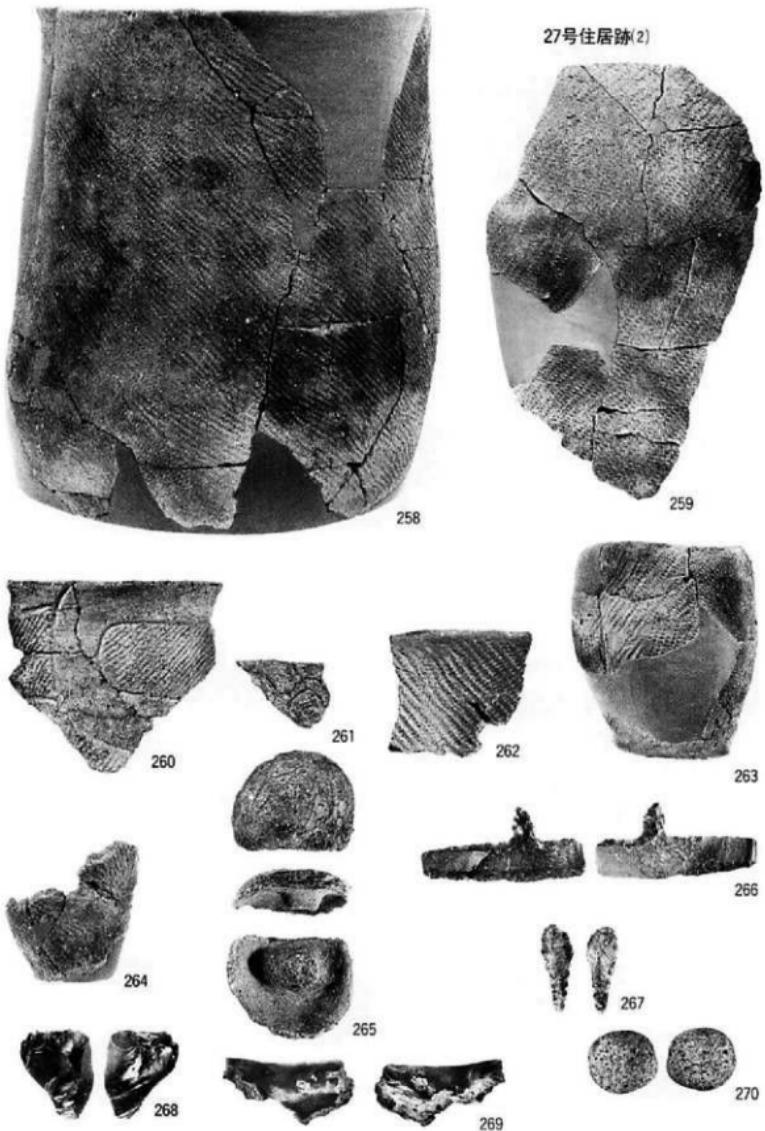
24号住居跡

写真図版86 22~24号住居跡出土遺物



写真図版87 25・27号住居跡出土遺物

27号住居跡(2)



写真図版88 27号住居跡出土遺物



271



273



274



275



276



277



278



272



280



279



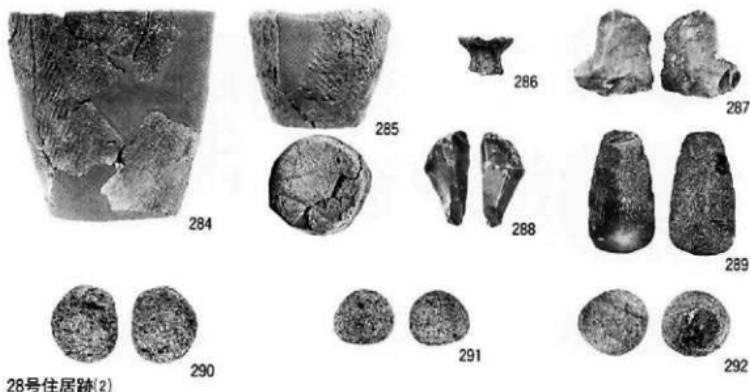
282



283

28号住居跡(1)

写真図版89 28号住居跡出土遺物

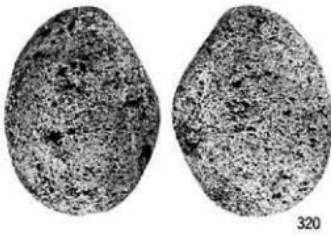
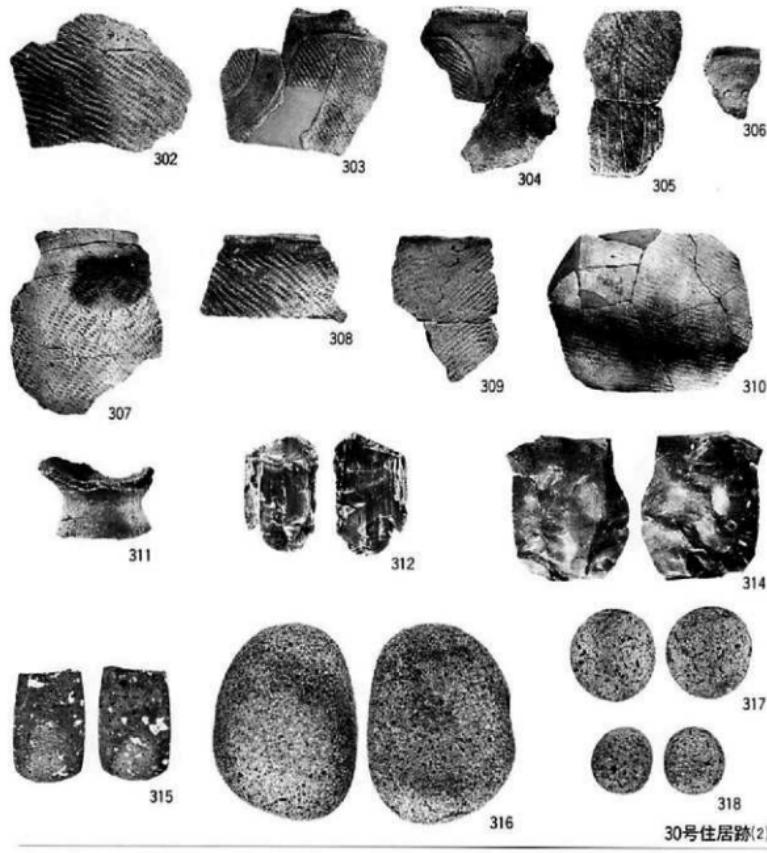


28号住居跡(2)



写真図版90 28・30号住居跡出土遺物

30号住居跡(1)



31号住居跡

写真図版91 30・31号住居跡出土遺物



321



323



322



324



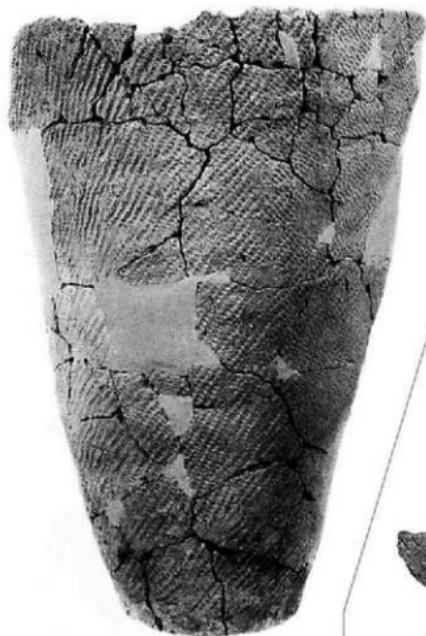
325



326

32号住居跡

写真図版92 32号住居跡出土遺物



327



329



写真図版93



328

330



331



332

33号住居跡



333



334



335



336



337



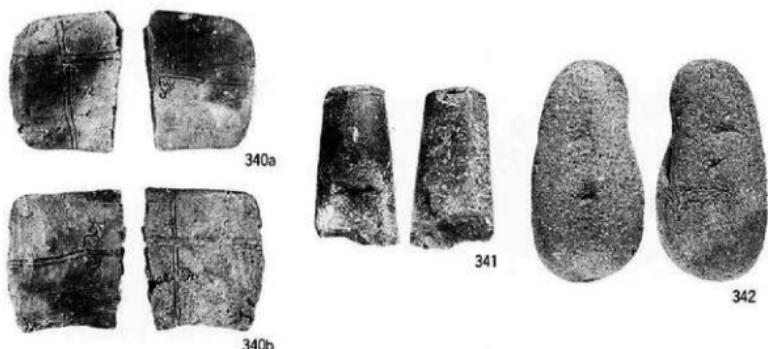
338



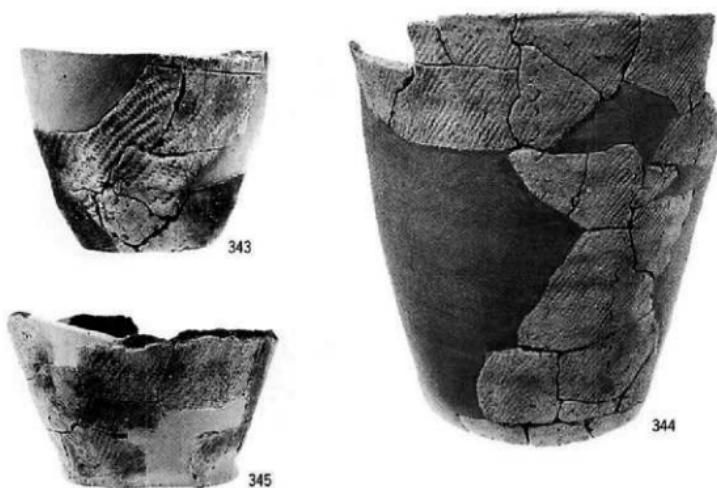
339

34号住居跡(1)

33・34号住居跡出土遺物

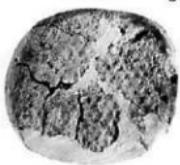


34号住居跡(2)



写真図版94 34・36号住居跡出土遺物

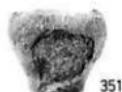
36号住居跡



37号住居跡



350



351



352



353



354

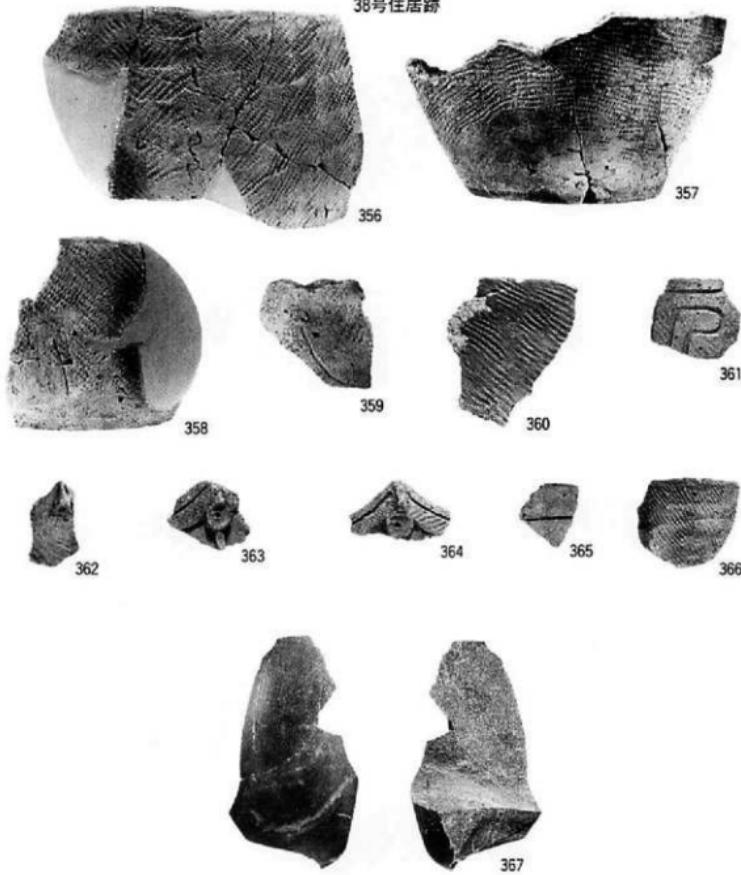


355

38号住居跡

写真図版95 37・38号住居跡出土遺物

38号住居跡



39号住居跡



写真図版96 38・39号住居跡出土遺物



写真図版97 土坑内出土遺物



375



376

1号堅穴建物跡



377



378

6号堅穴建物跡



379



380



381



382

2号掘立柱建物跡

写真図版98 1・6号堅穴建物跡・2号掘立柱建物跡出土遺物



383~384



386

3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡



387

柱穴群P

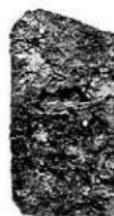
柱穴群



388~389



390



391



392



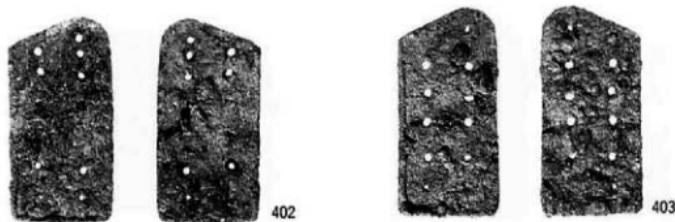
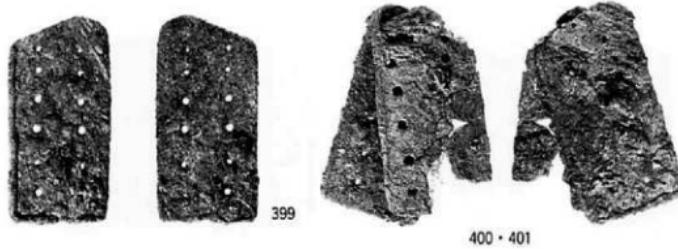
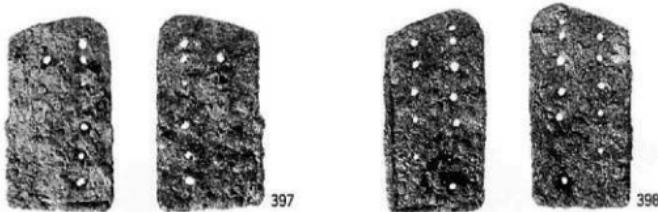
393



394

1号工房間連施設(1)

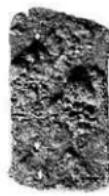
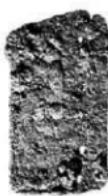
写真図版99 3・4号掘立柱建物跡・柱穴群・1号工房間連施設出土遺物



写真図版100 1号工房関連施設出土遺物



404



405



408



406



407



409



410



411



412



413

写真図版101 1号工房関連施設・1号工房跡出土遺物



414



415



416



417



418



419

3号墓坑



420・421(固着)

22号墓坑



423

40号墓坑



26号墓坑

422

写真図版102 墓坑内出土遺物(1)



424・425

426

427

42号墓坑



431

43号墓坑



432・433

434

435

45号墓坑



437

438



439

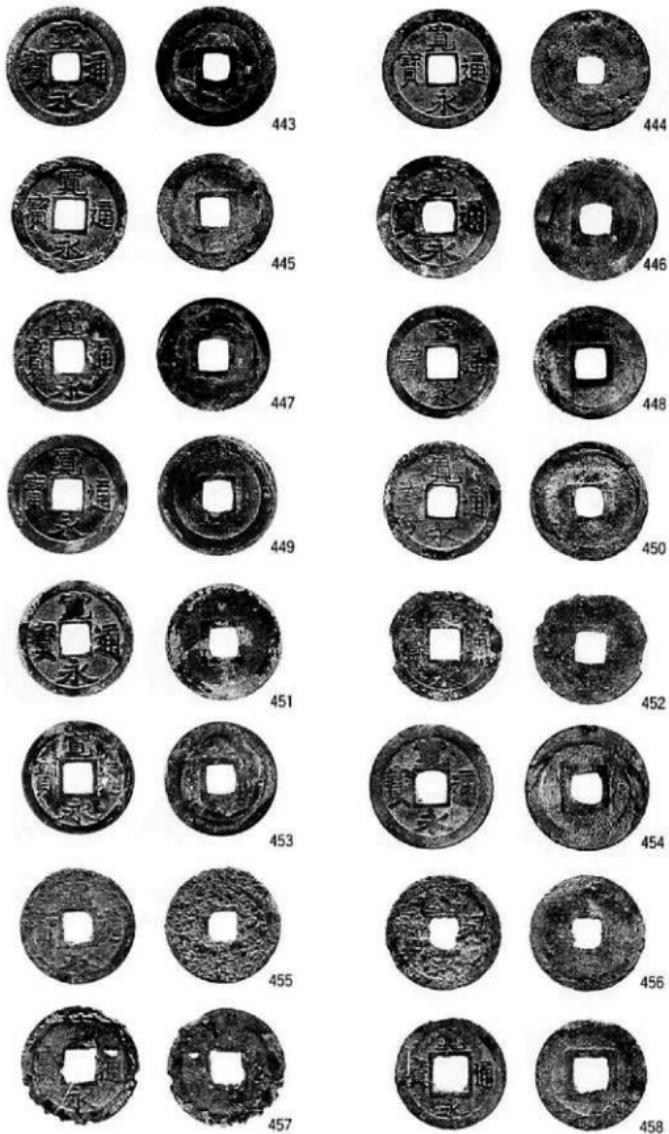
440

441

442

墓坑内

写真図版103 墓坑内出土遺物(2)



写真図版104 墓坑内出土遺物(3)



459



460



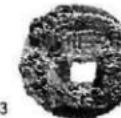
461



462



463



464



465



466



467



476～481



482～487



493～497

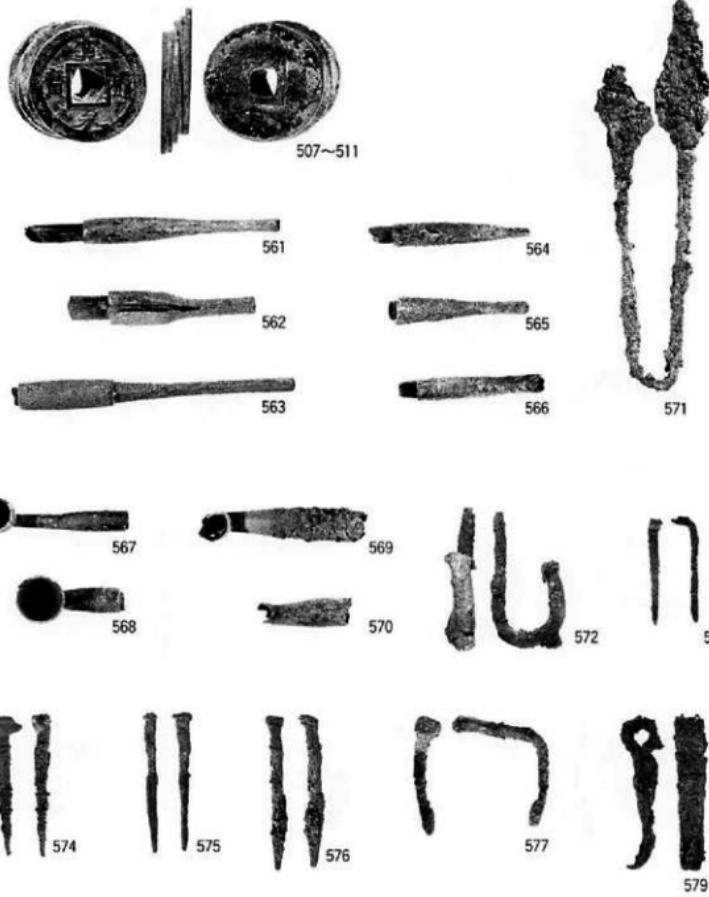


498～501

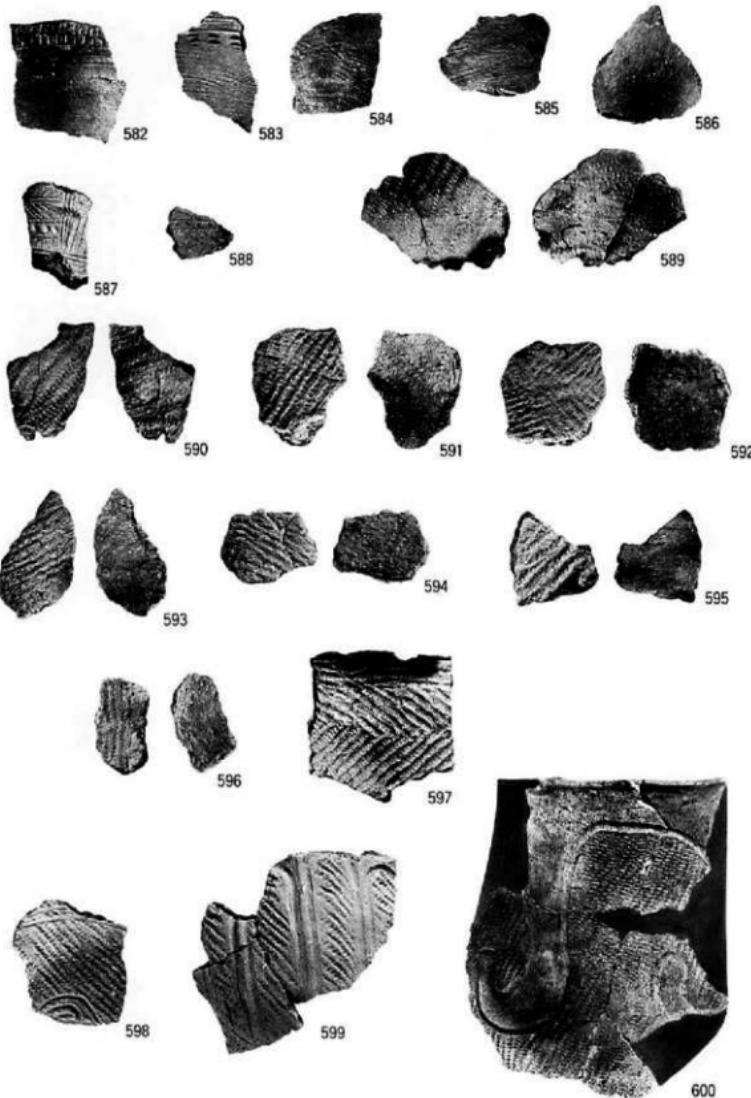


502～506

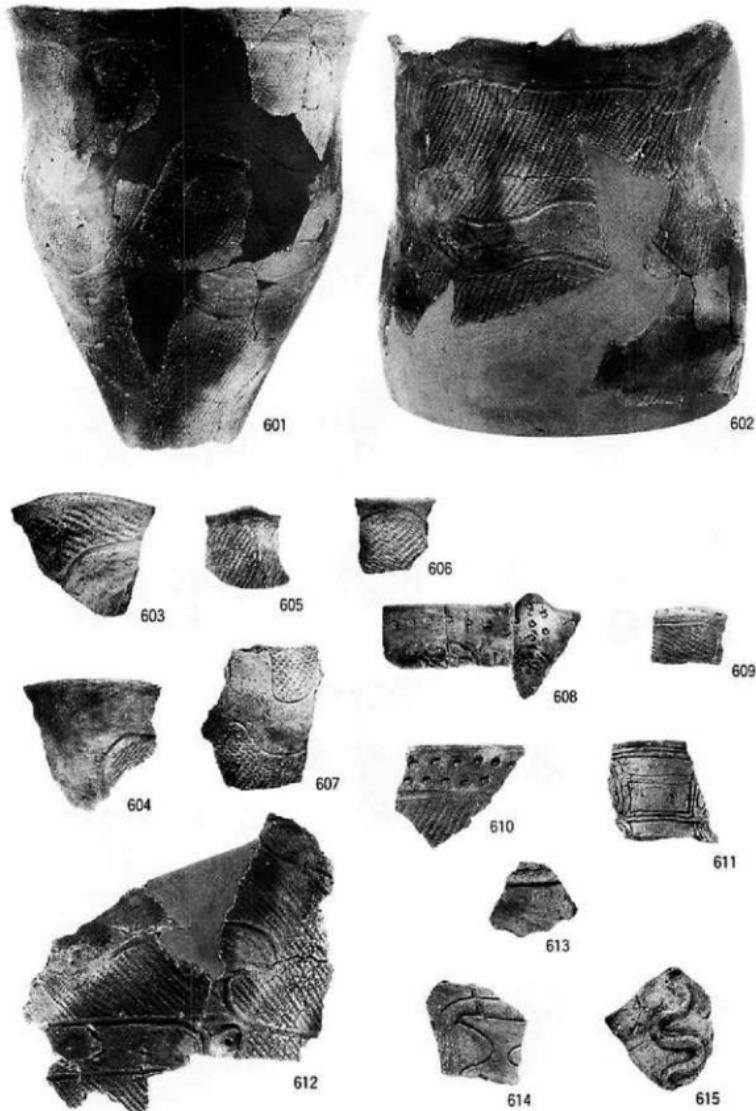
写真図版105 墓坑内出土遺物(4)



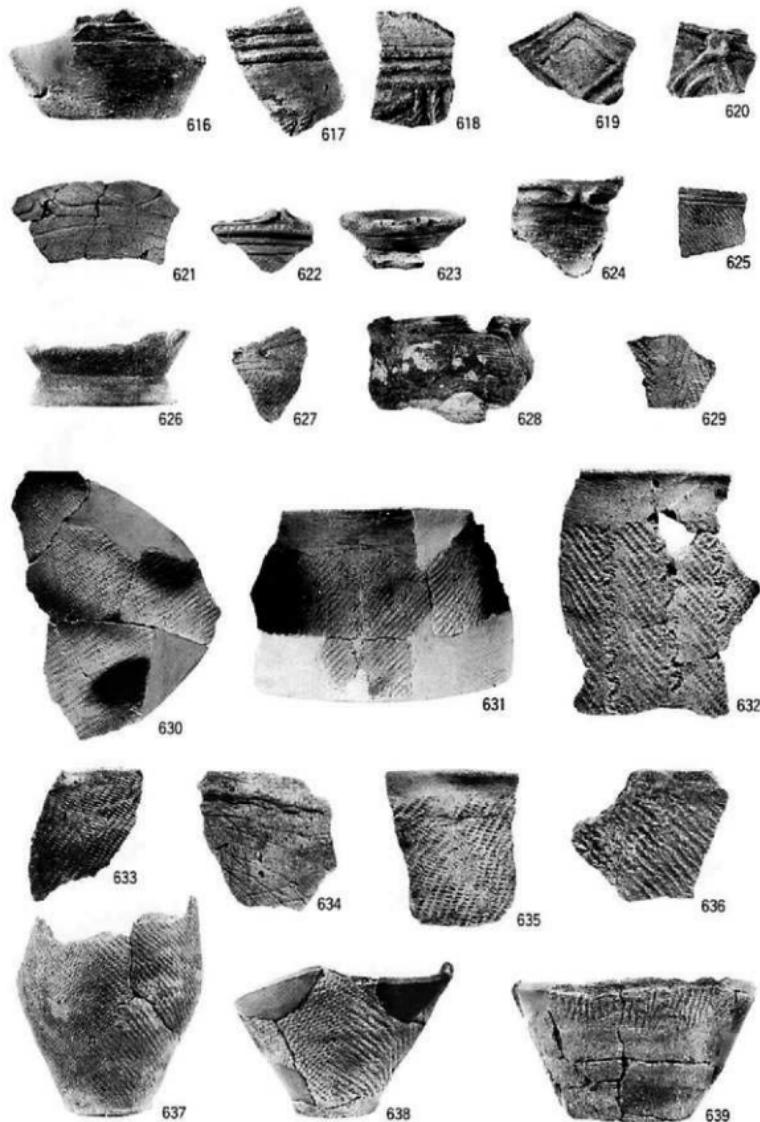
写真図版106 墓坑内出土遺物(5)



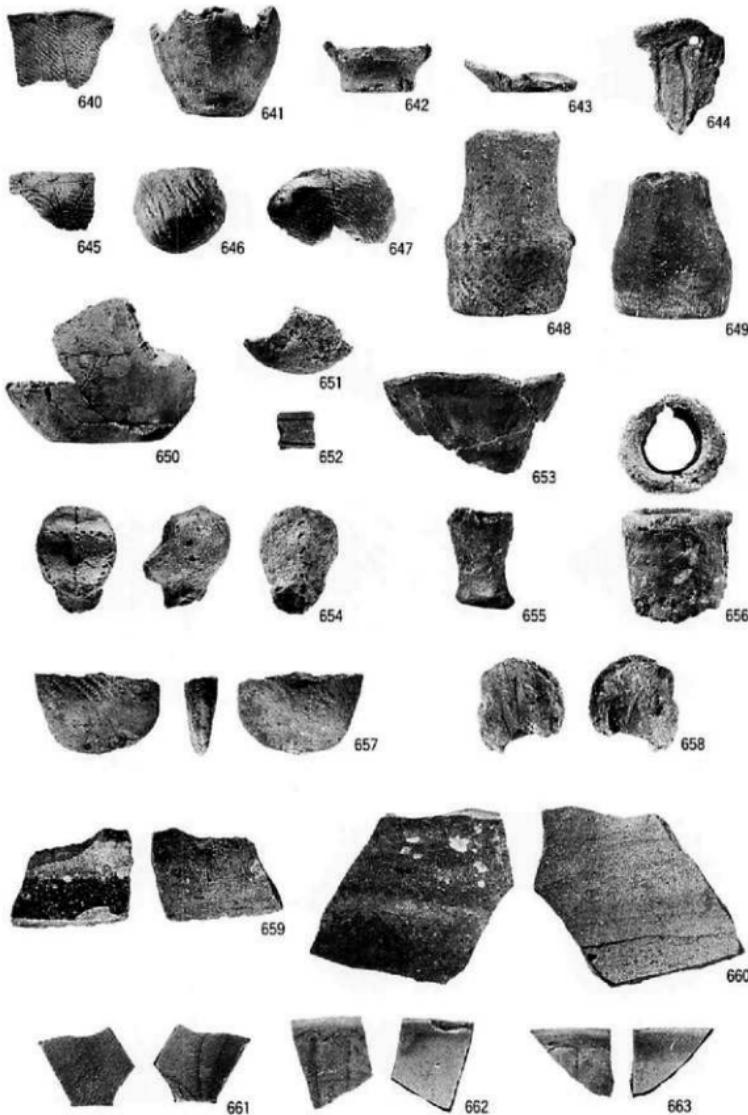
写真図版107 遺構外出土遺物（土器1）



写真図版108 遺構外出土遺物（土器2）



写真図版109 遺構外出土遺物（土器 3）



写真図版110 遺構外出土遺物（土製品・陶磁器1）



664



667



665



666



668



669



670



671



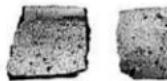
672



673



674

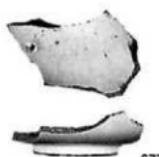


675

写真図版111 遺構外出土遺物（陶磁器2）



676



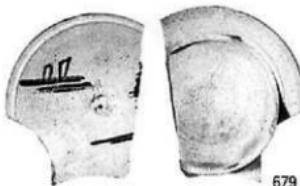
677



679



678



679



680



681

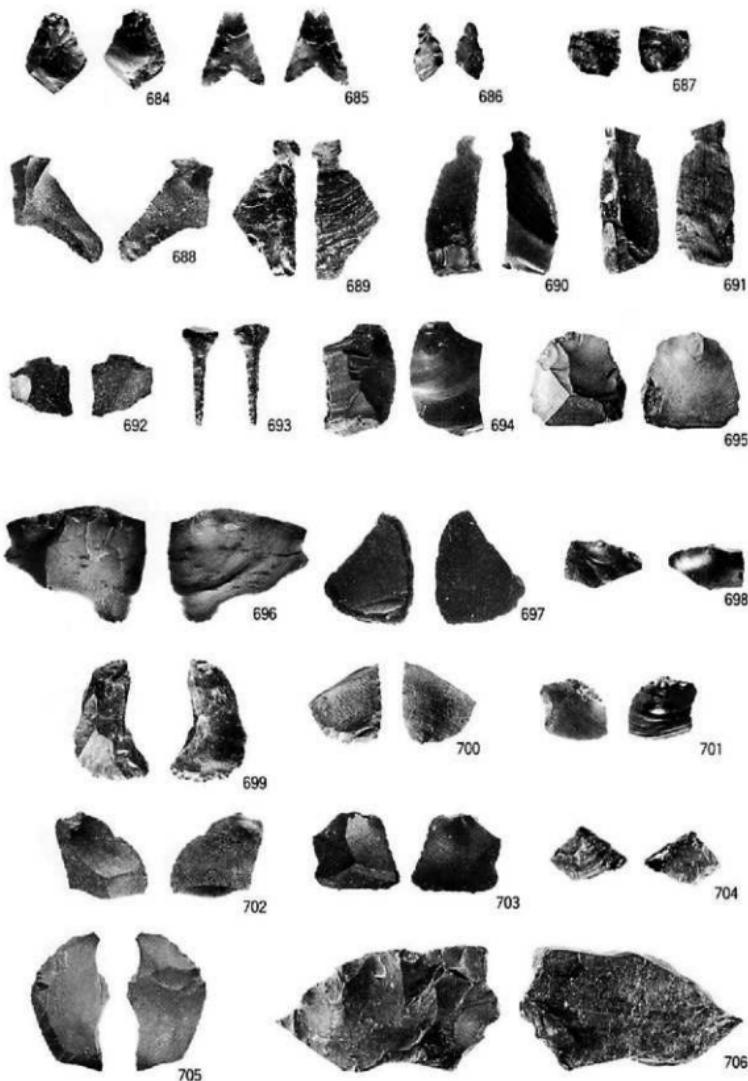


683

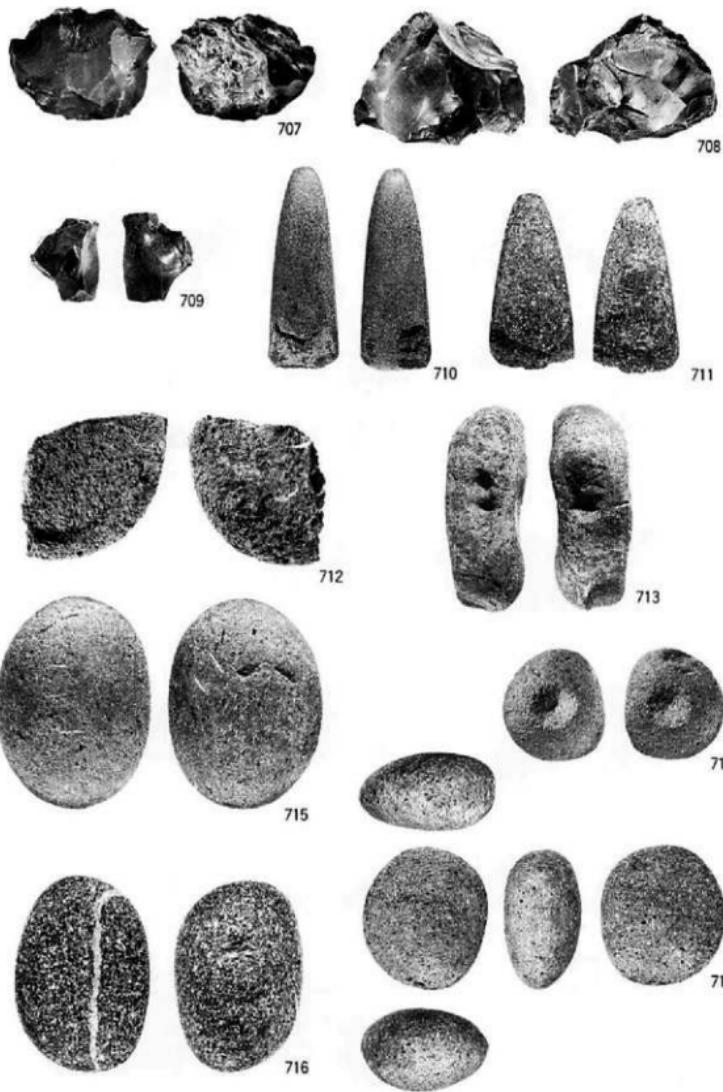


682

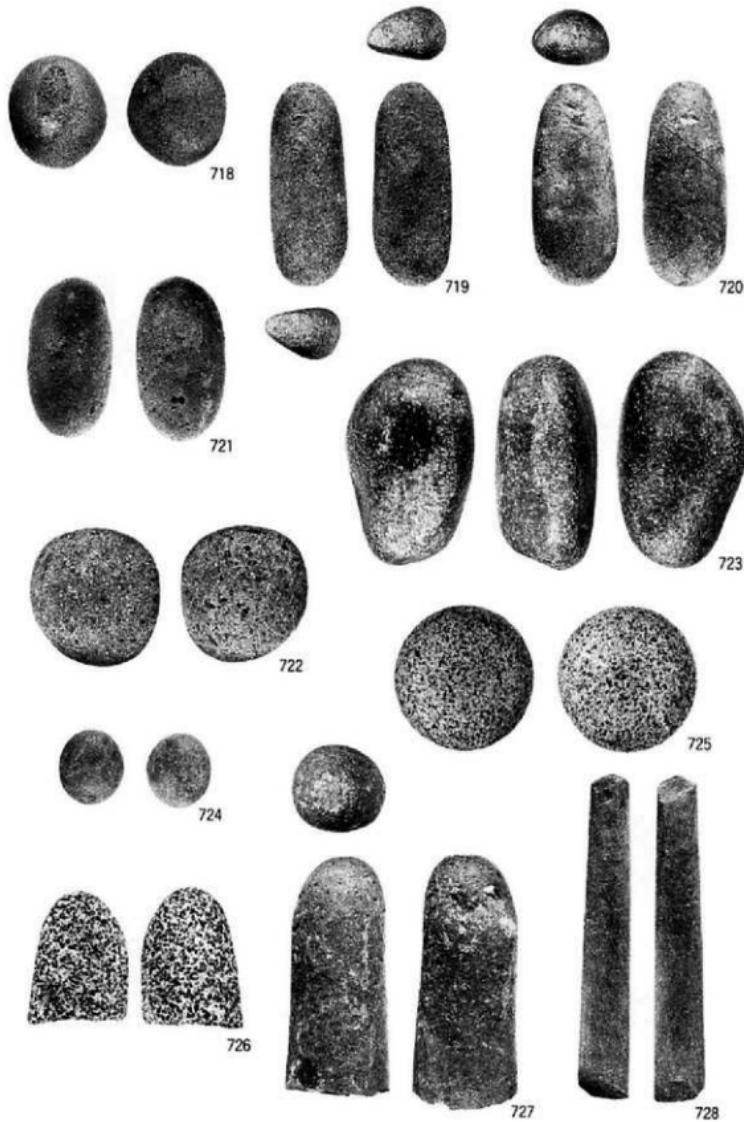
写真図版112 遺構外出土遺物（陶磁器3）



写真図版113 遺構外出土遺物（石器1）



写真図版114 遺構外出土遺物（石器2）



写真図版115 遺構外出土遺物（石器3）



729



730



733



731



732



734



735



736



737



738

写真図版116 遺構外出土遺物（鉄製品他）

報告書抄録

ふりがな	にしょうじにいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	仁昌寺II遺跡発掘調査報告書							
報告名	国道4号小島谷バイパス建設による緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第400集							
編著者名	中村直美、北田 熊、原 美津子							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853岩手県盛岡市下飯岡11地南185 Tel 019-638-9001							
発行年月日	西暦2002年11月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
仁昌寺II 遺跡	岩手県二戸郡一戸町 小島谷字仁昌寺4ほか	市町村	遺跡番号	40度 9分 39秒	141度 18分 34秒	2000. 04.17 ~2000. 11.17	5,801m ²	国道4号 小島谷バイパス建設による 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仁昌寺II 遺跡	集落	縄文時代 (中期末~後期初)	竪穴住居跡 土坑 炉跡 陥し穴状遺構	39棟 20基 2基 10基	縄文土器 (中期末~後期初) 石器・石製品 (中期末~後期初)	陶磁器(白磁皿など) 鉄製品(札・鍋など)	古錢	
		中世	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 工房間連施設・工房跡	6棟 16棟 2棟				
		近世	住居状遺構 墓坑	1棟				

仁昌寺遺跡

所 在 地 二戸郡一戸町大字小島谷字仁昌寺33-2ほか
委 託 者 國土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
遺跡台帳番号 JF30-2804
調査略号 NSJ-01
調査面積 4,916m²
調査期間 平成13年4月17日～7月5日
整理期間 平成13年12月1日～3月31日
調査担当者 中村直美・北田 熊
整理担当者 中村直美・北田 熊
協力機関 一戸町教育委員会

I. 基本層序

本遺跡は仁昌寺II遺跡の北側5mに位置し、南西-北東方向に入る沢を挟んで隣接している。標高は198~203mを測り、仁昌寺II遺跡とは同じか若干低位にある。また、仁昌寺II遺跡と同様、丘陵の斜面部に立地する。遺跡の基本層序は、調査区にT1からT33の地形に沿った試掘トレンチを入れ、その断面から決定した。調査区は斜面部にあたっており、上位で黒色土の堆積が薄く、下位で厚い傾向が見られた。また、北側の緩斜面下位ではTo-a火山灰、To-Cu火山灰の再堆積層が観察され、5500~1000年ほど前までは沢地形であったことが判明した。このエリアからは遺物も比較的多く出土しており、希薄な遺物包含層を形成している。南東側は水田および宅地を造成する際に削平されており、表土直下で礫層となる。

第I層： 黒褐色シルト／表土（10YR 3/1）粘性中・しまりやや弱

第IIa層： 黒色シルト／（10YR 2/1）粘性中・しまり中

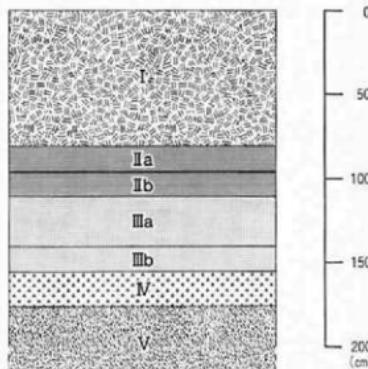
第IIb層： 黒褐色シルト（10YR 2/2）に鈍い黄褐色火山灰（To-a・10YR 6/4）がブロック状に25%混入する。粘性やや弱・しまり中。→十和田a火山灰再堆積層

第IIIa層： 黒褐色シルト／（10YR 2/2）粘性中・しまり中

第IIIb層： 鈍い黄褐色シルト（10YR 4/3）にTo-Cu（10YR 5/3）が粒状に50%混入する。粘性中・しまり中。→十和田中振火山灰再堆積層

第IV層： 黒褐色シルト／（10YR 2/3）粘性やや強・しまりやや強。

第V層： 黄色粘土質シルト／（10YR 4/3）粘性やや強・しまりやや強。



第1図 基本土層柱状図

II. 検出された遺構と遺物

縄文時代

【1】 壁穴住居跡

1号壁穴住居跡

遺構（第2図・写真図版2・3）

＜位置＞ 調査区南側斜面上方、IE 3号グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 検出面は表土除去後のⅢ層中で、表土を除去してすぐ、黒褐色土の円形プランとして確認した。東側で10号土坑と重複し、これを切る。

＜規模・平面形＞ 長径6.76cm、短径5.34cmの南北に主軸を持つほぼ円形を呈する。

＜埋土＞ 5層からなり、To-Cuをまばらに含む黒褐色シルト主体で構成される。

＜壁・床＞ 高さは残存値で、東壁40cm、西壁48cm、南壁48cm、北壁2cmを測る。床はV層黄褐色シルト面まで掘り込まれている。全体的に黄褐色～暗褐色シルトの混合土によって貼床構築されており、中央部で厚さ10cm程を測るが、壁際では薄い傾向が認められる。床面はそれほど締まるものではない。

＜柱穴＞ P1～P5の5基を確認した。これらが主柱穴をなすものと考えられる。また、壁際に近いところで複数の小柱穴が巡るのが確認された。

＜炉＞ 北側床面に接して石圓炉を検出した。石圓炉は長径100cm×短径90cmの長方形を呈する。浅い焼土が67cm×63cm、厚さ12cmの範囲で形成されている。

遺物（第3図・写真図版9～12）

＜検出状況＞ 床面、埋土からの出土である。床面から良好な一括遺物が出土している。

＜土器＞ 36点が出土した。1は床面出土の深鉢で、胴部中程で一旦括れ口縁部にかけて外傾する器形を呈する。口唇部に2個1対の粘土瘤貼付けを持ち、口縁部には2列の原体圧痕刺突が横走する。胴部の括れ部にも刺目を持つ粘土瘤貼付けを持ち、2列の原体圧痕刺突列が巡る。29・30は、床面から出土した小形土器・注口上器で、いずれも無文で刷器部面にアスファルト状の付着物が認められる。31は床面出土の注口土器で、無文である。内部にはアスファルトが充填されている。検出時は壁際に伏せた状態で出土しており、注口部を欠いていた。アスファルトは注口部下の欠損部分から溶けた状態でこぼれ出ており、注口部を欠いてからこぼれた状態を示している。注口部断面にはアスファルトが付着しているが、注口部内面には付着が見られなかった。35～36は埋土から出土した小形の土器で赤色染色される。

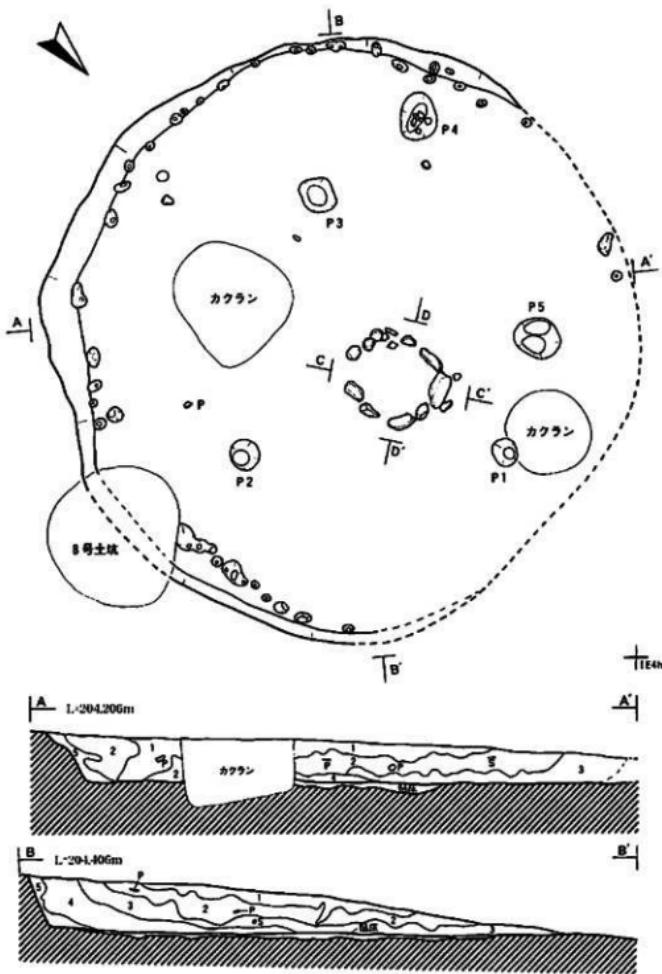
＜ミニチュア土器＞ 38・39はミニチュア土器で、南側床面の壁際から出土した。39は口縁部4単位の波状を呈し、平面形は方形となる。台部は1箇所穿孔を持つ。40～42は埋土から出土している。

＜土製品＞ 7点が出土した。43は埋土下位から出土した土偶で、右足・両腕・頭部を欠く。44は床面から出土したスプーン状の土製品である。把手の部分を欠損している。45は蝶形を呈する重飾品で、3層から出土した。46～48は埋土から出土した耳栓で、47・48は滑車形を呈する。49は形態不明の土製品である。

＜石器＞ 33点が出土した。床面から埋土にかけて出土している。内訳は石鏃1点、石砲1点、石錐1点、搔器4点、削器1点、二次加工のある剥片1点、剥片19点、石皿1点、敲石2点、磨石1点、磨礫石1点、素材砾2点である。

遺構の時期

出土した遺物から、本住居跡は縄文時代後期中葉頃のものと考えられる。



1号住居跡

1. 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR3/4 緑褐色シルトの混合土 To-Cu 1% To-ギブリック10%混入 粘性中・しまり中
2. 10YR2/2 黒褐色シルト To-Cu 3% 粘性中・しまり中
3. 10YR2/2 黒褐色シルト To-Cu 3% 黄褐色粘土と10YR3/4 粘性中・しまり中 黄褐色シルト To-Cu 4% 完成物1% 黄褐色地山プロック少量
4. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
5. 10YR2/4 黒褐色シルトと10YR3/4 緑褐色シルトの混合土 To-Cu 5% 黄褐色地山プロック少混入 粘性中・しまりやや弱
6. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
7. 10YR3/3 ない 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
8. 10YR3/6 黒褐色シルトと10YR4/6 緑褐色シルトの混合土 粘性中・しまり中
9. 10YR4/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり中
10. 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/3 緑褐色シルトの混合土 粘性中・しまり中 黄褐色シルトと10YR7/6 明黄褐色シルトプロック混入
11. 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり中
12. 10YR2/2 黑褐色シルトと10YR7/6 明黄褐色シルト混合土 粘性中・しまり中 明黄褐色と10YR3/2 黑褐色シルトの混合土 粘性中・しまり中
13. 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/2 黑褐色シルトの混合土 粘性中・しまり中
14. 10YR4/1 黑褐色シルトと10YR6/6 明黄褐色シルト混合土 粘性中・しまり中
15. 10YR4/4 汗青褐色シルト 粘性中・しまり中

第2図 1号住居跡

C L=203,900m

C'

D L=203,900m

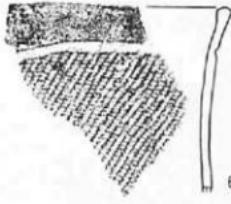
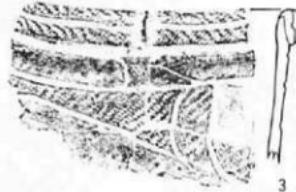
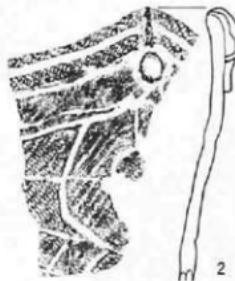
D'



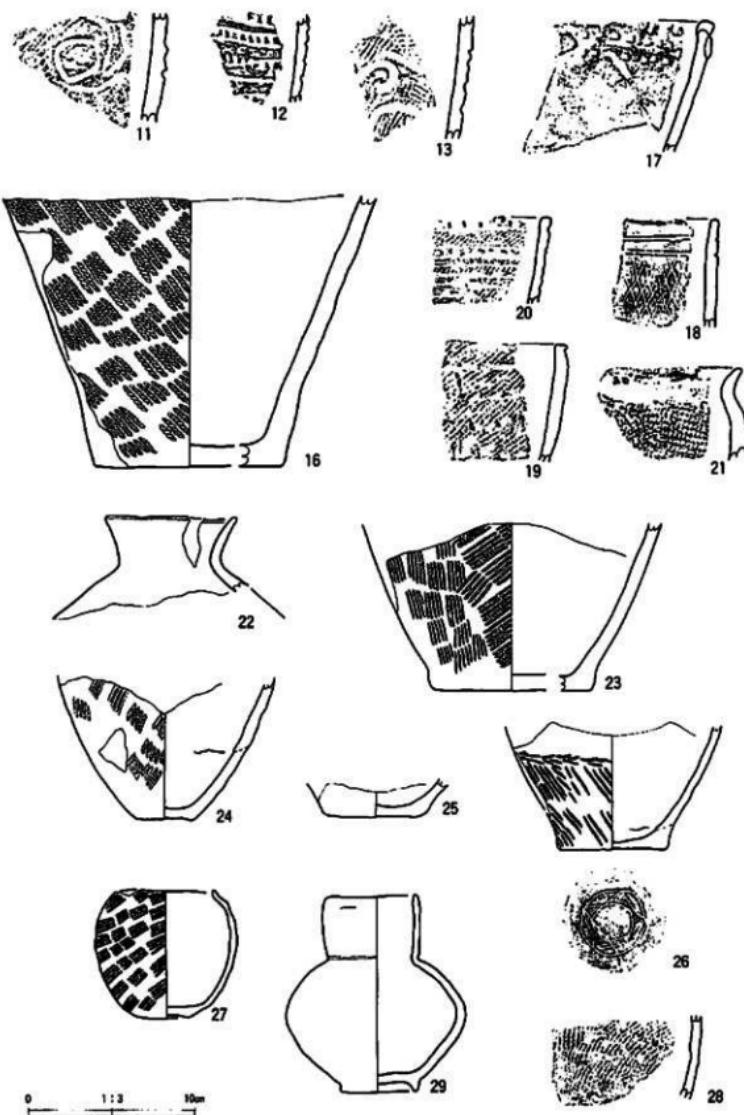
1号住居跡部

1. 10YR3/4 黄褐色シルト 10YR4/6 明黄褐色ブロック含む 粘性中・しまりやや強
2. 10YR5/6 黄褐色シルトと10YR4/3 黄い黄褐色シルトの混合土 粘性弱・しまり強
3. 10YR3/3 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや強

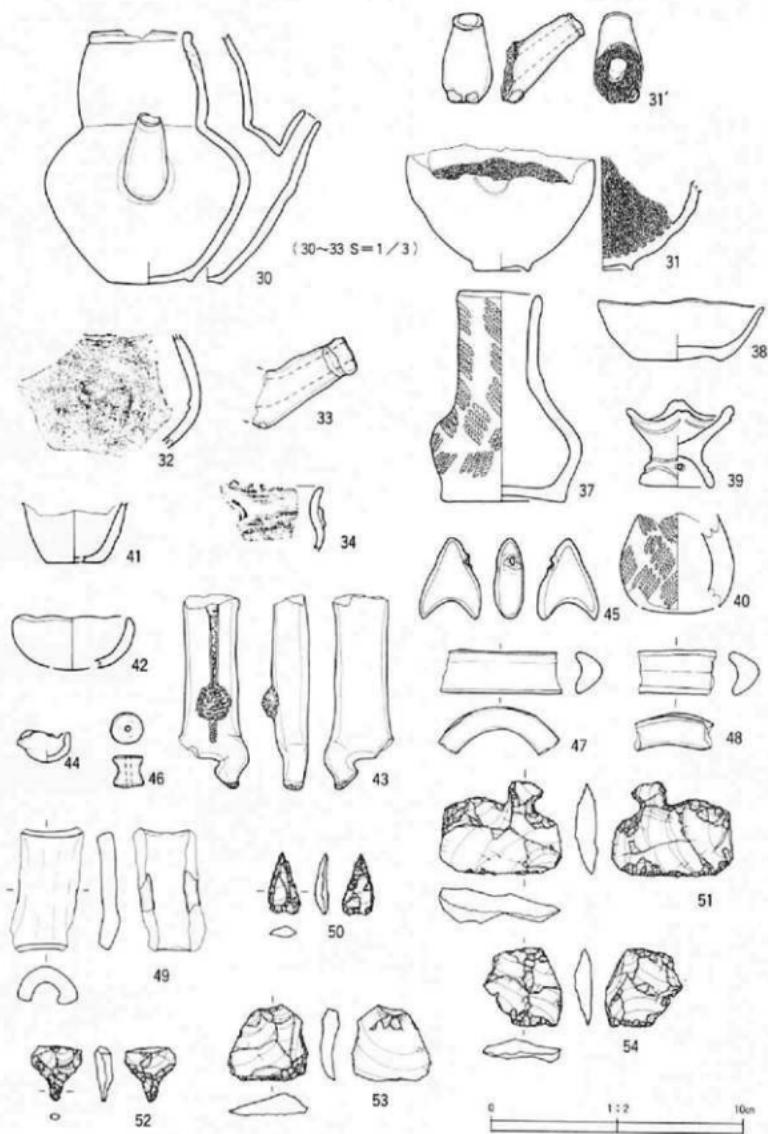
0 1:30 1m



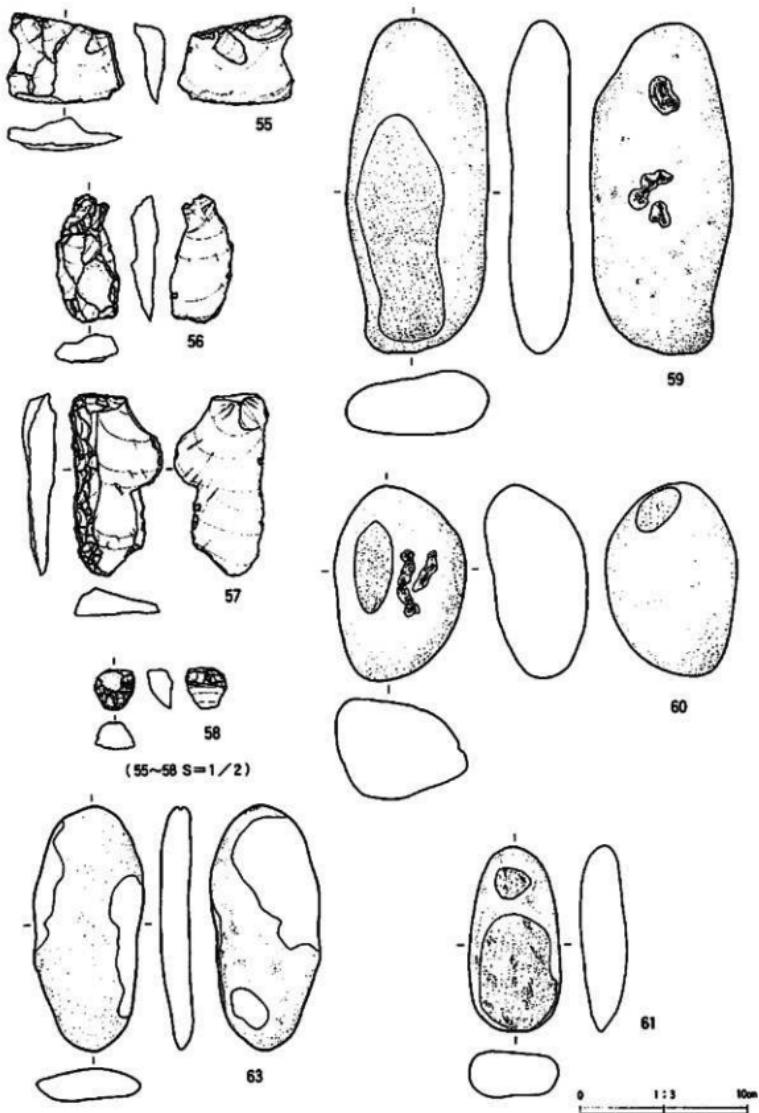
第3図 1号住居跡出土遺物(1)



第4図 1号住居跡出土遺物(2)



第5図 1号住居跡出土遺物(3)



第6図 1号住居跡出土遺物(4)

【2】住居状造構

1号住居状造構

造構（第7図・写真図版3）

＜位置＞ 調査区南側斜面上方、IE 1 h グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 検出面は表土除去後のⅢ層中で、表土を除去してすぐ、黒褐色土の円形プランとして確認した。

＜規模・平面形＞ 長径37.5cm、短径35cmの円形を呈する。

＜埋土＞ 3層からなり、To-Cuをまばらに含む黒褐色シルト主体で構成され、埋土中に暗褐色ブロックを少量含む。

＜壁・床＞ 壁高は残存値で、東壁2cm、西壁32cm、南壁24cm、北壁24cmを測る。床はV層黄褐色シルト面まで掘り込まれており、斜面上側部分がやや高くなっている。全般的に貼り床は認められず、床面はそれほど補まるものではない。

＜柱穴＞ 認められない。

＜遺物＞ 出土していない。

【3】炉跡

当初、竪穴住居跡となる可能性を想定して発音を行ったが、周辺から柱穴や床面などが確認できず、住居跡と認定するまでは至らなかった。ここでは一応炉跡として報告を行う。

1号炉跡（第8図・写真図版4）

＜位置＞ 調査区南側斜面上方、IE 2 e グリッドに位置する。

＜検出状況・重複関係＞ 表土除去直後のV層中で、炉石を確認したことから検出した。

＜規模・平面形＞ 30cmから54cm大の環を用いてコの字形に配している。環はひとまわり大きな掘り方の中に正立しない斜位の状態で据えられる。炉内で焼土は全く確認されず、使用の痕跡もはっきりとは確認できなかった。北側の環の内側にごく浅い赤色変化が認められるのみであることから、炉跡としての使用はごく短時間であったと推測される。炉石の石材としては凝灰岩が用いられている。

＜遺物＞ 埋土より土器片4点が出土した。83は壺、84-86は深鉢の底部破片である。文様は沈線による曲線文を持つものや櫛目状の沈線文を持つものなどがある。

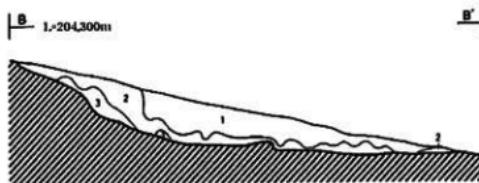
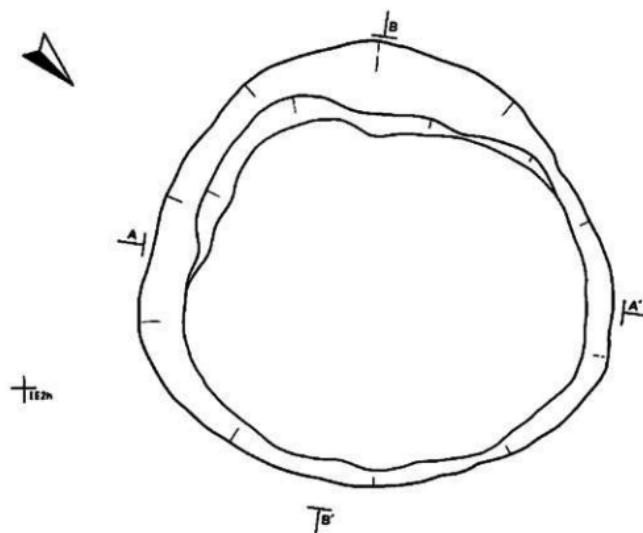
【4】土坑

1号土坑

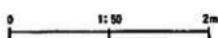
造構（第9図・写真図版4）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部、IF 3 a グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径160cm×150cm、底部径142cm×140cmの円形を呈する。断面形はフラスコ形で、深さは最深部で60cmを測る。



- 1号住居状造構
- 10YR2/2 黒褐色シルト To Cu 1% 粘性・しまり共やや弱
 - 10YR2/2 黒褐色シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの混合土 To Cu 2% 粘性・しまり共やや弱
 - 10YR2/3 黑褐色シルト10YR3/3 嫌褐色の混合土 To Cu 3% 粘性・しまり共やや弱



第7図 1号住居状造構

<埋土> 11層からなり、To-Cuを少量含む黒褐色～暗褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

<遺物> 遺物は出土していない。

2号土坑

遺構 (第9図・写真図版4)

<位置・検出状況> 調査区中央部、IF 3 a グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の梢円形プランとして確認した。

<規模・形状> 開口部径117cm×97cm、底部径85cm×74cmの梢円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で25cmを測る。

<埋土> 5層からなり、To-Cuを少量含む黒色～黒褐色シルト主体で構成される。

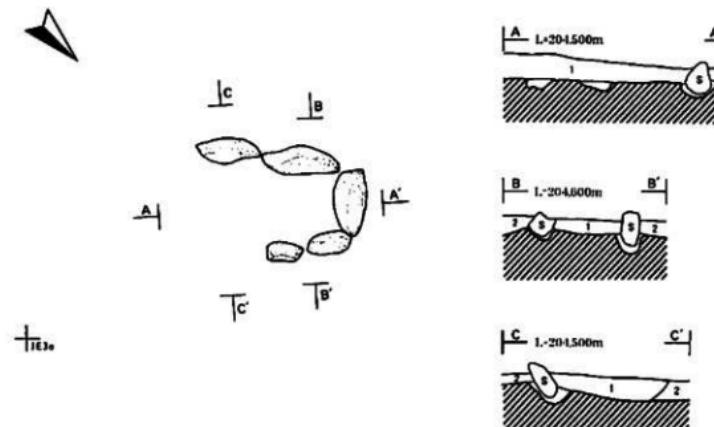
<遺物> 出土していない。

3号土坑

遺構 (第10図・写真図版4)

<位置・検出状況> 調査区中央部、IF 2 a グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色土の円形プランとして確認した。

<規模・形状> 開口部径102cm×85cm、底部径113cm×98cmの円形を呈する。断面形は袋形で、南西側がやや内傾する。深さは最深部で51cmを測る。



第8図 1号炉跡

＜埋土＞ 5層に細分され、To-Cuを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

遺物（第13図・写真図版12）

埋土から2点が出土している。87は高坏片で、2本1単位の沈線により変形工字文が描かれる体部には地文としてLR網文が施される。88は深鉢形土器の胴部片で、地文としてRL網文が施文される。両者は時期的な関連性が乏しく、遺構に伴うものとは認定できない。

4号土坑

遺構（第10図・写真図版5）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部、IE 3 f グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径171cm×150cm、底部径200cm×167cmの円形を呈する。断面形はフラスコ形で、深さは最深部で79cmを測る。また、本土坑の底面には南西と北東に小土坑が1基づつ掘り込まれており、埋土の状況からそれぞれ本土坑に付属するものと推測される。南西側小ビットの規模は、径65cm×61cm、深さ38cmで、断面形状はフラスコ状を呈する。また北東側小ビットの規模は、径64cm×49cm、深さ42cmで、断面形状はピーカー状である。

＜埋土＞ 19層に細分され、To-Cuを少量含む。上位は黒褐色シルト主体の混合土、下位は明黄褐色粘土質シルト主体の混合土で構成される。

遺物（第13図・写真図版12）

9点が出土している。ほとんどが理上から出土した。89は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部山形を呈する。頂部から縦帶が重し、縦帯部にボタン状の貼付け文を持つ。胴部には沈線による曲線文様が描かれる。90は深鉢形土器のL1縁部片で、口縁部がやや外傾する。胴部には地文としてRL網文が施される。胎土に金雲母を少量含む。91は深鉢形土器のL1縁部片で、二重口縁状を呈する。胴部には地文としてRL網文が施される。95は深鉢形土器の胴部片で、地文として(R1)網目状燃系文が施される。97は底面から出土した深鉢形土器の胴～底部片で、地文としてRL網文が縱・横と方向を逆えて羽状に施される。

5号土坑

遺構（第11図・写真図版5）

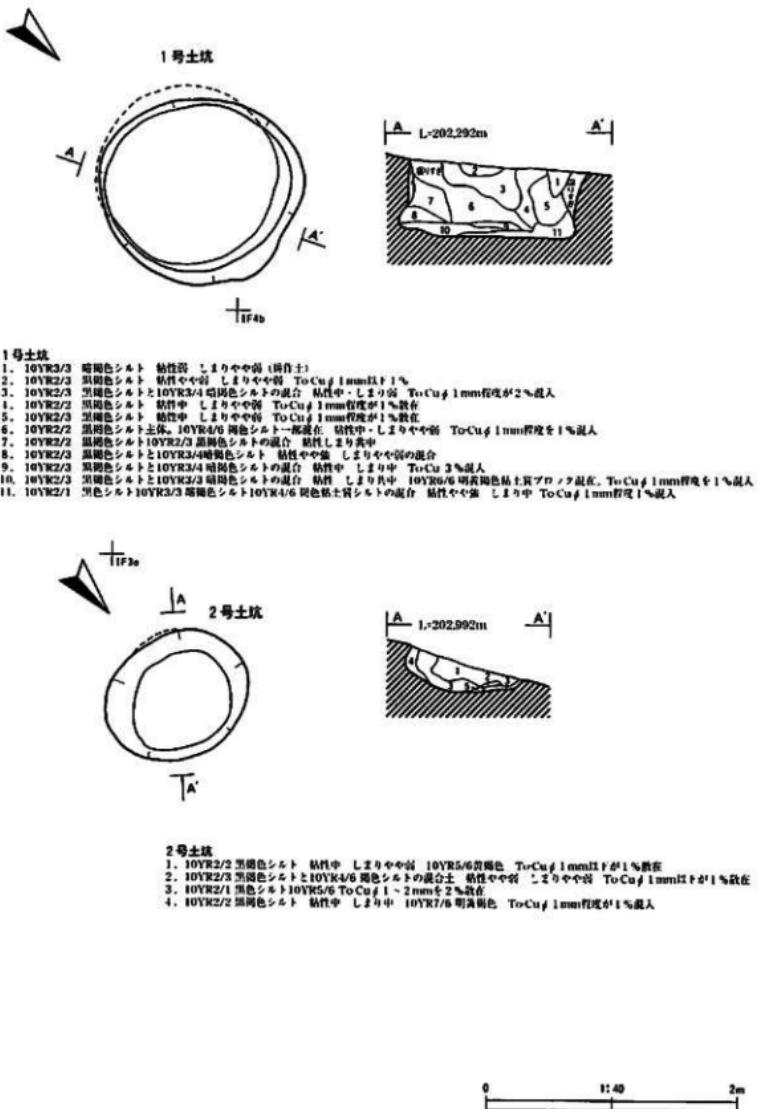
＜位置・検出状況＞ 調査区分南側、IE 1 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径125cm×122cm、底部径165cm×155cmの円形を呈する。断面形はフラスコ形で、深さは最深部で98cmを測る。

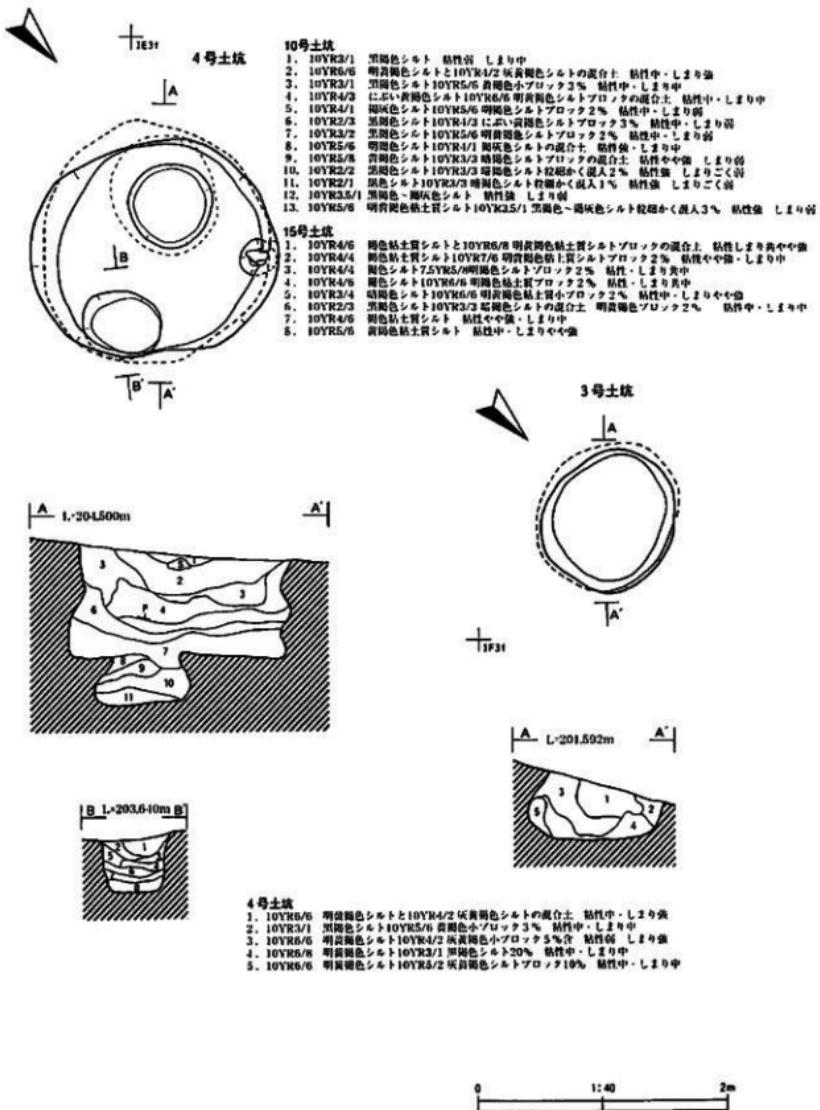
＜埋土＞ 8層に細分される。黒褐色シルト主体で構成されるが、中位に褐灰シルトの薄層を介する。下位に褐色シルト粒が細かく混入する。

遺物（第13図・写真図版12）

埋土から2点が出土した。いずれも深鉢形土器の胴部片である。99は胴部に(R1)單軸格状帶燃系文が施される。



第9図 1・2号土坑



第10図 3・4号土坑

6号土坑

遺構（第11図・写真図版5）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部やや西側、I F 1 c グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径105cm×100cm、底部径87cm×86cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で33cmを測る。

＜埋土＞ 3層に細分される。To-Cuを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。3層に暗褐色シルト粒が混入する。

＜遺物＞ 出土していない。

7号土坑

遺構（第11図・写真図版5）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部やや西側、I F 3 c グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色の梢円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径101cm×73cm、底部径78cm×43cmの梢円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で32cmを測る。

＜埋土＞ 黒色シルトの單層である。To-Cuを少量含む。

＜遺物＞ 出土していない。

8号土坑

遺構（第11図）

＜位置・検出状況＞ 調査区西側、- I G 10 b グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、炭化物小ブロックを少量含む黒褐色の円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径196cm×191cm、底部径189cm×184cmの円形を呈する。断面形はフラスコ～ビーカーの中間形を呈し、北東～南東側にかけてやや内傾する。深さは最深部で95cmを測る。

＜埋土＞ 20層からなる。埋土最上位に炭化物を少量含む黒褐色シルトがレンズ状に堆積する。上位には明黄褐色ブロックを含む褐灰シルトが堆積している。中位に黄橙砂質シルト層が14cmほどレンズ状に堆積する。

埋土下位はオリーブ褐色～浅黄色粘土質シルト主体で構成され、レンズ状の堆積状況を成さない。

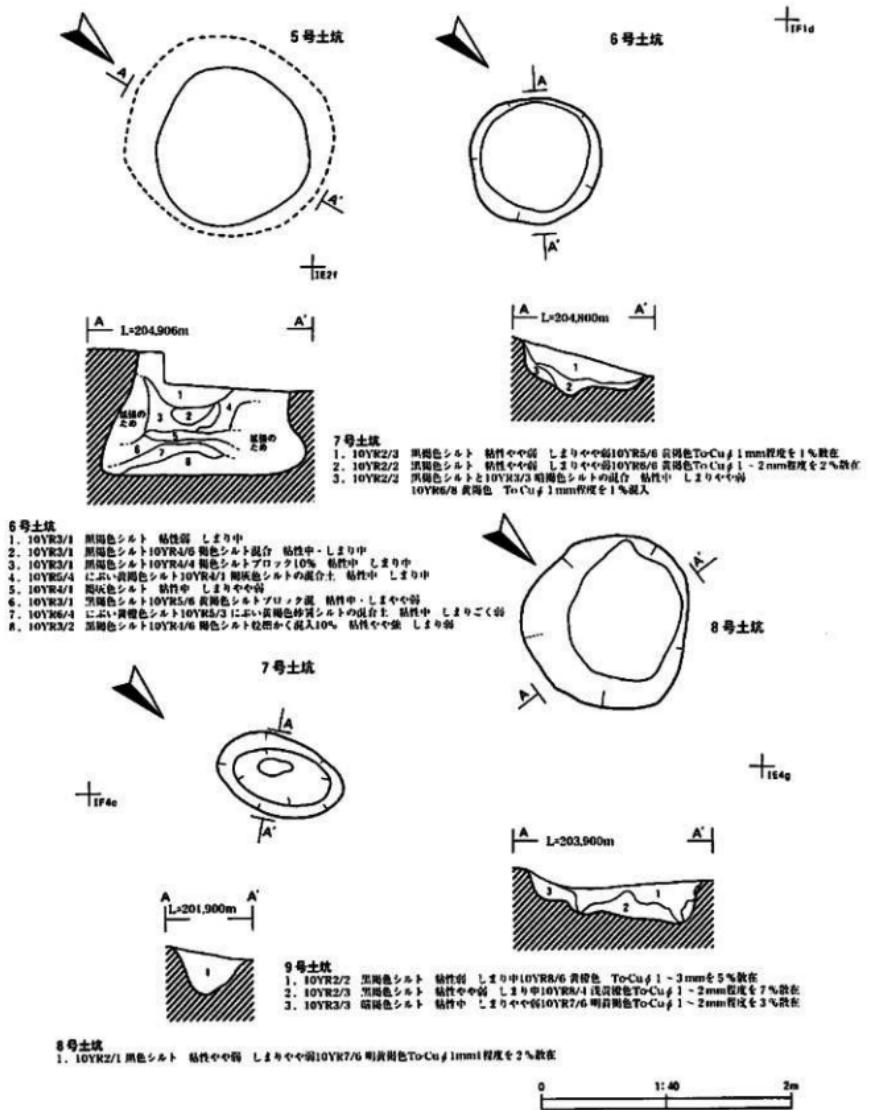
＜遺物＞ 出土していない。

9号土坑

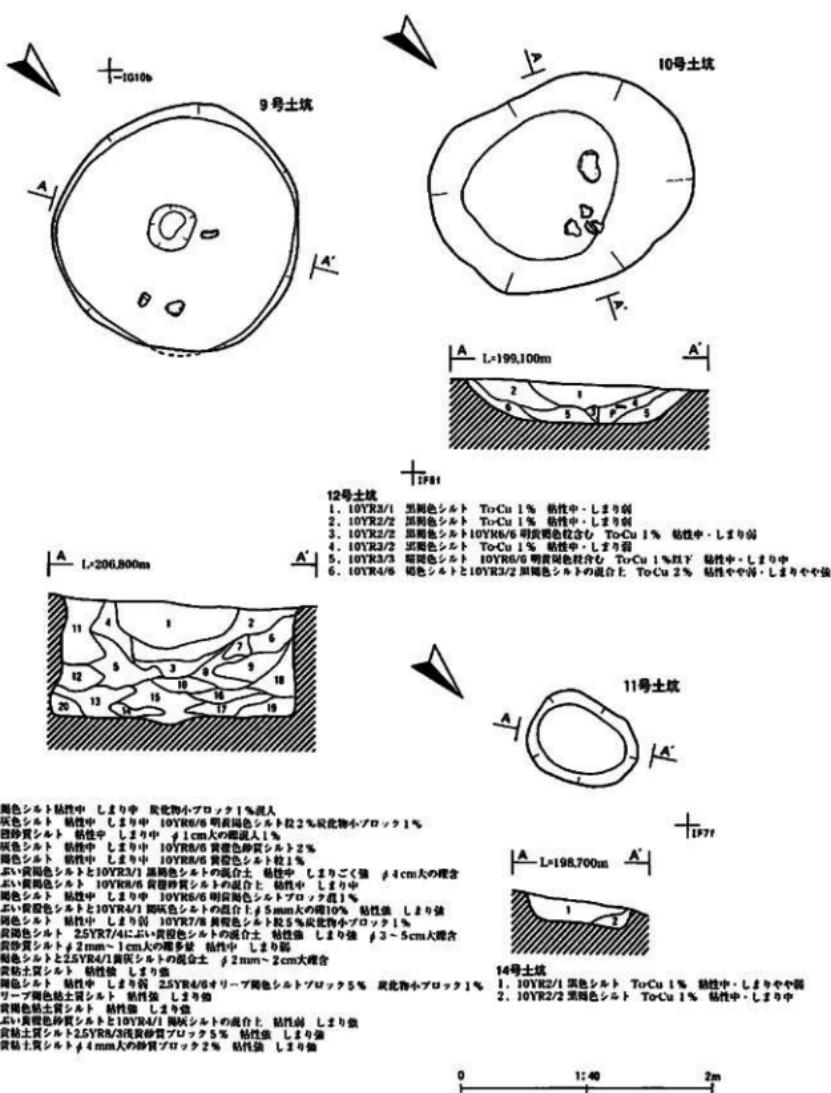
遺構（第12図・写真図版6）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側、I F 8 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の梢円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径210cm×149cm、底部径127cm×110cmの梢円形を呈する。断面形は皿形で、深さは



第11图 5~8号土坑



第12図 9~11号土坑

最深部で30cmを測る。

＜埋土＞ 6層に細分される。上位はTo-Cuを少量含む黒褐色シルト主体、下位は明黄褐色シルトブロックを少量含む暗褐色シルト主体で構成される。

＜遺物＞ 出土していない。

10号土坑

造構（第12図・写真図版6）

＜位置・検出状況＞ 調査区南側中央部、I E 3 f グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の梢円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径139cm×137cm、底部径98cm×88cmの梢円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で34cmを測る。

＜埋土＞ 2層に細分される。上位はTo-Cuを少量含む黒褐色シルト主体、下位は明黄褐色シルトブロックを少量含む暗褐色シルト主体で構成される。

＜遺物＞ 出土していない。

11号土坑

造構（第12図・写真図版6）

＜位置・検出状況＞ 調査区北側、I F 6 e グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の梢円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径88cm×67cm、底部径81cm×50cmの梢円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で17cmを測る。

＜埋土＞ 2層に細分される。上位はTo-Cuを少量含む黒褐色シルト主体、下位は明黄褐色シルトブロックを少量含む暗褐色シルト主体で構成される。

＜遺物＞ 出土していない。

【5】土器埋設造構

1号土器埋設造構（第14図・写真図版7）

＜位置＞ 調査区南側斜面上方、I E 4 j グリッドに位置する。

＜検出状況・置抜関係＞ Ⅱ層下位～Ⅲ層上位面で検出した。

＜掘り方＞ 径約67cm、深さ20cmの円形の掘り方に径約26cmの土器が正立の状態で確認されている。掘り方埋土はTo-Cuを少量含む黒褐色シルトの單層で構成される。

＜埋土＞ 4層に細分される。To-Cuを僅かに含み、粘性・締まりのやや弱い黒褐色シルト主体で構成される。

＜遺物＞ 埋設されていた深鉢形土器1点(103)のみである。

2号土器埋設遺構（第14図・写真図版7）

＜位置＞ 調査区南側斜面上方、I E 2-1グリッドに位置する。

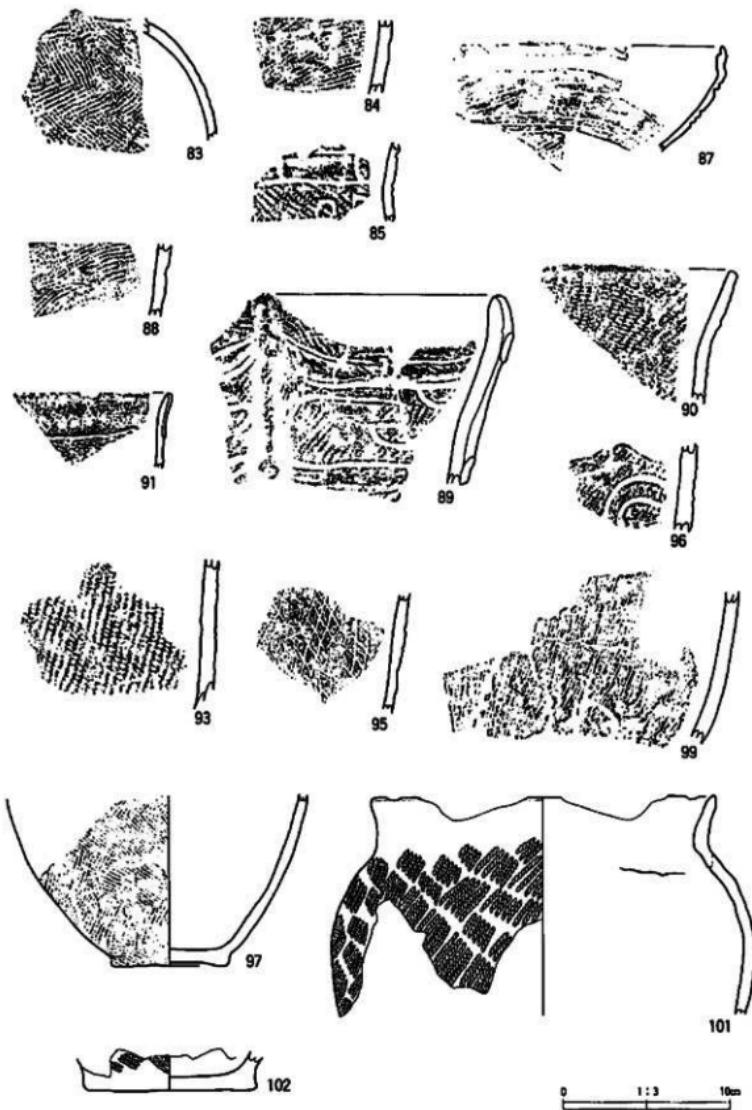
＜検出状況・重複関係＞ II層下位～Ⅲ層上位面で検出した。

＜掘り方＞ 長径45cm×36cm、深さ13cmの円形の掘り方に径約15cmの土器が正立の状態で確認されている。

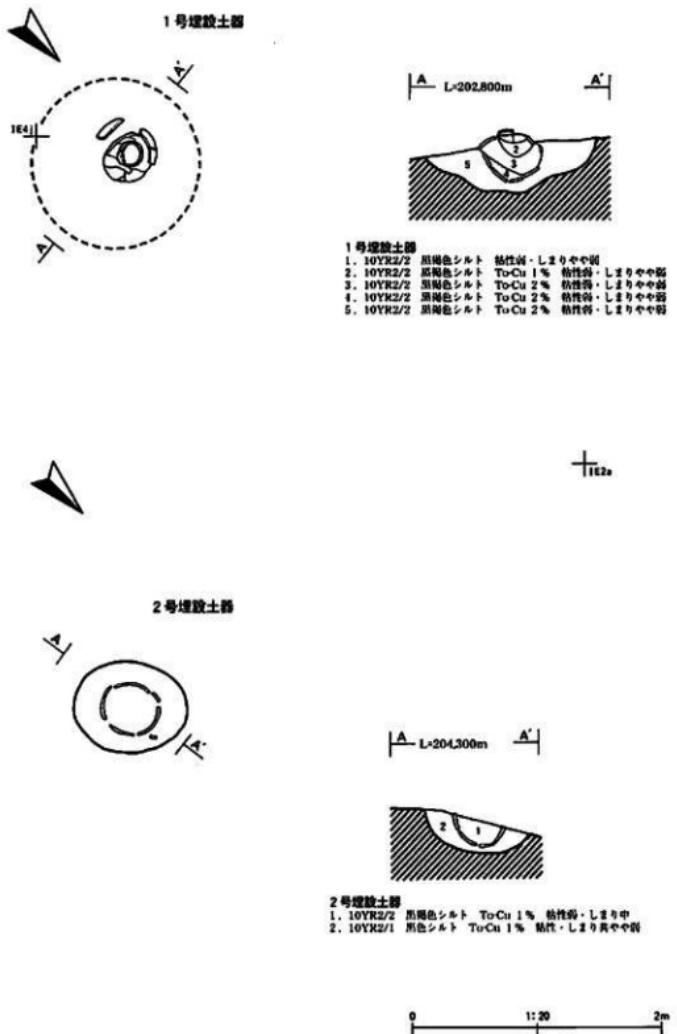
掘り方埋土はTo-Cuを僅かに含む黒褐色シルトの単層で構成される。

＜埋土＞ 4層に細分される。To-Cuを僅かに含み、粘性・締まりのやや弱い黒褐色シルト主体で構成される。

＜遺物＞ 埋設されていた深鉢形土器1点（104）のみである。



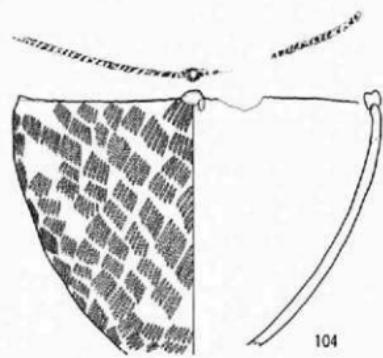
第13図 土坑内出土遺物



第14図 1・2号埋設土器



103



104

0 1:3 10cm

第15図 1・2号埋設土器出土遺物

近世以降

【1】獸骨埋納ピット

遺構（第17図・写真図版7）

＜位置・検出状況＞ 調査区東側、IE 7 J グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の指円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞ 開口部径228cm×165cm、底部径193cm×98cmの指円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で17cmを測る。

＜埋土＞ To-Cuを少量含む黒褐色シルトの単層主体で構成される。

＜遺物＞ 底面より獸骨（馬）の頭部が1体分検出された。

【2】墓坑

遺構（第17図・写真図版8）

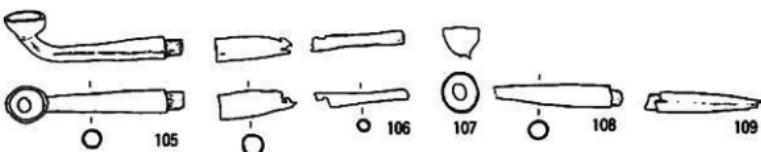
調査区北側を中心に4基の墓坑を検出した。検出された墓坑の平面形は、すべて円形で、断面邊台形状を呈している。規模は径130cm前後のものが多く、深さは残存値で75~88cmの間に納まる（1号墓坑を除く）。人骨の残存状態はやや不良であるが、膝を曲げて埋葬された状態を示すものが認められる。

遺構（第16図・写真図版14）

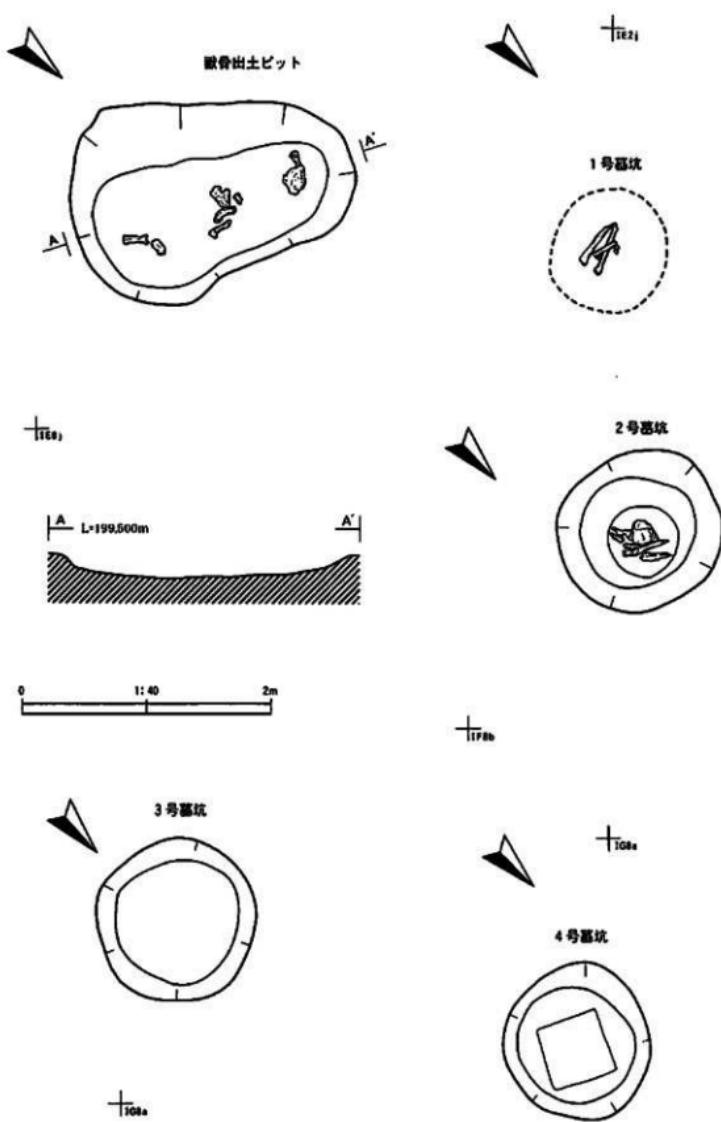
出土遺物は副葬品としてキセル、占銭（寛永通宝）が納められていたほか、鉄釘が数点出土している（105~119）。

【3】道路（写真図版8）

調査区西半部の斜面上方から、等高線に沿うように走る黒色の帯状プランを数条確認した（遺構配置図参照）。これらは北西部から調査区中央部にかけて認められ、南側にかけて徐々に薄くなる。埋土は小砾を含む黒褐色土主体で構成される。完掘後の底面は凹凸が認められ、何らかの人为的な地形改変が行われた痕跡であると考えられる。南側のⅢ層面で確認されなかったこと、形状などから近世～近代以降に形成された踏み分け道のようなものであった可能性が高いと考えられる。

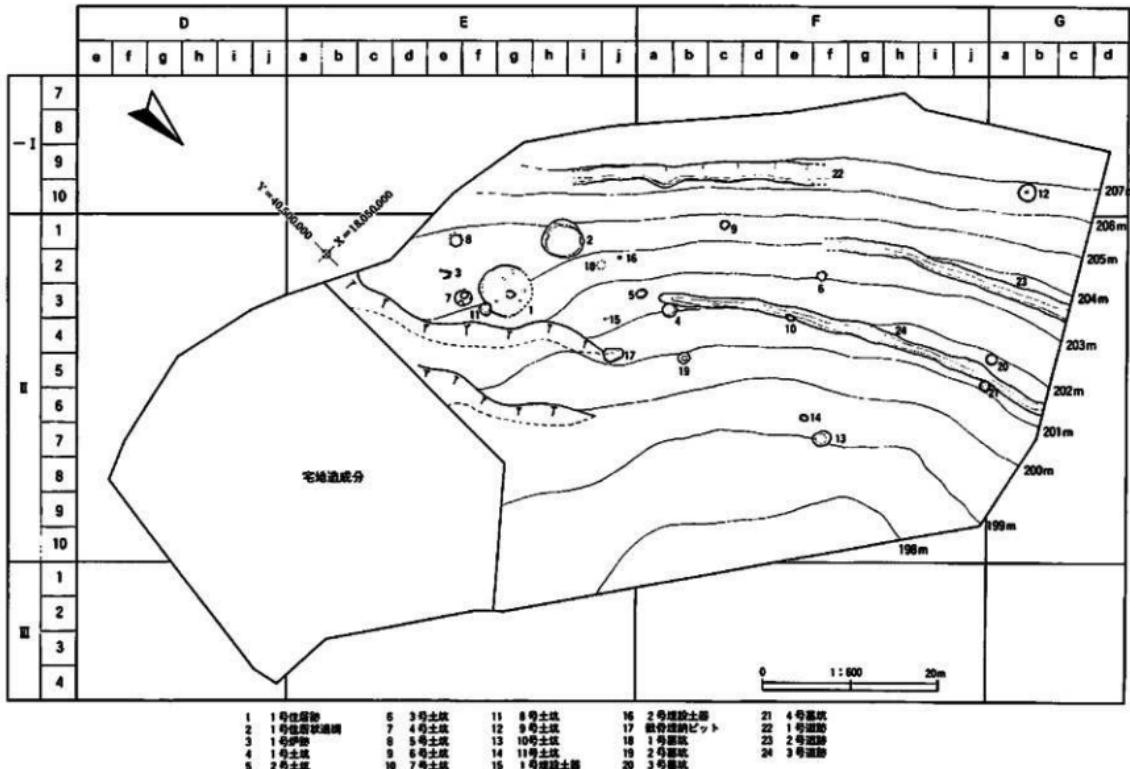


第16図 1~4号墓坑出土遺物



第17図 獣骨出土ビット・1~4号墓坑

第18図 通耕配置図



III. 遺構外の出土遺物

(1) 土器・土製品

① 縄文～弥生時代の土器

仁昌寺遺跡から出土した土器はコンテナ（42×32cm・深さ30cm）で9箱にのぼる。内遺構外からはコンテナで1箱分の遺物が出土した。内訳は土器（縄文・弥生・土師器）、石器、土製品である。本遺跡の遺構外出土遺物は殆どが調査区北側の斜面下位の水成堆積層から出土しており、資料の選定にあたってはその遺物を中心に、できるだけ各々の時期を網羅するよう抽出した。また、資料数が僅少であるため分類は行わず、時期ごとに特徴を述べるにとどめた。

(1) 縄文時代：前期に相当する土器群（第19～21図120～123）

IV層 To-Cu下の黒褐色土中より4点が出土した。いずれも深鉢形土器片で、器形が判明するものは皆無である。胎土にはいずれも相当量の植物繊維を含み、焼成はやや不良である。胎土はやや軟質で、色調はにぶい黄橙～褐灰色となる。120は口縁部片で、口唇部が小波状を呈するものと思われる。口縁部文様帶に不整縦線文を持ち、胴部には地文としてLR縄文が施される。121は口縁部片で、口縁部が小さく外反する。地文としてLRL複縫縄文が継位の羽状に施される。122は胴部片で、LR縄文が継位に施文される。123は胴部破片で、地文としてRL縄文が施される。これらは口唇部・口縁部文様の特徴から前期前業の大木2式に相当する土器群と思われる。

(2) 縄文時代：後期に相当する土器（第19図124）

Ⅲa層中より1点のみ出土した。124は深鉢形土器の口縁部片で、器面に2本1単位の細い沈線による曲線モチーフが描かれる。

(3) 縄文時代：晩期に相当する土器（第19図125）

Ⅲa層掘褐色土中より1点のみ出土した。125は浅鉢形土器で、胴部上端部が屈曲する器形を呈する。口唇部には2個1対の小突起と1個1単位の小突起が付属する。胴上端部の屈曲部に狭い文様帶を持ち、細沈線による変形工字文が施される。モチーフの接点部にごく小さい粘土瘤が付属する。胴部には地文としてLR縄文が施される。大洞A'式期に相当するものと考えられる。

(4) 縄文時代：中期末～晩期相当の粗製土器群（第19図126～141）

12点を掲載した。出土層位はⅡb層～Ⅲb層である。これらは胎土、文様等の特徴などで様相が異なっており、中期末～晩期までの数時期が混在するものである。ここでは一括して粗製土器群として扱った。いずれも深鉢形土器であるが、全体の器形のわかるものは殆どない。126～134は口縁部片で、口唇部にかけてやや内湾する器形を呈する。いずれも内外面赤色塗彩される。128、129は口縁部に細縦帯が廻り、無文帯を形成している。127は口縁～胴部片である。胴部から口縁部に向かってやや外傾しながら立ち上がる器形で、口縁部は平縁を呈する。胴部には地文としてしの回転文が施文される。114・115は口縁部片で、平縁を呈するものと思われる。地文としてしの回転文が横位に数段にわたり施される。116は口縁部片で、地文としてLの回転文が施される。134は口縁部片で、外面に継位の柳葉状沈線文が施される。外面に条痕文を持つ。135は胴部片で、地文として捺糸文しが施される。137は胴部～底部片で、平底を呈する。胴部に継位のRL縄文が施される。底部に網代痕を持つ。136は胴部～底部片で、地文としてRL縄文が

施される。138～140は底部片である。138は網代痕を持つ。141は胴部に網目状撚糸文が施される。

(5) 弥生時代：前期に相当する土器（第21図142）

I層より1点が出土した。142は変形土器で、胴部上位に最大径を持ちながらその後内済し、口縁部が短く立ち上がる器形を呈する。胴部の上半には文様帯が形成され、沈線により変形工字文が施される。モチーフの接点には2個1対の粘土瘤が施される。地文としてLR網文が施される。

文様の特徴などから弥生時代前期、砂沢式期相当に位置付けられるものである。

(6) 弥生時代：中期に相当する土器群（第21図143～148）

I層カクラン中より6点が出土した。143は高坏で、体部文様帯に3本1組の細い沈線により変形工字文が描かれる。口唇部内面に沈線が1条ある。胴部にはLR網文が施される。内外面とも丁寧なミガキ調整・赤色塗彩が施される。体部上半に径2.5cm大の穿孔を持つ。144は高坏の体部破片で、3本1組の沈線による変形工字文を持つものと思われる。内外面ともに丁寧なミガキ調整を持つ。145は鉢形土器の口縁部～体部で、口縁部で細くて浅い沈線により体部に菱形状のモチーフが描かれる。内外面とも丁寧なミガキ調整が施される。外面赤色塗彩される。146・147は変形土器の口縁部片である。頸部がやや強く屈曲し、口縁部は外反する。148は要の口縁部～体部で、(Lr) 摺紋が、方向を追えて何段にも施される。これらは器形、文様の特徴等から弥生時代中期の山王Ⅲ層式～天王山式（古相）に相当する土器群であると考えられる。

(7) 土製品（第22図149）

I F 10 a グリッドⅢ層中より頭部を欠損した土偶を検出した（149）。最大長は残存値で6.8cm、最大幅4.8cm、厚さ1.9cmを測る。文様等の特徴から網文時代後期初頭に相当するものと思われる。

(8) 土師器（第22図150）

II b 層十和田a 降下火山灰の再堆積層より1点が出土した。150は土師器の壺で、製作に際してロクロは使用されていない。口縁部が体部外面は弱いケズリ調整、内面はナデ調整され、口縁部ヨコナデ調整される。製作技法、器形の特徴などから奈良時代8世紀代に相当するものと思われる。

（中村 直美）

(2) 石器

① 石器相成と石材

本遺跡の出土土器は前期から晩期まで及ぶが、その主体をなすのは十腰内口式を中心とする後期初頭一中期の土器群である。従って、石器の所属時期もその年代に比定される。

石器相成と石材の数量・重量を第1表に示した。剝片石器及び剝片・石核などが125点、打製石斧や敲磨器類などの裸素材の石器が15点で、总数は140点である。このうち製品として使用されたのは28点で、時期不明の遺物1点を含む。

石器の種類は、石鎌、石匙、石錐、スクレイバー類、リタッヂド・フレイク、打製石斧、敲石、凹石、磨石、敲磨石、石皿などである。剝片石器の合計15点(100%)の石材は頁岩が10点と最も多く66.7%を占め、次いで珪質頁岩が5点(33.3%)である。また、打製石斧は1点で石材はホルンフェルスである。磨石器の合計11点(100%)の石材は安山岩が7点(63.6%)、砂岩が2点(18.2%)、頁岩・ひん岩が各1点(各9.1%)である。

② 剥片石器

石鎌 (50, 151)

石鎌または石鎌未成品は計2点で、151が未成品である。形状は茎部を作出しているものではなく、いずれも無茎鎌に属する。その種類は基部が直線的なもの(平基鎌)のみである。いずれもアスファルトの付着は見られない。50は1分性居跡床面より出土しており、共伴する土器から後期中葉に比定される。また、151も出土地点が近いことから同時期と考えられる。

石匙 (51, 152)

石匙は計2点出土しており、51は横型であり、152は縦型である。石材は51が珪質頁岩、152が頁岩であり、いずれも縦型剝片を素材としている。51は茎部側縁につまみ部を作出しており、刃部は末端部に形成され、腹面から極浅形片面調整が施されている。152は素材剝片の末端部側につまみ部を作出しているが、抉り部の整形は積極的ではない。刃部は右側縁に極浅形片面調整によって形成されている。いずれにもアスファルトの付着は見られない。

石錐 (52)

石錐は1点のみ出土しており、石材は頁岩である。縦型剝片を素材としており、身厚な打面側を頭部としている。直接打撃で整形を行った後、押圧により深形両面調整を施して錐部を作出している。

スクレイバー類 (53, 54, 55, 56, 57, 153, 154, 155, 156)

当初、搔器・削器の分類を行ったが、相似点が多いため一括することとした。ただし刃部の作出位置のよつて分類を行う。

I-A類：左右側縁(片側または両側)に細部調整がある(片面)

I-B類：左右側縁(片側または両側)に細部調整がある(両面)

II-A類：端部(基・末)に細部調整がある(片面)

II-B類：端部(基・末)に細部調整がある(両面)

III-A類：側縁・端部(基・末)に細部調整がある(片面)

III-B類：側縁・端部(基・末)に細部調整がある(両面)

I-A類 → (57, 154, 155)

57は絶長剝片を素材としており、長さ7.2cmと本遺跡では比較的大きい。右側縁には自然面を残しており、

刃部は左側縁に直接打撃による浅形片面調整を施して形成されている。154は継長刺片を素材としていると考えられるが、かなり欠損している。刃部は左側縁に規則的な押圧による浅形片面調整により形成されている。155は継長刺片を素材としており、左側縁下半部2/3に押圧による極浅形片面調整を施し、刃部を形成している。石材はいずれも頁岩製である。

I-B類 → 該当なし。

II-A類 → (54, 55)

54は小形の刺片を素材とし、原石段階でバイボーラ・テクニックにより削離されている。刃部は末端部に形成されており、押圧で極浅形片面調整が施されている。55は横型の刺片を素材としており、右側縁に自然面を残している。刃部は末端部に作出されており、押圧により浅い鋸歯状を呈する。石材は54が珪質頁岩で、55が頁岩である。

I-B類 → 該当なし。

III-A類 → (53, 56, 153, 156)

53は継長刺片を素材としており、右側縁から末端部にかけて刃部を形成している。押圧による極浅形片面調整を施している。56は継長刺片を素材としており、左側縁から末端部にかけて極浅形片面調整により刃部を作出している。153は継長刺片を素材とし、全周に規則的な押圧による極浅形片面調整を施して刃部を形成している。156は継長刺片を素材としており、右側縁には自然面を残している。刃部は左側縁及び基端部に形成されており、直接打撃で整形した後、押圧で規則的に極浅形片面調整が施されている。末端部は一部欠損している。石材は、56が珪質頁岩であり、それ以外は頁岩製である。

III-B類 → 該当なし。

リタッヂド・フレイク (58)

微細な調整削離が連続的に観察される刺片をリタッヂド・フレイクとして分類する。1号住居跡埋土から1点のみ出土している。58は親指の先程の大きさで、全周に連続的な深形調整削離が見られる。石材は珪質頁岩製である。

③ 磨石器（石皿・敲磨器類）

〔1〕石皿 (59, 158)

2点出土している。石材は59が砂岩で、158は安山岩である。59は扁平環を使用しており、表面に大きく擦痕があり、裏面には中央に敲打痕が見られる。158は25.7×15.7cmの扁平環を使用しており、表面に4ヶ所の敲打痕と大きく擦痕を残している。

〔2〕敲磨器類

敲石・磨石・凹石という呼称があるが、同一個体でこれらの機能を複合した使用痕を併存するものが多く、分類するのが困難なため、敲磨器類と一括した。その上で、以下のような類型化を行う。

I-A類	： 凹石の要素をもつもの	→表または裏に1~3ヶ所の凹痕がある
I-B類	： 凹石と磨石の要素をもつもの	→表または裏に凹痕と擦痕を併存する
II-A類	： 敲石（長形）の要素をもつもの	→長形の環に敲打痕がある
II-B類	： 敲石（丸形）の要素をもつもの	→丸形の環に敲打痕がある
III-A類	： 磨石（炭・表）の要素をもつもの	→表または裏に擦痕がある
III-B類	： 底石（側面）の要素をもつもの	→側面に擦痕がある
III-C類	： 底石+敲石の要素をもつもの	→擦痕と敲打痕を併存する

I-A類 (凹石) → (161, 162, 163)

いわゆる凹石の要素をもつもので、凹痕を表・裏1カ所もつものは162で、表に1カ所もつものは163、表に2カ所もつものは161である。石材は161が砂岩、162が安山岩、163が頁岩である。

I-B類 (凹石十磨石) → (160, 164)

凹石と磨石の要素を併せ持つものである。観察からいずれも磨石として使用されてから、後に凹石に転用されたのではないかと考えられる。160は表・裏に凹痕を2カ所ずつ、また側面に凹痕を1カ所もち、表面及び裏面の一部に擦痕を有する。164は表面に1カ所、裏面に2カ所の凹痕をもち、また裏面に擦痕を有している。石材はいずれも安山岩製である。

II-A類 (鑿石・長形) → 該当なし。

II-B類 (鑿石・丸形) → 該当なし。

III-A類 (磨石・表裏面) → (61)

表面を広く用いた擦痕をもつものである。61は磨製石斧の未成品とも考えられるが、ここに分類する。表面に擦痕が見られる。石材はひん岩製である。

III-B類 (磨石・側面) → 該当なし。

III-C類 (磨石十敲石) → (60, 165, 166)

磨石と敲石の要素を併せ持つものである。被加工物に対しての作業という点から、擦ると敲くという行為は同時に行われたと考えられる。作業面を異にしているものもあるが、石器の転用というよりは、そちらの方が妥当であろう。60は表面に敲打痕及び擦痕があり、また裏面に一部擦痕が見られる。165は表・裏面に擦痕が見られ、また裏面中央及び端部にも敲打痕を有する。166は表面及び端部に擦痕があり、また敲打痕も見られる。石材はいずれも安山岩製である。

④ その他の遺物 (砸石)

砸石 (167)

I Ele グリッドから1点のみ出土した。石材は凝灰岩製で欠損しているが、各面に擦痕が数多く残されている。所属時期は不明である。

第1表 石器石材分類表

	頁岩	珪質頁岩	赤色頁岩	石英	鉄石英	チャート	葉状岩	ひん岩	安山岩	砂岩	頁岩	合計
石瓢		(3.63) ²										(3.63) ²
石鑿	(34.67) ²											(34.67) ²
石鏟	(2.30) ¹											(2.30) ¹
スケレイバー類	(72.71) ⁷	(16.03) ²										(88.74) ⁹
リッパード・フレイク	(2.72) ¹											(2.72) ¹
剥片	15 (81.64)	38 (487.56)	21.59 ²	(1.38) ¹	(13.16) ²	(598.60) ⁵¹					(29.19) ¹	(1243.32)
材質石斧											(276.48) ¹	(276.48) ¹
石盤											(3181.32) ¹	(1024.83) ¹
敲打器類	(183.84) ¹										(4206.15) ²	
その他の(鉄石以外)											(367.61) ¹	(3431.50) ⁶
合計	26 375.36	43 (609.94)	21.59 ²	(1.38) ¹	(13.16) ²	(598.60) ⁵¹	(177.99) ¹	(267.61) ¹	(6612.82) ⁷	(520.14) ²	(3094.16) ⁴	(11200.75) ¹⁰

* 個数・カッコ内は重量(g)

⑤ 墓坑出土品・その他（第16図、写真図版14）

本遺跡で検出している4基の墓坑から出土しているのは、煙管5点及び銭貨10枚である。その他に造幣外から鉄札1枚、銭貨2枚が出土している。

煙管は雁首が1点と火皿が1点、首部が1点、吸口が2点出土しており、それぞれが一対であったと考えられる。吸口の肩部分には欠損した羅字（ラウ）が残存しているものが多い。材質は銅製である。煙管の分類については古泉弘氏により詳細に区分されており、編年についてはこれに従う。（古泉 1985）

I類：火皿下の脂返しが一旦下方へ大きく湾曲し、羅字に接続する部分が別材で一段太く巻かれた「肩付」となる。火皿と首部の接合部には補強帯が巻きつけられる。16世紀末～17世紀初頭。

II類：脂返しが大きく湾曲する「河骨形」という形態をとる。17世紀前半。

III類：河骨形。補強帯が巡るが、首部は火皿の下から羅字接合部まで1枚の銅版を巻いて製作される。17世紀後半。

IV類：河骨形。補強帯は消失する。18世紀前半。

V類：脂返しの湾曲が小さくなる。18世紀後半。

VI類：火皿は極端に小型化し、逆台形を呈する。脂返しの湾曲はほとんど消失し、火皿の下に首部が直角に接続する。19世紀以降。

1・2及び3・4・5は同一の墓坑から出土しており、元米一固体であったと考えられる。1・2はⅣ類～VI類（17世紀後半～18世紀前半）に区分され、また3・4・5も同時期のⅣ類～VI類（17世紀後半～18世紀前半）に比定される。この下限年代は銭貨と重複しているため妥当であろう。これらは埋葬時に副葬品として棺桶に入れられたものである。

銭貨は合計12枚出土しており、このうち10枚が墓坑から出土している。銭貨の内訳は北宋の嘉祐通寶（初鋳年1056年）1枚、南唐の開元通寶（初鋳年960年）1枚（これらは国内で鋳造された模鋳銭（私鋳銭）の可能性もあるが、区分が困難であるため渡米銭として扱う）、寛永一萬治年間（1636～1659年）に鋳造された古寛永3枚、享保年間（1716～1735年）に鋳造された新寛永2枚、元文年間（1736～1740年）に鋳造された新寛永3枚、文政年間（1818～1829年）に江戸十萬坪所で鋳造された四文銭1枚である。また、新寛永と考えられる判読が困難な寛永通寶が1枚出土している。

鉄札は長さ6.4cm・幅3.0cm・厚さ2mmのものが1枚出土しており、二行十三孔（並札）の鍼孔が施されている。また、下端と左端は折り曲げられ、巻き込むように捻り返しが見られる。札頭は片山形、札足は方形を呈する。

墓坑の形成時期であるが、9枚の銭貨を出土している4号墓坑で最も多いのは元文年間に鋳造された無背銭であり、それに古寛永・嘉祐通寶を伴う。これは墓坑に埋葬された時期が元文年間かそれ以前のあまり時期差をもたない18世紀前中期であることを示している。また、他の墓坑も煙管などの同伴するものからは同時期と考えられる。

（北田 熊）

第2表 遺物觀察表(土器・ミニチュア形土器)

No.	出土地点	種類	標記名	飛符部位	地 土	文 様 特 徴	原 作	内 面 圖 形	時 期	備 考	
85	1号墳	陶土	御符	羽		地文は L R 飛文。比翼による曲抜文。	L R	ナゲ	後期		
86	1号墳	陶土	御符	羽		御符状地文を持つ。	-	ナゲ	後期		
87	4号墳	陶土	高环	口		2本1単位の比翼により空形工字文が描かれる。御符 L R 飛文。	L R	ミガキ	後生中期	小田野Ⅱ期	
88	4号墳	陶土	御符	羽	御符合ひ	L R 飛文。	L R	ミガキ	後期?		
89	5号墳	陶土	御符	口一羽		口横筋有り。御符から飛符が垂下。ボタン状の詰り付け文+比翼による曲抜文。	R L	ナゲ	後期		
90	5号墳	陶土	御符	口	合	御符	R L 飛文。	R L	ナゲ	中期	
91	5号墳	陶土	御符	口	御符合ひ	二重口状を呈する。御符に R L 飛文が施される。	R L	ミガキ	後期		
92	5号墳	陶土	御符?	口		口横筋有り文。	-	ナゲ	後期?		
93	5号墳	陶土	御符	羽	御符合ひ	地文のみ。	L R	ナゲ	中期		
94	5号墳	陶土	御符	羽		食し鉢文。	R L	ミガキ	中後期		
95	5号墳	陶土	御符	羽		(R I) 空形工字文。	(R I)	ミガキ	後期?		
96	5号墳	陶土	御符	羽		比翼による曲抜きチーフ。	R L	ミガキ	後期		
97	5号墳	底面	御符	羽一組		二重筋の仄巻を組みに施文し、羽羽の文様を構成する。	L R / 食し	ナゲ	後期?		
98	5号墳	陶土	御符	羽	御符合ひ	(R I) 空形工字文。	(R I) 食文	ナゲ	後期		
100	6号墳	陶土	御符	羽	御符少版	L R 飛文。	L R	ナゲ	中期?		
101	12号墳	陶土	御符	口一羽	御符合ひ	口筋上に重って張り出し。口筋部が直立丸味に立ち上がる。	L R	ナゲ	後期?		
102	12号墳	陶土	御符	底底	御符合ひ	L R 飛文。	L R	ナゲ	-		
103	1号墳	土器	御符	口は定形		底部が盛り出し、底部が盛りまつてその先立ち上がる跡形。飛符は斜文形となる。し京模因記。	L R	ミガキに近いナゲ	後期		
104	2号墳	陶土	御符	口一羽		L R 飛文記。口筋部に御符工具による削りと木製2?の貼り付け文。	L R	ミガキ	後期		
105	I FPC	口		御符多版		口横筋に (R I) の捺み文。別形には L R 飛文が斜方に施される。	L R	ナゲに近いミガキ	周文初期		
106	I FPCb	口		御符少版		L R 飛符斜行が方向を逆えて施される。	L R	ナゲ	周文初期		
107	I FPC	口		御符		御符多版	L R	ナゲ	周文初期		
108	I FPCd	口		御符		御符多版	R L	ナゲ	周文初期		
109	I E4	底等上位	御符	口		L R 飛文+比翼による斜書き状の文様。	L	ナゲ	後期		
110	I PBC	口		御符		口唇感文。口輪筋文様に空形工字文。	L R	ナゲ	後期		
111	I PBC	口		御符		口横筋文で、底筋に2本の比翼が並ぶ。L R 飛文。内外面同化物。	L R?	ミガキ	-		
112	I F4	口		御符		L I 飛文。	L	ミガキ	-		
113	I F4	口		御符		L I 飛文。	(L I) 食文	ナゲ	-		
114	I F4	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-	内井田色生群	
115	I F4b	口		御符		L I 飛文。	R L	ナゲ	-	内井田色生群	
116	I EH	底板	御符	口一羽		御符少版	L	ミガキ	-		
117	I EH	底板	御符	口一羽		L I 飛文。	(L I) 食文	ナゲ	-		
118	I EH	底板	御符	口一羽		御符少版	R L	ナゲ	-		
119	I EH	底板	御符	口一羽		L I 飛文。	L	ナゲ	-		
120	I EH	底板	御符	口一羽		御符少版	R L	ナゲ	-		
121	I EH	底板	御符	口一羽		L I 飛文。	(L I) 食文	ナゲ	-		
122	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
123	I F2e	口		御符		L I 飛文。	L	ミガキ	-		
124	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
125	I F2e	口		御符		L I 飛文。	(L I) 食文	ナゲ	-		
126	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
127	I F2e	口		御符		L I 飛文。	R L	ナゲ	-		
128	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-	底板研代群	
129	I F2e	口		御符		御符少版	-	ナゲ	-		
130	I F2e	口		御符		御符少版	L R	ミガキ	-		
131	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
132	I F2e	口		御符		L I 飛文。	L	ナゲ	-		
133	I F2e	口		御符		L R 飛文。	L R	ミガキ	-		
134	I F2e	口		御符		御符少版	-	ナゲに近いミガキ	-		
135	I F2e	口		御符		御符少版	(R I) 食文	ナゲ	-		
136	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
137	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
138	I F2e	口		御符		御符少版	R L	ナゲ	-		
139	I F2e	口		御符		御符少版	-	ナゲ	-		
140	I F2e	口		御符		御符少版	L R	ミガキ	-		
141	I F2e	口		御符		L R 飛文。	L R	ミガキ	-		
142	Y32-33	口		御符	御符少版	(R I) 空形工字文。	(R I)	ナゲ	-		
143	Y33上	口		御符	口一羽	二重口の筋+上口。口横筋文様に空形工字文。	L R	ナゲ	共生初期		
144	Y33上	口		御符	御符	外周斜形工字文。逆色書き。内周斜形工字文。ミガキ非常に丁寧。口横筋附近に径約3cmの穿孔。	L R	ミガキ	共生中期	小田野Ⅱ期	
145	Y33上	口		御符	御符	3本1単位の比翼。内周斜形工字文。	ミガキ	共生中期	小田野Ⅱ期		

No.	出土地点	場所	器種名	残存部位	出土	文様特征	原体	内面開性	時期	出
145	T9	I期	陶形土器	LJ	带状少部	3本1單位の細く深い凹溝によって文様帶を仕切る。内部に横に螺旋運転する菱形文を配する。外周部は斜めに外反する菱形、しるし文。内面炭化物付着。	LK	ミガキ	弥生中期	小田野Ⅱ期
146	I F10a	残灰	器	LJ	带状少部	断面で斜めに螺旋運転して外反する菱形、しるし文。内面炭化物付着。	LJ	ナデ	弥生中期	小田野Ⅱ期
147	I F10a	残灰	器	LJ	带状少部	断面で斜めに螺旋運転して外反する菱形、しるし文。内面炭化物付着。	LJ	ナデ	弥生中期	小田野Ⅱ期
148	I F10a	残灰	器	LJ-01	带状含心	(LJ) 残赤文	(LJ) 残赤	ナデ	弥生中期	小田野Ⅱ期
150	I F10a	E9	土器記號	LJ-01	带状含心	体: ナズリ→(LJ: ロコナデ)	-	ナデ	-	古代

第3表 遺物観察表（土製品）

No.	出土地点	場所	後編	最大高(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	その他残存部位
43	I住跡	埋土	土偶	-	-	7.7	2.5	1.8
44	I住跡	床面	スプーン形土製品	-	-	2.2	1.2	0.25
45	I住跡	3号	壺	-	-	3.1	2.4	1.2
46	I住跡	2号	耳せん	-	-	1.3	1.2	0.5
47	I住跡	床面	滑半形耳飾り	-4.6	-	1.65	0.8	7.18 48と同一個体？
48	I住跡	床面	滑半形耳飾り	-3.2	-	1.7	0.8	47と同一個体？
49	I住跡	3号	形態不明	-	-	4.75	2.4	0.7
149	I F10a	壁刷	土偶	-	-	6.8	4.8	1.9

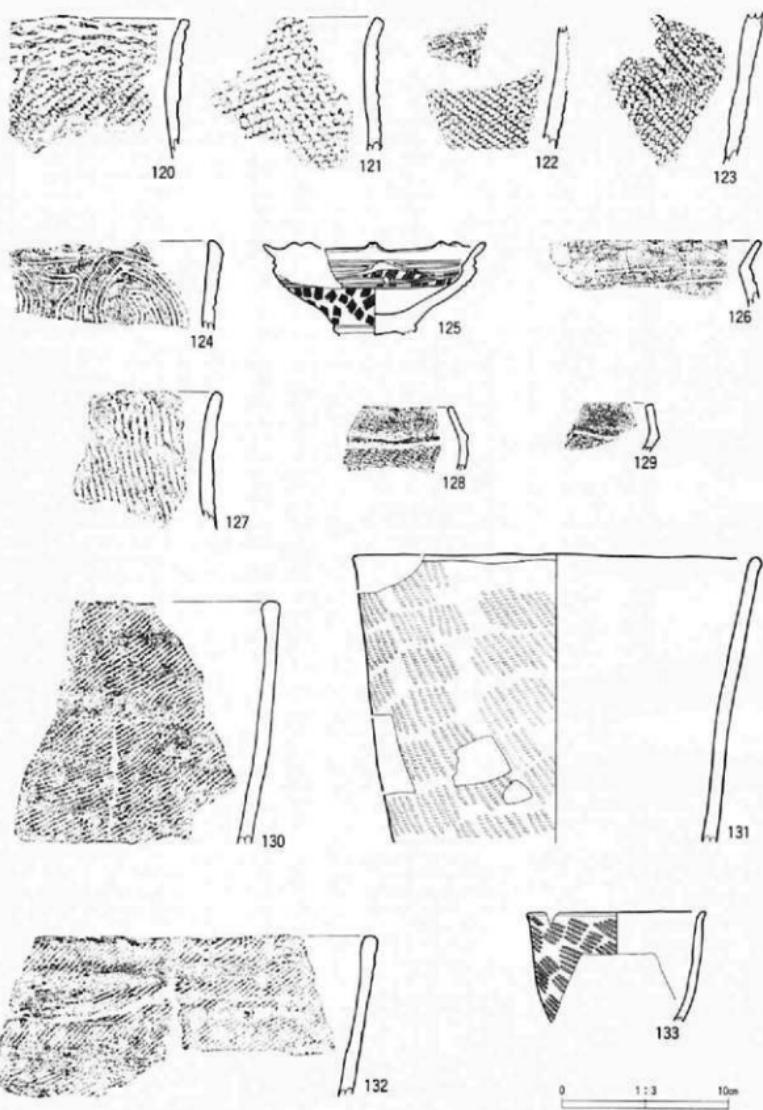
* 検定は()、残存は-で表す

第4表 遺物観察表（墓坑）

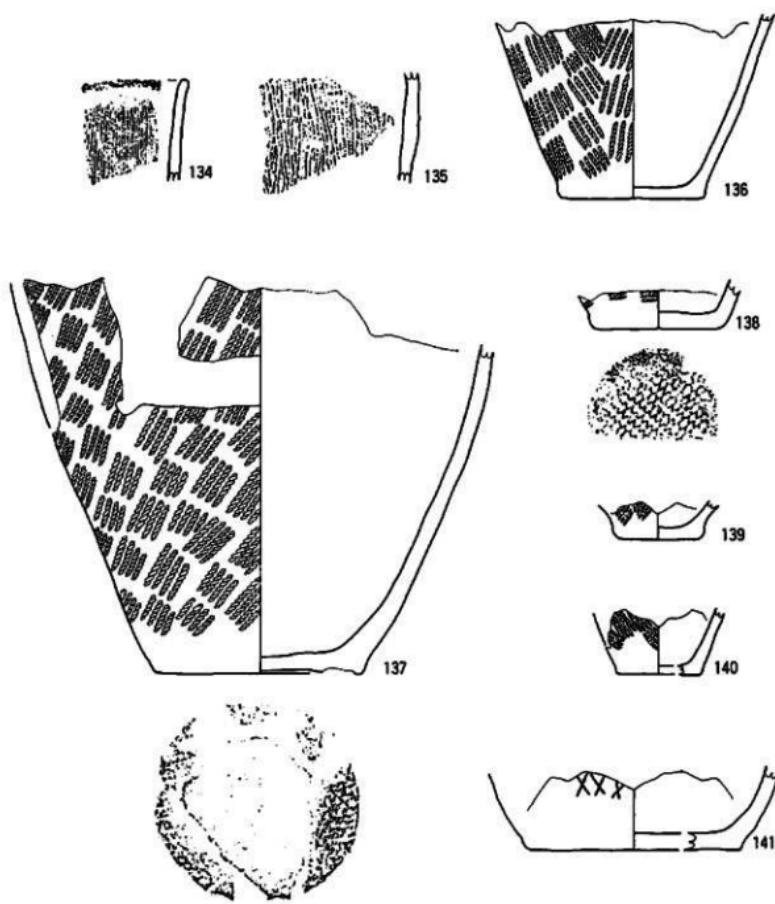
No.	遺構名	グリッド	部位	器種	大きさ(cm)			材質	鉄造年代	備考
					長さ	幅(厚さ)	厚さ			
105	3号墓坑	底面	管	74	16	1	9.09	銅	17世紀後半	應者 欠損した部分が残存 古泉賀年目類
106	3号墓坑	底面	管	73	12	1	4.81	銅	17世紀後半～18世紀前半	吸口 欠損した部分が残存 古泉賀年目～前類
107	4号墓坑	底面	管	-	17	1	1.53	銅	17世紀後半	火皿 欠損
108	4号墓坑	底面	管	51	10	1	2.96	銅	17世紀後半	首部 欠損した部分が残存 古泉賀年目類
109	4号墓坑	底面	管	50	10	1	2.27	銅	17世紀後半～18世紀前半	吸口 欠損した部分が残存 古泉賀年目～前類
110	4号墓坑	埋土	高輪通寶(新古)	24.5	8	1	2.03	銅	初唐年1054年	北宋
111	4号墓坑	底面	高輪通寶(新古)	24	6.5	1.5	1.96	銅	初唐年960年	南唐
112	4号墓坑	底面	寛永通寶(古背水)	2	3.56	1.5	2.42	銅	1636～1659年	
113	4号墓坑	底面	寛永通寶(古背水)	25	6	1	3.02	銅	1636～1659年	
114	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	23	6	1	1.26	銅	1716～1735年	享保京都七條所
115	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	24	6	1	2.55	銅	1736～1740年	元文相模藤澤・吉田島所
116	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	23	6	1.5	1.75	銅	1736～1740年	元文相模藤澤・吉田島所
117	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	24.5	6	1	2.68	銅	1697～1747年	葬地不明
118	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	23.5	6	1	2.67	銅	1736～1740年	元文紀伊中之島所
119	4号墓坑	底面	寛永通寶(新背水)	25	6	1.5	3.26	銅	1716～1735年	享保鎌夷仙台所
168	表塚	-	1層	鉢	61	30	2	15.0	銅	-
169	I F1 E	里塚上	寛永通寶(古背水)	25	5.5	1.5	3.04	銅	1636～1659年	
170	表塚	-	1層	寛永通寶(四文銘)	26	6.5	1.5	4.71	銅	1818～1829年
										文政江戸十萬坪所

第5表 遺物観察表(石器)

No.	遺構名	グリッド	層位	器種	大きさ(=)			重積(g)	石材	產地	特徴・備考
					長さ	幅	厚さ				
50	I号住居跡	I E 3 g	床面	石盤	24	13	5	0.99	珪質頁岩	奥羽山脈	
51	I号住居跡	I E 3 g	土	石路	37	48	14	18.63	珪質頁岩	奥羽山脈	
52	I号住居跡	I E 3 g	床面	石盤	22	20	7	2.30	頁岩	奥羽山脈	
53	I号住居跡	I E 3 g	土	スレーパー頭	30	32	9	6.57	頁岩	奥羽山脈	III-A類
54	I号住居跡	I E 3 g	土	スレーパー頭	31	32	7	5.00	珪質頁岩	奥羽山脈	B-A類
55	I号住居跡	I E 3 g	床面	スレーパー頭	36	47	13	13.59	頁岩	奥羽山脈	B-A類
56	I号住居跡	I E 3 g	床面	スレーパー頭	51	25	11	11.03	珪質頁岩	奥羽山脈	III-A類
57	I号住居跡	I E 3 g	床面	スレーパー頭	72	37	14	28.62	頁岩	奥羽山脈	I-A類
58	I号住居跡	I E 3 g	1階	リタチド・フレイク	16	16	10	2.72	珪質頁岩	奥羽山脈	
59	I号住居跡	I E 3 g	2階	石皿	196	86	38	1024.83	砂岩	北上山地	
60	I号住居跡	I E 3 g	土	磨石	116	79	61	760.60	安山岩	奥羽山脈	
61	I号住居跡	I E 3 g	床面	磨石	109	55	27	287.61	ひん岩	北上山地	III-A類
62	I号住居跡	I E 3 g	床面	原石	61	60	25	134.30	チャート	北上山地	
63	I号住居跡	I E 3 g	床面	扁平錐	194	65	20	251.66	カルンフェルス	北上山地	朱村岩
64	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	60	24	11	11.92	頁岩	奥羽山脈	
65	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	20	40	9	6.49	チャート	北上山地	
66	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	27	13	9	2.94	珪質頁岩	奥羽山脈	
67	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	15	8	4	0.99	チャート	北上山地	
68	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	36	34	10	11.15	チャート	北上山地	
69	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	24	25	9	4.64	チャート	北上山地	
70	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	26	25	9	5.92	頁岩	奥羽山脈	
71	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	25	13	4	3.32	頁岩	奥羽山脈	
72	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	47	31	10	13.35	チャート	北上山地	
73	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	20	10	4	0.84	チャート	北上山地	
74	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	30	30	5	3.96	頁岩	奥羽山脈	
75	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	14	17	7	1.11	チャート	北上山地	
76	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	22	11	3	0.75	頁岩	奥羽山脈	
77	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	27	29	6	4.87	チャート	北上山地	
78	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	29	21	10	5.29	頁岩	奥羽山脈	
79	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	24	43	7	9.37	頁岩	奥羽山脈	
80	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	19	18	2	0.69	頁岩	奥羽山脈	
81	I号住居跡	I E 3 g	土	劍片	42	38	8	12.01	チャート	北上山地	
82	I号住居跡	I E 3 g	床面	劍片	76	35	15	47.17	珪質頁岩	奥羽山脈	
98	5号土坑	I E 3 f	土	劍片	34	45	12	12.29	頁岩	奥羽山脈	
151	I E 3 g	1階	石盤		27	16	8	2.64	珪質頁岩	奥羽山脈	
152	I E 4 j	1階	石路		71	31	8	16.04	頁岩	奥羽山脈	
153	I E 2 d	1階	スクリーパー頭		39	15	4	2.30	頁岩	奥羽山脈	II-A類
154	I E 2 d	1階	スクリーパー頭		31	18	8	3.92	頁岩	奥羽山脈	I-A類
155	I E 2 f	1階	スクリーパー頭		39	24	9	7.53	頁岩	奥羽山脈	I-A類
156	I E 2 f	1階	スクリーパー頭		44	26	7	10.18	頁岩	奥羽山脈	II-A類
157	I F 7 c	表土	打製石斧		135	61	34	276.48	カルンフェルス	北上山地	
158	I E 2 f	1階	石盤		257	157	59	3181.33	安山岩	奥羽山脈	
159	I F 9 b	1階	扁平錐		245	171	55	2389.87	安山岩	奥羽山脈	
160	I E 1 j	1階	門内石		93	74	63	565.12	安山岩	奥羽山脈	I-B類
161	I F 7 e	1階	門石		128	98	55	945.61	砂岩	北上山地	I-A類
162	I F 7 e	1階	門石		98	99	56	540.10	安山岩	奥羽山脈	I-A類
163	I F 7 e	1階	門石		77	77	24	183.84	頁岩	北上山地	I-A類
164	I F 9 h	1階	凹凸石		90	81	56	529.11	安山岩	奥羽山脈	I-B類
165	I F 9 c	1階	敲打石		98	80	52	591.98	安山岩	奥羽山脈	III-C類
166	I F 10 d	1階	敲打石		140	40	54	394.59	安山岩	奥羽山脈	III-C類
167	I E 1 e	1階	砾石		104	53	38	177.99	砾状岩	奥羽山脈	

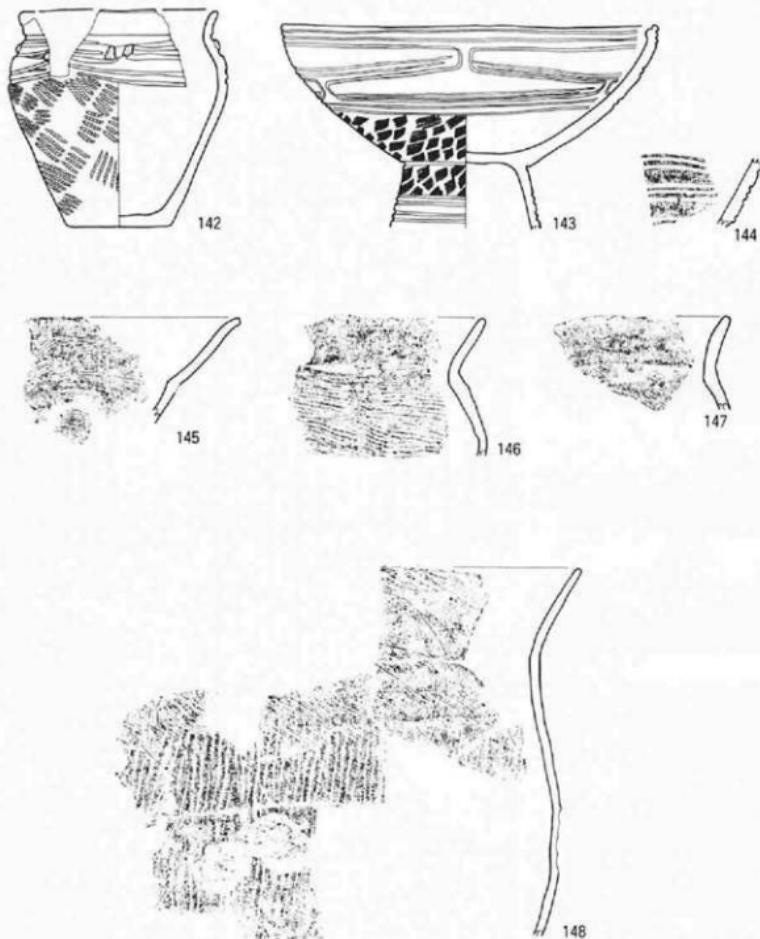


第19図 遺構外出土遺物（土器 1）

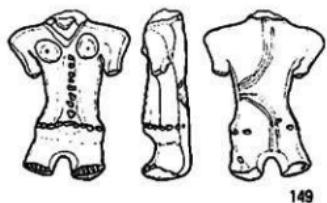


0 1:3 10cm

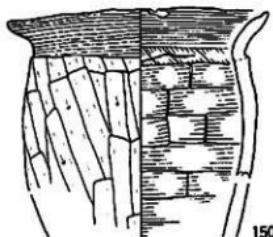
第20圖 造構外出土遺物（土器 2）



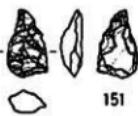
第21図 遺構外出土遺物（土器 3）



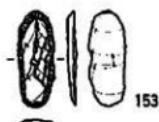
149



150



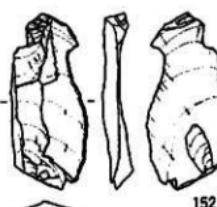
151



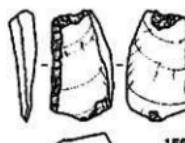
153



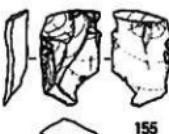
154



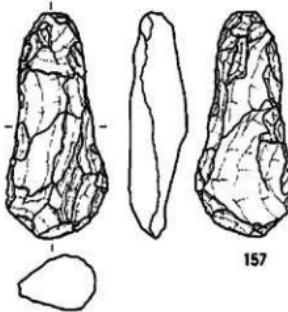
152



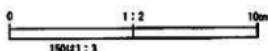
156



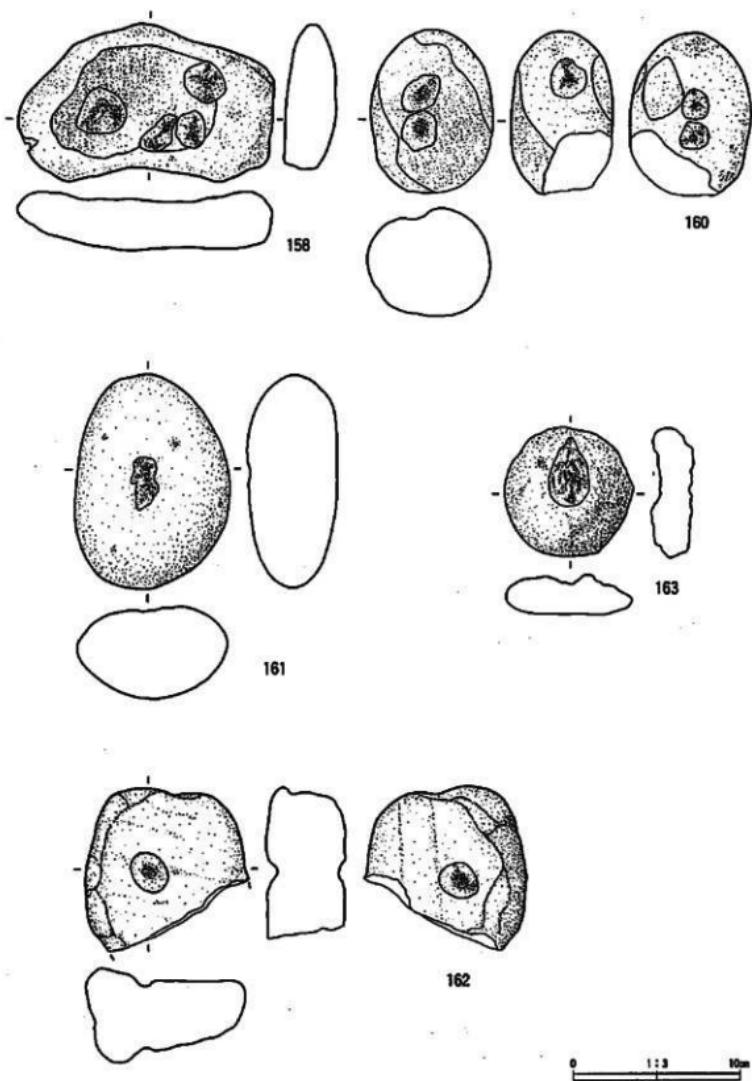
155



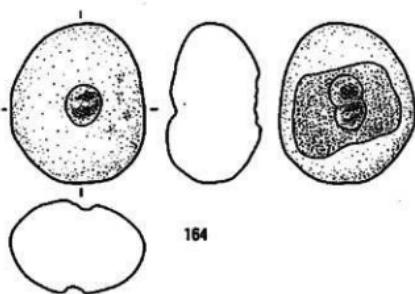
157



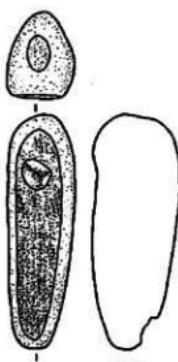
第22図 遺構外出土遺物（土製品・土師器・石器1）



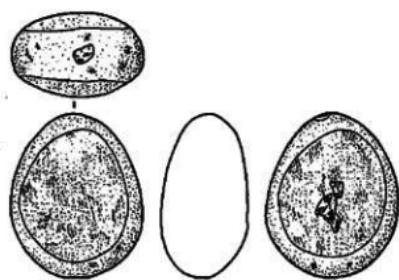
第23圖 遺構外出土遺物（石器 2）



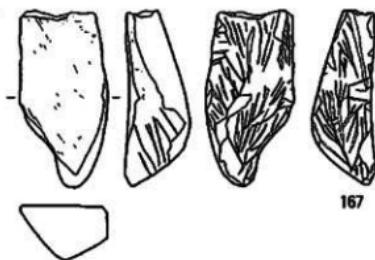
164



166



165



167

0 1:3 10cm

第24図 遺構外出土遺物（石器3）

ま と め

本稿では、仁昌寺遺跡の遺構・遺物の特徴を箇条書きに列記してまとめたい。

遺構

- 1 仁昌寺遺跡は縄文時代後期中葉に営まれた集落跡、近世以降の墓域からなる複合遺跡である。
- 2 遺跡は平敷川左岸にあたる東向きの丘陵緩斜面に立地する。
- 3 現況は畠地および宅地で、南東側は人工的な土地改変が行われ遺構が残存しない。
- 4 遺構は南側で密である。分布は更に南東側に広がりを持つと推測される。
- 5 検出した遺構は堅穴住居跡1棟（縄文時代後期中葉）、堅穴状遺構1棟、丸窓1基、土坑11基、埋設土器2基（以上縄文時代）、獸骨埋納ビット1基、墓坑4基、道路3条（以上近世～）である。
- 6 縄文時代後期中葉の堅穴住居跡からは良好な床面一括出土遺物が出土している。
- 7 墓坑からは寛永通宝、キセル等が出土しており、時期は出土した副葬品から近世に位置付けられるものと考えられる。
- 8 調査区西側～中央部にかけて浅い溝状の痕跡が検出された。検出層位、形状などから近世～近代以降に形成された踏分け道のようなものであると考えられる。
- 9 遺構外の出土遺物は調査区北側の斜面下位からまとめて出土した。この部分は黒色土が厚く堆積しており、十和田a降下火山灰、十和田中嶽火山灰の水成堆積層が認められる。このことから当時は沼状の地形を呈し、たびたび冠水する環境にあったことが判明した。

遺物

- 1 本遺跡では人コンテナ9箱分の遺物が出土した。内訳は上器（縄文時代：前・中・後・晚期、弥生時代：前・中期）、土師器、石器、土製品、古銭、金銅製品である。
- 2 本遺跡の出土土器は前期から晚期まで及ぶが、主体をなすのは十腰内田式を中心とする後期初頭～中葉の土器群である。
- 3 出土した石器は総数で140点にのぼる。種類の内訳は石礫、石匙、石錐、スクレイバー類、リタッヂフレイク、打製石斧である。
- 4 金属器は18点が出土した。種類の内訳はキセル、錢貨、鉄札である。ほとんどは墓坑からの出土遺物で占められる。特筆されるのは遺構外から出土した鉄札である。隣接する仁昌寺II遺跡からは11世紀末～12世紀の特徴を持つ鉄札が多数出土しており、これとの関連性が想定される。

写 真 図 版



調査区全景



調査前風景



作業風景



メインベルト土層断面 (S→)



(S E→)

写真図版1 空中写真・土層断面



1号居住跡全景



1号居住跡断面



1号居住跡炉断面

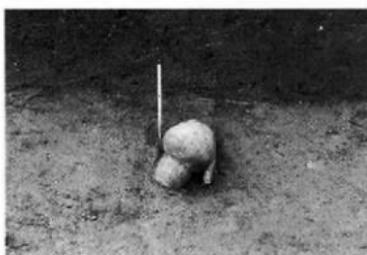


1号居住跡遺物出土状況①

写真図版 2 1号居住跡



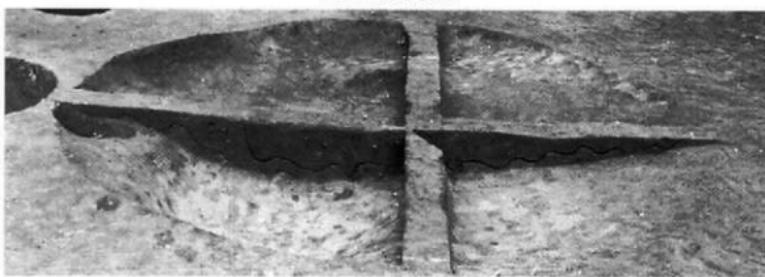
1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡遺物出土状況



1号住居状遺構全景

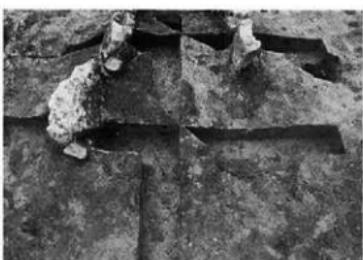


1号住居状遺構断面

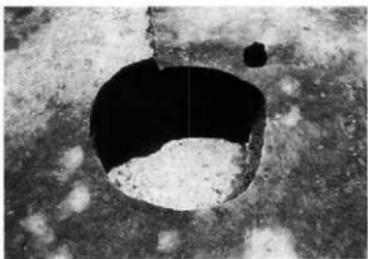
写真図版3 1号住居状遺構



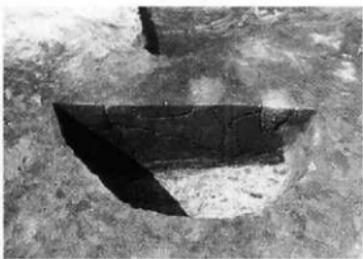
1号炉跡全景



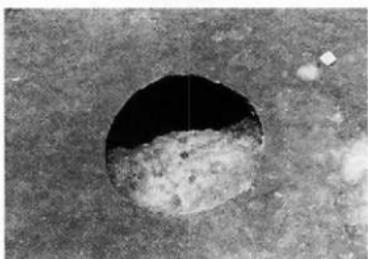
1号炉跡断面



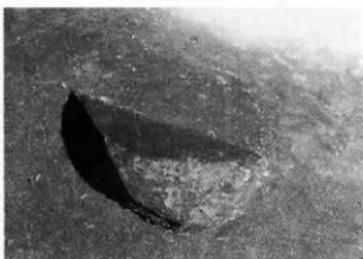
1号土坑全景



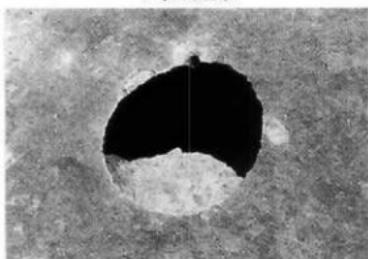
1号土坑断面



2号土坑全景



2号土坑断面



3号土坑全景



3号土坑断面

写真図版4 1号炉跡、1～3号土坑



4号土坑全景



4号土坑断面



5号土坑全景



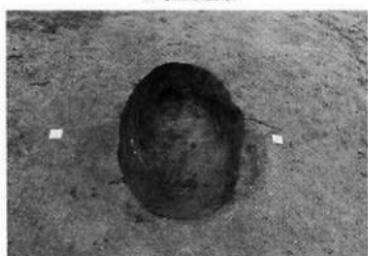
5号土坑断面



6号土坑全景



6号土坑断面



7号土坑全景



7号土坑断面

写真図版 5 4～7号土坑



9号土坑全景



9号土坑断面



10号土坑全景



10号土坑断面



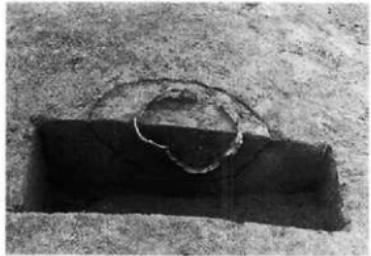
1号埋設土器検出



1号埋設土器断面



2号埋設土器検出状況

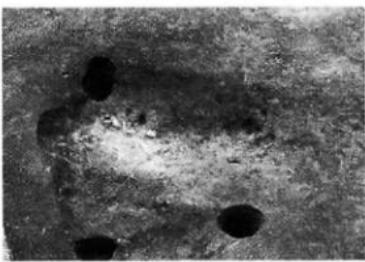


2号埋設土器断面

写真図版 6 9・10号土坑・1・2号埋設土器



獸骨出土ピット 獣骨検出状況



獸骨出土ピット 全景



1号墓坑全景



2号墓坑全景



3号墓坑全景



4号墓坑全景



作業風景



作業風景

写真図版7 獣骨ピット・1~4号墓坑



1号溝跡全景



2号溝跡全景



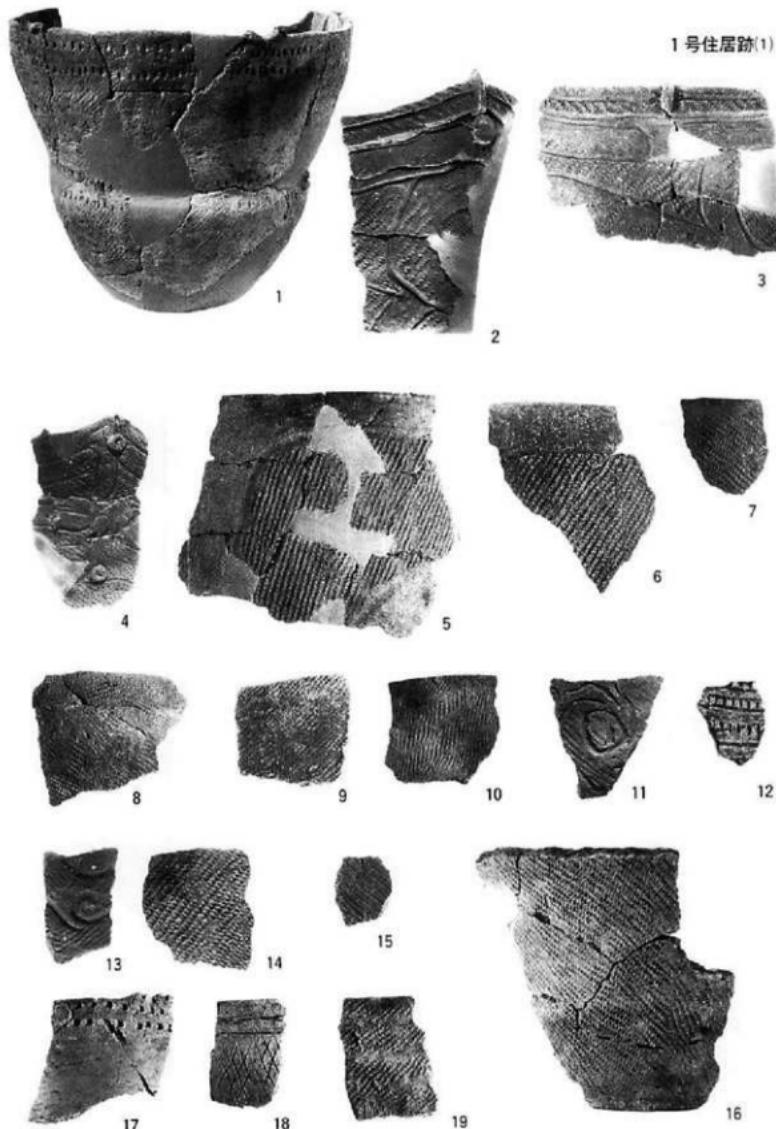
1号溝跡断面



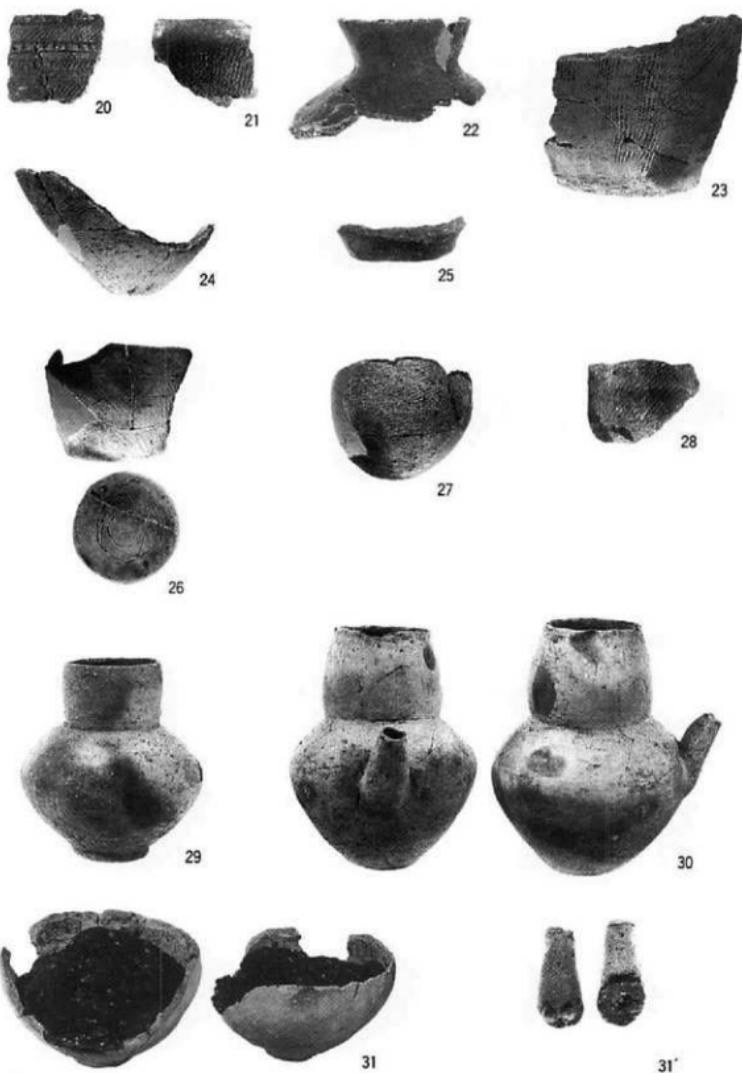
2号溝跡断面

写真図版 8 1・2号溝跡

1号住居跡(1)

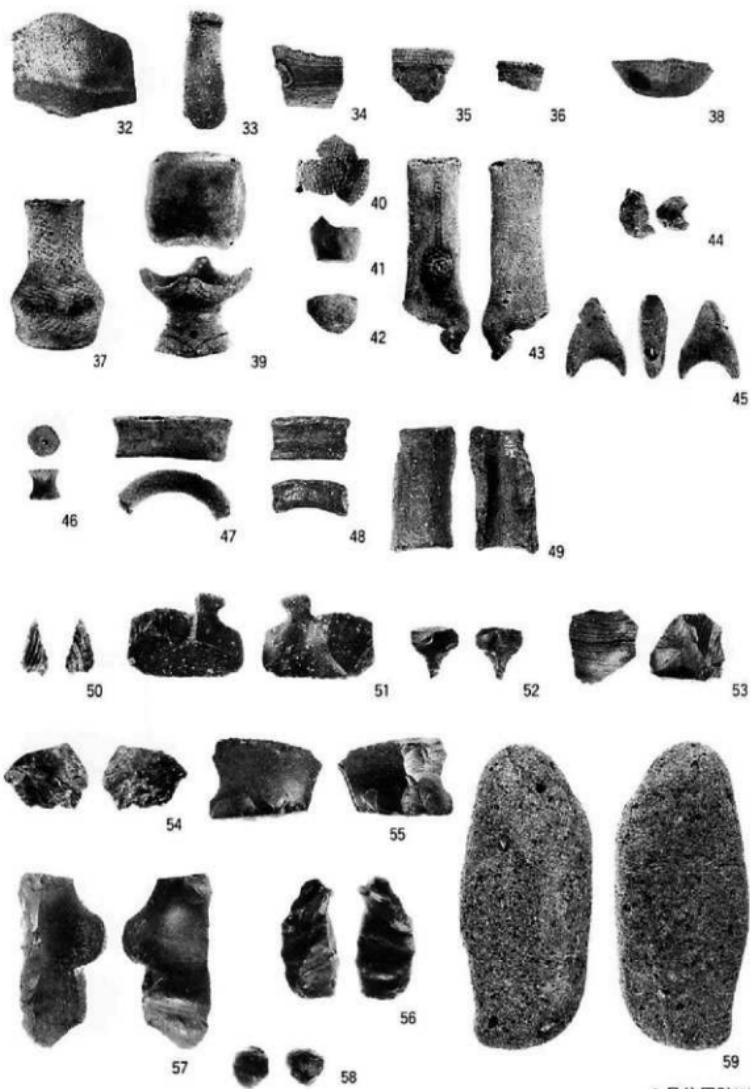


写真図版 9 1号住居跡出土遺物(1)



1号住居跡(2)

写真図版10 1号住居跡出土遺物(2)



1号住居跡(3)

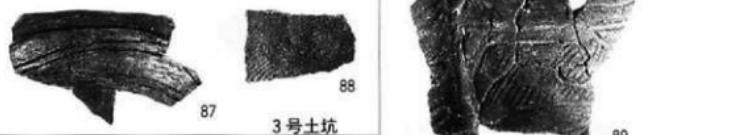
写真図版11 1号住居跡出土遺物(3)



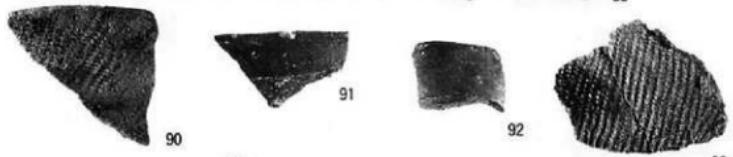
1号住居跡(4)



1号炉跡



3号土坑



4号土坑



95



5号土坑

写真図版12 1号住居跡(4)・炉跡・土坑出土遺物



101



102

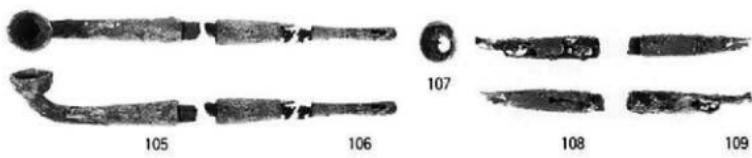


103

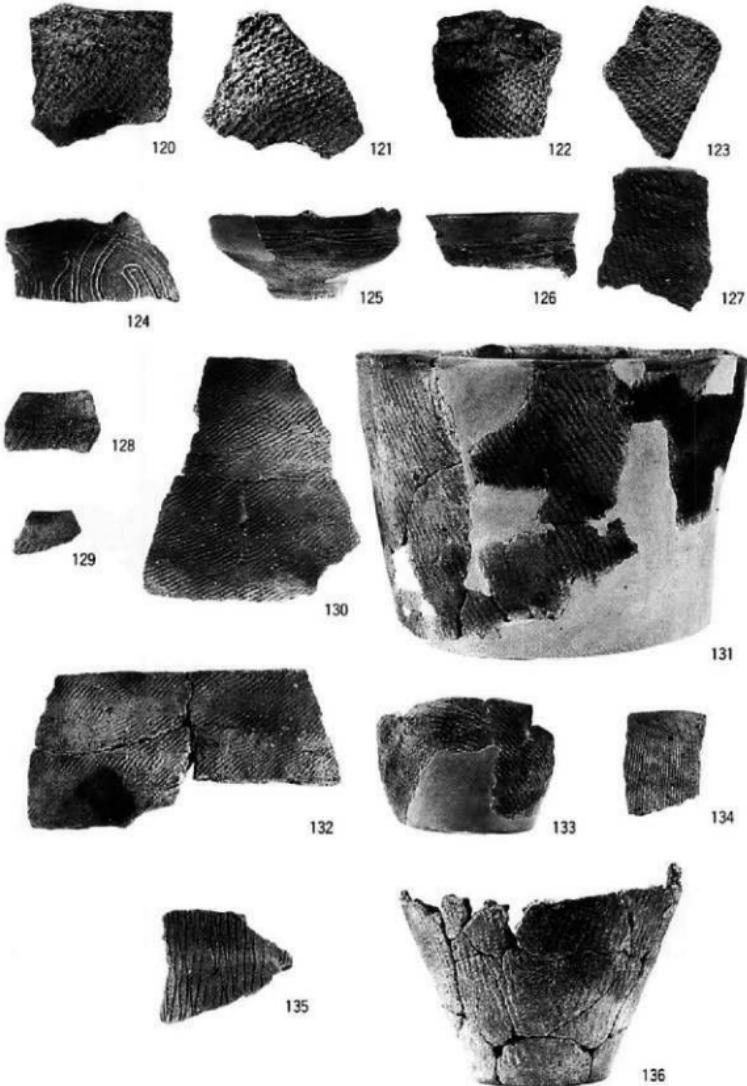


104

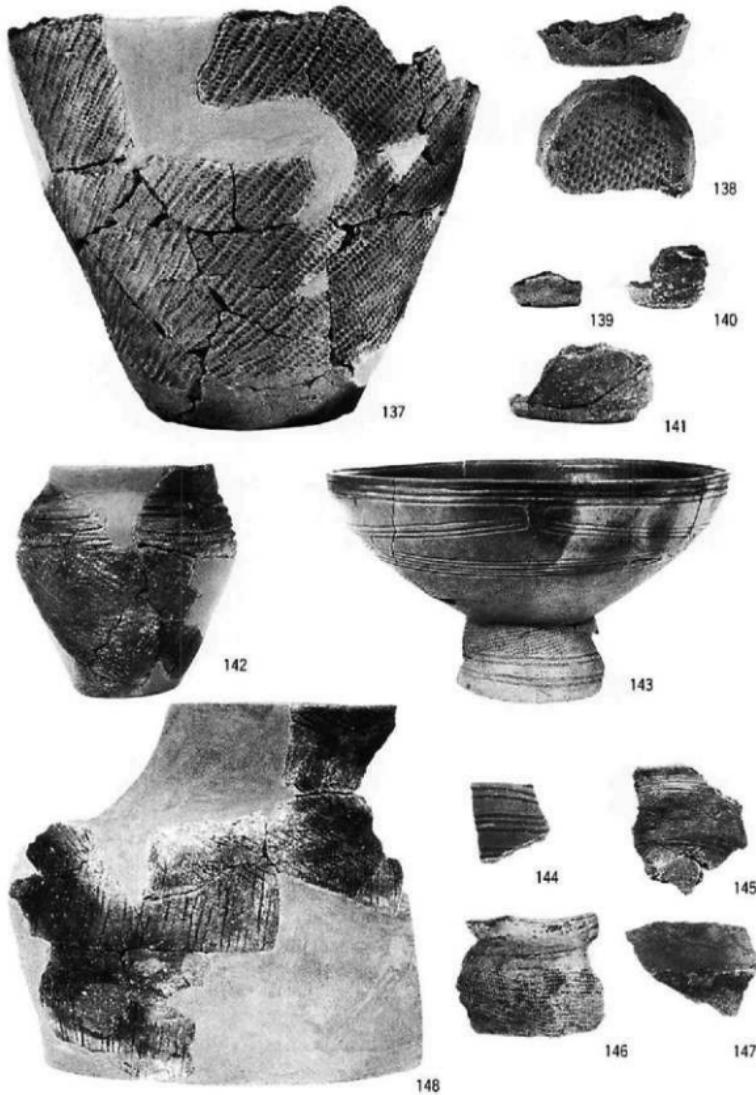
写真図版13 土坑・埋設土器出土遺物



写真図版14 墓坑内出土遺物



写真図版15 遺構外出土遺物(1)



写真図版16 遺構外出土遺物(2)



149



150



151



153



155



152



154



156



157



158



159



160



161

写真図版17 遺構外出土遺物(3)



162



163



164



165



166



167



168



169



170

写真図版18 遺構外出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	にしようじいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	仁昌寺遺跡発掘調査報告書						
副書名	国道4号小鳥谷バイパス建設地帯遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第400集						
編著者名	中村直美、北田熱						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 Tel 019-638-9001						
発行年月日	西暦2002年11月29日						

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仁昌寺遺跡	岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字仁昌寺33-2ほか	03524	JF30-2094	40度9分39秒	141度18分34秒	2000.04.17 ~2000.07.05	4,961m ²	国道4号小鳥谷バイパス建設による緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仁昌寺遺跡	集落	绳文時代 (後期中葉)	堅穴住居跡 (绳文時代1棟) 住居状遺構 1棟 炉跡 1基 土坑 11基 埋設土器 2基 歐骨埋納ピット 1基 墓坑 4基	绳文土器 (前期、中期、後期、晚期) 弥生土器 (前期、中期) 土師器 鐵製品(札) 古錢	

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 木村昇

[管理課]

課長補佐	高澤	吉光	美一
課長補佐	山岸	善直	佐佐
主査	鶴	賢	佐佐

副所長 高橋正儀

嘱託	照美	雄子
嘱託	湯邦	代子
嘱託	伊滋	滋子

[調査第一課]

課長	佐々木	勝文介	透光郎	一淳	也進	盛彦	明則人	晃登	史紀	由一	卓	かり	輔	晋彦	教志
課長補佐	佐々木	清義	佐佐	也透	彦明	則人	晃史	登史	紀由一	弘	弘	ひ	大	一	公
文化財専門員	高橋	大信	内田	吉	吉	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐	忠	忠	一	重	重	直
文化財調査員	小山	則	田	龟	龟	佐早	佐早	佐早	佐早	勝	勝	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
	内田	幸	田	佐早	佐早	小金	小金	小金	小金	昭	昭	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		昭	田	本坂	本坂	野	金	金	金	太	太	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		太	田	松	松	中子	阿	阿	阿	代	代	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		代	田	野	野	部	羽	羽	羽	藤	藤	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		藤	部	木	木	木	高	高	高	川	川	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	長	長	長	山	山	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	星	星	星	澤	澤	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	杉	杉	杉	木	木	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	本	本	本	鳥	鳥	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	青	青	青	村	村	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	西	西	西	本	本	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	福	福	福	北	北	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	北	北	北	八	八	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	九	九	九	木	木	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	島	島	島	九	九	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	坂	坂	坂	坂	坂	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
		木	木	木	木	木	義	義	義	義	義	佐佐	佐佐	佐佐	佐佐
期限付調査員															

期限付調査員	健	真由	卓	かり	輔	晋彦	教志
	弘	弘	弘	弘	弘	弘	弘
	一	一	一	一	一	一	一
	公	公	公	公	公	公	公
	立	立	立	立	立	立	立
	江	江	江	江	江	江	江
	太	太	太	太	太	太	太
	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤
	川	川	川	川	川	川	川
	山	山	山	山	山	山	山
	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤
	田	田	田	田	田	田	田
	池	池	池	池	池	池	池
	花	花	花	花	花	花	花
	野	野	野	野	野	野	野
	崎	崎	崎	崎	崎	崎	崎

[調査第二課]

課長	佐佐														
課長補佐	川子														
文化財専門員	高橋														
文化財調査員	川子														
	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高
	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿	阿
	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯
	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴
	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久	久
	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演	演
	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安
	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星
	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐
	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半
	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆	皆
	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬	瀬
	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋	齋
	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉
	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊
	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立
	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒	駒
	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原
	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第400集

仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書

印 刷 平成14年11月20日

発 行 平成14年11月29日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下巣岡11地割185番地

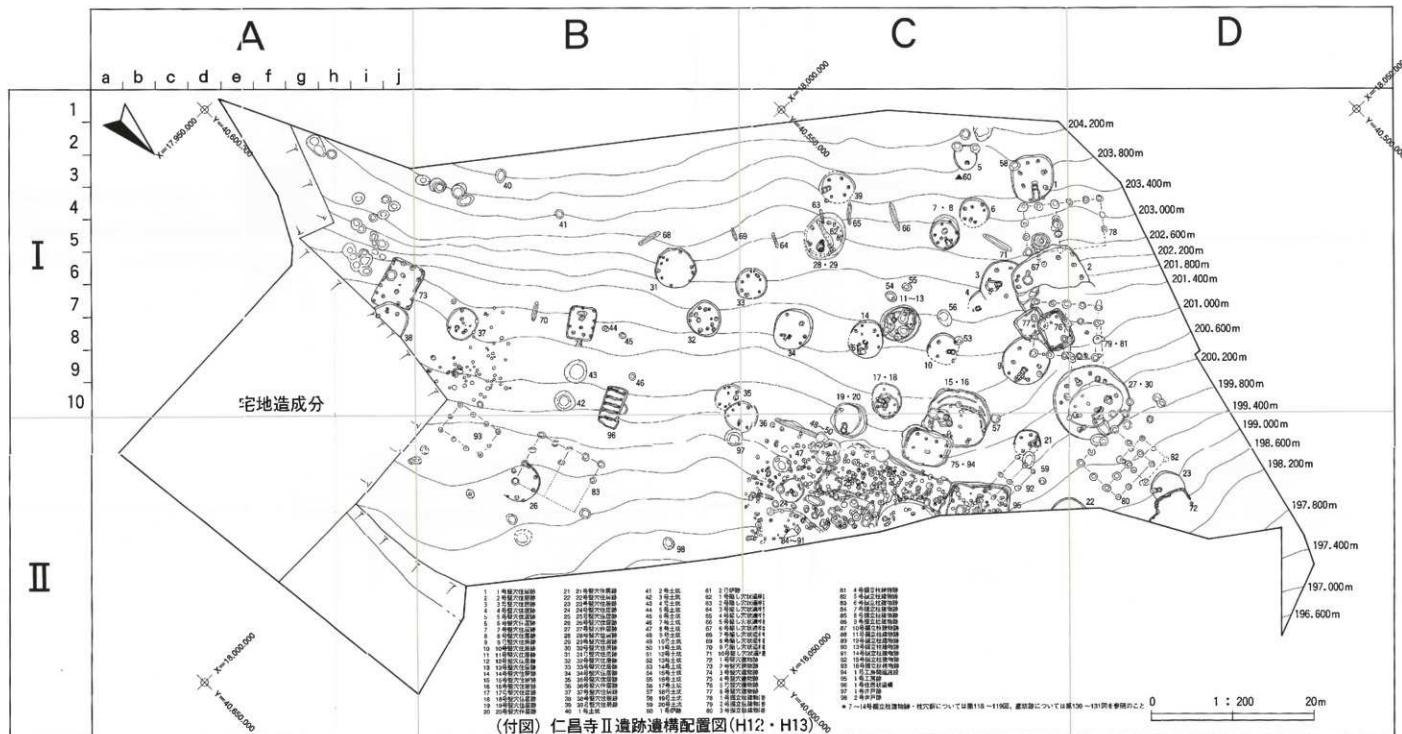
電話 (019)638-9001・9002

FAX (019)638-8563

印 刷 株式会社 富士屋印刷所

〒020-0841 盛岡市羽場13-30-10

電話 (019)637-6391



(付図) 仁昌寺Ⅱ遺跡遺構配置図(H12・H13)

